



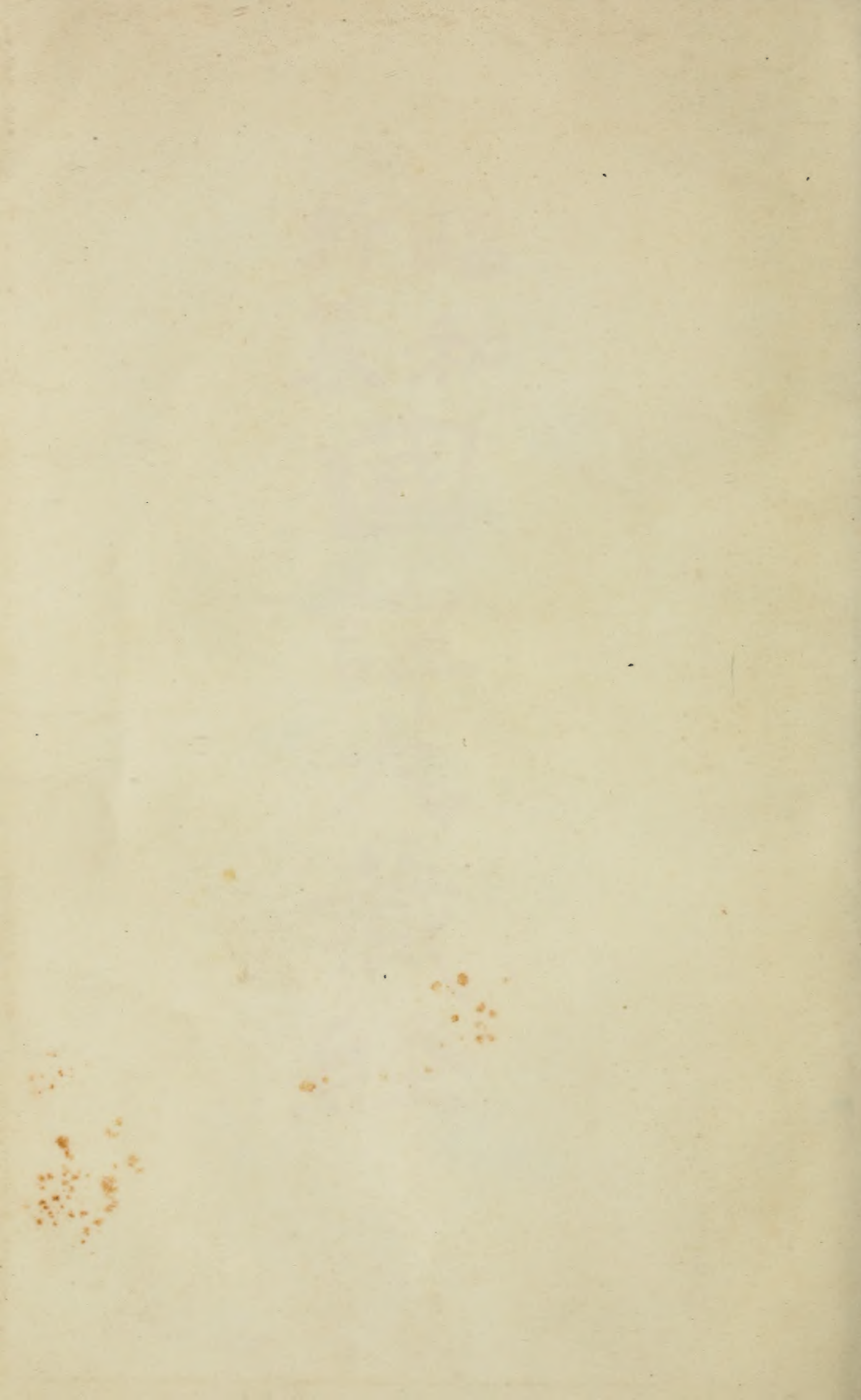
宗 卷 一
第 一 册

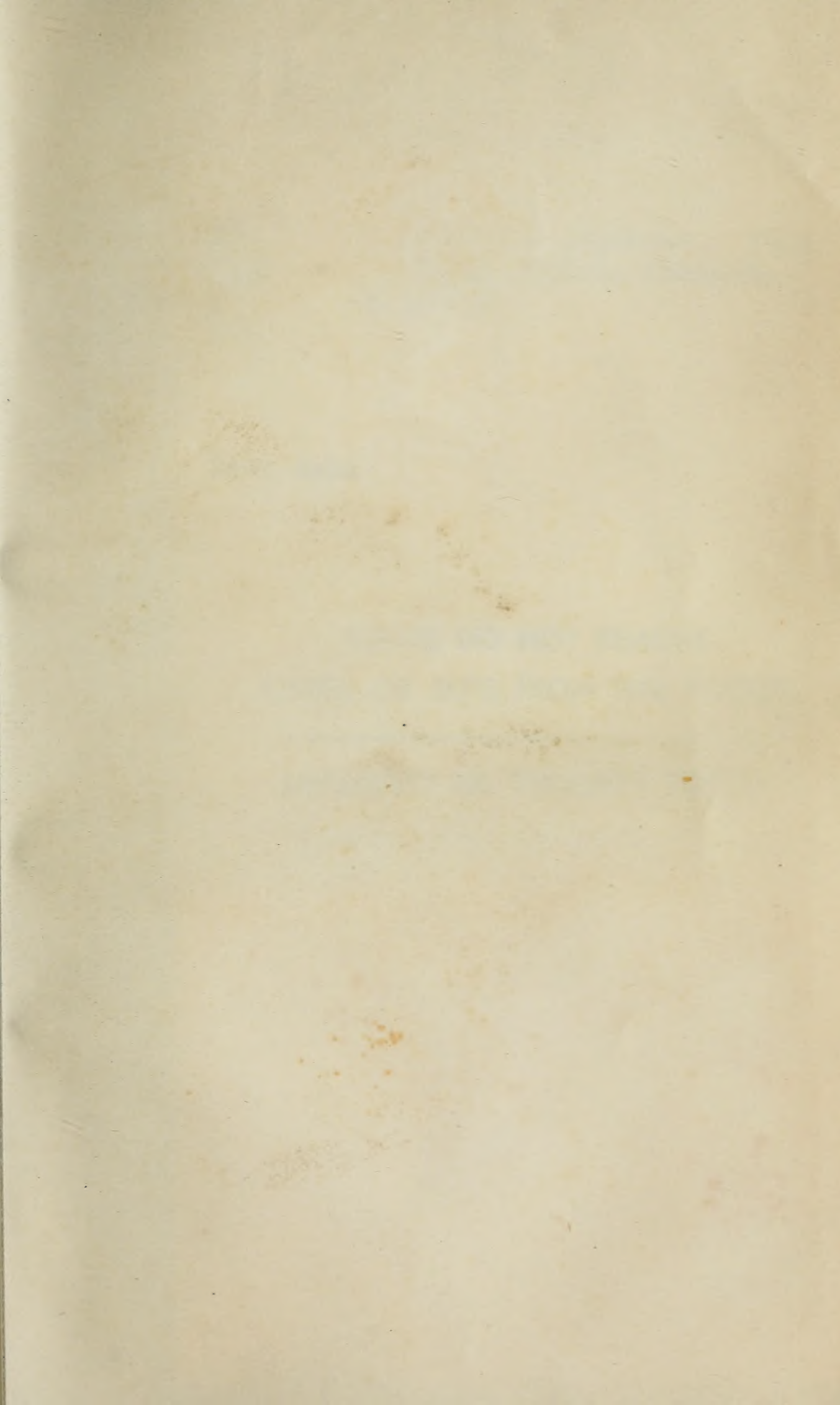
BL Tripitaka. Japanese. 1929
1411 Showa shinshu kokuyaku
T8J3 Daizokyo
1929
v.32

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

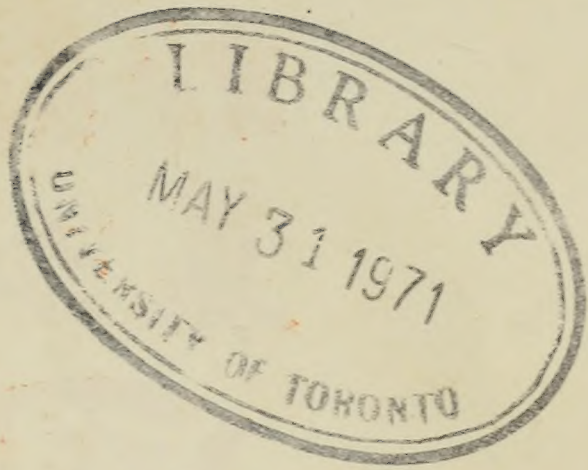
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY





新昭
纂和

國
譯大
藏經



BL
1411
T8J3
1929
V. 32

昭和
新纂

國譯大藏經 宗典部 第八卷

華嚴宗、法相宗、律宗、
融通念佛宗、時宗 聖典 目次

華嚴宗

華嚴宗要義……………凝然大德撰……………一

法相宗

觀心覺夢鈔……………良遍上人撰……………元

律宗

律宗綱要……………凝然大德撰……………二三

融通念佛宗

融通圓門章……………融觀上人撰……………一八一

融通念佛信解章……………融觀上人撰……………二〇三

時宗

一遍上人語錄……………二四一

別願和讚……………二四一

百利口語……………二四三

誓願偈文……………二四九

時衆制誠……………二五〇

道具祕釋……………二五二

消息法語……………二五四

偈頌和歌……………二六〇

門人傳說……………二七〇

附錄……………二九六

他阿上人法語……………二九七

道場制文……………二九七

同行用心大綱……………二九九

往生淨土和讚……………二九九

消息法語……………三〇三

華嚴宗、法相宗、律宗、
融通念佛宗、時宗

聖典

宗典部
第八卷

華嚴宗聖典

華嚴宗要義 一卷

東大寺沙門凝然述

當書一卷凝然の撰なり。佛一代の教を、五教十宗に分ちて華嚴經を最も勝れたるものとす。相圓融の教義を以て、法界緣起、事無礙の宇宙論を立て、吾人の一善一行は、其儘萬善萬行にして、一切證なりと論ず。

【華嚴法界】大乘の理を、華嚴經にては法界と名く。中に四法界有り、事法界、理法界、理事無礙法界、事無礙法界。

【相即】波即ち水

水即ち波と云ふ如く、彼此互に己を廢して、他に同ずるを云ふ。

【相入】彼此の事物、互に融入して乖隔せざるを云ふ

【體用】諸法の體

華嚴宗要義

(一) 夫れ華嚴法界は、難議難思、微塵に十方を攝し、刹那に劫海を含ぬ。帝網珠内に重重の影を現じ、鏡光鏡中に隱隱の像を示す。相即、相入、體用の美を攝し、同體、異體、鎔融の致を窮む。覺意の至道に遊んで初後圓通し、普眼の玄門に入つて始終周滿す。覺城の東にしては、初心に正覺を成じ、妙峯の南にしては、住位に行徳を圓にす。一生に曠劫の因を備へ、一念に究竟の果に昇る、一乗の法義融遍是の如し。今普法一乗の教宗を明すに、略して十門を立て、其塵露を示す。一には、教宗の大意、二には、教宗の名義、三には、立教開宗、四には、一乘三乘、五には、所立の法義、六には本經の次第、七には修證の行相、八には諸雜の法門、九には章疏の分量、十には祖承の弘傳、此十門を以て粗宗旨を陳ぶ。法林の中僅に一枝を擧ぐるのみ。

(二) 第一に教宗の大意とは、問ふ、「何の義を以ての故に華嚴宗と名くるや。」答ふ、「華嚴經」を以て所依の教と爲して義理を建立し、旨歸を顯示す。此事に由るが故に華嚴宗と名く。大小の諸宗多くは所依の教に由つて曲に名を立つ。俱舍論宗の如き、俱舍を門と爲して廣く有宗諸部の論藏を學す。謂く、「發智論」「六足論」「法勝毘曇」「雜心毘曇」「順正理論」「顯

性と作用なり。【普眼の玄門】。普眼三昧門のこと。大日如來の普門示現の大衆を一心に觀ずること。

【二】。教宗の大意を明す。

【俱舍】。阿毘達磨俱舍論のこと。

【有宗諸部】。說一切有部のこと。

【有爲】。因縁によりて生じたる諸現象を云ふ。

【無爲】。本來常住にして、何物にも造作せらるること無き法を云ふ。

【三性三無性】。唯識宗にて、萬法を三種に分つ。遍計所執性、依他起性、圓成實性。三無性とは三性に對して法の無自性なる邊より三種の無性を立つ。相無性、生無性、勝義無性。

【二】。人空、法空を指す。

【第三時の教】。法相宗にて、佛一代

宗論等此典を學するなり。舊には毘曇宗と名く。『八辯度論』『舊婆沙論』『舊俱舍』等此等の諸論を習學す。其總名は是れ薩婆多宗なり。此には說一切有と云ふ。『成實論』を以て所依の教と爲せば成實宗と名く。『四分律』等を所依の教と爲すが故に律宗と名く。『中論』『百論』『十二門論』の三部を以て所依と爲すが故に三論宗と名く。眞言教を以て所依と爲すが故に眞言宗と名く。有爲、無爲の諸法の性相を陳說定判すれば法相宗と名く。此は所立所說に就きて名と爲す。或は唯識宗と名く、所立の義に約するが故に。若し能詮の教は唯識藏なるが故に、『唯識論』を初學の門と爲すと雖も、『瑜伽大論』十支の諸論皆咸く習學し、義理を窮むるが故に、或は應理圓實宗と名く。所說の法、義理と相應す、世俗勝義、四種の道理、三性三無性、乃至二空所顯の眞理、冥會契合す。是の如き等の理、圓滿眞實なれば應理圓實宗と名く。或は普爲乘教と名く。第三時の教、普く一切乘に發趣する者の爲に此教を説く。故に一切乘とは即ち是れ所被の三乘五乘種種の機なるが故に。若し根本所依の論教に依らば瑜伽宗と名く。『解深密經』『瑜伽大論』是れ本所依なり。此を以て門と爲して十支の諸論、及び其釋論大乘の法相、皆所學と爲す。所住の處に就けば天台宗と名く。若し所依に依るをば法華宗と名く。義眞和尚の弘仁年中に詔を奉じて章を製し、天台法華宗と名く。義眞是の如きの宗名多くは所學に依れり。或は餘門に據つて各名字を立つ。此『華嚴經』は如來成道の最初に、法界圓融、十無盡、主伴具足、相即相入、無礙の法門を演説して諸教の源と爲し、諸乘の本と爲したまふ。問ふ、『何が故に如來、初に此教

の所説を三時に割し、初時(有教)、二時(空教)、三時(中道教)となすを云ふ。

【三乘】 菩薩乘、聲聞乘、緣覺乘。

【五乘】 佛乘、菩薩乘、聲聞乘、緣覺乘、小乘(人天乘)。

【三】 正しく華嚴經の説時、因縁及び大意を述ぶ。

【主伴具足】 萬有の互に主となり、伴となりて、重重に相即相入すること。

【理智冥一】 眞理と是を證する智慧との全く一致すること。

【性起】 あらゆる差別の萬法を其まま本體中に具有せる事。緣起の對、華嚴宗にて云ふ。

【一乘】 一佛乘のこと。

を説きたまふや。』答ふ、『如來覺を成じ朗かに萬法を照し、一切智、一切種智、無障礙智を以て、現に眞理を證したまふに事法の妙境、理智冥一にして究竟圓滿せり。自所證を以て物の爲に此を示す。是故に自内證の處を起たす、全く自證の如く其法體を説く、是故に即ち成正覺の處、菩提樹下に於て最初に此自證法界を説く。若し餘處にして説かば自證に非ざるべきが故に。故に三乘教は處を移して之を説く。如來の自所證に非ざることを表するが故に、是故に諸佛法爾に、最初に要す甚深廣大の法門を説きたまふ。賢首大師『探玄記』を作りて十意を建立し、教興の義を陳ぶ。清凉大師新經の疏を作りて、教因教縁に各十門を開く。元曉、惠苑、各教興を陳ぶ。本經に別に性起出現有り。性起は總相にして、専ら興意無量の因縁を明す。如來の出世、出現して本意一乘、圓融大華嚴を説んが爲の故なり。』問ふ、『何等の機の爲に大華嚴を説きたまふや。』答ふ、『此經は必ず一乘普機の爲に、一切の圓極普法を演説したまふ。譬へば日の出でて先づ高山を照すが如し。所説の法門を日光教と名け、所被の根縁を高山の機と名く。』問ふ、『若し爾らば此教唯圓機に被しめて、應に三乘小乘を攝引せざるべし。』答ふ、『圓機に非ざる者は此法を受くること能はず。如來の自證は法體究極し、圓通無礙、普徧圓滿す。此普法と相應する者、是の如きの最極圓法を受くることを得。一乘三乘は既に此器に非ず。是故に聲聞衆、第八會に在りと雖も聾の如く盲の如くにして懸に見聞を隔つ。三乘の菩薩、無量億那由他劫に六度を修習すと雖も、普機未熟の故に此法に入ること能はず。』問ふ、『此教既に三乘小乘等に被し

蜜のこと。

めずんは、法に萬機を攝せざるの過有らん。二乗等を攝すれば教深廣なりと爲す。今の教は唯一乗普機を攝して二乗を攝せず、豈普法と爲んや。答ふ、『法は是れ深奥なり。佛の所證なるが故に。二乗堪へざれば譬の如く、盲の如くにして如來の境界を見聞すること能はず。法の攝せざるに非ず、教の機を漏すに非ず、根未熟の故に頓入すること能はず。若し二乗三乗等をして此華嚴を聽かしめば、即ち華嚴に非ず、亦一乗にも非ざるべし。圓融の普法應に三乗小乗等の教に同ずべし。云何が此不可思議自在の法門をして小乗に同ぜしめんや。問ふ、『若し爾らば此教應に永く三乗等の類を棄捨すべし。若し小機を攝誘する門有りや。若し之を攝せば何の方便か有る。』答ふ、『普法圓教は是れ不共なるが故に、二乗小乗見聞すること能はず。直に聽かずと雖も聞性を捨てず。其聞性とは別教一乗の大方便門なり。二乗三乗此に由つて迂廻して圓教に入ることを得。此一乗別教の法に於て三乗小乗等の法を流出す。此方便に由つて漸漸に誘引し、練磨し、長養して人乗の法を説きて惡趣を離れしめ、天乗の法を説きて人乗を出でしめ、二乗の法を以て人天を離れしめ、愚法小乗を攝して大乘に入らしむ。大乘教の中に具に説く。愚法を引きて廻心せしむるを以ての故に、廻心教の中の聲聞の斷證、天に愚法に超ゆ。彼諸の聲聞漸く三乗、大乘、共教に入つて、方に信解大乘の菩薩と作る。是の如く陶練して心志融暢し、根機を長養して一乗に入るに堪へたり。是故に三乗の異門を開顯して一乘眞實大道に會歸す。三乗を開會して爲に一乗の門に入る。然る後別教一乘舍那の自體普賢法界に入ることを得。』

【四】華嚴の別教
一乘の意を明す。

【七處八會】六十
華嚴、三十四品に
依る華嚴經の所説
及び會座の數を云
ふ。寂滅成道會、
普光明殿會、初利
天會、夜摩天會、
兜率天會、他化天
會、普光明殿會、逝
多林會、これを八
會と稱し、普光明
殿會の二會を合し
て七處と稱す。
【捨捨教】天台宗
にて涅槃經の教説
を云ふ。即ち法華
經の説教にて、大
底化益されたる後
に、残れるものを

別教一乘とは是れ所入の法、三乘同會を能入の門と爲す。同會の位の一乘の所立、三乘に同ずること有れば同教一乘と名く。同教一乘所入の時の所立の法義、全く三乘に別なれば、別教一乘と名く。是故に如來出世の本意は衆生をして別教普法一乘圓融の大道に悟入せしめんが爲なり。問ふ、『別教に入る者幾許の類有りや。』答ふ、『二類の機有りて別教の法に入る。一には頓入一乘の機、成道の最初に『華嚴經』を説きたまふに、凡夫及び聖人の初心後心を簡ばず、普一乘の機皆悟解することを得。二には、漸入一乘の機、二乘三乘根緣堪へざれば頓に別教普法に入ること能はず。如來彼を愍んで一に於て三を分つて漸次に誘引す。別教に於て頓入と爲すとは、初に一乘を説くに七處八會、次第遊歴して横に十方に遍じ、堅に十世を該ぬ。一切の法門、第二七日に宣示顯説し、究竟窮盡しぬ。漸入と爲すとは、一乘の法より三乘を流出す。鹿苑已後、漸次の化機、此より生起して捨捨教に終る、此れ漸入の法なり。第二七日一念の中に顯現する所の法は、海印三昧の威神力なるが故に、所現遺すこと無く、皆悉く説き盡しぬ。此所現の別教の法の中より、機に隨ひ宜に任せて三乘を摘出し、漸次に誘攝し廻轉して本に入る。漸入の者は廻轉して一に入る、五の所爲の中には名けて轉爲と爲し、小を轉じて三に入れ、三を轉じて同に入れり。同より方に別教一乘に入る。是の如く展轉すれば名けて轉爲と曰ふ。漸入の者は是の如く展昇して、終に法界圓融の本處に入る。性機の大樹は二乘、闡提の二處には生ぜざれども、而も生芽の性を捨てず。聲聞乘の人、此普法に於て佛芽を生ずる者は、是の如く誘引し

拾ひて、教化する
教と云ふ意。

【海印三昧】華嚴
經を説き給ふに當
り、佛の入り給ひ
し禪定なり。

【闍提】梵音イツ
チユハーシテカ
(Icchantika) 斷善
根、信不足等と譯
す。本來解脱の因
を缺きて、到底成
佛する能はざる無
性有情のこと。

【權教】實大乘の
眞實教に入らしむ
る爲の方便の教。

て漸く佛芽を生じ、終に覺樹を成す。『玄記』の第一に轉爲を陳べて言はく、「謂く諸の二乗は鈍根なるを以ての故に、要す先づ共教大乘に廻入して、二乗の名を捨て菩薩の稱を得。然る後方に此普賢の法に入る」と至。是故に當に知るべし、一切の二乗は總じて普賢の法界に頓入すること無し。究竟の説に依らば、二乗として共教の菩薩に廻入せざることを有ること無く、彼菩薩として此普賢の法に入らざること無し。是故に展轉して皆是れ此法の器ならざること無し。上。已。

共教大乘と言ふは、正しく始教三乘大乘を指す。愚法の小乘轉じて始教に入りて即ち始教の菩薩の悟解を成じ、大志通泰して大乘の人と作る。惠苑法師小乘を陳べて云はく、「要す先づ權教大乘に廻入す、即ち此に同じく三乗に入るの後、必ず同教を経て方に別教に入る。同教を能入の門と爲して所入の別教に住するが故に」と。問ふ、「何が故に『華嚴』を名けて本教と爲すや。」答ふ「諸教の本なるが故に。萬法の本なるが故に。萬行の本なるが故に。諸乘の本なるが故に。所出の本なるが故に。所歸の本なるが故に。攝末の本なるが故に。此諸義の中肝要なるものに二有り。一には開漸の本、性起品に日照の譬を説くが故に。故に『法華』に云はく、「佛乘に於て分別して三と説く」と上。『法華經』の別教一乘に於て、開して三乘漸悟の門を分つが故に。二には攝末の本、二乘三乘の機根を長養して終に別教圓融の都に入るが故に。『法華經』の中に涌出の菩薩、四の唱導有りて如來に問訊す。「衆生度し易くして勞せざるや否や」等。如來答へて言はく、「此諸の衆生始めて我身を

【根本法輪】華嚴の法門を云ふ。佛成道後、最初の説法にして、菩薩の爲に直に究竟の因圓滿の果を説きたるもの。

【枝末法輪】華嚴の説法に於て、愚なる衆生は之を了解すること能はずりしが爲、佛は更に一佛乘を分別して、三乘各別の法を説き給へり。

【攝末歸本法輪】枝末を攝して根本に歸入せしむること。

【鹿野】鹿野苑のこと。釋尊が華嚴時の後、十二年の間鹿野苑に於て、小乗の人衆を大乗に誘ひ導かんが爲に説けるなり。

見、我所説を聞いて即ち皆信受して如來の慧に入る。先より修習して小乗を學する者を除く。是の如きの人、我今亦此經を聞いて佛慧に入ることを得しむ」上。『演義鈔』一の下に云はく、「華嚴に未だ曾て末の攝すべきもの有らず。法華は攝末歸本にして華嚴に歸するを以ての故に」と上。此は華嚴に攝末の本なることを明す。『演鈔』に亦云はく、「吉藏此を引きて三種の法輪を立つ。第一を根本法輪と名け、第二を枝末法輪と名け、第三を攝末歸本法輪と名く」と上。已。嘉祥、此涌出品の文に依つて、三轉法輪を立て、如來一代を收攝す。一類所見の化儀の根本法輪なり。『華嚴經』を見るに、鹿苑已後、法華の前、集め已れば前は是れ三乘枝末法輪なり。『法華』は是れ攝末歸本法輪なり。清涼の『大疏』に涌出の文を引きて、「『華嚴』は是れ根本なる義を結成す」と。鈔に牒釋して云はく、「斯は則ち法華も亦此經を指して以て本と爲す」と。言はば本の義を結成す。若し自ら立ちて本と爲すは、恐くは本の義未だ明ならず、『法華』此を指して本と爲す、本の義方に顯なり。始めて見て佛慧に入るは既に即ち『華嚴』なり。亦『法華』、佛慧に入ることを得しむるは、豈初を指して本と爲すに非ざらんや。又『法華』の第一に云はく、「一佛乘に於て分別して三と説く」と。亦是れ本より末を流す。即ち『華嚴』を一佛乘と爲し、分別して昔の三を説く。三は即ち鹿野の四諦等なり。若し既に『華嚴』を指して本と爲さずんば鹿野の前、何を以てか一乘と爲さんやと。『上』。此は是れ攝末の本を釋成す。漸入の者は先小後大、先三後一、終に別教に入る。

【開會】佛の三乗の教説修行等は、互に相異なるれりと、思へる衆生の謬見を開き去りて、三乗そのまま一乘にして、其間に差別なしと、悟道に歸會せしめたること

開漸の本とは、出現に説く所の四照の大喻なり。一には先照高山、菩薩に被らしむるが故に。『華嚴』を説くが故に。此中には直に一乘の菩薩を擧げて、兼て三乗教の中の菩薩を攝す。二には次照黒山、縁覺乘に譬ふ。三には照高原、聲聞乘に譬ふ。四には照大地、善根の衆生乃至邪定に譬ふ。開漸の次第、先大後小、別異の人に約して次第に漸を開す。鈔に云はく、『始成じて便ち『華嚴』を説くは、是れ菩薩山王を照すなり。此は先大後小を明す。』と已。其攝末の相、先小後大なり。一人昇進して一極に至るが故に。問ふ、『開漸攝末とは何等の機に約するや。』答ふ、『頓入の者は一切の萬法、本來一乘、究竟圓融せり。永く開漸三乗の差異無し。開漸無きが故に、先小後大等の門、進入の義、有ること無し。普賢淨眼諸乘有り」と雖も本來別教一乘に異ならず。小乗の如聾、如盲を見ず、小乗三乗教等の専ら三乗の名を立てて、因果を明すに同じからざるなり。同教三乗を開會して、三に同じて一を明し、待對して一と説くに同じからざるなり。別教一乘は、本聲聞無し。聲聞有りと雖も是れ盧舍那、聲聞の名體を見ず聞かず。本來普く徧じて一乘の道なるが故に。』問ふ、『華嚴』の別教、云何が三乗教の中の菩薩乘の人を攝引するや。』答ふ、『別教の當體まづ三乗に異れり。而れども亦熟に約して必ず別教に入る。而も所引の菩薩に二類有り。一には直進の菩薩、本より是れ三が中の菩薩乘の機、圓教の中の行布の一門に依つて發心修行し、行解長養し、根緣調熟して即ち圓融に入る。二には廻心の菩薩、亦二乗と名く。本是れ愚法なり。初めて大乘を聞いて信解勝進して、即ち廻心を成じ、志意通暢の菩薩の

【頓漸】直に大乘に入る頓悟の機をば頓。小乗より廻心して乘に入る機をば漸と云ふ。【化儀】佛の衆生を化益するに用ふる説教の形式仕方を云ふ。

分と作りて已に共教に入り、二乗の名を捨て菩薩の稱を得。即ち此分の人、要す同教を経て方に別教に入る。前に具に明すが如し。問ふ、『直進の菩薩も同教を経るや。』答ふ、『直進の菩薩、初心の人は情謂に三乗決定して差別し、實に其二乗の因果有りと執す。此情謂の人、要す同教を経て即ち別教に入る。』法華經に言はく、『菩薩此法を聞いて疑網皆已に除くとは即ち此人なり。若し直進の中に情謂無き人は、未だ必ずしも同を経ずして、自乗の中の證地に入るの時、即ち別教一乗の證地に入る。三乗教の中に證地無きが故に』と。

問ふ、『華嚴一乘唯頓入のみ有りて、漸入無くんば事義滿ぜんや。』答ふ、『華嚴の滿教、漸入無しと雖も、一切の法議、頓漸化儀の事、具足圓滿して闕くる所有ること無し。海印定中に一切の法門具足し、顯現して同時に滿するが故に。漸入一乗の事相の化儀、三世通徹して皆顯現するが故に。第二七日一念の中に、過去無際、現在十方、鹿苑已後、釋迦在世五十箇年の説法の化儀の緣盡きて入寂し、舍利を流通し、教法を弘傳し、正法、像法、末法時中の、一切の化事、未來世の事、後後無盡無際の事、皆成道第二七日に於て、顯現し窮盡して遺す所有ること無し。而も鹿苑等の五十箇年及び滅後の事、皆是れ第二七日の事儀なり。彼中より出でて經歷し成立す。問ふ、『第二七日に皆已に顯現せば、何が故に自後更に重ねて之を用ふるや。』答ふ、『後に經べからずんば漸次の用にあらず。後に應に經べき事、前に於て現するが故に。後に應に經べからざる者、前にも現すべからざるが故に。』

前に已に有る者、今即ち現するが故に。過去無始未來、無終顯現の事儀、行相皆爾なり。』
 問ふ、『若し此義の如くならば、頓入漸入の化儀あり。必ず唯頓なるべからざるべし。』
 答ふ、『若し唯一乘にして二乘の土無く、及び三乘差別の處無くば、漸入誘引顯現すべ
 からず。此事其處本來無なるが故に。若し總じて泛く言はば、一切顯現す。十方國土此事
 有るが故に。今此娑婆既に是れ穢土なり。如來の化儀必ず聲聞有らん。是故に具に三乘の
 化儀を開く。此娑婆に於て華藏界を顯す。法界に周徧して無盡鎔融せり。』
 問ふ、『清凉の『大疏』に還照高山と言ふは、『華嚴』を指すと爲んや、『法華』を指すとせ
 んや。』答ふ、『法華』を指すに似たりと雖も、而も實に『華嚴』を指す。小乗の一に入るに、『法
 華』を門と爲す。是れ能入なるが故に、『華嚴』別教は即ち所入所住の極處と爲す。今『法華』
 能入の門を擧げて、並べて所入を取つて還照教と爲す。先照高山は直に頓入を指す。還照高
 山は漸入の者に約す。問ふ、『何を以てか』法華』の本意、二乘を攝引して『華嚴』に入らしむ
 と知ることを得るや。』答ふ、『法華』の始終、聲聞に記を授けて『華嚴』の別教一乘に入らし
 めんが爲の故に。故に譬喩品に、『大白牛一乘の車を與ふる中に、初は是れ等一の大車なり。
 後は即ち無盡の寶車なり。等一は是れ同教の意、無盡は即ち別教の義なり。涌出品の中に、
 此經を聞いて佛慧に入ることを得』と。上の演鈔の如し。『法華』を説くを聞いて『華嚴』に入
 るが故に。嘉祥大師『法華』を攝末歸本法輪と名く。行相一同なり。而るに嘉祥の宗は、『法
 華』華嚴』差別有ること無し。諸大乘教、顯道無二、故に差異無し』と。今の宗と彼此の施

【一大事】佛の衆生濟度の爲に、種種の因縁を結んで此世に出現し給ふを云ふ。

【五】教宗の名義を明す。

【體大】眞如の體性のこと。凡聖染淨等の諸法の本體となりて、平等無邊なるが故に大と云ふ。

設と懸に隔れり。一問ふ、二法華經に云はく、「諸佛の出世は唯一大事因縁を以ての故に世に出現す」と上。即ち法華を指して一大事と爲す。何が故に更に大華嚴の故にと云ふや。答ふ、諸大乘經、成佛せしむるに望めば皆大事と言ふ。三乘大乘等の教を簡ばず、般若等の教、皆此義を説く。今華嚴宗、性起の一品は、具に如來出現始終の行相を説く。新には如來出現品と云ふ。十門の出現皆大事を顯す。第一の出現總相の法門、如來出世の本意を窮盡す。此文に依るが故に。清凉大師云はく、「出現は本、大華嚴の爲の故に」と上。一代一切の諸教の法門、皆是れ大華嚴の一大善巧、別教普法の爲ならざること莫し、其漸入とは、同教門に由りて別教の宗に入り、普賢眼を得。此所入を指して一大事と名く。同教を門と爲す。故に同教に通ず。終に別教に歸すれば、正しく此法を指して名けて、一大事因縁と爲すべし。」

(五) 第二に教宗の名義とは、問ふ、「何が故に此教を華嚴宗と名くるや。答ふ、一本經の精髓を名けて華嚴と爲す。梵語に具には、摩訶毘佛略勃駄健拏諍詞素怛覽」と言ふ。此には大方廣覺者雜華嚴節經」と云ふ。摩訶を大と言ひ、毘佛略を方廣と言ひ、勃駄を覺者と言ひ、健拏を雜華と言ひ、諍詞を嚴節と言ひ、素怛覽を經と言ふ。今略して大方廣佛華嚴經」と言ふ、更に精要を擧ぐるに華嚴宗と言ふ。清凉師云はく、「所證の境は即ち大方廣なり。能證の心は即ち佛華嚴なり」と上。佛所證の境は三大に過ぎず。體大、相大、用大を三と名く。能證の智心、事理に過ぎず。萬行の因、華十身の滿果を感ず。故に華嚴と言ふ。

【相大】眞如の上
に具する無量無數
の差別の功德を云
ふ。

【用大】眞如の作
用は、能く衆生を
して、一切世間出
世間の善を修せし
め、善の果を得し
むるが故に用大と
云ふ。

【三十二】應身佛
の身に具へ給ふ、
三十二の相好のこ
と。

【斷證】斷惑證理
のこと。煩惱を斷
じて、涅槃の眞理
を證すること。

【了因】了因佛性
のこと。眞如の理
を照了し證悟する
智慧。

【正因】正因佛性
のこと。一切衆生
が具へ持てる眞如
の理、これ正しく
佛となるべき本性

華は必ず菓を感ず。二利の萬行佛果を感ずるが故に。言ふ所の感とは佛果を得るが故に。嚴は是れ感に目く。佛果を得るを以て名けて嚴節と爲す。『大疏』の序に云はく、「華は功德萬行に喩ふ」と上。『鈔』に釋して云はく、「此に亦二義あり、一には感果の華、萬行に喩ふ。佛果を成ずるが故に。或は果と俱なり、或は俱ならず。俱は蓮化の如し、因果の交徹を表するが故に。不俱は桃李華の如し、先因後果を壞せざるが故に。二には嚴身の華、諸位の功德に喩ふ。必ず修果と俱なり」と。故に下の經に云はく、「若し華を見るの時は當に願すべし。衆生神通等の法、華の開敷するが如し。若し樹華を見れば當に願すべし。衆生の衆相、華の如くにして三十二を具す」と上。感果の華は要す佛果に局る。嚴身の華は互りて因果に通ず。『玄記』に、「華に十義有り。一には微妙の義、佛の行徳露相を離るることを表するが故に。二には開敷の義、萬行敷榮して性、開覺するが故に。三には端正の義、衆行圓滿徳相具するが故に。四には芬馥の義、徳香普く薫じて自他を益するが故に。五には適悦の義、勝徳快樂にして喜んで厭ふこと無きが故に。六には巧成の義、所修の徳相善巧成するが故に。七には光淨の義、斷證永く盡きて極めて清淨なるが故に。八には莊飾の義、了因明顯にして本性を嚴るが故に。九には引果の義、正因成立して佛果を起すが故に。十には不染の義、世に處して染せざるにと蓮華の如くなるが故に」と。『問ふ』、『華嚴』の華とは是れ何等の華ぞや。『答ふ』、『華嚴』の華とは蓮華を本と爲し、一切の華に通ず。諸の感果の者、通ぜざること無きが故に。華果の同時、前後を簡ばず、華に由つて果を感ずることを失は

【八不】三論宗にて云ふ。不生不滅、不去不來、不一不異、不斷不常なり。

【慈恩】玄奘三藏の弟子窺基なり。

【六】立教開宗を明す。

【五教】華嚴宗には、小、始、終、頓、圓の五教を立てて、一代を判釋す。

【三藏等の教】小乗教のこと。

【法空】諸法萬有は其體空無なりと云ふ。

【人空】常一主宰の義ある「我」の空無なること。

ざるが故に。亦一切の華に非ざるの者にも通ず。身を嚴り體を飾る。皆華の義なるが故に。』問ふ、『感果の蓮華、『法華』の華と何の別有るや。』答ふ、『能諭の事華は彼此是れ同なり。所諭の法義は彼此是れ別なり。此經は感果嚴身の二義なり。』法華の所諭は開敷出水、華實俱成、因果雙説、八不本淨、八迷不染、爲實施權、開權顯實、廢權立實、權實二智、同時雙顯、是の如きの法諭、宗に隨つて不同なり。開敷出水は『法華論』の説なり。因果雙説は光宅の所立なり。八迷不染は嘉祥の妙解なり。爲實施權等は是れ天台の所解なり。本迹の二門に各三義有り。總じては本迹の六譬と名く。權實雙顯は清涼の所釋なり。慈恩は論の開敷出水を用ふ。』

第三に立教開宗とは、問ふ、『此華嚴宗は、幾くの教宗を立てて、一代教を收攝判斷するや。』答ふ、『杜順大師華嚴宗を弘め、五教を建立し、止觀を陳演す。智嚴大師此躡を承繼して五教を建立し、莊飾弘通す。賢首尊者建興繁昌し、普天歸投し、率土順從す。清涼圭山弘通傳述し、潤色増光し、修飾窮究す。教は即ち五教、宗は即ち十宗、能詮所詮、攝判究盡す。五教と言ふは、一には愚法小乗教なり。諸の小乗教、二部五部、二十部五百部等の一切の三藏等の教、法空を知らず、俱に人空を證す。法空を説くと雖も唯是れ少分に於て亦明顯ならず。二には大乘始教なり。般若の中、百等の破相遺執教、深密、瑜伽等の建立法相の典なり。三には大乘終教なり。楞伽、密嚴等の經、起信實性等の論、事を蕩し、理を顯し、相を融し、性を見る、即ち此れ教宗なり。四には大乘頓教なり。諸大乘中の

【法無去來宗】我の實在せざるは勿論、萬有(法)もただ現在のみに實在にして、過去未來に於ては空無なりと説く。

【諸法但名宗】一切の我法はただ假名のみ有りて、實體無しと立つる教

【一切皆空宗】有はそのまま皆空無なりと説く。般若經等の教を云ふ

【相想俱絶宗】萬有の相も、之を認識する心も、共に思議すべからずと説く。維摩經等の教を云ふ。

【七】一乘三乘を明す。

【三車】羊車、鹿車、牛車。譬喩品に兒等去り出づれば、三車は無くして、唯一の大白牛車有るのみと説ける喩による。

所顯所示の言説頓區、思量忽泯、契會不二、入住一理、生死即妄、不生即佛是の如き等なり。五には一乘圓教なり。華嚴一乘、四種法界、事事無礙、圓明自在、具德無盡、主伴具足、帝網重重是の如き等なり。十宗と言ふは所詮の宗に約して建立するが故に。即ち五教の中に顯す所の宗旨なり。一には我法俱有宗、犢子部等なり。二には法有我無宗、薩婆、多部等なり。三には法無去來宗、大衆部等なり。四には現通假實宗、說假部等なり。五には俗妄眞實宗、說出世等なり。六には諸法但名宗、一說部等なり。此上の六宗は小乗の中にして分つ。七には一切皆空宗、亦是三性空有宗と名く、是れ始教宗なり。八には眞德不空宗、是れ終教宗なり。九には相想俱絶宗、是れ頓教宗なり。十には圓明具德宗、是れ華嚴經別教一乘なり。此五教十宗を以て、大小の教宗を判斷するに、權實淺深究竟せざることを無し。』

(七) 第四に一乘三乘とは、問ふ、『五教の中に於て、云何が一乘三乘の差別門を分別するや。』答ふ、『總じて之を言はば、一乘三乘、細分して之を言はば、三乘の外にも亦愚法小乘有り。合して之を言はば、三乘の中、一乘に之を攝す。』法華の三車に含ねて愚法有り、五教の中に於ては初の小乘教、即ち愚法教なり。始終頓の三は並に三乘教なり。圓教は即ち是れ一乘教宗なり。此圓教とは是れ別教を指す。若し漸入門には二乘の機を攝して同教門を立つ。教の本意には非ず、立教の本意は唯別教宗なり。』問ふ、『云何が名けて三乘一乘と爲すや。』答ふ、『大乘教の中に、三乘の別を説く。因果各別にして各自乘に歸す。是

故に二乗成佛すること能はず。此れ即ち本、性種姓別なるが故に。是の如きの義を説く
 を三乗教と名く。此教即ち三乘五性を説く。一には聲聞種姓なり。二には獨覺種姓なり。
 三には菩薩種姓なり。此三各自乘種子の芽を具して餘をば具せず。四には不定種姓な
 り。三乗の種を具す。定一に非ざるが故に。然も四種有り。一には聲聞、緣覺、不定なり。
 二には聲聞菩薩不定なり。三には緣覺菩薩不定なり。四には三乘不定なり。初の一は定
 性成佛すること能はず。後の三は成佛す、佛種有るが故に。五には無性有情なり。闕し
 て三乘無漏の性種無し、極めて人天を以て教化成就す。一乗と言ふは一切衆生、皆理性を
 具す。眞理を性と爲す。此理を有するが故に。一切衆生、成佛せざることを無きを一乘經と
 名く。若し結縁に據らば三乗の性有り。是れ理性の上に暫時假立す、暫時の性なるが故に。
 後に皆成佛す。而して定性の者は習性堅牢にして、此世の中に於て決定して廻せず。必
 ず涅槃に入りて寂後、心を生ず。所入の涅槃、實滅に非ざるが故に。心想還つて生じ、廻
 心向大し、次第に勝進して修行成佛す。不定種姓は此世に廻心し、趣向昇進し、修行
 成佛す。『問ふ、』始終頓の三教には一乗の名無きや。『答ふ、』五教門に約して三二の名を立
 て五に與奪有り、一準なるべからず。始教を密意の一乗と名け、終教を佛性の一乗と名け、
 頓教を絶想一乗と名け、『法華』を同教一乗と名け、『華嚴』を別教一乗と名く。圓教を二に
 分つ、同教、別教なり。始終頓の三あり、是故に總じて五種の一乗を立つ。愚法には都て
 一乗の名無し。五種の一の中には唯別教宗のみ是れ眞實の一なり。根本一乗諸乘の本な

【八】所立の法義を明す。【事法界】現象差別界の方面より名けたる宇宙の稱。

るが故に。『法華』の攝末歸本を一と名く。始終頓の三は三乗教なりと雖も、所立の義に隨つて各一の名を與ふ。然るに始教宗は三乗教の本なり。終頓の二教は三人の所入なり。故に三乗と名く。三乘に待對す、故に三乘と名く。其所説の相は是れ一乘の義なり。専ら三乘皆成佛を説くが故に。三乘を泯絶して一理に歸するが故に。故に清涼師始教大乘を三乗教と名く。終頓圓の三をば皆一乘と名く。若し成佛門ならば終頓の二教、共に是れ一乘なり。事事無礙は別教一乘なり。同教の義門は頓に同じ、終に同じ、或は始小に同ず、故に同教と名く。然るに五教に於て三乘の名を立つるに亦五種有り。一には始別終同の三、小乗教の如し。二には始終俱別の三、始教宗の如し。三には始終俱同の三、終教宗の如し。四には始終俱離の三、頓教宗の如し。五には始終俱同の三、同教宗の如し。別教一乘には三乘の名無し。問ふ、『同教一乘に種類有りや。』答ふ、『唯三乘に同ずるを名けて同教と爲す、類有るべからず。若し強ひて之を言はば、『法華』の同教有り、是れ對機の同なり。『華嚴』の同教有り、是れ稱性の同なり。『法華』は同教を本と爲して兼て別教有り、所入に約するが故に。『華嚴』は別教を本と爲して兼て同教有り、該攝に約するが故に。直爾に正に就いて二門を分たば、『華嚴』は是れ別教、『法華』は是れ同教なるのみ。』

第五に所立の法義とは、問ふ、『華嚴一乘教、何等の法義を説くや。』答ふ、『別教一乘、法界法門、體相森羅、業用周遍なれども、樞要を攝束して四法界を成ず。一には事法界即ち是れ無礙所依の體事即ち十對有り。教義、理事、境智、行位、因果、依正、體用、人法、

【理法界】 本體平等界の方面より名けたる宇宙の稱。
【理事無礙法界】 本體界と、現象界とがさはりなく、互に融合せる方面より名けたる宇宙の稱。

【事事無礙法界】 現象界の萬有が互にさはり無く、重重無盡に、融合せる方面より名けたる宇宙の稱。

逆順、應感此十對の法、各皆圓融し、或は一に餘を攝して互に皆融攝す。二には理法界、眞實に攝歸して寂寥湛然たり。此に十門有り、文繁ければ之を略す。三には理事無礙法界、隨緣の事法、理と一味なり。此に十門有り。各無礙を成ず。一には理遍於事門、二には事遍於理門、三には依理成事門、四には事能顯理門、五には以理奪事門、六には事能隱理門、七には眞理卽事門、八には事法卽理門、九には眞理非事門、十には事法非理門なり。此十門を以て理事無礙の相を明す。四には事事無礙法界、周遍含容と名く、眞理緣に隨つて種種の事と成る。一一の事法、融通無礙なり。亦十門有り、卽ち十玄門なり。一には同時具足相應門、二には廣狹自在無礙門、三には一多相容不同門、四には諸法相卽自在門、五には秘密隱顯俱成門、六には微細相容安立門、七には因陀羅網境界門、八には託事顯法生解門、九には十世融法異成門、十には主伴圓明具德門なり。此十玄門同一に緣起す。一一の法に於て十玄門を具して無礙圓融なり。其一門に隨つて卽ち一切有り、一塵の法に於て四法界を具す。一塵の當體は是れ事法界因緣所生分限の法なるが故に、此塵全く眞理を以て成立す。故に還つて泯亡して全く是れ眞理なれば理法界を成ず。理卽事を成じ、事卽理を成ず。二門隔ること無し。是れ事理無礙なるが故に、周徧眞理全く一塵と成る。一塵の外に眞理有ること無し。自餘の諸事塵理を離れず、萬法と理と一塵の内在り。是れ卽ち事事無礙の行相なり。故に四法界同時に之有りて眞理を離れず、一塵の中の事、十玄門を具足して同時具足、廣狹自在、相卽相入是の如き等なり。事事無礙の所因に十有

【舍那】毘盧舍那に同じ。梵音ワローチヤナ（Vajra）と譯す。佛の名。佛の身光、智光が遍く理事無礙の法界を照して圓明なるの義なり。

【九】本經の次第を明す。經の初に

【證信】經の初に是我聞一時佛等と説ける序文。末世の衆生に信を起さしむ。

【發起】證信序の次に、一經正宗分の説法を引き起したる動機因縁を説ける序文。

【十信】五十二位の前十位。教法を信じて疑はざるが故に信と云ふ。

り。一には唯心所現の故に。二には法に定性無きが故に。三には縁起相由の故に。四には法性融通の故に。五には幻夢の如くなるが故に。六には影像の如くなるが故に。七には因無限の故に。八には佛、證窮したまふが故に。九には深定の用なるが故に。十には神通解脫の故に。十の中間に隨つて即ち能く彼諸法をして混融し、無礙自在ならしむ。十玄に二門あり、一には徳相の十玄、舍那の自徳に本具足するが故に。二には業用の十玄、物の爲に顯現して利潤を成ずるが故に。上の四法界は即ち是れ別教一乘所説の法義の綱要なり。

第六に本經の次第とは、問ふ、『此華嚴宗は既に是れ經宗なり。本經所説の行相云何。』答ふ、『大華嚴一部六十卷、七處八會、三十四品、理實法界、縁起因果を宗と爲す。高祖香象賢首大師、『大華嚴經』を總じて五分と爲す。一には發起因縁分、是れ初の世間淨眼品、餘經の序分に當る、證信發起の二序の行相を明すが故に。一には盧舍那品、舉果勸樂王生信分と名く。舍那の果徳を説きて人をして信樂せしむるが故に、此二品は是れ第一會菩提場と名く。

第二會に六品有り。謂く名號品、四諦品、光明覺品、明難品、淨行品、賢首品是れなり。名號以下三を修因契果生解分と名く。十信已後乃至性起品、四十一位因果鉤鎖して漸次に成ずるが故に。此に由つて次第に妙解を生ずるが故に。第二會六品の中に初の三品は佛果の三業を十信の所依と爲す。後の三品は信位の當相解と行と徳とを成ず。三品次配

す。問ふ、『何が故に十信は如來の三業を以て所依と爲して發起性起するや。』答ふ、『菩薩の行位要す佛果を攬つて生起成辨す。是故に如來の三業を依と爲して信位の行を起す。況んや全く果分を攬つて因分の體と爲す。是故に因人一法を成就し、果海即ち顯る。位位の成佛即ち此義に由る。』問ふ、『云何が明難十信の解を成ずるや。』答ふ、『明難品の中に十首の菩薩各一法を説く。初の問は文殊通じて九首に問ふ。九首の菩薩各一深を答ふ。後に九首有り、總じて文殊に問ふ。文殊即ち佛境の一深を説く。此十甚深とは、一には縁起甚深、二には教化甚深、三には業化甚深、四には佛說法甚深、五には福田甚深、六には正教甚深、七には正行甚深、八には助道甚深、九には一乘甚深、十には佛境甚深なり。』問ふ、『云何が淨行十信の行を成ずるや。』答ふ、『觀解、深玄にして諸佛の法に入り隨緣の行願三業歷緣して一百四十の淨行を經説す。理事、兼修、悲智、雙運の四儀、動作、語默、行住、心空理に住し、觀事理を融す。此即ち十信隨緣の妙行なり。』問ふ、『云何が賢首、信位の徳を成ずるや。』答ふ、『圓教は十信に解行已に成じて所得の大果、徳用無盡、信位窮滿し、果海に沒同し、自證圓極して佛果地に居す。此初發心、同時に六位の衆徳を成辨す。若し終を得ずんば亦初を得ざるが故に。信位佛果中間の諸位、同一縁起にして不相離の故に。一位を得る時全く一切を成ず。是故に信滿始終に通貫し、諸位を該攝す。自體満足して無方の用を施し、十三昧を得、無盡の業を成ず。十三昧とは、一には圓明海印三昧門、二には華嚴妙行三昧門、三には因陀羅網三昧門、四には手出廣供三昧門、五には

【十住】五十二位のうち、十一位より二十位迄にして心を眞諦の空理に安住するが故に住と云ふ。

【十行】五十二位のうち二十一位より三十位迄。從空出假して進んで中道に趣く故に行と云ふ。

【十廻向】五十二位のうち、三十一位より四十位迄。從空出假觀より、中道に向ひ、地前の因行を廻して、地上の果に向け、又已加功徳を普く衆生に廻向するが故に廻向と云ふ。

現諸法門三昧門、六には四攝攝生三昧門、七には俯同世間三昧門、八には毛光覺照三昧門、九には主伴嚴麗三昧門、十には寂用無涯三昧門なり。上は是れ第二會十信の法門竟んぬ。

第三會に十住の位を説くに、總じて六品有り。一には昇須彌頂品、二には須彌偈讚品、

此二は序分なり。三には十住品、此十解を明す、四には梵行品、十住の行を明す。即ち十梵行、著を遣り、執を破して梵行成就し、便ち正覺を成ず。五には發心功徳品、十住の功徳を明し、且く住徳を讚す。上の三は自分なり。六には明法品、此は十住の勝進分を明すなり。此上の四品は十住正住正宗なり。

第四會には十行の位を説く。此に四品有り。一には夜摩昇天品、二には夜摩偈讚品、此

二は序分なり、三には十行品、四には十藏品、此二は正宗分なり。

第五會に十廻向を説く。此に二品有り。一には兜率昇天品、二には兜率偈讚品、此二は

序文なり。三には十廻向品、是れ正説なり。

第六には他化自在天會、此に十一品有り。一には十地品、二には十明品、三には十忍品、

四には阿僧祇品、五には壽命品、六には菩薩住處品なり。十明已後の五品は第十地の勝進

分を明す、是れ等覺位に當る。七には佛不思議法品、八には如來相海品、九には小相光

品、十には普賢行品、十一には如來性起品なり。不思議已後の五品は是れ佛果地、妙覺位

なり。此上の諸會具に四十一位の行相を説き、人をして解を生ぜしむ。

第七會には重會普光法堂會、廣く諸位の行法を説く。此即ち第四託法進修成行分なり。

唯一品有り、離世間品と名く、普賢菩薩二百の問を擧げ、普賢菩薩二千の行を説きて其諸問を答ふ。二千の法門應に隨つて各五十二位成行の方法を明す。

第八會を重閣講堂會と名く。此に一品有り、即ち入法界品なり。此れ即ち第五の依入天

證成徳分なり。前の行法に由つて所説所宗の法界海會に證入するが故なり。此一會の中

に總じて二段有り、初は是れ本會祇園の大衆、法界に入るが故に、是れ頓證法界分、即ち

如來會なり。二には是れ亦未會文殊閣を出て南に往きて化導す。并に諸の菩薩縁に隨つ

て物を化す、是れ漸證法界分、即ち菩薩會なり。中に於て三會あり。初は攝比丘會、二に

は攝龍會、亦は攝諸乘會と名く。三には攝善財會なり、比丘攝龍、攝善財の初は皆文殊を

會主と爲す、徳雲已後は諸の善友を以て其會主と爲す。文殊師利覺城の東、沙羅林幢大

塔廟處に於て善財童子を攝して、信位を滿ぜしむ、善財の知識に總じて五十五人有り、東

ねて五相と爲す。一には寄位修行相、初の四十一人は是れなり。信位一人、十住十人、十行

十人、十向十人、十地十人、一人一位を成ずれば寄位修行相と名く。二には會縁入實相に

十一人あり、等覺の位に當る。三には攝徳成因相、彌勒菩薩補處の功徳を司るが故に。

四には智照無二相、再び文殊を見るに初後不二なるを以ての故に。上來は並に是れ般若門

の知識なり。五には顯因廣大相、普賢菩薩なり、秘密重重即ち法界門の知識なり。善財童

子、普賢に値ふ時、其毛孔の中に即ち一切佛刹の塵數境界を見る。念念に是の如く一切の

佛法盡極圓滿し、一一の因に隨つて皆法界に稱ふ。甚深廣大、不可思議にして前の諸の

【知識】善知識のこと。正法を説きて、人をして佛道に入らしめ、解脱を得しむる人を云ふ。高德の賢者のこと。

【二〇】修證の行相を明す。

【二乗別教】三乗教と別異なる一乗教と云ふこと（相對的）。又三乗教を認めざる唯一乗教と云ふこと（絶對的）。無盡緣起の一心法界を説く。【解悟】了解覺悟さとすること。

善友の處に於て、得る所の三昧法門、普賢の毛孔に於て念念に獲得す。前の五十四般若の知識は即ち是れ文殊能證の妙智なり。第五十五の普賢の知識は所證の眞理なり。二聖の理智、契合して即ち盧舍那佛に同ず、故に顯因廣大相と名くるなり。法界海會、頓漸異りと雖も漸に異らざるもの頓、頓に異らざるの漸、一圓滿果、遍通普周せり。此五分の中に初は是れ序分、正宗の四分は輪轉無窮なり。果を見て信を起し、信に依つて解を成じ、解に由つて行を起し、行に由つて證入す。證の上に果を説き、後果に信を起し、乃至行に由つて證を成す。信解行證、次第鈎鎖し、展轉して無窮なり。是を一乘法輪の行相と名く。本經の宗旨狀相是の如し。

第七に修證行相とは、問ふ、『華嚴の別教圓融法門に、修行證入の狀相云何。』答ふ、『華嚴教の修行證入の機に隨つて階差あり。相狀一に非ず、或は頓悟漸修有り、或は漸悟漸修有り、或は頓悟頓修有り、或は漸修漸悟有り。是の如きの行相宜に隨つて多端なり。且く頓悟漸修に就いて之を言はば、創めて華嚴の一乗別教に値うて、自身の如來藏中の四種の法界、圓融無礙に過恆沙の徳、具足周備し、因果、理事、業用、圓滿せるを聽聞して、即ち深信を發し、欣樂修顯す。是の如く信樂して菩提心を發し、趣向堅固にして法の深大を知る。此大心の中に頓に自身本來、即ち是れ萬徳の庫藏、無染、無妄、無盡、自在、具徳、宛然たりと悟る。是を頓悟と名く。此悟は即ち是れ解悟の悟にして是れ證悟に非ず、未だ修證せざるが故に。此解悟の心、徹底窮源し、頓解の所領、果海に至るが故に、頓に

【斷德】一切の煩惱惑業を斷盡せる如來の徳を云ふ。【智徳】如來は平等の智慧を以て、一切法を照了し給へる徳を云ふ。

【觀門】分別觀察の心を云ふ。

【一一】諸雜の法門を明す。

源に至ると雖も惑未だ消せず。是故に漸く修して惑障を斷除し、斷惑の處に隨つて斷德漸く成じ、證理の處に隨つて智徳漸く滿す。是の如く修行して斷障の處に隨つて、次第に證悟す。漸修に由るが故に、此證解有り。七處八會、皆自心に在り、所説の萬法、皆吾所有なり。見聞已後、此頓悟を成じ、解行生の中、念念事事、頓悟漸修し、漸修漸悟す。一法の中に於て頓悟漸修す、法法皆爾り、同時に圓備す。頓悟漸修、最初の要門、連續修習し、衆門頓に開く。是故に頓悟頓修、修悟同時、漸修漸悟、先修後悟、宜に隨つて進向し意に任せて修證する者なり。華嚴の修證、緣に隨つて無盡なり。七處八會、文文句句、皆是れ觀門の樞樞に非ざること無し。華嚴の列祖多く觀行を立つ。杜順帝心、創て『華嚴法界觀』一卷を作り、三重の法界觀門を立て、其精美を盡す。亦『五教止觀』二卷を作りて、華嚴三昧、理趣を窮究す。三祖の香象、觀門是れ多し。『華藏世界觀』一卷、『遊心法界記』一卷、『安盡還源觀』一卷、『義海百門』一卷、『普賢觀行法門』二卷、『華嚴三昧章』二卷、清涼の『三聖圓融觀』二卷、『十二因緣觀』等を作る。『大疏』『演義鈔』『探玄記』等、皆觀門を以て宗旨を解釋す。通玄居士、『華嚴論』等を造り、専ら觀門を以て宗旨を釋成せり。第八に諸雜の法門とは、問ふ、『華嚴宗の中、所説の法數、大小の法義、總じて幾くの種有りや。』答ふ、『華嚴大經、法相廣博、會會口品、數相無邊なり。徒に紙墨を費さん。』孔目章の中、會會口品其簡要を取りて、一百四十一科の法門を明す。其中の小科、別して其相を開き、數百餘の法相法義を成す。然に法相門總じて三種有り。一には唯法相宗の法相、

【無性有情】 聲聞緣覺、菩薩の證果に至るべき、法爾無漏の種子を有せず、永く二障を斷ずる能はずして生死海に沈淪する衆生のこと。

【六相】 萬有の一に六種の相あるを云ふ。總相、別相、同相、異相、成相、壞相なり。

【二】 章疏の分量を明す。

三乘 定性の如し、性相各別にして無性有情の無漏の種無き等なり。二には唯法性宗の法相、三乘五性、一乘に會歸して皆佛道を成ず。性相融融して理事無礙なる等なり。三には法相法性、違ふこと無き法相、四智、三身、八識、二諦、六度、三性、三無性等の如し。始教大乘は少しく法性を説き、多く法相を説く。所説の法性即ち法相の數なり。終教大乘は少く法相を説き、多く法性を説く。所説の法相、法性に會歸す。總じて之を言はば、始教大乘は是れ法相宗、終教圓教をして法性宗と名く。頓教大乘は是れ無相宗なり。故に法性宗に終教の法性有り。圓教の法性有り、此圓教とは別教一乘なり。同教の法相、全く終教に同ず。上の性相無違とは、多くは終教法性に約す。若し圓教の事事無礙に約せば、十玄六相、一切の法門、十無盡並に終教法性の義に異なるなり。而も亦多く終教始教の法相に通ずるの者有り。言ふ所の別教、華嚴の法門とは、『孔目章』等の中に列ねて言ふが如し。五海、十智、十世界海、四諦、唯識、十甚深、十信、十住、十梵行、十度、十藏、十廻向、十地、六決定、教證の二大、五怖畏、十願、調柔等の四果、三聚淨戒、四禪、八定、三十七道品、十二因緣、萬行道法、十身相作、四十辨才、十明、十忍、是の如き等の法、無量無邊なり。離世間品、二千の行法、皆十種を以て其定數と爲す。此等の法門皆是れ『華嚴』の所説なり。所説所談の諸雜の法門、具に録すること能はず。本經に説くが如し。第九に章疏の分量とは、問ふ、『此華嚴宗の教典、幾許ありや。』答ふ、『本經に三本あり。『六十華嚴』は東晋の所譯、智儼大師、五卷の疏を作り、『搜玄記』と名く。香象大師、『探玄

【三】祖承の弘傳を明す。

記三十卷を作る。『八十華嚴』は大周の所譯、慧苑法師、六十卷の疏を作りて、『續華嚴疏
 判定記』と名く。清凉大師、『大疏』二十卷を作る。并に『演義鈔』四十卷あり。自の大疏
 を釋す。『判定』、賢首の所立に違すること有り。清凉、『判定』を破して賢首の義を成立
 す。『四十華嚴』は貞元の所譯、清凉大師、十卷の疏を作る。清凉亦八十經の『綱要』三
 卷を作る。通玄居士、『華嚴論』四十卷を作る。自餘の諸章、其數極て多し。『五教章』『旨
 歸』綱目『法界觀』五教止觀『五十要問答』十玄章『華嚴問答』七科章『遊心法界記』策
 林『還源觀』義海百門『普賢觀行』華藏觀『關脈』義金師子章『華嚴傳』行願別行
 疏『略策』法界玄鏡『三聖圓融觀』行願疏義記『法界圖』纂靈記注『法界觀五教章』
 多く記述を作る。『指事』義苑疏『折薪記』復古記『集成記』等、是の如きの章疏其數極
 て多し、具に錄すること能はず。智儼、香象、清凉の祖文本疏章鈔學者専ら翫ふ。餘
 師の解釋、兼包習學せよ。歸途深廣にして大いに神解を養はん。』
 (二)第十に祖承の弘傳とは、問ふ、『此宗の立祖、相承如何。答ふ、『若し立祖を明すに、總
 通して之を言はば、毘盧舍那は開法の教主、普賢已下の十祖の所憑なり。謂く普賢菩薩、
 文殊師利菩薩、馬鳴菩薩、龍樹菩薩、天親菩薩、杜順帝心尊者、至相の智嚴尊者、康國の
 賢首尊者、清凉の澄觀大師、宗密定慧禪師是なり。大唐の帝心已後、皆血脈相承す。
 然に清凉は香象の滅後に在り。天竺の五祖は唯是れ依憑す。太宗の淨源總じて七祖を立
 つ。大唐の五祖に天竺の馬鳴龍樹を加ふ。大日本國天平十二年辰良辨僧正創て華嚴を弘

む。日本の華嚴此より始る。新羅の審祥禪師、大唐朝に往き、香象大師に従つて華嚴宗を學び、來朝の後大安寺に住す。良辨此を東大寺の羅素堂に請じて初て華嚴を講ぜしむ。良辨之を聞いて即ち共に興隆す。良辨の弟子に實忠和尚有り。次に等定大僧都。次に正進律師。次に長歳和尚。次に道雄僧都。次に基海大徳。次に良緒律師。次に圓超僧都。次に尊勝院の本願光智大僧都。次に松橋の已講。次に延達律師。次に深幸法橋。次に定遷得業。次に隆助法橋。次に道性法印。次に良禎權僧正。次に宗性權僧正。次に法印權大僧都宗顯。次に法印權大僧都公曉なり。良辨已後公曉法印に至るまで二十代を經。並に是れ日本華嚴の貫首なり。公曉の弟子に定曉大律師有り、此次後に在りて、是宗の貫首なり。昔の光智の弟子に觀眞律師有り。次に觀圓已講。次に延快已講。次に勝遷已講。次に良覺得業。次に景雅法橋。次に高山寺の高辨上人、横に一燈を燃し、大いに華嚴を興す。高辨の弟子に喜海大徳有り。海公の下に靜海法師有り。靜海の下に照辨法師、順辨法師、辨清法師有り、辨清の下に經辨法師有り。高辨の門人、横堅に弘持し、學業繁昌し、宗緒弘昌す。日本の華嚴宗東大寺を本と爲す。良辨僧正、華嚴を弘めんが爲に東大寺を立つ。聖武天皇特に此宗を崇め、八宗を學ぶと雖も華嚴宗を以て其本宗と爲す。昔より已來亦三論を弘む。昔は昌んに法相を弘む。澆季廢して學ばず。中古已來華嚴、三論兩宗踵を繼ぎて習學す。甚だ昌なり。英哲間り出でて各綱宗を提げ、學業林を成し、法緒速に縣る。昔東大寺南大門の額を、大華嚴寺と言ひ、大佛殿二階の額を、恆說華嚴院と云ふ。天

平十二年より、延暦七年に至るまで首尾五十許年、毎日『華嚴經』及び彼疏を講説す。謂く、天平十二年己後三年にして、『六十華嚴經』を終ふ。即ち『探玄記』を用ふ。其後、『八十華嚴經』を講敷し、『刊定記』を用ふ。六十、八十常に講じて息まず。恆説の言事實に宣なり。』宗旨の玄妙情慮、懸に涯れり、教理の力に依つて、其要義を綴る。功業虚しからずんば、要す十身を證せんのみ。

時に正和三年甲寅十月二十八日、東大寺戒壇院に於て、關東光明寺檀越禪門の爲に、之を撰す。彼禪門殿下忠勤之暇、普く諸宗に通じ、顯密該綜し、性相兼ねて練る。予に叩くに華嚴の法門を以てす。對談するに兩三軸の章を以てし、更に此簡章を綴つて、謹んで慇懃の雅懷に酬ゆ。

華嚴宗沙門

凝然春秋七十五

華嚴宗要義一卷 終

法相宗聖典

○當書三卷作者不詳。其語氣、義趣文體より推して恐らく良遍上人ならんか。一部の意は人をして、自ら心を觀じ、生死を解脫せしむるにあり【唯識】三界は唯識のみ終極の實在にして更に別法なしといふ。故に唯識を觀ずるを以て斷惑の因となす。

【所依本經】各宗派に於て依用せる根本經典をいふ。

【三性】唯識宗にて萬法を三種に分つ。遍計所執性(分別性) 依他起性、圓成實性(眞實性)【華藏】蓮華藏世界のこと。

觀心覺夢鈔上

夫れ菩提を得んと欲せば、須らく自心を知るべし。之を知るは寔に唯識の教門に在り。法を求むるの人誰か學ばざらんや。但し文義廣博にして、頓に學すること能はず、今略中の略を取りて聊か其旨趣を示す。一には所依本經、二には一代教時、三には百法二空、四には四分安立、五には三類境義、六には種子熏習、七には十二緣起、八には三種自性、九には三種無性、十には二諦相依、十一には二重中道、十二には唯識義理、十三には攝在刹那なり。

所依本經 十一部論且之を略す

唯識疏に云はく、『六經を爰引す。謂ゆる『華嚴』と『深密』と』如來出現功德莊嚴』と『阿毘達磨』と『楞伽』と『厚嚴』となり。『文。故に六經を以て本經と爲す。但し此六經の中『解深密經』を以て、殊に其本と爲し、正しく唯識三性十地因果行位を明す、了相大乘中道教の故なり。又『莊嚴經』『阿毘達磨經』及び『厚嚴經』は皆未渡の經なり。唯識論の中に數其文を引く。問ふ、『若し爾らば『深密』の説處、教主、對揚等何ん。』答ふ、『説く處は華藏世界なり。教主は盧舍那佛なり。對揚は法雲究竟なり。義理は中道了義なり。皆經に見ゆ、長きが故に

載せず。

一代教時

【一代教時】佛一代の教法を分類判別すること。支那日本の各宗の祖師は皆この判釋をなせり。三時教、五時八教、五教十宗、二雙四重等の如し。【義燈】唯識論了義燈。世親の唯識三十論を釋して圓測の不正義を破斥せし書。【有空兩經】阿含經(有)般若經(空)

【勝義無性】圓成實性は其體勝義の法なり。無性空を觀ずるに由つて無性といふ。

【五蘊】色、受、想、行、識の五蘊。

【四諦】迷悟兩界の因果を説明せるものにて、聲聞はこの理を觀じて證果を得。苦集滅道なり。

古來の諸德教を判ずること同じからず。或は一時教を立て、或は二時教を立て、乃至或は五時教を立つ。此等の所立皆教文無ければ依用すること能はず。故に「義燈」に曰はく、「二二四五時教等を立つ、聖教の文無ければ並に依るべからず。」文。正しく文を、宗家の意、「解深密教」に依りて、三時教を立て。是を以て彼無自性品を披くに、勝義生菩薩、有空兩經の相違を擧げて如來に請問す。世尊之に答へて、一代教の大意を演べて其相違を會したまふ。文言繁長なり。略を取るに意に云はく、遍計と依と圓との三性に依止して次の如く相と生と勝義との三種の無性を建立す。相無性とは、遍計所執は體性都て無にして譬へば空華の如くなれば、相無性と名く。生無性とは依他起性は自然性無し、譬へば幻事の如くなれば生無性と名く。勝義無性とは一切諸法は法に我性無し、衆相を遠離す。譬へば虚空の如くなれば、勝義無性と名く。是の如き三種の無性に依るが故に、我説いて、一切諸法は皆自性無しと言ふ。相無性の空と及び勝義無性の自性凝然常住の義に依るが故に、我も亦説いて無生無滅本來寂靜自性涅槃と言ふ。生無性とは依他の體に依るが故に我も亦説いて、五蘊四諦等の種種の法と言ふ。故に前後の説、相違せざるなりと。言を爲す。時に勝義生菩薩、深く領解を生じて一代諸教に有、空、中道の三時教を立て。爾時如來之を嘆印し

たまひぬ。

初時教とは謂ゆる如來初に一時に於て施鹿林に在りて、諸の聲聞の爲に、廣く蘊諦等の諸の善巧を説きたまふ。是則ち正しく生無自性依他の諸法に當る。其義最も淺きが故に、小機に對して最初に之を説きたまふ。

第二時とは、如來在昔に諸菩薩の爲に鷲嶺等に於て、廣く諸法皆無自性無生無滅本來寂靜自性涅槃と説きたまふ。是則ち正しく三無性門に當る。是れ猶總說隱密教の故に、中根の器に對して、漸次に之を説きたまふ。已上の二教は復希奇なりと雖も、皆隱密の故に是を諍論安足の處所と名く。

第三時とは、如來今華藏界等に於て、廣く遍計等の三性に依りて、三種無性を建立するの旨を説きたまふ。具足して空有の諸法を顯了す。是れ則ち最極圓滿教の故に、普く一切乗の者の爲に之を説きたまふ。如來所有の密意、盡く顯れて永く諍論を離る。故に無諍無容の教と名く。是れ其三時教の大綱なり。然るに佛教を設くるの由來は、但是れ義理淺深の次第なり。謂く、有は最淺の故に初に之を説く、乃至非空非有は最深の故に第三に説く、此の如く其義理、淺深を以て機に隨つて説く時、自ら年月を経て前後次第す。此經る所の年月の時を取りて以て名號と爲し、三時教と號す。故に由來を尋ねれば、義理に淺深あり、其名號を論すれば、年月に次第あり。彼理の淺深も亦、年月の義に違はざるが故に、名と義と相當して教時能く成ず。是を以て『華嚴』を第三時に攝す。及び『遺教經』は

【鷲嶺等】給孤獨園と他化自在天と白鷲池等を云ふ。

【華藏界等】華嚴の七處八會等を指す。

【諍論】一は偏有を執し、一は偏空を執す、故に諍論を起す。

【機】機根。教を聞きて修證し得る能力をいふ。

【一】以下時の言義理を兼合するを明證あり。此中文證と理證あり。一に死に三は瑜伽一に死に三種あり。一に壽盡の故に死し。二に福盡の故に死し。三に不平等を避けざる故に死す。後の二種を非時死と名く。

初時に攝する等皆相違せず。

問ふ、『義理の淺深、時の名に違せずとは其意云何。』答ふ、『瑜伽鈔』の中に彼本論所説の時、死と非時死との文を釋すらく、『時とは道理の義、或は時分に應可する義なり。』文。時の言たる本道理の義を兼ね、其旨分明なり。是れ則ち時とは分位相稱尅性の義なり、故に道理に互る。所以に其專する所の者は年月の時を以て名けて三時教と爲すと雖も、其時の言の中自ら三重の道理の義を含む。加之宗家諸教を判するに大に二門有り、謂ゆる頓悟門は唯一時教を立て、頓悟の人は一切の教を聞いて中道を悟るが故に、是れ則ち佛の意、初時に有と説くも中道の有なり、是れ三性の中の依圓の有の故に第二時の空も亦中道の空なり。是れ三性の中、所執の空なるが故に、頓悟の前には三時の別無し。二に漸悟門とは即ち三時教なり。漸悟の人、根漸熟するが故に。有空中道の三時の悟解に其階級有るが故に、佛は要す三重の教を設くるなり。是を以て『阿含』『般若』『深密』等の次第は、専ら是れ漸機の前の教相なり。是故に之を以て三時の本と爲す。然れども時教を安立するの習ひは、教として盡さざること無し。故に必定して『華嚴』等を攝するなり。故に頓悟門には、一代の諸教を皆一時に攝す。漸悟門の中には、一代の諸教を皆三時に攝す。彼此缺くること無く、義道圓滿せり。

【百法】一切諸法を五位百法に分類す。

百法二空

夫れ百法は空執を遣らんが爲に、二無我は有執を遣らんが爲に、施設するなり。先に百

法を論ずるに略して五法と爲しぬ。一には心法なり。梵には質多と云ひ、此に名けて心と

爲す。是れ積集の義、集起の義なり。二には心所有法なり。心は家の所有なれば心所有と

名く。三には色法なり。質礙を義と爲す。四には心不相應行法なり。行は即ち行蘊なり。

行蘊に二有り、謂く、相應行と不相應行となり。今前に簡ぶが故に不相應と名く。五には

無爲法なり。爲とは作の義なり。此法は常住にして造作を離るるが故に名けて無爲と爲す。

此中心王は一切に最勝なるが故に。心所有法は此と相應するが故に。其諸の色法は心王と

心所との所現の影なるが故に。不相應行は心と心所と色との位の差別なるが故に。諸の

無爲法は心と心所と、色と不相應行との顯示する所なるが故に。是の如く次第するなり。

第一に心法とは、略して八種有り。五識起る時は意識必ず起る。意識起る時は五必ず起る。一には眼

識とは眼根に依止して四顯色を縁す。別種の所生なり。三性に通ず。欲と初禪とに在り。

四の所依有り。一には眼根、二には意識、三には末那、四には賴耶なり。若し三量を論ぜ

ば、唯是れ現量なり。相應の心所は三十四有り、然れども同時に爾許く相應するに非ず、

下に明すが如し。二には、耳識とは、耳根に依止して聲を縁じて境と爲す、乃至相應の心

所の數等は上の識に明すが如し。三には鼻識とは、鼻根に依止して香を縁じて境と爲す、

餘は上に説くが如し。但し界繫は唯欲界に在り。四には舌識とは、舌根に依止して味を縁

じて境と爲す。餘は亦上の如し。五には身識とは、身根に依止して觸を縁じて境と爲す。

【四顯色】 青黄赤

白等の色をいふ。

【末那】 第七識の

こと。第六識に區

別せんが爲に末那

識といふ。思量の

義にして恆審思量

を性とし、絶間な

く思量す。

觀心覺夢鈔上

五

吾人の身内の自我と思ふものこれなり。

【三量】 能量（境を量度する心）、所量（心に量せらるる境）、量果（心が境を量度し了りたる結果）を云ふ。

【界繫】 三界の何れかに繫屬して自由ならざること。

【第八】 阿頼耶識のこと。

【有覆性】 第七相應の四煩惱等は是れ染法の故に、聖道を覆障し及び自心を隠蔽す。

【無覆性】 聖道を障へ心性を蔽ひて不淨ならしむること無き無記法をいふ。

【異熟無記】 善惡の業因に依りて感生したる結果のすべて非善非惡の無記性なるをいふ。

【現量】 三量の一直接に外界の事象を覺知することを云ふ。

餘は亦上の如し。但し界繫は眼耳識に同じ。六には意識とは、意根に依止して法に縁じて境と爲す。法とは即ち是れ一切諸法なり、意根とは即ち是れ第七末那なり。別種の所生なり。三性に通じ三界繫に通ず、二の所依有り意根と第八となり。三量に通ず、一切の心所、皆相應することを得。然れども同時に非ず、下に明す所の如し。七には末那識とは此には意識と云ふ。第六には依主なり、此は持業の故に二各別なり。恆に審かに思量すること餘識に勝るが故に、別して末那と名く、別種の所生なり。唯有覆性なり。三界繫に通ず。第八を依と爲す、唯是れ非量なり、但第八の見分を縁じて境と爲す。十八の心所は同時に相應す。八には阿頼耶識とは、此に翻じて藏と爲す。能藏と所藏と執藏の義の故に名けて藏識と爲す。別種の所生なり。唯無覆性なり、無覆性の中に四無記有り、此識は唯是れ異熟無記なり、三界繫に通ず。第七を依と爲す、唯是れ現量なり。三種の境を縁す。種子、五根、器界是れなり。相應の心所は但是れ五數なり。凡そ一切法の能生の種子は皆今此藏識の中に在り。

【第二に心所】 略して六種有り。心主起る時心所必ず起る、心所起るへんせやうごあり、一切の心中に定んで得べきが故に名けて遍行と爲す。別境に五有り、別別の境を縁じて而も生ずる

ことを得るが故に、名けて別境と爲す。善に十一有り、唯善心の中に生ずることを得べき

が故に、之を名けて善と爲す。煩惱に六有り、性は是れ根本煩惱の攝なるが故に、煩惱の名を得。隨煩惱の中に二十種有り、唯是れ煩惱の等流の性なるが故に、隨煩惱と名く。不

【五遍行】五十一の心所の中、觸、思、作意、受、想、この五をいふ。この五心所は一切の心の起る時、必ず常に俱起するが故に遍行といふ。

【五別境】五位百法中の欲、勝解、念、定、慧の五心所のことにて、各各別別の對境を緣じて起るが故に別境と名く。

定に四有り、善く染等に於て、皆不定なるが故に不定の名を立つ。

遍行の五とは今此五種必定 謂く、一に作意、心を警むるを性と爲す、所縁の境に於て心を引くを業と爲す。別種の所生なり。三性と三界と三量と八識相應とに通ず。然れども其所依と所縁と性界と量との等しき、皆一聚の心王に同ず。二に觸、三和して變異に分別して、心心所をして境に觸れしむるを性と爲す。受想思等の所依たるを業と爲す。別種三性等は、前の法の如し。三には受、順違俱非の境相を領納するを性と爲す。愛を起すを業と爲す。別種生等は亦前の法の如し。此に於て五受を閉す。憂、苦、喜、樂、捨なり。四には想、境に於て像を取るを性と爲す。種種の名言を施設するを業と爲す。餘は亦前の如し。五には思、心をして造作せしむるを性と爲す、善品等に於て心を役するを業と爲す、餘は亦上の如し。

別境の五とは今此五法必ずしも俱起せず或は一、或は二、或は三、一には欲、謂ゆる所縁の境に於て希望するを性と爲す。勤の依たるを業と爲し、別種の所生なり。三性と三界、三量、六識相應とに通ず、七八識を除く。其所依等は一聚の王に同ず。二には勝解、謂く、決定の境に於て印持するを性と爲す。引轉すべからざるを業と爲す。別種所生等は亦前の法の如し。三には念、謂ゆる會て習の境に於て心をして明記して忘れざらしむるを性と爲す。定の依たるを業と爲す。餘は前の法の如し。四には三摩地、所觀の境に於て心をして專注して散ぜざらしむるを性と爲す。智の依たるを業と爲す。餘は亦前の如し。五には慧、謂ゆる所

【善の十一】十一
種の善の心所。信、慚愧、無貪、無瞋、不放逸、精進、輕安のこと。

觀の境に於て簡擇するを性と爲す。疑を斷ずるを業と爲す。七識に通ず、但第八を除く、餘は亦前の如し。

善の十一とは此中輕安を除いて餘一には信、謂ゆる實と徳と能とに於て深く忍じ樂欲し心を淨からむるを性と爲す。不信を對治して善を樂ふを業と爲す。別種の所生唯是れ善性なり。三界繫に通ず、定んで現此に通じ、六識に通ず。七八識を除く。所依等は一聚の心王に同す。二には精進、謂く、善と惡との品の修と斷との事の中に於て、勇悍なるを性と爲す。懈怠を對治して善を勵ますを業と爲す。餘は前の法の如し。三には慚、謂ゆる自と法との力に依りて賢善を崇重するを性と爲す。無慙を對治して惡行を止息するを業と爲す。餘は亦前の如し。四には愧、謂ゆる世間の力に依りて暴惡を輕拒するを性と爲す。無愧を對治して惡行を止息するを業と爲す。餘は亦前の如し。五には無貪、謂く有と有具とに於て著無きを性と爲す。貪着を對治して、善を作すを業と爲す。餘は亦前の如し。六には無嗔、謂く、苦と苦具とに於て恚無きを性と爲す。嗔恚を對治して善を作すを業と爲す。餘は亦前の如し。七には無癡、謂く、諸の理事に於て明解するを性と爲す。愚癡を對治して、善を作すを業と爲す。餘は亦前の如し。已上の三法を三善根と名く。八には輕安、謂く、蠶重を遠離して身心を調暢し、堪任するを性と爲す。憒沈を對治して轉依するを業と爲す。餘は亦前の如し。但し二界に在りて欲界に於て無し。九に不放逸、精進と三善根と斷修する所に於て防し修するを性と爲す。一切の世出世間の善事を成滿するを業と爲す。別の種子無し。

【掉舉】 廿隨煩惱の一、心所の名。心を浮き擧がらしむる精神作用のこと捨の對なり。

【六煩惱】 六種の根本煩惱のこと。貪、嗔、慢、癡、疑、惡見のこと。

三界に通ず。餘は上の法の如し。十には行捨、謂く、精進と三根と心をして平等正直無功用に住せしむるを性と爲す。掉擧を對治して靜住するを業と爲す。亦別種無し。餘は亦前の如し。十一には不害、諸の有情に於て損惱を爲さず、嗔無きを性と爲す、能く害を對治して悲愍するを業と爲す。別の種子無き等は亦前の法の如し。無嗔は是れ慈、不害は即ち悲なり。

煩惱の六とは、此六は、之を開きて、十煩惱と名く。下に明にする所の如し。此煩惱は或は俱起すに無明起るに餘は必ずしも起らず、一に貪とは、謂ゆる有と有具とに於て染著するを性と爲す、能く無貪を障へて苦を生ずるを業と爲す。別種の所生なり。不善と有覆との二性に通じ、三界繫に通じ、三量に通じ、七轉識に通じ、第八識を除く、所依等は、一聚の心王に同ず。二に嗔とは、謂ゆる苦と苦具とに憎恚するを性と爲す。能く無嗔を障へ不安と惡行との所依たるを業と爲す。別種の所生なり。唯是れ不善なり。唯欲界に有り。三量に通ず。六識に通じて七八識を除く。所依の緣等は亦心王に同ず。三に慢とは、謂ゆる己を恃んで他に於て高擧するを性と爲す。能く不慢を障へ苦を生ずるを業と爲す。別種の所生なり。不善と有覆無記とに通じ、三界繫に通ず。定んで現量に非ず。六七識に通ず。五八識を除く。餘亦上の法の如し。所依等は亦一聚の王に同ず。此中に於て七慢と九慢とを閉す。四に無明とは、謂く、諸の理事に於て迷暗なるを性と爲す。能く無癡を障へ一切雜染の所依たるを業と爲す。種子と三性と界繫とは上に同ず。三量に通じ七轉識に通ず。第八識を

【彼に】 我執の見を指す。

【二十隨煩惱】 枝末煩惱ともいふ。根本煩惱の十惑に隨從して起る煩惱なり。

除く。所依等は亦一聚の王に同ず。五に疑とは、謂ゆる諸の諦と理とに於て猶預するを性と爲す。能く不疑の善品を障ふるを業と爲す。三性と界とは亦上に同ず。定んで現比に非ず。唯第六に在り。餘は上の法の如し。六に不正見とは、諸の諦と理とに於て顛倒推度する染慧を性と爲す。能く善見を障へ苦を招くを業と爲す。別の種子有ること無し。性と界とは亦止に同ず。唯是れ非量なり。唯六七に在り、五八識を除く、餘は亦上の如し。開きて五見と爲す。今此五見は必ず俱に起らず。一には、薩迦耶見とは、謂く、五取蘊に於て我我所を執す、一切の見趣の所依たるを業と爲す。二邊執見とは、謂く、即ち彼に於て隨つて斷と常とを執す、處中の行の出離を障ふるを業と爲す。三に邪見とは、謂く、因と果と作用と實事とを謗し、及び四見に非ざる諸餘の邪執なり。四に見取とは、謂く、諸見及び所依の蘊に於て執して最勝にして能く清淨を得ると爲す。一切の鬪諍の所依たるを業と爲す。五に戒禁取とは、謂く、諸見に隨順する戒禁と、及び所依の蘊とに於て執して最勝にして能く清淨を得ると爲す。無利の勤苦の所依たるを業と爲す。

隨煩惱の二十とは此二十の中或は俱に起る有り、或は俱に起らざるあり、下に分別するが如し。一に忿とは、謂ゆる現前不饒益の境に對するに依りて、性と爲す。能く不忿を障へ杖を執るを業と爲す。是れ嗔の分位なり。別の種子無し。唯不善性なり。唯欲界繫なり。定んで現量に非ず。唯第六に在り。所依の緣等は一聚の王に同ず。二に恨とは、謂ゆる忿を先と爲すに由りて惡を懷いて捨てずして怨を結ぶを性と爲す。能く不恨を障へ熱惱するを業と爲す。亦嗔の分位なり。別種無き等

【追觸】 往惡の違

縁。【暴熱】 はらぐろ

【很戾】 ねじかへ

【邪命】 よこしま

の方法を以て活命

すること。

【殉】 求むと訓む

は上の法に同ず。三に惱とは、謂ゆる忿恨を先と爲し、追觸に暴熱して很戾するを性と爲す。能く不惱を障へ蛆螫するを業と爲す。亦嗔の分位なり。別種無き等は亦前の法に同ず。

四に覆とは、謂ゆる自作の罪に於て利譽を失はんことを恐れて隠藏するを性と爲す。能く不覆を障へ悔惱するを業と爲す。貪と癡との分位なり。別の種無き等は亦上の法に同ず。

五に誑とは、謂ゆる利譽を獲んが爲に矯りて有徳を現じ詭詐するを性と爲す。能く不誑を障へて邪命するを業と爲す。不善と有覆無記とに通ず。欲と初禪とに通ず。餘は亦上に同ず。

六に諂とは、謂ゆる他を網さんが爲の故に矯りて異議を設け、險曲するを性と爲す。不諂と教誨とを業と爲す。餘は亦上に同ず。七に憍とは、謂ゆる自の盛時に於て深く染著を生じて醉傲するを性と爲す。能く不憍を障へ染の依たるを業と爲す、是れ貪の分位なり。

三界に通ず、餘は亦上に同ず。八に害とは、謂ゆる諸の有情に於て心に悲愍無く損惱するを性と生ず。能く不害を障へ逼惱するを業と爲す。是れ嗔の分位なり。唯不善性なり、

唯欲界繫なり。餘は亦上に同ず。九に嫉とは、謂ゆる自の名利を殉めて、他の榮に耐へず、妬忘するを性と爲す。能く不嫉を障へ憂感するを業と爲す。餘は亦上に同ず。十に慳とは、

謂ゆる財と法とに耽著して、惠捨すること能はず。祕愔するを性と爲す。能く不慳を障へ鄙畜するを業と爲す。是れ貪の分位なり。餘は亦上に同ず。已上の十法は各別に起る。十一に

無慚とは、自と法とを顧みずして賢善を輕拒するを性と爲す。能く慚を障礙して、悪行を生長するを業と爲す。別種の所生なり。唯不善性なり。唯欲界繫なり。三量に通じ六識

生

長

す

る

を

業

と

爲

す。

【毘鉢舍那】觀と
識ず。是れ慧なり

に通ず、七八識は除く、所依等は一聚の心王に同ず。十二に無愧とは、世間を顧みず。暴
 悪を崇重するを性と爲す。能く愧を障礙して悪行を生長するを業と爲す。餘は上の法の
 如し。已上の二法は不善に遍ず。十三に不信とは、實と徳と能とに於て忍びて樂欲せず。心を
 穢さしむるを性と爲す。能く淨信を障へ惰の依たるを業と爲す。別種の所生なり。不善と有
 覆無記とに通ず。三界繋に通ず。通じて七識に在り。第八識を除く。餘は上の法に同ず。
 十四に懈怠とは、善と悪との品の修と斷との事の中に於て懶惰なるを性と爲す。能く精進
 を障へ染を増すを業と爲す。餘は亦上に同ず。十五に放逸とは、染と淨との品に於て防修
 すること能はず、縱蕩なるを性と爲す。不放逸を障へ惡を増し善を損ずるの所依たるを業
 と爲す。懈怠と貪と嗔と癡との四の分位なり。別の種子無し。餘は亦上に同ず。十六に惰
 沈とは、心をして境に於て無堪任ならしむるを性と爲す。能く輕安と毘鉢舍那とを障ふる
 を業と爲す。別種の所生なり。餘は亦上に同ず。十七に掉擧とは、心をして境に於て寂靜
 ならざらしむるを性と爲す。能く行捨と奢摩他とを障ふるを業と爲す。餘は亦上に同ず。
 十八に失念とは、諸の所縁に於て明記すること能はざるを性と爲す。能く正念を障へ散
 亂の所依たるを業と爲す。念と癡との分位なり。別の種子無し。餘は亦上に同ず。十九に
 不正知とは、所觀の境に於て謬解するを性と爲す。能く正知を障へ毀犯するを業と爲す。
 慧と癡との分位なり。別の種子無し。餘は亦上に同ず。二十に心亂とは、諸の所縁に於
 て心をして流蕩せしむるを性と爲す。能く正定を障へ惡慧の所依たるを業と爲す。別種

【不定の四】心所六品の一。其性質、善にもあらず、悪にもあらず、廣く善惡無記の三性に通じて、而も亦彼大地法の如く、一切の心に必ず伴隨して起るにもあらずる心所の總稱なり。

【色法】五爲の一變壞質礙の二義を有するものを總稱す。唯識宗では、五根、五境、法處所攝色の十一に分つ【獨頭】獨頭意識とも云ふ。前五識に伴はずしてただ第六識のみ單獨に働くこと。

の所生なり。餘は亦上に同ず。上の入法は染心に遍するが故に大隨惑と名く。染心と言ふは不善と有覆となり。

不定の四とは此四法の中初の二法及び後の二の隨一は或時俱に起らず。一に睡眠とは、謂く、不自在味略ならしむるを性と爲す。觀を障ふるを業と爲す。別種の所生なり。三性に通ず。唯欲界繫

なり。定んで現量に非ず。唯第六に在り。所依の緣等は一聚の心王に同ず。二に惡作とは、所作の業を惡うて追悔するを性と爲す。止を障ふるを業と爲す。餘は亦上に同ず。三に尋

とは、謂ゆる心をして忽遽にして意言の境に於て、麤に轉ぜしむるを性と爲す。思と慧との分位なり。別の種子無し。欲と初禪とに通じ三量に通ず。餘は亦上に同ず。四に伺とは、

謂ゆる心を忽遽にして意言の境に於て細に轉ぜしむるを性と爲す。中間禪に通ず。餘は亦上に同ず。此二俱に安不安に住する身心の分位の所依たるを以て業と爲す。

第三に色法とは、略して十一種有り。一に眼とは、謂ゆる照了導の義なり。分位の法に非ず、別種の所生なり。眼識の所依、賴耶の所變なり。第六意識、或時は亦此に依り、或

時は亦之に緣す。謂く、五識と俱なる意識は此に依り獨頭は之を緣す。本質皆是れ賴耶の所變なり。二に耳とは、謂ゆる能聞の義なり。耳識の所依なり。自餘は上に同ず。三に鼻

とは、謂ゆる能觸の義なり。鼻識の所依なり。四に舌とは、謂ゆる能嘗の義なり。舌識の所依なり。五に身とは、謂ゆる積集と依止との二義なり。身識の所依なり。一一の餘義は

眼耳根に同ず。己上の五法を名けて五根と爲す。根とは増上出生の義なり。眼等の識と

のみに。

謂伺は一時同用なり。唯塵を異

なり。

なり。

なり。

なり。

なり。

なり。

【四大種】堅、濕煖、動を性となす

【有情】情識を有するもの。一切の生類の總稱。衆生に同じ。
【極迥色】法處所攝色の一。假色を分析して極微となしたる色を云ふ。

威勢を作すが故なり。六に色とは、謂ゆる、一には顯色なり、謂く、青黄等は分位の法に非ず、各別種より生ず。其本質は頼耶所變なり。影像は即ち是れ眼識の所變なり。第六意識も或時は亦緣ず。二には形色なり、謂く、長短等なり。三には表色なり、謂く、行住等なり。今此形と表とは、別の種子無し。第六識の境なり。七には聲なり、謂ゆる因執受と因不執受と及び因俱生と可意と不可意と俱相違となり。今此六種は皆別種有り。分位の法に非ず。其本質は第八の所變なり。影像は即ち是れ耳識所變なり。第六識も或時は亦緣ず。八には香なり、謂ゆる好惡平等の三なり。皆別種子有り、其影像は鼻識の所變なり。餘は上の法に同ず。九には味なり、謂ゆる苦と酢と辛と甘と鹹と淡等の味なり。皆別種有り、其影像は舌識の所變なり。餘は亦上に同ず。十には觸なり。謂ゆる地、水、火、風を四大種と名く。各各別の能生の種子有り。此四大は餘の諸色を造す。四塵五根は並に此所造なり。故に能造と名く。影像は即ち是れ身識の所變なり。滑澁輕重等は四大種の分位なり。別の種子無し。第六に之を緣ず、餘は亦上に同ず。已上の五法を名けて五境と爲す。亦五塵と名く。此に内外有り、内は即ち是れ有情の依身なり。外は即ち是れ器界の體なり。十一には法處所攝の色なり。此に五種有り、極略と極迥と及び受所引と遍計所起と定所引と是れなり。此中四色は定んで假法なり。別の種子無し。定所引の色は假有り、實有り、實は別種より生ず、假は別種無し。此五種の色は皆是れ第六所緣の境なり。其定果の實色は、亦眼等の所緣なり。概略色とは、即ち是れ極微なり。極迥色とは、即ち空界の色なり。

【心不相應行法】五位の一。心法にも色法にもあらざる有爲法の稱。唯識宗では、二十四種に分ちて假法とす。

受所引とは、即ち是れ無表なり。遍計所起とは、即ち是れ月、鏡、像、等なり、定所引とは、定力所變の五塵等なり。

第四に心不相應行法とは略して二十四種有り。一には得なり、謂ゆる獲成就の義なり、色心の分位なり。別の種子無し。第六識の境なり。二には命根なり。謂く、即ち是れ住持決定の義なり。阿頼耶識能生の種子の位なり。餘は上の法に同ず。三には衆同分なり。謂く、相似の義なり。有ゆる有情類の身心の分位なり。四に異生とは、生の下恐らく、即ち聖道非得の義なり。三界の見惑の種子の分位なり。五に無想定とは謂く、即ち身をして安和せしむるの義なり。是れ能厭の心の種子の分位なり。但外道所修の無想定なり。唯六識を滅す。六に滅盡定とは、謂く、亦心身をして安和せしむるの義なり。亦能厭の心の種子の分位なり。是れ聖者の所修の無想定なり。通じて六識と染行の末那とを滅す。七に無想事とは、謂く、即ち酬因の義なり。彼天の第六報心の種子の分位なり。八に名身とは、謂く、即ち能く自稱を詮するの義なり。聲塵の分位なり。此に一名と二名と多名と有り。九に句身とは、謂く、即ち能く差別を詮する義なり。亦聲の分位なり。此に一句と二句と多句と有り。十に文身とは、謂く、名句の二の所依の義なり。亦聲の分位なり。此に一字と二字と多字と有り。十一に生とは、謂く、本無今有是れ生の義なり。色身の分位なり。十二に老とは、謂く、凝然に非ざる義なり。亦色心の分なり。十三に住とは、謂く、暫有用の義なり。亦色心の分なり。十四に無常とは、謂く、後無の義なり。亦色心の分なり。

【心不相應行法】五位の一。心法にも色法にもあらざる有爲法の稱。唯識宗では、二十四種に分ちて假法とす。

【感赴】 應報の義なり。

【無爲法】 爲は爲作造作の義。本來常住にして、何物にも造作せらるることなき法をいふ

十五に流轉とは、謂ゆる因果不斷の義なり。亦色心の分なり。十六口定異とは、謂く、善惡因果五相差別の義なり。亦身色の分なり。十七に相應とは、謂ゆる因果感赴の義なり。亦色心の分なり。十八に勢速とは、謂ゆる諸行迅疾の義なり。亦色心の分なり。十九に次第とは、謂ゆる編列序有るの義なり。亦色身の分なり。二十に方とは、謂く、即ち是れ處所分齊の義なり。色法の分位なり。二十一に時とは、謂ゆる尅限稱可の義なり。亦色心の分なり。二十二數とは謂ゆる諸法度量の義なり。亦色心の分なり。二十三に和合性とは、謂ゆる即ち是れ相乖違せざるの義なり。二十四に不和合性とは、謂く、即ち上の和合性に礙するの義なり。此二十四は皆別種子無し。第六識の境なり。

第五に無爲法とは、略して六種有り。前の九十四法の性なり。一に虚空とは、謂く、諸の障礙を

離るるが故に、虚空と名く、此に二種有り、一に識變に依る、即ち是れ心所變の虚空無爲の相なり。相似の故に名く。實は有爲なり。二に法性に依る、即ち是れ眞理なり。心變の

相に非ずして實の無爲なり。二に擇滅とは、謂く、簡擇力に由りて、諸の雜染を滅して究竟證會するが故に擇滅と名く。此に二種有り、一には識變に依る即ち是れ心所變の擇滅

無爲の相なり。餘は上の法に同ず。三に非擇滅とは、擇力に由らずして本性清淨に或は縁闕所顯の故に、非擇滅と名く。此に二種有り。一には識變に依る。即ち是れ心所變の非

擇滅無爲なり。餘は亦上に同ず。四に不動とは、謂く、苦樂受滅するが故に不動と名く。第四禪の中の所顯の法なり。二種は上に准ず。五に相受滅とは、謂く、相受行せざるを相

受滅と名く。滅盡定の中の所顯なり。二種は上に准ず。此五は皆眞如に依りて假立す。六に眞如とは、謂く、理は妄倒に非ざるが故に眞如と名く。眞とは、謂く、眞實にして虚妄に非ざることを顯すなり。如とは、謂く、如常にして變易無きことを表すなり。二種は上に准ず。眞如も亦是れ假の施設の名なり。

問ふ、『煩惱、所知の二障とは云何。』答ふ、『煩惱障とは、即ち上に明す所の諸の煩惱なり。所知障とは、諸の煩惱の中一一皆有り。謂ゆる用に迷ふを名けて煩惱と爲す。其の法體に迷ふを所知障と名く。是故に二障には別體無し。其用に迷ふ分は、即ち發業潤生の用有り。有情を擾惱して生死に輪廻せしむるが故に、煩惱と名く。其體に迷ふ分は、發業潤生の用有ること無し。但是れ所知の境界を隱覆して菩提を得ざらしむ。所知障と名け亦知障と名く。是故に煩惱障は眞の涅槃を障ふ。其所知障とは、大菩提を障ふ。彼は是れ生空智の所斷なり。此は是れ法空智の所斷なり。聖道の功力に分限有るが故に、分つて二障と爲す。而も實には、同體なり。六煩惱に約して、正しく其相を明せば且く貪の中に就いて一有情に對して、貪愛を起す時、其假者を愛するを名けて煩惱と爲す。其法體に著するを名けて所知と爲す。五蘊は是れ體、假は是れ用なり。五蘊の法體聚集和合して常一主宰の用に相似するを有情と名くるが故に。若し五蘊如幻虚假なりと解せば、豈此法の和合する假者に於て貪愛を起さんや。法體に迷ふが故に、遂に假者に迷うて此愛著を生ず。當に知るべし、煩惱は必ず所知に依りて起ることを得。故に此貪の中に必ず智障有り。自

【五蘊】色、受、想、行、識の稱。

餘の諸の煩惱も一一皆此の如し。問ふ、『煩惱の中に於て見修の惑有り。何者か見惑にして、何者か修惑なる。』答ふ、『分別起の者は見道所斷なり、俱生起の者は修道所斷なり。麤は斷じ易きが故に見道に彼を斷じ、細は斷じ難きが故に修道に此を斷ず。十煩惱の中に疑と後の三見とは、唯分別起なり。故に唯見惑なり。所餘の煩惱は一一二に通ず。謂ゆる貪中の分別の貪とは即ち見の所斷なり、俱生の貪は是れ修の所斷なり。餘の嗔慢等も皆准らへて知るべし。』問ふ、『所知障の中に亦是の如き見修の差別有りや。』答ふ、『亦此別有り。謂く、見所斷の煩惱の中の所知障は即ち見所斷の所知障なり。修道所斷の煩惱障の中の所知障とは即ち修所斷の所知障なり。此は菩薩に移して而も論ずる所なり。二乗は、所知障を斷ぜざるが故に。但し定障に於て稍相濫有り、然るに實には斷ぜず。但是れ折伏なり。』問ふ、『其煩惱に於て何者か不善にして何者か有覆なる。』答ふ、『上界の煩惱は、皆是れ有覆なり。欲界の惑の中に分別起の者は、唯是れ不善なり。俱生起の中惡行を發す者は、亦唯不善なり。所餘は有覆なり。其所知障は一切有覆なり。不善に通ぜず、但二乘に望めば復無覆と名く。彼障に非ざるが故に。』百法。

次に二空とは、百法の上の一切の妄執を遮す即一には、生空即ち是れ補特伽羅無我なり。補特伽羅を數取趣と名く、是れ人我の名なり。人我と言ふは、即ち是れ主宰自在の義なり。然るに堅實の主宰自在無きが故に、無我と云ふ。我は即ち是れ生なり、無我は即ち空なれば、亦生空と名く。二には法空、即ち法無我なり、法とは軌持なり。軌とは謂く、軌範な

【一】以下十七箇の問答有り。初の四問答は生空を明す。今此問は顯相に就きて示す。

【二】二、世間の聖教に就きて明す

り。物解を生ずべし。特とは謂く、仕持にして自性を捨てず、然るに堅實の自性勝用無ければ法無我と名く。無我は即ち空なれば亦法空と名く。

(二)と問ふ、『現に世間を見るに諸の有情有りて、人畜等の狀、宛然として眼に當る。今無我と言ふ誰人か信ぜんや。』答ふ、『言ふ所の我人とは何を以てか體と爲す。若し色を以て體と爲すとせば、色何んが是れ無常なるや。亦何んが病苦有るや。若し是れ我ならば應に自在なるべきが故に、餘の耳鼻等は皆應に准らへて知るべし。若し長短等を以て體と爲せば、長短は即ち是れ色塵の分位なり。別の體性無し。餘の滑澁等の觸塵等の分も亦應に准らへて知るべし。若し心を以て體と爲すとせば、心何んが是れ無常なるや。亦何んが其苦有るや。八識の心王五十一の心所、一一是の如し。若し爾らば我の言の目くる所の體は是れ何物なるや。頭より趺に至り、皮より體に至り、六腑五臟骨肉脈等、一切の諸物、乃至有ゆる種種の心識念念等の中に、一一推求するに我人の名言の目くる所の實體は終に得べからざるなり。畢竟都て無にして但是れ無常苦不自在の色聲香等なり。故に無我と云ふ。』

(二)と問ふ、『若し爾らば何が故に世間と聖教とに我人有りと説く。世間の我は、謂く、有情命等、聖教の我は、謂く、預流一來等なり。若し都て其體無くんば、是の如く施設する所、何に依りて起るや。世間の所説は、設ひ迷謬なりと雖も其聖教の呼ぶ所、豈都て無ならんや。何に況んや其世間迷情に於ても若し所由無くんば、起るべからざるをや。』答ふ、『世間と聖教との施設する所は、但假に由りて立す。實有性に非ず。其假立とは、即ち識所變の

【三】三、前後の相違を會す。

【四】四、似我の義を詳かにす。

【四大】地、水、火、風なり。

五蘊諸法聚集和合して作す所の功能なり。假に常一主宰の物有るに似たり。此相似の分を説いて假我と名く。若し此分を撥無せば、還つて是れ損減の執なり。若し此分を増せば、即ち是れ増益の執なり。當に知るべし、我人は假有實無なり。假有を觀するが故に、大悲之を救うて覺岸に到らしむ、實無を悟るが故に、大智之を泯して能く眞理を顯す。然るに諸の愚夫は無始より以來、此相似に迷うて定めて眞實と謂ひ、此情解を呼んで、即ち有情命者等の言を説く。是れ即ち世間所執の我なり。而るに諸の聖者は此相似を悟りて、堅實と謂す、此假我を呼んで即ち預流一來等の言を説き、是を聖教所説の我と爲すなり。』

問ふ、『若し爾らば何が故に前に都て人我の體無しと言ふや。』答ふ、『前には堅實を遮して、假似を遮せず。何に況んや此假は猶是れ法の用にして實には法に屬す。法の外には都て無なり。故に無我と云ふや。』

問ふ、『五蘊和合して常一等に似たりとす。其義猶闇し。乞ふ也詳に明せ。』答ふ、『五根五塵心心所等、若し和合せずんば寧ぞ人等の相狀功能有らん。和合を以ての故に此相用あり。然るに此相用は法の外に體無し。但是れ色心一一の功能は和合に由るが故に、是の如き常一主宰自在の相有るに似たり。所以に聖教には此似分を呼んで即ち假と名くるなり。重たる意に云はく、人有り斧を以て其樹等を伐るに、形貌身體威勢動作は泛爾の色香等の分に越ゆるに似たり。而るに實は越えず。所以は何ん。斧を振ふの動作は是れ四大の用なり。即ち觸塵に在り。動かんと欲するの加行は、即ち欲思等是れ心心所なり。手足等の形

【五】以下の八箇問答は法空を明す今此問は法無我の名を釋す。

【眞門】眞實の法門なり。

【六】二、法無我の理を明す。
【四緣】因緣果のうち、緣を四種に分つ。因緣、等無間緣、所緣緣、増上緣なり。

は、即ち是れ形色色塵の分位なり。總體とは即ち是れ五蘊の諸法なり。其外に物無し。方に知りぬ、但是れ五蘊和合して假に是の如きの一物有るに似たるのみ。若し合せざれば此分有ること難し。合するが故に是の如し。言深く之を思惟して増損すべからず。若し中を得れば還りて有無を滑ず。四句斯に絶し、百非悉く亡す。今此眞理、是を生空の廢詮勝義と名く。其能顯門とは即ち是れ補持伽羅無我なり。

問ふ、『若し爾らば無我なりと雖も、而も法體實有なり。更に何の道理有りて亦法無我を立つるや。又法無に於て猶無我と云ふは其意如何。』答ふ、『法體を有と稱ふるは、且く人我に對す。我空に入らしめんが爲に、六二の法を説くとは、是義か。即ち是れ法中の世俗施設なり。若し眞門に入れば、五根、五塵、心王、心所、一切夢の如し。非有似有なり。都て堅實の自性用無し。但是れ依他衆緣所成虚假の事相なり。是の如きの色心緣生の道理の眞實如常不生不滅なるを即ち無爲と名く、更に堅實別體の無爲無し。既に堅實の有爲無爲無きが故に法空と名く。但し無我とは、自然を遮するなり。自然は即ち是れ我の義なるが故なり。』

問ふ、『人我の體性は求むるに得べからず。其理然るべし。五蘊の法體は其事顯然たり。見るべく聞くべし、乃至識知の體性作用一一皆存す。今説いて空と爲す。豈信することを得んや。』答ふ、『法體は無量なりと雖も皆是れ四緣の作なり。心法は四を具して生じ、色法は二に由りて起る。緣起の道理も亦是事の家の理なり。既に自然の性無し、誰か自性有りと

【七】三、龜顯の事に約説す。

言はん。

問ふ、『若し爾らば今見聞覺知する所の諸の色聲等は、其體是れ何ん。』答ふ、『是れ他所作なり、自體性無し。他とは即ち是因縁等なり。此諸縁の爲に生起せらる。事の四縁具足する者は、即ち縁慮の事成ず。二縁和合する者は、即ち質礙の事成ず。其縁慮の中、八識差別す。其質礙の中、五塵等同じからず。各一一皆分に應ずるの縁具足するの時、彼事相差別して生ずるが故に、見聞等の境同じからざるなり。今空と言ふは無自性を指す、寧ぞ信ぜざらんや。』

【八】四、有部の因縁に簡ぶ。

問ふ、『薩婆多等皆四縁六因等の法を立つ。然りと雖も三世の諸法、恆有にして全く如幻空不可得に非ず。今四縁所成なるが故に空なりと言ふは、其義未だ明ならず。』答ふ、『餘乘の所執は唯識を知らず、四分を立てず、頼耶を信ぜず。頼耶無きが故に、親因縁無し。親因縁無きが故に、疎縁も亦成ぜず。縁既に成ぜざるが故に、縁生實義無し。既に實義無きが故に四縁生と云ふと雖も、還つて自然生に墮す。故に法體恆有といふ。當に知るべし、法空は唯識に由りて成ず。法空に入らしめんが爲に復唯識を説くとは、此意なり。』

【九】五、因縁亦假なるを明す。【因縁所生法我説即空】中論に出づ。

問ふ、『法は縁より生ずるが故に無自性と名けば、其能生の縁は是れ自然に有と爲らんや。若し爾らば其法は無我に非ざるや。』答ふ、『縁も亦縁より生ず、其縁も亦是の如し。是故に一切法一切皆無我なり。展轉して皆因縁より生ずるが故に、因縁所生法我説即空とは其理誠なるかな。』

【二〇】六、諸法の假實を辨ず。

【二一】七、世間と聖教とに違するを會す。

(一〇)と問ふ、「若し爾らば諸法一切虚假なり。假實種種の差別無かるべし。何が故に前に色心等の中に假實有りと言ふや。」答ふ、「此問は非なり。今虚假如幻如梦と言ふは、眞門に推入する空理の談なり。若し世諦道理門に依らば、自ら種子有りて生ずる所の諸法を、多分に分けて有爲實法と爲す。今此位には等しく皆假法と名く。全く相違せず。」

(一一)と問ふ、「眞門に推入するとき皆無我ならば、何が故に世間及び聖教の中に法體有りと説くや。世間の法とは、實徳業等なり。聖教の法とは、蘊處界等なり。若し都て自性無くば、豈此の如く説かんや。」答ふ、「世間聖教所説の法とは、但假に由りて立す。實有性に非ず。其假立とは、即ち識所變の五蘊の諸法なり、色に非ざれども色に似、心に非ざれども心に似、其相似とは即ち是れ假法なり。然るに諸の愚夫は、無始より以來此似に迷うて、執して堅實の色聲香等と爲し、己が情解を呼んで色聲香味等の言を説く。即ち是れ世間所説の法なり。大聖之を惑みて此虚假を悟りて、義を以て體に依せて、便ち色聲等の種種の法を説き、是を聖教所説の法と名くるなり。是故に諸法は假有實無なり。假有を悟らざれば損減の執を起す。實無を悟らざれば、増益の執を起す。深く之を思惟して増損すべからず。若し中を得已れば空有皆遣る。四句百非一切悉く亡す。此無相を指して名けて法空と爲す。此空を門と爲して顯す所の眞理は其體空に非ず、名言道斷す。是を眞如と名く。此の如き微妙にして分別するも及ばず。是れ即ち法空の廢詮勝義なり。前の生空門は、即ち此空の中の方便の一門なり。其眞如は即ち此眞如の一分の義邊なり。今此二空所顯の眞如は、

【二】八、無自性の義を詳す。

即ち是れ前の百法の中の無爲なり。此能顯の空は、即ち是れ今言ふ二空是れなり。空とは、單空に非ず。空有皆空無なる是れ今の謂ゆる空なり、即ち中道の故に一異俱不俱等有ること無し。空花等の如く性相都て無なり。此れ都て無なりとは即ち此れ空なり。深く之を思ふべし。」

問ふ、『若し爾らば前に無自性を以て法空と名くと言ふは、豈相違せざらんや。無自性とは、單空なるべきが故に。』答ふ、『誰か言ふ無自性は是れ單無の無なりと。自然性を遮すと雖も、全く他作を妨げず。他作を妨げざるが故に、縁生を離れざる無なり。其縁生法とは即ち是れ假有なり。既に假有を離れざるの無自性なるが故に、無自性と云ふと雖も偏無の無に非ず。有相無相は俱に不可得の無性なり。般若皆空とは、即ち此義なり。』

問ふ、『假我假法二種の假は其義齊しきや。』答ふ、『假法は假なりと雖も其體即ち法なり。假我は、我と雖も其實は我に非ず。實は是れ法の用の相似分の故に。此義に由るが故に、理實もて言はば但假法有りて都て我相無し。故に假我の假は假の義更に増す。増すと雖も亦全く相似無きに非ず。若し之を撥無せば、亦大邪見なり。偏執の人恐らくは解し難からんか。』

【二】二、二我の同異を論ず。

問ふ、『其法無我と人無我との二種の我は其義齊しきや。』答ふ、『夫れ我と言ふは即ち是れ主宰自在の義なり。設ひ法我なりと雖も豈都て之を廢せんや。但し人我は此義更に増して其相甚だ顯なり。法我の義分は、此義微細にして其相甚だ隱る。然る所以は、色聲香等の

【三】以下の五箇問答は雙べて二空を明す。中、初に二假の同異を辨ず

【二五】三、觀門の通局を分別す。

【二六】四、生空唯識の二觀を辨ず。

【二七】五、單の生空觀を明す。

一一の法體は幻の如く緣生して本主宰に非ず。然れども其虛假の軌持の體用念念生起し、相續流來して、微細に自然の物有るに相似す。謂ゆる色に非ずして、假に色に似たる等なり。此分に迷つて執して實有の色聲等の法と爲るを法我見と名く。此分は直に常一主宰の我と云ひ難し。五根五塵心心所等各別別なれば、虛假相似の自在の勢力甚だ微隱なるが故に、而も此等の法、和合共成すれば、彼一一の用互相に資助して、極めて一體の者有り、衆緣を待たずして、長時常住にして、自力もて獨り存するに相似す。割斷自在の威力強勝なり。此分に迷うて執して、實有の人畜等の物と爲るを、人我見と名く。此分は即ち是れ常一主宰増勝の我なり。故に二種の我は齋等に非ざるなり。』

問ふ、『諸の唯識觀は皆法空觀なりや、諸の空觀は皆唯識觀なりや』答ふ、『諸の法空觀は皆唯識觀なり。唯識觀は皆法空觀なるに非ず。何を以ての故に。生空の唯識觀有るを以ての故に。』

問ふ、『若し爾らば生空觀は皆唯識觀なりや。』答ふ、『生空觀の唯識觀に非ざる有り。謂ゆる二乘の生空觀なり。』

問ふ、『菩薩所修の單の生空觀、若し唯識ならば、其義云何。』答ふ、『假我假法俱に識變に依るが故に、皆唯識なり。上に述べ畢りしが如し。識所變とは、相見二分なり。四分の義は下に明す所の如し。』

四分安立

【四分安立】心識が正しくその認識作用を起す時、心識の中に能縁、所縁の四種の差別を生ずるをいふ。相分見分、自證分、心證分なり。心證分起る時この四分必ず并起し、相分を見分が縁じ見分の作用を自證分が證知し、自證分の證知を自證分が證知し、かくして初めて、認識作用が成立すとす。總じて四分の綱領を擧ぐ。

(一) 問ふ、「八識の心王と及び諸の心所との所縁の境は、若し能縁の外別に體有りや。若し爾りと言はば唯識に違すべし。若し爾らずとせば其體云何。若し即ち是れ心ならば、既に慮と非慮と體用各別なり。如何が即ち心ならん、若し各別なりと雖も、猶即ち心ならば、其理最も難し、恐らくは得べからず。」答ふ、「一切の境界は皆自心の用なり。有爲の萬法、心外に體無し。凡そ厥心は慮知の法なり。若し所知無くんば、何を知りてか心と爲さん。今此縁起、理必然の故に心心所生ずるとき自體轉變して、一の所慮所記の用と爲す。今此所慮の用を、親所縁縁と爲す。是を相分と名く。相分既に現すれば、定めて之を縁する能縁の作用有り、是を見分と名く。見分既に起れば定めて之を知る内縁の作用有り。今此作用を自證分と名く。此用既に起れば亦定めて之を知る内縁の用有り。此用を名けて證自證分と爲す。此用既に起れば亦定めて之を知る内縁の用有り。是れ即ち返りて前の自證分なり。心分既に同じければ、應に皆證すべきが故に。是の如く證知するに其用満足す。故に自證分は見分及び第四分を縁す。是故に第五分を立てざるなり。是の如きの妙理は能く成立し畢んぬ。心と境と慮非慮異りと雖も、皆一心の用にして如幻虛假なり。故に唯識の義能く成立す。其重たる意に云はく、心若し堅實ならば、心は轉じて境と爲し難く、境若し堅實ならば、亦心内と爲し難し。諸法は心より起りて、皆夢境の如くなるが故に、虛假の慮非

【若し心は】 第一の問なり。
【二】 別して立分の旨を論窮す。

【次に設ひ境體】 第二の問なり。

【次に設ひ相】 第三の問なり。

【次に設ひ見分】 第四の問なり。

【設ひ自證分】 第五の問なり。

【次に境は所知】 第六の問なり。

【次に自證分も】 第七の問なり。

【抑も唯識】 第八の問なり。

【色聲の法】 合して第一第二の問に答ふ。

慮實の能所取無し。誰を執してか心外と爲さん。故に一切唯識なり。

問ふ、『若し心は能知の法なるが故に、心轉じて境と爲らば、境は亦所知の法なるが故に、境は轉じて心と爲るや。次に設ひ境體心外に在りと雖も、心起りて之を縁せば知慮の法成す。何んが要す心體轉じて境と爲るや。次に設ひ相現すと雖も、自證直に縁すべく、必ず見分の用を起すは何の深理有るや。次に設ひ見分を起すも心境の二、爰に足りぬ、何んが見分の外に亦自證分を立つることを須ふるや。設ひ自證分を立つるも見分通じて内を縁せば、三分を以て足るべし。何んが第四を立つることを須ひんや。例せば自證分が見と證自證とを縁するが故に、第五を立てざるが如し。次に境は所知なるが故に心定めて縁す、尤も其理有り。其後三分は皆能縁の中の差別なり。何んが強ひて見を知り、乃至亦證自證を知るや。若し知らざれば何の失有りや。次に自證分も亦是れ心用ならば四分皆用たり。何を以て心體と爲すや。抑唯識とは、心外に別法有ること無きの義なり。唯一心を立て、以て宗と爲すべし、心内の法と云ふと雖も猶非心の法を許さば豈是れ心外無別法の教ならんや。』答ふ、『色聲等の法は質礙を體と爲す。定果の色等は無見無對なりと雖も、假令心の所縁たらずと雖も、然も猶色聲等の法爲るべし。故に境體轉じて心と爲るの義無し。諸の心所は、縁慮を體と爲す。假令縁慮せらるる物無くんば何物を縁慮して縁慮の法と爲らん。故に心體轉じて必ず境と爲すなり。是れ即ち縁慮分別の法は、法の中に勝るるが故に、自在の力有り、能く諸法を造る。非縁慮の法は、體性鈍劣なり。豈體轉じて縁慮の用を起す

に堪へんや。但し心外の實境を許さざることは、多くの道理有り。唯識等に外道小乘の實
 我實法を破する種種の文理、即ち皆是れなり。擧げて盡すに違あらず、然るに今且く阿毘
 達磨經中の所説の四智成就菩薩所觀を擧げて、略して其相を示さん。四智と言ふは、一に
 相違識相智、謂く、一處に於て鬼人天等は業の因の力に隨つて、所見各別なり、鬼は見て
 火と爲し、人は見て水と爲し、天は瑠璃と見、傍生は宅と見る。是の如き等の見は種種同
 じからず、境若し實有ならば、豈是の如く能見の者の業因の差別に隨つて種種轉變すべ
 んや。二に無所緣識智、謂く、過去未來夢等の非實の境を緣する時、境は實有に非ざれど
 も心現に可得なり。心若し必ず外境に記して起らば、是の如きの時、其事云何。此を以て
 例して一切の境界を知れ。三に自應無倒智、謂く、若し境體定めて實有ならば一切の凡夫
 は皆應に是れ聖なるべし。本來心外の境を悟證するが故に。若し爾らば功用を假らずして
 自然に解脫を得べし。何んが然らざるや。四に隨三智轉智。謂く、三智とは、一に自在の
 智に隨つて轉ぜらるる智、謂く、已に心自在を證得するの人は、自らの所欲に隨つて水等
 を轉變すること皆能く成ず。境若し實ならば、寧ぞ是の如く心に轉じて、轉變すべけんや。
 二に觀察者の智に隨つて轉ぜらるる智、謂く、勝定を得て法觀を修するは、隨つて一境を
 觀するに青瘀等の相、種種顯現す。境若し實ならば豈是の如く心に隨つて顯現すべけんや。
 三に無分別智に隨つて轉ぜらるる智、謂く、實を證する無分別の智を起せば、一切の境相
 皆現前せず。境若し實ならば、云何が是の如く實を證する智の前に皆現ぜられんや。菩薩

【次に自證分】 第三の問に答ふ。 第四

【次に凡そ】 第四の問に答ふ。

【次に内證の】 第五の問に答ふ。 第一

此四智を成就する時、唯識の理に於て決定して悟入す。是故に心外の境を許さざるなり。次に自證分とは、心還つて自を知るの用なり。豈直に相分の境を縁すべけんや。是故に心の境を縁する作用を起すは、是れ即ち見分なり。若し爾らば自證直に境を縁ぜんとは言ふに足らざるなり。次に凡そ能量所量の法は、必ず量果有り。若し爾らずんば此量知に於て、果成する所無し、豈道理に應ぜんや。是故に是の如く第三分有りて、見分を證知す、見分は能量にして相分を知るなり。譬へば如ま人有りて丈尺を以て絹等を量るの時、絹等は所量、丈尺は能量、人は量果なり。丈尺の能く絹等の物を量ることは其量り成する所にして人證知すればなり。若し其人の證知を引かずんば、丈尺の能量、絹等の所量、何の用か有らん、丈尺の能く絹等を量るの時、人能く丈尺の分齊を證知するが故に、能所量の義、能く成立す。若し、丈尺無くんば、人豈絹等の分齊を知ることを得ん。若し絹等無くんば人又何んが丈尺等を用ふることを爲さん。若し其人無くんば、誰か丈尺能く絹等を量ることを知らん。三分の妙理も亦復是の如し、相分は所量、見分は能量なり。見分能く相分を量るの時は、必ず内に見分の能量を證知す。量知の義此に由りて成立す。若し見分無くんば、心豈色等の境界を知ることを得ん。若し相分無くんば心、縁用を起して、何の所用有らん。若し自證無くんば誰か見分能く相分を縁すと知らん。是故に定めて第三分を立つるなり。次に内證の用は深細なるが故に、必ず現量なり。而るに其見分は是れ外縁の用なり、理、三量に通ず。五八識等の見分現量なり。然るに凡そ見分は三如何が己が

【次に此四分】 第六の問に答ふ。

【次に心微細】 第七の問に答ふ。

【次に唯識とは】 第八の問に答ふ。

【經中】 六十華嚴なり。

内體を知ることを得んや。若し見分現量の時に約せば、爾るべし。見分の比非量の時は、誰か自體を知らん。明らかに知りぬ、見分は本是れ相分を縁する用たるが故に、現量の見なりと雖も、自體を證知するの義得べからず。何に況んや、若し第四分無くんば、第三の能量應に量果無かるべし。豈大過に非ずや。佛果の三通じて四に縁する等。是故に必ず證自證分を立つ。其自證分は既に中間に居して、内縁現量なり。故に見分を知るも亦第四を知り、其義成立す。何んが乃ち例と爲さん。次に此四分は、皆是れ心分なれば皆應に證知すべし、若し爾らずんば一心の中に自ら知らざる所有れば、道理に應ぜず。故に後の三分皆能縁なりと雖も、其中猶是の如きの微細相縁の義有りて、皆所知を成ず。豈深妙に非ずや。次に心微細にして、體相知り難し、只作用を以て之を顯示するのみ。所以に四分皆是れ心用なり。然れども此四分の中に於て、強ひて體用を判ぜば、第三の自證獨り其體に當る。獨り中間に居して普く前後を證す、心の根本の義餘に異なるが故なり。次に唯識とは、諸法の源を尋ねて、有爲の起りを論ず。唯祇一箇の心法にして、都て餘法無きに非ず。是故に萬差の諸法は皆心より起ると許すと雖も、一法として、心内に非ざるもの有ること無し。心内に在りと雖も色聲、水火、眼耳等の法、種種の差別、宛然として存せり。存すと雖も、皆是れ自身より起りて夢境の如くなるが故に唯識と名くるなり。此に由りて應に言ふべし、心内の諸法は皆存す、心外の諸法は諸法皆無し。經中の心外無別法とは、即ち此義なり。此理を知らざる人は、唯心の教文に迷ひて返つて因果撥無の惡見を發す、甚だ悲しむべし。

(三) 問ふ、『今此四分八識に相配するの方如何。答ふ、『八識一一に皆四分有り、相應の心所も一一亦爾り。且く眼識に於て四分を明さば、今此識體生起の時に、第八識所變の色塵を以て疎の所縁と爲すが故に、自體轉じて色の影像を現す。此影像を以て親の所縁と爲すが故に之を縁する能縁の作用を起す。其色の影像を名けて相分と爲し、之を縁する作用を名けて見分と爲す。今此二分は心の自體の上の所現なり。此二用を起す所依の自體を白證分と爲し、自體を證する用を是れ即ち名けて證自證分と爲す、是の如き等の餘識の四分も此に准へて知るべし。五塵の境を以て此の如く眼等の五識に配す、其相顯然たり。第六意識は十八界の諸法を縁じて境と爲し、應に隨つて諸法の影像を變現し、應に隨つて此能縁の作用を起す、是れ即ち第六識の自體の分轉受する所なり。第七末那は、第八識見分を縁じて境と爲す。第八頼耶は、種子、五根、器界の三種の境界を變現す、餘の儀は前に准す。然るに諸後二分は、皆是れ唯現量なり。見分の量は識に隨ひて同じからず。謂く、五八識の一一の見分は一向に現量なり。第七の見分は一向に非量なり。第六の見分は應に三量に通ず、相分は非縁慮なり。故に三量の攝に非ず。相應の四分は之に准へて知るべし。』

(四) 問ふ、『八識聚相分、皆本質有りや。答ふ、『五識と第七とは必ず本質有り。五識は唯第八の相分に託して、三種境の中、器界は五塵を體と爲し、本質と爲すが故に、第七は恆に第八の見分を縁じて本質と爲す。故に第六識の境は本質の有無、時に隨つて不定なり。或時は質有り、謂く、五塵を縁するの時等なり。或時は質無し。謂く、過未及び龜毛等を縁する

の時是なり、第八識の境は一向質無し、先業の力に依りて任運に境を變じて、所杖本質に隨はざる故なり。然るに其疎所縁縁に於ては、有無不定なり。謂く、依身器界は、他有情の變を以て疎と爲し、所縁と正根及び種子は但親の所縁縁のみにして、疎の所縁縁無し。本質の境と、疎の所縁縁と、大旨同じと雖も而れども少異有り、深く之を思ふべし。』

観心覺夢鈔上 終

觀心覺夢鈔中

三類境義

【三類境】認識の對象に三種の別あるを云ふ。性境、獨影境、帶質境なり。

【一】今此一段を分つて二と爲す。

一に三境の頌文を釋す。二に識變を結歸す。

【性境】眞實の境の義。實の種子より生じ、實の體用ありて、心識が如實に、その眞相を緣ずる境のこと。

第八識所緣の境。前五識及び五俱の意識の所緣の境。

【獨影境】第六識が計度分別して變じ出せる境にて、これに本質無き獨影境と、本質を帶ぶる獨影境とあり

前者は第六識が緣ずる空華龜毛の如きものにて、全く本質無き者を、心

問ふ、『諸の心心所の所變の境界に、幾種有りや。』答ふ、『總じて諸經を判するに三類不同なり。』

一には性境。謂ゆる一切は實種より生じて實の體用有り、能緣の心、彼自相を得、其境性を守りて心に隨はざるが故に性境と名くるなり。即ち此中に於て三の不隨有り。

一に性不隨と能緣の心とは必ずしも同性ならず。或は異性なるが故に。性上は善等の三に性不隨と能緣の心とは必ずしも同性ならず。或は異性なるが故に。性に性なり。二に種の不隨と能緣の心とは別の種子の故に。三に繋の不隨と能緣の心とは必ずしも同界同地の繋ならざるが故に。是の如く三不隨を具足する境をば性境と名くるなり。若し其體を指さば即ち五八識所緣の五塵等の境是なり。

二に獨影境。謂ゆる其境と所緣の心とは同一種より生じて實の體用無し。能緣の心、自相を得ず。既に本質無く、影像獨り起るが故に、獨影と名く。即ち此中に於て三の隨心有り。一に性の隨心と能の緣心とは同一なるが故に、二に隨心と能緣の心とは同一種の故に、三に繋の隨心と能緣の心とは同界繋なるが故に。是の如く此三隨心を具足するを獨影と名

く。若し其體を指さば第六識龜毛兎角等を緣ずる相分なり。

の分別力に依りて
變出したるものを
いふ。後者は第六
識が無爲法を緣じ
て變じ出せる相分
にて、實の無爲法
は、不生不滅にて
相分を生ずる力無
きを、第六識の分
別力によりて、無
爲を變緣するをい
ふ。

【帶質境】心識が
本質に對し乍ら、
自己の分別力の爲
に如實に本質の儘
の相分を、浮ぶる
能はず。妄りに變
現したる相分のこ
と。第六、第七二
識の境なり。
【種子】第八識中
に伏在して、自體
の果を生ずる能力
即ち色心萬法の現
象を發現する作用
ある力をいふ。

【熏習】香が物に
その薰りをうつす
如く、或物が他物
に其性を移すこと
【一】種子所生の
法を明す。

三に帶質境。謂ゆる能緣の心は自相を得ずと雖も、而も其境相本質有るが故に帶質境と名く。今此境は既に質有るが故に。應に一向に能緣の境に隨ふべからず。亦既に境の自相を得ざるが故に、應に一向に本質の境に隨ふべからず。即ち此中に於て、亦三種通じて情本の義有り。一には性通情本。或は能緣に隨ひ、或は所緣に隨ひ、性を判すること不定なるが故に。二に種通情本。其種子を以て、或は之を相從して能緣の種と名け、或は之を相從して本質の種と名くるが故に。三に繫通情本。或は能緣と同界繫たりと説き、或は本質と同界繫たりと説く。是の如く三の通情本を具足するを、帶質境と爲す。若し其體を指さば、第七識は第八の見分を緣じて變ずる所の相分等の類是なり。今此相分、若し能緣に隨はば有覆性と名け、若し本質に隨はば無覆性と名く。其種子は、或は能緣の第七の種子に攝し、或は本質の第八の種子に攝す。其界繫は七八二識必ず同繫なるが故に、情と本との界繫は別異ならずと雖も彼此を相從して義を以て之を説くに、同繫に依らず。是故に此三種の義を具するなり。性境の中、心境同種等の種種の疑、是に准へて知るべし。然るに此三境は、皆心の所變なり。故に不隨心をも皆唯識と名く。其源を論ずるが故に、夢境の如くなるが故に。」

種子 熏習

問ふ、「百法の中に於て幾ばくか是れ種子所生の法なるや。」答ふ、「六無爲を除いて所餘

【二】種子の體性を出す。

【習氣】薰習したる氣分の義。唯識家にて種子の異名

【三】種の要義を論議す。此問の中に四有り。一に種の相を問ふ。

の法の中、有ゆる實法、設は心にせよ、設は色にせよ、皆是れ種子所生の法なり。』

問ふ、『今此種子は何を以てか體と爲す。答ふ、『夫れ種子は第八識の中、生果の機能なり。此に二類有り。一に本有種子。謂く、無始法爾に第八識の處に親しく彼の諸法を生ずるに應ずる功能差別有り。是を即ち名けて本有の種子と爲す。二に新熏種子。謂く、七

轉識應に隨ひて熏する所の色心、萬差種種の習氣皆悉く阿頼耶の中に落在して、皆彼識生果の機能を成す。是を即ち名けて新熏種子と爲す。今此新古二類種子俱に具足する時、

必定して自果現行を生ぜしむ。謂く、一處の青色生ずる時の如き、其能生の親因縁の法を尋ぬるに、定めて二種有り。一には無始法爾に今此青色を生ずべき第八識の中、生果の

功能。二には前心の青色を縁するの時、其自心分別の勢力に依りて、相分の中數數熏する所の青色の習氣、本識の中に在りて復彼識生果の機能を成す。自餘の諸法此に准じて知る

べし。』
問ふ、『七轉識の種子を熏するの相、悉く之を成すべし。又業種子と無漏の種子と其體

云何。又唯新熏種子のみ有りて本有種子無きの法有りや。又唯本有種子のみ有りて新熏種

子無きの法有りや。答ふ、『種子熏習の義、甚だ微細なり。其大都を論ずるに七轉識の中勝

用有る心、謂く善不善有覆無記は無覆の中に於應に隨つて境を縁じて、見分は能く能縁の習

氣を留む。即ち是れ後の三分の種子なり。相分は、能く所縁の習氣を留む、中に其二種有

分の白の種子を熏じて彼本質の種子を熏すること能はざることあり、之を悉すに違あらず。

今此相見二分の熏習を用能熏と名く。當に知るべし、一切諸法の種子は皆是れ自心の自體勢力の起す所なり。且く一事を指さば或は人有り、怨家の聲を聞きて悪心を起す時、此一念の中に必ず兩識有り。一には耳識、二には同縁の第六意識なり。今此兩識は、兩時其性、俱に是れ不善にして、強用有るが故に彼此の見分俱に能縁不善の習氣を留む。耳識見分の留むる所は即ち是れ不善の耳識の種子なり。是時彼此の兩識の前に各一箇の聲塵の相分を現す。今此彼此の兩箇の相分は各相分聲塵の習氣を留め、及び本質第八所變の聲塵の習氣を留む。彼相分の自の習氣は、即ち是れ耳識意識の各各相分の種子なり。即ち其所熏の本質の聲塵の習氣は、即ち是れ第八識の相分の中の聲塵の種子なり。此等の種子は併せて是悪心の熏習する所なり。謂ゆる耳識の見相の所熏は皆是れ不善の意識の自體の勢力之を熏す。同時意識の見相の所熏は、皆是れ不善の意識の自體の勢力之を熏す。此は是れ且く心王に約して之を明す。若し心所を并せば即ち衆多の見相の所熏有り。是の如く一時一念の所熏に、多くの種子あり。何に況んや念念をや。此諸の種子皆悉く自心の底に落在す。一たび落在し已れば、聖道を以て斷捨するを除きて外、相續流來して猶し暴流の如く念念生滅して間斷有ること無し。其心底とは、即ち是れ第八阿頼耶識なり。此識獨り諸法の種子を持して失壞せざらしむ。餘の一切法は皆此力無し。所以は何ん。或は間斷

【四】二に業種及
び無漏種を釋す。

の故に、或は轉易の故に、或は堅密の故に、或は主に非ざるが故に、皆諸の種子を容受するの徳無く種を持すること能はず。所以に第八心王獨り諸法の種子を持す。且く一事を指し已りぬ。餘は此に准へ知るべし。一切異熟の心心所法は其性羸劣にして、種を熏ずること能はず。其法の種子は他識に之を縁じて相分の中に彼種子を熏ず。即ち是れ本質の種なり。其勝用ある相應の心所は、亦一一に彼彼の種子を熏じて王と異なること無し。其異熟心の相應の心所は亦心王の如く種を熏ずること能はず。皆心王に准へて其相を知るべし。

次に業種とは、是の如きの三性の諸の心心所、種子を熏ずる中、善惡二心の見分、各善惡二性の自の後三分の種を熏ず。其中思の心所、所熏の自の種子は、殊に造作強勝の功力有り。當來果報の種子を資助して、即ち是れ一切異熟無記たうらいさうべつ當來總別の果報を生ぜしむ。此用専ら思の種子の處に在り。今此善惡の思種の上の、異熟の果報を生ぜしむる機能を名けて業種と爲す。彼諸の三性の諸法の種子をば總じて皆名けて名言種子と爲す。或は名言を聞いて一一の相を變じて熏成する所なるが故に、或は心心所能く境相を顯すこと名言の如くなるが故に、其所熏の種を名言種と名く。今此名言種子は、各皆自果を生ず。是故に此を説いて親因縁と名く。謂く、色の種子は色の現行を生じ、心王の種子は心王の現行を生じ、心所の種子は心所の現行を生じ、善法の種子は善の現行を生じ、不善の種子は惡の現行を生じ、有覆の種子は有覆の現行を生じ、無覆の種子は無覆の現行を生ず。乃至色の中の五根五塵と、心の中の八識と、心所の中の作意觸受想思と、是の如き等の類には無量

【五】 所助の義を述ぶ。

【五塵】 色、聲、香、味、觸の五塵にして、吾人の眞性を汚し煩惱を起さしむるが故に塵と名く。

【六】 能助相を明す中、初に正しく資助を明す。

の差別あり。一一各爾り。各必定して親しく自果を生ず。他性他法の現行を生ぜず。是故に之を親辦自果自體辦生の親因縁と名くるなり。是を以て異熟無記の種子は、異熟無記の果報を生ず。即ち是れ名言種子の隨一なり。

(五)今此異熟無記の種の中に、第八識の種子と相應の五數の心所の種子と、眼等の五根の正根と、扶根との二類の種子と、異熟無記の六識の種子と、各相應の心所の種子と、皆悉く之れ有り。其器界は四塵を體と爲す。若し聲を起す時は五塵を體と爲す。是の如き四塵五塵の種子は、内の異熟果の種子に非ずと雖も、亦是れ既に有情の所居の外の依處と爲るが故に、同業所感なり。是故に名けて外の増上果と爲す。所以に器界五塵の種子も亦是れ業種の資助する所なり。

(六)是の如き果報諸の無記種は、羸劣にして獨り自ら現行を生ずること能はざるが故に、必ず他の強勝の法の能資助の縁を待ちて方に現行を生ず。理必然の故に。善惡二類の思業の種子應に隨ひ彼總別報の無記の種に隨逐するの時、其善惡の種の獨勝の勢力は異熟無記の種子に蒙らしめ、其異熟無記の種子をして當果を生ぜしむるなり。善惡二性は法の中に強勝なるが故に、業は必ず善惡二性に局らる。其有覆等は此勢力無きが故に、業を成ぜず。今此善惡其正業を論ずれば思數に在りと雖も、然れども其一聚同時相應の心王心所も皆此生を感ずる勢力無きに非ず。業の眷屬をも亦業と名くるが故に。是を以て且く其惡業を造る時、一念の中に多くの惡種有り。謂ゆる若し瞋恚を起すの時、三業の中に於て、第六意

【七】議に約して主隨を判ず。

【八】無漏種を明す中、一に種姓不難を消釋す。

識の不善の心王と、不善の五數と、及び嗔煩惱と、不善の無明と、八大隨惑と、中隨の二惑と、決定相應す。所餘の心所は、時に隨つて或は起る。是の如き多法は一一不善なり。一念の中、一時に種を熏す。此諸の種子は即時に我藏識の中に落在して、當來果報の種子を資助す。念念相續して間斷あること無し。然るに其中に於て思の心所を以て業主と爲すが故に、其種の功能殊に業種と名く。是の如く是の如く數數資くるが故に、今生の果報終盡の時、最後の一念命終の心の後に、次の刹那の中其資助する所の果報の種子既に惡業の資助を被るが故に。其生現する所の依正二報は皆悉く非愛醜穢羸卑なり。或は是れ地獄、或は是れ畜生、或は是れ鬼道、皆是れ彼能資助の業の差別に任す。善業は之に翻じて其相を知るべし。

(七)發業潤生は是れ第六識不共業なるが故に、第六識に就いて之を論ずるなり。五識をば名けて、隨轉發業と爲す。所以に相從して亦之を知るべし。第七は一向有覆無記なり。第八は一向無覆無記なり。是故に皆發業の心に非ざるなり。故に、要を取りて言はば、業種子とは第六相應の善惡の思種の異熟無記の種子を助けて、果報を生ぜしむるの功能なり。今此思種も亦能く自の思數の現行を生ず。其邊をば名けて名言種子と爲し、業種と名けず。二邊の功能は混濫すべからず。

(八)次に無漏種子の相に於ては有情界に於て五乘の種姓法爾各別なり。其中に三乘道を得べきは、其身内本識の中に於て無始法爾に本無漏法を生ずべきの種有り。此種姓に於て四類

【四類不同なり】

五性の中、無性を除く。

【九】一に、決定大乘種性を釋す。

【大乘種性】此處にては菩薩を指す

【根本】一心眞見

【後得】三心及び十六心相見。

不同なり。

一に決定大乘種性。謂ゆる法爾に唯佛乘三品の種子有り。三品と言ふは、一に下品種、

謂く、見道の種なり、即ち是れ妙觀平等の二智の種子なり。此兩智に於ても亦各根本、

後得の二智の種子相分れ、生空、法空、單重の三智の種子同じからず。又智と言ふは是れ

相應の中、一數の名なり。無漏位に於て智強勝なるが故に、勝に従つて名と爲す。實に據

りて論ぜば、且く、一の妙觀察智の中に就いて、總じて論ずるに具に二十二法有り。謂ゆ

る無漏の第六心王と、遍行別境の各の五と、及び善の十一と是なり。因位には亦無漏

の尋伺有り。若し之を并せば二十四なり。此二十四法各皆四分を具す。其相分の中應に

隨つて亦五塵等の法有り。是の如き諸法一一の種子は各各皆一の妙觀察智の種子の中に在

り。委細に論ずれば是の如く多くの種子の數有るなり。其平等智は、因位の中に在りては

有爲の諸法をば緣じ、或は緣ぜず。解釋往往にして、學者の意別なり。若し諸法を徧緣す

るの義に依らば、一智品の中有ゆる種子は觀察智の如し。若し唯八と如とを緣するの義に

依らば、此智品の中に亦本後有り。其相應の法亦二十二なり。此等は上の如し。但其尋伺

は定めて應に俱ならざるべきが故に彼二を除く、此等の種子も亦一に在り。下品の種子大

次に中品の種は即ち修道の種、亦是れ妙觀平等の二智品の種子なり。委しき旨は前の如

し。但し其勝劣を二品の別と爲す。次に上品種は、謂ゆる即ち是れ佛果の種子なり、此れ

即ち四智品の種子なり。四智と言ふは其實義を論ぜば即ち是れ無漏の八識の聚なり。相應

【二十二法】心王五遍行、五別境善の十一。

【二】二に決定獨覺種姓を釋す。

の智に従つて總じて智の名を立つ、是故に之を開すれば八智なり。一には無漏の眼識相應の此中具に二十二法有り。乃至無漏の身識相應。此中亦二十二法を具す。今此二十二法の中に慧の心所を標して總じて名けて、成所作智と爲すなり。所以に此智に五箇の智有り。六に無漏の第六相應。此中に亦二十二法を具す。七に無漏の第七相應の二十二法。八に無漏第八相應の二十二法なり。各其中の慧の心所の名を標して次の如く名けて妙觀察智、平等性智、大圓鏡智と爲す。今此八識の二十二法各一一に四分を具足す。其相分の中に即ち無邊の相好光明淨土等の體、根塵等の法有り。即ち是れ一一後得智の境なり。其根本智は、相分有ること無し。眞如の理を以て境界と爲すが故に。其淨土は即ち無漏の四塵を以て體と爲す。宮殿、樓閣、華地、寶樹、長短、方圓、滑澁、麤細等の種種の形は此四塵の上の假相なるが故に別に之を論ぜず。或時は聲を加へ五塵を體と爲す。謂ゆる彼聲風響等の起るも亦其體なるが故に。其相好は無漏の五根五塵を體と爲す。五根に於て正根と扶根と有り、扶根は亦四塵を以て體と爲す。淨土の體の如し。正根は即ち是れ大種所造無漏清淨微妙の色法なり。其光明等は偏に色塵の所攝なり。是の如き種種衆多の法體、一の種子は皆此上品種子の中に在り。上品の種子大。今此三品の淨妙の種子は無始より法爾として、皆悉く具足して本識の中に在り。已上菩薩種姓の人所具(二)二には決定獨覺種姓。此人に亦三品の種子有り。謂ゆる見修無學道の種なり。此れ即ち第六識相應の中の生空無漏の本後二智の一分の種子なり。此れ亦二十二法等と俱なり。

【二】三に決定聲聞種姓を釋す。

【二】四に不定種姓を釋す。

【二】疑難を通釋する中、一に經論を引いて疑を釋す【五姓各別】五性とは無性有情種性不定種性、聲聞決定

其體上の如し。若し佛智に對せば即ち妙觀察智の中、生空無漏の一分の功能に當る。其後得智は、極めて狭劣爲り。廣縁の用無きが故に、一切種智と名くることを得ず。
三には決定聲聞種姓、無漏の分齊大旨獨覺種姓に異らず。但し差異は即ち七異有り。其相は常の如し。

四には不定種姓。此人三乘種姓の各三品無漏の種子を具足す。上に准へて知るべし。今此四類種姓の中、第一の種姓をば、名けて頓悟と爲す。直に大乘に入りて迂廻せざるが故に。第四の種姓をば名けて漸悟と爲す。先に餘乘を経て漸く大に入るが故に。中の二の種姓をば名けて定姓二乘の人と爲す。一向に趣寂の無餘に入るが故に。此外に亦菩薩獨覺の二姓を具足し、菩薩聲聞の二姓を具足し、聲聞獨覺の二姓を具足する種種の人有り。初の二は即ち是れ不定種姓なり。決定して廻心して大覺を求むるが故に、後の一は亦是れ定姓二乘なり。二乘の中には不定姓なりと雖も、大乘に望めば定姓二乘なるが故に、此等の無漏の法爾の種子は無始より以來、有漏第八識の中に有りと雖も本性殊勝至明妙善なり。煩惱の勢力に汚されず、苦果の異熟性に攝せられず、但是れ第八の本識に依附して、前滅後生して展轉傳來す。其無姓の人は闕きて此等の無漏の種子無し。然れども人天勝妙の果報を以て至極と爲すなり。
問ふ、一五姓各別とは餘家に許さず。今自宗の意向なる至極決定の文理を以て之を成立するや。答ふ、一有爲の人と法と法爾に差別す。法の中の有ゆる蘊處界等既に法爾に別なり。

定種性、緣覺決定種性、菩薩決定種性。唯識宗にては無始以來有情の第八識中に有する種子に五種の異ありて永久に五性差別せりとす。

【皆乘】この乗は二乗定性の量。

【開三顯一】三乗は各異なるものなりとの謬見を除去して、三乗そのままた一乗なりと顯示すること。

人の中の三乘五姓等の別、何んが爾らざらんや。若し法の中の衆多の差別を許して、人の中の種種姓を許さずんば、彼此の異因得べからざるが故に、是を以て深密、楞伽、勝鬘、涅槃等の諸大乘經、瑜伽、顯揚、莊嚴、佛地等の諸大乘論に明かに法爾五姓の不同を立つ。有姓無姓三乘定姓諸教の所説、實に以て煥然たり。中に就いて深密には明かに一乗を會して、五姓を立つ。涅槃には詳かに皆成を以て、不解我意と爲す。一生補處の大聖慈尊、佛意を弘宣して更に八義を立てたまふ。無著菩薩、世親菩薩は慈尊に稟承して重ねて十因を開す。皆一乗を會して五姓を弘むるなり。一宗の傳燈の人皆知る所なり。若し爾らば有無二姓俱に聖の所説なり。更に何の故有りてか、有姓を許し乍ら無姓を許さざる。三乗の衆生皆乘の所被なり。更に何の由有りてか、大乘の定姓を許しながら、二乗の定姓を許さざる。此等の教理皆磐石の如し、誰人か動かすことを得ん。若し法華等皆成の説を以て其證と爲さば、我は深密等五姓の説を以て、其誠證と爲さん。若し法華の開三顯一を以て其由と爲さば、我は深密の會一立五を以て其由と爲さん。若し法華の説相嚴重を以て、餘教に超過するの徳と爲さば、深密は華藏世界の所説、教主は即ち是れ盧舍那佛、正機は即ち是れ觀音彌勒等の諸の八地已上の大士なり。一部五卷正宗七品の文文の悉く姓相の奥府を盡し、品品自から究竟の了義と稱す。十八圓滿の報土に在りて、不了教を説きたまはば是れ何の爲ぞや。至極深位の大士に對して、淺近門を演べたまはば亦何の川ぞや。何に況んや法華には、三乗を會すと雖も未だ五姓を會せず、深密には分明に一乘

【二】二に凡情の疑難を釋す。

【法門】經教なり

【相】菩薩性の人自ら六度を修す。
【其相】本性種性
【無種姓の相】慳貪、嫉、妬等。
【前に説く】五性の不同を指す。

を和會す。法華には未だ大乘の性相を説かず、深密には詳かに廻向菩提の聲聞の成佛を説く。兩教の隱顯思うて之を知るべし。文理繁しと雖も大都此の如し。

問ふ、『凡そ心自ら種姓を知る事能はざらば、那ぞ我は定姓無姓に非ずと知らん。若

し佛姓無くんば佛道を修するも用無し。若し爾らば五姓の教を習學する人は、常に此疑ひ

有り、豈大難に非ずや。只皆成佛の宗を學して決定の想を成ぜんには如ず。是亦何説にし

て大聖の所傳なれば、尤も依學するに足る。』答ふ、『今の所論は是れ宗の權實なり。今の所

問は是れ愚人の想なり。豈愚者の疑ひに依りて法門の權實を決せんや。其迷を愍みて其實

を隠すは即ち是れ方便引誘の門なり。其實を顯して其理を盡するに即ち是れ眞實顯了教な

り。宣なる哉、五姓の妙理華藏の我説たることを。但し自身の種姓に於て若し眞實の覺知

を論ぜば、但是れ諸佛の境界なり。若し隨分の信解を謂はば教相の施設に任ずべし。謂ゆ

る本論瑜伽等の中に廣く本姓住種姓の相を説く。之を披いて靜に思へ、我身の心行其相

有りや不やと。又同じく廣く無種姓の相を説き、之に臨んで己を計れ。亦前に説くが如し。

阿陀那の教は、我凡愚に於て開演せずとは、本經の所説なり。唯識論の中に凡愚を釋して

云はく、『凡は即ち無姓、愚は即ち趣寂なり』今此教を學して此に依りて深く大菩提を求む

る人、豈是れ趣寂無姓の類ならんや。信ずと雖も其心深固に非ざるは是れ具縛の習なり。

此が爲に懈怠有るは、他宗の學者も亦爾なり。誰人か最初始學の位に廣大堅固の信を起さ

んや。凡そ宗の權實は、凡智計り難し。皆是れ法界等流の教なり。何んが定めて淺近なら

【逸多】彌勒を指す。

【二五】三に道理に就いて、疑を釋す中に四有り。一に五性の道理を問ふ

ん。何んが定めて深遠ならん。其高祖は皆大聖の權化なり。其所依は如來の金言なり。何に況んや補處の慈尊に於てをや。何に況んや舍那の極說に於てをや。大聖慈尊の權門の教を弘むとは、會通路を失するの戲言なり。華藏世界に不了教を演ぶとは、自ら言ひて非を顯すの妄談なり。夫れ大聖の教は、必ず機を待ちて應ず。正法千年の内、學慧熾盛の時、補處故らに人間に降りて、有空の兩見を破らんが爲に、無着等の深位の大士に對して、中道甚深の極理を演說す。何なる所以有りてか是れ權教ならんや。若し強ひて之を以て權教と爲さば、補處の慈尊豈遂に實義を説かずして止まんや。若し根機未だ純熟せずと云はば其機何れの時か熟することを得べけんや。若し皆成佛道の學人は是れ其純熟の根機なりと云はば、慈尊爾時に於て降下して彼に對して眞實の教法を説きたまふべし、何んが然らざるや。加之法華に四車を説くは、我宗許さず、『解深密經』に五姓を説くは、他宗之を許す。何れか極成の教、何れか不成の宗なる。彼此按量して優劣を知るべし。是の如きの對望重重委曲なり、設ひ他家なりと雖も、執無く信有る清淨正見の人は、定めて思量に及ばんや。之に依りて清辨菩薩猶以て決智を逸多の曉に期す。況んや已下の輩をや。是故に種姓有無の疑甚だ無用なり。只無益の勞疑を止めて了義究竟の教を信學せんには如何かす。

問ふ、『五姓の道理猶未だ分明ならず、重ねて詳かに成立せよ。次に眞如の理は、萬法所依にして法の此に從うて起らざる無し。若し爾らば是れ即ち諸法の種子なり。何んが煩

【次に眞如の】二に眞如は種の爲にすべきを問ふ。【中に就いて】三に無漏種は本識を離れざるの理を問ふ。

【次に種姓の】四に本性種姓、驗すべきや否やを問ふ

【有無の二姓】第一問に答ふ。

【然るに今】第二問に答ふ。

しく別に有爲の種子を立つるや。中に就いて有漏の第八は、其性異熟無記なり。無漏の種子は、本來善性なり。豈有漏無記性の法。横に無漏清淨の種子を以て生果の功能と爲すべけんや、何に況んや一切の種子は皆是れ第八の所縁なり。未だ知らず無漏の種亦彼所縁か。若し爾らば云何が有漏心は無漏清淨の相分を變ずるや。若し爾らずんば、無漏の種子は識の自相等の五種の唯識には、是れ何の所攝ぞや。若し五種の外ならば、無漏の種子は唯識成じ難し。次に種姓の有無猶以て疑惑有り。凡夫の學は何の方便を以て審決することを得ん。本論の所説、本種姓の相は性と爲して、六度の心相を具足すといふ。若し我身に於て其一相を闕かば即ち是れ應に無姓の人爲るべきか。若し爾らば信じ難し。慳貪嫉妬は凡界の常の習ひなり。懈怠散亂は愚者の定まれる相なり。教の如きの人甚だ以て有り難し。豈一切の人佛姓無からんや。答ふ、「有無の二姓隨一攝の故に、乘所被の故にといふ、是れ至極の理なり。深く之を思ふべし。豈己が樂に順ずるを以て之を判じて實教と爲さんや。己が樂に順ぜざるを以て之を判じて權教と爲さんや。謂く法の實理は本迷情に違す、只須らく分明の理を依信すべし。全く欣厭に任すべからざるが故なり。然るに今其源を尋ぬるに因縁所生の法は體事必ず衆多なり。體事衆多の法は必ず是れ因縁生なり。體性一味の法は定めて因縁生に非ず。因縁生に非ざる法は、體性定めて一味なり。是れ則ち各各差別の相なり。其差別の相は親因縁に依る者は法爾として一味に非ず。若し一味の法は體性常住にして前後轉變の義有ること無きが故に、是れ諸法の親因縁に非ざるなり。是れ以て法の種

【無漏の種子】 第三問に答ふ。

【我】 一乗家を指す。
【我の】 相宗を指す。

種差別無始法爾なるが如く、人の中の有ゆる種種差別も亦應に是の如く無始法爾なるべし。彼此俱に同じく有爲の事相にして、皆因縁生の相用なるが故に。而るに其差別の親因縁とは、即ち是れ有爲本親の種子なり。若し有爲の種子に非ずんば親因縁の義得べからざるが故に。眞理は既に是れ無相常住一味の法性なり。豈有相轉變衆多事相の法に望みて親辦自果自體辦生の親因縁ならんや。所以に有爲の種子を立せずして、眞如の理を以て種子と名けば、恐らくは諸法の親因縁を失せん。無爲は是れ因縁生に非ざるが故に、即ち此親因縁の種有ること無し。有爲は既に是れ因縁生の故に、必定して此親因縁有るなり。但し其事理互に相依るは、是れ増上縁にして、親因縁に非ず。故に有相と、無相と、生滅と、常住と彼此同じからざれども、全く過失無し。眞如を以て種子と名くと言はば、恐らくは増上縁を親因縁と爲すならん。若し一向相即の義の故に、此等の不同の難有ること無しといはば、此れ即ち相即の邊路に滯りて、不即不離の中道に迷ふなり。若し我も亦即にも離にも非ずと云はば、其不即の門は我の不即の異と爲んや、異ならずとせんや。若し異たらざるば、還つて前難有り。若し是れ異ならば、又偏那に墮す。明かに知りぬ、事相と眞理との差別門を許さざるが故に、事相の中の委曲を辨ぜず、返りて事相を撥して、眞如の理を以て種子と名くることを。無漏の種子の唯識に於ては、唯識論に云はく、無漏の種子は此識に依附すと雖も、而も此性の攝に非ざるが故に所縁に非ず。非ずと雖も、而も相離れざるを眞如性の如く唯識に違せず。文 同じく本疏に云はく、無漏の種子は但一義に具す。謂く識を

離れざるが故に説いて唯と名く一文。故に總門不離の義を以て唯識と名くるなり。心は既に法の主として一切に最勝なり。設ひ何なる義なりと雖も此を離れず、皆唯識と名くるが故に全く違せず。若し此上に強ひて五種門に攝せば、即ち是れ識所變の唯識の攝と謂ふべきなり。並に是れ種子にして種類同じきが故に相從して論ずるなり。故に漢譯を釋して云はく「因位に在りて見の所緣に非ずと雖も、是れ相分の類なれば、餘の相分に從ひて相分の所攝なり一文。凡そ自他宗は諍論に似たりと雖も實は諍論無し。所以は何ん。夫れ諍論とは一門一事を説く中、二義水火して出で來る所なり。他宗若し諸法の性相を談ずる事我宗に異ならずして、猶皆成を立てて五姓各別の義を許さずんば、尤も論を爲すべし。而も今性相の論談を委くせず、事相の中安立を具にせずして一向に事を理性門圓融の義に寄せて定姓無姓の不同を許さず。所立既に是れ各別の門なり、何爲ぞ諍論せん。又若し我宗の理性一味の義門の中に、一乘を立てずして五姓を立てば、亦諍論を爲すべし。而も其義無し。理門には皆成にして五姓の別無し。當に知るべし我宗は一乘も眞實にして五乘も眞實なり。事相條然の故に、理性凝然の故に。其事相は無定相の相にして、如幻虚假の五種姓の故に眞理平等の一乘に違せず。其理性は縁生の眞性内に、各別にして證して共相に非ざるが故に、法爾として差別の五姓に違せず。不即不離にして、一も立し五も成ず。何んが自義の一門に限ると執して、強ひて他宗の諸門周備するを疑はんや。故に我宗の習は諍論を好まず、其旨具に中宗略要の如し。是れ則ち能く一代の諸教を會

【但自身の】 第四
問に答ふ。

して、更に假相の戲論無き教なるが故なり。但自身の種姓の有無に於ては實に以て決し難し。教の權實は此に依るべからず、此は是れ別事なり。尤も推尋すべし。然るに本論の中に「四隨煩惱に纏繞せらるるものは、種姓有りと雖も、其相稍隱る。云云」と。故に設ひ慳嫉等の過あり。之を以て忽ちに無姓と定むべからず。是れ則ち多生串習等の故に、所以に六波羅蜜の相に於て、設ひ一二三等の相を具すと雖も、根本の大心の相を闕かざれば、當に知るべし、即ち是菩薩種姓なり。若し猶疑惑せば、須らく大聖の加被を乞ふべきか。是を以て三藏大師は昔西天に於て聖像に祈りて其證驗を得たまふ。此れ豈末代の研心を引導せんが爲に非ずや。』

十一 緣起

【十二緣起】 三界の迷の因果を十二に分ちて、衆生輪廻のさまを示したるもの。無明、行、識、名色、六處、觸、受、愛、取、有、生、老死。【一】大分して二と爲す。緣起を釋する中、一に正明に亦二有り。初の中、正しく十二支を釋し、後に輪廻の相を示す。

問ふ、「生死流轉の果は何に依りて起るや。」答ふ、「其本源を論ぜば無明より起る。謂ゆる凡心極めて明了ならず因果の理を知らず、出離の道を了せず、三途の苦報猶厭ふこと能はず。何に況んや人中天上の勝果をや。此れ即ち第六相應の分別無明の力なり。是を無明支と名く。是の如き愚癡力に依止するが故に、起す所の善惡二種の心行は、皆悉く流轉の業因と成る。今此業は即ち是れ第六相應の思なり。此思の心所、或時は信等の善の心所と俱にして、身口意の中に應に隨つて一切の善法を造作す。或時は貪等の諸の煩惱と俱にして、身口意の中に應に隨つて一切の惡法を造作す。今此善惡の三業の思數、各種子を熏す。

其諸の種子は皆悉く自己の假我相續の本識に落在す。是を行支と名く。今此行支隨つて能く本識を資助す。是を行所持の苦果の種子と名く。其所資の苦果の種子に於て、五の種類有り。一には本識能生の種子、是を識支と名く。二には名色所攝の種子。謂く本識能生の種子と及び六處觸受の種子とを除いて、外の所餘の異熟無記の種子、是を名色支と爲す。三には眼等の六根の種子。是を六處支と名く。此中意根は、是れ末那に非ず。但異熟の等無間の意を取る。四には異熟の觸數の種子。是を觸支と名く。五には異熟の受數の種子。是を受支と名く。今此識等の五支の種は、總じて之を論ぜば即ち是れ當來苦果の依正を生ずべき種子なり。然るに異熟の法は其爲癩劣にして獨り自果の現行を生ずること能はず。必ず他の強勝の法の助を待つ。是故に彼善惡二業の資助の勢力に隨つて、或は好果を生じ、或は惡果を生ず。好惡異ると雖も皆無記性なり。然るに此行等の六支の種子は必ず潤縁を蒙りて後に現行を生ず。譬へば外種の地中に在りと雖も、雨露の潤を蒙りて方に芽莖を生ずるが如し。内法の種子も亦復是の如し。其潤縁とは即ち諸の煩惱なり。若し人煩惱を發起するの時、必ず當來の苦果の種子を潤す。諸の煩惱皆此力有りと雖も、貪を以て本と爲す。貪愛は水の如し。殊に潤生の勢力有るが故なり。是を以て若し臨命終の時、細想現行の位に至りて、俱生の下品の微細の貪愛法爾として起りて自體及び境界等を顧戀す。爾時即ち彼行等の六支の種子正しく潤ふ。然るに未だ極に至らざるに此下品の貪を名けて愛支と爲す。是の如く愛惜數數相續して、遂に上品俱生の貪等を起す。爾時即ち

【二】二に簡濫。
問意は勝鬘經に依

彼六支の種子潤縁悉く具して生果の功能皆決定し已る。今此上品の貪愛等の惑、是を取支と名く。此愛と及び取との正潤は即ち是れ第六相應の俱生煩惱なり。今此所潤の行等六支を合して有支と名く。今此有支託生の最初の刹那に至りて、正しく苦果の依正二報を生ず。其苦の果報有根身等、未だ衰變せざりしより來た、總じて生支と名け、衰變已後、命終の位に至るまで、總じて老死支と名く。正支は正報なり。今此一期亦無明を起す。無明は業を發して乃至愛を起して苦の種子を潤し、前の次第と等しくして異り有ること無し。是の如く是の如く輪轉すること無窮にして、無始際より今に至るなり。故に生死の流は無明を源と爲す。其無明は即ち是れ無明種子の所生なり。其種子は即ち彼過去の無明の現行の熏習する所なり。其所熏の種は本識の中に在りて自類相生して間斷無きが故に、是の如く是の如く無明を生起す。是の如く是の如く無明を生ずるが故に、是の如く是の如く輪轉絶えず。其能持の本識も亦自種より生ず。其本識の種子還りて本識の中に在るは、即ち是れ六七二識の所變の相分の熏する所の本質の種なり。其六七識も亦六七二識の種より生ず。其種子は即ち六七識自ら熏する所なり。熏じ已れば亦自の本識の中に在り。是の如き一切の種子皆第八識の中に在りて、自類相生す。譬へば暴流の相續して絶えざるが如し。無始より已來種の現行を生じ、現の種子を熏じ、種は種を生ずるが故に、生死流轉盡くること無き者なり。當に知るべし、生死輪廻は唯是自心の作なり。

問ふ、「今の無明は即ち是れ經中に説く無明住地か。」答ふ、「爾らず。謂く無明に於て煩惱

りて、一に五住地を説く。二に見一處住地。三に色愛住地。四に無明住地。五に無明支無明住地。此縁起支無明住地。同異如何。答の明と。旨は彼無明住地は。今宗談の所知障に當る。今此縁起の無明は、唯煩惱障の發業の用有る者を取るが故に、彼無明と異なれり。

及び所知の二障有り。凡そ十煩惱二十隨惑は一一是の如し。是故に應に言ふべし、所知障とは諸の煩惱の中の一一の底の微細分なり。故に亦應に言ふべし、所知障の上の麤強の分を煩惱と名くと、煩惱は用に迷つて有情を擾惱して生死を取らしむれば煩惱障と名く。所知は體に迷うて、所知の境を覆うて菩提を得ざらしむれば、所知障と名く。其煩惱障は發業潤生の用有り。其正發業の惑は即ち分別煩惱なり。助發業の惑は亦俱生に通ず。其正潤生の惑は即ち俱生の煩惱なり。助潤生の惑は亦分別に通ず。發業の惑の中無明力勝れたり。然るに發業の法重發の義無し。所以に一の無明支を建立す。潤生の惑の中貪愛力勝れたり。然るに潤生の法は數數澆灌す。是故に愛取の二支を建立す。其所知障は此發業潤生の作用無し。但能く所知の境界を隱覆して、佛菩提の智を生ずることを得ざらむ。而るに經の所説の無明住地は是れ所知障なり。是故に今の無明支に非ざるなり。問ふ。若し一切煩惱の中皆所知障有らば、亦名けて貪嗔慢等と爲すべし。何が故に經の中に偏に無明住地の名を立つるや。答ふ。『所知障の中無明増するが故に總じて無明と名く。實に據れば貪嗔慢等無きに非ず。此中の上下簡他の門は、唯未學の邪語執心を遮す。更に彼正法の妙理を毀らす。彼れ皆深要なり。豈信行せざらんや。夫れ遇ひ難きの法に逢ひて邪亂執心して、自宗の正理を顯すこと能はず、亦大いに他宗の教理を謗滅す。此に由りて必ず大地獄中に入り、多百千劫に出づることを得る能はず。是只執心の致す所なり。若し互に相和せば、諸佛の慧眼自然に遍滿し、隨宜の所益應に窮盡すること無かるべし。

【一】大いに分つて三と爲す。初に三性を明す。初に百法に配屬す。能遍計と所遍計と遍計所執との三有り

【二】二、三性の名を釋す。

若し互に相毀せば、無量の法寶同時に磨滅し、一切衆生諸の大苦を受けん。大聖の悲惱は只此事か。但し其執を遮せんと欲すれば、還りて其法を遮するに似たり。其法を立てんと欲すれば、猶其執を立つるが如し。若し互に遮せずんば亦誰か其執を誡めん。進退維れ谷る。之を如何せん、伏して願くば、知者他の破を聞かば必ず自の執を顧み、自立を得ば、先づ他の和を求め、清淨一味にして正法の昔に同ぜんことを。』

三種自性

問ふ、『言ふ所の百法は遍計等の三種自性に於て何んが判屬するや。』答ふ、『若し大綱を論ぜば、前の九十四法は是れ依地起性、後の六種無爲は圓成實性なり。若し細に談ぜば、六無爲に於て識變と依如と二種に別有り。委き旨は前の如し、此依圓二性百法に於て、或は増益して有と執し、或は損滅して空と執す。是の如き執に當つて現する所の偏有偏空の相、是れ即ち名けて遍計所執と爲す。二無我は之を除遣するなり。』
問ふ、『何が故に名けて遍計所執と爲し、乃至何が故に圓成實と名くるや。』答ふ、『妄情遍計の所執なるが故に、名けて遍計所執と爲すなり。故に遍計とは、能執の名なり、所執と言ふは妄境の名なり、能迷の妄情は周遍計度するが故に遍計と名く。所縁の妄境は、彼に取著せらる、故に所執と名く。依他起とは他の衆縁に依りて而も起るを得るが故に以て其名と爲す。圓成實とは諸法の實性にして圓滿成熟するが故に其名と爲す。』

【三】三、有無を辨ず。

【四】四、所遍計を明す。

【五】五、圓成の所遍計を辨ず。

【六】六、異、不異を明す。

【七】七、事を擧げて示す。便ち一色一香無非中道の意を彰す。

問ふ、『此三性に於て幾くか無、幾くか有、幾くか假、幾くか實なるや。』答ふ、『遍計所執は體性都て無なり。但是れ妄情計度して有と爲すが故に、情有理無の法と名く。依他起性は如幻假有なり、衆緣の所成にして、其體空ならず。圓成實は眞實如常にして、其性凝然たり、假に非ず無に非ず。今此二性は聖智の境界にして、妄情の境に非ざるが、故に、理有情無の法と名く。』

問ふ、『遍計所執體性都て無ならば、凡夫の妄心何を以て緣と爲して起ることを得るや。』答ふ、『心中現の依他の相を以て所緣縁と爲す。此依他に於て誤つて實有と謂ひ、或は全無と謂ふが故に、心外に於て増損の相現す。是を以て妄情を能遍計と爲す。心中現の境を所遍計と爲し、當情現の相を名けて遍計所執性と爲すなり。』

問ふ、『圓成實性は、所遍計に非ずや。』答ふ、『眞に妄執所緣の境に非ざるが故に、親迷所遍計の境に非ずと雖も、而も其依他の眞實性なるが故に、展轉に依りて説かば、亦所遍計なり。』

問ふ、『今此三性は是れ一體と爲んや、是れ異體と爲んや。』答ふ、『唯識論に云はく、『應に俱非と説くべし、別體無きが故に、妄執と緣起と眞義と別なるが故に』文。故に此三種不即不離なり。別體無きが故に名けて不離と爲す。妄等別なるが故に名けて不即と爲す。』問ふ、『大都を聞くと雖も、猶未だ詳審ならず。且く事を指して其相を明すべし。』答ふ、『且く一の草葉を見るに其色青色なり。今此青色は定めて自然の有に非ず。因緣増上の二』

【八】八、喩を擧げて示す。

縁の所生なり。因縁と言ふは、阿頼耶識所持の種子なり。増上縁とは、風雨地等の種種縁なり。是の如き親疎衆多の因縁和合して此草葉の色を生ず。既に是れ因縁所生の法なるが故に、自性無しと雖も、而も都て無に非ず。幻の如く夢の如く、有に非ず無に非ず、是を依他と名く。此の如き幻の草葉の青色に於て、常途の凡夫執して實色と爲す。是の如く執する時は心中所現は即ち如幻の青なり。當情の所現は、實有の青相なり。此相理に無し。是を増益遍計所執と名く、或は一類空見の者有り、此色を撥無して執して都て無と爲す。是の如く執する時、心中の所現は似て都て無の相なり。當情の所現は、實の都て無の相なり。此相理に無し、名けて損滅の遍計所執と爲す。今此増損の實有とし、都て無とする妄の所執の相は、此草葉の青色の中に於て、恆恆時に於て、常常時に於て、一切遠離して凝然常住なり。此理眞實にして不生不滅なり。是を即ち名けて圓成實性と爲す。故に此三性は不即不離なり。』
 且く一事を指さし已る。
 (八)と
 問ふ、「法相甚深にして其旨迷ひ易し。願くば譬喩を引いて其相を顯すべし。」答ふ、「攝論の頌の中に蛇繩麻の喩を引いて顯せり。其大意とは闇夜に一繩有り、愚人見て蛇と謂ひ、種種の恐怖此に依りて起る。眼眩き心騒ぎ、手足振動す。爾時覺者之を教へて悟らしむ。迷亂深きが故に、輒く覺悟し難し。數數思惟して、漸漸に醒悟す。遂に其迷を除いて忽ち蛇は空なりと知る。是の如く知り已りて之を見るに但繩なり。其繩の相貌極めて蛇形に似たり。似するが故に、愚眼見て迷うて蛇と爲す。是れ一重の覺なり。然れども猶繩を執し

て眞實に物と爲す。尙數思惟して遂に繩空なりと知る。其性は即ち麻にして更に實繩なし。繩相は但是れ象縁の所生なり。如幻假有にして有に非ず空に非ず。其麻は即ち是れ有に非ず無に非ず、繩の實性なり。彼實蛇の相及び實繩の相は、此麻中に於て一向に遠離す。三性の諸法も亦復是の如し。愚者の迷眼は能遍計に喩へ、種種の恐畏は生死の苦に喩ふ。覺者之を教ふるは、佛菩薩に喩ふ。實蛇の相は實我の相に喩ふ。忽ち蛇空を知るは、生空を知るに喩ふ。實繩の相は、實法の相に喩ふ。繩の空を知るは法空を知るに喩ふ。虚假の繩は依他の體に喩ふ。蛇の形貌に似たるは假我の分に喩ふ。其性の麻は圓成實に喩ふ。此麻の中に於て常に實蛇實繩の相無きは理の無相に喩ふ。是の如く喩ふる時、妙理能く顯る。解釋の意を以て私に委しく之を喩ふ。是の如き三性不即不離なり。故に此を以て名けて一重の中道と爲す。

【九】以下六箇の問答は一法の中道を明す。此中前の三問答は三性に於て各一箇の中道を立つ。是を第二重と爲す。後の三問答は三性に於て二箇の中道を立つ。是を第三重と爲す。是の如き三重、之を開けば即ち十箇の中道を成ず。

問ふ、「令此遍計所執性は、是れ偏空と爲んや。」答ふ、「是れ偏空に非ず。所以は何ん。體都て無なりと雖も、然も妄情に當りて其相顯現す。更に此事有ること無しと言ふべからず、當に知るべし此相は空に即するの有なり。之を説いて名けて計所執性と爲す。故に義林章に云はく、「無と言へども無も亦有と云ふべし。情に當りて我法の二種現するが故に」文。是の如く有と云ふと雖も理實には都て無體なり。但是れ妄情計度して有と爲す。當に知るべし、此空は有に即するの空なり。此妙空を説いて相無性と名く。故に又章に云はく、「遍計所執は無なり。我法俱に遣ると知る」文。故に是れ中道なり。」

【二〇】二、依他に就て中道を立つ。即ち如幻の故に有に非ず。假有の故に空に非ず。是を中道と爲す。復生とは因縁生を顯す。是を非空と爲す。無自性とは自然性に非ざるを顯す。是を非有と爲す。【二一】二、圓成に就て中道を立つ。是れ其眞理は衆相を遠離す。故に名けて空と爲す。空と曰ふと雖も、その體全く眞實如常の故に、名けて有と爲す。是を中道と爲す。上來三問答は、即ち第二重の中道を明す。【二二】四、以下の三問答は三性各二箇の中道を立つ。是を第三重と爲す。中に於て、是は初に情有と理無とに約す。其情有の有とは、是れ迷情は固より定相有るのと無きを以ての故

觀心覺夢鈔中

問ふ、「今此依他虛假の法は是偏有と爲んや。」答ふ、「既に虛假と云ふ、豈偏有ならんや。因縁生の法は、自性無きが故に、之を説いて空と爲す。假相存するが故に之を説いて有と爲す。必ず有に留まらざるの有なるが故に、之を名けて依他起性と爲す。必ず無に留まらざるの無なるが故に、之を名けて生無自性と爲す。故に亦中道なり。」

問ふ、「今此圓成實性の理は、是れ偏有と爲んや。」答ふ、「既に無相の理と稱す、豈是れ偏有ならんや。法無我の性諸の障礙を離るること、譬へば虚空の如し。一切の妄想必然遠離するが故に、説いて空と爲す。今此空理とは、眞實如常なるが故に、説いて有と爲す。當に知るべし、此有は空に即するの有なるが故に、之を名けて圓成實性と爲す。當に知るべし、此空は有に即するの空なるが故に、之を名けて勝義無性と爲す。故に亦中道なり。」

問ふ、「所執情有の邊は、一向是れ有か。今此理無の邊は一向に是れ無か。」答ふ、「此れ亦然らず。情有と言ふは既に實有に非ず。設は増益の相にもせよ、設は損減の相にもせよ、遍迷の情想にして定相有ること無きが故に、亦中道なり。今此増損の有空二相は、俱に得べからず。名けて理無と爲す。豈是れ偏空ならんや。故に亦中道なり。」

問ふ、「依他の假有は、是れ一向に有と爲んや、今此實無は、是れ一向に無と爲んや。」答ふ、「此れ亦然らず。増損俱離の有、是を假有と名く、豈偏有ならんや。故に中道なり。増損俱空の無、是を實無と名く。豈偏に無ならんや。故に中道なり。」

に、偏有に非ず。故に、これを中道と爲す。其理無の無は亦増損の二相、俱に不可得の無の故に偏無に非ず。有の義を存す。故に、是を中道と爲す。所以に二箇を成ず。【三】五、假有と實無とに約す。假有とは増損二執を離るの有なるが故に偏有に非ず、是を中道と爲す。其實無も亦増損二執を離るの無なるが故に偏無に非ず。是を中道と爲す。所以に二箇を成ず。【四】六、無相と眞有とに約す。無相とは増損を離るの妙空なるが故に偏空に非ず。是を中道と爲す。其眞有も亦増損を離るの有なるが故に、是を中道と爲す。所以に二箇を成ず。以上は第三

(二四)と問ふ、『圓成の無相空とは、是れ一向に空と爲んや、今此眞實有は、是れ一向に有と爲んや。』答ふ、『此れ亦然らず。増損俱無、是を無相と名く。豈是れ偏空ならんや。此理眞實なり、是を實有と名く。豈亦偏有ならんや。故に亦中道なり。然らば所執の一性の中に情有と、理無との故に、總じて名けて中道と爲す。二門各亦邊路に留まらず。依他の一性の中に假有と實無との故に總じて、名けて中道と爲す。圓成の一性の中に無相と眞實との故に、總じて名けて中道と爲す。彼此の二門も亦各一一邊路に留まらず。』
 (二五)と問ふ、『所執の情有と、依他の假有と、圓成の眞實と、是れ一向に各別の義と爲んや。所執の理無と、依他の實無と、圓成の無相と、亦是れ一向に各別の義か。』答ふ、『此れ亦然らず。所執の情有は本依他の假有の上にて現す。何となれば、法體は本來都て無ならば何に迷うてか執を起さん。實有に非ずと雖も、然も實有に似たり。故に諸の妄情は此れ假有に迷ひて當情の相を現す。豈依他の假有と定めて別ならんや。然も偏即に非ず。當に知るべし即ち是れ不即不離なり。今此假有とは本圓成の眞實自よりして起る。若し凝然の理無くば其事豈起ることを得んや。衆多の事相に非ずと雖も然も各各の法性有り。是故に因縁合する時、虚假の相を成ずることを得ん。然れども偏即に非ず。當に知るべし、即ち是れ不即不離なり。其所執の理無は、依他の實無に歸す。所以は何ん。因縁生の法は自性無しとは、其遮する所の自性は、即ち自然の生性にして、我法の實に當るが故に。然るに彼理無は一向に相を遮す。今此實無は亦體の上の義なり。當に知るべし、亦是れ一向の即に非

重の一法中道の梗概なり。【二五】以下九箇の問答は、不即不離を明す。これは三性相對して不即不離を明す。答中を二段と爲す。初に三性對望の不即不離を明す。【事理相對】以下は事理と事と、不即不離を明す。

す、一向の離に非ず。今此依他の實無の義は、即ち圓成無相の義に歸するなり。凝然の眞理恆に衆相を離るるは、彼無自性の理なるが故なり。然るに彼は假有に屬するの實無なり。此は是れ眞實に屬するの無相なり。故に亦即ち是れ一向の即に非ず、一向の離に非ず。是を以て三性は別體に非ず、亦即一に非ず。之を即する時は所執の空即ち依圓の空、依圓の有、即ち所執の有なり。之を離する時は、彼此も亦異なり。事理相對して其即離を論ずるも、亦復是の如し。之を即せんと欲すれば、則ち相性の跡分つて色空に類す。之を離せんと欲すれば、亦眞俗和融して氷水に似たり。事中無量の差別相の不一不異も亦復是の如し。理中無邊の内證門の不即不離も亦復是の如し。故に『唯識論』に云はく、「此は世俗に依る、若し勝義に依らば、心所と心と離れず即せず、諸の識相望するも應に知るべし、亦然り。是を大乘眞俗の妙理と謂ふ」文。又云はく、「先に説く所の如き識の差別の相は理世俗に依り、眞勝の義に非ず。眞勝義の中には心言絶するが故に」又云はく、「八識の自性は定一と言ふべからず。行相と所依と縁と相應と異なるが故に。又一減する時、餘減せざるが故に。能所熏等の相各異なるが故に。亦定異に非ず。經に八識は水波等の如く差別無しと説くが故に。定異ならば、應に因果の性に非ざるべきが故に。幻事等の如く定性無きが故に」文。『唯識章』に云はく「然るに諸法の上に各自に有る理を、内に各別に證すれば、共と云ふべからず。然るに體は共相に非ざれども、萬法此を離れず、理一にして二無きが故に、亦共相と名くべし」云云。是の如きに由るが故に、事事相對して不即不離、理理相對

【二六】二、事の
不即不離は是れ中
不即不離は是れ中
道なり。有爲の事
及び無爲の理に、
不即不離の理有る
を以ての故に、中
道と爲す。然るに
若し不即を本と爲
し、若し不離を本
と爲さば、則ち中
に適はざるべし。
【私に一喻を取り
て】有爲の事は
確然として一箇の
自性を守るべきの
者無し。渾て是れ
如幻にして定相無
きが故に不離の義
有り。

して不即不離、事理相對して不即不離なり。然るに其事の不即不離は不即を本と爲す。事相は衆多なるが故に。其理理不即不離に於ては不離を本と爲す、眞理は一味なるが故に。理事不即不離は二門均等なり、相性相依は即離皆順するが故に。』
 (二六)と
 問ふ、「且く事事の不即不離に就いて何が故に不即なる。何が故に不離なる。乃至何が故に不即を本と爲すや。答ふ、「因縁所生の法は、因縁一に非ざるが故に、相状衆多の故に、體事萬差の故に、必ず種種の非一差別有り。是故に不即を本と爲す。然るに其體虚假にして如幻如夢の故に、互に因果と爲すが故に、定實の別有ること無し。豈定めて相離すべけんや。故に不即なりと雖も、而も亦不離なり。八識不一不異の論文其意分明なり。私に一喻を取りて、其意を顯して云はく、「世間に有ゆる種種の假物は其相萬差にして無量無邊なり。謂ゆる房舍門樓堵壁臺閣等なり。是の如きの諸事には曾て定相無し。若し屋宅を壊して門樓と爲さば即ち成ずることを得べく、若し門樓を壊して堵壁と作さば亦成ずることを得べし。其理是の如くなるが故に、其事指定まらず。物體是の如くなるが故に、未だ壊せざるの時、其彼彼の相皆決定せず、事相和融す。此義必然として更に疑惑無し。然も屋宅は即ち是れ屋にして門等に非ず。門は即ち是れ門にして屋等に非ず。一一の事相宛然として亂れず、定相無きを以て豈一切皆雜亂すべけんや。故に虚假なりと雖も、虚假の分位各各相分たる。定相無しと雖も誰か不有の有相を廢せんや。是故に無定相に即するの定相なりと謂ふべし。是れ則ち因縁所成の功力、必ず損減せず。因果相稱して輒く轉ぜざるが故

【二七】三、理の
不即不離を詳にす
根本智觀に約せ
ば、共相と謂ふべ
からず。後得智觀
に約せば、共相と
謂ふべし。乃ち後
得智所緣なれば、
則ち不離の義を感
ずべし。根本智所
緣なれば、則ち不
即の義を成ずべし

に、因縁盡きざれば彼彼の相狀皆存することを得るなり。是の如く存すと雖も、然も其自
性定相無きが故に、互に和融する義又決然たり。有爲の諸法も亦復是の如し。色法、心
法、心王、心所、五根、五境、三界、六道、因位、果位、是の如き等の類無量の差別は一
切皆是れ各々の自性因縁所成の法なるが故に定相有ること無し。定相無きが故に一切和融
す。豈互に轉ぜざらんや。然るに因縁所成は其事空しからざるが故に、因縁盡きざれば、
種種の事相條然として相分れ、彼此都て亂れず。是故に事事不即不離は、不即の門を以て
本と爲すなり。」

問ふ、「若し爾らば理不即不離とは何が故に不即なる。何が故に不離なる。乃至何が故
に不離を本と爲すや。」答ふ、「眞理若し定めて異ならば是れ即ち應に有爲なるべし。體性衆
多の法は必ず其因縁を待つ。若し因縁有りて生ぜば應に是れ有爲なるべきが故に。況んや
若し異相有らば即ち應に是れ事相なるべし。豈法性と名けんや。眞理若し定めて一ならば
應に各々の性に非ざるべし。若し各々の性に非ざれば、何んが諸法の性と名けんや。況ん
や若し一相有らば即ち應に是れ事相なるべし。何んが法性と名けんや。是故に眞理不即不
離なり。但し詮門に寄せて強ひて之を施設せば、一味を本と爲す。所以は何ん。無相法の
中別相無きが故に、此義に由るが故に、色の理なりと雖も、理は質礙無し。焉ぞ心性に異
らん。心の理なりと雖も、理は縁慮無し。焉ぞ色性に異らん。乃至五根五塵心王心所等の
法の種種の理は各各相對して是の如しと知るべし。故に衆多不同とは皆是れ有爲の相にし

【二八】四、十界互具を明す。十界とは六趣及び聲、緣、善、佛なり。是を六凡四聖と謂ふ。台家は盛んに十界互具を談ず。今彼に對して、不即不離の二門を立つ。若し有爲の事相より論ぜば、則ち是れ不即と爲す。若し無爲の理性より論ぜば、則ち不離と爲す。今其不離の邊に依つて互具と爲す。

て全く眞性の中の不同に非ず。故に聖教の中に名けて平等の性と爲し、稱して虚空界と爲す。是れ即ち事相は無量萬差なり。眞理は一味にして生ぜず滅せず、一に非ず異に非ず、色に非ず心に非ず、内に非ず外に非ず、差別無きが故に。是を以て三科四諦等の性、三界五趣三乘等の理、皆互に融通して彼此隔て無し。然るに此一理の各各事相の性と爲さば、色の性は凝然として質礙すべく、理心の性は凝然として縁慮すべく、理乃至一一皆是の如くなるが故に、不即の門は事相に従ふ。其至實を談ずれば、是れ眞理の剋性門に非ず。直に理體を論ずれば、是れ一味なるが故に、不即不離思議し難き中に、若し強ひて施説せば不離を本と爲すなり。』

問ふ。若し爾らば地獄界の理、即ち佛界の理なりや。乃至佛界の理即ち地獄界の理なりや。其鬼畜乃至聲聞等の一一の界に於て、問を爲すこと亦爾り。答ふ。十界五具は他宗の法門か。自宗の意は二門有るべし。有爲の事より傳へて之を論ずる時は、爾らざるを本と爲す。所以は何ん。地獄の依正は極苦の色心なり、其實性を説いて安立眞如と名く。佛界の依正は極善の妙體なり、其實性を説いて正行眞如と名く。彼此の理性條然として亂ること無し、一一の法性各別に證するが故に。若し直に理體を談ずれば、平等にして差別無し。更に所隔無きが故に。五具の義亦必然たり。安立眞如と、正行眞如と、皆一眞如法性の理なるが故に。故に唯識の疏に云はく、「詮を廢して體を談ずれば、即一眞如なり」文。何に況んや事相も亦定相無し。不即を本と爲すと雖も、亦不離の義有り。各各の眞理豈定

【二九】五、事理の不即不離を明す。論八に事理不一不異を明す。

【三〇】六、事理に就て疑を決す。是れに二有り。初に不即の疑を遮し後に偏即の疑を遮す

異ならんや。若し此門に約せば事相皆融して五具の義彌彌効勞無し。」

問ふ、「理事相對して不即不離とは何が故に不即なる、何が故に不離なる。乃至何が故に二門均等なる。」答ふ、「唯識論」に云はく、「異ならば應に眞如は彼實性に非ざるべし。不異

ならば此性は應に是れ無常なるべし。彼此俱に應に淨非淨の境なるべし。即ち本後の智用應

に別無かるべし」文。此れ即ち本經「解深密」の中に、善清淨慧菩薩、勝解行地の衆多の小菩

薩各執して理事の一異を評論して、或は一向相即と云ひ、或は一向相離と云ひ、或は猶

豫簡擇して決定の解を生ぜず、種種不同なるを擧げて、如來に請問す。如來之に答へて其

偏即偏離の二義に於て、佛自ら名種種の難破を致す。大いに之を呵して云はく、「愚癡頑

鈍にして明かならず、善ならず理の如く行ぜず」と。其文繁廣なり。披いて之を見るべし。

『唯識論』等は即ち此より起れり。其大綱は事理若し是れ一向相離せば、眞如は應に諸法の實

性に非ざるべし、性は即ち是れ法の至實なるが故に。事理若し是れ一向相即せば眞如は應

に眞實如常に非ざるべし、隨緣轉變して生滅すべきが故に。自餘の諸難皆本文の如し。繁

の故に載せず。是の如き等の理皆必然の故に事理相對不即不離は二門均等にして更に差異

無し。設は一を本と爲し、設は異を本となすこと皆得べからず、都て由無きが故に。」

問ふ、「事は是れ有相、理は是れ無相。事は生滅すべし、理は常住なるべし。事は衆多な

り、理は平等なり。是の如きの不門は實に一向混じ難し。若し爾らば應に是れ一向各別な

るべし。何んが即門有るや。」答ふ、「事若し堅實ならば、此離爾るべし。事既に虚假なり、

【三二】七、偏即の疑を遮す。

【三三】八、不即不離を喩顯す。即ち諸宗所談の眞如縁起の喩を奪つて、自宗の事理の不即不離を成す。

何んが此疑ひに及ばん。偏に他力を以て成じて自性有ること無きが故に、有相に似ると雖も而も定實の相無し。生滅に似ると雖も而も實の生滅無し。衆多に似ると雖も而も實の衆多無し。皆夢境の如く不可思議なり。故に更に無相の眞理に違はず、彼此和融して互に相即するなり。

問ふ、若し爾らば亦應に一向相即すべし。何んが別門有るや。答ふ、其義前に顯る。何んが此問を煩はさん、定實の相無しと雖も、虚假の相無きに非ず。實の生滅無しと雖も、假の生滅無きに非ず。實の差別無しと雖も假の差別無きに非ず。眞理は是の如くならざるが故に、亦不即門有るなり。

問ふ、是義は思ひ難し、喩を引いて之を顯せ。答ふ、水面湛湛として高下有ること無し、相貌有ること無し、風等の縁來る時、波浪忽然として起る、其勢或は高く或は下く、其形華の如く綾の如し。今此事相は縁來すれば即生し、縁謝すれば即ち滅す。其體性は縁來するに由りて方に始めて起ることを得るに非ず。縁盡くるに由りて方に隨つて滅することを得るに非ず。今回且く波に對し、故に水を以て本有常住に喩ふ。豈彼波と一向に相即せんや、然るに波全く水、水の外何の別の物體有らんや。是の如く見る時亦實に不離なり。是れ即ち波相は假有實無にして、有相に似たりと雖も而も定實の相無し。起滅に似たりと雖も而も實の起滅無し。衆多に似たりと雖も而も實の衆多無し。如幻縁生難思の故なり。波若し堅實ならば、水と偏に別ならん。波虚假の故に水と相和して即せず離せず、諸法の事

【三三】九、喩説の濫を遮す。問者の意、性宗の事理相即に居して、疑を起す。謂はく、彼所談者は、水の縁に隨つて、波浪を起す。風止めば、則ち波浪無きが如し。眞如は縁に隨つて、虚妄の事相と作る。眞如を離るるの妄法有ること無し、便ち妄法は唯是れ迷者心に現る所、己に悟れば、即ち妄法有ること無し。

理不即不離なり、此譬喩を以て知るべきをや。

問ふ、「今此譬喩は相即の譬喩なり。水波は一向一體にして都て別門有ること無し。故に風等の縁に依りて起る所の波相は實に其體無し。但是れ水面の高下なり、華等の相に似るは但是れ相似して實に其相無し。若し此を喩と爲さば諸法も亦應に眞理の外に別法有ること無く、有爲の事相皆迷の前の境なるべし。今引いて喩と爲す、其意如何。」答ふ、「是難甚だ非なり、不即の義門の前に具に顯し已んぬ。若し其上の難ならば即ち是れ一向に波浪の起滅を許さざるや。將又一向に水分の常住を許さざるや、若し並に許さずんば、恐らくは是れ横執ならん。若し又俱に許さば不即の義門自然に成立す。相似は是れ假なり更に都て無に非ず。若し難者の如くならば恐らくは假法を誤りて無法と爲さん。假法と無法と其義各別なり。混濫せしむること勿れ。假とは亦有亦無の義なり。無とは都て無なり、更に有の分無し。今此波浪は假にして無に非ず。若し都て無ならば何の縁來る時其相生起し、縁盡くる時は其相滅するや。若し假と許さば何んが前答の上の難を爲すや。故に此譬喩は能く不即不離の喩を成ずるなり。若し所難の如くならば、恐らくは是れ一向に事相を撥無するならん。事相若し無くんば眞理も亦無からん。眞理は獨り眞なるに非ず、必俗の眞なるが故に。眞俗皆撥無とせば、即ち是れ大邪見なり。若し猶事無くして理有りと言はば其義必然として得べからざるなり。若し事を撥せずして迷の前に在るが故にと言はば、若し爾らば悟の前には無し、何爲ぞ事を許さんや。情有理無は、法體に非ざるが故に、若し之に依

りて悟の前の事を許さば、一向に相即責めざるに自ら破る。不生の理の上に虚假の生滅必然として相分れ、唯一に非ざるが故に、若し虚假の故に相即すと云はば、亦虚假の故に定めて即すべきこと難し。即ち是れ不即不離の義なり。何んが是れ一向相即の義ならんや。若し之に依りて我は不即不離の義を許すと云はば、法相の義門自然に成立す。百法の性相、法爾の五姓、皆是れ虚假事相の中の不即の一門なり。即ち彼如幻人法の前の不一差別の所以なり。若し又説いて、悟前の事相は是れ事相なりと雖も、法體は常住不生不滅なるが故に相即すと云はば、言ふ所の事相は、是れ因縁生と爲んや、因縁生に非すと爲んや。若し是れ因縁生ならば寧ぞ不生不滅ならん、縁生にして不滅ならば亦正理に違す。若し因縁生に非ざれば、今の所論の事に非ず。今の所論は縁生の事に對する一異の義なるが故に。何に況んや其事は、是れ有相と爲んや、是れ無相と爲んや。若し是れ有相ならば、必ず因縁生なり。無因自然は正理違するが故に、自然を因と爲すも亦惡因の故に。若し是れ無相ならば即ち眞如の理なり。何んが事相の法體常住なりと云ひて、事理相即の義を成ぜんと欲するや。若し又説いて「眞如を事と名く。是れ法體なるが故に常住の事とは、即ち是れ此事なり。言ふ所の相とは實相の相なり。故に即ち深理なり」と言はば亦今の所論に非ず。今の所論は縁生に望むが故に。若し又説いて「因縁生の事は即ち眞理の相なり。故に事即ち理にして不生不滅なり。此外何の別の眞理有らん」と言はば、還りて前の難有り、因縁生の事にして而も不生不滅なること得べからざるが故に。若し「其生滅は假に生滅

に似たるが故に眞理の不生滅に攝歸す」と云はば、即ち是れ我宗の不即離の中の不離門なり。何んが別義の爲に勛勞を致さんや、凡そ三性門委細の安立は總じて料簡章の時教等の中に其意顯然たり。披いて之を見るべし。』

観心覺夢鈔中

終

觀心覺夢鈔下

三種無性 相無性は所執、生無性は依他勝義無性は圓成なり大都此の如し

【一】 此章を分ちて、三と爲す。一に、兩傳を標顯す。南寺の勝胡、北寺の仁秀等、皆執空の義を傳ふ。又北寺の諸德、南寺の護命等は體空の義を傳ふ。但し此三無性の中其諍ふ所は、唯依圓二性に在り。後遍計に在らず。後遍計に在り。體畢、竟空無の故なり。【二】 二に自の稟承に就く。是れ體空の義を述ぶ。【故に唯識論】 以下は遍計の一性は都て體用無し、依圓二性は實に尅つ其體性全無に非ず。且く義分に約す。これに名けて、空と爲す。故に假説と云ふ。

問ふ、「三無性の中後の二無性は何を以てか體と爲す。若し所執を體と爲さば、相無性と何の別異か有る。若し依圓を體と爲さば、依圓豈其自性無からんや。」答ふ、「後の二無性の體は先德二傳なり。若し南寺諸德の意に依らば、三無性の體皆是れ所執なり。若し南寺の護命僧正及び北寺諸德の意に依らば、後の二無性は次の如く、依他圓成を體と爲す。」云々。此中に且く後傳の意に依らば、依圓の二性は中道の有の故に名けて有と爲すと雖も而も偏有に非ず。偏有に非ざるが故に、必ず空の義を帶す、此空の義を取りて無性と稱するなり。此空の義は即ち依他起は自然性無し。圓成實性は一切の相を離る。此の如く虚假空と及與空性空は、法爾本來法體の上の有る所の義なり。今此義を取りて無性と稱するは、是の如きの義有るが故に、性全く無に非すと雖も、妄執を除かんが爲の故に、假に無性と名くるなり。故に「唯識論」は、後の二無性に於て俱に同じく説いて假説無性非性全無と言へり。非性全無とは、法體中道の故に、名けて有と爲すと雖も、復有に留まらず。有に留まらずと雖も、亦全無に非ず、其無は即ち是れ一分の義なり。此一分を取りて總じて無性と説くと。言故に三無性は次の如く三性を以て體と爲すなり。之に依りて喩を説いて空華

【三無性】以下は執空を難ず。

【三】三に略して旨歸を示す。先づ假に執空を以て體空を難ず。其立難の意、依圓の體は空に非ず。依圓の上は於て、其所執を空と爲す。是を名けて空と爲す。然らば則ち執空にして體空に非ず。

【此義深細】以下は略して結歸を示す。其結歸とは、二傳竟に一途に歸するを謂ふ。

【二諦】眞、俗二諦なり。

と幻事と及び太虛空と相配す。若し皆所執を其體と爲さば、唯一の空華の喩を取るべし。何んが各別の三譬喩を用ひんや。『般若經』の中に此三種を以て密意もて説いて一切諸法皆自性無しと言ふ。未だ此三種の無性を顯了せず。是故に之を總じて無性と説くと名く。』
問ふ、依圓二性所有の空義とは、則ち是れ遍計所執の空なり。所以は何ん。依他起性に自然無きは、遮する所の自然は即ち所執の自然性なるが故に。圓成實性の無相空とは、遮する所の相は亦是れ所執の種種相なるが故に。若し爾らば後の二の無性も正しく所空を論ぜば、皆計所執に當る。何んが所執の空の傳を嫌んや、之を捨て殊に體空の傳を存せば、其所空の法は尤も不審なり。若し直に依圓の體を空とすと云はば、其所空の分は、是れ何の分ぞや。其不空の分とは亦何の分ぞや。所執は妄法の故に之を空する由有り。依圓とは妄ならざるが故に、之を存する由有り。其妄ならざる中に更に何の由有りて、空する所の分有らん。若し全く遣らずんば返りて執空と成らん。若し全く之を遣らば即ち空見に墮せん。彼を察し此を顧みるに執空に如かず。』答ふ、此義深細なり。輒く成立すること難し。練習已りて後之を知るべきか。但し且く其入門を指示せば、所執無き法は是れ依圓なり。故に此法を呼んで名けて無性と爲す。無の名は既に法體に蒙らしむるが故に體空と名く。然るに至無に非ざるが故に假説の無性と名く。』

二 諦 相 依

【一】大分して三と爲す中、一に四重二諦を明す。中に二有り。一に三乗合明に約す。

【二】二に唯大乘に約す。

【第一の俗】世間

【第二の俗】道理

【第三の俗】諸得

【第四の俗】勝義

【三】大分して三と爲す中、二に眞俗の相形を示す。一に相形の理由を

明す。

(一)と

問ふ、「法門無盡なり、何の義門を以て、勝義眞實門と爲すべきや。」答ふ、「我宗の意、四

重の二諦を立つ。謂ゆる世俗に具に四重有り、勝義亦爾なり。世俗の四重は、一に世俗。

謂く瓶衣軍林等なり。二に道理世俗。謂く蘊等の三科なり。三に證得世俗。謂く苦等の四

諦なり。四に勝義世俗。謂く二空眞如なり。勝義の四重は前の世俗に形して次第に之を立

つ。即ち初の俗に形して四重の眞を立つ。謂ゆる三科、四諦、二空、一實是なり、第二の

俗に形して、三重の眞を立つ。謂ゆる四諦と及與二空、一實是なり、第三の俗に形して、

二重の眞を立つ。謂ゆる二空、一實是なり。第四の俗に形して一重の眞を立つ。謂ゆる一

眞法界是なり。今此廢立は三乗合して明す。

若し偏に菩薩の二諦を明さば實法を第一の俗と爲す。五蘊四諦等の十善巧を第二の俗と

爲す。三性無性唯識の理等を第三の俗と爲す。二空眞如を第四の俗と爲す。今此後の三は

即ち是れ勝義の中の前の三なり。其第四重の眞勝義は、即ち是れ二空廢詮談旨一眞法界な

り。第一俗に形して四眞を立つる等の義前の如し。

(三)とおよ 凡そ眞は獨り眞に非ず必ず是れ俗の眞なり。俗も亦獨り俗に非ず必ず是れ眞の俗なり。

是を眞俗相形の義と爲す。故に俗事の中に定んで眞理有り。眞理の中に定んで俗事有り。

若し其一を闕かば其二を失す。若し二を失せば即ち是れ撥無の大邪見なり。若し俗事無くん

ば、眞理有るべからず。若し眞理無くんば、俗事有るべからず。是れ必然の理の故に、此に

【二十一法】心王と五遍行と五別境と善の十一。

【是の如く：所縁なり】華嚴經の所説。

【四】二に正しく相形を明す。

【一に有無對】有は四眞。無は初俗

【二に事理對】事は第二俗。理は三眞。

【三に淺深對】淺は第三俗。深は二眞。

【四に詮旨對】詮は第四俗。旨は第四眞。

【五】大分して三と爲す中、三に略して典據を指す。

の一法なり。所縁の眞理は即ち其能縁の智の自性なり。正智と言ふは且く相應の一數の名を擧ぐ。實を以て論ぜば同時一聚の心王、心所、二十二法、是時皆各々の自體の平等實性を證す。其依身等は即ち第八識の長時所變なり。其七八等は條然として存す。一切衆生、無量の事相、無邊の諸佛、無數の依正も亦復是の如し。是の如く心と佛と及び諸の衆生との平等實性は、即ち此れ正智の所縁なり。是の如き萬差衆多の事相、若し之れ無くんば其眞理は是れ誰が眞理なる。故に俗諦成立して眞諦能く成ず。眞諦成立して俗諦能く成ず。此義に由るが故に能く法相を談すれば、能く法性を知る。若し法相を辨ぜずして、能く法性を知るは是處有ること無し。

今此四重の二諦は即ち是れ四重相對なり。謂く一に有無對。第一世俗は是れ所執の故に體性都て無なり。所餘の四重は所執に非ざるが故に、體性無に非ず。二に事理對は前の有の中に於て五蘊等の法は殘近の相の故に之を名けて事と爲す、三性等の法は深遠の性なるが故に之を名けて理と爲す。三に淺深對。前の理の中に於て三性等の法は差別門の故に之を名けて淺と爲す。二空等の如きは一味の理の故に之を名けて深と爲す。四に詮旨對。前の深の中に於て二空眞加は猶空門に依りて施設するが故に之を名けて詮と爲す。一眞法界は都て詮門を越ゆるが故に、名けて旨と爲す。今此四重は無量萬差の法門を攝在して、盡きざることを無し。

(五)し、四俗一眞は本論の説く所なり。四重の勝義は唯識の明す所なり。具には二諦義林の中に

述ぶるが如し。』

二重中道

【一】分ちて三と爲す中、一に略して二重の中道を明す。

【而るに他門に云】言論門に就て三性の對望中道を明す。

【二】分ちて三と爲す中、二に廣く中道を明す。この中、四重を開陳して自ら四と爲す。

(一) 問ふ、「我宗の意何の義門を以て、中道と名くるや。」答ふ、「義林章の中に、中道の理を明す。二重の義有り。一には言詮中道。謂く縁生の法は體都て無に非ず。此縁生に於て妄に計する一切の遍計所執は體性都て無なり。此縁生の中に唯一切所執を遠離する空性の眞如有り。彼空性に於て亦此因縁生法有ることを得るが故に、一切法は空不空に非ず。是の如く三性相對して中道の義を詮顯するなり。二には離言中道。謂く一切法は體、是の如く或は有或は無なりと雖も、眞勝義の中に心言絶するが故に名けて中道と爲す。今此二重は、其法體を談すれば更に別異無し。但是れ三性不即不離の法門なり。而るに他門に對して其義を詮せば、我法は有に非ず、空と識とは無に非ず、有を離れ無を離るるが故に中道と名く。是れ言詮門なり。若し内證に住して思議を止めは、此れ即ち一實離言の中道なり。」

(二) 問ふ、「夫れ中道は、一の法體にして二邊を離るるの義なり、今成ずる所は所執の空と、依圓の有と、彼此相對して中道と名く。若し爾らば既に是れ各別の法門なり。豈是れ一法の非空非有ならんや。中に就て所執は、體都て無なるが故に是れ法體に非ず、其法體とは但是れ存實の依圓二性なり。故に遂に歸する所は一切の法體有の一邊に留まる。豈是れ中道究竟の理ならんや。」

【三】 四重の中、第一重を明す。

(三) 答ふ、「此疑は皆以て來たすべからざるなり。誰か言ふ三性は各別の法體なりと、是れ一法中の非空非有中道の義なり。是れ一法中道の義なりと雖も、妄執縁起眞義の三重、淺深條然として相濫せざるが故に、開して三自性の法門と爲すなり。故に『唯識論』に云はく、

「此三は異と爲んや、不異と爲んや。應に俱非と説くべし。別體無きが故に。妄執、縁起、眞義の別の故に」文。誰の有智の人か無別體故の文を見ながら、猥に別體定離の法門と爲

んや。然らば三性即ち一性、一性、即ち三性、三に非ず一に非ず。亦は三亦は一。是れ其三性の義理なり。已上且く所執を空と爲し、依圓を有と爲すに約して大都を論ずるなり。

【四】 四重の中、第一重を明す。【空と言へども】 遍計の中道なり。

若し委しく談ぜば空と言ふとも空亦是れ即ち有なり。實我實法は情に當りて現するが故に、此分を撥無すれば亦損減と爲す。然るに理に據りて言はば、其體都て無なり。此門を辨ぜざれば亦増益と爲す。當に知るべし遍計所執も亦是れ空に非ず有に非ず。其依圓の性は有と言ふとも有も亦空と言ふべからず、所執の眞俗體性空の故に。若し夫れ依圓を稱して有と爲るが故に。便ち依圓は一向に有と謂はば是れ妄執の故に、即ち是れ増益なり。然るに聖智の境の離言の法體は、其體無に非ず。此を撥無すれば亦損減と爲す。是故に依圓の二性も亦是れ空に非ず此れ猶大都なり。

【其依圓】 依圓各中道なり。

(五) 若し更に委細に其實を論ぜば、其計所執の理無の中に亦非空非有の義有り。謂ゆる増益損減の相は皆之を遣るが故に能く偏有を遮し、亦偏空を遮す。豈是れ一向に撥無の空ならんや。是の如く即ち其情有の中に亦非空非有の義有り。且く一人の如く、一分の妄情偏有

【五】 四重の中、第三重を明す。

【六】 四重の中、
第四重を明す。

と執する時、其相暫く偏有に似て現すと雖も、悟證門よりして總じて之を見れば、當情の相は未だ必ずしも是の如くならず。或類亦執して偏空と爲すが故に、明かに知んぬ、此偏有の相の自性は本來決定せざるなり。又一人の如く、一分の妄情偏空と執する時、悟證門よりして總じて之を見れば、當情の相は未だ必ずしも是の如くならず。或類亦執して偏有と爲るが故に、明かに知んぬ、此れ偏空の相の自性は亦本決定せざるなり。是れ即ち妄情の思定んで相無きが故なり。重たる意の云はく、「妄情の執見増損時に隨ふ。故に所執の二相は各決定の相に非ず」言爲。是の如く論ずる時は、當情現の相は定んで偏有に非ず、定んで偏空に非ず。此も亦豈中道の義に非ずや。若し其依圓非有門の中に亦非空非有の義有り。一切妄執を遠離する義の故に、増損皆離る。即ち是れ中の故に。是の如く依圓非空門の中に亦非空非有の義有り。即ち是れ離言なり。誰か有無と定めん。若し一向に非空ならば、豈是れ執法に非ずや。若し是れ執法ならば豈依圓と名けんや。道理甚だ明かなり、何事か之に如かん。

(六) 是の如く重重なるも猶盡きざる有り。所以は何ん。且く所執理無の中に増益を遣る門の如きは有を遮するが故に、名けて非有と爲すと雖も、既に偏有を遮して中有を遮せず。豈偏空ならんや。故に亦非空非有の義なり。自餘の重重一一の義門は皆之に准ふべし。是の如く遂に絶言に至る。

【七】 廣く中道を明す中、
要義を

然るに其重重非有の義、是れ重重なりと雖も束ねて皆所執空門に歸す。又其重重非空の

詳にす。文の大意は、一法中道は即ち是れ三性對望の中道なり。

【八】分ちて三と爲す中、三に問答料簡を明す。この中三有り。初に依圓の中道を詳にす

【九】問答料簡の中、二に本頌を辨明す。

門は是れ重重なりと雖も束ねて皆依圓有門に入る。是れ何が故なる。但是れ三性不即離の故に、所執の空、依圓の有、一際に歸入す。是の如き等の無盡の義有るなり。若し爾らば所執の空を偏空と爲し、及び其依圓の有を偏有と爲し、偏有偏空兩門相對して合して中道と爲すの意を得て疑を爲す。豈不足言の疑にあらずや。一切執を遣りて遺虚と爲すは是れ何の義ぞや。豈依圓の上の偏有偏空の諸の僻執を遮するに非ずや、是の如く遮し已りて依圓を顯得す。豈是れ一向に偏有の法ならんや。偏有に非ざるは、定んで是れ中道の有なり。若し是れ中道の有ならば豈有に留まるべけんや。已上且く言詮中道に就いてすら猶以て是の如し、何に況んや其勝義勝義廢詮談旨微妙究竟一實體に於てをや。』

問ふ、『今論する所は、依圓を一と爲して、所執空に對する義門の談なり。若し其依他と圓成實と別に論する時亦各中道の義有ることを得るや。』答ふ、『亦即ち之有り。謂ゆる依他は、體虚假の故に是れ實有に非ず、亦都て無に非ず。圓成の妙理は體無相の故に有の相有ること無く、亦無の相無し。是故に一一皆中道なり、其一一の門の重重の義、乃至事理、不即不離の諸門總束して義皆上の如し。』

問ふ、『慈尊の所説の二行偈頌は都無等の頌なり。是れ何の門の中道を明すや。若し言詮門ならば、慈尊何んが淺近の門を説くや。若し離言門ならば、文に既に三性相對して空有の義を説く。豈言詮中道門に非ずや。』答ふ、『彼頌は慈尊、無着等に對して正しく中道の義理を授くるの文なり。故に言詮門にして離言門に非ず。離言門は直ちに内證を指す。是れ

【對機說法門】對
手の機類に相應す
るやうに法を説く
こと。
【二〇】問答料簡の
中、三に一法を指
示す。

【唯識義理】今宗
入理の至要、唯識
に在り。故に今八
問答を建て以て此

對機說法門に非ざるが故に。然るに此頌の中竊に離言門の義を顯示すること有り。此は是れ深山なり。口傳を受くべし。』

問ふ、三性相對、猶是れ一法の中道の談とは、尙未だ分明ならず。詳かに之を成すべし。』答ふ、夫れ遍計等の三自性は本是れ一法の三自性なり。謂ゆる且く一の色塵の中に就いて其自性を尋ぬるに、此塵の自性はれ何の法ぞや。既に縁生の故に、如幻虛假なり。是れ實有に非ず亦都て無に非ず。然るに諸の愚夫は妄情迷亂して、或は實有と執し、或は都て無と執す。今此妄情所執の相狀は、是れ此妄情塵中一自性なり。然るに其法體とは、衆縁の所生なり。自然に無しと雖も、縁生は空ならず。是れ亦此塵の一自性なり。今此縁起縁生の法の中に、定んで一切妄執偏有偏空の相を遠離するの妙理有り。此理眞實にして妄倒に非ず。是れ亦此塵の一自性なり。是の如く一色一塵の中に、此三重の妄假眞の性有り。今此三重は皆此色法にして、更に別法に非ず。故に三と名くと雖も、亦即ち一體なり。是を一箇の色塵の自性と爲す。一切の諸法は皆以て是の如し。豈其一法の中道義に非ずや。是故に應に言ふべし、我宗の諸法眞實は、常住、假は生滅に似て、實有の生滅は體性都て無なり。此眞と假と無とは豈相隔すべけんや。故に本一體なり。』

唯識義理

(二〇)と
問ふ、上來明す所の種種の法門、其歸する所は是れ何の法ぞや。』答ふ、若し有爲主に歸

旨を審詳す。
【一】大分して三と爲す。唯識の綱領を提示す。中に三あり、一に所歸の主を陳ぶ。
【二】二に所歸の要を擇ぶ。
【有漏無漏】煩惱を増長せしむるものと、増長せしめざるもの。

【無分別智】諸の推求推察等の分別の作用を離れ、相分を浮べずして、任運に直に眞如の實性に冥合する平等智をいふ。

【大覺位】 如來妙覺の位。
【三】三に識變の理を窮む。中に三あり。一に二箇の理を叙す。

すれば、一切皆唯識なり、若し無爲主に歸すれば、一切皆眞如なり、若し簡擇主に歸すれば、一切皆般若なり。』

問ふ、「此三門の中に何の義門を以てか最要と爲す、又唯識とは、有漏無漏二類の識の中何の識に歸するや。」答ふ、「此三門の中に唯識を最と爲す。若し此門に入らば一切を具するが故に。又唯識は有漏識に歸するを以て本と爲すなり。所以は何ん。若し一切の法皆自心によりて起ると知らば、諸法如夢の悟、忽然として現前することを得る。若し夢の如しと知り已れば、實に我法速に除く。其實我實法とは、損減或は増益有無一異等の一切妄執なり。是の如きの妄執皆止むことを得れば、無分別智忽然として現起し、一眞法界の理に冥合するなり。今此自心は即ち是れ自の妄心なり、是れ有漏の識なり。其無分別智は是れ簡擇の至極なり、即ち觀照の般若なり。其一眞法界とは即ち諸法の眞如なり。是を以て能く自心より萬法を生ずと知れば、自ら般若に歸し、亦眞如に歸す。豈最要に非ずや。無漏識は愚夫未だ發すこと能はず、三界の妄境も亦此によりて起るに非ず。無始の迷を翻じて情に當りて現する所の一切の境界は皆夢境の如く、着すべからざる義を知らんと欲する時、自の妄心諸法を生起すと思惟して、廢詮の極理に入ることを得るが故なり。是故に無始の妄心は忽ち改めて速かに無生を證して大覺位に入るは、唯識觀解に如かざるものをや。」
問ふ、「若し爾らば云何が諸法は自心より起ると知ることを得るや。」答ふ、「義は無量なりと雖も要を取るに二有り。一に熏習道理。二に轉變道理。熏習道理とは、有爲の實法、一

【自證分】主觀の認識作用を更に證知するもの。即ち見分は外境を見分する作用にして、自證分は外境を見聞したりと證知する自體なり。

【見分】對境即ち心中所變の相分を見照すること主觀の作用。

【相分】境の相狀即ち對境のこと。

【四】二に識變じて境なることを明す。

一に皆能生の種子有り。其種子は皆是れ自心の所熏なり。謂く、自證分は體の能熏なり。相見二分は用の能熏なり。見分は能く能緣の種子を熏じ、相分は能く所緣の種子を熏す。其所緣の種は所緣の境に墮する色心萬差、諸法の種子皆悉く之を熏す。謂く色を緣する時、色の種子を熏じ、心を緣するの時、心の種子を熏す。色の中の種種の不同、心の中の種種の差別、一一其法を緣じて、其法の種子を熏す。是の如き熏習は悉く是れ我自心の自體分別の勢力よりして起る所なり。今此種子所生の諸法は、豈我自心より起るに非ずや。轉變道理とは、既に自體分轉して相見と成る。其義は上の如し。一切の緣慮法は、必ず慮解する所有り。其慮解する所は、即ち是れ應に隨ふ一切諸法なり。若し能く慮解すれば定んで所緣を帶す。豈緣慮法と爲して轉變力無からんや。此理決然なり。是故に自心自體の勢力能く變現して諸の境界を成ずるなり。上の二理を以て唯心無境の義を信すべきなり。

問ふ、「心轉じて境と爲る猶未だ分明ならず。何を以て決定して爾りと知ることを得るや。」答ふ、「且く眼を閉ぢ青黄等の色を思惟する時の如き、其青等の思ひ即時に轉じて青等の相を成じて、心の前に顯現す。其義必然なり。今時情に當つて覺知する所のものは是れ遍計所執の相なりと雖も、當情現の者は必ず心中現より起るが故に當情現を以て心中現を推す。其等の思は是れ見分なりと雖も、見分は必ず自體より起るが故に、見分の用を以て體の轉變を推す、此を以て一切を准知すべきなり。是を以て眼を開いて青等を見る時、心

【五】三に萬法如夢を示す。

【十二】十二因縁を指す。

上に浮ぶ所の青等の相は、疑も無く皆是れ自心の思を轉じて其境と成るなり。其本質の境は但是れ今の能縁の思を起すの疎縁なり。心此縁に託して、青等を思ふ時、其心の自體は即時に轉變して、青等の相を成じて心の前に現す。其心中所現は是れ正しき所縁なり。是親所縁縁は、即ち是れ相分なり。其本質の境は、今の能縁心の所變に非ずと雖も、是れ第八識の自體轉變して心中に現する所の親相分なり。第八識の前に亦夢の如く現す。其第八識は亦是れ今時觀心の根本として、同じく自の一心の中に在り。其所變の相は豈自心の外に在らんや。故に一切の境界は皆自心の所變なり。」

(五)と 問ふ、「今熏習と轉變との道理を以て諸法皆心の所作と知ると雖も、之に依りて萬法夢の如きの旨猶未だ信解せず。」答ふ、「列士夢中六十五年、久しと雖も只是れ一夜の妄想なり。」

唯自心の分別より起りて、種種の苦樂の境界を變現す。即ち自ら變現して自らをして之を執せしむ。或は受苦と謂ひ、或は受樂と謂ひ、或は此死と謂ひ、或は生彼と謂ひ、或は偏有と謂ひ、或は偏無と謂ひ、或は定んで是れ亦有亦無と謂ひ、或は定んで是れ非有非無と謂ふ。是の如き妄執、是の如き相狀、其夢覺め已れば皆以て現ぜず。唯虛假不思議の縁有り、今此夢境と其覺境とは、但是れ妄心分別の有無なり。諸法の因縁も亦復是の如し。一切の法は心より起ると知り已れば、夢に類して思ふべき必然の理なりと。其百法等の一切の法門は皆心を本と爲し、皆心より起る。其理顯然たり。皆上に述ぶるが如し。故に百法を談すれば、一心自ら成立し、若し一心を觀すれば、百法即ち宛然なり。乃至十二の

【器界】山河大地等の世界。

【心を一處に制して】遺教經に云はく、汝等當に好く心を制すべし。之を一處に制すれば事として辨ぜざること無し。と云ふに依る。

【六】大分して三と爲す中、二に諸門の唯識を通曉す初問に亦四有り。第一問は三無差の義に就く。

【三界】欲界、色界、無色界。

【次に五重】第二問は五重等の攝屬に就く。

【次に菩薩】第三問は四尋思等の觀に就く。

【次に唯識】第四問は攝歸の主に就く。

生死因縁を無明と名け、行と名く。皆是れ自の心數なり。愛と云ひ亦取と云ふ皆是れ自心の惑なり。識等の五支の種皆自心の所熏なり。生死二支の果は豈自心の生ならずや。我今、依身器界飲食衣服等の種種の物は、皆悉く先世に我胸中に起す所の種種の分別熏積して是の如く成ずるなり。此理を知らざるが故に、生死に輪廻す。若し此理を覺し已れば、生死永く棄つ。心を一處に制して常に此理を思はば、無始の罪暗寧ぞ滅せざらんや。

問ふ、「華嚴經」に云はく、「三界は唯一心、心外に別法無し。心と佛と及び衆生と、是三差別無し」文。今成立する所の唯識の義は、即ち此を云ふか。次に五重唯識及び識の自相等の五種の唯識の中に是れ何の門に攝するや。次に菩薩の加行位中に於て爲す所の四種の尋思等の觀は、即ち成立する所の唯識の觀か。若し即ち是ならば其義云何。次に唯識は、唯是れ有漏識に攝歸するか、又唯有爲主に攝歸するか、無漏識に歸し無爲主に歸するの義之無きや。答ふ、「今成ずる所は、即ち是れ三無差別の義なり。何となれば今の熏習轉變等の道理を以て、若し唯心如夢の解を得已れば、既に定まれる我法無し。何に對してか實他有らん。是故に心外に都て衆生無し。又既に是の如く實の凡界無し。亦復何に對してか實の佛界有らん。是故に心の外に更に佛界無し。是れ則ち一切如幻如夢にして定實無きが故に、定實の我他、定實の凡聖は皆是れ迷情の前の妄想なり。皆之を遣るが故に、其空寂の性は即ち是れ平等の法性なるが故に、其上の虛假如幻の事相は能縁と所縁と不即不離なり、本質と影像とは不即不離なり、佛界と凡界とは不即不離なり。體と用と因と果とは不

【今成ずる】 第一
問に答ふ。 菩薩を指す。
【相】 因果色心等
【次に上の】 第二
問に答ふ。
【上の】 三界唯心を指す。

【用】 相見二分を指す。

【其心】 第一心王
【其所攝】 第二心
【一切境界】 第三色。

即不離なり。故に三界は唯一心と知り已れば、三無差別の理自然に成立するなり。此義に由るが故に、其不離門には即ち佛の色心と、衆生の色心と、行者の色心とは、平等平等なり。此れ即ち萬法一心より起つて幻夢の境の如く、定實無きが故に、相に定相無し、性は無相なり。一塵法界本來無礙此義有るなり。次に上の所成は是れ簡要なり、之を開すれば、五重の階級有り。謂く、熏習と轉變との理に依り、萬法唯心の旨を知ることを得れば、事理、性相、不思議に存し、増益損減、執として遣らざること無し。此れ即ち五重の第一重なり。此を遣虚存實唯識と名く。又萬法に攝して唯識と爲すが故に、内境有りと雖も、唯境と稱せず。是れ第二重なり。是を捨濫留純唯識と名く。又既に色心萬差の諸法は皆白心分別の勢力に依りて、種を熏じて用を起す。是の如く知る時、其所攝歸の色心の諸法は、即ち是れ能緣所緣の二用なり。其能攝歸の自の内心とは、即ち心の自體なり。正しく第三に當る。是を攝末歸本唯識と名く。又是の如く一心に歸するを以ての故に、心所を論ぜず。亦第四に當る。是を隱劣顯勝唯識と名く。又是の如く一心の體に歸する時は、一切夢の如し。相の取るべき無ければ、作證する所は但是れ廢詮一實の境界なり。是れ第五重なり。是を遣相證性唯識と名く。次に識の自相等の五種の唯識も亦此中に在り。謂く、熏習と轉變との理に依り一切法を攝して自心に歸する時、其心の正體は是れ識の自相なり。其所攝の中の所有の心所は、是れ識の相應なり。一切の境界は是れ識の所變なり。諸の不相應は是れ識の分位なり。是の如く攝歸して皆唯識と爲し、遂に實性平等の妙理を顯す。

【諸の不相應】 第四不相應。

【是れ識の】 心心所色。

【實性】 第五無爲次に四尋惠】 第三問に答ふ。

【次に五種】 第四問に答ふ。

是れ識の實性の唯識なり、次に四尋思等は即ち此唯識觀なり。諸法自心に歸すれば、皆假有實無なり。故に二取の空を印して、唯識の實性に入る。然るに諸法に於て能詮の名有り、所詮の義有り。其名に於て自性の差別有り、其義も亦自性の差別有り。今此名と義と自性と差別との四種の諸法は、皆自心の變にして假有實無なり。是の如く觀するなり。此觀の淺位を四尋思と名く。深位を名けて四如實智と爲す。是の如く觀するは即ち熏習轉變等の理に依りて一切皆夢境の如くなるが故なり。故に上に成ずる所は正しく此觀に當るなり。次に五種六門の唯識異説は一に非ず。凡そ一代教所説の種種の萬差の法門は、皆是れ唯識の異なる名號なり。『唯識章』に具に其相を述ぶるが如し。披いて之を見るべし。若し爾らば無漏に歸し、無爲に歸するの門亦以て必然なり。但し有漏の位は智は劣、識は強。無漏の位の中の智は強、識は劣。是故に有漏無漏の兩位は皆俱に識智の二法有りと雖も、識の名は多く有漏位に順ず。又識は了別。眞如は無分別なり。若し了別の性を論ぜば、亦是れ眞了別なり。七眞如の中の唯識眞如は即ち此義なり。故に『義林章』に云はく、「或は識の言、具に理と事と有り。或は圓成眞性識と名く。然りと雖も了別の名の正しく顯るる所は、専ら有漏縁慮の心法に在り。是の如き義の故に、唯識の名は殊に有漏の妄心に歸する義なり」と。爲故に『唯識論』に、初めに我法熏習の位に約して、三能變の識の法門を明す。正しく『華嚴經』三界唯心の説に同じ。亦『中邊論』に、虛妄分別と云ふに同じ。三界心と云ひ、妄分別と云ひ皆有漏心に歸する義なるが故なり。此れ即ち凡夫自ら自心を觀じて、速

【資糧】 道を修むる基本となるもの。資財と糧食に喩へていふ。

【含識】 有情を指す。

【七】 大分して三と爲す中、三に止觀の行相を指示す。初に經説を指す。

【八】 後に要行を的示す。

【刹那】 時の極長を劫歳と曰ひ、其極短を刹那と曰ふ。

【一】 大分して二と爲す。一に正明

かに覺位に至るの要術なり。頓證菩提の道は實に此法に在るをや。人夢中に處して自ら是れ夢と知らば、其夢必ず寤めん。我等今生死の夢中に處して數唯心如夢の道理を觀ぜば、覺悟の朝に至らんこと定んで近に在らんか。故に『唯識』に云はく、『若し是の如く唯識の教を知り已れば、便ち能く無倒に善く資糧を備へて、速かに法空に入り、無上覺を證して、含識の生死輪廻を救拔す一文。』

(七)と 問ふ、『若し爾らば此觀を修行するの時、止觀の行相云何が知らんや。』答ふ、『唯識止觀の法とは具に『解深密分別瑜伽品』に在り。披讀して之を知るべし。』

(八)と 問ふ、『上來明す所は猶以て廣博なり。最初の始行、當分の要法、願くば肝心を示せ。』答ふ、『大聖慈尊教授の頌に云はく、『菩薩定位に於て、影は唯是れ心と觀ずれば、義相即ち滅除す。審に唯自想なりと觀ず、是の如く内心に住して、所取は有に非ずと知り、次に能取も亦無し。後に無所得に觸ふ一文。所取と言ふは、有無、一異、俱不俱等の一切定相なり。能取と言ふは、今此相を取るの一切の心なり。此諸の心と境とは皆自心より起るが故に無境の如し。覺悟の智の前に何の所得か有らん。頌の意とは此の如し。但此意を以て正しく觀法を修せよ。猶之を思ふべし。』

攝 在 刹 那

(一)と 問ふ、『唯識の行人行位の次第は其相云何。』答ふ、『唯識論』に云はく、『資糧位の中に能

此中廣く行位を陳ぶ。中に亦三あり一に五位を叙す。

【二】廣く行位を陳ぶる中、二に三道に約す。この中一に見道を明す。亦一に重種の相を述ぶ。
【此より】以下正しく見道を述ぶ。一に眞見道を明す

【此道】以下相見を明す中、初に三心の相見を明す。

【次に十六】以下後に十六相見を明す。是に亦二有り初に所取能取の十六心觀を明し。後

く深く信解し、加行位に在りて、能く漸く所取能取を伏除して眞見を引發し、通達位に在りし如實に通達し、修習位の中に所見の離の如く數數修習して餘障を伏除し、究竟位に至りて出障圓明なり。能く未來を盡くして、有情類を化して、復唯識の相性に悟入せらしむ。文。

(三)

問ふ、「見修無學の三道の種子は何の位に增長せしめ、何の位に現行を生じ、如何が修習するや。」答ふ、「始め法界等流の教を聞き、數數多聞熏習力の故に、深固の決心を發してより以來、法爾無漏の種子を熏増す。乃至世第一法の位、爾時見道無漏の種子生果の功能は皆悉く具足す。此より無間に歡喜地に入り、其初刹那に眞見道の無分別智を得。此に無間解脫の二道有り。無間道の位は正しく能く分別所起の一切の二障を斷除し、解脫道の位は方に其滅を證す。此の如き時間は多念を経ると雖も、能く念念に理智冥合す。其相等しきが故に、總じて一心と名く。此道究竟して次に三心相見道の位に入る。是れ後得智なり。然も猶如を緣するが故に、非安立なり。非安立なりと雖も、相を變ずるが故に相見道と名く。其三心とは、一に内遣有情假緣智。即ち生空の後得智なり、生空の眞如を觀す。二に内遣諸法假緣智。即ち法空の後得智なり、法空の眞如を觀す。三に遍遣一切有情諸法假緣智。即ち俱空の後得智なり、二空の眞如を觀す。今此單重の三心發し已りて、次に十六心相見道に入る。十六心とは苦等の諦に於て各四智を起す。故に十六有り。此に於て亦二種の十六有り。一に所取能取の十六心。八は眞如を觀じ、八は正智を觀す。二に上下八諦

に上下八諦の十六心觀を明す。

【次に修道】以下三道に約す中、修道を述ぶ。

【轉齊】中品の無漏種が生ずる時、前の下品の無漏の種、轉じて中品の無漏種に齊しきを云ふ。

【此の如く十地】以下、三道に約す中、無學道を述ぶ中に六有り。一に種現相狀を明す。【初念】解脱道。【非障有漏】有漏善と三無記の全と異熟生の一分と法執一分とを除く。【二十一種】遍行五、別境五、善十一

の十六心。八は下界四諦の眞如を觀じ、八は上界四諦の眞如を觀ず。今此二種の十六の前後は宗教異釋す。或は所取能取を先とし、或は上下八諦を先とす。或は行者の意樂に隨つて不定なり。上來一心と三心と十六と皆是れ下品無漏の種子の所生なり。是の如く三重の驛を経歴し已りて次に修道に入り其初は猶是れ歡喜地の内なり。今此無漏は即ち中品無漏の種より生ず。其中品の種は見道の間、念念增長す。是の如く是の如く熏増せらるるが故に、便ち修道所念の智、生ずることを得。此時彼見の下品の種子も亦復中品の種子に轉齊す。故に修に入り已れば、下品の種無し。此より已後は地地俱生の智障を斷除し、數數無分別智を修習して、乃ち金剛に至る。是時一切俱生の煩惱及び極微細の所知障の種は悉く皆斷除す。此の如く十地を修習するの間、念念に上品の種子を熏増す。所以に遂に佛果の初念に至る。爾時一切の非障有漏と及び劣無漏とは皆悉く捨て已つて、上品の種子初て、現行を生ず。有ゆる一切中品の種子、亦復上品の種子に轉齊す。故に佛果の位には下中品に無し。但最極上品の種子のみ有り。今此上品の種子の中に最上無漏八識の心王各各の種子と、二十一種の相應の心所の各各の種子と、此心心所各各の相分一一の種子と、相分の中の五根五境等の諸の種子とは皆悉く具足す。相好光明周圓際り無し。衆寶莊嚴の淨土等の體、最極善性五塵の種子、皆此中に在り。要を取りて之を言はば、即ち是れ無漏十八界の種なり。是の如き諸の種子佛果に入る。初念一時に現行を生ず、譬へば日輪始めて山を出で、千光萬耀一時に具足するが如し。是の如きに由るが故に、諸佛の諸根

【又此位の中云云】
六の中、二に王所
相縁を明す。

【又此位の中云云】
六の中、三に四分
相縁を明す。

相好一一無邊にして、身量國土邊際を知らず。凡そ一切の事は思議の道を越ゆ。此れ即ち三大無數劫の間に無量無邊恆沙の福慧資量を修習して、限り無き善根を以て方に感得する所なるが故に。一一の相好一毛端に至るまで、恆沙塵數の功をもて成ぜざること無し。是を即ち名けて自受用身と爲す。其法身とは此智の證する所の圓滿眞如なり。其他の受用及び變化は、此智の現する所の相分の佛なり。其化身の中に乃ち無量無邊隨類應同の身形有り。謂ゆる虎狼野干獼猴等の種種の身、及び人中の欲天色天等の種種の身なり。是の如く他受用と、及び其變化身と、重重の化相は一一皆五蘊十八界等の諸法を具す。皆八識有り、諸の心所有り。凡身を現する時は即ち十煩惱二十隨惑等の雜染法皆悉く具足す。其體依他にして各各皆能生の種子有り。是の如き化現の色心の種子も亦皆無始所具の法爾無漏の種子の中に在り。今果に至り已れば、即ち自受用大圓鏡智相應の淨識の持する所なり。是の如き化現の心心所法は其體是れ種子所生の依他の性なりと雖も、相分心にして實心に非ざるが故に、皆非縁慮なり。故に煩惱惑障を具足すと雖も、實の凡に非ず。實に是れ無漏清淨の法なり。又此位の中の淨八識聚は、自他展轉して皆互に相縁す。謂く眼識聚の心王心所、通じて八識の心王心所を縁じ、乃至第八の心王心所、通じて八識の心王心所を縁す。一聚の王所、異聚の王所は、皆障礙せず。能く遍縁するが故に。又此位の中の四分相縁じて不可思議なり。謂く、一の見分は通じて四分を縁じ、一の自證分も亦通じて四分を縁じ、證自證分も亦復是の如し、但其各各の自分縁は刀自ら割かず。理必然の故に。是れ直

【又此諸智云云】
六の中、四に四智
相縁を明す。

【又此諸智云云】
六の中、五に四智
現相を明す。

【加之云云】 六の
中、六に佛共不共
を明す。他受、變
化の二身の化用を
述ぶ。

ちに自分の用を縁するに非ざるなり。他の所變の自分の影像を以て、所杖の質と爲して、相分を變じて自ら縁することを得るなり。此復云何。且く一聚の心王心所相縁の時の如き受の心所心王見分を縁じて、變ずる所の影像は即ち是れ心王彼影像を以て本質と爲すが故に。亦影像を變じて自の見を縁するなり。自餘此に准ぜよ。二釋有り且雖も。又此諸智品、眞俗を證すること種種なり。圓鏡と平等とは恆時に眞俗の二境を合觀す。妙觀察智は應に隨ひ自在なり。或は唯理觀、或は唯事觀、或は二俱に觀ず、成所作智は事を成ずる智なるが故に、俗觀を本と爲す。神通變化難思の事業、専ら此智の能なり。各各相應の心王心所は、同一縁の故に、亦復是の如し。又此諸智皆遍なく能く一切法に縁すと雖も用に異り有り。謂く鏡智品は自受用身と淨土との相を現じ、平等智品は他受用身と淨土との相を現じ、觀察智品は自他の功德と過失とを現じ、成事平等智品は他受用身と淨土との相を現じ、觀察智品は自他の功德と過失とを現じ、成事智品は能く變化身と及び土との相を現す。加之諸の有情類は無始の時より來種種法爾互に相繋屬す。或は多一に屬し、或は一多に屬す、若し其所化共じて縁有る時は、其有縁の佛は設ひ無數なりと雖も、同處同時に身土を變爲して、形狀相似て相妨礙せず。展轉相雜して増上縁と爲り、所化の生をして、一佛土に一佛身有りて爲に神通を現じ、說法饒益すと謂はしむ。是の如き等の事は皆不思議なり。然るに此三身即ち一佛身にして、各別の諸佛身の如きに非ざるが故に彼非縁慮の相分の心と自受用の縁慮の實心とは長時和合して、彼用と此體種種の利益の事を作すなり。』

【三】 廣く行位を陳ぶる中、三に三祇に判屬す。

【四】 大分して二と爲す中、二に題意を結歸す。初に究竟に約す。

【法身如幻】 三身の法身に非ず。受用身を指す。謂ゆる智法身是れなり。即ち不斷常にして生滅有り、自性常に非ざるが故に如幻と曰ふ。

(三)と問ふ、「今此五位は三阿僧祇に如何が判屬する。」答ふ、「地前の資糧と加行との二位を總じて一大阿僧祇劫と爲す。其初地より第七地に至るまで總じて第二阿僧祇劫と爲す。第八地より第十地に至るまで總じて第三阿僧祇劫と爲す。金剛心の位は第十地の終、即ち是れ等覺なり。相好の百劫も亦此中に在り。」問ふ、「此三大劫に於て超越の類有りや。」答ふ、「若し是れ上上の精進の菩薩は、或は衆多の中劫を超越するあり、或は數多の大劫を超越する有り。然も決定して無數の大劫を超越すること有ること無し。」

(四)と問ふ、「若し爾らば此時既に長遠なり。何の日何の時か成佛することを得んや。」答ふ、「唯識の本疏に此疑問を擧げて自ら答へて曰はく、「夢に處して多年と謂ふ、攝論に廣く説くが如し」文。退いて攝論を勘ふるに速證菩提の義を述釋して云はく、「夢に處して年を経ると謂ふも、悟れば乃ち須臾の頃なり。故に時は無量なりと雖も一刹那に攝在す」文。此文

意を得るに學者の義區なり。今一義に云はく、「法身如幻にして三世一念なり、現在二世一刹那の中に過去漫漫の劫數を攝在す。亦未來永永の年歳を攝す。此れ即ち現在一念の法に前に酬ゆる相有れば、假に過去と名く。是を増因と爲す。實の過去無し。後を引く用有れば、假に未來と名く。是を當果と爲す。實の未來無し、此現在の法前に望み後に望んで假

に名けて果と爲す假に名けて因と爲す。實の現在因果の二法無し。是の如く如幻假有實無の三世安立不思議の故に、長時も定に非ず、短時も實に非ず、實の長時と謂ひ實の短時と謂ふは、皆是れ妄執なり。若し唯心如幻の覺を得已れば、更に定んで實の三祇劫量無し。故に

【五】題意を結歸する中、後に分證に約す。

【八相成道】佛及び菩薩が衆生演度（び菩薩が衆生演度の爲め、世間に出現して、八相を示し給ふこと。降兜率、託胎、降生、出家、降魔、成道、轉法輪及入涅槃。）

妙覺の智一たび起る時、三大僧祇無邊の劫數皆夢境の如く一念刹那の相分に攝在す。質影違はず、心境乖ざるが故に三祇を執して長遠と爲るは但是れ我心の愚妄なるのみ。數數唯心の道理を思惟し、漸漸に其れ定んで實の迷を離せば、分分に皆應に長時の歎を除くべし。何んが徒らに劬勞して日月を經んや。」

(五) 問ふ、「今成する所は三大僧祇如幻の理に依りて、刹那に攝すと觀じて長遠の定執を除遣するの義なり。仍りて且く之を置く。若し我宗の意、未だ妙覺に至らざるの前に乃至資糧等も亦即身成佛義有りや。」答ふ、「若し分證を論ぜば其義有るべし。謂く上根上智の機有り。勇猛に唯識觀を修習せば即身に初發心住に入るべく、初發心住に能く八相を現するは宗家の定判なり、故に其時分に即身成覺の義有るべし、謂ゆる分得の覺智已に起る、此覺は是れ第六識中の分得品なりと雖も、一身の八識一異ならざるが故に、其不異門は彼此無礙にして隔つる所無ければ、假説して四智菩提と名くべし。例せば彼他染熏成に由りて、變じて我法に似るが如し。染を以て淨を推するに其義疑無し。依身相好皆此心變なり。能變所變能依所依も亦即離せざれば、應に佛體と名くべし。其所觀の理は即ち唯識性一實境界なり。亦擬宜して法身と名くることを得べし。是の如く分得假説の時即ち是れ三身具足の佛體なること其理必然たり。若し此智を得已れば、設ひ八相成道を化現せざる時なりと雖も、常に覺者と名くべし。是れ即ち法體如幻虛假にして皆無礙なるが故に。若し一分の覺悟智を得已れば、之を説いて佛と爲す。全く相違無し、但其上根上智の機は、先世數數此行

を修習して、今生に初發心住に入るに堪へたるの大機なり。其機は宋代だも希なるものか、此分に非ずと雖も、心を勵まして修習せば分に隨ひ、堪ふるに隨つて其益有るべし。大乘の法力不思議の故に、實相の理大神驗の故に。然らば只無用の疑網を止めて、須らく勇猛の勤修を企つべきのか。今世間を見るに正見邪見利根鈍根其機現に區なり、其中質直利根の人は決定の信を取りて、一心に修行せば、分分の得益必然の事か。若し分に聞法以前に異なる解を起すことを得、三毒等の失聊か微なること有らば是れ隨分の益なり。但し心に當りて深く愚癡を悲しまば、何れの世にか隨分の知解を起すことを得ん。唯願ふ所は此微縁を以て當來に悟を得んことを。豈己が愚を以て總じて世間を推さんや。法滅の時入見の者有るは、宗家の釋なり、正見の明人怯弱すること勿れ。』

【六〇】第二結示。
是を一部の總結と爲す。

上來所述の義理推尋片言も實に契はば、衆生に施與して願くば有縁と共にし、菩提心を發して同じく淨利に生じ、盡く佛道を成ぜん。抑一切罪の中に謗法を最重と爲す。設ひ一門を信すと雖も、餘法を謗毀することあらば皆是れ地獄の業なり。『十輪經』に説くが如し、恐るべし、慎むべし。顧みずんばあるべからず。見ずや夫れ深密は此意を説き他は之を諍はず、定んで知んぬ。是諍無きの舍那の金言なり。瑜伽此旨を演じ、世之を疑はず。定んで知んぬ、是れ疑無きの補處の傳燈なり。既に決定の佛意なりと知り已んぬ。信謗の益損豈小なるべけんや。其非謗とは未だ必ずしも罵詈するにあらず。輕淺撥無、皆是れ非謗なり。而るに他家の門葉偏執の小生は頻りに權宗の名を呼んで、實に法性を隔つと謂

【法性を隔つ】 我宗を斥くの意。

【實義有り】 爲實
施權の故に。

【中】 我の中道を
指す。

ふ。其言の意は未だ審定を得ず。是れ法中一向に都て此等の性相無し。但是れ如來機を誘ふが爲の故に名けて權と爲すと爲んや。是れ法中此實有りと雖も眞理に非ず、是れ事相の故に名けて權と爲すと爲んや。若し先の如くならば、如來豈妄語を以て、衆生を利せんや。衆生豈虚説を信じて、解脫を得んや。若し方便教は皆以て然るが故にと云はば、豈方便教皆妄語ならんや。我宗は而らず。設ひ方便教も皆實義有り、設ひ隱密の説も必ず顯了に順ず。故に頓悟の前には、皆中道教、悉く法性を詮む。上に抄し已るが如し。未だ見ず。未だ聞かず、聖教の中に虚妄語有ることを。汝等自宗に迷ひ、亦他宗に迷うて是の如き誤を致すと謂ふべし。若し後の如くならば、汝等が宗の極理、豈廢詮に過ぎんや。若し即時を以て其勝と爲さば、何んが事を降して權と爲すや。若し偏即を以て其勝と爲す。豈邊を以て破らんや。中若し定離は中道に非すと云はば、汝等見ずや不即不離の文。若し學者定離と謂ふと云はば、豈學者の謬解を以て宗教の失と爲んや。汝が相即の偏執、豈又宗の失ならんや。若し妄語に非ず、亦事相に非ず、但是れ龜淺門にして實義に非すと云はば、夫れ諸法を攝するは、三重に過ぎず。謂く、事と理と如となり、若し妄語に非ずんば、定んで此三重の一を詮すべし。而も事相に非ず、而も妄に非ずんば、是れ何の法ぞや。若し是れ所執ならば、佛豈所執を説いて衆生を利益せんや。若し是れ事なりと雖も、而も深事に非すと云はば、其深事とは是れ何の事ぞや。若し此礙無礙を超越る不可説言の事相有りや。若し常住にして、都て生滅無きをもて、其深義と爲して、假りに生滅に似たるを以て、猶

【所觀の法】 若事 若理。

淺と爲せば、此は是れ眞理にして更に事に非ず。汝何んが理を誤りて以て事と爲すや。又復我宗の談は全く依他に局らず。歸する所は専ら廢詮一實の極理なり。若し相即を以て深義と爲さば、其難前に准ず。旁之を推徴するに、謗法疑無し。此の如き、惡人は能く無量衆生の正慧眼を抜くなり。此の如き毒言は能く恆沙諸佛の妙法命を害ふなり。哀しいかな、一旦の執情に依りて、冥然として無窮の苦輪に向ふ事を。凡そ儼末の世には質直の人希なり。觀行を習ふものは、性相を名けて淺近と爲す。性相を學ぶ輩は、觀行を喚んで戲論と爲す。是れ即ち差別は淺に似るが故に、他は其深理に迷ひ、觀行は戲に似るが故に、人其實徳を失ふ。中に就いて觀行の宗を弘むる時は、則ち所觀の法を説いて至極の要と爲す。觀行の法は皆以て然るが故に、若し然らざれば證を得ざるが故に、此れ乃ち專注を勸むるなり。偏執を勸めざるなり。然るに返つて餘の教相を謗るは但是れ學者の失なり。當に知るべし祖師の意を辨せずして、觀慧を引かず、還つて惡慧を引く事を。性相の宗を弘むるときは、則ち遍く一切を了して究竟の説と爲す。性相の道、定んで然るべきが故に。若し然らざれば疑を斷ぜざるが故に。此れ乃ち簡擇を勸めるなり。堅執を勸めざるなり。然るに返つて他の修行を謗るは但是れ學者の失なり。當に知るべし、自宗の旨を辨せずして、諸門を盡すは、還つて小門に滯ることを。一味の法水此が爲に濁亂し、無礙の慧光此に依りて滅没す。悲中の悲何事か之に如かんや。之を以て之を思ふに、性相を信解して而も觀行を修するに如かざるをや。其觀行は宗に隨ひて不同なり。其不同は

【像似】 眞の正法
に非ず。

即ち方便門なり。實は皆違はず。是を以て觀行純熟の人は性相を謗らず。性相通達の人
は、觀行を謗らず。其毀謗有るは只是れ膚受の輩なり。古を聞き、今に見るに皆以て
是の如し。之を以て還つて自ら思察するに、己に於ても亦此恐有り。悲しいかな、何か爲
ん。如かず只須らく口を閉ぢて念を攝して、常に正理に住せんには。但し一向無言は像似
正法なり。若し利益有らば豈黙止すべけんや。慎しまずんばあるべからず、顧みずんばあ
るべからず、彼と云ひ此と云ひ靜に之を審にすべし。』

觀心覺夢鈔下

終

律宗聖典

律宗綱要卷上

東大寺沙門凝然述

〔當書一卷凝然の撰なり。經律論三藏の中専ら律藏によりて立てたる宗旨を釋する書なり〕
 〔一〕 教起因縁を述ぶ。

【毘尼】 梵音ギナヤ(Vinaya) 難行、調伏、滅などと譯す。三藏の中の律のこと。

【尸羅】 梵音シラ(Sila) 三學の一六度の一。身口意の惡を制すること

【五住の妄惑】 三界の見惑(一住)、三界の思惑(三住)根本無明(一住)の五惑は迷の因にして、衆生を生死に住著せしむ。

【愛河】 愛欲のこと。

【定慧】 定とは念を斂め心を一境に止めて散ぜしめずその境に專注せしむるを云ふ。慧とは對境に向つて善惡正邪を簡び分く

律宗綱要卷上

(一) 夫れ毘尼の大藏は萬法を蘊めて涯り無し。尸羅の廣行は億度を攝して測り難し。五住の妄惑は戒行に由りて頓に盡き、二死の煩籠は木叉を以て永く絶つ。斯れ廻ち愛河を渡るの寶筏、憤山を越ゆるの神軍、覺都に入るの親因、佛地に到るの直道なるものなり。況んや又三寶、物を導く住持の功是れ新なり。五衍乘を聯ぬるの拔濟の德、甚だ大なり。經論の世に弘まるは専ら毘尼の能に由る、定慧の疑を斷ずるは偏に戒行の力に任す、定に護法攝僧の綱領にして、開務濟物の模範たり。菩提涅槃の擔途、四智三身の良則なるものは唯此戒法のみ、頗る精美を窮めたり。

(二) 今綱宗を擧げて粗義理を顯す。教法歸趣所之に出る有り、法林鬱鬱たり、義澤滔滔たり。樹瀾の中に僅に蹄葉を取ると爾云。戒律の大綱は甚深廣大なり。法界を以て境と爲し、虚空を以て量と爲す。事理を貫括して相性を該羅す。眞俗を包みて遺すこと無く、空有を收めて外無し。虛曠沖幽にして遍容含攝なり。畢竟窮究する其れ唯是のみ。

(三) 且く夫れ大乘の實道は義門森羅たり。衆生の發足、心路區して別たれ、圓宗廣蕩たり、佛乘玄奧なり。頓悟の機、熟すれば直に一道を示す。根縁未だ熟せざれば別して方便を施す。

る精神作用。
 【四智】大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智。
 【三身】法身、報身、應身。
 【二】律宗の大綱を明す。
 【覺】觀ぜらるる事理の總稱。
 【眞諦門】眞諦門、俗諦門。
 【三】三聚淨戒に就きて述ぶ。攝律儀戒、攝善法戒、攝衆生戒。
 【六度】布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧。
 【四弘】四種の大誓願、衆生無邊誓願度、煩惱無邊誓願斷、法門無盡誓願知、佛道無上誓願證。
 【三學】戒學、定學、慧學。
 【四攝】菩薩が衆生を度脱せしむる爲に、衆生を攝招する法。布施攝、愛語攝、利行攝、同事攝。

故に一佛乘に於て開いて三乘を説き、自乗の法に依りて機根を調練し終に根本一乘の大道に入る。頓悟と漸進とは宜縁異なりと雖も俱に一乘に歸して咸く一性に入る。如來の出世、成道化物の大事の因縁は意致藏に在り。然らば則ち大乘の行者は頓に大道に入り、菩提心を發して佛果を要期す。廣大の慈悲普く衆生を緣じて、六度四弘、三學四攝、自他兼利し、願行圓滿し、斷證窮盡して即ち佛果を成ず。四智究竟し、四徳圓備し、三身具足して大用恆に現す。斯れ廻ち一乘圓教、發趣進修に、深遠廣蕩に、仕敦自在にして、大用無窮に、化業無盡なる者なり。二利の萬行の相は無邊なりと雖も必ず三學に遵つて具足進修す。習行の次第法應に爾るべきが故に創に佛法に入るには、信を以て先と爲す。次に戒法を受けて業非を止防す、戒塘已に堅くして定水澄靜なり。煩惱を伏除して現起せざらしむ。無漏の大慧は現前に生起し、頓に惑種を斷じて遺す所有ること無し。妙智理を證するに冥合湛然たり。大乘の三學功業是の如し。菩薩の戒學三聚に攝盡せり。「歸敬儀」上に云はく、「爰に初めて是を投ずるには先づ戒宗を奉ず。戒に本三有り。三身の本は一に律儀戒、謂く、諸の惡を斷ず。即ち法身の因なり。法身本より淨し、惡覆顯れず、今離惡を修するの功成じ、徳現するに由るが故に。二に攝善法戒、謂く、諸の善を修する即ち報身の因なり。報は衆善の成ずる所なるを以て、善を成ずること止作よりも高きは無し。今止作の二善を修す。用て報佛の縁を成ぜよ。三に攝衆生戒、即ち有心を慈濟するの功、化佛の因を成ずるなり。化佛心無く、感に隨つて便ち應ずるを以て、今大慈普く濟ふ。意用則ち

【二利】 自利、自利すること利他人を利すること
 【無漏】 漏は煩惱の異名。煩惱を離れたる法を無漏と云ふ。
 【惑種】 正道の障となるもの煩惱のこと。煩惱は有情の心性を迷惑するが故に名く。
 【止作】 止は心妄りに外境に動かさず、一切の亂想を止めて寂靜なるをいふ。
 作は心所を警覺して、外境に向ひ發動せしむる精神作用をいふ。
 【習氣】 煩惱を起したることによりてくせづきたる煩惱の餘熏のこと。
 【極果】 佛果に同じ。
 【四】 證果を得るに、戒學、定學、慧學の中、戒學は一切を攝盡するを明す。

齊し。已上は後文。此三聚戒は萬行を收攝す。攝律儀戒は是れ止惡門なり、初發心より佛果に至るまで惡業を禁防し、非違を止息し、惑種を伏滅して現を生ぜしめず。正しく惑種を斷じて習氣を除盡す。變易異熟の報體を棄捨し、非障有漏等の法を棄捨すること皆是れ攝律儀戒の行相なり。攝善法戒は是を修善門なり。始め發心より終り極果に至るまで諸善を攝修し、衆行を練習す。萬行萬善、遺餘する所無し。靜慮智慧、防道止道、伏道斷道、作門善門、修行構造、福德智慧、二種莊嚴、四智の菩提の所生得の法、空眞如所顯得の法、感獲體證是の如き等の門は、皆攝善戒なり。饒益有情とは所有の諸行、亦是れ作門なり。種種の無量の利生の門は皆造作なるが故に、後智如量、善巧方便、生を濟ひ物を攝し、大悲もて苦に代る。是の如き等の事は皆攝生戒なり。是を菩薩の廣大甚深の山海喻法の三聚淨戒と名く。此三聚の中に萬行を攝盡し、衆徳を貫括して戒門と爲すが故に。

(四) 問ふ。若し爾らば何を以てか定慧學と爲す。戒學の中に一劫を盡すを以ての故に。答ふ。大乘の三學は義門互に攝し、一を擧げて全收まる。窮盡せざることを無し。總じて萬行を攝して以て戒學と爲し、萬行を蘊積して名けて定學と爲し、萬善を含聚して以て慧學と爲す。一一の法門は三學に通ずるが故に。三學は互に是れ萬行なりと言ふと雖も門を爲すこと不同なり。故に三學を分つ。止惡の中に其善門有り是れ定慧なるが故に。定慧の中其止門有り是れ戒學の故に。事相互に融じて定んで離れざるが故に正念思惟して利益の事を作し、正見に安住して有情を饒益し、利生の事に隨つて定慧を成立す。是故に饒益を名けて定慧

【三歸】 歸依佛、歸依法、歸依僧、歸依とは歸順信賴佛法僧の三寶に歸順するを云ふ。
 【七聖財】 七種の出世間の財。信進、戒、慚愧、聞、捨、定慧の七財なり。
 【十無盡藏】 菩薩の十種の無盡藏。信戒、慧、慚、愧、聞、施、慧、念、持、辯の十藏。

と爲す。正見正思は即ち利生を成じ、大定大智の體義を捨せずして即ち大悲大化の事業を作す。初心已後轉勝して漸く深し、内體外用、不動不捨にして互に通じ互に攝して無礙自在なり。故に今大乘一實教の中には戒を語れば則ち一戒は一切戒なり。定慧として戒に非ざるもの、有ること無し。一心は一切心は戒慧として定學に非ざるもの有ること無し、一慧は一切慧なり、戒定として慧に非ざる者有ること無し、戒定慧品一心の中に得、一念三學は、互に通じて無礙なり。一法は萬行を成じて一念に多劫を経て一多全攝し、念劫互融して無方即入し、圓滿周盡せり。此義に由るが故に萬行三聚は即ち定慧を成ず。萬行定慧は即ち三聚を成ず。三聚の中に萬行を攝盡すと雖も戒を以て一門と爲すが故に律宗と名く。大乘の萬法は、萬行の中に皆戒法有り。諸經論の中に多く是の如く、諸の行相を語るが故に、始は三歸より終は佛果に至るまで諸位の中に於て皆戒行有り。因中の諸の階は戒法因成じ、果位の極處の戒行果滿す。七聖財の中に戒聖財有り、十無盡藏にも亦戒藏有り、三學門の中の戒學最初なり。六波羅蜜には戒度第二なり。十信の位の中に其戒心有り、【華嚴經】の中に十信の會に淨行の一品有り、十住會の中に梵行品有り、十梵行の中に戒を行體と爲し、十行十度に第二は戒度なり、十地十度、一増し増して具し、及び各圓具す、信前信位、三賢十地、一一の位の中に皆戒行を具す。須臾刹那も戒を離るる事有ること無し。若し戒法無ければ菩薩に非ざるが故に、佛果の地に至りて萬行圓熟して、萬德を感成し、一切圓極す。此萬德の果は皆戒行に由る。故に佛果の上に諸戒德有り、五分法身に戒法身

【他受用身】他をして法樂を受用せしむる利他の報身なり。

【五】一佛乘の菩薩は三聚淨戒を以て大戒と爲すを明す。

【六】三聚淨戒の中、攝律儀戒のみ別受法有り。
【七衆】佛弟子を七種に分ちたるもの。比丘、比丘尼、沙彌、沙彌尼、式叉摩那、優婆塞、優婆夷、このうち初の五衆は出家の弟子、後の二衆は在家の弟子也。

有り、福智莊嚴に戒莊嚴有り、三十二相無差別因、戒を以て體と爲す。是れ化身の相なり。他受用身は八萬四千の相好光明あり。十蓮華藏、微塵數の相、無差別の因、皆是れ戒力なり。別別の因の中にも亦戒功有り。是の如きの因果功德法門は、皆是れ戒行戒徳の所成なり。菩薩の因果、内悟外益、咸く戒行を以て成立することは是の如し。

問ふ、「一乘圓宗の菩薩大人の所受所行の佛果の妙因は既に是れ三聚廣大の戒法なり。其受戒等の行相云何。」答ふ、「菩薩大人は意樂深廣にして行解高遠なり。應に受くべき所の者一法をも捨てず。應に行すべき所の者一行をも遺すこと無し。萬行の數、億度所管は皆是れ所修なり。乘ずる所無きが故に貫括無邊にして、包納無盡なり。大乘の義相は法是の如くなるが故に。此義に由るが故に、此大戒を受くるに總じて二門有りて其方軌を盡す。一には總受、三聚戒を牒して總通して受くるが故に。牒する所の三聚は即ち是れ羯磨なり。義寂法師此名を立つるが故に。『占察經』の中に此名有るが故に、亦通受法と名く。通は三聚を受くるが故に。慈恩大賢此稱を建つるが故に。二には別受、三聚の中に於て別に攝律儀戒、一門を受けて行相を盡すが故に。諸師共同して此名を建つるが故に。」
問ふ、「何が故に唯攝律儀の一聚のみ別受法有りて、攝善攝生の二聚の中に別受を立てざる。」答ふ、「律儀の一戒は七衆を指定し、佛聲聞の爲に一乘の中に於て律儀の分を摘して諸の戒法を制し、佛法の七衆是故に成立す。今菩薩の人は此門の諸戒本自ら已有なり。元來三聚律儀は七衆なり。唯別受到七衆姓を定むるのみに非ず。其通受門も衆を定むるこ

【通受門】律家に

て、諸の戒を通じて

共に受けること

【七】通別二受の

うち別受の律儀を

用ゆるを明す。

【別受】攝律儀戒

の中、一戒又は多

戒を自己の意樂に

隨ひて別別に受く

ること。

【八】通別二受の

長短を明す。

【九】菩薩の盡形

法を明す。

【一形】一生涯の

こと。

【二〇】三聚淨戒、

出所の經典を擧ぐ

【十重戒】殺生、

偷盜、邪淫、妄語、

綺語、惡口、兩口、

貪欲、瞋恚、愚癡。

と亦爾なり。攝善攝生は此事義無し。是故に後の二には別受の法無し。」

問ふ、「通受の律儀に既に七衆を定む。何が故に必ず別受の律儀を用ふるや。」答ふ、「別受

の作法は聲聞に同じきが故に。三乘共同娑婆の風なるが故に。」

問ふ、「通別の二受は何れか長にして何れか短なる。」答ふ、「通受の作法は未來際を盡し、

別受は唯是れ一形壽の法なり。」

問ふ、「菩薩は何が故に盡形法を用ふるや。」答ふ、「菩薩の行解は廣大深遠なり。未來際を

盡す。是れ長時修なり。亦一形盡壽の法有りて、長短自在なり。期に隨ひて即成す。一法

多法局限無きが故に。未來を盡さんと欲せば通受門を用ひ、一形を盡さんと欲すれば別受

門を用ひ、長短意に隨ふ、法應に爾るべきが故に。」

問ふ、「三聚淨戒は何れの教文に出づる。」答ふ、「三聚の法門は源は『華嚴』に出でた

り。其廣相に至りては即ち後時の定處の所説、諸の大乗經及び諸論等に在り。彼『華

嚴經』には唯戒に三種有りと云つて名相を出さず。釋家は即ち三聚戒の義を陳ぶ。『梵網戒

經』に三聚の義有り。別して名を立てず、經を釋する諸師は文に就いて義を以て廣く三聚

淨戒の相を明す。賢首師は梵網戒を制して云はく、「三聚淨戒を以て宗と爲し、十重の經文

を三聚に配對す」と。大賢師は四十八經を判ずるに一一の戒に三聚戒の義を具す。『梵網戒

經』は佛最初の説、『瓔珞本經』は如來成道の二十八年の時の所説なり。彼經の上卷の賢聖

名字品の中に十重戒を説き、下卷の因果品に六波羅蜜を説けり。其戒廣の中に三聚戒を開

【羯磨】梵音カルマ(Karma)所作の作法と譯す、比丘の受戒又は懺悔する時の作法。これによつて、戒體を發得して滅罪生善の事を成就す。

く、謂く、「自性戒、受善法戒、利益衆生戒なり」、『大衆學品』に云はく、「佛子今諸の菩薩の爲に一切戒の根本を結ぶ、謂ゆる三受門なり。攝善法戒とは謂ゆる慈悲喜捨なり。化を衆生に及ぼして皆安樂を得しむ。攝律儀戒とは謂ゆる十波羅夷なり。已『善戒經』の中に三聚戒を説けり。然るに彼經には本大小部有り。九卷の廣本には具に六度を説き、其戒品の段は第五の前半なり。戒波羅蜜に九種の相を説き、其第二相を一切戒と名く。此中に總じて三聚淨戒を説き、即ち在家出家の二衆に通ず、三戒を列ねて云はく、「一に戒、二に受善法戒、三に爲利衆生故行戒なり」彼に具に三聚の相貌を演説す。又一卷の『善戒經』有り、賢首大師の『重樓戒經』と名くるは是なり。彼經の所説は先づ五十具の三戒を受け已つて然る後に菩薩戒を受く。此菩薩戒とは通じて三聚戒を受く、三聚を列ねて云はく、「一切菩提道戒を攝持して、一切諸の衆生を利益するの戒は此れ即ち攝善攝生の二戒なり。此は是れ彼經に菩薩戒の羯磨を出し、唯二聚を擧げて攝律儀戒を略す、即ち次の上の句に受一切菩薩戒の所攝なり、彼經の所説羯磨要略せり。戒相に至りて具に出家の菩薩八重を説けり。即ち『梵網』前後の四重に當る。後に輕戒四十餘條を説き大いに『瑜伽』所説の輕戒に同じ。廣本の『善戒』には廣く三聚を説き、彼四重四十餘の輕等の相を説かず、三聚の相狀大いに『瑜伽』、『地持』の所説に同じ、『占察經』の中に三聚戒を説き三戒を列ねて云はく、「攝律儀戒、攝善法戒、攝化衆生戒は彼經の上卷に廣く明す。菩薩菩提心を發して大乘の道を學し、過を悔い罪を滅して自誓して總

じて三聚淨戒を受け、菩薩の根本十重禁戒を受く。戒法を成じ己れば即ち比丘比丘尼沙彌沙彌尼等と名く。各の聲聞律藏菩薩の摩德勤伽藏等を學せしむるを通受の行相、顯了委悉なり。餘經の三聚、若は文、若は義、散説して一に非ず。此に準へて知るべし。諸の大乗論、三聚淨戒、名義行相、所説甚だ廣し、瑜伽大論所説幽を窮めたり、即ち是れ根本摩但利迦、本地分の内、菩薩地の中に具に六度を説く、其戒度の中に九種戒を説く、一切戒は即ち三聚戒なり。出家在家菩薩の所持は各の三聚を受けて諸戒の相を盡す。彼戒度の處の決擇分の文は、循環研竅、極了明白なり、及び餘處の文、應に隨ひて具に説く、彼『地持論』は是れ『瑜伽論』の本地分の中の菩薩一地の同本異譯なり。是故に彼決擇分等無し。『攝大乘論』の戒學殊勝に亦三聚を明す。『唯識論』の第九に要略して三聚を明す。及び十地論の第二地の處、並に餘論等宜に隨ひて説く所の廣略は一に非ず。廣略の善戒は『瑜伽』と同じ。兩本善戒は如來の自説、『瑜伽』『地持』は彌勒の所説なり。而も彼此同じきは如來最初に『善戒經』を説く。彌勒親り承く、如來滅後九百餘年在世の親聞の法を傳説す。是故に『瑜伽』は『善戒經』に同じ、況て之を言はば『瑜伽』の戒本は如來所説の諸大乘經の處處の散説の諸戒法門を採集し蘊結して、以て一大尸羅藏法と爲す、即ち九種三聚閉合無礙廣大甚深共不共藏なり。唯に大乘のみに非ず。亦小乗の所制の毘尼を採り、攝律儀戒の七衆の戒の故に。大は小を納むるが故に。三乘共の故に。本來元自ら菩薩の法の故に。小は即ち大なるが故に。小を見ざるが故に。是故に『瑜伽』の攝律儀

【毘奈耶】毘尼に同じ。律のこと。
【薄伽梵】梵音ブハガワツト (Brahma) 世尊と譯す

【一】諸教所説の三聚淨戒に就いて同異を明す。
【修多羅】總ての聖教なり。
【阿毘達磨】毘曇なり。

【苾芻】比丘のこと。
【正學】式叉摩那のこと。
【勤策】沙彌のこと。
【近事】優婆塞のこと。

戒、全く律藏に讓る。故に彼第七十五卷に云はく、「復次に當に知るべし。菩薩の毘奈耶に略して三聚有り。初に律儀戒、毘奈耶聚は薄伽梵の如く、諸の聲聞所化の有情の爲に略して毘奈耶の相を説く、當に知るべし、即ち此毘奈耶聚なり」已此れ即ち四分、五分等の律に説く所の諸戒は即ち律儀聚なり、戒相行儀、大途同じきが故に。」

問ふ、「諸教の三聚同異云何。」答ふ、「修多羅の義は根本の所説なり。要略して相を明すと『本業經』に在り。『阿毘達磨』は廣釋分別す。體相窮究すること『瑜伽論』に在り。兩本の善戒は如來の自説なり、彌勒は此に託して『瑜伽論』に説く、故に『瑜伽論』は全く善戒に同じ。『攝論』『唯識』は全く瑜伽に同じ。攝善攝生、諸説異り無し。『本業』『瑜伽』所説の律儀は、是に不同有り。不同の相は本業には、十重を攝律儀と爲す。前の四は是れ共、後の六は不共なり。菩薩獨行『瑜伽』には七衆を攝律儀と爲す。唯是れ共門なり。即ち前の四重及び諸の枝條なり。本業の律儀は即ち前に引くが如し。『瑜伽』の律儀とは彼四十に云はく、「律儀戒とは、謂く、諸の菩薩所受の七衆別解脫律儀なり。即ち是れ苾芻戒、苾芻尼戒、正學戒、勤策戒、勤策女戒、近事戒、近事女戒なり」是の如きの七種は在家出家の二分に依止して應の如し、當に知るべし、是を菩薩律儀戒と名く。已此れ即ち彼聲聞所受の七衆の戒法と其相全く同じ。『占察』の三聚は『瑜伽』と同じ。通受の三聚律儀は七衆なり。而して菩薩の根本戒を説く。即ち是れ十重なり、應に是れ律儀なるべし。全く『瓔珞』に同じ。』

【二】攝律儀戒に就いて、瓔珞と瑜伽との所説不同を明す。

【共】共法のこと。自他共に感生したる法のこと。例へば山河大地の如き、衆人の業によりて、共通に感得したるもの。

【不共】不共法のこと。自他別別に感生したる法のこと。例へば自己の身體の如き、一人の業によりて、感得したるもの。

【三業】身、口、意の三業。
【四波羅夷】殺生、戒、偷盜戒、姪戒、妄語戒なり。

【三】四十八輕戒に就いて、梵網と瑜伽との所説の同異を明す。

(二二)と問ふ、『瓔珞』『瑜伽』と攝律儀戒の所説は不同なり。何なる所以か有る。答ふ、『本業』は是れ眞實の理門に約し、『瑜伽』は是れ隨轉の理門に約す。攝律儀の中に三業の戒有り。身口は是れ共、意業は不共なり。不共は即ち是れ自息惡の戒なり。『本業經』の中に攝律儀戒、具に三業を説く。『瑜伽』の律儀は既に是れ共門なり。其意業の戒は何れの聚の所攝ぞ。慈恩大師の唯識の疏の意は共不共の二門の差別を顯さんが爲に、共門の戒を以て攝律儀と爲す。其自息惡戒は攝善法戒に收む。攝善法戒は三業に通ずるが故に、義寬廣なるが故に、攝善攝生は本より不共なるが故に、若し實義に據らば不共の律儀自息惡の戒なり。即ち是れ攝律儀戒の所收なり。是故に此義還つて本業に同じ。其意業の戒は即ち『論』の四重、自讚毀他已後是なり。此四重の外に、亦四十二輕を説けり。三四は五輕の開、並に是れ菩薩の不共戒の相なり。遁倫釋して云はく、『其餘の菩薩の四波羅夷、四十二輕戒等は皆是れ攝善法戒と衆生戒との中に違犯有り。故に此戒を立つ。是れ攝律儀戒に非ざるなり』。上太賢法師は不共の四重を三聚の本と爲し、三戒に通じて攝す。梵網の十重は賢首二の釋あり、一には勝に従ひて論と爲す。此十重戒は是れ律儀の攝なり。俱に惡を止むるが故なり。二には若し通義に依らば皆三聚を具す。一一に犯さず、律儀戒に攝して彼十罪を對治するの行を修むるは攝善法の攝なり。此二戒を以て衆生を教化して、白の所作の如くすれば即ち攝衆生戒と爲すなり。

(二三)と問ふ、『梵網』所説の四十八輕と『瑜伽』所説の四十四輕と狀貌行相の同異は云何。答

【二四】八萬の威儀は三聚中何れなるかを明す。

【二五】八萬威儀戒中の二百四十六戒に就ての問答。

ふ、『瑜伽』の輕戒は、多く出家に約す。『梵網』の輕戒は道俗に通ず。經論の輕戒は或は同、或は異あり。『瑜伽』の輕戒は攝善攝生の二戒を制す。其所同の分は、後の二聚に通論す。攝は六度の所違を制す。饒益は四攝の所違を制す。賢首、義寂、法銑、勝莊は、『梵網』の輕戒を以て論輕と配對す。當る所の者は皆悉く對判す。其餘の有無、總別開合あり。且く經の不敬師長戒の如きは、即ち『論』の第三戒に當れり。不學教懺戒は『論』の第七の戒に當れり。不能請法戒は『論』の第三の戒の中の一分に當る。不聽經律戒は『論』の第三十二戒に當る。背正向邪戒は『論』の第二十七の戒に當る。不瞻病苦戒は『論』の第三十五戒に當る。法化違宗戒は『論』の第三十六の戒に當る。惜法規利戒は『論』の第六の戒に當る。無知爲師戒は『論』の第十一戒に當る。不能救生戒は『論』の第十五の戒に當る。是の如き等の相は繁を恐れて之を略す。飲酒食肉五辛戒等の如き、『論』の中に之れ無し、文に隨ひて悉すべし。』

(二四)と

問ふ、『梵網』『瓔珞』に擧ぐる所の八萬の威儀は三聚戒の中にて何れの聚の所攝ぞ。『答ふ、『八萬の威儀は是れ十重の枝條なり。本重を莊嚴して、堅く守護せしむ。全く二百五十戒法の攝に同じ。戒の種類は本の四重に屬して、重戒を莊嚴して條皎潔に本く。』

(二五)と

問ふ、『若し爾らば八萬威儀戒の中に應に二百四十六戒有るべし。是れ前の四重莊嚴の相なるが故か。』答ふ、『有無知り難し、未だ傳受せざる故に、或は同、或は異なり。俱に遮すべからず。』

【二六】四重の技條たるべきかを明す。

(二六)と
問ふ、『瑜伽』の四十四輕は應に後の四重の枝條たるべきか。』答ふ、『若し文相を考ふれば、應に其義有るべし、而して未だ定むべからず。差別多きが故に此は得の四重を後の二聚の戒に屬す。是故に此問答決釋を致す。若し後の四重を律儀戒に屬すれば、『瑜伽』の門に於て之れ有るべからず。然るに玄暉師は地持論の後四重の戒を以て攝律儀と爲す、即ち『本業經』に同じ。准知するに後四重の戒の枝條の分は、全く聲聞の五篇と不同なり。是れ不共戒所説の相なるが故に、其前四重枝條の戒に不共戒有り。本の重戒に不共門有るが故に、一針一草制して重夷と爲す。六趣の生を殺すは皆波羅夷なり、世間の妄語は、重夷を制す。故に是の如く不同なり。』

【二七】藥師經の四百戒を明す。

(二七)と
問ふ、『藥師經』に菩薩の四百戒を言ふ。是れ何等の相ぞ。』答ふ、『遁倫の『藥師經』の疏に云はく、『菩薩の四百戒と言ふは、宋本には善信菩薩の二十四戒と云ふ』又云はく、『若し菩薩戒は隋の本には、一百四戒と云ひ、義淨の翻經には亦菩薩の四百戒と云ふ』宋の本に云はく、『二十四戒とは『善信菩薩經』及び『咒小咒經』に説くが如し。善信菩薩は是れ在家の女人なり』下に云ふ、『若し菩薩戒は是れ出家菩薩戒なるべし』唐隋二本には別に之を明さず。謂ふべし、但在家戒を明すと。唐の本に云ふ、『四百戒は法藏師の云ふ。菩薩戒は十善を以て根本と爲し。十善と言ふは信等の五根無貪等の三善根及び慚愧と合して十善と爲す』十善は一毎に十を經、合して百數と爲す。此れ各四有り、一は自持、二は他持、三に讚嘆、四は隨喜なり、是の如きは即ち四百戒なり。隋の經に一百四戒と云ふは、謬り書

【二八】諸教所説の菩薩戒中に就いて差別數相を明す

【二九】震旦の諸師相承は通別何れなるかを明す。

して四字を下に置くが故なり。然るに聖教に非ず、未だ定實を知らず。上法藏大師の四百相に計ふ。此法藏とは是れ賢首師なり。應に是れ菩薩毘尼藏の文なるべし。梵網の疏の中に此文無きが故に、彼文に總じて諸教の戒を釋するが故に、梵網の疏の中に多く彼を指さすが故に、未だ定實を知らずと言ふと雖も、且く此を以て行相と爲す。餘師の釋の中に別相無きが故なり。

問ふ、諸教の中に菩薩輕戒と説くところ總じて幾許の差別數相有りや。答ふ、賢首十門に輕戒の相を明す。『瑜伽』の四十四地持も亦同じ。『菩薩內戒經』の四十二輕、『善生經』の中に六重を除いて外に別に二十八輕有り。『方等經』に依らば、二十四戒を除いて外別に更に五五二十五種有りて不應作を制す。內戒已後多く在家戒なり。『瑜伽』地持は出家多きが故に、『梵網』の四十八輕は、此經に細分せば一百戒を將つ。此二は即ち道俗の所持に通ず。八萬威儀は即ち別品有り。或は十萬種梁攝論に『毘奈耶瞿沙羅經』を引くが如し。十或塵沙は『智論』に説くが如し。若し總攝に據らば、聲聞の律藏所説の戒法、二百四十六戒、三百四十四戒、五百戒の中六萬の細行、十二萬の細行、此等は並に是れ菩薩の共門、攝律儀戒の行相のみ。

問ふ、震旦の諸師、大乘を學ぶ人の、律藏を解して秉持弘傳するは、通受門に依ると爲んや、是れ別受門とせんや。答ふ、古來の諸師別受門に依りて律藏を秉持し、戒法を弘通す。本宗大乘を習學、諸師は宜に隨ひて法を弘む、彼此不定なり。戒は是れ三聚の妙戒、

【二〇】律宗の高祖を明す。

【二一】律宗の教相判釋を明す。

【三】二觀三宗。化制

の教判。化教とは、因果の道理によりて凡夫の迷妄を破り、眞智を起さしむるものにして、智慧と禪定を主とす。これに性空教、相空教、唯識教の三教あり（三觀）。制教とは、三業の惡事を制裁し、實行上より證りに至らしむる教にして戒律を主とす。これに實法宗、假名宗、圓教宗の三宗あり。

【戒體】戒の體性

にして、受戒者の心中に發得する無作のこと。この戒體の力に依りて戒を相續せしむるなり。

定慧は有空に中道、攝律儀門は専ら律藏を弘む。古來の律師は皆其輩なるのみ。』
問ふ、「今此律宗は誰を以てか高祖と爲す。」答ふ、「終南山道宣澄照法惠菩薩を以て律の高祖と爲す。南山大師生を隋朝に降り、化を唐運に播む。是れ四依弘經の薩埵、三生持律の祖師なり。終南山に居して大いに律藏を弘む、開化攝御乘持第一なり。名を西天に飛し譽を東土に騰げ、大乘の教理玄旨を窮盡せり。『法華』の疏を造りて一乘を弘敷し、『涅槃』を開演して佛性宗を弘め、『楞伽經』を講じて唯識の義を顯し、攝大乘に達して圓通の理を示す。論は成實を窮め、律は四分を弘め、像教に綱紀せり。遺法を住持し教を立て宗を開き體を出し用を示す。蕩蕩乎として思ひ難く、煥煥乎として測り叵き者なり。』」

問ふ、「律宗の高祖南山大師云何が諸教を分判し、律藏を弘演するや。」答ふ、「終南尊者は四教を開宗して宜に隨ひ縁に託して勢變多端なり。然るに其祖意の指す所處、三觀と三宗との義門に過ぎず。化教に約する時は、則ち性相唯識觀解奥を窮む。制教に約する時は、則ち有空圓宗、戒體理を盡せり。三觀は正しく定慧に就く。兼て戒體を攝す。三宗は正しく戒體を談じ、兼て觀解を攝す。若し直に對判せば、三宗は是れ戒學、大小顯然なり。三觀は是れ定慧、半滿炳焉たり。小乘の三學、大乘の三學、大小二乘相決同異、祖師の所判義理窮盡せり。若し兼帶に依らば、傍正有りと雖も三觀は即ち大小三學を攝し、三宗は亦半滿二教を攝す。此は總約して一代に就いて言を爲す。若し祖意に據らば専ら大乘に在り。圓教の戒體は是れ大乘の戒學、唯識圓觀は是れ上乘の定慧なり。此意致を以て律藏を弘

【三】律宗の所依の經典を明す。

通す。當に知るべし四分律宗、戒體戒行等の義は皆圓滿無礙の妙戒を成ず。深を以て淺を
決し、勝を以て劣を決し、廣を以て狹を攝し、圓を以て偏を攝す。圓頓圓融圓滿の旨唯識
唯心、唯理の義、洋洋として二性を窮め、濬濬として幽を盡す。異門の判教、時に隨つて是
れ多し、或は三輪を以て教を攝し、或は化行二教、或は化制攝教、或は制聽二教、漸頓二
教、大小二藏、三藏四藏、及び八藏等は或は他所立を引き、或は自所立を擧げ、或は小教
に約し、或は大小に通じ、或は制教に約し、或は化制に通ず。義門一に非ず。商量甚だ
多く、時に隨ひて判攝し、大途を遮せず。』

問ふ、『幾の教典を以て總じて律宗の所依の法門と爲す。須らく分齊を定むべきか。』答

ふ、『祖師の域心、大乘一極、超勝高大、廣博甚深なり、専ら一乘圓融の教典に依りて起心
發足、學行弘持す。』法華』涅槃』楞伽』攝論』は即ち是れ行用、傳布の所憑なり。一乘の

極道は三學に過ぎず、次第相由して速かに佛果に到る。大乘の戒學は、束ねて三聚と爲す。
三聚總相の行門を攝するが爲に諸大乘教の中所說一切の戒法を取りて、所依の教と爲す。即

ち『梵網』、『瓔珞』、『善戒』、『善生』、『地持』、『瑜伽』、『地論』、『攝論』各の戒學を説くの處是
なり。其律儀の中の共門の諸相は、全く諸律所說の行相に同じ、此業を成ずるが爲に律藏

を取用す。即ち小乘諸律藏の中に在り。正に四分律を用ふ、兼ねて諸部等に通ず。此義に
由るが故に。今律宗とは若し教門に約しては、大小藏の戒を陳るの處、採集し蘊積して戒

律の宗と爲す。若し行途に約しては、大乘一實圓頓の妙宗唯識滿教を其依據と爲して一乘

【二三】律宗は大小何れに屬するやを明す。

究竟の戒律を弘持す。是故に用ふる所、律藏の行相は皆是れ大乘無礙極宗なり。是を律宗の教典の分齊と名く。一乗の普眼、本小乘無し。小機の所具は本一乘なるが故に、小乘法の中なかの教理行果は本來一乘なり。小法を見ず異途を存せず。故に此律宗は圓頓大乘、廣博深奧、無礙の大藏なり。昔唐招提寺の豐安僧正勅を奉じて『戒律の記』三卷を作りて宗の分齊を定むと云ふ。』

(二三)

問ふ、『大小の二教には律宗は、何をか攝するか。』答ふ、『總じて諸の戒學を束ねて以て一宗と爲すなり。我本朝に於て唯菩薩の律師のみ有り。元來偏執と爲し、小乘を局見する

無し。已上、庫陳。總通して大小教戒を採集して、一大乘毘奈耶宗と名く、専ら『瑜伽』の採集の深意に契ふ。祖師の注羯磨の序に云ふ。大雄の御宇意唯一人を拯拔す、大教の膺期、

指歸一理を顯さんが爲なり上。一人は是れ一人、即ち能乘の人一理は是れ理一、大教は是

れ教一、教の中に行を攝し、理の中に果を攝す。行は即ち彼序に陳ぶる所の止作持の行に

して、果は即ち引く所の『華嚴』の無上菩提の極果なり。『內典錄』六に云ふ、通じて大乘

と曰ひ、教として攝せずと云ふこと無し。此に據りて叙するに別の小乘無し上。喜祥大師

の『涅槃の疏』の中に、興皇大師の所説を引いて云はく、『本小乘戒無し、唯大乘の戒なる

が故に。廣く説くこと彼の如し』此れ即ち十方佛土唯一乘有り、二も無く三も無し。方便

説を除いての意なり。今南山大師の所立も亦爾り。故に業疏の中並に『內典錄』に『法華

經』の十方佛土等の文を引いて、唯一乘戒等の義を成立す。香象丘龍等の師の義途も亦同

經』の十方佛土等の文を引いて、唯一乘戒等の義を成立す。香象丘龍等の師の義途も亦同

經』の十方佛土等の文を引いて、唯一乘戒等の義を成立す。香象丘龍等の師の義途も亦同

【三四】如來出世して戒を制することを明す。

【三四佛性】天台宗にて、法華經の意によりて、立つる三種の佛性。緣因佛性、了因佛性、正因佛性。

じ。昔より已來最極一乘なり。戒法も亦爾り。唯一乘戒なり。諸の小機の爲に大の中の分を摘る。大機本を見るに元來一乘なり、香象の『探玄記』に即ち『文殊問經』十八及び本二、皆大乘より出づる等の文を引く。丘龍の元曉の『勝鬘經』の疏に専ら唯一大乘戒の義を明す。南山大師、戒疏の中に、専ら十八本の二の大乘より出づるの文を引く。彼此の義相は、一味均等なり。行事鈔の中に一に深く戒律を破して、總じて小乗と謂ふものを大小二乗の理分隔無く、悟解心に在りて唯教旨にあらざるの義を成立す。『教誡儀』の序に亦律を以て小と爲す者を破す。當に知るべし、南山所立の戒宗は、上衍の極致、一乘の旨歸、終窮圓融、大戸羅藏なり。』

問ふ、『如來出世して何が故に戒を制するや。』答ふ、『如來世に應じて衆生をして極果を感成せしめんが爲に戒律を制説したまふ。菩薩發心して佛果を要期し、萬行を修習して自利利他す。大乘の三學は次第に梯橙す。三聚の戒學は、最初に佩帶す、然る後、大定大智を成就す。三聚圓滿にして三身の果を得、定慧應に隨つて三聚と合す。法報化身、究竟圓極せり。如來三聚戒を説きたまふ所以は總じて之を言ふなり。衆生をして返流歸源せしむるが爲の故なり。別して之を言はば略して十意あり。一には如來の自證の三身の妙果を顯示して、諸の衆生をして信解行證せしめんと欲するが爲の故なり。二には衆生をして自心本有の三因佛性を識知せしめんと欲するが故なり。三には衆生をして三の發心を成ぜしめんが爲の故なり。直心、深心及び大悲心は是れ其三心なり。次の如く三身極果の因なり。』

【體相用】體大、眞如の體性のこと、相大、一心眞如の事に具する無量無数の差別の功德のこと。用大、能く衆生をして、一切世間出世間の善を修せしめ、善の果を得しむること。

【三五】南山大師の三觀經を明す。【性空教】化教三教の一。人法の性を泯亡して無我の空理に入る小乗教をいふ。

【相空教】化教三教の一。外道凡夫の執著する如き人法の相は、ただこれ迷情の妄見にして、幻化の如く空華の如く無相なりと觀する教をいふ。

四には衆生をして眞如の體相用大勝功德法を識知せしめんが爲の故なり。五には衆生をして斷惡、修善、度生の三種の妙行を成就せしめんが爲の故なり。六には衆生をして三廻向を成ぜしめんが爲の故なり。謂く廻向實際、廻向菩提、廻向衆生なり。七には衆生をして分に三身を證せしめんが爲の故なり、八には衆生をして極めて圓滿三身の佛果を獲しめんが爲の故なり。九には衆生をして法身、般若、解脱、斷智思徳を感成せしめんが爲の故なり。十には衆生をして界内界外の惑業苦報の三障を斷除せしめんが爲の故なり。『梵網經』等の諸大乘教に説く所の三聚、教興は是の如し。此は是れ通受の戒法の教起なり。若し別受の戒法の教興を明せば、即ち是れ諸律興起の所由なり。且く四分律藏の如きは三毒を調伏し盡さしめんが爲の故に戒學を制増す。此れ乃ち無漏の聖道を獲得せしめんが爲にして世間の福樂を得しめんが爲に非ず。小乗極果は惑障を斷盡す。菩薩も亦彼煩惱障を斷ず。律儀の共門、得證必歷、其不共門、自息惡の戒、自斷惑の法、十業を對治し二障を伏滅し、二障の種を斷じ、二障の習を除き、共不共門、通行別行、合和成立して大事圓滿す。『問ふ』前に標立する所の南山大師の三觀教とは其相是れ如何。『答ふ』三觀と言ふは、一には性空教、人法の性を泯して其空理を見る。小乗の根鈍にして、即空する能はず。人性を折破し法體を對遣して我法の無に至る。空を以て理と爲す。此觀解に由りて煩惱を伏斷し、滅理を證見し自乘の果を獲。即ち『四阿含』等の經、『僧祇四分』等の律、『俱舍』成實』等の論、一切小乗の諸教此攝なり。二には相空教、人法の相を泯す。外道凡夫の所執の人法、

【三六】三觀教門と
大小三藏との體に
就いて述ぶ。

【名、句、文】文
は語聲の上に顯は
る音韻屈曲の綾
名は其綾の連続に
して事物の自性を
顯すもの、即ち名
稱。句は思想を顯
もの即ち文句。

もと本より已來體相即空なり、是れ小菩薩の教理行果なり。諸の『般若經』及び彼部論、所説の相空、即空の觀解、此等の諸典、皆此等の諸典、皆此等の攝なり。三には唯識教、一切の諸法は外塵本より無く、實には唯識のみ有り。性相圓融す、是れ大菩薩、甚深の妙行たり、即ち『華嚴』、『楞伽』、『法華』、『涅槃』、『攝大乘』等の圓極微妙の諸大乘經、律論、皆此等の攝なり。此三觀を以て一代の教を攝するに皆往いて判斷す。尠なきも遺す所無し。此性空教は即ち法相の初時の多分教、天台の藏教、華嚴の愚法小乘教に當るなり。此相空教は即ち法相の第二の時空教、天台の通教、華嚴の始教、大乘の空門に當る、兼て有門に攝す。此唯識教は即ち法相の第三時の中道應理、天台の別圓二教、華嚴の終頓圓の三教に當るなり。』
問ふ、『三觀教門、大小三藏、能詮教海、何を以てか體と爲す。』答ふ、『能詮の教體、義は一準に非ず、三教に約就して、其體性を明すは空教の中に有空、宗を分かち、有宗毘曇の體類に四法なり。語聲と名と句と文との身是なり。四大相擊して出す所を聲と名と、聲の上の作用を立てて名等と爲す。』『婆沙論』の中に二師の説有り、一に云はく、十二分教は語聲を體と爲す。一に云はく、佛の所説の法は名と句と文とを體とす。『發智本論』に二義の意有り、是故に釋家各取りて體と爲す。然るに評家の義は語聲を體と爲す。正理顯宗は名句を體と爲す。雜心俱舍は雙べて二義を擧ぐ。既に取捨無きが故に是れ並び用ふ。厥假名宗、曇無德部經部成實は語聲以て佛敎の體性と爲す。若し兼帯に據らば名と句と文とを具す。業疏の一の上に羯磨の教體を陳述する中に云はく、『然るに此教法は正しく緣成に據る。緣は

【六相】總、別、同、異、成、壞の六相。
【三七】律宗の旨を明す。

【新譯】唐の玄奘三藏以後の翻譯をいふ。

則ち内外に通ず。體を定むる時は則ち繁なり。今は但相に剋するに論を以てす。實には唯言教なり。問僧の忍を和するの義は餘設に非ず。即ち聲相續の善色を以て體と爲す。上此は是れ成實宗に依りて體を出す。既に實には唯言聲と言ふは、即ち是れ語聲の體なり。如來の所説、大小三藏定んで教體を斷ずる事此と同じ。然るに大乘の中に、圓教唯識、祖判無しと雖も義に準じて、之を陳て假實別明せば名句文身を佛敎の體と爲す。擇假從實せば語聲を體と爲し、攝境從心せば唯識を體と爲す。攝相歸性は眞如を性と爲す。四句融合して大乘教と爲す。一を擧げ全く六相を收め、空に入れば非四を體と爲す。』

問ふ、「大乘の行人、律藏の旨を得る鈎鎖次第來山云何。」答ふ、「行人旨を得て通より別に至り寛より狭に至る。狭は即ち寛を成す。期して三學を要し、行の山漸と爲す。三聚戒を誓ひ、萬行を括囊せり。別受の律儀は共門の行を盡せり。共門の諸戒は各三聚を成す。三聚の廣行は定慧を包納せり。智首律師の四分律の疏の一に云はく、「菩薩に三聚戒有り、攝善法戒、攝衆生戒、攝律儀戒なり。攝律儀戒に三種有り、一は禪律儀、謂く定んで共戒なり。二は無漏律儀、謂く道共戒なり。三は別解脱律儀なり、謂く五八十具なり」上智首律師「占察經」に依りて大乘の法を明せり。三聚淨戒、白誓從他、二受の法總じて三聚を受く、中に於て其攝律義戒に依れば七衆の姓を成す。名けて比丘比丘尼等と爲す。彼疏の第一に彼經の所説を引いて即ち行ぜしむるは専ら彼經を尋ぬるが如し。通別二受行相周備せり、新譯の諸師細く戸牖を開く、舊家の諸師も亦此幽を鈎す。智首大師は即ち是れ南山

【智首大師】 道宣律師の師なり。

【二六】 攝律儀戒を明す。

【持業釋】 六合釋の一、複合詞中の前語が後の語に對して形容詞、副詞、又は同格の名詞たる關係を有するものをいふ。

【帶數釋】 六合釋の一、副合詞に於て前語が數詞なるもの。
【二九】 攝律儀戒の名字を明す。

【三〇】 律儀七衆の人法を明す。

玄憚の所承なり。師資芳芬、其義途を獲たり。南山大師教儀に指す所の釋門、正行の三聚の受隨は即ち是れ通門、圓滿の行相なり。三大部等に明す所の行相は、即ち是れ別受止作の行門なり。事義整足して闕減する所無し。」

(二八) 問ふ、「何が故に名けて攝律儀等と爲す。」答ふ、「惡を離るるに軌有り。名けて律儀と曰ふ。律儀に多く含む、一名に並に收む、之を稱して攝と爲す。謂く、靜慮無漏及び別解脱なり。律儀は即ち戒なれば、律儀戒と名く、持業釋なり。順益軌有り、名けて善法と爲す。

善法衆多なり、收めて此門に在り、之を名けて攝と爲す。攝善は即ち戒、持業釋なり。衆緣所生なり、名けて衆生と爲す。引いて善に歸らしむ、之を名けて攝と爲す。攝生は即ち戒、亦持業釋なり、所以に總じて三聚戒と名く。三は是れ數の名、蘊積を聚と名く、過を離るれば淨と名く、非を防ぐを戒と爲す。即ち帶數釋は用に從ひて名と爲す。」

(二九) 問ふ、「攝律儀戒は總じて律藏を指す。律藏の所説の戒法に幾くの名かある。」答ふ、「戒律の名字は義に隨ひて多端なり。總包して之を言はば三種に過ぎず。一には毘尼と曰ひ、翻じて律と云ふ。律とは法なり。教に從ひて名と爲す。二には尸羅と曰ふ、此には翻じて戒と爲す、戒の義は警と訓じ、戒は善惡に通ず。善戒の非を防ぐ、三業を策するが故に。

三には波羅提木叉と曰ふ、此には翻じて別解脱と言ふ、別別に非を防ぎ、分に隨つて解脱す。解脱は是れ果なり。因の中に果を説く。」

(三〇) 問ふ、「律儀の七衆、人法是れ何ん。」答ふ、「比丘比丘尼、式叉摩那、沙彌沙彌尼、優婆塞

律儀七衆、人法是れ何ん。答ふ、「比丘比丘尼、式叉摩那、沙彌沙彌尼、優婆塞

【具足戒】比丘二百五十戒。比丘尼三百四十八戒。

【六法】畜生命を殺さず、四錢を盗まざり、摩觸せず、妄語せず、非時食せず、飲酒せず。

【八齋戒】殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒、不坐高廣大床、不著花鬘瓔珞、不習歌舞戲樂。

【三二】通別二受の菩薩の戒體を明す

【表無表】表とは身語二業のこと。此二業は他に表示することを得るが故に。無表とは表業に依りて薰發せられ他日の結果を招感すべき原因なるが故に。

【無作】無生無滅の理。無爲の法性。涅槃の異名。作さんとす意識無くして事を行ふこと

優婆夷を七衆の人と名く。比丘比丘尼は具足戒を受く。式叉は六法。沙彌沙彌尼は十戒。婆塞婆夷は並に是れ五戒なり。其八齋戒は是れ近住の法なり。若し毘曇に依らば、七衆の外に在り。七の上に此一を加へて八種律儀と名く。若し成實に依らば、唯清信の攝なり。此等の諸戒を七衆の法と名く、佛法の行人、大乘小乘其れ唯此七衆に在るのみ。今此に明す所は菩薩の七衆なり。此共門の戒は聲聞と同じ。其不共攝律戒亦此菩薩七衆の所持なり。攝善攝生は即ち此れ七衆所持不共、孤標の行業なり。一切の萬行は七衆の所行なり。大乘の行人は此れ過無きが故なり。』
問ふ、『通別二受の菩薩の七衆所持する所の戒は何を以て體と爲す。』答ふ、『戒體法門は是れ律宗の眼目、戒學の骨髓なり。行人の所細物は此體を以てす。學者の所持の目此法に在り。萬行の流出する所、衆徳の朝宗する所なり。法體行相は四科の義有り、法は是れ佛の所制の法、體は是れ行者の所納、行は是れ行人の所攝、相は是れ所修の相貌なり。四科妙戒現に一時に在り、建志成就して美德圓滿す。此四科の中に戒體の一門、要妙精髓、根源基地、此戒體を作無作と名け、亦教無教と名く。新には表無表と名く。作戒は是れ無作を生ずるの門なり。作に由りて無作の法を發生するが故に、無作は即ち作所生の體なり。恆起常運して勝能有るが故に、三聚淨戒に作と無作と有り。二戒の體狀は總じて三聚を冠る。攝律儀の中に七聚の諸戒に作無作有り。一一の體狀は是れ別受門なり。表無表の名、事義皆同じ。南山大師の、事鈔には、直に成宗戒體を出す。業疏に具に有空二宗の所説の戒體を出せ

【白四羯磨】一白三羯磨ともいふ。羯磨は業と穢じ、辨事とも義譯し、受戒の時、作業の成辨するをいふ。白は表白にして、戒壇に登りて、大衆を禮し、自ら受戒することを告ぐるを一白といふ。この表白を終りて羯磨師より羯磨の文を唱へ二教を受けて、教の如く、三遍くり返して唱ふるを三羯磨といふ。

ば、即ち彼宗の所計に隨ひて之を陳ぶ。後終南師自己の意を陳べ、之を正義と名く。妙宗を決斷して三宗を建立し、教の淺深を判す。有宗空宗及び圓教宗、三宗と名く。祖師の妙意の決判玆に在り、深を以て淺を決し、大乘の極に至る。今此に明す所は直に圓教を擧げ、圓意包遍して義一切を攝す。三聚大乘、總相通法は即ち是れ圓教窮終の妙體なり。是故に律儀別受體相は即ち是れ極滿頓妙の戒體なり。然るに終南の祖、本別受四分律宗を弘め、律を釋に約して、圓教の體を明して謂く、菩薩の人一乘心を起し小律藏に依り、白四羯磨は具足戒を受く。所受戒法は即ち深奥寛廣の圓體を成じ、白四の作法は圓教の行者本來一乘所用の法なるが故に。今頓悟とは本己の有に隨ひて、此受法を行す。故に大乘無礙妙戒を納得す。此れ即ち別受の方軌に約就して、圓教宗一實の戒體を成す。故に白四の所得、藏識羯磨の妙縁に薰在し戒體を成薰す。大乘の圓意を起すに由るが故に爾り。祖師直に唯識圓教律儀戒の中の別解脱の戒の作無作體を明す。今亦彼本に隨ひて先に別解脱の體を明し。後に總じて三聚を約し、具に作無作の體を明す。初に律儀の中の別解脱の體とは受戒の時身口の作有り。禮拜屈伸低頭合掌は是れ身業の作、乞戒陳靜は是れ口業の作なり。動身の思を以て身作の體と爲し、發語の思を以て口作の體と爲す。作戒の圓滿は三法竟る時なり。其無作とは第三法の意なり。作戒圓滿は即ち無作を生じ懸防の能有り。此時一念に二種の體を成す。謂く身口の作と及び無作の體なり。俱に懸防有り、威く名けて戒と爲す。一念に作謝して無作獨り轉ず。此作滿する時善思の上に熏ずる所の種子を以て戒體と爲す。

【三】 餘師の例を明す。

一期非を防ぎて任運に恆轉して所熏の種子所在の處、即ち第八識を所熏の處と爲す。賴耶の自體は任持して失はず。祖師の所立、文言の成ずる所、正に種子を以て其戒體と爲す。然るに種子の體は必ず功能有り。功能顯現は正に隨行に在り。隨行を持せず、所熏の種の上に懸防の徳有り。此懸防を以て應に戒體と爲すべし。末を攝して本に従ふが故に、種子を以て戒體狀と爲し。本末別明の機能を體と爲す。慈恩師等、新家の所立は本末別に機能を論じて體と爲す。

問ふ、「餘師の解の中に此例有りや。」答ふ、「香象音師戒體を出して云はく、「戒は思種に於て建立す。故に思種を用て體と爲す。」上此は是末を攝して本に従ふものにして種と言ふ。全く南山の種子を體と爲すに同じ。即ち業疏の本識藏に於て善の種子を成ずと言ふ、此れ戒體なるが故に。又勝莊法師云はく、「若し無表律儀の期願の思種に勝たるを以て性と爲す。謂く思種に依りて假に建立するが故に。上來の所説は假を攝し實に従ふ門に依りて説く。」上此れ即ち分明に判じて實に従ふと言ふ。此亦全く南山の所解に同じ。然らば則ち賢首、勝莊は思を體と爲すと雖も、其正意は機能を體と爲す。南山大師は種子を體と爲す。假、實に従ふが故に、此義を判と作す。種は必ず能有り、防非を體と爲す、舊譯の教典は體を談ずること髣髴たり。「新翻の論教は陳説すること委細なり」「唯識論」等に具に精美を顯す。上に律儀の別脱に、就いて體を明す。其三聚に就いて戒體を明すとは、種子防發、戒體異ならず、識藏の種を持する、相狀是れ同じ。通別異ると雖も體用同じきが故に、是れ

【舊譯】 新譯の對唐の玄奘三藏以前に於ける梵語の翻譯。即ち釋尊の眞諦等の手になりし舊譯をいふ。

【三業】身、口、意の三業をいふ。

【四攝】衆生を度脱せしむる四種の法。布施攝、愛語攝、利行攝、同事攝。

圓教三聚の體性は全く律儀戒體と一同なり。三聚の體相別に陳ぶべからず。唯律儀圓意の所受を以て、以て、總通三聚の體性と爲す。況んや律儀戒は三聚圓發し、義融理通す。具足滿するが故に。圓教は本是れ三聚の教法、律儀圓に發す、本圓に由るが故に。是故に戒體は通別是同じ、意の表無表を加ふるのみ。上に勝莊を引いて即ち彼三聚の戒體を陳述す。其れ處の文なり。香象の所釋は『梵網』の戒を解釋す。即ち是れ三聚淨戒の體性なり。法銑師の云はく、「三に大乘に依らば、作戒は三業の現行の思を用て體と爲す。身語の二業は發動の思を用て以て體性と爲す。意業は則ち審決二思を以て體性と爲すが故に。唯識に云はく、身を動するの思を説いて身業と名け、語發動するの思を説いて語業と名く。審決二思は意と相應するが故に、作りて意を動かすが故に、説いて意業と名く、其無作の戒は三業の思種防非の功能の有るを用て以て體性と爲す。菩薩心に由りて思願を引起して識を熏じ種を成するに、後世に流至す。及び餘心無心等に入るの位を失戒と名けず。』上此れ即ち總通して三聚體を明す。若し三聚に就いて別別に體を出し、律儀戒の中に共門戒の體は即ち前の圓教の種子を體と爲す。若し譬爾を護らば不共戒を成す。是れ別受なりと雖も具に三業を成じ、而して此律儀に三聚の義を具す。攝善は是れ衆善を修むるの作なり。禪定智慧、三業の所修、六度萬行、菩提分法なり。『瑜伽』の所説は攝善法の中に三慧三業、正念正智、正行等の九善あり、是れ作持の相なり。萬善を修めざるの罪を禁防す。善思の種子防發の機能を攝善の體と爲す。攝善衆生戒は四攝四無量一切の度生所有の諸行、是れ其

【三】四分律藏の所詮の宗を明す。
 【四分律】戒律の各項を四分と爲すが故に此名あり。
 第一分、比丘戒、受戒、第三分、安住、自恣、皮革、衣、藥、迦絺那衣、狗、賤彌、瞻波、訶、人、覆、藏、遮、破僧、滅諍、比丘尼、法の十六、毘尼、第四分、房、舍、毘尼、雜、毘尼、結集、法、七、百、結集、法、七、百、毘尼、増一、なり。
 【三】通受の宗を明す。
 【三】毘尼の分齊を明す。

作持なればなり。『瑜伽論』に饒益有情を説くに十一相有り、唯是れ四攝なり。應に隨ひ相を聞き、能く利益を作さざるの罪を禁ず。此れ亦善思種子の上の防發の機能を攝生の體と爲す。後二聚の體各の三聚を具す。通別二門一を擧げて全收る。一一の別相各三聚を具す。』
 (三三)と
 問ふ、『攝律儀の中に四分律藏は何等の法を以てか所詮の宗と爲す。』答ふ、『古來の諸師は四分の宗を立つるに異解紛紜たり、略して二十家を擧ぐ、一には有師は止作を宗と爲し、二には道暉律師は受隨を宗と爲し、三には有師は止惡を宗と爲し、四には法願智首は俱に教行を以て宗と爲し、五には有師は因果を宗と爲し、六には道雲律師は別に宗を立てず、七には法礪律師は止善を宗と爲し、八には南山律師は淨戒を宗と爲し、四分一律所詮の行相に戒を宗趣と爲す。是れ其良證なり。九には懷素律師は戒行を宗と爲し、十には定賓律師は善く毘奈耶を説きて以て宗旨と爲す。今は南山師、戒を以て宗と爲し、其持犯の相を其所明と爲す。』
 (三四)と
 問ふ、『通受教法は何を以てか宗と爲す。』答ふ、『通受の教法は大乗の經論散説の諸教、別説の諸典、皆三聚淨戒を以てす。即ち是れ定まれる義なり、異端有ること無し。』
 (三五)と
 問ふ、『毘尼の法義、分齊は云何。』答ふ、『毘奈耶藏は最極廣博なり。今本部の四分律藏に就いて文の所烈に約して義の分齊を明すに、三十七法に盡く部文を攝し、六軼の所詮此に過ぎざるが故に。三十七とは僧戒八段、尼戒六段、二十提度、結集調部及び増一なり。』

【結集】佛弟子相集まりて、佛の教説を編輯すること

【五德】比丘の五德なり。怖魔、乞士、淨戒、淨命、破僧。
【威儀】行、住、坐、臥の四事常に心を調へ、規矩に合して戒を失はざること。

古來の諸師は是の如く分節せり。若し序分に加へ及び五百と七百の結集を開けば、三十九を成す。二部の戒相は常に明す所の如し。毘度の中に受戒説成、安居自恣は、並びに名字の如く、各其法を明す。皮革毘度には皮類を開用す。一重多重の富羅等の相の如し。邊地の五人受戒、數數洗浴、手に衣を受取して十日を數ふる等直に此中に在り、衣樂迦稀各彼法を明す。拘睺彌法は國に従つて名と爲す。彼國の比丘共に相鬪諍して罵詈誶謗し、互に長短を求め具德の人は如法に罪を擧げて諍事を止息して和合同住す。不見懺等の三擧羯磨は此章の中に在り。瞻波提度には羯磨の如非を明して所應の作事を制す。彼客比丘は舊の比丘の爲に擧羯磨を作す。如來は之を誡め具に非法、別衆和合等の七非羯磨を説き、又得滿不應何等の四種の相狀及び七非等を説き、呵責提度には即ち呵責等の七種の治罰の法を説いて七種の剛強難化の衆生を調伏す。法に應じ教に合して安隱に修行す。人提度の中には明に僧殘六夜、別住、本日等の法を具し業果を懺除し非法を悔滅す。覆藏に提度に一の覆藏に就いて種種の相を明して罪垢を除滅す。遮提度の中には人を遮し他を擧ぐることを率爾ならず。若し他罪を擧げば須らく五德を具すべく、人如法是れなり。他の罪を擧ぐるに堪へたり、此中に具に此等の行相を明せり。破僧提度には破僧事を明す。滅諍提度には七滅諍を明す。尼提度の中には具に尼衆受戒説戒等の一切の事法を明す。法提度の中には僧の行法を明す。行來進止、威儀法式、提度微整、威肅顯彰せり。房提度の中には修業の縁を明す。諸の資具の中に房舍最要なり。雜提度の中に修道の資縁、彼此一に非ず、

【僧殘】十三僧殘のこと。二百五十戒の中十三戒を攝む。失精戒、觸女人戒、食語戒、摸身索供養戒、媒嫁戒、有主房戒、無主房戒、無根誘戒、假根誘戒、破僧違諫戒、助破僧違諫戒、汚家積誘違諫戒、惡性拒僧違諫戒。

應に説くべき所のものを交雜して廣く明せり。雜捷度の後に具に大小持戒の相を説く。大持戒とは即ち是れ比丘比丘尼の持戒の行相なり。小持戒とは是れ餘衆の所行なり。内外四儀、繫念現前し常爾一念にして諸蓋を念除す。廣く是の如く所作の事業を説く。五百と七百の兩結集は遺法を住持して、匡正事義を散落せざらしめ、遐代に流通す。調部毘尼は前の戒本に於て波離、問を擧げて、疑情を決斷す。諸篇諸戒各條例を立つ。問答研竅、次第漸略して僧殘の中の無根誘戒に至る。八篇に通すべしと雖も、略して説かず。毘尼、増一は一より多に至り、諸の法義を明す。毘尼大教の理致を統收して數法連持して、法相遺無く以て付囑流通の相を彰かにす。一を以て本となし、一の上に一を加ふ、故に増一と云ふ。増一の言並びに始終に通ず、法相多しと雖も未だ必ずしも數を盡さず。是故に一より二十二に至り、其中に於て十四、十五、十六、十八、十九、二十、二十一の七門を越えたり。此中の實數は十四増有り。即ち是れ増一阿舍の例なり。四分律藏三十七法、文義次第相收することは是の如し。若し義科に約して總攝して言を爲さば五篇七聚、持犯方軌、止持作持、作犯止犯、所詮の行相、根本總體、開いて四行を成す。總じて持犯と名く。廣く制して略を補ひ、結戒説戒、制聽開遮、境想五句、捷度の中一切の義科、是の如き等の法門、是義理分齊なり。祖師の所撰の三大部等の所有の義科條類法門相貌無量にして具に陳ぶること能はず。』

律宗綱要卷上 終

律宗綱要卷下

東大寺沙門凝然述

【一】發心修行の相を明す。佛性 本來自性 清淨の無爲涅槃にして、眞如法性のことをいふ。これ即ち一切衆生が本來具有する理性にして、迷にありても滅せず、悟にありても増さざるものなり。【本覺】 始覺の對本來法爾に存在する平等法身の覺體にして、宇宙法界の根本、本體たる眞如の理體をいふ【三學】 證果をうるにつき三つの修學すべきもの。戒學、定學、慧學。【觀心】 己が心の本性を明かに觀照すること。

(二)と問ふ、律宗の行人發心して道に向ふ、得果を修斷する行相云何。答ふ、一切衆生皆佛性有り。妄想翳覆して顯現すること能はず。本覺を内因とし教友を外縁として發心修道士。大菩提心は佛果の妙因、三學の行業次第に進修す。戒學は即ち是れ三聚圓發、定慧は即ち是れ唯識圓觀、唯識の法を修めて觀心明靜なり。心慮凝寂にして念想都絶す。彼此を存せず、之を定學と名け、其觀心朗然照明にして萬法歷焉たり、之を慧學と名く、戒學無量なり、各定慧を具す。萬行定學、萬行慧學、一一各戒慧戒定を具し自然に周普して圓備せざる無し。是の如きの修行は位に隨ひ昇進す、斷障證理し行、滿じて成佛す。(二)と問ふ、大乘の菩薩は幾の位に依託して、萬行を修成して佛果を感護するや。答ふ、南山尊者『攝大乘論』に依り、四位を建立して因果の位を攝す。其四位とは、一には願樂位、二には見位、三には修位、四には究竟位なり。祖師亦五十二位を立てて、菩薩の因果諸位を攝盡す。此れ亦全く攝論の所說に依る。『歸敬儀』に云はく、聖は自聖に非ず。終に導を假りて漸明なり。凡は定凡に非ず。亦聞に因りて達解す。是に知んぬ、愚智深淺、賢聖位階は外行の遠近に因りて、利鈍の乖異を致す。故に論に云はく、無分別智は即ち是れ菩薩、

【二】修行と證果を明す。

【三】攝論の四位五十二位の廣略相違を明す。

【四】二利成滿を明す。
【二利】自利、利他。
【三性三無性】三

菩薩は即ち是れ無分別智なり。菩薩位に約して且く五十餘階を烈ぬ、故に知んぬ、無分の智は念念に利鈍なり。此言旨有り」上。五十と言ふは十信、十住、十行、十廻向、十地是なり。餘階と言ふは是れ二階なるが故に即ち等覺妙覺なり。『淨心觀』に云はく、『三賢十地、無垢妙覺、四十二地、空宗眞理』と。上。無垢と言ふは是れ等覺の位、『瓔珞經』の中に等覺の位を以て無垢地と名く。故に此名を立つ。『淨心觀』の中に三賢已前に大乘清淨の信心を起すと云ふは是れ十信なり。』

問ふ、『攝論』の四位、五十二位、廣略相違せん、云何が相攝するや。答ふ、『四位には即ち五十二位を攝し、願樂位の中に四十心を攝し、信住行向なり。見位に彼初地の全位を攝し、或は是れ入心なり。彼入心は是見道なるを以ての故に。修位は二地已後乃至七地、或は金剛心究竟位は八地已上乃至佛地を攝す。或は唯佛果なり。然るに『攝論』の中に法雲と妙覺とを以て究竟と爲す。第十地は是れ因圓滿し、妙覺地は即ち果圓滿す。等覺は即ち是れ因圓滿なり。願樂位の中の四十心の位は是れ初僧祇なり。初地より七地に至るは第二僧祇なり。八地已上乃至等覺は第三阿僧祇なり。三大阿僧祇劫を滿じて即ち無上菩提を究竟することを得。』

問ふ、『菩薩行の人、此等の位の中に何等の行を修めて二利を成滿するや。』答ふ、『唯識圓教、一乘の行者、發心已後萬行を趣向して四位通修す、唯識妙觀、理事雙び行じて圓融自在なり。六度四攝、二諦二空、三性三無性、三空四無量、具足圓滿して任運に周盡せり。』

性とは唯識宗にて萬法を三種に分つ遍計所執性、依他起性、圓成實性。三無性とは三性に對して、法の無自性なる邊より三種の無性を立つ。相無性、生無性、勝義無性これなり。【三空四無量】三空とは我空、法空、俱空、四無量とは慈無量心、悲無量心、喜無量心、捨無量心。【四善根】小乗の修行證果の階位。煖位、頂位、忍位、世第一法。【四念住】身念住、受念住、心念住、法念住。【六和敬】同戒、同見、同行、身慈、口慈、意慈の六和敬。【四諦】苦集滅道【六念】念佛、念法、念僧、念戒、念施、念天。【四正勤】煖位にて修する行。

是の如き等の相は是れ其通行なり。願樂位の中に四善根を修す。四尋思の中に所取の空を觀じ、四如實智に能取の空を觀ず。十信の位の中に次の如く即修す。信等の五根は不退、廻向、護法、戒、願なり。十位に各の信等の十行及び六度萬行を修す。此等を成滿して十信圓足す。即ち初住不退の位に入る。十信は即ち是れ凡夫位に列し、初住已上は即ち内凡の位なり。十住は總じて習種姓の位と名け、諸佛の法を解して善巧智に住す。般若の妙行、甚深微妙なり。初住は八萬四千の度門、二住は四念八萬法門、三住は十一切入を修す。四住は八勝處、五位は八大人覺、六位は八解脫、七住は六和敬、八住は三空門、九住は四諦、十住は六念、十行は次の如く十度を修習す。若し『本業』『瓔珞』の所説に依り初行には四正勤を修め、二行には四神足、三行には五根、四行には五分法身、五行には八正道、六行には七覺を修め、七行には五善根、八行には四無礙解、九行には三世門十二因縁を觀じ、十行には菩薩の三寶を念觀す。十廻向の中に初には三諦を觀じ、二には五神通、三には四不壞淨、四には生住滅の三相を觀じ、五には五陰の法を觀じ、六には十二入、七には十八界、八には因果法の無生無滅を觀じ、九には二諦空を觀じ、十には中道第一義諦を觀修す。初地已上は是れ分聖の位、地上の諸位、體性深廣なり。五乘の法に寄り、地の淺深を顯す。初の二三地は世間に相同じ。初地は檀施、二地は十善、三地は修定、四禪八定は此地に修得す。四五六地は二乘に寄在す。四地は三十七品、助菩提法。五地は四諦各十諦を聞く。六地は具に十二縁起を修す。十門の觀行、三觀圓修す。七地には一切菩提分

【三諦】空、假、中の三諦。

法、猶是れ大乘出世の法なり。三乘は並に是れ出世の法なるが故に、八地已上は一乗の法に寄す。是れ出出世無功の法なり。四地已前は眞俗別觀、五地已上は眞俗合觀、六地は有相有用の位、七地は無相有用の行、八地は無功三種の世間、任運に成就して自在無礙なり。九地は化他、四十辨才、說法自在、巧便無窮なり。十地究竟、無盡身を樂ふ。大雲雨を施して一切を救濟す。修習位の中に萬行圓備す。金剛心の後、佛果現前す。盡未來際人用無方なり。

【五】佛道を修するに二種の身を明す。

問ふ、「何等の身を以てか佛道を修行する。」答ふ、「修行の所依に二種の身有り。一には分段生死、六道四生、三界の内受くる所の果報、煩惱障を縁と爲し、有漏の業を因と爲して、受くる所の果報なり。壽に定限有り、報に形段有り。此に死し彼に生れ體相羸劣なり、總じて分段と名く。二には變易生死、三界の外受くる所の果報、微細勝妙、不思議報なり。所知障を縁と爲し、二利の境を存するが故に、無漏の業を因と爲す、正しく細報を成するが故に。因移果易微細に生滅して、意に隨ひて變化し、總じて變易と名く。地前は分段、初地已上は變易身を受く、意に隨つて應化す。乃ち金剛に至りて是れ變易身なり、佛果の初念に變易の報を捨てず。佛果孤標して高く域外に居し、玄に二死を超えて無障自在なり。」問ふ、「圓教の菩薩、諸位の中の能斷所斷の相狀は云何。」答ふ、「所斷の障とは即ち是れ二障、能斷道とは無漏智等なり。二障と言ふは、一には煩惱障。貪瞋癡等、等しく起つて現行して、惱身心を擾し涅槃を礙ふるが故に。二には所知障。所應知の事理の二境を得て通達

【六】能斷と所斷を明す。

せざらしむ。菩提を障ふるが故に。煩惱障の中に四住地有り。見愛住地は是れ分別の惑なり。俱生に三を分つ、三界を約するが故に。具に種相を論ずるは總じて是れ一百二十八種の根本煩惱、及以彼の分位、等流の諸の隨煩惱なり。總じて根本と言ふは十煩惱有り。貪瞋癡慢疑、身見、邊見、邪見、見取見、戒禁取見なり、分別起の中に具に十使有り。貪瞋癡慢身邊の六使は俱生起に通ず。分別の煩惱に百十二有り、是れ三界四諦理に迷ふが故に。欲界の四諦各十使有り。上二界の諦に各瞋使を除いて總じて八九七十二種有り。前に並びて即ち百十二を成ず。俱生煩惱は欲界に六有り。色無色界に各瞋恚を除いて二十五有り。前に並びて即ち十六を成ず。是故に見修合して一百二十八種有り。若し隨轉理門には煩惱障の中に總じて九十八使有り。全く毘曇に同じ。『瑜伽論』等は即ち是れ大乘の眞實理門なり、故に一百二十の煩惱有り。

諸の隨煩惱に二十有り、念、恨、覆、惱、誑、諂、諂、慳、癡、憍、害、不信、懈怠、放逸、惛沈、掉舉、無漸、無愧、失念、散亂、惡慧、已上二十。邪欲、邪勝解、瑜伽には更に此を加ふ。此隨煩惱に總じて二百三十有り。欲界の四諦の下に各二十二有り。謂く、忿恨等皆具足するが故に。總じて通計するに八十八有るなり。色界の四諦に各九法を除く。謂く、忿恨、覆、惱、慳、癡、害、無漸、無愧なり。自餘の十三は四諦各有り、都合五十二法を成ずるなり。無色界の四諦の下に各十一法を除く、九法は色界に除くが如し。更に誑諂の二法を除く、更に誑諂の二法を除きて、自餘の十一は四諦に各有り。合して四十四法を成

【習氣】薰習したる氣分の義。數數煩惱を起したるこ
 とによりて、くせ
 づきたる煩惱の餘
 薰のこと。煩惱の
 體を正使といふに
 對する語。

【賴耶】阿賴耶識のこと。第八識なり。

す。三界の四諦は總じて一百八十四の隨煩惱有り。欲界修惑の二十二法は色界の修惑に忿等の九を除いて餘十三有り。無色の修惑は更に諂誑を除いて餘十一有り。三界の修惑の下
 の惑に總じて四十六法有り。前の見道の百八十四を加へて都合總じて二百三十の隨煩惱の
 法を成す。亦根本の百二十八を加へて總じて相通じて三百五十八の煩惱障有り。並びに是
 れ煩惱なり。其所發の業及び所惑の果は總通して取りて煩惱障の體と爲す。其所知障の體
 相分量は煩惱障に同じ。但し菩提涅槃の二法を障ふる差異なるのみ。本惑隨惑の相狀亦同
 じ。然るに煩惱障は麤なるが故に多品あり。二乗の所斷は唯是れ不善の有覆の性なるが故
 に、數を以て麤顯す。此所知障は細にして多品無し。唯菩薩のみ斷す。亦是れ異熟無記の
 所攝なり。故に數を顯さず、理事に迷ふと雖も唯所知に約して總じて無明と名く。四住地
 の上に此一障を加へて五位地と名く。然るに此二障に各三種有り、現行と種子と餘殘習
 氣となり。二障見修各現と種と習氣と有り、總攝して二と爲す。正使と習氣となり。現
 行と種子とを合して正使と名く。

十信の位には十惡を對治す、惡趣に隨はず善趣の位と名く。正伏に非ずと雖も是れ伏の
 方便、隨分相似なり。煩惱を對治し、十住には即ち邪師所起の分別の現使を伏し、十行に
 は邪教、十廻には即ち邪思惟の惑を伏す、此は是れ漸伏なり即ち二障に通ず。十廻向の終
 に四善根を修し、此時已前の諸分別を頓伏す。其俱生の煩惱等は四善根の位に漸伏す。此
 は是れ六識相應の惑のみ。然るに此二障は八識の中に賴耶には二障相應すること有ること

【末那】末那識。
第七識のこと。

無し。

末那には四惑あり。貪、癡、慢、我なり、但是れ俱生なり。分別有ること無し。第六識の中に識惑相應し、見修道に通ず。五識には唯貪瞋癡の三有り、但し是俱生なり。意識を遮せず、牽引して亦見惑を起す、末那は亦二障に通ず。或は唯煩惱障を起すのみ。末那と俱なる惑は有覆無起なり。第六識の中に俱生の身邊は是れ有覆性。餘は皆不善なり。五識の所起は亦是れ不善なり。上二界の中に一切煩惱は皆有覆性なり。定に伏せらるるが故に。上來は願樂位の伏斷の行相竟んぬ。其見道の位、斷證の相とは世第一法の等無間心に即ち見道に入り、障を斷じ理を證す。梁の『攝論』等には見道の位に入りて根本無分別智及び後得智を證得して煩惱を斷滅して、如理を體證し、事法に通達す。雜譯『唯識論』等に依准するに本智の斷證を眞見道と名く。此時實斷實證するが故に、爾後智の觀門を想見道と名く。安模倣像して似て斷證するが故に、眞見道は無漏智起りて頓に分別二障の種子を斷じて、無間道と名く。即ち是れ見道の初無漏心なり。

次に解脫道に二空の理を證し、次は勝進道なり。三利那なりと雖も俱に是れ一心なれば即ち一心眞見道に名くるなり。次に相見に入れば、通じて三心及び十六心有り、次第に進入す。三心相見に二障を各上下二品と爲す。先づ人空觀、上麤品分別の煩惱を斷ず。次に法空觀、上麤品分別の智障を斷ち後に二空に入りて、雙びに二障の各の下品の種を斷ず。次に十六心に入る、此に二種有り。一には所取能取、十六心、二には上下八諦の十六

心、次第に進入す。三心相見の安立、諦に非ず。十六心の相は是れ安立の諦なり。二種の見道は初地の入心なり。

厥修位とは初地の住心已後は是れなり。修道の十地に十重障有り、地地に一を斷じ、各眞如を證す。十地の所證は即ち十眞如なり。然るに十地の位に各各三心有り。地地の三心に各各斷障及び其證理有り。教典の中に十重障十眞如と言ふは且く各各入心の斷證を擧ぐ。是故に最初の異生性障は分別の惑を約して、其斷證を明す。初地の住心已後の斷證は實に是れ修道の分齊の斷證なり。厥究竟位の斷證の相は第十地の三心あり。分つて其後心を取る、名けて等覺と爲す。等覺の後心、金剛心の位も佛果の障を斷ず。十重障の例、最極微細にして佛地を障ふるが故に、此金剛心は是れ無間道なり。次に剎那の心は是れ解脱道なり。佛果の初念なり。今究竟とは此初念の果已後、乃至盡未來際大用無礙、窮盡有ること無し。三身四徳四智圓滿す。即ち是れ第四の究竟位の相なり。此究竟位に依正二報あり。正報は即ち法報化の三身、依報は則ち四土二土の相なり。四土と言ふは唯是れ淨土なり。寂光土は是れ法身の所居、法性土と名く。實報土は是れ自受用身の所居、事淨土は是れ他受用身の住なり。化の淨土は即ち化身の所居なり。亦綱要の二土有り。一には報土、正しく法身に約し、兼ねて法身を攝す。二には化土、化身の所居なり。淨穢土に通ず。是の如きの佛果、依正二報、自證化他常恆相續して大用無窮なり。法界に周通す。此れ則ち菩薩の大乗、律宗の行人にして、最極所成の無上大果なるものなり。』

【自受用身】 内心の智慧明にして、常に眞理を照し、自らその樂を受用せる佛身。
【他受用身】 初地以上の菩薩のため、に顯現して、説法化益し給ふ佛身。

【七】制戒護持の正像、末及び印度支那日本の三國相承を明す。

【答ふ】以下、天竺に於ける戒律の弘通を明す。

【僧祇律】摩訶僧祇律四十卷。四分律の十。十章に分ちて、諸の戒律を明す。四棄法、十事、二不定法、四十事、九十二事、四事、衆學事、滅諍法、雜誦跋渠、受戒治罪、威儀法、比丘毘尼これなり。上座部の根本律なり。

(七) 問ふ、「佛、弟子の爲に戒律を制説したまふ。弟子之を承けて護持し弘通す。佛在世より佛滅後に至り、正法の時より像末運に至り、五天竺より震旦等に至る。震旦等より今日域に至り、昔より今に至るまで次第に流轉し相承し弘敷する其相云何。」答ふ、「如來成道して物の爲に説法す。四十九年宜に隨ひて制戒す。諸大弟子皆三藏に達し大小を傳持して窮盡せざる事無し。然るに弘持に於ては偏勝無きに非ず。優波離尊者及び橋梵波提は、律を持し律を明め、名を遐邇に播す。橋梵は天の流水に於て入滅す。波離獨住して大いに律藏を弘め、迦葉尊者は廣く三藏を集めて總じて綱維を提し、佛法を住持す。是故に如來總じて三藏を以て迦葉に付屬して、廣く弘宣せしむ。毘尼藏を以て優波離に付し、波離、囑を受けて後代に流通す。波離の弘傳其二説有り。謂く、僧祇律を善見論と二説の相乘、人名各別なり。

僧祇律の中の相傳の事とは彼律の第三十二卷に説く。優波離尊者、次に陀婆婆羅、次に樹提陀婆、次に耆哆、次に根護、次に法高、次に巨醜、次に目哆、次に能護、次に摩訶那已上。次に摩求哆、次に巨舍羅、次に牛護、次に善護、次に護命、次に差陀、次に那舍、次に弗提羅、次に耆婆伽、次に法護、十人。次に提那伽、次に法錢、次に能覺、次に僧伽提婆、次に法勝、次に弗沙婆陀羅、次に道力、上。始め波離尊者より終り道力尊者に至り都合一十七人、次第に相乘して護持弘通す。彼律に一十七人を列すと雖も佛滅してより幾許の年を経るやを明さず。第二十の師をば名けて法護と曰ふ。四分律主の名と全く同じ。

是れ根本部なり。四分律主は是れ百年の時なり。二十部の中に法藏部有り。彼部主前の人と法名を取りて根本摩訶僧祇を持つ。其三百八十年の時に在りて何の遮妨か有らん。自の計有りと雖も兼ねて弘爾なるが故に。

【善見論】善見毘婆沙律十八卷。小乘律にして一卷より第四卷の初に至るまで、第一第二第三の結集、及び阿育王の王子摩訶陀の錫崙に行きしことを記載し、以下第十八卷まで、比丘、比丘尼の戒律を詳述せり。

其『善見論』の傳承の相とは、謂く、優婆離、次に駄寫拘、次に蘇那拘、次に慧伽符、次に目犍連子帝須、次に摩晒陀、阿育王の子。次に阿栗毛、次に帝須達多、次に伽羅須末那、次に地伽那、已上。次に須末那、次に伽羅須那、次に曇無德、已上。次に帝須、次に提婆、次に須末那、次に專那伽、次に曇無波離、次に企摩、次に優波帝須、二十。次に法正、次に阿婆那、次に提婆、次に私婆なり、優波離より私婆に至るまで次第に相承すること二十人なり。前の僧祇二十七人と皆是れ大阿羅漢尊者なり。律藏を傳持して連續して絶えず。善見に諸師を烈ね、未だ別して時代を指さず。然るに彼論に云はく、「爾時、諸の大德、師子州の中に到り已りて摩晒陀を上座と爲せり。時に佛涅槃已りて二百三十六歳、佛法通流して師子州の中に至る」上。晒陀は即ち是れ第六傳律、乃ち彼時に在りて佛法を傳持す。彼第十三に曇無德とは、嵩岳の定賓律師判じて云はく、「其曇無德は即ち是れ此律主なり。已上。今詳かにするに四分律主の曇無德とは如來滅後百年の時に出づるを、善見論の意は第六の摩晒陀、既に是れ二百餘年にして出づ。況んや第十三豈相符せんや。是故に應に二十部の中の曇無德部と言ふべし、此には法藏と云ひ、亦法密と云ひ、亦法護と云ひ、亦法正法藏と云ひ、三百八十年に起る見論の意と時分相稱なり。嵩岳師の意は彼百年の時

【五事】佛滅後百年、印度に大天といふ人有り、五事の妄語を吐き、佛の妄語の因を作る。五分派の因を作る。餘に誘はる。二に無知。三に紙像。四に他をして入らしむ。五に道は聲に因るが故に起る。

の四分律主と其名既に同じ。故に後の法藏を此律主と言ふ。何の遮妨か有らん。彼『善見論』は七百年に造る。第二十四の私婆羅漢は即ち彼時に應ず。事應に爾るべきが故に。元照師の意は後の法藏部に全く前名を取る。彼建摩多羅の例の如きなり。

厥迦葉尊者は摩訶迦葉親たり佛囑を稟け、佛法を弘持し、衆生を利益して、入定せんと欲する時、法を阿難に付し、阿難滅に臨みて末田地に囑す、田地滅に臨み法を商那和須に付す。是同じく阿難に承くと雖も薩波多の和須滅せんと欲し、法を優婆鞠多に付す。此の如く師資傳説に依りて是の如く相傳す。

相傳するを豎の五師と名く。佛法を弘持すること各二十年、延促有りと雖も、是れ受分に約す。鞠多の時已に百年を経たり。上の五師通じて三藏を弘む。今且く其傳律の邊を取る、鞠多の下に五の弟子有り、謂く曇無德、薩婆多、彌沙塞、迦葉遺、婆曩富羅なり。此五羅漢は其所應に隨つて亦三藏五藏等の法を傳ふ。今亦且く傳律の邊を取るも、今此五人

をば横の五師と名く。各の横に傳へて燈を互に巡代に通ず。又佛滅百年餘、大天の五事に由りて、佛法の衆徒分れて二部と成る。謂く大衆部と上座部なり。二百餘年に大衆部の中漸漸に分出して八部と成る。三百餘年より乃至四百に至り

上座部の中に十部を分出す。本の二部と並びて二十部と成る。又十二部五百部等有り。彼の部の中に各律藏有り。是の如く二十部等有りと雖も久しく後に流行するに唯是れ五部なり。即ち上座の中に有部、犢子、化他、法藏、飲光是れなり。此五は全く百年の時の

五部の名義を取る。故に同名有り。故に彼此の名濫れ、諸師異解す。天竺の律法、二十部

【震旦國】以下、震旦國の戒律の弘通を明す。

等、國に隨ひて大に弘まる。横堅繁昌し、血脉相承し辨知すべきこと難し。

震旦國に戒律を傳ふるが如きは時宜契合し、傳通して謬らず、昔後漢の明帝の永平十年

に騰蘭漸來して始めて佛法を傳ふ。事義草創にして、戒法未だ傳はらず。永平十年丁卯已

後、曹魏嘉平元年己の歲に至る。總じて一百八十三年を経て、戒法未だ沾はず、其間三藏

諸師漸く來りて大小乘經を翻傳せり。但し騰蘭の没後、永平十八。後漢の第三の主の章帝

即位の建初元年丙子已後七十一年、梵僧來らず、漢に沙門無し。同代の第十一の主、桓帝

建和元年丁亥已後、沙門漸く來つて佛法を傳譯す。謂く、支婁迦讖、安世高、竺佛朔安玄、

支曜、嚴佛調、康孟詳、竺大力曇果等なり、僧來ること有りと雖も受戒の事無し。

魏の代一主、文帝の黃初三年壬寅の歲に至り、曇迦羅始めて魏朝に至る。然るに諸緣未

だ具足せず、徒に二十八年を経て、遂に喜平二年庚午に至り十人の受を行す。魏の世の中

に創めて明珠を得。此は是れ大僧受戒の初傳なり。其れ比丘尼受戒の初傳は是れ宋の元嘉

十年癸酉の歲なり。如來の滅後一千一百九十九年を経て初めて大僧受戒の事を傳ふ。爾し

てより已後、師資相承して、受戒の事震旦に絶えず。

彼嘉平の時は曇摩迦羅、此には法。僧祇の戒本を譯し、曇諦三藏、四分の羯磨を譯す。此

二部初め洛陽に在り、此は是れ戒律の教文の初傳なり。戒體を納得すること、要す羯磨に

由る。羯磨は即ち曇無德部を行す。是故に震旦の初の受戒の事、四分體を納む。隨行に至

る者は且く僧祇を奉ず。戒業戒本を傳ふと雖も、其廣律未だ傳はらず。

嘉平二年より姚秦弘始五年癸卯に至り總じて一百五十四年を経。明年甲辰弗若多羅、初めて十誦を譯し、曇摩流支、毘摩羅叉、次第に續譯す。十誦の廣律六十一卷、凡そ三譯を経て一部份に成る。次に弘始十二年庚戌、佛陀耶舍此には覺明と云ひ、四分律を譯す。初は四十五卷、後に六十卷と爲す。東晉の安帝義熙十四年戊午、覺賢三藏僧祇律を譯し四十卷有り。宋の景平元年癸亥、佛陀什五分律を譯し、三十卷と成す。此を四律の中に僧祇は根本、餘の三は枝末なり。五部律の中に三部は已に傳はる。其迦葉遺部は唯戒本一卷を傳ふるのみ。『解脱戒經』是れなり。東魏の武定元年癸亥に之を譯す。梁の大同九年日本の欽明天皇四年癸亥に當る、廣律未だ傳はらず。婆羅の戒律は一向に未だ傳はらず。

本律を解釋するに亦律論有り。毘尼母、磨得勒伽、薩婆多に十誦律。善見を釋す。明了、正量部律、毘奈耶律なり。四律は世に傳はる。翻に隨ひ即ち弘まり、十誦は盛に講ぜらる。次に四分を弘め、僧祇五分第講敷を減す。諸律弘まると雖も後代に大いに昌えたるは唯是れ四分の一律のみ。四分譯し已りて六十餘年を経、元魏の第六の主、孝文帝の世に至り北臺の法聰律師有り。本僧祇を學び開通精研す。然るに初受を窮むるに部は曇無に依り、僧祇の講を綴りて初めて四分を弘む。受隨相契して事は一揆に歸す。然るに是口授は未だ簡牘に載せず。

【四分律宗】曇無德部の四分律に依りて開宗せし律宗

道覆已後疏を造り文を釋す。四分律宗には九祖を建立せり。一には法正尊者、律の主なり。二には法時尊者、是れ震旦の始祖なり。三には法總律師、是れ初開の元祖なり。四に

のこと。諸部の律文みな支那に穢譯せられ行はれたれども、後世まで盛に弘りしは、この四分律宗のみ。開祖は曇無德尊者にして南山の道宣律師(十四祖)に至りて大成す。鑑真和尚我國に傳ふ。

は道覆律師、是れ疏を作り義を立てて問答決擇す。五には慧光律師。六には道雲律師。七には道照律師。八には智首律師。九には南山律師なり。大智律師之を立てて定と爲す。慧光已後亦章疏有り。四分律藏は疏家多しと雖も、三師の所製方には世を擧げて美歎せり。一には光統の略疏四卷、二には智首の廣疏二十卷、三には法礪の中疏十卷、之を三要疏と名く。人皆翫んで行用す。昔道雲の門下に二の英賢有り、謂く、洪遵と道洪となり。洪遵と洪淵、法礪、道成、此の如く相承せり。道成の門下に滿意と懷素と有り。各門輩を立てて後代に流演す。道照、智首、南山、此の如く相承して後代彌昌なり。然るに四分律義三宗を分てり、相部宗、南山宗、東塔宗なり。三宗の學者詳論して息まず、水亨の年の後、東塔の新章、昌に世間に行はる。法頂律師は受戒して道を成じ、律を懷素に學ぶ。東塔慎んで新疏を講ず、門學甚だ昌なり。義嵩と如淨と澄楚との三徳並びに新疏を學び、同じく此宗を弘む。乃ち後代に至り東塔の律を弘め、西塔の滿意律師、相部律を弘む。門葉繁昌して互に宗旨を照す、謂く、儀律師、俊律師、綱律師、是文綱。律師、思慧律師、法藏律師、華嚴の圓律師、威律師、恆律師、遠智律師、全修律師、慧榮律師、大竟律師、察律師、照隱律師等なり。定賓律師は是れ滿意的の門人なり。懷素は礪師の十六の大義を破す。賓は『破迷執記』一卷を作る。礪の大義を救ひ素の迷心を破る。日本國天平本の永叡と普照との兩徳、律を求めて唐に行く。彼開元二十一年癸酉の歲を以て五年に當る賓律師に請ひて和尚と爲り受戒す。滿意は法を大亮に授け。曇一に授く。一公四分律を講

ずること三十五遍、大曆六年辛亥十一月十七日報を選す。報齡八十なり。曇一の門人繼連
 して繁昌せり。荊溪湛然、清涼の澄觀並に律を曇一に學び、一公は相部と南山との兩
 定の律法を弘む。故に事鈔に於て『發正記』を造る、相部の律宗此の如く弘敷す。
 首律師の門人に兩英有りて、律を弘む。日本にて昔鈔家要家と名くるは是れなり、乃ち
 玄暉律師の『毘尼討要』、南山律師の『行事鈔』なり。是故に『討要』は南山の宗攝なり。
 南山の律宗後代に久しく傳はる。南山は是れ九祖の中の第九の祖師。今は立てて第一の高
 祖大師と爲すなり。高祖諱は道宣、天機英敏にして達悟利貞なり。隋の大業十一年己亥、
 年二十に滿ち、日本國人王第三十四。智首律師に従ひて具足戒を受く。大唐の武徳年中に首
 に従つて律を聴き、二十遍を経たり。兼て經論に通じ博く大小を研む。内外該括し眞俗統
 貫せり。行は安明より高く、徳は滄溟よりも深し。五部暉を連ね、反つて九代に光なり。
 鈔三卷を作りて古今を映奪す。兩部を疏製して是非を匡正せり。義鈔尼鈔、僧尼兼ねて
 濟ふ。冥證理悟、妙に幽邃を窺め、靈威千古に秀でて、住持萬代に盛なり。贊、集、觀、
 儀、傳、錄、疏、鈔、凡そ二百餘卷にして述作多端にして弘通彌廣せり。玄奘經を翻す
 るや、乃ち譯場を預る、梵僧號して東土の菩薩と爲し、智首律師五部の衝を判す、弘通の
 草創なり。事未だ道廣せず、南山大師秉持の世に泊んで日下競馳し通方昌に弘る。曇摩戒
 宗縁を待ちて、方に開く、乃ち大師律主兼御の力なり。大師の律は則ち専ら四分を奉ず。
 論は則ち成と攝との二宗なり。經は是れ法華涅槃、判は是れ三觀教宗、總じて八宗の宏綱

を提げて、別して一宗の極位に居せり。兼正弘通定に由有り。乾封二年丁卯十月三日、安座して卒す。日本國人王第三十五代天智天皇御宇六年丁卯に當る。春秋七十二、僧臘五十二なり。

南山大師の門人甚だ多し。新羅の智仁初めて鈔記を作る。大慈律師も亦鈔記を作る。弘景律師大に台宗を興し兼持兼濟す。是れ南山の重受戒の弟子、鑿真和尚受具の和上なり。律鈔の記を作り律を講ずること百遍、懷素律師初めて事鈔を學び、及び相部を學ぶ。亦是れ南山の重受戒の弟子なり。道岸律師、融濟律師等皆南山の門人なり。厥中に周律師は第二祖爲る者なり。

第三祖は蘇州の道恆律師、記十卷を作り、事鈔を解釋す。第四祖は揚州の慧照寺の省躬律師にして、順正記を作り、事鈔を解釋す。第五祖は慧正律師、第六祖は京兆の玄暢法寶大師にして『顯正記』を作り、事鈔を解釋す。第七祖は越州の元表律師にして、鈔の義記五卷を著す。第八祖は守言律師にして、法を元表に稟け宗旨を研尋す。第九祖は杭州の元解律師、第十祖は法榮律師、第十一祖は杭州の處恆律師と曰ふ。にして『拾遺記』三卷を作る。第十二祖は宋の杭州の擇悟律師にして『義苑記』七卷を作る。第十三祖は宋の臺州の允堪律師と曰ふ。にして、法を擇悟に承け律部を宏敷す。大宋の第三の主、眞宗皇帝の景徳二年乙巳に誕生し、日本國一條天皇の御宇に當る。南山の十部並に記解を作る。故に世に號して十本記主と曰ふ。謂く、事鈔の『會正記』、戒疏の『發揮記』、業疏の『正源記』、義鈔の『輔要記』、教誡義の『通衍記』、淨心誠觀の『發真鈔』等なり。大宋朝の中に此記盛に行はれ、

南山宗に於て會正宗と號す。

第十四祖、擇其律師。第十五祖、杭州の元照大智律師。内外兼貫大小該羅し台宗を證悟

し、淨教を究暢し、南山の宗旨三大律部並に記解を述べ、事鈔の「資持記」、戒疏の「行宗

記」、業疏の「濟緣記」等なり。照公は大宋の第四の主、仁宗皇帝の慶曆八年戊子に誕生す

日本國後冷泉天皇御宇永承三年に當る。第八主徽宗皇帝の政和六年丙申九月一日に入滅す。日本國鳥羽天皇の御

宇承三年に當る。第八主徽宗皇帝の政和六年丙申九月一日に入滅す。日本國鳥羽天皇の御

春秋六十有九なり。入滅の年より今日日本國嘉元四年丙午に當るに至るまで、已に一百九十

一年を経たり。第十六祖開元經院、智交律師。或は道標を立てて第十六祖と爲す。眞照の相傳。第十七祖、東

堂准一律師。第十八祖、竹溪法政律師。第十九祖、石鼓法久律師。律を法政に稟け融冶瑩

練なり。彼同門に如庵了宏律師有り、乃ち當時の神星なり。律を法政に稟け宗旨を究暢

す。日本の俊苒法師、海を越えて宋に入り彼門下に至りて、律藏を研精し、年數廻を經

たり。歸朝して弘通す。如庵の門人に守一律師有り、戒律を精研して大いに義途を立つ。

第二十祖、上翁妙蓮律師にして久律師に隨ひて戒律を習學し、守一師と宗義を諍論す。大

宋第十四の主、理宗皇帝景定二年壬戌の御宇弘長二年壬戌に當る。正月三日に極樂庵に

卒す。春秋八十有一なり。第二十一祖、石林行居律師にして、蓮師に承けて律藏を秉持

す。竹溪已下の四人は皆潮心の廣福律寺に居し、遺法を住持して像教を秉御す。日本の眞

照律師、大宋朝に入り蓮宗師に隨ひ戒を受け律を問ひ、居宗師に隨ひ律を學し疑を決す。

【日本】以下、日本に於ける戒律の弘通を明す。

【廣庭天皇】敏達天皇を指す。

在唐三年、乃ち正元弘長之間なり。大宋の律宗行居已後連續弘傳して今に絶えず。上來は震旦古來の律法相承の相貌を陳述し竟る。

日本戒律弘通の事に至りては根元由來其相多し。草創基地、微より著に至る。大日本國人王第三十代磯城島、金刺宮御宇天國排開廣庭欽明天皇天下を治めたまふ。第十三年壬申の歲、釋尊の教法始めて此國に傳はる。如來滅後一千十六年を経たり。後漢の明帝の永平十年に天竺の佛法創めて震旦に傳はり、三百年を経る震旦の佛法百濟國に傳はり、厥後一百年を経る百濟の佛法創めて日域に傳はる。即ち此れ廣庭天皇壬申の歲傳度の所なり。佛法漸く傳はるも戒法未だ始まらず。

敏達天皇の御宇五年丙申、律師、禪師、咒師、比丘尼等百濟國より經論を齎し來り、爾れより已後漸漸に傳來る。崇峻天皇の御宇元年戊申百濟の僧來り、馬子の宿彌、彼僧侶を請ひて受戒の法を問ふ。是の如き等の事有りと雖も、諸縁合はず、如法受戒の事を行ふ能はず。

本朝に三口の尼衆有り、日域の所生なり。皆初めて出家せり、一に善信尼、本期藏尼世妻。三に慧善尼、本伊志妻。といふ。此三尼は受戒の志有り、百濟に往かんと欲す。此爲に即ち受戒の法を問ふ。即ち使の僧答ふるに、二衆無きを以ての故に、尼受くること能はず。三尼即ち此を以て戊申の年百濟國に渡る。其年十戒六法を受く。明年己酉三月具足戒を受く。明年庚戌即ち本朝に還り櫻井寺に住す。後に楷井寺に住す。即ち豐浦寺是れな

り。

此戊申歲百濟國より六口の僧を送る。謂く、令照律師、慧總法師、令威法師、慧勳法師、道聲法師、令契法師なり。即ち椋原の里に於て假に垣、假に僧房を造り此六口の僧を安置す。其後彼寺、華構造り畢る。即ち本の元興寺是なり。斯れ乃ち日域の僧尼の根本なり。厥後僧尼漸く多く國に滿ち、然も諸緣具はらず、受戒を行すること無く。他國來朝の僧は皆彼國の比丘僧なり。但し此國に於て授具すること能はず。

然る後、後の僧諸宗を學習し定慧に通達し經論を研精す。『占察』、『地持』等の教に依り或は三聚に於て從他受を致し、或は好相を得て自誓受を行す。並びに是れ菩薩の通受の方軌なり。智憬法師、維摩堂に於て陳ぶるに此事を以てす、誠に據炳焉たり。行基菩薩の徳光法師に隨ひて具足戒を受くとは即ち此事なり。

天平八年丙子、大唐の道璿律師來朝して、僧數滿たず、壇法を行すること無し。欽明天皇壬申の歲より人王第四十六代女帝孝謙、高野の姫の天皇の御宇天平勝寶五年歲次癸巳、大唐第六主の玄宗皇。已に二百二年を経たり。其間此國に戒律未だ傳はらず、然るに日本人帝天寶十三年に當る。已に二百二年を経たり。其間此國に戒律未だ傳はらず、然るに日本人王第四十五代天瑞國押開豐櫻彦聖武天皇の御宇、天下を治めたまふ、天平五年癸酉、大唐開元二十一年に當る。興福寺永叙禪師及び普照大徳に勅して入唐し留學せしむ。兩徳、唐に至り即ち東都の大福光寺の沙門道璿律師に請ひ、先づ日本に向つて去らしむ。傳戒の師の爲に擬して叡照二人留學して唐に在り。道璿大徳三十五なり。天平八年丙子唐開元二十四年に當る。に副使

中臣朝臣名代の船に隨ひ方に來朝す。道璿大徳は戒律、華嚴、台教、北禪、其幽旨を窮め
彼宗途を罄す。壇法を行すと雖も、律を講じて人眼を開く。

昔南山の『行事鈔』創めて此國に傳はりしに、人として之を講讀する者無し、道璿禪師

始めて讀講して敷めしが、道璿已前にも處處に講談せられたり。最初に朗辨、靈夢の告に
依りて金鐘寺に於て始めて始めて布薩を行じ、道璿師に請ひ梵網戒を説かしむ。夢に依り
告を示す。是れ

日本國布薩の初めなり。其後融公、羅素堂に於て『行事鈔』を講ず、智憬大徳亦事鈔を講
ず、處處一に非ず。道璿來朝して常に事鈔を講じて、大安寺に住せり。彼塔院に於て事鈔

を講宣し諸部を談ず。多く門輩を生じ律を明むる者多し。大安寺の善俊律師明律の譽有る
等、即ち其門人なり。永叡、普照唐朝に遊學して十年を経て諸教を研究す。時に天寶元年

壬午 日本天平十 楊州の大明寺に詣で鑒真大和上の足下に禮して、具に來意を陳べ、海東
に遊びて戒律を弘傳せんことを請ふ。和上乃ち諾し、門人祥彦先づ隨つて去るを約す。遂

に僧道興、神項等二十一人有り、同心に隨はんと願ふ。及び餘の道俗彼此總合して八十餘人、
要約已に畢りぬ、舟を作り糧を備ふ。海を過るの間種種の難有り。逆浪奔波過ぎて復還

る。四度船を造り、五廻海に入り十二年の中辛苦無量なり。道俗逝化するもの三十六人、
永叡祥彦等是なり。退還せる者二百八十人、唯大和上と普照と思託とのみ死を取るを期と

爲し、都て退思無く、初度の發足は天寶二年癸未なり。其最後の第六度の時は天寶十二年
癸巳 日本天平勝寶 十一月十五日船に乗りて唐を離る。其相從の弟子楊州白唐寺の僧法進、
五年に當る。

泉州超功寺僧曇靜、寶川の開元寺僧思詔、楊州興雲寺僧義靜、衢州靈耀寺僧法載、寶州開元寺僧法成等一十四人、藤州通善寺の尼智首等三人、楊州優婆塞婆仙童、朝鮮國人、寶最如寶、崑崙國人軍法力、瞻波國人善聽、都て二十四人、海に浮びて此日本國に發向す。遂に天平勝寶五年癸巳十二月二十日を以て日本の地に着き、同六年甲午天寶十三年に當る。二月四日京に入り、遂に東大寺に引入し安置す。帝王叡感し慰諭無量にして、授戒傳律を一ら和上に任ず。其年四月、初めて盧舍那殿の前に於て戒壇を建て、天皇初めて登壇して菩薩戒を受けたまふ。次に皇后太子亦登壇受戒したまひ、尋いで沙彌澄修等、四百四十餘人の爲に戒を授け、又舊の大僧靈福、賢璟、志忠、善項、道緣、平德、忍基、善謝、行讚、行忍等八十餘人舊戒を捨て、重ねて和上所授の戒を受く。後に大佛殿の西に於て、別に戒壇院を建て、即ち天皇受戒の壇の土を移し、築いて以て之を作る。

天平寶字三年己亥、大和尚、唐招提寺を造る、乃ち官額を賜はり、以て節に題す、大安寺の善俊律師に請ひて法礪の『律疏』南山の『律鈔』等を講ず。過海和尚來朝の時、思託大德、大安寺忍基等の請を受けて、彼寺の塔院に於て、四五年の中に法礪疏及び鎮國の記を講ず。定寶節宗。其後、忍基、忠慧等處處の寺に於て礪の疏等を講ず。大和尚は専ら法礪南山の記なり。兩宗を學ぶが故に、日域に來りて多く此二を弘む。鑒真大師齡十八に至り、道岸律師に隨ひて菩薩戒を受け、二十一にして弘景律師に從ひ具足戒を受く。融濟律師に隨ひ律鈔等を學び、義威、遠智、全修、慧榮、大亮の五英に隨

ひて礪の律疏を學ぶ。此五人は直ちに滿意律師の弟子なり。大和尚兼ねて天台法華の教觀に達し、五乘洞括し三藏に通曉す。内外兼綜し大小包博なり。護法感通し神變化導す。經律論を講じ、俗人を訓導し、響四遠に振ひ、徳八紘に流る。九州崇めて受戒和上と爲す。律及び疏を講ずること各四十遍。事鈔を講敷する事總じて七十遍。輕重羯磨講ずること各十遍。前後度人四萬有餘なり。三十五人特に群倫に抜き、各一方を建てて像教を弘通す。

日本國に於て三の戒壇を結す。一には東大寺の戒壇、二には西國の觀世音寺の戒壇、三には東國藥師寺の戒壇なり。並びに天恩を崇めて受戒の事を行ふ。東大寺の戒壇は十人受戒し、中國の式に准す。兩國の戒壇は五人受戒し、邊國の式に准す。唐招提寺に亦戒壇を建て東西兩京戒を授くること間無し。來朝の後總じて十年を経、初の五年は東大寺戒壇院に住す。唐禪院は即ち常居の住處なり。後の五年は唐招提寺に居る。隨從の弟子の中に名を後代に呈す者は仁韓大徳、法進大僧都、曇靜大徳、法顯大徳、思託大徳、義靜大徳、智威大徳、法載大徳、法成大徳、靈曜大徳、懷謙大徳なり。此十一人は唐に於て受具す。如寶少僧都、慧雲律師、慧良大徳、慧達大徳、慧常大徳、慧喜大徳、此六人並びに亦唐人にして此國に於て具足戒を受く。沙彌道欽是れ亦唐人なり。此十七人隨從して來朝す。始終隨逐して師の化儀を助く。大和尚天平寶字七年癸卯唐第八主代皇帝廣徳元癸卯に當る。五月六日端坐して遷化す。春秋七十有七なり。

鑒眞大師、南山と相部との兩宗を弘通す。南山是れ第一の祖。弘景を第二祖と爲し、鑒眞を第三祖と爲す。法進、如寶は並びに三祖と爲す。若し相部は第一は法礪、第二は道成、第三は滿意、第四は大亮、第五は鑒眞なり。

今既に海東始めて戒律を傳ふ。故に日域に於ては、大和尚と以て第一の祖と爲す。和尚の弟子法進大僧都、五部に優遊して四含を精閱す。天台教觀、陶練研究し菩薩戒藏弘演開化す。日本の傳戒は鑒眞大師を第一の和上と爲し、東大寺の法進大僧都を第二の和尚と爲し、藥師寺の如寶少僧都を第三の和上と爲し、元興寺の昌禪律師を第四の和上と爲し、唐招提寺の豐安贈僧正を第五の和上と爲す、此の如く七大諸寺律德其戒臘に隨つて次第に補任す、乃至當今は第一七七代の和上興福寺の増信大德なり。律宗を住持して受戒の事を行ふ。歷代住持して宗緒絶えず東大寺の受戒の事、歷代住持此の如し。觀世音寺の授戒亦爾なり。藥師寺の授戒は中古已來廢絶して行はれず。

鑒眞和尚、唐禪院を以て法進に付囑す。彼師の門葉累代相傳し、和上の臨終に招提寺を以て法載、義靜、如寶の三人に付囑す。此三大德志を同しうて力を合せて彼寺を興隆し律法を弘通す。各門葉有り、弘持繁昌し總じて之を言ふ。和尚の弟子十有餘人皆門輩有り。世を累ねて絶えず。厥大和尚は是れ第一の祖、次に法載大德、次に眞環大德、四に戒勝大德、五に壽高大德、六に増思大德、七に安鎮大德、八に喜寬大德、大和尚より仁和年に至るまで、是の如く八代宗緒繼續せり。又大和尚の次に如寶少僧都有り。次に豐安贈僧

正じやう次つぎに道だう靜じやう律師りつし。次つぎに仁にん偕かい大だい德とく。次つぎに眞しん空くう大だい德とく。是かくの如ごとく六ろく世せ宗しやう緒じゆ絶たつえず。餘よ人にんの門もん葉えふは繁はふを恐おそれて之これを略りやくす。仁にん和わ已い後ご招せう提だいの宗しやう緒じゆ門もん葉えふ多おほしと雖いへども之これを録ろくせず。後こう代だいに中ちゆう川がわ實じつ範はん上人じやうじん招せう提だい寺じに入いり、受じゆ戒かい法ぽふを傳つたふ、即すなはち此これ等らうの師しは門もん葉えふなる者ものなり。中ちゆう間かんは是これ人にん名みやうを知しらずと雖いへども法ほふ緒じゆ相しやう續ぞくし後こう代だいに流る至しす。實じつ範はん已い後ご相しやう續ぞく傳でん持ちす。人にん名みやう法ほふ緒じゆ相しやう乘じやうして絶たえず。招せう提だいの一いち寺じ戒かい律りつ繁はん昌じやうせり。諸しよ寺じの僧そう侶りよ受じゆ戒かいの後のち、多おほく彼かの寺じに住ぢゆうし、五ご年ねん一いち年ねん律りつ藏ざうを研けん精しやうし、後こう代だいに漸やうく廢はいせり。豐ぶ安あん、道だう靜じやう已い後ご、律りつ法ぽふの學がく行ぎやう替かはず、其その後ご二ひ百やく餘よ年ねん、持ぢ行ぎやう漸じやう漸じやう陵りやう息たいす。而しかして學がく業ぎやう等らう相しやう續ぞくして絶たえず。

人にん王わう第だい七しち十じふ四よ代だい鳥と羽う天てん皇わうの御ぎ宇うに至いたりて中なか川がわ實じつ範はん大だい德とくと云いふ者もの有あり、是これ興こう福ふく寺じの學がく英えい秀しゆう才さいなり。興こう福ふく寺じの欣こん西さい大だい德とくの雅がし請しやうに酬ちゆうい、律りつ藏ざうを披ひ尋じんし戒かい宗しやうを研けん精しやうす。戒かい壇だんの式しきを作つくりて律りつ法ぽふを興こう隆りやうし、戒かい法ぽふの中ちゆう興こうには範はん公こう功こう有あり。實じつ範はん上じやう人にんは即すなはち唐たう招せう提だい寺じに住ぢゆうし、一いっ般ぱんの老らう德とくに値ちひて四し分ぶん戒かい律りつを傳でん授じゆす。然しかる後のち、大だい鈔せうを披ひ尋じんし、大だい律りつの表へう無む表へうの章しやうを研けん精しやうす。具くに三さん乘じやう戒かい體たいの法ほふ義ぎを明あかし、梵ぼん網まうの古こ迹やく並ならびに諸しよ師しの疏しよ、大だい小せうの戒かい律りつ、皆みな咸ことんく譜ふ練れんせり、明みやう律りつの譽ほ世せに秀しゆう逸いつせり。

其その後ご八はち十じゆ餘じゆ年ねんを經へて人にん王わう第だい八はち十じゆ三さん代だい土ど御ぎ門もん天てん皇わうの御ぎ宇うに至いたり貞ぢやう慶けい上じやう人にん有あり。是これ興こう福ふく寺じの英えい才さい智ち德とくなり。貞ぢやう慶けいは覺かく憲けんに稟りやうけ、憲けん公こうは藏ざう俊しんに稟りやうけ、俊しん公こうは實じつ範はんに稟りやうけたり。是この如ごとく次じ第だいに相さう承じやう連れん綿めんせり。慶けい公こうの解げは二に明みやうを窮きゆうめ學がくは三さん藏ざうを罄つくせり。德とくは寰くわん宇うに滿みち、威ゐは冥みやう顯けんに動どうず。重かさねて戒かい律りつを弘ひろめ、大おほいに訓くん化けを垂たれ、時ときに戒かい如じよと覺かく如じよとの兩りやう哲てつ事じに隨したがひ

大少の戒律を習學す。覺眞大徳は紹隆に志有り。常喜院を建てて學の依處と爲す。戒如上人多く知人を生ず。乃ち圓明、覺盛、繼尊、覺證、禪觀、蓮意、蓮覺等なり。志學の人有り、常喜院に住し、大小の諸律を聽學研精す。

人王第八十六代四條天皇の御宇の喜禎二年丙申に至り、四般の哲有り、圓睛、有嚴、覺盛、叡尊なり。深く學解有りと雖も闕けて戒行無きを數じ、經論の所説に依りて通受の軌則に隨ひ四英同心に好相を祈請し、自誓受戒して戒行を修習す。好相已に成りて大佛殿に於て四人各各に自誓受戒す。即ち九月二日四日なり。其後圓晴大徳不空院に住し、後に北洛に移りて律藏を講敷す。覺盛上人は初め興福寺の松院に居ること七八年を経て、後に唐招提寺に移りて六年を経。叡尊上人は西大寺に居して律を講じ戒を授く。顯密宗を興せるは丙申の年なり。是通受の法は其後一十年を経て、寛元二年乙巳九月中旬泉州家原寺に於て、創めて菩薩別受の法を行じ、西大寺の叡尊大徳最初に晴公の事鈔を講ずるを聽く。上の二、其後自ら大部を披いて研精詳窮す。覺盛大徳に隨つて表無表の章等を聽き、梵網古迹は戒如覺澄に聽く。戒如は貞慶上人に隨ひ古迹表無表の章等を學ぶ。覺盛は戒如に隨ひ表無表の章、古迹等を聽く。

覺盛上人は招提寺に住し大和尚戒律の古跡を興し、終南山の三大律部を講ずること首尾一遍なり。餘の諸小部大小戒律は宜に隨ひて聞敷す。受戒聽律四方より來り集る。後法性寺の禪定太閤、法の諱は行慧、法印權大僧都良遍、權律師定兼、空と號す。阿闍梨靜慶、

沙門大乘心、入阿、寂惠、慶運、聖寺、禪惠、受戒。圓照、證玄、慈濟等是の如きの諸徳は佛法の良匠にして三學二藏、顯密相性、化制内外、教觀兩門、隨應究達し宜に任せて弘持す。寔に是れ釋門の鸞鳳、佛宗の龍象にして各一方を化して世に軌模たり。並に覺盛和上に従ひ、三聚菩薩の大戒を受學す。

厥中に證玄大徳、和上の跡を繼いで招提に住持す。證玄の後門人眞性は本寺に住持し、證玄の門人學侶甚だ多く、寺院を建立し教宗を弘持す。玄公の秉御は群倫に超拔し、寺院に住持すること四十四年、顯密を弘敷し講宣して絶えず。正應五年壬辰八月十四日卒す。春秋七十三、眞性の住持は十三年を経て、講通して絶えず、授戒繁多なり。嘉元二年甲辰二月一日卒す。報齡六十九。厥次に尋竿大徳、寺院に住持して授戒し傳法し、皆崇重す。嘉元四年丙午二月十五日卒す。報齡七十九なり。

證玄の門人に圓證大徳有り、律藏を研究し兼ねて諸宗に通じ本寺に住持し講通絶えず。

道御大徳有り、是れ證玄親度の門人なり。徳望化導し、遐邇に漲る、華洛法金剛院に住持し眞性終焉して招提に任ぜられ而して竿公に譲り、自ら華洛に還る。圓照和上は戒壇を興隆し、律法を弘通して、講敷倦まず、門輩數有り、俱に教宗を提ぐ、禪慧和上は是れ絶倫の律匠、一方を建立して、英才諸徒を出す。慶雲大徳は乃ち堅操の法匠なり。興聖の跡を開き、授戒の徳光を輝かす。眞空上人は觀音院幡を紹隆し、顯密の教宗を弘持す。聖守上人は眞言院を興し、顯密法教を持護し弘通す。聖守の門人に聖然大徳有り、密教を守

公に承け、戒律を證玄に受け、三論を研究し孤標絶倫なり。密嚴大徳は台宗を究暢し、秘教を研精し、下野の薬師寺を興隆す。乃ち是れ良遍上人の親度授戒の門人なり。覺盛和上早く物故に従ひ建長元年己酉五月十九日卒す、春秋五十七、自誓受戒の後十四年世に住せしなり。

西大寺の叡尊和上の門輩は極めて多し。謂く、忍性上人、賢忍、善尊、幸圓、寂尊、頼玄、榮眞、信空、總持、性瑜、玄基等なり。並に是れ法門の梁棟、佛道の綱領、大小三藏、顯密二宗、化制兩教、相性内外、宜に隨つて通達し幽旨を究暢し、各一方を化し法律を網維す。寔に是れ弘通の大將、利濟の上首なる者なり。

忍性上人東國に遊住して大いに律法を弘む。多く門輩を生じ甚だ教光生を耀す。公の門下に知法の者多し。或は顯或は密、智辨縱横にして東國に充溢し、各法宗を建つ。

叡尊和上、徳は群生を覆ひ、威は冥顯を動かす。九代の聖世に値ひ五帝の國師と爲る。戒律普敷し口下に充溢し、密藏廣く開いて方に維遍互す。三藏を研究し、大小を積發して、智

人多く生じ、寺は諸州に滿つ。正應三年庚寅八月二十五日卒す。春秋九十なり、謚を興正菩薩と號す。頼玄大徳は常州三村寺に住持して律法を弘持す。榮眞大徳は性公の後、極樂

寺に住持し、二諦を紹隆し顯密を兼持す。尊公の後信空大徳は西大寺に住持し、戒を授け律を講じ、徳望を紹隆し、師資芳郁、年を歴て繁昌せり。智人多く生じ、法化を助揚す、

總持上人は興正菩薩の連類なり。學解優長にして律路に獨歩せり。幸尊大徳は律海深廣に

して、講敷連日なり。多く智徳を生ず。海龍王寺に住持して、名を遠近に播くす。眞圓大徳は學解出萃にして義辨縱横なり。般若寺に住持して、譽を遐迹に飛、智徳群出して俱に律蘭に榮え、並に是れ叡尊和上の親度の門人なり。性瑜大徳は尊公親度の弟子なり。元是れ三密の梁棟なり。尊公の門下に投げて彼弘むる所を傳ふ。尊公の後、其流を遠近諸方に傳授し、専ら瑜伽傳法の人に任じ甚だ昌なり。氷藍の徳なりと謂ふべし。成眞大徳は東國に遊化しに一方を建立し律法を弘敷す。重禪大徳は尊公受戒の弟子なり。律學を禪慧上人に承く、元是れ圓照上人の門人なり。律學に出萃し密教に拔群なり。三論透逸にして日下に獨歩し、律宗の中興、普天彌滿は管是れ覺盛、叡尊兩徳の善巧大願の力なる者なり。人王八十二代後鳥羽天皇、御宇建久年中に一沙門有り、諱は俊、荊、鎮西の人なり。志學業に在り、専ら戒律を思ひ、乃ち南都に來りて律法を尋求する時に大徳有り、道號は蓮迎。彼大徳に隨ひて戒律を諮詢す。事止を得ず。遠く異朝に期す。土御門天皇の御宇正治元年癸未、齡三十四にして海を越えて宋に入る。大宋第十三の主、寧宗皇帝の慶元五年に當る。先づ北峯の宗印法師に値ひ、天台宗を習學し、後に如庵の了宏律師に隨ひて南山の律宗を受學し、研究精詳して、二宗遺無く、一十三年、順徳天皇の御宇、建曆元年辛未に歸朝し、遂に北洛の東山に於て、泉涌律寺を建て、大いに戒律を弘め台宗を講敷す。日本にて律を弘むること一十七年、講授絶えず、敷演甚だ昌なり。北洛の弘律中興の事は乃ち不可棄法師是れ其始祖なり。嘉祿三年丁亥、安貞、改元。三月八日遷化す。春秋六十有二。法師

徳を兩國に振ひ、威を萬代に播くす。泉涌律場は戒律大に行はれ、講敷今に絶えず甚だ昌なり。

法師の弟子定舜闍梨大いに戒律を講じ、廣く時の賓を被る。後の諸徳智鏡、道玄、淨因等は皆舜公の門人なり。嘉禎三年丁酉の春定舜闍梨、南都海龍王寺に來りて小部律文等を講じ、衆人服膺して來り集りて聽學す。寂尊、禪慧、源俊等皆開講を聞く。泉涌住持は定舜の後、智鏡大徳之に住し律を弘む。鏡公海を越え宋に入り律を聽き、風を滄す。忍空大徳初は鏡公の風を滄す。後に成壇に移りて照公の室に入り具足戒を受け、戒律を聽學し通別二門並に皆傳承す。復寂尊上人に隨ひて、重ねて具足を受く。智鏡の後、思允大徳、寺院に住持して律を講じ教を弘む。是れ乃ち開山不可棄法師の視承の門人なり。後定舜に隨ひて律部を習學す。淨因大徳は法を定舜に稟く。兼て智鏡に諮ぬ、戒光律寺に住持して大いに像教の律法を弘め、化を東國に流し遐代に軌模す。

眞照大徳は元圓照上人に隨ひて戒を受け律を聽き、兼ねて淨因上人に値ひ律の大部を聽く。忍空も同じく聽き、淨因は律を講ず。眞照は宋に入り妙蓮の行居に値ひ律を學し疑を決す。歸朝の後の律を戒壇に弘め、後に泉涌に移り思允に隨從して律を學び疑を決す。源俊大徳なる者有り。本南都に出で後に智鏡に稟く。研尋精練して戒宗に通達し、一方を建立して大に道法を弘む。思允の後願行上人泉涌に住持し、其後寺院を覺阿大徳に委付す。覺阿は智鏡淨因の兩徳に隨ひ律藏を研究し、顯密兼弘し甚だ芳徳を播む。乃ち寺院を

門人知元大徳に付す。元公、寺を司りて宗を弘め律を講ず。然らば則ち律法中興して南
 北二京五畿七道縁に隨ひ弘通し、宜に任せて流演し、横に遍すること此の如し、豎に窮
 むる事得べし、佛法久住の徳此律寔に新なり。國家泰平の祥、斯宗甚だ大なり。護法窮ま
 らず、濟生盡くこと無し。戒律の功其事照彰たり。尸羅の力以て益炳著なり。律宗の綱
 意要略是の如し。』

律宗綱要卷下 終

融通念佛宗聖典

融通圓門章

攝州平野融通妙宗大源山主大通撰述

○當書一卷融通念
佛宗四十六代の祖
大通上人融觀の撰
十門に分ちて宗義
の要領を辯ず。永
久五年、良忽、彌
陀直授の四句偈
一人一人、一行一切
行、一切行一行、一
是名他力往生。華
依りて開宗す。華
嚴經、法華經を正
依の經とし、淨土
三部經を傍依の經
とす。而してこれ
等を釋するに華嚴
天台の章疏及び淨
土の往生論等を以
てせり。本宗にて
は人人の念佛の融
通を談じ、一人の
稱名を以て衆人の
功とし、衆人の念
佛を以て一人の功
とし、一人往生す
れば衆人往生し一
人成佛すれば衆人
成佛すとなす。

一眞法界は冲深廣博にして衆徳を包含し、萬有に徧應し、天鼓海潮思ふこと無くして故
に通じ、眞を求め妄を去ること猶し影を棄てて形を勞するが如し。祇に垢心を濯はざれば
正覺に登ること無し。須らく計執を打して方に圓明に入るべし。心心作佛すれば一心とし
て佛心に非ざる無く、處處成道すれば片塵として寂光ならざる莫きなり。此知見を失へ
ば譬爾として妄起り、東攀西緣す。鈴蟬の子、門外の客、南北に奔逝し、輪環して輟む
こと無く、無始より今に至るまで曾て省覺せず。故に我慈尊は、魏魏として粟散に現じ、
囑囑として開祖に任したまふ。一行一切速捷取辨の秘訣を指陳し、密意を抖擻して一乘に
乗せしめたまふ。顧復の極、請せずして來りたまひ、問ふこと無くして吐きたまふ。眞友
悲母のごとく切にして復急に、恩にして更に殊なるのみ。面授金句、明訓玉章は、感得
變像と俱に梵庫に藏せらる。余は流行を闡けるを慨き、先づ緣起の卷首に載せぬ。然れど
も新意は未だ佛祖の旨を索め得ずして、動もすれば紙辭を成す。嗚呼、時遠うして教弛み、
曉了有ること希なり。寧ぞ悽楚せざらんや。今、爲に綱緊を提擲して、披釋を速撰す。此
作を爲すや、義味に染指するには則ち綜て群典を攻め、圓理を敷揚するには則ち直に雜法

訣。

【抖擻】抖擻に同じ。物を取捨して悉く餘すこと無きを云ふ。

【二】當書を總じて十條に分つ。

【三】教興の本縁を明す。

【良忍上人】元亨釋書第十一等に其本傳を載す。

【別處】大原山なり。叡山の別院なり。

【永久の第五】人皇七十四代鳥羽院治世。

【日輪午に當る】

法華開顯に曰はく三乘九界成く皆悟入す。譬へば、日輪の正午に則ち處として明ならざる無きが如し。の文に依る。

【四】多く勸諭を聞く。

に據る。稍も自ら言ひて己見を成ずること莫し。

南無忍土教主釋尊、西方能化阿彌陀佛、十大薩埵、所有聖衆、惟願攝取、我是凡下、言義離過、不乖慈教、遠近流通、助他信心、臨終正念、同生極樂。

將に此編を著さんとするに、總じて十條有り。一には教興本縁、二には多聞勸諭、三には略釋宗名、四には法門分齊、五には所被通局、六には通修要方、七には内衆規則、八には辨國土、九には明佛身、十には解文義なり。

一に教興本縁とは、開祖良忍上人は、尾州智多郡富田の人なり。穉くして叡峯に遊び、良賀を師として止觀の奧義を究め、永意に遭ひて密乘の幽旨を聞きぬ。來住絶倫にして顯密の碩徳なり。二十三にして交衆を辭し、跡を別處に潜め、二十餘年常に坐して眠らず、勤行孜孜たりき。永久の第五、壽四十六の五月十五に、日輪午に當るとき、無量壽佛面

り身相を現じて曰はく、『汝が行は不可思議なれば順次往生を得ること難からん。速疾往生の勝因を教へ、融通念佛を授與せん。』と。是れ乃ち宗興の基堵なり。

二に多聞勸諭とは、鞍馬の多聞天王、威容を現じて曰はく、『師往いて佛の直授を蒙りて、流化勸進し、蓋ぞ苦界の群有を救濟せざる。』と。上人は末世の信向を證明せんが爲に、問うて曰はく、『何の謂ぞや。』報へて曰はく、『我唱ふる所を廻して衆人に透通し、衆人の唱

ふる所は我に融攝せん。是れ融通念佛なり。其功は獨り稱するに踰えたり。』と。是より志操勇猛にして、天治元年六月九日、管簿を持して京師に遊履し、鳥羽先帝の日課百遍を始

【苦海】 煩惱の大

【三公九卿】 國朝

輔弼の大臣の頭格

を指す。

【交締】 人會結縁

にして終始渝らざ

るなり。

【翌年の首夏】 天

治二年四月四日。

【人文】 男女君臣

父子、尊卑上下、

之を人文と云ふ。

【五】 略して宗名

を釋す。

【從上の五字】 融

通大念佛なり。

め、及以三公九卿等と交締したまへり。五百十三人に向はんとする時、青衣を著したる壯年の僧、上人の前に來りて扶掖を請ひ、手づから佛法護者鞍馬寺毘沙門天王と書し畢りて去りぬ。幽讚の深きを知りて奇敬し感極したまふ。翌年の首夏、鞍馬寺に詣りて通夜念佛したまふに、三更に暨ぶころ、天王忽ちに現じて上人に謂ひて曰はく、「融通念佛の功德彌廣せり。故に我は師に代りて、三界の諸天、六道の冥官、博桑園内の八百萬の神をして各日課百遍を受け、盡未來際不退勤精の誓諾を爲して、各己の名を録せしめて、仁に附與す。」と。披閱するに冥衆星の如く名を列せり。多聞の功勳は、普賢の善財海衆に勸進するに相似たり。爾りしより奮激して、國家を經緯し人文を勸進したまひき。

(五) 三に略釋 宗名とは、總通の道、脫離の門なり。要にして又勝に、高うして又深し。頓超の法、速昇の行なり。一を擧ぐれば全收り、連貫して互に徹し、一多無礙にして重重盡くること無し。名けて融通と爲す。大は當體に名を得て、包含を義と爲す。一眞法界は、所有を具満し過恆に響應す。局限の法は彼此融するが故に。要す自一に住すれば、方に能く徧應す。多界に徧應するは、常に是れ一に住すればなり。一に力有れば多に力無く、多は一の中に入る。多に力有れば一に力無く、一は多の中に入る。一多相入なり。日口億百萬徧を成ずるの謂なり。性を窮め理を盡せば、因果該ね徹し、一相通融し、能所念無し。言議絶離し思想寂滅す。性を空うして修を成ぜば、本具の諸佛は古古に利澤し、圓城の衆生は新新に念稱す。故に念佛と言ふなり。宗は梵語に悉檀、從上の五字は義淵し。穢にし

【六】法門の分齊を明す。

【四天】空無邊處、色無邊處、無所有處、非想非非想處。【正使】煩惱のこ

と。【四弘願】衆生無邊誓願度、煩惱無量誓願斷、法門無上誓願成、佛道無

【五性】菩薩決定性、聲聞決定性、獨覺決定性、不定種性、無性有情種性。【五法】相、名、妄想、如如、正智

なり。【三自性】徧計、依他、圓成なり。【八識】識藏、意識、及び五識身なり。

【二無我】人無我法無我。

て常に淨に、移さざるに而も換る。不二圓門の崇尚と爲すなり。

四に法門分齊とは、諸宗の法匠に皆判教有り。今宗の立つる所は、當に五を以て盡すべ

し。一には人天教、二には小乘教、三には漸教、四には頓教、五には圓教なり。人とは多

思量なるが故なり。蘇迷の四邊に此大洲有り、南瞻、東毘、西瞿、北俱なり。五戒中品の

十善を修持して斯道身を感ず。天とは光明有るが故なり。欲界の六天は男女參りて居し、

諸の欲染多し。色界の十八は並に女形無く、亦欲染も無く、色の化生有り。無色の四天

には但四心のみ有りて、形質有ること無し。上品の十善は、勤めて未だ至らざるをも并せ、

靜慮を兼修し、色を厭ひて定を修し、次の如く上天す。小乗とは、諦緣度有り、佛の聲教

を聞き、四諦十六行相を修習し、八十八九十一正使を伏斷し。他に由りて悟らず、内は

寂靜を因とし外は足少を緣として、更に習氣を侵し。四弘願を發し、六度行を修し、留

惑潤生して、物を利するを心と爲し、次の如く三に配す。唯人空を説くのみにして法空を

説かず、六識を以て染淨を建立す。漸教とは、理と事と各別に於て、性と相とも同じか

らず、五性に差異あり無性の有情には成佛を許さず、八識を以て諸法を建立し、少しく法

性を説き多く法相を説く。又理と事とは不二にして、性と相とは互に容る。定性の二乘

は醉昏し醒覺し、無性の闡提は發心し作佛し、如來藏の隨緣に式りて成立す。少しく法相

を説き多く法性を説く。頓教とは五法、三自性、八識、二無我の一切絶離して法相を立て

ず。一念不生なれば前後際斷す。圓教とは前の四を統該し、圓滿具足せり。相即無礙にし

【相即無礙】圓教の中説く所は、唯是れ無盡法界、性海圓融、緣起無礙なれば相即相入すること、因陀羅網の重重無際にして微細相容し主伴無盡なるが如しとあり。

【一法は一切法】一法一切法、一切法一法、非一非一切、不可思議なり。【七】通じて局らるる所を明す。

【無願無行】發願して彼國に生ぜんと欲せず。名號を執持せざるもの。【非器】聖教の法味を受くる事能はざる者の義。

【堪へたり】器となるに堪へたる義【教卑ければ】唯事を明して理を指すこと無きの説。

【香壤覆載】香壤は天地なり。管子に曰はく、天は萬物を覆ひて之を制し、地は萬物を載

て主伴無盡なり。一法は一切法なり、一斷は一切斷なり、一行は一切行なり、一成は一切成なり。互に具し交融し、思議の境を超過せり。今宗の如きは、口稱の事相は彼此交絡し、塵界に周徧し、衆徳を具有して遺餘有ること莫し。煩惱に即して菩提を證し、荊棘を出でずして玉沼に遊び、熾然に生を求めて無生に乖かず、終口生くれども未だ嘗て生きず。乃ち知りぬ、深濟普周の教海なることを。

(七) 五に所被通局とは、無願無行は總じて非器なり、之に反するは皆堪へたり。凡そ教卑ければ則ち小慧輕陵し、根に對せざれば則ち功行成し難し。圓融口稱すれば上智は享稟し、下機は領荷し。一法を離れざれば巧みに諸根に與る。香壤覆載して大造化育す。普門廣大にして擇ぶこと無く遺すこと無し。圓宗の談、窮證に臻れば、累徳の長尊も聽を杜し、常隨の高足も口を閉づ。信解を洽くすれば、不肖の徒も龍の水を得たるが如く、虎の山に靠るに似たり。圓妙の理の不可思議なるを聞き、圓信解を起し、一心に法界を具するを信じ、一塵に經卷有るを解し、此心を聞かんと欲して、圓行を修せば、妙に自具を悟り、頓に諸聖に同ぜん。福慧事理、皆法界を稱す。力用未充も無生にして生じ、彌陀に親近して直に本來平等を契當す。此には但信順する者を擧ぐるのみ。猜嫌毀訾は、亦滋潤の所なり。

聞いて嫌ひ、知りて訾る。聞知の種は已に識田を蘊むなり。遠からずして益を得んのみ。(八) 六に修行要方とは、僧俗を簡ばず、受課の外、毎日清晨に盥漱し已りて後に西に向ひて合掌し、彌陀の所傳、融通念佛、億百萬遍、決定往生を擧揚し、心を以て縁歴し、高か

せて之を養ふ。
【大造化育】大造の中、棄物無きが故に。

【累徳の長尊】二乗の高徳、猶し羸盲の如し。

【龍の水を云云】名號を持つに由つて、心亂れず、龍の水を得たるが如く、虎の山に靠るに似たり。

【一塵に經卷有る】彼經卷は一微塵の内在り、一切微塵も亦復是の如し

【八】通じて要方を修すを明す。
【毎日清晨】慈雲の晨朝十念法及び念佛方法に憑る。

【子の省】凡そ人の子の禮たるや、冬温而夏清、昏定而晨省。

【帶業得生】重罪を犯す者も臨終の時、懺悔して念佛すれば業障轉じて往生を得るの意。

らず低からず、緩ならず急ならず、調停して中を得、字字分明にせよ。果號を稱念するに十聲を度と爲せ。此一生を盡して慙くも放過すること莫れ。早日に佛を稱するは貴徹を表すなり。臣の朝するに比し、子の省するに類す。又且は即ち是れ夜氣清明にして、未だ世路に馳せざれば、自心の淨を取る。又朝露忽ちに消え、電光便ち過ぐ。幸くば一日の光景を得て一日の佛名を稱し、往生を驗得せん。憍盈のものは謂へらく、一生に惡を造るも、臨終に念佛すれば帶業得生す。我は生前に於て且く世業を做へり。直に臨終を待ちて、而る後に念佛せん。」と。當に諦かに聆くべし。臨終の僥倖は千萬人の中に一兩口も無し。懷感師云はく、「世間に十種の人有りて、臨終に念佛を得ず。一には、善友未だ必ずしも相遇はざれば、勸念の理無し。二には業苦身に纏へば、念佛するに違あらず。三には偏風にかかりて語を失へば、稱佛すること能はず。四には狂亂して心を失へば、注想成じ難し。五には或は水火に遭へば、至誠なるに暇あらず。六には豺狼に遭遇すれば、復善友無し。七には臨終に惡友あれば、彼の信心を壞る。八には飽食して度を過ぐれば、昏迷して死を致す。九には軍陣鬪戰すれば、奄忽にして亡す。十には高巖より顛墜すれば、性命を傷ふなり。」と。斯の如き十種の事は、皆是れ尋常に目撃耳聞するところにして、宿業の招く所、現殃の感ずる所なれば、廻避すべからず。孰か之を知らん。臨終の有業無業も好死惡死も、十種の惡縁の卒爾に一事に遭著して、便ち空しく往くなり。直饒此惡縁無くして平病に死するも、世縁未だ了せず妄情未だ休まざれば、生を貪りて死を怖る。刀風體

【三聚淨戒】攝律儀戒、攝善法戒、攝衆生戒。

【惜善】惜は護惜の意、囊は浮袋の意、大海を渡るに浮囊を護惜するが如く戒を守護するなり。

【淨業の正因】觀經に彼國に生ぜんと欲せば、當に三福を修すべし。一、者父母を孝養し、二者三歸を受持して衆戒を具足し、威儀を犯せず、三者菩提心を發す。即ち是れ三世諸佛の淨業の正因なり。

【四惡】國土を辨ず、地獄、餓鬼、畜生、修羅。

【一善】二善の衆生即ち人天なり。

【二乘】藏、通の二乘。

【三種】通、別、圓の菩薩。

【分段身】有漏の善惡の業が煩惱障の緣によりて感得したる三界五趣の異熟の依身をいふ。

は如來藏有り、修行して成佛することを得べし。三寶の功德は最勝にして量り難く、此を離れて更に歸依すべき處無し。因果決定し、業報必然たり。是故に捨惡修善するも自心を離れず。然る後に三聚淨戒を受く。十重、四十八輕を護持し、性を遮するの分と全と、一惜善して、微塵許の如きも犯すこと有らしむる勿れ。善の用は無邊なり。惡の用も亦爾り、自ら損じ他を穢す、怖るべきの甚しきなり。隨行して虧けざる一乘の助緣、淨業の正因は、道器の全き者なり。

八に辨國土とは、古佛土を明すこと區區多端にして、大略するに四有り。一には凡聖同居と曰ひ、二には方便有餘と曰ひ、三には實報無障礙と曰ひ、四には常寂光と曰ふ。一に凡聖同居とは、自ら二類に分つ。同居穢土と同居淨土となり。初は四惡二善の凡夫と、三權六實の聖者と、共に住み雜居す。故に穢土と云ふ。次は果報殊勝にして餘の比すべきに非ず。人天有りと雖も四惡趣無し。故に名けて淨と爲す。二に方便有餘土とは、二乘三種、通惑を斷じ盡すも、別惑未だ除かず。分段身を捨てて界外に生じ、方便道を證する者の居る所なり。三に實報無障礙とは、二乘有ること無し。純ら諸法身菩薩の居る所なり。無明未だ盡きざるに、無漏の業に潤ひ、法性身を受けて色心無礙なり。故に以て名を彰す。四に常寂光とは、如如の理、是を名けて土と爲し、如如の智、是を名けて身と爲す。身を離れて土無く、土を離れて身無し。身に非ず、土に非ず、而も身土と説く。一法二義なり。衆生の行業増減し、定水昇沈し、清濁差別あるに依りて國土を印成するも

【常寂光】常とは法身、寂とは解脫、光とは般若なり、この三點は縱横並別せず諸佛如來の所遊の居處なり。眞常究竟するを以て極めて淨土と爲す。

【三世間】五陰世間、衆生世間、國土世間。

【四土】同居土、有餘土、果報土、常寂光土。

【黃昏】猶し雜亂の如し。

【二】佛身を明す

亦復差別あり。身境の受用は、遞遞して同じからず。極樂淨土の方域を標指するは、機信を成ぜんが爲なり。教境の眞實は、一佛土と一切佛土なり、一切佛土は一佛土なり。圓融不可説なるなり。一土も法界によらずして流現するは無く、一佛も自心に由りて出震せざるは無し。但此一心は三世間を包ね、四土融通して重重無礙に、生佛交參して淨穢互に現す。十方の縈收は刹那に在り、一念の羅列は法界に遍し。一念既に爾り、一塵も亦爾り。一一の心の中に一切心あり。一一の塵の中に一切の刹あり、一一の心塵も亦復互に周し。重重無盡にして清淨平等なり。無量の智慧の衆生充滿す。經に云はく、「我此土は安隱なり。」と。此の如く解了して、神を億刹に遷せども、遂に自己の心中に生じ、質を寶蓮に托すれども、豈刹那の際に踰えんや。娑婆は一切處に遍在し、清泰は一切處に遍在し、舉一全收して黃昏せず。天帝の網珠は互に相遍すと雖も、此珠は彼が爲にせず、彼珠は此が爲にせず。參れども雜らず、離るれども分れず。極樂淨土も千珠の一、堪忍の穢國も千珠の一、十萬億刹も各各千珠の一なり。三乘人天及與畏塗無極も、一一千珠の一に非ざること無し。微塵刹海も十世古今も、一海印の中に頓現圓滿せること良に以あり。淨穢不二、自他融通の所立なるのみ。

(二) 九に明佛身とは、佛は本身無く壽無し。世間に隨順して相貌を安立し、經論の説暢は比之有り、此を知ること詳ならざれば造修に路を失ふ。自らの所怙を以て應當に辨析すべし。此も亦四有り。一には應化身、二には他受用身、三には自受用身、四には自性身な

【法輪】 教法のこと。

【已上の二身】：こ
とは是なり。舊説に
は此原文六十四字
を以て綴文の誤と
爲し、前出の利樂
の事云の次に置
いて見るべしと言
へり。

【此を除く】 自受
用の外を言ふ。

【蘊處界】 五蘊、
十二處、十八界。
【八相】 佛菩薩が

この世界に出現し
衆生に隨順して、
一生の間に示し給
ふ八種の相。降兜
率、託胎、降生、
出家、降魔、成道、
說法、涅槃。

り。應化身とは隨類化應して淨穢土に居し、業縁起滅す。體は是れ無常にして諸の機宜に稱ひ、通を現じ法を説き、各利樂の事を獲得せしむ。他受用とは、妙功德身もて純淨土に居し、赴機隱顯の相常住ならず、菩薩衆の爲に大神通を現じ正法輪を轉じ、衆の疑網を決し、彼をして大乘の法樂を受用せしむ。已上の二身は事識但空見なるに依るが故に、唯無常に屬す。若し業識の空見ならざるに依れば、即ち此れ無常全體是れ常なり。則ち常と無常との二用相即すること、二鳥雙遊して猶し七百僧祇、常在靈山、不清淨嚴、如釋迦國の如くならんことは是なり。自受用身とは、一切如來の、無量福慧の資糧を修習して起したまふ所の無邊眞實の功德及び極圓常偏の色身を相續すること、湛然として未來際を盡し、恆に自ら廣大の法樂を受用す。此を除くの外に、三土に垂るるの身を或は名けて應身と爲し、實因の所感を或は名けて報と爲す。自性身とは、謂く、諸の如來の眞淨法界に自他の受用、應化所依、相を離るること寂漠として、戲論を絶離し、無邊眞常の功德を具す。是れ一切法平等の實性にして、即ち此自性をも亦法身と名く。法性を師軌とし、遷つて法性を以て身と爲す。色に非ず、亦心智に非ず。蘊處界の攝持する所に非ず。強ひて法性を指して法身と爲すのみ。大抵應化身とは、凡夫、小乘、地前の菩薩の觀る所の相にして、三尺黑象及び樹神身、王宮に生ずる所の丈六の小身、是れ即ち人天小乘教に當る。受用法性は地上菩薩の見證する所の境なり。八相難思、三十二相、八十種好、八萬四千と、境智冥合して始本不二なると、常法界に遍じて虚空に同ずるとなり。是れ則ち漸頓兩教に

【四種の所説】人天、小乘、漸、頓、四教の所説。
【四身】法身、自受用身他受用身、變化身。

【剝盡】 終窮の意

配す。四種の所説は優降天殊、今家の教相は唯圓教に在り。無明の父母に別れ、究竟じて山頂に登り、清淨法身を成じ、常寂の光土に居す。四身具足して缺減有ること無く、三佛相即して一異有ること無し。丈六の小身にも三十二相ありて、八萬の藏塵は全て法界と知れば、四品の身相は皆海と稱すべく、妙色妙身は皆分限無く、一一の相好は虚空と等しくして悉く圓滿海なり。一は一切を攝し、一佛身に隨ひて常に四身を具す。無邊の應用は毫釐を離れず、但丈六を現すれば頓に藏塵を備ふ。八萬藏塵は弊衣を出でざるなり。四身攝容は頗る果上に論じたれば、剝盡して説かん。金剛の後身、解脫道の時に、佛果現前して十身圓滿に、已後無方の大用あり。既に諸法等量の身を得たるが故に、諸法を以て自證果と爲し、即ち諸法を以て化他身と爲す。眞身寥廓として法界と其體を合し、包羅して外無く萬化と其用を齊しらす。謂ゆる十身には總じて二種有り。菩提身、願身、化身、力持身、相好莊嚴身、威勢身、意生身、福德身、法身、智身は、是れ如來身上の十身なり。衆生身、國土身、業報身、聲聞身、緣覺身、菩薩身、如來身、智身、法身、虚空身は、國土と虚空とは即ち器世間、如來と智と法とは即ち智正覺にして、餘の五は竝に即ち衆生世間にして、是れ三世間を融するの十身なり。如來の身上に其十徳を説き、亦行境と名く。行感境なるが故なり。斯十義を具して一佛と爲し、又三世間を融して一佛と爲し、亦解境と名く。覺智照解は皆佛身なり。故に行解境別は、唯復一佛なり。是故に一佛は法界に周遍したまふ。故に經に云はく、爾時、世尊は此座に處して、一切法に於て最勝覺智を成

じたまひ、三世に入りて悉盡く平等に、其身は一切世間に充滿し、其音は普く十方國土に
 順じたまへり。』然るに此十身に眞應の二身あり。十佛の境智冥合を眞と名け、十佛の對機
 說法を應と名く。對機の中にて地上の菩薩に對するを眞身と名け、地前の菩薩及以凡夫に
 對するを名けて應身と爲す。十佛の自境を果分不可説と名け、機の領悟する所を因分可説
 と名く。因果不二にして別體有ること無し。十佛の外に別に三四無し。三四身とは十佛用
 なり。故に經に云はく、『一切諸の佛身は唯是れ一法身なり、一心一智慧なり、力無畏も
 亦爾り。自在の功德もて知らざる所無し。故に佛と無す。』此十佛は即ち諸法盡窮の原に
 して、十は即ち無盡を表す。此十は一の中の十なり、十の中の一なり。一は即ち十にして
 十は即ち一なり。亦相即相入して無礙自在に、重重無盡の義なり。永劫年中に、感得せる變
 像には、一佛中に立ちたまひ、十聖圍繞せり。十界一念は總相別相なり。十身の具足は一
 大法身の所表なり。宗祖の正しく華嚴法華に依りたまふこと良に由無きに非ず。又像性遍
 空は三身宛然たり、猶豫すべき靡きのみ。

【三】 次義を解す

十に解文義とは、預め科を分つに二あり、初には佛説、後に祖釋なり。初の中に亦二
 あり、初には長行、次には偈頌なり。中に又三有り、一には人、二には行、三には結名
 なり。次に偈の中に亦二あり、一には所修法、二には所得益なり。釋の中に亦二あり、初
 には約釋、後には勸誡なり。初の中に三あり、一には願、二には行、三には結名なり。

【稟承の機器】一人一を明す。方便品に云はく、諸佛如来は但菩薩を教化す【一無く三無く】二乗無く三乗無し【一乗の闡揚】理一を明す。【一蘊は一切蘊】以下三種世間の五蘊を明す。【衆生の國土は悉く皆爾なり】五蘊世間に例して、二世間五蘊を明す。【經に云はく】華嚴善賢品の文を引いて、衆生世間の融即を證す。【諸法に遍歴】三種世間の圓融を明したる。

【一行は一切行】以下行一を明す。圓頓の法、皆其れ斯のごとし。

○初に長行三△一人

一人は一切人なり、一切人は一人なり。十方の諸佛世に出現して、一佛乘を以て衆生を利樂したまふ。稟承の機器は二も無く三も無し。一乗の闡揚は無住の本よりして一切法を立つ。妙心體具して隨緣流變す。心は工なる畫師の如く種種の五蘊を造り、一切の世間に法として造らざること無し。法法塵塵は靈府を出でず。心を以て言はば、一切の法として心に非ざる無く、色を以て語れば、一切の法として色に非ざる無し。一蘊は一切蘊なり、一切蘊は一蘊なり、一處は一切處なり、一切處は一處なり、一界は一切界なり、一切界は一界なり、衆生の國土は悉く皆爾なり。經に云はく、一切の衆生の身は一衆生の身に入り、一衆生の身は一切の衆生の身に入る。又云はく、一切の諸の世界をして一塵の中に入らしむるも、世界は積聚せず、亦復雜亂せず。一香も法界なり、一色も法界なり、刹那の心念も亦爾り。所以は何ん。緣起陀羅尼は無障礙の法なり。一法を擧ぐるに隨ひて盡く一切を攝し、諸法に遍歴して不可思議なり。萬法を見んと欲すれば須らく一法に入るべし。一法に入ることを得れば、法を見ること邊無し。故に一を擧ぐるに隨ひて一切人を攝し、亦一切人は一人に入るなり。

△二に一行

一行は一切行なり、一切行は一行なり。

【含靈】心識を含有する者、有情、衆生。

【枝黨】枝は枝葉の輩の意。圓宗末葉の體達。圓門に信順するなり。
【四忍】菩薩は戒律を犯さずといふ一者無生忍、諸法

一を擧ぐるを主と爲す。餘は即ち伴たり。無礙鎔融して行として具せざる莫し。正助道品は八萬四千恆沙塵數の一切の行門、攝盡せざることを莫し。一行既に爾り、餘行も亦爾なり。一切の中に一切あり、一切の中に一あり、一法の中に於て衆多の法を具し、衆多の法の中に於て一法を具有す。倏爾の念想にも單聖號を持すれば、彼此相入して同時に發現し、前も無く後も無し。千燈涉照し萬鏡傳耀す。主伴無盡にして自在圓融し、普周すること僉然り。故に一行を以て諸の含靈に通ず、一人生ずることを得れば、則ち衆人生ず。佛位を成ずるも亦復之に同じ。一乘の佛は自他同じく成じたまふ。已に成佛し去れば、唯に果地に住して因行を修せざるのみに非ず。或は成佛と一切衆生と、前前已に成じ後後亦成ず。諸佛世尊は唯一大事因縁を以ての故に世に出現したまへり。祇に根本に附して枝葉を攀づること無く、純情を採取して糠粃を擲棄せよ。

△三に結名

是を他力往生と名く。

圓家の枝黨は相即に體達す。俯仰にも四身を禮し、造次にも十身に給すれば、四土に具し三世間に融して、奇禽庶鳥、瓊院茅堂、時時に音を諸へ處處に彩を同じりす。果は未だ辨ぜずと離も、一切は遮那の妙境に非ざること莫し。祇恨むらくは、人四忍に迷ひ、家五蓋に纏はるることを。心に高下有り、土に丘陵を感じ、荊棘を林と爲し、魔外武を

は来る無きが故に
 二者無滅忍、諸法
 は去る無きが故に
 三者因縁忍、諸法
 は因縁に依て生ず
 るが故に。四者無
 住忍、異心無くし
 て相續するが故に
 【五蓋】心を蓋ふ
 五種の煩惱。欲貪
 蓋、瞋恚蓋、昏眠蓋
 掉悔蓋、疑蓋。
 【那羅延】天の力
 士にして、その力
 量は大象の七十倍
 なり。
 【六凡四聖】十界
 の中、地獄、餓鬼、
 畜生、修羅、人間、
 天上を六凡といひ
 聲聞、緣覺、菩薩、
 佛を四聖といふ。

【十如】總ての事
 理に含まれある十
 種の普遍性。如是
 相、如是性、如是
 體、如是力、如是
 作、如是因、如是
 緣、如是果、如是
 報、如是本末究竟
 等。
 【十法界】地獄、

同じうす。極樂淨土は境殊にして縁勝る、穢を捨てて淨を取らんと欲すれば、須らく彼に生ずべし。諸相を捨離して隨念の心を起せ。生解を泯亡して傾慕の想を致す。妙明の眞生は本自ら無生なり。隨縁して成立し、乃ち生相有り。性、相を現するを以て無生にして生じ、相、性に由るを以て生即ち無生なり。此の如く了知すれば、狡獪獨歩し萬牛も挽かざることを、那羅延力の如し。

○一に所修法

十界一念。融通念佛。
 十は數なり。界は別なり。分段變易、依處齊限あり、果報各別なり。六凡四聖は法、無量なりと雖も、數十を出でず。一一の界の中に復多派なりと雖も、十如を出でず。地獄界の如きは、當分自ら相性乃至本末を具し、亦畜生界相性本末を具し、乃至佛法界相性本末を具して、缺減有ること無し。餘の九法界も亦是の如し。一念は俄頃の妄心なり。一心は十法界を具し、一法界は十法界を具し、亦三種の世間を具す。百法界は即ち三千世間を具す。心無ければ則ち已む、介爾も心有れば即ち具して前んぜず後れず。一念心起れば則ち十玄有り。此心同時に萬法を具す、諸法は心に在りて、心は諸法に徧じ、廣狹自在にして純雜無礙に、一多相容して諸法相即し、萬法隱顯して重重轉現し、事法眞に即し、十世隔成して主伴圓滿なり。萬法は總じて一念の心法を成す。一念を開けば萬法森羅たり。

餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛の十界。
 【十支】 現象界の一切諸法の無碍なるさまを十種に分つ。同時具足相應、因陀羅網境界、秘密隱顯俱成、微細相容安立、十世隔法異成、諸藏純雜具德、一多相容不同、諸法相即自在、唯心回轉善成、託事顯法生解門。
 【扶疎】 四布の意又盛茂の意とす。
 【適莫】 論語里仁爲美。子曰君子之於天下也。無適無莫也。を引く。
 【太丘子】 孔子を云ふ。

因果の差別、依正扶疎して遷移せず。所變の萬象は本體具に由る、體若し具せざれば云何が現生せん。水は波の性を具するをもて方に能く怒鼓す。水の波を起すことを了れば、泊濤も全く水なり。但安心の一相を知らざるに由りて諸の隔別を見る。翳蒙稍しく瘳ゆれば、明瞳居然たり。適莫の情亡きは祇太丘子なり。融通念佛は諸教の中なり。融通に二有り、曰はく事理、曰はく事事なり。初は事法分隔して齊限有り、理體蕩豁して局限無し。理を全うして事を成ず。成ずる所の事法は理と混會し、融通和液す。如來の藏性は舉體隨緣して諸事を成辨す。自性は本不性滅なれば、即ち是れ理事混融無礙なるなり。後は事相の諸法、分分相待して互に障礙有り。然れども理性圓融して虛融無礙なれば、理に依るの事は、事にして別事無し。事も亦豁融し、彼此相入して互に障礙せず。理既に彼此の異有ること無し、事も亦一多の別を泯絶す。事事相入して力用交徹す。一念は即ち無量劫なり、現を以て過未に即するが故に。多劫は即ち一念なり、過未を以て現に即するが故に。一は一切に入る、塵は十方に徧するが故に。一切は一に入る、刹は一塵に入るが故に。一は即ち一切なり、十方に即するが故に。一切は即ち一なり、刹は一塵に即するが故に。一の法の中に重重影現し、一の中に一切有り、彼一切に各一切有り。窮盡有ること靡く、永く際限亡し。今取りし所は事事の融通なり。
 人に信慧有れば、名簿を交締して、塵沙界衆、唱號交絡す。經に云はく、「一切の諸佛は能く一心に於て不可説不可説佛刹微塵數頭を化現す。一一の頭に爾所の舌を化し、一一の

舌に爾所の音聲乃至文字句義を出し、一一に一切の法界に充滿し、窮盡有ること無し。因
果該徹して法爾なることは是の如し。云云と知るべし。一念起らざれば已む、起れば頓に十
重を具す。一稱は一切稱なり、一切稱は一稱なり。同時に具足して不可思議なり。

△二に 所得益

億百萬遍 功德圓滿。

【西乾】天竺、西域を指す。
【理原】融通念佛の理の本源なり。
【便に云云】便は無量無数の意なり。

西乾に億を説くに、其四種有り。十百千萬なり。今第四を以て准計層疊す。未だ理原を
盡さず。實に便に順ひて満を撮り、無央數を彰す。勾踐少しく醜すれば衆軍皆醉ひ、欒巴
一たび喫けば蜀川雨る。果號は素より異方なり、佛勅は甚だ巧便なり。己心融豁して自
在の業を播く。因陀羅珠は寶の洞徹を以て迭に相影現し、涉交重重なり。一珠の中に於て
同時に頓現す。一に隨ふも亦爾り。一一も亦爾り。既に一一の珠の、一時に一切珠を現す
るも亦復然り。斯の如く重重にして邊際有ること無し。有邊無邊珠影は悉く皆一珠の中
に在りて炳煥高現し、餘皆此を妨げず、此も亦餘を礙ぐることも無し。若し一珠の中に於て
坐する時は、即ち十方重重の一切珠に坐す。何を以ての故に。一珠の中に一切珠有るが
故なり。一切珠の中に一珠有る時、亦即ち一切珠に著す。一珠の中に於て一切珠に入り、
而も竟に此一珠を出でず。一切珠に於て一珠に入り、而も竟に此一珠を超えず。一珠は即
ち十方珠なり、十方珠は即ち一珠なり。方無く偶無く、主伴互融し、聲聲無礙、億百萬遍

【射散】一人の行を以て衆人の行を成ずるの意。
 【檢束】衆人の行を以て一人の行となすを言ふ。
 【箠著】卜筮の具

なり。須臾にして曠劫の行を圓にし、刹那にして遍照の位に昇る。性を全うして修に在り、彼に稱し此に聲し、射散し檢束し、互融鑒徹して箠著を投却するのみ。功德圓滿して滅惡生善し、終に遺止せず。太阿は不平を斬り、檀藥は舉體を安んず。住已所唱は巨益顯著なり。張善は牛を屠りて化佛迎接したまひ、邵彪は稱念して官安撫に任じたり。況んや圓頓の教法は、理孤り起らず。起れば必ず眷屬あり、伴侶翼從す。住已を主と爲せば徧應を伴と爲す。徧應を主と爲せば住已を伴と爲す。主伴伴は各相現せず。主伴伴主は相入相即す。彼此互に融すれば功德周く瞻り、三五にして斬新を髣髴す。有ゆる行業は諸の塵勞を滅して無邊の福を生ずること、舊囚の條ち赦され、凡庸の邊に位あるがごとし。豈澌怡に堪へざらんや。

○後に祖釋の中の二。初に約釋三△一に願

諸法の實相は、能念も無く所念も無く、如如に融通す。是を他力往生の願と名く。諸法の實相とは、果徳の理本なり、發心の凭仗なり、迷悟の根源なり、凡聖の依止なり。經に云はく、唯佛と佛とのみ乃ち能く諸法の實相を窮盡したまふ。諸法の十界三千は、實に即するの權なり。實相の本具理體は、權に即するの實なり。同體の權實は金の器を成ずるが如し。互融の至致は、妙此に在るのみ。無能念等とは、法、實際に住すれば諸邊動ぜず。去來生滅を離れ、増減高下無し。畢竟平等にして無修無證なり。心と佛と衆生とは、

夷齊にして二ならず、互に現じ交參ず。諸佛の心内の衆生は衆生の心中の佛を念ずるが故に、所念の外に別に能念無し。衆生心内の諸佛は、諸佛の法の中に生ずることを度るが故に、能念の外に更に所に念無し。諸の衆生の如は一切覺の如なり。一一の界の中に、皆互に餘の九界十如を具し、妄を該ね眞に徹し、性に稱らざる無く、心と境とは不二なり。毘盧身土は竟日下凡の一念に居し、阿鼻依止は終夜極聖の自心に在り。菩提生死は由來已體なり。無明覆蔽すれば、衣裏の寶珠を顯得せず。還りて愍を他に求む。室内の秘藏を了知せずして尙孤窮に苦しむなり。久しく徐行に蹇すれば黙して巾車を想ひ、永く汚穢に居れば忽ちに淨妙を聞く。常に畢竟往生を專念して休息有ること無きこと、弱羽の枝を望むが如く、赤子の母を憶ふに似たり。今此國中には、鷲峯已に隠れ龍華未だ開かず、三界の苦果、焚如として量り無く、四惡の業因は繚然として盡くること無し。邪外の暴風、是非の鼓扇、媚色淫聲相惑はし、刀蜜蛇觸交侵す。中下の湍根は縁に於て縮退す。佛引の往生は淨土の縁強し。唯進んで退くこと無かれ。白牛如意、任運輻湊す。

△二 行

生佛宛然として如如に融通する、是を他力往生の行と名く。

三千は實にして諸相は依宛す。實相、理に在れば雙盲し眇目し、朦朧として曉らず。本佛法を具すれども未だ了るを得ざるが故に、自ら永夕に淪む。三千の垢盡くれば一實明朗

なり。四誘妨げざれば八風動かず。幻惑永に盡くれば像果圓なり。理性は本具すれば無明は即ち明なり。世間の諸相は一一常住にして俱體具用なり。頗る低昂有ること靡く、常に間然無し。生を全うすれば法を成ず。其性、法を起さず法爾として煥然たり。佛を全うして全衆生を捨てざれば、冥は無二なりと雖も、而も相參はらず。異に即するの一は本已が内に在れども、一に即するの異は外に在るを礙げず。量を知り根を揣り、已に成じたるを仰ぎ未だ證せざるを激し、痛鞭勤精し、趾より發するに従ひて玉階に登る。經に曰はく、「常に彼佛を念ずること、譬へば夢に金寶を見て親屬娛樂するが如し。有に即するも而も空なり、空に即するも而も有なり。生佛兩ら忘れて、相を壊せず。佛意に依託して念念に中止有ること勿れ。火を鑽る者の、未だ熟せずして止めば火勢隨ひて滅し、渴せし人の、水を求めて原阜を穿鑿するに、功を施して已まざれば漸く濕土を見るが如し。委細に營磨して口口に廢せざれ。

△三に 結名

億百萬遍は、多に非ず少に非ず。是を事理不二、不可思議功德往生の口課と名く。日課百遍すれば互融すること億百なり。少を指して多と爲すも、多は多に非ず。多を指して少と爲すも、少は少に非ず。少、多に即すれば則ち少相を動ぜず、此の如きの少相は情に少と謂へるに非ず、多、少に即すと雖も、多相を壊せず、此の如きの多は情に多と謂

【二際】 眞俗の二諦及び生死涅槃乃至諸佛と衆生との如き相待の法を言ふ。

へるに非ず。若し唯事に約すれば互相に障礙し、若し唯理に約すれば唯是れ一味なり。理は事に隨ひて變ず。差別無きの處に差別森然たり。事は理を得て融ず。差別の時、了に織異無し。普法の事理は、理即ち事、事即ち理なり。理中に事あり。事中に理あり。即ち中の中の恣なり。二際を冥するも多からず、法界を統ぶるも少に非ず。有盡無盡、向上向下、柱舍相即し、束箭各現ず。聲聲は沙界に響き、顆顆は十方を貫く。杳杳として窺ひ難く、冥冥として覩ること莫し。一縷もて象を制せんよりは多を假るに如かず。至境を脣頭に現じ、大事を頃刻に圓にす。實は乃ち諸佛の靈肝を盡し、玄根の幽致を窮め、言詮の域を超え、測量の境を出づ。奇稱の功、雙想の徳、海墨も窮め難く、山筆も盡すこと罔し。其旨に迷ふ者は修因を曠劫に徒にし、其門に入る者は諸佛を一朝に等しらす。迷ふと入らざるとは、思擇せずんば非ざるなり。

○後に因に勸誡

一念懈怠すれば、寶池の蓮萎み、億百萬遍の、功德損減す。一念精進すれば、寶池の蓮開き、億百萬遍の、功德成就す。

融通圓門章 終

融通念佛信解章 卷上

攝州融通本山大念佛寺融觀撰

當書二卷融觀の撰なり。融通圓門の章の意を和語にて再説し、容易く口稱融通他力往生の妙行を信解領得せしめんが爲に述作せし書なり。

【一】宗意を顯示するに十門を別つ

【二】第一に淨業の教起を示す。

【一】大事因縁 佛が衆生濟度のため、種種の因縁を結んで此世に出現し給ふといふ。

【一】乘法 一佛乗の法。一切皆成佛の法門。

(一) 將に融通大念佛の宗意を、顯示せんとするに總じて十門あり。一には、通じて淨業の教起を明し、二には、別して融通の教興を述べ、三には、人天を勧めて簿に記することを擧げ、四には、多聞の冥授を蒙ることを示し、五には、菩提心の體を顯し、六には、心法互融の義を辨じ、七には、正く傳法要文を解し、八には、像即ち眞身なるの義を辨じ、九には、十種無礙の義を顯し、十には、宗要の義を擧て修を勸むるなり。

(二) 第一に、通じて佛祖出興して、専ら淨土法門を弘めたまふことを明すとつ者、開教本師大聖世尊、一大事因縁を以て世に出現し、衆生をして佛の知見に開示悟入せしめんと欲す。機に利鈍を分つに由るが故に、四十餘年三百餘會、機に隨て教を演べ、大小偏圓權實漸頓同じからず。皆一乘法の爲に方便と作る。靈山に開顯して、咸く一實に歸し、本懷斯に暢たまふ。三世の諸佛、出生度生、咸く然らずと云こと莫し、而るに其超凡入聖の捷徑たる者を求むるに、彌陀教觀の簡にして且易なるに若はなし、世尊の一化獨り淨土の教に於て、諄諄として屢説て已玉はざること、良に以有をや。然るに佛化東流して、數百年の間、世人殆んど知者なし。晉の遠法師、廬山の東林に居して、神機獨拔して、天

【一】實 眞如のこ
と、眞如は法界に
遍滿せる無差別平
等の理體にして諸
法の實相なるが故
に一實といふ。

【遠法師】 慧遠。
支那念佛の始祖。
自蓮社とも云ふ。

【淨業】念佛のこと。

【一心三觀】任意に起る一念の心に對して三觀を行ひ三諦の眞理を觀破すること。

【三】第二に融通の教興を述ぶ。

【圓】圓教のこと。天台四教の第四、天台宗にて、釋尊が界外利根の衆生に對し、諸法實相の旨を教ふる法華經等を云ふ。

【頓】頓教のこと。五教の第四、修行の階梯を經ずして速に證悟する教のこと。

【知識】善知識のこと、事理を辨へて善く人を導く識者。

下の爲に倡ふ。池を鑿ち蓮を栽へ、堂を建、誓を立て、専ら淨業を崇む、白蓮社と號く。當時の名僧巨儒、皆服膺して教を請け、其社に預る。時より以降、此道を繼ぐ者、代人に乏からず。仰で佛慈を體り、大に度門を啓にあらすと云ことなし。世異なれども風同じ、皆衆生の良導なり。傳記に載る所誠に掩べからず。中に就て、天台の智者大師は、法華三昧を悟り、已心所行を説て、一心三觀と曰て、一心を直示す。當處即空、全體即假、亦空亦有、非空非有、湊泊すべからず、擬議すべからず、心路絶する處、即ち名て佛と爲と。故に淨土の教天台に至つて、其説大に備り、昭昭然として、猶し日月を掲げて、太虚を耀かすがごとし。

第二に、別して元祖の佛の開示を蒙り、融通の門を開きたまふことを顯すといつ者、如来所説淨土法門、天台圓頓念佛の章疏等、我朝に推轂流通して、敷演講説す。然りといへども、世の學者俗に即して而も眞なること能はずして、事外の理を求んと欲し、精勤修學すと雖も、此に於て疑ひ無きこと能はず。佛性心地顯現するに由無し。若知識のこれが爲に、方便を開示するに値遇せざるときんば、何に由てか生死の大事を了して、而も諸佛の淨土に遊ぶ者ならんや。爰に我宗開祖良忍上人あり。尾州智多郡富田の莊に降誕し、榮を棄て出家し、叡山に登り、台教を良賀に聞き、密灌を永意に稟け、顯密雙べ弘め、徳一時に光る。碩望宿徳これと駕を竝べ、鑑を聯る者あること鮮し。一日歎じて曰く、「此の娑婆世界を諦觀するに、微塵の衆生賢愚となく貴賤となく幼艾となく、心を起して佛に歸する

【一念三千】天台宗にて一念の心に三千の諸法を具すといふこと。

こと有る者は、擧手合掌して、必ず先づ西方に向ふ。厄苦惱を怖ること有る者は、開口發聲して、必ず先づ阿彌陀佛を念ず。又金を範し土を合せ、石を刻み紋を織り、乃至水に印し沙を聚め、童子の戯る者も率ね阿彌陀佛を以て、上首と爲すと云ことなし。其然ること知らずして而も然なり。是に由て而も觀れば、是彼如來大誓願。此衆生にあり。此衆生大因縁彼國土にあること明けし。然らずんば、三方四維、過現未來諸佛多し。何ぞ獨り是の如くならんや。」と、思念し訖て、而も又大悲の門に出て、千日の間無動寺に詣し、有縁の法を祈り、決を明王にとり遂に春秋二十有三にして、光を大原山に輶し、來迎院を草創し、鬼魅を驅逐して道場を結果し、常坐不眠にして、晝夜怠ること無く、一念三千の定水を澄し、觀佛微妙の三昧を修し、智増菩薩の心に住すること、此に二十餘年なり。烏羽院御宇、永久五年龍丁の酉に集る。上人春、秋四十有六、五月十五、日輪午に當て、三昧の中に於て阿彌陀佛面り身相を現し、光を放ち告て曰はく、「汝が行不可思議なれども順次往生得難し。我今速疾往生の勝因を教ん」と告訖て、口稱融通念佛を授與し、甚深難思の宗意を指陳して言はく、「二人一切人、一切人一人、一行一切行、一切行一行、是を他力往生と名く。十界一念、融通念佛、億百萬遍、功德圓滿。」是の如く開示訖て、即ち微笑し、更に大光明を放ち、白絹一枚を上人に授與したまふ。上人頂奉してこれを開くに、空中に現する所の佛菩薩の尊像、忽ち紙面に彰る、今感得の如來、亦是天得の如來と曰ふ、是なり。

【諸法實相】 萬有

のありのままのすがたには相對と絶對との二面ありて相對的方面よりいへば萬有互に異なりとも、絶對的方面よりいへば萬有みな平等にして一のものゝ絶對也而してこの二面は全く同一にして、相對そのまゝ絶對なれば、一色一香といへども皆虚妄のもの無しといふこと。

【末世】 佛入滅し給ひてより遠く年月を距てたる末の時代をいふ。末法濁世。

【四】 第三に人天を勸めて簿に記することを擧ぐ。

上人未曾有なることを得、感歎至極し、而も領解して曰く、『諸法實相なれば、能念も無く、所念も無し。如く融通す。是を他力往生の願と名く。諸法實相なれば、生佛宛然として如く融通す。是を他力の行と名く。億百萬遍、多に非ず少に非ず、是を事理不二、不可思議功德、往生の日課と名く。一念懈怠すれば、寶池の蓮萎え、億百萬徧功德損減す。一念精進なれば寶池の蓮開き、億百萬徧功德成就す。』と。上人佛の示誨を蒙り、心身輕安の樂みを得て是の如く其造詣を述べ、踴躍歡喜し、勇猛精進して、常に融通念佛を唱へたまふ。一日鞍馬多聞天王威容を現じ、即ち告て曰く、『上人往に佛の直授を蒙れり、盍ぞ流化勸進して、融通念佛を弘唱し、廣く苦海の衆生を救濟せざるや。』と。上人末世の信向を證明せんが爲に問て曰はく、『何の謂ぞ。』對て曰く、『我唱る所を廻して、衆人に融會し、衆人の唱る所、又我に通ず。是れ融通念佛なり。其功獨稱に踰たること、勝て計ふべからず。何を以の故に。衆生無邊なるが故に。師願くば、此事を以て四海を勸誘せよ、我も又廣く天神地祇を倡かん。』と。是則融通念佛宗開闢の本基なり。

(四) 第三に、國家を徧歴して、人天を勸進することを辨ずといつ者、人王七十五代崇徳院の御宇天治元年六月九日、上人管簿を持て京都に遊履し、鳥羽先帝日課百遍を始とし、及び三公九卿、等く名帳に交締す。五百十三人に向とする時、青衣を著せる壯年の僧、忽然として上人の前に來て、扶接を請ひ、手ら『奉請念佛百徧、佛法護者、鞍馬寺毘沙門天王、爲守護念佛結緣衆來。』と書し畢て、而も去りぬ。上人幽讚の深きことを思ひ、奇敬

【五】第四に多門の冥授を蒙ることを示す。

感極し、歸信肝に透り、奮激して志を勵み、國家を經緯し、人天を勸進し、法化最も盛なり。

【六方恆沙諸佛】

阿彌陀經の東西南北上下の各世界に在します無數の諸佛を指す。

【一六】第五に菩提心の體を顯す。

【緣慮心】四種心の一、外境を緣じ思慮する心。

【客塵】煩惱のこ

と、煩惱は微細にして數多く(塵)また定住せずして眞智により拂拭せらるる(客)ものなればなり。

(五)第四に、鞍馬寺に詣し親しく冥授を蒙ることを明すと云者、天治二年四月四日、鞍馬寺

に詣で、通夜念佛す。寅の刻に暨で、天王忽ち現じて上人に謂て曰はく、我往に請る所の

融通念佛、功德廣大なり、故に我又師に代て、三界の諸天、六道の冥宦、博桑國內八百

萬神をして、各各日課百遍を受けしめ、盡未來際不退精進の誓諾を爲し、各己名を録さ

しめて師に附與すと。上人これを披閱するに冥衆星の如く名を列ぬ。其名帳、融通念佛

本緣起の中に録出す、故に今略して記せず。嗚呼不可思議なるかな、大聖世尊、持名の法

門を演説したまへば、六方恆沙諸佛の如來齊く證誠して、各舌相を出して三千世界

を覆ひ、良忍上人、融通念佛を勸進したまへば、三界所有の神祇冥衆、同じくこれを隨

喜し、各己名を題して百遍の日課を受けたまふ。口稱融通念佛の尊勝なること、謂ずし

て知ぬべし、發心してこれを信行せざらんや。

第五に、菩提心の體を指示して、行者の正信を勸發するといつ者、衆生無始よりこのか

た、常に認て我身と爲る者は、是地水火風假合の身、旋聚旋散て無常の法に屬して、我

身に非ざるなり。衆生無始よりこのかた、常に認て我心と爲る者は、是緣慮客塵虛妄の心に

して乍起乍滅、無常の法に屬して、我心に非ざるなり。我に眞の身あり、圓滿空寂

なる者は是なり。我に眞の心あり、廣大靈知なる者は是なり。空寂靈知神用自在にして、

【虛妄】 實相にあ
らざるもの、いつ
はり。

【安養の依正】 極
樂淨土の依報、正
報。

【無上菩提】 佛の
さとり、菩提は智
なり、佛の智慧は
最上無上なるが故
にいふ。

【菩提心】 菩薩の
上は菩提を求め、
下は衆生を化せん
と發心するをいふ
【念佛三昧】 心を
彌陀一佛に懸け、
念を餘方へ散らさ
ず一心に稱名念佛
するをいふ。

性萬徳を含み、體百非を絶す。淨月輪の圓滿にして缺ること無が如し。惑雲に覆れ自ら覺知せず、妄惑既に除れば、其心本淨にして、十方諸佛と、一切衆生と、我此心と三差別なし、此即菩提心の體なり。此を捨て認ずして、而も臭身妄念を認めれば、隨て死し隨て生じ、禽畜裸類と肩を比べて苦を受く、丈夫たる者豈に羞ざらんや。大乘融通念佛の行人、我一心に諸佛の性を具することを知て、稱名念佛すれば、佛相乃し彰る。口稱を緣として心性に薰じ、心性所具の極樂の依正、薰に由て發生す。心具して而も生ず、豈に心性を離んや。心を全ふして是佛、佛を全ふして是心。終日心を念じ、終日佛を念するなり。又應に須く了むべし。若佛を念する者は、必ず須く心を照すべし。若し専ら心を觀すれば、未だ必ずしも佛に託せず。一行三昧の如は、直に一念を觀じて他佛に託して、而も所縁と爲す。若彼般舟及び此念佛は、發軔即ち安養の依正を念じて、而も依正を念ずること心性を離れず、故に心に約して佛を念するなり。是の如く發心して佛を念するときは、無邊の功德識心に攬入して、永く佛種となり、頓に億劫の重罪を除て無上菩提を證することを獲るなり。經に云く、「譬へば人有て、師子の筋を用て、以て琴の弦と爲て、其弦一奏すれば、一切の餘弦、一時に俱に斷るが如く、若人菩提心の中に於て、念佛三昧を修すれば、諸の煩惱の根皆悉く斷滅す。亦人有て牛羊驢馬の諸乳を取て、一器の中に置て、師子の乳一滴を以て、これに投ずれば、一切の諸乳悉く化して水と爲るが如く、若人菩提心の中に於て、念佛三昧を修すれば、一切の惡魔諸障、直に過て難なし。」又那先經に説

【彌陀の願力】 彌陀の本願力。

【彼岸】 到彼岸といふ。凡夫が、煩惱に繫縛せられて生死の海に漂ふを此岸といひ、覺者のよく生死を越えて涅槃の岸に達するを到彼岸といふ。

【七】 第六に心法互融の義を辨ず。【唯心淨土】 萬法唯心の理を以て西方の淨土を觀念し吾が一心の外に彌陀もなく淨土も無しと悟達するを云ふ。

【謗法】 誹謗正法佛法をそしること【九界】 十界より佛界を除きたるもの。

【一即一切】 一が即ち一切といふこと。一と一切と融即して無礙なるを

く、「昔國王あつて、沙門那先に問て言く、「衆生業重し、云何ぞ念佛して、即ち往生することを得るや。」那先の言く、「譬へば人あつて大なる石塊其數千百を以て、大海を渡んと欲す、船力を以の故に、即ち彼岸に達るが如し。衆生の罪は猶し巨石の如し。彌陀の願力は彼大船の如し。石本沈み易し、船に因て渡すべし。横に生死の苦海を截んこと、全く己佛の願王を憑で、一切時中以て良導とすれば、直に彼岸に登て自心に越えず。

第六に、心と法と互に融するの義を顯はして、淨土唯心の旨を示すとつ者、融通の義に達せんと欲せば、先づ心法互融唯心淨土の旨を了すべし。世人解せず、遂に方寸の心を執して淨土とす。經中に佛國土の莊嚴を説たまふを以て、悉是表顯にして、皆實法なしと、自ら謗法の咎を招く。須く知べし、心外に法なし、故に唯心と云ふ。經に曰く、「百千の燈び光り一室を照て、其光遍滿すれども、無壞無雜なるが如し。十方の諸佛、九界の衆生、色心依正、一塵一毛に至まで、一法を擧るに隨て、皆百千燈中の一燈なり。行人の一念東の一燈に在が如し。彌陀の淨土西の一燈に在が如し。其光遍滿するを以の故に、一即一切、一切即一、心の外に土なし、土の外に心なし。是の如く唯心淨土を會得せば、豈に但十萬億國ならん。微塵刹土亦遠しとせず、豈に見ずや、普賢菩薩、一毛孔の中に於て、一步を行して、不可説の佛刹微塵數の世界を過ることを。李長者の云く、「無邊の刹海、自他毛端を隔てず、十世古今始終當念を離れず」と。故に彌陀世尊、直に心中の一佛を示すのみ。若心の全體、但唯心淨土ならず、地獄天堂も唯心所現なり。經に曰く、「十方虚空汝

【普賢菩薩】釋迦佛の右の脇士にして、慈悲を司どりて、慈色の如く、身は月色の如く、右手に金剛杵を持し、左手に金剛鈴を執り、五佛の寶冠を頂き、六牙の白象に乘ず。

【善巧方便】よくたくみに衆生の機に契へる種種の方便を用ひて導き救ふこと。

【理】事の對。平等の眞如本體界。【事】理の對。萬有差別の相。現象界。

【八】第七に正しく傳法要文を解す【長行】散文にて説かれたる經文のこと。

が心内に生ずること、猶し片雲の大清裡に點するが如し。此は事に即するの理唯心淨土なり、無壞無樵なるを以の故に、此燈彼燈相ひ混亂せず、心自らは心、佛自らは佛、淨土自らは淨土、圓融無礙なるが故に、法本位を離れざるなり。極樂遍く一切處にあり、乃し一を擧て全く收む。帝釋殿の千珠寶網の、千珠の光影咸く一珠に入る。一珠の光り影げ遍く、千珠に入る、珠珠互に遍すといへども而も此珠彼となるべからず、彼珠此となるべからず。參て而も離らず、離て而も分れず、一一の十方國土一一皆千珠の一、三乘人天地獄鬼畜、一一千珠の一に非すと云ふこと無し。聖人善巧方便を以て、阿彌陀佛を專念せしむ、乃し千珠直に一珠を示す。一佛を見れば即ち十方の諸佛を見たてまつり、亦九界の衆生を見る。微塵刹海、十世古今、一印頓圓にして餘法なし。今此土の衆生彼土の佛を念じて、而も往生を求む、此は理に即するの事、西方淨土なり。事理を分といへども、實に兩途にあらず。若西方を局して、唯心に達せざるときは、事を得て理を失す、未だ能く理に稱すといへども、佛の神力の故に亦往生を得。下品に居すと雖も亦退轉せず。若自心を局して、而も西方を求めざる時は、事理俱に失す、求生せざるを以ての故に、往生を得ず、此は事を失す、心外無法を知らざるを以の故に、定で方寸を執して心と爲、心法圓融の旨に味し、此は理を失するなり。

第七に、正しく傳法要文を釋して、直に融通の宗意を示すといつ者、先科を分一二あり。初には佛説、後には祖釋。初の中に亦二あり、初に長行、次に偈頌。初の中に又三あり、

【色】質礙あるもの義。四大、及び五根、五境等の一切の色法のこと【蘊】(Skandha)の譯にして積集の義也。有爲の諸法は類に従つて合聚しうるが故に蘊と云ふ。色、受、想、行、識の五蘊に分つ。

【上根の人】勝れたる機根の人。【一乘圓融】一切乗のみのり。一切皆成佛の法門。

一には人、二には行、三には結名。次の偈の中に亦二あり、一には所修の法、二には所得の益なり。釋の中に亦二あり、初には約して釋し、後には勸誡。初の中に三、一には願、二には行、三には結名なり。

○初に佛說長行に三△一人

一人一人、一人一人

一人一人等といつ者、謂く、緣起無障礙の法は、一法を擧るに隨て盡く一切を攝す。故に一を擧るに隨て一切人を攝す。亦一切の人一人に入るなり。經に云く、『一切衆生の身、一衆生の身に入り、一衆生の身一切衆生の身に入る。』と。是なり。心を以て言ば、一切法として心に非ること無く、色を以て語ば、一切法として色に非ることなし。一蘊一切蘊、一切蘊一蘊、一處一切處、一切處一處、一界一切界、一切界一界、衆生國土悉く皆爾なり。

○二に行

一行一切行、一切行一行

一を擧て主とすれば、餘は即ち伴と爲り、無礙鎔融して、行として具せずと云ことなし、八萬四千一切行門、攝盡せざること無し。一行既に爾なり。餘行亦爾なり、故に一行即ち一切行、一切行即ち一行なり。一行の中に於て、一切の行を具し、一切行の中に、一行を具有す、華嚴經の疏に云く、『一行一切行と者、謂く、上根の人は一乘圓融の教に依

【圓融の法門】 理と事が、圓かに融通して互に障礙すること無き法門を云ふ。

【五惡趣】 娑婆の五道（地獄、餓鬼、畜生、人間、天上）をいふ。淨土に對して惡趣と稱す。

【一乘の佛】 一佛乗のこと、權大乘の三乘各別の法に對して、實大乘の一切衆生をして悉く成佛せしむる法をいふ。

【法身】 三身の一、無色無形の理佛のこと。

【薩婆若海】 薩婆若智の廣きことを海に喩へたるもの【上品上生】 九品往生の一、大乘上

往生の一、大乘上

て、圓頓の行を建立す。圓頓の行立て一乘に契合す。故に能く一行の中に於て、一切の諸行を具足す。』と。是を以て融通念佛、自他の願行交融し、多少の功德互に助け、彼此相入して、同時に發現して前なく後なし。譬へば燈燈の相照し、鏡鏡の相映するが如し。萬光混じて一光となり。千志合して一志と成りて、而して又分分の本位、各各の三昧を妨げず。謂ゆる一に非ず異に非ず、豈に是れ不可思議圓融の法門にあらずや。儻し此法門に進入して纔に一たび寶號を稱する者は、八十億劫の重罪廓爾として煙の如く消へ、十萬億刹の遐方倏如として羽の如くに化せん。況や夫、月を累ね年を積で、常にこれを修するときは横に五惡趣を超越し、同く一蓮臺に托生せんこと、復何ぞ疑んや。況や又、一人の行を以て諸の含靈に通じ、一人往生すれば衆人往生し、一人成佛すれば衆人成佛す。一乘の佛は、自他同く成ず。已に成佛し去れば、唯果位に住して、因行を修せざるに非ず、或は成佛、一切衆生と、前前已に成じ、後後亦成ず。吁不可思議なるかな、凡口を以て、これを述つくす者ならんや。

△三に結名

是を他力往生と名く。

自他の願行交融し、多少の功德互に助け、二邊を超越し、中道に従容して、念念彌陀の法身に契合し、聲聲薩婆若海に流入す、終に臨で決定して上品上生す、豈に多一融通自他平等、無生而生、生即無生、圓頓微妙、速疾取辨の法門にあらずや。

善の凡夫が臨終に佛の來迎を受けて金剛の蓮臺に乗じ淨土に往生して見佛聞法し、直に無生法忍を悟るをいふ。

【分段變易】 分段生死と、變易生死を云ふ。

【芥爾】 任意に起る最短時の現在の刹那の心をいふ。

【四明】 智禮なり

○二に偈頌に二。一に所修の法

十界一念融通念佛。

十と者數なり、謂く、地獄餓鬼畜生修羅人天の六凡、聲聞緣覺佛菩薩の四聖、報無量なりといへども、數十をいでざるが故に、界とは別なり。分段變易、依處齊限、果報各別なればなり。一念とは、俄頃の心なり。一心に十法界を具し、一法界に十法界を具し、亦三種世間を具し、百法界即ち三千世間を具す。心なくんば則ち已みなん、芥爾も心あれば即ち具す、前ならず、後ならず、此心同時に萬法を具し、諸法心にあり、心諸法に徧じ、廣狹自在にして純雜無礙なり。融通念佛とは、謂る、我唱る所を廻して、衆人に融會し、衆人の唱る所に、又我に通ず。故に融通念佛と云ふ、是自他融通圓頓微妙、他力口稱の念佛なり。然に諸教の中、融通に二あり、曰く事理融通、曰く事事融通なり、初に事理融通とは、事法は分隔して齊限あり、理體蕩鏘して局限なし。理を全して事を成ずれば、所成の事法、理と混會し、融通和液す。次に事事融通とは事相の諸法は、分分相待して、互に障礙あり、然るに理性圓通して、虛融無礙なり。理に依るの事は、事に別事なく、事も亦鏘融す。彼此相入して、互に障礙せず、理既に彼此の異なることなし。事も亦一多の別を泯絶す、事事相入し、力用交徹す。今融通の行者、名簿に交締すれば、塵沙界衆唱號交絡す。故に一稱一切稱、一切稱一稱、同時具足不可思議なり、四明の云く、『法界圓融不思議の體、我一念の心』と、作ることを了知すべし。亦復學體、作生作佛、作依作正、作

【一極微】色法を最微の點まで分割したるものにて、今の科學にいふ分子の如きもの。

【台家】天台宗のこと。

【唯色唯香】一色一香無非中道の文。法華經中の語、たとひ微薄なる一の色一の香と雖、すべて中道の理を有せざること無しとの意。

【三差別無】心佛及衆生是三無差別の文、迷の凡心と清淨圓滿の佛と一切衆生との三は等しくして異なること無しといふ意。

根作境、一心一塵、一極微に至まで、法界全體にして、而も作に非ずと云ふことなし。既に一一の法、全く法界の作、故に趣に一を擧れば即是圓融法界の全分、既に全く法界にして、何の一物有てか、諸法を具せざらん。一切の法を以て一一皆一切の法を具するが故に、是故に、台家に唯色唯香等の義を立つ。若其然者、何が故ぞ、經論に、多く一心を以て諸法の總と爲て、觀境を立るや。良に以れば、若生佛等の境を觀するに、事既に隔異して能所忘れ難し、心法を觀ずれば近して而復要なり。既に是能造の具義彰れやすし。又即能觀を而所照と爲れば、念を絶しやすきが故なり。妙玄に云く、「三差別無して、心を觀するときは則易、縦ひ他境を觀するも、亦須く心に約すべし。」と、今此念佛は、正しく心に約して佛を念すべきなり。更に秘訣あり、筆端に記すること能はず、必口授心傳すべし。

○二に所得の益

億百萬遍功德圓滿

西乾億を説に、其四種あり、十萬と、百萬と、千萬と、萬萬となり。今第四を以て、准計層疊するに未だ理源を盡さず、實は便に順じて滿を撮り、無央數を彰すなり。自他交通じ、多一互に融し、聲聲無礙、億百萬遍なり、須臾に曠劫の行を圓にし、刹那に無邊の功を成するなり。功德圓滿とは、滅惡生善、終に遺止せず、彼此互融功德周贖すること、三五にして而も漸新に髣髴す。所有の行業、諸の塵勞を滅し、無邊の福を生じ、命終の

【大悲の慈父】 阿彌陀如來。
【慈氏種智の覺母】 彌勒を指す。

【他力往生の願】 吾等衆生を救はん
と誓ひ給ふ阿彌陀
如來の願力。
【實】 眞實教のこ
と。
【權】 方便教のこ
と。
【彌陀の依正】 前
註參照。

時に當て、染濁の緣離る。故に娑婆當處に幻滅し、清淨の緣合す。故に極樂當處に幻生す。此に滅し、彼に生ず。間髪を容れず、豈に熙怡に堪へざらんや、如來大悲の慈父は、たちまち鶴林雙樹の煙雲にかくれ、慈氏種智の覺母は、兜率天宮の内院を出でず、二佛の中間に於て、久く生死の幻野にまよふ。幸に今人人宿因深厚にして、彌陀直授の妙法に遇ふ、必ず當に是廣大圓融微妙の念佛三昧を修すべし。諸の功德に於て最も第一とす。是れ諸佛の父母、一切如來是法より生ず。又爰に一の説ことあり、普く念佛の行者に告ぐ、僧俗を簡ばす、受課の外毎日清晨、盥漱已後、西に向ひ合掌し、「彌陀所傳、融通念佛、億百萬遍、決定往生。」と擧揚し、心を以て緣歷し、高からず、低からず、緩ならず、急ならず。調停中を得、字字分明にして、果號を稱念すること、十聲を度とし、此の一生を盡し、暫も放過すること莫れ、早旦の稱佛は、貴敬を表す、臣の朝に比し、子の省に類す。又旦は即ち是れ夜氣清明にして、未だ世露に馳せず、自の心淨を取る、又朝露忽ち消し、電光便ち過ぐ、幸ひ一日の光景を得一日の佛名を稱し、往生を驗得すべし。

○後に祖釋中二、初に約して釋するに三△一に願諸法實相は能念なく所念なく、如融通す。是を他力往生の願と名く。諸法實相と者、諸法は十界三千、實に即するの權。實相は本具の理體、權に即するの實、同體の權實は、金器を成ずるが如し。互融の至致妙ここに在のみ。無能念等とは、謂く、行者の一念は、是能念の心。彌陀の依正は是所念の境。心の外に法なきが故に、彌陀の依

【第一義諦】眞如のこと。眞諦に同じ

【感應道交】衆生の感と佛の應と互に通じて融合すること。佛心よく衆生の心中に入り、衆生よくこれを感じて能化所化互に通じて交ること。

【般若】(Prajna) 智慧と譯す。
【三塗】火塗(地獄)、血塗(畜生)、刀塗(餓鬼)の稱にして三惡趣に同じ
【三有】欲界、色界、無色界の三界のこと。

正全しやうぜん是これ自じ心しん法ぽうの外がわに心こころなきが故ゆゑに。此この心こころ全ぜんく是これ彌みだ陀だの法ほう身しんなり。心しん佛ぶつ不ふ二にして諸しよ佛ぶつ、心しん内の衆しゆ生じやう、衆しゆ生じやう心中しんちゆうの佛ぶつを念ねんす。故ゆゑに所しよ念ねんの外がわに、別べつに能つう念ねんなく、衆しゆ生じやう心しん内の諸しよ佛ぶつ、諸しよ佛ぶつ法ぽう中の生しやうを度どす。故ゆゑに能のう念ねんの外がわに更さらに所しよ念ねんなし。心境しんきやう得とくがたくして、心境しんきやう宛あや然ぜんたり。互たがひに存ぞんして、思おもひ絶ぜつし議ぎを絶ぜつす、故ゆゑに如に如ら融ゆう通つうといふ。長ちやう蘆ろうの頤い禪ぜん師しの口くち、夫それ念ねんを以もつて念ねんと爲し、生しやうを以もつて生しやうと爲する者ものは、常じやう見けんの所しよ失しつなり、無む念ねんを以もつて無む念ねんとし、無む生じやうを以もつて無む生じやうとする者ものは、邪じや見けんの所しよ感かんなり。念ねんにして無む念ねん、生しやうにして無む生じやうなる者ものは、第だ一いち義ぎ諦たいなり。是こゝを以もつて實じつ際さい理り地ちには、一いち塵ちんを受うけず、諸しよ佛ぶつの念ねんすべきものなく、淨じやう土どの生しやうすべきものなし、佛ぶつ地ち門もん中ちゆうには、一いつ法ぽうをも捨すてず、總すべて諸しよ根こんを攝せつす。」と。所以ゆゑに終しゆう日じつ念ねん佛ぶつにして、而しかも無む念ねんにそむかず、熾し然ぜんとして往わう生じやうして、而しかも無む生じやうにそむかず、故ゆゑに能のうく凡ぼん聖しやう、各おの自の位ゐに住ぢゆうして而しかも感かん應おう道だう交かうす、東とう西さい相あひ往わう來らいせずして而しかも神しん淨じやう利りに超ちゆうゆ。此この圓えん融ゆう他た力りき、無む礙がい往わう生じやうの法ぽう門もんに非あらずや。圓えん頓どんの行ぎやう人にん、此これに依よつて修しゆ學がくせば速すみかに無む生じやうを證しやうせん、若も爾しからずんば、是これ圓えん人にんにあらす。豈あに聞きすや、心こころ正ただしきときは行ぎやう正ただし。智ち邪がが故ゆゑに行ぎやう邪がめり。大だい乘じやうの菩ぼ薩さつ所しよ修しゆの行ぎやう、般はん若にやを以もつて前ぜん導だうとす。故ゆゑに皆みな成じやう佛ぶつの因いんとなり、直ただに薩さつ婆は若にや海かいに趣ちゆうく。凡ぼん夫ぶの行ぎやう善ぜんは認みて實じつ有ゆうとす。故ゆゑに報むく人にん天てんにあり。外げ道だうの苦く行ぎやうは邪じや見けんを以もつて主しゆとす、故ゆゑに報むく三さん塗とにあり。二に乘じやうの所しよ修しゆ、志ご遍ぜん空くうに在あるを以もつて唯ただ小せう果くわを證しやうす。漸ぜん修しゆの大だい士し、理りを以もつて事じを融ゆうすといへども、猶なほし功く用ゆうを存ぞんすれば、未いまだ一いち一いち眞しんに稱とちること能あたはず。故ゆゑに第だ二にに落おつ。圓えん頓どんの行ぎやう人にん一いち毫ごうの善ぜんは、量りやう法ぽう界かいに同おなじして、眞しん如に契けい合がふし、二に乘じやうに趣ちゆうす、三さん有ゆうに滯とどまらず。一いつ切さいの

【三諦】天台宗にて宇宙觀に用ゆる語。萬有の實義に空、假、中の三義あるを三諦といふ。

【二邊】中道を離れて一方に傾くを邊といふ。

【事理】事とは相對差別の現象、理とは絶對平等の本體。或は事とは十界萬差の諸法、理とは唯一法性の眞如。

法にをいて、皆不思議三諦の理を了するが故に、皆成佛の因となるなり。不思議觀を以て念佛三昧を修す、是圓頓の妙行なり。豈に凡夫外道の妄情を取著するを以て、而これを測量すべけんや。

○二に行

諸法實相は、生佛宛然として、如融通す。是を他力往生の行と名く。圓頓念佛の行人は、語默動靜、一切時中、皆如實際なるを以の故に、相に住せず空に滯らず、二邊を超過し、中道に從容す。故に寂用無礙にして、一多相即し、生佛宛然として、如融通し、念念に自己本有の彌陀佛に契合し、聲聲に安養淨土の蓮華海に流入す、大なるかな、融通念佛の妙行たることや。

○三結名

億百萬遍は、多に非ず少に非ず。是を事理不二、不思議功德往生の日課と名く。日課百遍、互融億百。少を指て多とすれば、多も多にあらず。多を指て少とすれば、少も少にあらず。少、多に即すれば、少相に動ぜず。多、少に即すれば、多相を壞せざるなり。若唯事に約すれば、互に相ひ障礙し、若唯理に約すれば唯是一味なり、理事に隨て變じ、差別なき處、差別森然たり。事、理を得て融すれば、差別する時、了に纖異なし。普法の事理は、理即事、事即理、理中の事、事中の理。二際を冥じて多ならず、法界を統て少にあらず、聲聲沙界に響き、顆顆十法を貫く。杳杳として窺ひ難し、冥冥として觀こと莫し。

【第一義諦】眞如のこと。眞諦に同じ。

至境を屑頭に現じ、大事を頃刻に圓にす、實に乃し、言詮の域を超へ、測量の境を出づ。豈に是れ事理不二。融難思の法門にあらずや。衆生曠劫、苦海に淪溺して、幾くか法身の慧命を喪す。今圓乘を稟ることを獲て、心の作佛を知り心の是佛を知ること、猶し炬を執て冥室に入るがごとし。佛身を觀するを以ての故に即ち佛心を見たてまつる。一佛を見たてまつるが故に、即ち十方一切の諸佛を見たてまつる。故に能く須臾の頃に於て、諸佛に承事して、十方界に偏す。普く衆聲を聞に純ら甚深第一義諦を説く。則往所として、佛法に非すと云ふことなし。若空理を談じて、便因果を撥略し、若自心を談じて、便心外に諸法有ことを信ぜずんば、豈に唯法を謗するのみならんや。亦自心を謗じて、萬劫に殃墜す。良に痛むべきかな。

後に因に勸誡す

一念懈怠すれば寶池の蓮萎え、億百萬遍の功德損減す。一念精進すれば寶池の蓮開き、億百萬遍の功德成就す。

蓮華の開萎、功德の損成は、皆行人念佛の進怠によるなり。謂く、念佛を信知すれば、蓮華種植の時なり、一心に念佛すれば、蓮華水を出るの時なり。念佛功成るは、華開け佛を見たてまつるの時なり。信知すといへども念佛せず、念佛すといへども遂ざるときは、華萎徳減して、佛を見ること能はず。古人の云く、『深く信ずること能はず、疑惑を生ずるも念佛すと雖も、往生することを得ず。』と。又圓通の梵法師會衆集に、般舟三昧經を引て

【卽便往生】命終すれば卽ち往生すといふ意なり。

【十念】十聲南無阿彌陀佛と口に稱ふるをいふ。

言く、「念佛往生に三種の力あり、一には本有佛性力、言ろは煩惱心の中に、如來藏あるなり。二には慈光攝取力、言ろは彌陀の光明無量にして、念佛の衆生攝取して捨たまはざるなり。三には念佛三昧力、言ろは憶佛念佛、現前當來、必定して佛を見るなり。此の三種の力、三肢繩合して大索と爲て、能く重物を牽くが如し。又水火鏡子、若し將に日に對して、艾を以てこれを取らんとするに、卽ち火を得べし。若將に月に對して、珠を以てこれを取らんとするに、卽ち水を得べきが如し。今鏡水火の性を具するを以て、衆生の本具佛性の力に喩ふ。須く日月の光の來照するを假るは、彌陀の慈光攝取の力なり。珠艾を以て能水火を引は、信心念佛の力なり。此の三珠の物一を缺ば不可ならん、三事相合して水火方に生ず。三力、相資て、必ず淨土に生ず。」と。今既に信心念佛の力なし。何ぞ慈光攝取を蒙り、本有唯心の佛を見ることを得んや。又觀經上品上生觀に云く、「若衆生ありて、彼國に生ぜんと願ふ者は、三種の心を發して、卽便往生す、何等をか三と爲。一には至誠心、二には深心、三には、廻向發願心なり。三心を具する者、必ず彼國に生ず。善導和尚の曰く、「身に彼佛を禮拜し、口に彼佛を稱念し、意に彼佛を觀察し、三業眞實なるを至誠心と名く。眞實の信心を以て、自心煩惱を具足して、三界に流轉すと信知し、彌陀の本願、下十念に至まで生ずることを得と信知す、一念の疑心有ることなし、故に深心と名く。凡そ作爲する所の一切の善根、悉く皆往生に廻向す。故に廻向發願心と名く。此の三心を具して必ず往生を得。」と、今既に懈怠す、故に深心なし。深心なきが故

【託生】極樂にて生を蓮華に托すること

に、餘の二も隨て劣なり。三心既に具せざるときは、是虚假の念佛にして、往生の正因にあらず。蓮胎をねがふといへども、亦何ぞ託生することを得んや。蓮萎て聞かざること、云ざれども自ら明し。噫、光陰電のごとくに掣き、因果影の如くに隨ふ。壯なるに倚て口を廢ること勿れ、情を肆にして愆を造ること勿れ。幸に今茲簡易の法門に値ふ。能即廻光返照せば、當處を離れずして苦輪を超脱し、彌陀の淨土念に隨て往生すべし。つとめよや。

融通念佛信解章上 終

融通念佛信解章 卷下

攝州融通本山大念佛寺融觀撰

【一】第八に像即身の義を辨ず。

【三十二相】應身佛の身に具へ給ふ三十二の相好を云ふ。

【四生】胎生、卵生、濕生、化生のこと。
【六道】地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上。

(一) 第八に、像即眞身の義を辨じて、融通念佛の日課を勸むと者、或ひと靈芝、照律師に問て曰く、「經に曰く、諸佛如來は是法界身、一切衆生心想の中に入ること、今木を刻で像と爲るは、世物の成ずる所なり、此を用て佛と爲、知らず其れ可なりや。」對て曰く、「佛身は無相にして、亦相を離れず、其無相なるを以の故に、世出世間一法として、是佛なる者なし。八萬四千、三十二相といへども、亦即相に非ず、況や他物をや。故に曰、一切の相を離を即ちこれを佛と名く、其相を離れざるを以の故に、世出世間一法として、佛に非る者あることなし、況や相好をや。故に曰く、當に知るべし、一切の諸法即是佛法なり。如能此相、即非相、非相即相なりと達するときは、山川國土、草木微塵、四生六道、翳飛蠕動、諸佛法身の體に非ずと云ふことなし。而も況や、範金合土、刻木繪塑、莊嚴相好、而も獨り佛に非ざらんや。諸の有智の者當に此像を觀すべし。材木灰布、膠漆金彩、彼衆縁を假て、和合して、而も求を衆縁に成ず。皆世間の物各體あり。就か佛と爲や。然ども緣定相なし、物定名なし、既に號して佛と爲、一切衆縁佛體に非ずと云ふことなし、豈此を捨て、而も別に佛を求むべけんや。故に華嚴經に云く、「色相是佛に非ず、音聲も亦

【理事一如】本體界と現象界と平等無差別。

【真俗】眞諦、俗諦。俗諦は世俗の淺き思想にして、眞諦は眞實の深き道理。

【我國】彌陀淨土【成佛】無上のさとりを開くこと。

【四事】供養に用ゆる四種のもの。房舎、衣服、飯食、散華、焼香。

【阿羅漢】聲聞の究竟位。【辟支佛】無師獨悟する人。緣覺のこと。

【二】第九に十種の無礙の義を顯す。

復然なり。亦色聲を離て、佛の神通力を見ず。』と。此の如くこれを觀すれば、相にも住せず、亦相をも離れず、理事一如にして眞俗不二なり。復『像に對すと雖ども、是れ眞に佛を見たり。』と。これを以て、これを推すときは、我祖感得の變相、即是西方淨土、彌陀の法身、生身の諸菩薩なり。若人かくの如く、領解して、この尊像に對し奉て十界一念佛、融通念佛、百聲の日課をうくるときは、何ぞ高祖の直に彌陀佛に隨て、これを受るに異ならんや。彌陀の本願に、十方の衆生我國に生ぜんと欲して、至心に信樂し、乃至十念せん、果して遂げずんば、誓て成佛せじと、十念の信樂尙往生を得、況や復一日百聲の者をや、況や復一月一年、一生信樂する者をや。一念に八十億劫、生死の重罪を滅す。況復一日一月、一年一生念佛して滅する所の罪をや。重罪尙滅す、況や輕罪をや、又復念佛の功德を校量し、餘の善根に比し、優劣の相は、經に云く、『若人四事極好の物を以て、大千世界の中に滿る、阿羅漢辟支佛を供養する所得の功德、人あつて合掌して、一たび佛名を稱するに如かず。百千萬分、算數譬喩の能く及ばざる所なり、一たび佛名を稱する功德尙爾なり、況復十念百聲し、一月一年、一生念佛の功德をや、現世安穩にして、衆聖守護し、諸の災厄を離れて、功德無量なり。

(二) 第九に、十種無礙の義を顯して、正信を發明すと者、心に即して佛を觀じ、境に託して性を顯す、心心絶待法法全眞、達せざる者あつて横に疑謗を生ず。故に内心是佛なりと執して外求を許さざる者あり。自己の佛を執して、他佛を須ひざるものあり。諸法皆空を執

【諸法皆空】一切萬法すべて實の相無く皆空なること【理體】萬有の本體、諸法の理性。【十種無礙】心境一如、修性不二、因果理同、眞俗雙泯、依正互融、勝劣同體、一多相即、廣狹自在、古今無間、寂用無礙。【八十隨形好】三十二相の對、好は相の細なるものを云ふ。即ち相に隨伴せる八十種の好如來の色身の相好なり。

して有佛を信ぜざる者あり。一切現成を執して、修證を假ざる者あり。但是聖教に遵ぜず理體に達せず、所執あるに隨て、皆邪見を成じ、因果を撥無す、從ひ妄情に任て、礙を認て金と爲、砂を蒸して飯と作とも、今十種の無礙を以て淨土の圓融を顯し、執情を蕩滌し、正信を發明せしめん、○一には心境一如、行人の一念は、是能觀の心、彌陀の淨土は、是所觀の境。心外に法なきを以の故に、諸佛の淨土、全是自心なり。法の外に心なきを以の故に、此心全是諸佛の法體、心境得回して、心境宛然たり。互に泯じ互に存して思を絶し議を絶す。故に經に云く、「汝等心に佛を想ふ時、是心即是三十二相、八十隨形好なり。」と。○二には修證不二、唯心淨土は、是本具の理修を全して性に在るなり。發願往生は、是隨縁の事、性を全して修を成ずるなり。修性不二なるを以の故に、諸佛の淨土、本來成現なりと雖も、必ず淨業に由て成就す。乃し往生すべし、故に經に曰く、「是の心佛と作る、是心是佛なり、諸佛の正遍知海は、心想より生ず。」と。○三には、因果理同衆生諸佛、同一體なるが故に、諸佛已に悟り、衆生迷に在り、迷悟殊なりと雖も、性常に平等なり。是故に佛を念ずれば、即是一切衆生の本性を念ずるなり。故に經に云く、「心の如く佛も亦爾なり、佛の如く衆生も然なり、心佛及衆生是三差別なし。」と○四には、眞俗雙す。諸法本より空にして、纖塵得がたし。緣に隨て建立し、法法宛然たり。一切の法空なるを以の故に、心佛得がたし。一切の法假なるを以の故に、心佛宛然たり。一切の法中なるを以の故に、心佛不二、非有非空、絶思絶議なり。故に經に云く、

も非ず、空にもあらず、中道なりと説く教。

【眞】報身。因位の願行に酬報して、成就したる萬徳圓滿の佛身をいふ。
【應】應身。法身の佛が無量の身を應現するをいふ。

【三際】三世に同じ。前際(過去)、中際(現在)、後際(未来)。

『無量壽佛、身量無邊、是凡夫の心力の及ぶ所にあらず。然も彼如来、宿願力の故に。憶想ある者は、必ず成就を得。』又經に云く、『色身是佛にあらず、音聲も復然なり、亦聲色を離て、佛の神通力を見ず。』と。○五には、依正互融。國土の莊嚴は、依報なり、佛及菩薩は、正報なり。一心に一切刹を具し、一一微塵一切の佛及び九界の衆生を現す、體性本同なるを以の故に、是故に、落日及び氷、國土莊嚴、唯心の發現、水鳥樹林皆妙法を演ぶ。○六には、勝劣同體。諸佛の法身、眞より應を起す。鏡の像を現じ妍醜機に在るが如く、水波を起す、風に隨て大小なるが如し。機に利鈍有るに由るが故に、應に勝劣あり、而ども法身の體、本來動かす。故に經に云く、『阿彌陀佛、神通如意にして、十萬國に於て變現自在なり。或は大身を現じて虚空の中に滿ち、或は小身を現すれば、丈六八尺なり。』○七には、一多相即。一即多の故に一心一塵、一切の佛刹に遍す、多即一の故に一切の佛刹、全く一心一塵にあり、心をして專一ならしめんが爲の故に、成就し易が故に、一佛を專念せしむ、而も一佛即ち一切佛なり。故に經に云く、『無量壽佛を見るものは、即十方一切諸佛を見るなり。』○八には、廣狹自在。十方法界、一微塵を離れざるを以の故に、一塵至て微なれども、量法界に同じ。佛刹廣しと雖も、一塵を離れず、十萬遐程方寸を逾へず。故に經に云く、『阿彌陀佛、此を去ること遠からず、鏡中に於て自ら面像を見るが如し。』○九には、古今無間。三際一念を離れざるを以の故に、前際不可得なるが故に過去なく、後際不可得なるが故に未來なく、中際不可得なるが故に、現在なし。世相の遷流、

【金口の説所】佛の口より直に説き給へる教法。

【三】宗要の義を擧げて信行を勸進す。

本より常住なるを以の故に。經に云く、「彼の久遠を觀るに、猶し今日の若し、須臾の間を經て、諸佛に歷事し、十方界に遍し。」○十には寂用無礙。謂く、熾然として用に在て、本際を動ぜざること、水の波を起す、波全く是れ水なるが如し。淨名に云く、「滅定を起すして、諸の威儀を現す。」易に曰く、「寂然として動ぜず、感じて遂に通ず。」と。寂に即する用なるが故に、捨穢究盡し、取淨窮源す。用にして常に寂なるが故に、取捨ありと雖ども、而も實に取捨なし。是の故に、熾然たる念佛、無念と等しく、熾然たる往生、無生と等し。無見の處に於て、見佛を礙へず、無生の處に於て、任運に往生す。圓頓の行人、語默動靜、一切時中、皆如實際なるを以の故に。經に云く、「佛土を莊嚴する者は、即莊嚴に非ず。無量の衆生を滅度すれども、實に衆生の滅度を得る者なれ。」と。此の謂なり。○如上の十種無礙の法門は、竝に是聖教の明文、金口の所説、斯旨を了達すれば、無礙の法に於てすら、猶尙著せず、何に況や、世の妄情に隨て、而も執著を生ぜんや。斯の如くの念佛は、無念にして、而も念じ、念にして而も無念なり。他方の佛を念すれば、即是自己の佛を念するなり。一佛を念すれば、即是一切の佛を念するなり。一淨土に生ずれば、即是普く一切諸佛の淨土に生じて、而も所生無きなり。

(三)第十に、別して宗要の義を擧て、疑情を開決して、信行を勸進すと者、凡そ十條あり。一には一心三觀、一には約心觀佛、三には諦觀白毫、四には般舟三昧、五には念佛通別、六には、一心不亂、七には十念往生、八には少善不生、九には高聲念佛、十には十種

【立法】 すべて事理に對する迷情を破りたる後、その事理の眞性を顯し正理を立つるをいふ。顯正と同意なり。

【般若】 般若經に説く空。

【維摩】 維摩經説の顯正。

勝利なり。一に一心三觀とは、四明尊者の云く、「三觀と者、一念即空即假即中なり。恢揚肇如來よりして、妙悟近く智者に推す、全く性に出て發し、實に修成に匪ず。故に一心に於て宛も三用を彰すなり。假とは一切皆假、三觀悉く立法の功を明すなり。中とは一切皆中、三觀悉く是絶待の體なり。是則終日蕩相にして而も諸法皆成じ、終日立法にして而も纖塵必ず盡く。終日絶待にして而も二諦熾然たり、故に般若の談空、八十の法門顯るることを得。維摩の立法、三界の見愛皆忘じ、法華の一乘、世間の相常住、皆三觀の相即に出て、諸法遺すこと無らしむることを致す。故に三即三に非ず、一即一に非ず、次第に非ずして、而も入り、竝別に非ずして、而も觀ず。有無を以て求むべからず。中邊を以て取るべからず。故に云ふ、「竝にあらす、別にあらす、縦にあらす、横にあらす、三一圓融して、修性冥泯す。」と。豈に識心の測る所ろ、何ぞ言説の能詮ならんや。故に強示して、不可思議の妙觀と云ふ。説即説に非ず、無説にして而も説能く此れを知り已て、一切の境に對するに、此觀を以てこれを照了し、一切の行を立るに此觀を以てこれを導達し、一切の事を辨ずるに、此觀を以てこれを成就し、一切の教を設るに、此觀を以てこれを敷暢す。此觀を修する者は、能所必ず忘じ、取捨斯に泯す。故に眞如無念、向ふときは心絶す。終日説示すれども、無言にことならず。此を捨るときは必ず衆魔に同ず。此を離るときは、未だ諸外に超へず。故に龍樹の云、「諸法實相を除て、餘は皆魔事。」迦葉の云、「未だ大涅槃を聞ざる前は、皆是邪見大なるかな。一心三觀の妙宗や、若人性に稱て而も

【正遍知海】佛の十號の一、等正覺に同じ。

【本覺】本來法爾に存在する平等法身の覺體にして、宇宙法界の根本本體たる眞如の理體をいふ。

【始覺】衆生本覺の心が無明の薰習によりて不覺となり、多劫の間迷にありしが、今教を

觀するときは、一切の諸法、唯心發現、十萬億刹、行ずして而も至り、八萬の相好、觀體現前す。大なるかな、修心妙觀の宗。其死を起し生を回すの妙術なるをや。衆生曠劫、苦海に淪溺して、幾くか法身の慧命を喪す。今圓乘を禀ることを獲て、心の作佛を知り、心の是佛を知ること、猶し炬を執て冥室に入がごとし。佛身を觀するを以の故に、即佛心を見、一佛を見るが故に、即十方一切の諸佛を見たてまつる。故に能く須臾の頃に於て諸佛に承事して、十方界に徧す。普く衆聲を聞くに、純ら、甚深第一義諦を説く、則往所として、佛法に非すと云ことなし。妙觀の功、思議すべけんや。

二に、約心觀佛とは、觀無量壽經の第八像觀に云く、「諸佛如來は是法界身なり。一切衆生の心想の中に入る。是故に、汝等心に佛を想ふ時、是心即是三十二相、八十隨形好、是心佛と作り、是心是佛なり。諸佛の正遍知海は、心相より生ず。是故に、應當一心に繫念して彼佛を諦視すべし。」と。妙宗に釋して曰く、「佛身を想んと欲せば、須く體を觀ることを知るべし。體是本覺、能觀を起成す、體に依て宗を立す。斯此の謂なり。須く知べし。本覺乃是諸佛法界の身、諸の如來別の所證なく、全く衆生の本性を證するを以の故なり。若始覺功あれば、本覺乃顯る。故に法身は心相より生ずと云ふ。又復彌陀と一切の佛と、一身一智、應用も亦然なり。彌陀の身顯るれば即ち諸佛の身、諸佛の相明なれば即彌陀の體、若作是を論ぜば、即ち不思議の三觀なり。若破若立を以て作と名れば、空假の二觀なり、破せず立せざるを、是と名れば、中道の觀なり。之を全して

聞き始めて覺悟するを始覺と名づく【空觀】天台三觀の一、任意に起る一念の心を觀じて空諦の眞理を見ること。

【假觀】天台三觀の一、自己一念の心を觀じて假諦の眞理をみること。

【中道觀】天台三觀の一、任意に起る一念の心を觀じて中道の眞理をみること。

【三惑】修道上のさわり。見思、塵沙、無明の三惑を云ふ。

【十六觀】觀無量壽經に説ける十六の觀法。これを修すれば罪惡を滅して淨土に往生することを得。この中前三は定善にして、後三は散善なり。

【授記】佛が修道者の未來の證果を一一區別して豫め説き給ふこと。修

而も作なるときは、三諦俱に破し俱に立す。作を全して而も是なるときは、三諦俱に破立に非ず。中に即するの空假を、作と名れば、能く三惑を破し、能く三法を立す、故に他佛の三心圓應を感じて、能く我心の三心當果を成ず。空假に即するの中を、是と名るときは惑を全して智に即し、障を全して徳に即す。故に心是應佛、心是果佛なり。故に作是を知て一心に此三觀を修するは、乃し十六觀の總體一經の妙宗。文此中に出れども、義初後に徧す、是故に行者、當に此意を用て淨土の因を修すべし。

三に、諦觀白毫とは、觀經に云く、「無量壽佛を觀する者は、一の相好より入て、但眉間の白毫を觀じて、極て明了ならしむ。眉間の白毫を見れば、八萬四千の相好自然に當に現す、無量壽佛を見れば即ち十方無量の諸佛を見る。無量の諸佛を見ることを得るが故に、諸佛現前に授記す。」と。十六の妙觀、觀佛を以て要とす。八萬の相好、都て想ふに成

じ難し。故に但眉間毫相の、五須彌の如なるを觀ぜしむ。此の相好成すれば、八萬皆現す此を要門と爲るなり。若前の諸觀を修して、心に流利を得、觀已に宏深なるときは、彼毫量に稱て觀じ、八萬の相をして、自然に皆現ぜしむべし。疏の中に劣應の毫相を觀ぜしむ。乃し未だ前の諸觀を修せざる者の爲、及び觀を修すといへども、未だ成ぜざる者のためなり。故に佛身に於て、別に初心觀すべきの相を示して、三昧門と爲るなり。所託の境勝

あり劣あり、若能觀を觀すれば、皆須く頓に即ち空假中を照すべし。勝劣の相皆心の作なるを以ての故に、皆心なり。是故に觀佛相海經に云く、「若人至心に繫念し端坐して佛

而も作なるときは、三諦俱に破し俱に立す。作を全して而も是なるときは、三諦俱に破立に非ず。中に即するの空假を、作と名れば、能く三惑を破し、能く三法を立す、故に他佛の三心圓應を感じて、能く我心の三心當果を成ず。空假に即するの中を、是と名るときは惑を全して智に即し、障を全して徳に即す。故に心是應佛、心是果佛なり。故に作是を知て一心に此三觀を修するは、乃し十六觀の總體一經の妙宗。文此中に出れども、義初後に徧す、是故に行者、當に此意を用て淨土の因を修すべし。

道者に關する佛の豫言をいふ。

【常行三昧】七日 または九十日を一期となし、常に歩行して口に阿彌陀佛の名を稱へ、心に阿彌陀佛を想ひて息まざることを。

の色身を觀すれば、當に知べし。是人心佛心の如く、佛と異ことなし。塵勞に在りといへども、諸塵のために覆蔽せられず。是觀を作す者は、是眞の念佛、餘の散心の事善に比すれば、百千萬分にして其一にも及ばず。

四に、般舟三昧とは、『摩訶止觀』正修章の中、四種の三昧、第二の常行三昧なり。梵語には般舟、此には佛立と云ふ。此の三昧成ずれば、十方の佛空中に在して、立ちたまへるを見ること、清夜に星を觀るが如し、九十日を以て一期とし、道場を嚴飾して別請を受けず、其身濯沐して、淨衣服を著し、唯飲食大小便利を除て外、晝夜此身常に行じて息まず、大誓願を發して、『我筋骨をして、枯朽せしむとも、三昧未だ成ぜずんば終に休息せじ。』と、口常に阿彌陀佛の名號を稱へ、心常に佛を憶して、休息することなく、彌陀を以て法門の主とし、功成ずれば即ち十方の諸佛と等し。足下の千輻輪相より、一一逆縁し、乃至頂相を見ることなし、復頂相より觀じて、千輻輪相に至て、能念の心を了知すれば、所念の佛、即空即假即中にして、思議すべからず。若人智慧を得ること大海の如く、神通を運ばずして、悉く諸佛を見んと欲せば、當に是三昧を修すべし。諸の功德に於て、最も第一とす。是諸佛の父母、一切の如來是法より生じたまへばなり。

五に、念佛通別とは、妙宗に云く、『毘盧遮那、一切處に遍し。一切の諸法、皆是佛法。所謂衆生性徳の佛。自に非ず他に非ず、因に非ず果に非ず。即是圓常大覺の體なり。』故に『起信論』に云く、『言ところの覺の義と者、謂く、心體は念を離る、念相を離る者、

【三性】唯識宗にて、萬法を三種に分つ、遍計所執性、依他起性、圓成實性なり。

虚空界に等して、所として遍ぜすと云ことなし。法界一相、即是如来常住法身なり、此の法身に依て説て本覺と名く。故に知ぬ、果佛圓明の體、是我凡夫本具の性徳、故に一切の教所談の行法、此の覺體を顯んが爲めにあらずと云ことなし。故に四三昧を通じて念佛と名く、但其觀法の門たること同からず。一行三昧の如きは、直に三道を觀じて、本性の佛を顯し、方等三昧は、則誦呪を兼、法華は誦經を兼ね、觀音は數息を兼、覺意は三性を歷、此等の三昧、歷事異と雖も、念佛是同じ、俱に大覺の體を顯んが爲の故に、俱に念佛なりと雖も、而是通塗諸佛の體を顯す。若此の觀門、及び般舟三昧は、彼安養依正の境に託し、微妙の觀を用て、専ら彌陀に就て眞の佛體を顯す、彼境に託すといへども、須く知べし、依正同居一心なりと。心性遍周して、法として造らずと云こと無く、法として具せずと云こと無し。若一毫の法も、心外より生ずるときは名て大乘觀とせず。

六に、一心不亂とは、眞歇の云く、「念佛の法門は經路の修行にして、上上根器を接し、傍ら中下の機を引く。故に一心不亂の説、二意を兼含む。曰く、理の一心、曰く、事の一心なり。若事の一心は、人皆以て、これを行すべし。只一び憶念すれば、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり、即「楞嚴經」の、億佛念佛、現前當來に、必定して佛を見、方便を假らずして、自ら心開くることを得となり。若理の一心は、亦他法に非ず、直に阿彌陀佛の四字、做箇話頭を以て、二六時中晨朝十念の頃より、直下に提擲す。有心を以て念ぜず、無心を以て念ぜず。亦有亦無心を以て念ぜず。非有非無心を以て念ぜず。前

【善知識】 正法を説きて人をして佛道に入らしめ、解脱を得せしむる人をいふ。

【十善業】 不殺生、不偷盜、不邪淫、不惡口、不貪欲、不邪見、不妄語、不兩舌、不綺語、不瞋恚。

後際斷す。一念生ぜざれば、階梯に涉らず、頓に佛地に超ふ。信に知ぬ、乃佛乃祖、在教在禪、皆淨業を修して同く一願に歸す、此門に入得れば、無量の法門皆悉能入なり。

七に、十念往生とは、『十疑論』に問て云く、『衆生業重し、云何ぞ十念に即ち往生を得るや。』答、『臨終善友に值遇す、皆是宿世の善根。若宿因なくんば、尙善知識に值こと能はず。何に出てか十念成就せん。若無始の惡業を以て重しと爲て、臨終の十念を輕しと爲ば、今三種を以て較量するに、時節の多少に在らず。一には心にあり。造惡の時は、虚妄顛倒に従て生ず。念佛は善知識に従て、阿彌陀佛の眞實功德名號を聞て生ず。一虚一實豈に相比ぶることを得んや。譬へば萬年の暗室、日光暫く至るが如し、豈に久來暗を積むを以て而も滅せざらんや。二には、縁に在り。造罪の時は、癡暗の心、虚妄の境界を、縁するに従て生ず。念佛の心は、佛の功德名號を聞、無上菩提心に縁るに従て生ず。一眞一偽、豈比ぶることを得んや。譬へば人あつて、毒箭に中ことを被る。箭深く毒慘肌を傷り骨を破るに、一び滅除の藥鼓を聞けば、即ち箭出、毒除くが如し。豈に箭深く毒慘るを以て、而も出ざらんや。三には決定に在り。造罪の時は、有間なるを以て後心あり。念佛の時は、無間なるを以て後心なく、遂に即ち命を捨つ。善心猛利なり。是を以て即ち生ず。譬へば十圍の大索、千夫も制す、童子劍を揮て、須臾に兩分するが如し。又千年柴を積で、一の豆火を以て少時に焚き盡すが如し。人の一生、十善業を修すれば生天を得べきが如き、臨終に一念決定の邪見を起せば、即阿鼻地獄に墮す、惡業虚妄猛利なるを以の故

後際斷す。一念生ぜざれば、階梯に涉らず、頓に佛地に超ふ。信に知ぬ、乃佛乃祖、在教在禪、皆淨業を修して同く一願に歸す、此門に入得れば、無量の法門皆悉能入なり。七に、十念往生とは、『十疑論』に問て云く、『衆生業重し、云何ぞ十念に即ち往生を得るや。』答、『臨終善友に值遇す、皆是宿世の善根。若宿因なくんば、尙善知識に值こと能はず。何に出てか十念成就せん。若無始の惡業を以て重しと爲て、臨終の十念を輕しと爲ば、今三種を以て較量するに、時節の多少に在らず。一には心にあり。造惡の時は、虚妄顛倒に従て生ず。念佛は善知識に従て、阿彌陀佛の眞實功德名號を聞て生ず。一虚一實豈に相比ぶることを得んや。譬へば萬年の暗室、日光暫く至るが如し、豈に久來暗を積むを以て而も滅せざらんや。二には、縁に在り。造罪の時は、癡暗の心、虚妄の境界を、縁するに従て生ず。念佛の心は、佛の功德名號を聞、無上菩提心に縁るに従て生ず。一眞一偽、豈比ぶることを得んや。譬へば人あつて、毒箭に中ことを被る。箭深く毒慘肌を傷り骨を破るに、一び滅除の藥鼓を聞けば、即ち箭出、毒除くが如し。豈に箭深く毒慘るを以て、而も出ざらんや。三には決定に在り。造罪の時は、有間なるを以て後心あり。念佛の時は、無間なるを以て後心なく、遂に即ち命を捨つ。善心猛利なり。是を以て即ち生ず。譬へば十圍の大索、千夫も制す、童子劍を揮て、須臾に兩分するが如し。又千年柴を積で、一の豆火を以て少時に焚き盡すが如し。人の一生、十善業を修すれば生天を得べきが如き、臨終に一念決定の邪見を起せば、即阿鼻地獄に墮す、惡業虚妄猛利なるを以の故

に、尙能一生の善業を排して、惡道に墮せしむ。豈に況や、臨終猛心に念佛し、眞實無間の善業、而も無始の惡業を排して、淨土に生ずることを得ること能はざらんや。

八に、少善不生とは、孤山法師『彌陀西資鈔』に曰く、『世人を觀るに、善心たること輕く、惡心爲ること重し、何を以て淨土に生ずることを得ん。請ふ現事を以てこれを驗よ。佛像に對するときは、大寶を接して恭謹するが如くならず。經法を學するときは、財利を

求て勤劬するが如くならず。他を毀るときは、氣驕く言滑かなり。彼を讀るときは、氣緩く語澁る。或は我を以て、これを惡むときは、善を覆ひ惡を揚ぐ。我これを好むときは短を掩ひ長を美む、或は積惡を爲して而も他の私説を怒り、或は微善を作して、而も人の

不知を恨む。惡事に於ては、陰て千金を費し、亦能口に鈴す。善人に施すときは、方に一食を營めば便ち自ら功に誇る。凡そ此の用心、方に惡趣に沈む、少善を以て而も淨土を求生せんと欲する者、難乎哉。

九に、高聲念佛とは、『業報差別經』に云く、『高聲に念佛誦經するに、十種の功德あり、一には能く睡眠を排ふ。二には天魔驚怖す。三には聲十方に偏ず、四には三塗苦を息む、

五には外聲入らず、六には心をして散らざらしむ。七には勇猛精進。八には諸佛歡喜す。九には三昧現前す、十には淨土に往生す。慈雲懺主の云く、『佛名を稱るとき、心を以て緣

歴して、字字分明に、心口をして相ひ繋けしめば、方に能く一念に、八十億劫生死の罪を滅す、若然らずんば、罪を滅せんこと良に難し。若心散を恐ば、須く高聲に疾く喚ぶべ

滅す、若然らずんば、罪を滅せんこと良に難し。若心散を恐ば、須く高聲に疾く喚ぶべ

【感應】 衆生の感と佛の應と互に通じて融合すること

【三】 宗要の義を擧げて修を勸むるなり。

【三寶】 佛寶、法寶、僧寶のこと。

【解脫】 煩惱の繫縛を解きて迷界の業苦を脱すること

し、心 則 定り易く、三昧成じ易し。故に懷感法師の『決疑論』の中に、大集の『日藏經』を引て曰く、『小念は小佛を見、大念は大佛を見る。』と、『論』に釋して曰く、『大念とは、大聲念佛なり。』小念とは、小聲念佛なり。』此皆聖教、何の惑かあらんや。世人を奉勸す、聲を勵して念佛すれば、『三昧成じ易し。小聲念佛は、遂に馳散多し。學者方に知る。常人の能く曉むるに非ざるなり。下品下生は臨終の十念、少時猛利諦心決斷すれば、百年の願力に勝たり。今の人、佛を稱ふ多く專精ならず。散心緩聲にして、遂に現世に功を成ずる者少く、臨終に感應事稀ならしむ、故に特に此法を示す、念佛を勸むるとき、一心不亂に、高聲念佛して、聲聲相續するときは、久しからずして、功を生ずるなり。

(三)には、十種勝利とは、慈雲懺主の云く、『三界の大師、萬徳の慈父、これに歸する者は罪滅し、これを敬ふ者は福生ず。』と。諸教に具に説く、若能三寶に歸依して、一佛名を受持する者は、現世に當る十種の勝利を獲べし。一には、晝夜常に一切の諸天大力神將の形を隠して守護することを得、二には、常に觀世音等の如きの、二十五の大菩薩、而も爲に守護したまふことを得。三には、常に諸佛の爲に晝夜護念せられ、阿彌陀佛、常に光明を放て、此人を攝取す。四には、一切の惡鬼、夜叉、羅刹、皆害すること能はず、毒蛇毒藥、悉く中ること能はず。五には、水火冤賊、刀箭枉械、牢獄横死、悉く皆受けず。六には、先に作る所の罪、悉く皆消滅し、殺す所の冤命皆解脫を蒙て、更に執對なし。七には、夜夢吉祥にして、阿彌陀佛の勝妙の色像を見たてまつり。八には、心常に歡喜して、

【接引】 來迎引接のこと。

【廣舌】 廣長舌相三十二相の一。佛

顔色光澤し、氣力充盛し、所作吉利なり。九には、常に一切世間の人民の爲に恭敬禮拜せ
 らるること、猶し佛を敬が如し。十には、命終の時、心怖畏なく、正念現前す、阿彌陀
 佛及び諸の聖衆、金剛臺を持して接引し、極樂世界に往生し、盡未來際、勝妙の樂を受
 くるなり。上來經論の要旨、賢聖の發明、力行實證の言、纖悉にこれを筆記して、普
 く我門の道俗男女に法施す、願くば此文を閲し、信解決定して、展轉教化し、同く念佛を
 勤めよ。勤め勤めて怠らざるときは、今の念佛の行人、皆淨邦不退の菩薩なり。君看よ、
 淨土恆沙の佛、盡く是當年正信の人なり。若夫、閱して信ぜず、聞て勤ずんば、我これ
 を如何ともすること無し、悲哉、彌陀の願攝、釋迦の勤讚、諸佛の護念、大海を渡るに、
 既に巨舟を得て、仍良導あり。加ふるに便風を以して、必ず能速に彼岸に到が如し。若
 共、舟に登ことを肯ぜず。惡國に遲留し、往生を願ずして自ら塗炭に甘ず。譬ば人疾膏
 育に在て、人の藥を説ことを畏が如し。正是、所謂、飯蘿邊に餓殺するの死漢なり。良
 醫起死回生の妙ありと雖も、亦これを如何ともすること無し。佛說哀憐すべき者と爲。是
 此人なり。蓋按ずるに、願生せざる者、凡三器あり。揚次公の曰く、三世に善士の三種の
 不信心を發し、生を求ざる者あり。尤も嗟惜すべし。一には曰く、吾當に佛を超へ祖を越
 て、淨土生ずるに足す。二には曰く、處處皆淨土なり、西方に必ずしも生ぜず。三には曰
 く、極樂は聖域なり、我輩凡夫なり生ずること能ず。夫行海無盡なれども、普賢彌陀を願
 見す。佛國空なりと雖も、維摩常に淨土を修す。十方の如來廣舌の讚あり、十方の菩薩同

の廣く長き舌のこ
とにて、虚妄なき
ことをあらはす相
也。

住の心あり。試に自ら付量せよ。龍諸聖と與ん。生ずるに足すと謂ものは、何其自

欺や。龍樹祖師は、『楞伽經』に預記するの文あり。天親教宗は、『無量論』に生を求の

偈あり。慈恩の通贊、首に十勝を稱し、智者は理を析て、明に十疑を辨ずるが如に至て

は、彼皆上哲なれども、精進して往生す、必しも生ぜずと謂者は、何其自慢するや。

火車滅すべく、舟石沈む。華報を現する者、張馗より甚きは莫ども、十念にして勝處に

超ふ、地獄に入者、雄俊より甚は莫ども、再甦にして妙因を證す。世人の愆尤、未必

ず此の若ならず。生ずること能すと謂者は、何其自棄や、自欺自慢じ、自己

靈を棄て、輪廻に流入す。是誰が咎ぞ。『遺教』に云く、『我は良醫の如し、病を知て藥を説

く、服すると服せざるとは、醫の咎に非ず、又善導もの、人に善道を示が如し、これ

を聞て行ざるは、導もの過に非ず。』と。『寶積經』に云く、『若佛語を信ぜざる者、

念佛を信ぜざる者、往生を信ぜざる者は、皆惡道の中より來る。餘殃未だ盡す。愚癡不解

にして、未だ當に解脱すべからず。』と。大丈夫たる者、爰ぞ羞ざらんや。吁佛言諄諄た

り、祖舌叮嚀なり、信ぜざるべけんや。普く吾門の道俗男女に告ぐ。夫人此の世に在る、

能幾時かある。爭奈、前程限有て、暗裏に相催すること。符到奉行せば、住滯すべ

からず。閻羅老子人情に順ず。無常の鬼王、何の面目かある。且諸人の眼裏に親見、耳

裏に親聞に據に前の街後の巷、親情の眷屬、朋友兄弟、強壯後生、死去多少ぞ。世人多

云、『老來を待て方に念佛せん。』と。黄泉の路上には老少なし、能幾人有て、老を待得て

到いたらん。少年天死せうねんてうしする者多し。古人こじんの曰いはく、「老來らうらいを待て、方に念佛ねんぶつせんと云こと莫なれ。孤墳多こふんたは是少年これせうわんの人なり」と。是かくの如く痛いたく無常むじやうを念ねんじ、深ふかく厭離えんりを生しじ、身しん心しんを抖擻とさつし、世せ事を撥棄はつぎして、一日いちにちの光景くわうけいを得えば、一日いちにちの佛名ぶつみやうを念ねんじ、一時いちじの工夫くふうを得ては、一時いちじの淨業じやうごふを修しゆせよ。若もし世事じせきありて撥棄はつぎすべからざる者は、苦樂くらく逆順ぎやくじゆん、靜閑じやうけん間忙けんぼうを問とず、公私こうし乾辨けんべん、迎賓げいひん待客たいかくを一任いちにんして、「萬緣まんえん擾じやうを交まじへ、八面はつめん應酬おうじゆすとも、他たの念佛ねんぶつと、兩ふたつながら相妨あひさまたげす。見みすや、古人こじんの道いく、朝あしたにも阿彌陀あみだ、暮くれにも阿彌陀あみだ、假饒たごひいそがしき忙まじこと、箭やに似にとも、阿彌陀あみだを離はなざれ。」又云またいへく、「竹密たけみつにして流水るすいの過することを妨さまたげず、山高やまたかうして豈あに皆雲みなくもの飛とぶことを礙さまたげんや、其世緣これせ稍重えんやかもちあつ有あつ、力量りきりやう稍輕やわゆるもの者は、亦須またすべからくはつ忙裏まじうりに閑かんを偷ぬすみ、閑中けんちゆうに、靜じやうを取とべし。毎日まいにちは二萬聲にまんしやう一萬聲いちまんしやう、三千聲さんぜんしやう一千聲いつせんしやう、三百聲さんひやくしやう一百聲いつひやくしやうを念ねんじ、定さだめて日課にっくわとし、一日いちにちも放過ほうくわすべからざれ。又冗忙まじじゆうぼうの極ごく有あつ、頃刻しじゆんも閑かんなき者は、毎日まいにち晨朝ちんじゆうに、必かならず須すべからく十念じゆんすべし。積つひこと久ひさければ功成こうじやうす。亦虛またむなしくすて棄すてざれ。念佛ねんぶつの外ほか、或あるひは念經ねんぎやう禮佛らいふつ、懺悔ざんげ發願はつげん、種種しゆしゆの結緣けつえん、種種しゆしゆの作福さくふくすることを力ちからに隨したがつて布施ふせし、諸善しよぜんを修しゆして、功こう以もつてこれを助たすけよ。凡おほ一毫そいちごうの善ぜんも、皆須みなすべからく西方さいほうに廻向くわうすべし。此かくの如く功こうを用もちひ、惟ただ往生わうじやうを決定けつじやうするのみに非あらず、亦且またかつ、品位ひんゐを増高ぞうかうせん。若もし此この如くならずして、空むなしく年光ねんくわうを送おくり、蕩たう月げつ三十日さんじゆつに到いたつて、手てを換かへ胸むねを槌うつとも、已すでに遲おそれちるなり、況いはんや夫太命將ふたいたいのうに終をんとするの時とき、風力ふうりき體たいを解とき、四大しだい分ぶん離りすることを免まぬがれ、生龜しやうきの筒つつを脱だつし、螃蟹ぱうかいの湯ゆに落おつること、痛苦つうく逼迫ひつぱくし、怕怖くふ憧惶ちゆうかうとして、念佛ねんぶつ了りやうずること能あたはず、更饒かうげう備び、病無やまひなして而死しかすとも、又また或あるひ世緣えん未了まだれうせず、世念せねん未休まだきゆうせ

ず、生を食り死を怖て、胸懷を擾亂せん。若是俗人ならば、又兼て家私未明なら

ず、後事未辨せず、妻啼子哭、百種憂煎して、念佛了することを得ず、遂乃忽爾として、

眼光地に落、苦を受の時方て平生の作所、盡是枷上に枷を添、鎖上に鎖を添、鑊湯

下に柴炭を増、劍樹の上に刀鎗を助、ことを知ん。此時に丁て、縦使千佛身を遶とも、救

べき由なし、謂こと莫れ、我預めこれを告す。』と。予斯文を纂て、此に至て筆を絶つ。客

有訪来て、此文を閲し已て、從容に予以謂て曰、『十界一念融通念佛の説、至哉教矣、生

佛宛然如融通の談、旨哉言乎、愚敢復議すること無し、今問、淨を欣び穢を厭ふ、取

捨妄を等す、豈に圓頓融通念佛の行人、二見の道を以て人を化せんや。予これに應へて

曰、『上に略これを辨ずれども、又幸に説有。委これを引示て、疑情を開決せん。』淨土

或問』に云、『問、欣厭取捨は、愛憎能所の過無ことを得んや。答曰、『汝言を知らずや、

此世間の愛憎能所には非ず。此乃、十方如来、凡を轉じ聖と成の通法なり。若厭捨に非

ば、何を以か凡を轉ぜん、若欣取に非んば、何を以か聖と成ん。』故に凡夫自して、聖位に

預、聖位に由て以等覺に至る、其間等して、これを上る欣厭に非ずと云ふことなし、

妙覺に極て取捨始亡ず。故に先徳の云、『取捨の極と、不取捨と異有こと無し。』況此

淨土の法は、只一化機にして、釋迦彌陀の共に立る所の者なり。此其往を指し、彼其來を

受く、倘厭捨に非ば、此を離に由なし。倘欣取に非ば、彼に生ずるに分無し。既に

此を捨、又彼に生ず。彼勝縁に藉て、直に成佛に至る。然れば愛憎能所功莫大なり。何の

【下機】罪重く、意志弱き者、これ教法を受くる機として、下劣の類なるが故なり。

過かこれ有や。又經に云すや、諸佛の國及衆生と空なりと知と雖ども、常に淨土を修し、諸の羣生を教化す。蓋熾然たる忻厭、忻厭の相有ことを見ず。斯を得たりとす。客又問云、一人一切人、一切人一人、一行一切行、一切行一行。此の如の多一融通、無礙の法門は、上器の行門に似り。中下の二器湛潤如たらず、倘根器對せざるときは、功行成じ難し、吾未共詳なることを聞ず、而且疑あり。幸に詳に示て、これを釋け。答曰、我宗廣く諸法融通の妙義を談ずれども、專自他、融通の念佛を以て、而も宗本とす。念佛に四種あり。一には、佛の自性を念じ、二には、佛の相好功德を念じ、三には、佛の名號を念じ、四には、佛の形像を念ずるなり。四種の中に於て、正しく佛の名號を念ずるを以て宗とす。下機を救を以て本とす。聞ずや、佛の名號を念ずとは、謂く、衆生障重、境細、心麤、識颯神飛で、觀成就し難し。是を以て、大聖悲憐して、直に勸て専ら名號を稱しむ。正に稱名易に由が故に、相續して即生す。若能念念相續して畢命を期とせば、十は即ち十ながら生じ、百は即ち百ながら生ず。何を以の故に。外の雜縁なり、正念を得るが故に、佛の本願と相應するが故に、教に違せざるが故に、佛語に順するが故なり。又見ずや、經の中に、下品下生とは、或は衆生有て、不善業を作り、五逆十惡、諸の不善を具す。此の如くの愚人、惡業を以の故に、應に惡道に墮し、多劫を經歴して、苦を受くること窮なかるべし。此の如の愚人、命終の時に臨で、善知識の種種安慰して、爲に妙法を説き、教へて念佛せしむるに遇ふ。此人苦に逼れ念佛するに違

あらず。善友告て言く、「汝若し念すること能ずんば、應に無量壽佛と稱へし」と。是の如く、至心に聲をして絶ざらしむ、十念を具足し、南無阿彌陀佛と稱ふ。佛名を稱が故に、念念の中に於て、八十億劫生死の罪を除く、命終の時、金蓮花の猶し日輪の如にして、其人の前に住するを見る、一念の頃の如にして、即極樂世界に往生することを得。蓮花の中に於て、十二大劫を滿、蓮花方に開く。觀世音、大勢至、大悲の音聲を以て、其が爲に、廣諸法實相除滅罪の法を説、聞已て歡喜す。時に應じて即ち菩提の心を發す。是を下品下生の者と名と、專稱名號の方法たる佛、下機の爲にこれを説玉ふこと明し。是を以て明に知る、我宗に彌陀直授一多融通他力往生口稱の念佛は、三根同沐すと曰と雖も、正しく煩惱具足、濁世の凡夫を救濟するを以て、佛懷と爲玉ふこと其旨昭昭たり。豈中下の機を漏すと謂むや。若彌陀直授の融通念佛は、惟上機に被めて、下機を潤さずと謂ば、融通念佛を謗するなり。若釋迦所説の專稱名號は、惟下機の爲にして、上機に及ずと謂ば、專稱名號を謗するなり。二教俱に謗して、遂に融通念佛をして虚名と作し、專稱名號をして、實行無らしむ、何止罪を二佛に得のみならん。即三世諸佛の冤のみ。悲むべし。嗚呼法に優劣なし、病に應ずるときは、是藥皆靈なり。機に淺深あり、方を執するときは、藥に因て病を成す。淺徳の云く、深人淺法を觀ば、淺法亦深と成、淺人深法を觀ば、深法亦淺と成、圓人偏法を觀ば偏法亦圓と成、偏人圓法を觀ば、圓法亦偏と成。」と、誠哉言也。今深法を淺と成、圓法を偏と成す。試に自ら簡點せよ。苟其病を知らば必ず其

薬くすりを知しん。須すべからく了れうすべし。自じ他た融ゆう通つう口くち稱しょう名な號ごうは、一いつ法ぽうを離けず、巧たくみに諸しよ根こんに被かうしむる
 ことを。謂い上じやうにしてこれと言いふときは、頓とんに是ぜ心しん是ぜ佛ぶつを悟まとつ、念ねん念ねん圓えん明めい。中なかにして、これ
 を言いふときは、深ふかく是ぜ心しん作さ佛ぶつを信しんじて、念ねん念ねん理りに入いる、下しもにしてこれを云いふときは、深ふかく佛ぶつ力りき無む
 量りやうなることを信しんじて、念ねん念ねんに罪つみを滅めつす、總そうじてこれを云いふときは、凡おほ此この界かい他た方ほうの中なかに於おて、
 菩ぼ薩ざつ聲しやう聞もん、及および諸しよ天てん神しん祇ぎ、冥みやう官くわん冥みやう衆しゆ衆しゆより、以もつて蜎げん飛ひ蠕じゆ動どうの類るいに達いたるまで、徧へん照じやう廣くわう攝せつして、窮きゆう
 盡じんあることなし。唯ただ信しん順じゆんの者もの益やくを得えるみに非あらず。夫そのこれこれを疑うたひ、これを毀そる者もの若ごとも、尙なほ
 遠えん因いんと成なつて、畢ひつ竟きやう解げ脫だつする其その機きを收をさむ、益やくを施ほすこと、至し廣くわう至だ大だいなること、夫これ此このの如ごとし。豈あ
 に中ちゆう下げの機きを潤うるはずと謂いはん。又また是これを以もつて、三さん根こん普ふ被ひ、事じ理り不ふ二に、不ふ可か思し議ぎ功く徳とく、往わう生じやうの法ぽう
 門もんと謂いはることを得えんや。偶たま所しよ問もんに因よつて、説ぜうたること此このの如ごとし。識し者しや我われを以もつて、辯べん好こう
 と爲なすこと毋なれ。』

融通念佛信解章卷下

終

時宗聖典

本書二卷。時宗開祖一遍上人の法語、和歌を集録す。上人姓は越智、後別府氏、幼名松壽丸伊豫國主河野七郎道廣の次子、延應元年に生る。十五歳にして出家、西山派聖達に道を問ひ、後一遍と稱して諸國遊行をなし正應二年八月廿二日攝津の眞光寺に寂す、壽五十二。明治十九年圓照大師の諡號を賜ふ。

【別願和讃】傳へて曰ふ、上人弘安十年に之を製すと別願とは、彌陀の別願を指す。同じては四十八願に互り、別しては第十八願に局る。

【輪回の業】三界六道に迷の生死を重ねて、車輪のめぐることが細く停止することなきこと。

一

一遍上人語錄

卷上

別願和讃

身を觀ずれば水の泡
命をおもへば月の影
人天善所の質をば
地獄鬼畜のくるしみは
眼のまへのかたちは
耳のほとりの言の葉は
香をかき味なむること
息のあやつり絶ぬれば
過去遠遠のむかしより
おもひと思ふ事はみな
聖道淨土の法門を
生死の妄念つきずして
善惡不二の道理には

消ぬる後は人もなし
出入息にぞとどまらぬ
をしめどもみなたもたれず
いとへども又受やすし
盲て見ゆる色もなし
聾てきく聲ぞなき
只しばらくのほどぞかし
この身に殘る功能なし
今日今時にいたるまで
叶はねばこそかなしけれ
悟とさとする人はみな
輪回の業とぞなりにける
そむきはてたる心にて

【一如】一は絶待
唯一如は平等無差
別の義。絶對平等
の眞如法性をいふ

【知見】事理をさ
とり知る見解。

【煩惱】また惑と
も云ふ。心身を惱
亂する精神作用を
云ふ。

【菩提】(Bodhi)
智、道、覺、など
と譯す。佛の正覺
の智慧。

【涅槃】(Nirvāṇa)
滅度、圓寂、寂滅
などと譯す。迷妄
を脱し、眞理を窮
めて寂滅無爲の法
性を究め、不生不
滅の法身の眞證に
歸するを云ふ。

【法身】三身の一
無色無形の理佛の
こと。

【報身】三身の一
因位の類行に酬報
して成就したる萬
徳圓滿の佛身をい
ふ。

【理智冥合】眞理
とこれを證る智慧
とが全く一致する

邪正一如とおもひなす

煩惱すなはち菩提ぞと

生死すなはち涅槃とは

自性清淨法身は

迷も悟もなきゆゑに

萬行圓備の報身は

境智ふたつもなき故に

斷惡修善の應身は

十惡五逆の罪人に

名號酬因の報身は

十方衆生の願なれば

別願超世の名號は

口にまかせてとなふれば

始の一念よりほかに

念をかさねて始とし

おもひ盡なん其後に

佛も衆生もひとつにて

冥の知見ぞはづかしき

聞きて罪をばつくれども

いへども命ををしむかな

如如常住の佛なり

しるもしらぬも益ぞなき

理智冥合の佛なり

心念口稱に益ぞなき

隨緣治病の佛なり

無緣出離の益ぞなき

凡夫出離の佛なり

獨ももるる過ぞなき

他力不思議の力にて

聲に生死の罪きえぬ

最後の十念なけれども

念のつくるを終とす

はじめをばりはなければ

南無阿彌陀佛とぞ申すべき

こと。

【應身】三身の一衆生の機縁に應同して示現せる佛身を云ふ。

【十惡】十種の惡業。殺生、偷盜、邪淫、(身三)妄語、綺語、惡口、兩舌、(口四)貪欲、瞋恚、愚癡(意三)の稱。

【五逆】殺父母、破和合僧、出佛身血、殺阿羅漢、破羯磨僧、の五種の暴惡なる罪。

【名號酬因】名號得生の因も願も酬たること。

【超世】無量壽經に曰はく、我建超世願とあり。

【恒沙】恒河の沙と云ふことにして無數無量の大數をあらはす語。

【來迎引接】命終の時に臨みて佛菩薩がその前に來現して、淨土に迎へ取り給ふこと。

【五體】全身の總稱。兩手、兩膝、

はやく萬事をなげ捨て南無阿彌陀佛と息たゆる

此時極樂世界より

無數恆沙の大聖乘

一時に御手を授つ

即金蓮臺にのり

須臾の間を經る程に

行者蓮臺よりおりて

すなはち菩薩に従ひて

大寶宮殿に詣でては

玉樹樓にのぼりては

安養界に到りては

慈悲誓願かぎりなく

百利口語

一心に彌陀を憑つ

是ぞおもひの限なる

彌陀觀音大勢至

行者の前に顯現し

來迎引接たれたまふ

佛の後にしたがひて

安養淨土に往生す

五體を地になげ頂禮し

漸く佛所に到らしむ

佛の説法聽聞し

遙に他方界をみる

穢國に還て濟度せん

長時に慈恩を報ずべし

六道輪回の間には

獨むまれて獨死す

ともなふ人もなかりけり
生死の道こそかなしけれ

頭の稱。

【菩薩】(Bodhisattva)

衆生、大士、高士、開士、などと譯す。三乘の一。大心ありて佛道に入りたる人。四弘誓願を發して、六度の行を修し、上菩提を求め、下衆生を化す。五十一位三祇百劫の修行を経て佛果を證す。

【百利口語】百とは釋氏要覽中七丁云。百者大概之辭。

利口とは、此語原は尙書等より出たり。今上人、人の百利口を以て此法語に題する意を按ずるに、恐らくは是上人自ら謙遜し自ら嘲弄して、此法語を以て興言利口の滑稽に比類せしものならんか。【六道】地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上なり。【無間の獄】八熱地獄の第八苦を受

或は有頂の雲の上

善惡ふたつの業により

然に人天善所には

常に三塗の惡道を

黑繩衆合に骨をやき

餓鬼となりては食にうゑ

かかる苦惱を受し身の

たまたま人身得たる時

人の形に成たれど

身心苦惱することは

物をほしがる心根は

迭に害心おこすこと

此等の妄念おこしつつ

五欲の絆につながれて

千秋萬歳おくれども

つながぬ月日過行は

生老病死のくるしみは

或は無間の獄の下

いたらぬ栖はなかりけり

生をうることに有がたし

栖としてのみ出やらず

刀山劍樹に肝をさく

畜生愚癡の報もろし

しばらく三塗をまぬかれて

などか生死をいとほざる

世間の希望たえずして

地獄を出たるかひぞなき

餓鬼の果報にたがはざる

ただ畜生にことならず

明ぬ暮ぬといそぐ身の

火宅を出ずば憂かるべし

ただ電のあひだなり

死の期きたるは程もなし

人をきらはぬ事なれば

くること間斷無き地獄。阿鼻。

【三塗の惡道】地獄道、餓鬼道、畜生道のこと。

【黑繩衆合】八大

地獄の第二第三なり。共に是支體を焼るる處なり。故に骨を焼くと云ふ。

【刀山劍樹】八大地獄の別處なり。

共に是支體を割截せらるるの處なり。故に肝をさくと云ふ。

【五欲】色、聲、香、味、觸の五境をいふ。五境は人の欲を引き起すが故に欲と名く。

【火宅】火を衆生の苦に喩へ、宅を三界に喩ふ、現世のことなり。

【冥途】亡者の魂の迷ひ行く所、死後の世界。

【曠劫多生】多くの劫を重ねたる遠く久しき間、生れ變り死に變ること【無爲の境】爲作

貴賤高下の隔なく

露の命のあるほどぞ

一度無常の風ふけば

父母と妻子を始とし

百千萬億皆ながら

惜み育みなし

たましひ獨さらん時

親類眷屬あつまりて

業にひかれて迷ゆく

かかることはり聞しより

妄境既にふりすてて

曠劫多生の間には

萬の衆生を伴なひて

無爲の境にいらんため

口にとなふる念佛を

これこそ常の栖とて

さすがに家の多ければ

貧富共にのがれなし

瑤の臺もみがくべき

花のすがたも散はてぬ

財寶所住にいたるまで

我身のためとおもひつつ

此身をだにも打すてて

たれか冥途へおくるべき

屍を抱きてさげべども

生死の夢はよもさめじ

身命財もをしからず

獨ある身となり果てぬ

父母あらざる者もなし

はやく淨土にいたるべし

すつるぞ實の報恩よ

普く衆生に施して

いづくに宿を定めねば

雨にうたるる事もなし

造作を離れたる境界。即ち極樂のこと。

【妄念】 迷妄の執念。まよへるおもひ。

【勸進聖】 佛闍或は僧舎を造營せんが爲に、他を勸て募財する人なり。

此身をやどす其程は

終にうち捨ゆかんには

本より火宅と知ぬれば

荒たる處みゆれども

疊一疊しきぬれば

念佛まをす起ふしは

道場すべて無用なり

南無阿彌陀佛の名號は

利欲の心すすまねば

五種の不淨を離ねば

法主軌則をこのまねば

誰を檀那と頼まねば

暫く此身のある程ぞ

それも前世の果報ぞと

詞をつくし乞あるき

僅に命をつぐほどは

それもあたらすなり果は

あるじも我も同じこと

主がほしてなにかせん

焼うすれども騒がれず

つくらふ心さらになし

狭とおもふ事もなし

妄念おこらぬ住居かな

行住坐臥にたまちたる

過たる此身の本尊なり

勸進聖もしたからず

説法せしとちかひてき

弟子の法師もほしからず

人にへつらふ事もなし

さすがに衣食は離ねど

いとなむ事も更になし

へつらひもとめ願はねど

さすがに人こそ供養すれ

飢死こそはせんすらめ

【三界六道】 欲界色界、無色界の稱これを苦の本とす六道は、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上を云ふなり。

【攝取の光】 經に曰ふ、光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨の文より出づ。

【佛の恩徳】 攝取の光明の利益を云ふなり。

死して淨土に生れなば

世間の出世もこのまねば

人の著するにまかせつつ

小袖帷子紙のきぬ

寒さふせがん爲なれば

命をささゆる食物は

死するを歎く身ならねば

よはるを痛む身ならねば

色の爲ともおもはねば

善惡ともに皆ながら

すべて三界六道に

阿彌陀佛に歸命して

攝取の光に照されて

觀音勢至の勝友あり

諸佛護念したまへば

かかることはりしる事も

思へば歎喜せられつつ

殊勝の事こそ有べけれ

衣も常に定めなし

わづらひなきを本とする

ふりたる薤蓑のきれ

有に任せて身にまとふ

あたりつきたる其まに

病のためともきはれず

力のためとも願はれず

味たしむ事もなし

輪回生死の業なれば

羨ましき事さらになし

南無阿彌陀佛と唱ふれば

眞の奉事となるときは

同朋もとめて何かせん

一切横難おそれなし

偏に佛の恩徳と

いよいよ念佛まをさるる

【一年】 建治元年乙亥上人廿七歳。

【證誠殿】 上人法語に曰く熊野本地

は彌陀なり。和光

同塵して念佛をす

すめ給はんが爲に

神と現じ給ふなり

故に證誠殿と名く

と。これ念佛を證

誠し給ふ故なり。

【夢想の告】 上人

傳云、神靈告て宣

く、稍かの融通念

佛勸らるる聖、い

かに念佛をば悪く

すすめらるるぞ、

御房の勤めにより

て初て衆生の往生

すべきにあらず阿

彌陀佛十劫正覺に

一切衆生のためならで

一年熊野にまうでつつ

あらたに夢想の告有りて

後生の爲に依怙もなし

但し不淨をまろくして

信ぜん人も益あらじ

口にとなふる名號は

見聞覺知の人もみな

信謗共に利益せん

無始本有の行體ぞ

本來佛性一如にて

そぞろに妄念おこしつつ

然に彌陀の本誓は

鈍根無智の爲なれば

布施持戒をも願はれず

定散共に攝すれば

善惡ともに隔ねば

世をめぐりての詮もなし

證誠殿にまうせしに

それに任せて過る身の

平等利益の爲ぞかし

終には土とすつる身を

謗せん人も罪あらじ

不可思議功德なる故に

生死の夢をさますべし

他力不思議の名號は

始て修するとおもふなよ

迷悟の差別なきものを

迷とおもふぞ不思議なる

まよひの衆生に施して

智慧辯才もねがはれず

比丘の破戒もなげかれず

行住坐臥に障なし

悪業人もすてられず

三自相不淨、四自性不淨、五究竟不淨なり。

【無始本有】名號は三世常恆の法體なれば、始もなく終もなし。

【本來佛性一如】涅槃經云、一切衆生悉有佛性。如來常住無有變易。人人必ず佛となるべき種子を有すること一如とは不一不異の謂なり。

【彌陀の本誓云云】彌陀の本願は正しく鈍根重障の凡夫の爲にし給へる故なり。

【定散】定心と散心とのこと。定心は妄想を止め思念を凝らし得る心。散心は變動にして靜まらざる心。

【誓願偈文】弘安九年丙戌年上人四十八歳和州當麻寺にて書す。

【我弟子等云云】以下誓願の心行を明す。

雜善すべて生ぜねば

身の振舞にいろはねば

心はからひたのまねば

諸佛の光明およばざる

迷悟の法にあらざれば

此法信樂する時に

彼此三業捨離せねば

すべて思量をとどめつつ

出入息をかぎりにて

善根ほしともはげまれず

人目をかざる事もなし

さとするころも絶果てぬ

無量壽佛の名號は

難思光佛とほめたまふ

佛も衆生も隔なく

無礙光佛と申すなり

仰いで佛に身をまかせ

南無阿彌陀佛と申すべし

誓願偈文

我弟子等、願くば今身從り

未來際を盡して、身命を惜まず

本願に歸入し、畢命を期と爲して

一向に稱名し、善惡を説かず

善惡を行ぜされ、此の如きの行人は

本願に依るが故に、阿彌陀佛

【本類】 通じては彌陀の四十八願を指し別しては第十八願を云ふ。

【一向に稱名】 一心に専ら無量壽佛名を稱ふるを云ふ

【此の如きの行人】 云云。以下佛の護念を蒙るを明す。

【慈悲】 一切衆生に樂を與ふるを慈一切衆生の苦を抜くを悲と云ふ。

【心をして云云】 以下護念の利益を明す。

【横死】 横病横死のこと。

【時衆制誡】 上人所化の道俗に對して制誡を垂示す。

觀音勢至、五五の菩薩

無數の聖衆、六方の恆沙

證誡の諸佛、晝夜六時に

相續して間無く、影の形に隨ふが如く

暫も離るる時無く、慈悲護念したまはん

心をして亂れざらしめば、横病を受けず

横死に遇はず、身に苦痛なし

心錯亂せざれば、身心安樂にして

禪定に入るが如し、命を斷てば須臾にして

聖衆來迎す、佛の願力に乗じて

極樂に往生せん

時衆制誡

専ら神明の威を仰ぎて、本地の徳を輕ずること莫れ

専ら佛法僧を念じて、感應の力を忘ずること莫れ

専ら稱名の行を修して、餘の雜行を勤むること莫れ

専ら所愛の法を信じて、他人の法を破すること莫れ

【瞋恚】 三毒の一
己が心に逆ふもの
に對して忿怒する
こと。

【憍慢】 おごりた
かぶること。

【愛執】 汚れたる
愛に執着すること

【貪欲】 三毒の一
わが情に順應せる
境に愛著して、む
さぼる心を云ふ。

【九域】 十方の内
西方を除きたる九
域なり。

【三業】 身、口、
意の三業なり。

専ら平等の心を起して、差別の思を作すこと莫れ

専ら慈悲の心を發して、他人の愁を忘ずること莫れ

専ら柔和の面を備へて、瞋恚の相を現ずること莫れ

専ら卑下の觀に住して、憍慢の心を發すこと莫れ

専ら不淨の源を觀じて、愛執の心を起すこと莫れ

専ら無常の理を觀じて、貪欲の心を發すこと莫れ

専ら自身の過を制して、他人の非を謗すること莫れ

専ら化他の門に遊んで、自利の行を怠ること莫れ

専ら三惡道を恐れて、犯罪の業を恣にする事莫れ

専ら安養の樂を願じて、三塗の苦を忘ずること莫れ

専ら往生の想に住して、稱名の行を怠ること莫れ

専ら西方を持念して、心九域に分つこと莫れ

専ら菩提の行を修して、遊戲の友と交ること莫れ

専ら知識の教を守りて、我意を恣任すること莫れ

我遺弟等末代に至りて、須く此旨を守るべし。努力て怠こと勿れ、三業の行體なり。
南無阿彌陀佛 一遍

道具秘釋

【道具秘釋】事物に托して巧に佛法を信ぜしむ。其趣甚深なるが故に秘釋と云ふ。

【十一の道具】今

十二の道具を擬して十二光佛の徳を信ぜしむ。

【引入】椀鉢の異名。飯粒を盛るの

食器なり。是れ念佛は無量の生命に接するの法器たるを示す。

【箸筒】箸は食物

を挟みて口に入れてるもの、念佛に依て識心に無邊の聖徳攪入するを示す

【阿彌衣】網は阿彌と和訓す。網は魚類の種類を簡ばず捕ふるもの、是れ念佛は善惡の機を簡ばず救ふ徳あるを示す。

【袈裟】袈裟は苦惱を解脱せしむる徳あり。是れ念佛は苦惱を除く無上の法たるを示す。

【帷】夏衣のこと

南無阿彌陀佛。

一遍の弟子當に十二の道具を用ふるの意を信すべし。

一、引入

南無阿彌陀佛。

無量の生命名號の法器を信するの心是れ即ち無量光佛の徳なり。

一、箸筒

南無阿彌陀佛。

無邊の功德衆生の心に入ると信する心是れ即ち無邊光佛の徳なり。

一、阿彌衣

南無阿彌陀佛。

善惡同じく攝して彌陀の本願を信する心是れ即ち無礙光佛の徳なり。

一、袈裟

南無阿彌陀佛。

除苦惱法無對名號を信する心是れ即ち無對光佛の徳なり。

一、帷

南無阿彌陀佛。

火變じて風と成り化佛來迎を信する心是れ即ち焰王光佛の徳なり。

一、手巾

南無阿彌陀佛。

一念の彌陀は即ち多罪を滅すと信する心是れ即ち清淨光佛の徳なり。

一、帶

南無阿彌陀佛。

廻光圍繞して行者の身を照すと信する心是れ即ち歡喜光佛の徳なり。

帷はよく暑熱を避け清涼ならしむ。是れ念佛は地獄の業火をもよく清涼の風とならしむ。

【手巾】手巾のよく衆穢を拭ふが如く念佛は諸罪垢を除く。

【帶】帶の腰間を圍繞するが如く念佛はよく行者を光明にて圍繞せしむ。

【紙衣】紙衣の起居動靜時に破壊するが如く念佛は行住坐臥念臨終を信知せしむ。

【念珠】念珠は個個別にして一珠を期となすも顆顆相續するが如く念佛は畢命を期となし念念稱名を信知せしむ。

【衣】直綴衣即ち出塵の淨服にして世俗尊重するが如く念佛はよく衆生をして芬陀利華の如く人中に尊重せしむる徳あるを示す。

一、紙衣

南無阿彌陀佛。行住坐臥念臨終を信ずる心是れ即ち智慧光佛の徳なり。

一、念珠

南無阿彌陀佛。畢命を期と爲し念念稱名と信ずる心是れ即ち不斷光佛の徳なり。

一、衣

南無阿彌陀佛。此人人中の芬陀利華を信ずる心是れ即ち難思光佛の徳なり。

一、足駄

南無阿彌陀佛。最下の凡夫最上の願に乗ずと信ずる心是れ即ち無稱光佛の徳なり。

一、頭巾

南無阿彌陀佛。諸佛の密意諸教最頂を信ずる心是れ即ち超日月光佛の徳なり。

本願名號の中、衆生信徳有らば

衆生の信心の上に、十二光の徳顯る

他力不思議にして、凡夫は思量し難し

仰いで彌陀の名を唱へて、十二光の益を蒙る

南無阿彌陀佛 一切衆生 極樂に往生せん

弘安十年三月朔日

一遍

【芬陀利華】(Puṇḍarikā)梵音ブンダリーカ白蓮華と譯す。

【足駄】足駄の常に最下の處にあるが如く凡夫は底下にして出離の縁なし彌陀超世の願はこの凡夫を救ふを目的とすることを信知せしむ。

【頭巾】頭巾の頂に在るが如く念佛は諸法中の最頂なることを示す。

【消息法語】本章に上人の消息并に法語を集録す。

【此事】一阿彌陀佛の法名のこと。

【諸教の得道】顯密權實の諸教の得道。

消息法語

西園寺殿の御妹の准後の御法名を、一阿彌陀佛とさづけ奉られけるに、其御尋に付て御返事

此事は申入候しにたがはず。此體に生死無常の理をおもひしりて、南無阿彌陀佛と一度正直に歸命せし一念の後は、我も我にあらず。故に心も阿彌陀佛の御心、身の振舞も阿彌陀佛の御振舞、ことばもあみだ佛の御言なれば、生たる命も阿彌陀佛の御命なり。然ば昔の十惡五逆ながら請取て、今の一念十念に滅したまふ。有難き慈悲の本願に歸しぬれば、いよいよ三界六道の果報も由なくおぼえて、善惡ふたつながらものうくして、唯佛智よりはからひてあてられたる南無阿彌陀佛ばかり所詮たるべしとおもひさだめて名號を唱へ、息たえ命終る。これを臨終正念往生極樂といふなり。南無阿彌陀佛。

土御門入道前内大臣殿より出離生死の趣御尋に付て御返事

他力稱名は不思議の一行なり。彌陀超世の本願は凡夫出離の直道なり。諸佛源智のおもふところにあらず。況や三業淺智の心をもてうかがはんや。唯諸教の得道を耳にとどめず、本願の名號を口にとなへて、稱名の外に我心をもちひざるを無疑無慮乘彼願力定得往生といふ。南無阿彌陀佛となへて、わが心のなくなるを臨終正念といふ。此時佛の來迎

に預て極樂に往生するを念佛往生といふなり。南無阿彌陀佛。

頭辨殿より念佛の安心尋たまひけるに書きて示したまふ御返事

【四重】殺、盜、姦、妄の四重禁。
【闍提】(Ichhanika) 斷善根、信不具足と譯す。本來解脱の因を缺きて、到底、成佛する能はざるもの。
【四生】胎、卵、濕、化の四生。
【二十五有】衆生の輪轉する生死界を廿五種に分ちたるもの。四州、四惡趣、六欲天、梵天、無想天、五那含天、四禪天、四空處天。
【法藏比丘】彌陀の因位の名。
【無生法忍】無生法とは所詮の法なり。忍とは能證の慧なり。無生を得る慧なるが故に無生忍となづく。
【結縁】衆生が佛道を修行せんが爲

淨土のころざしあらん人は、わが機の信不信淨不淨有罪無罪を論ぜず。ただかかる不思議の名號をきき得たるをよろこびとして、南無阿彌陀佛となへて息たえ命おはらん時、必ず聖衆の來迎に預つて、無生法忍にかなふべきなり。是を念佛往生といふなり。南無阿彌陀佛。

九月朔日

辨殿

一遍

結縁したまふ殿上人に書きてしめしたまふ御法語

現世の結縁は後生の爲にて候へば、淨土の再會疑有べからず候。名號の外に機法なく、

に佛法僧に因縁を結ぶことを云ふ。【名號の外に機法なく】南無の二字は機なり。阿彌陀佛の四字は法なり。名號の外に機法なきなり。其機法一體する端的が即ち往生なれば、亦名號の外に往生なきなり。【安心】法に依り確心安住して動かざること。

名號の外に往生なし。一切萬法はみな名號體内の徳なり。然ればすなはち南無阿彌陀佛と息たゆる處に、得無生忍なりと領解する一念を臨終正念とは申すなり。是即十劫正覺の一念なり。南無彌阿陀佛。

三月九日

一遍

興願僧都念佛の安心を尋申されけるに書きてしめしたまふ御返事

夫念佛の行者用心のことにしめすべきよしもなく、此外に又示すべき安心もなし。諸の智者達の様様に立をかるる法要どもの侍るを。皆諸惑に對したる假初の要文なり。されば念佛の行者はかやうの事をも打捨て念佛すべし、むかし空也上人へある人念佛はいかが申すべきやと問ければ、「捨ててこそ」とばかりにてなにとも仰られずと。西行法師の選集抄に載られたり。是誠に金言なり。念佛の行者は智慧をも愚癡をも捨て、善惡の境界をもすて、貴賤高下の道理をもすて、地獄をおそるる心をもすて、極樂を願ふ心をもすて、又諸宗の悟をもすて、一切の事をすて申す念佛こそ、彌陀超世の本願にはかなひ候へ。かやうに打あげ打あげとなふれば、佛もなく我もなく、まして此内に兎角の道理もなし。善惡の境界皆淨土なり。外に求べからず厭ふべからず。よろづ生としいけるもの、山河草木、ふく風たつ浪の音までも念佛ならずといふことなし、人ばかり超世の願に預るにあらず。またかくのごとく愚老の申す事も意得にく

【生死は我執の迷情】生死流轉することば、我執の迷情に由る謂なり。

【聖道淨土】聖道門、淨土門の意、聖道門とは自力の修行をなして灰身滅智すること。淨土門とは他力の本願に乗じて淨土に往生すること。

く候はば、意得にくきにまかせて愚老が申す事をも打捨て、何ともかともあてがいはからずして、本願に任せて念佛したまふべし。念佛は安心して申すも、安心せずして申すも、他力超世の本願に缺たる事なし。彌陀の本願に缺たる事もなく、あまれることもなし、此外にこのみ何事をか用心して申すべき。ただ愚なる者の心に立かへりて念佛したまふべし。
南無阿彌陀佛

興願僧都

一遍

山門横川の眞縁上人へつかはさるる御返事

此世の對面は多生の芳契、相互に一佛に歸する事これよろこびなり。生死は我執の迷情、菩提は離念の一心なり。生死本無なれば、學すともかなふべからず。菩提本無なれば、行ずとも得べからず。しかりといへどもまなびざる者はいよいよまよひ、行ぜざるものはいよいよめぐる。此故に身をすてて行じ、心をつくして修すべし。このことは聖道淨土ことば異なりといへども、詮ずるところこれ一なり。故に法華經には「我不愛身命但惜無上道」とすすめ、觀經には「捨身他世必生彼國」ととけり。しかれば聖道は自力の行自己の身命を捨て道をあきらむる事自然なり。淨土は他力の行なれば、身命を佛に歸して命つきてのち佛性を證す。然れば吾等ごときの凡夫は一向稱名のほかに出離の道をもとむべからず。阿彌陀經の中には「念佛申すものは六方恆沙の諸佛の護念に預りて順次に決

定往生する事疑なし」ととかれたり。唯南無阿彌陀佛の六字の外にわが身心なく、一切衆生にあまねくして名號これ一遍なり。兼て又紫雲天華の事稱名不思議の瑞相なれば、凡夫の測量におよばざるものか、凡情を盡して此華もよくわくべく候。阿彌陀經百卷仰のごとく結縁仕畢ぬ。穴賢。南無阿彌陀佛。

四月廿二日

一遍

眞縁上人

或人念佛の法門を尋申しけるに書きしめしたまふ御法語

念佛往生とは念佛即往生なり。南無とは能歸の心、阿彌陀佛とは所歸の行、心行相應する一念を往生といふ。南無阿彌陀佛と唱へて後我心の善惡是非を論ぜず、後念の心もちひざるを信心決定の行者とは申すなり。只今の稱名のほかに臨終有るべからず。唯南無阿彌陀佛なむあみだ佛となへて、命終するを期とすべし。南無阿彌陀佛。

或人法門を尋申しけるに書きしめしたまふ御法語

春すぎ秋來れども、すすみ難きは出離の要道。花をしみ月をながめても、おこりやすきは輪廻の妄念なり。罪障の山にはいつとなく煩惱の雲あつくして、佛日のひかり眼にさへぎらず、生死の海には常時に無常の風烈しくして、眞如の月やどる事なし。生を受くるに

【芝蘭の契】 香は
しき交りのこと。
【紅蓮大紅蓮】 八
寒地獄の第七、第
八の並稱

したがひて苦しみにくるしみをかさね、死に歸するにしたがひて闇きよりくらき道におもむく。六道の街にはまよはぬ處もなく、四生の扉にはやどらぬ栖もなし。生死轉變をば夢とやいはん現とやいはん。これを有といはんとすれば、雲とのぼり烟と消えて、むなしき空に影をとどむる人なし。無といはんとすれば、又恩愛別離のなげき心の内にとどまりて腸をたち魂をまどはさずといふことなし。彼芝蘭の契の袂に屍をば愁歎の炎にこがせども、紅蓮大紅蓮の氷は解ること有るべからず。鴛鴦の衾の下に眼をば慈悲の涙にうるほせども、焦熱大焦熱の炎はしめることなかるべし。徒に歎き徒にかなしみて、人も迷ひ我もまよはんよりは、はやく三界苦輪の里を出で程なく九品蓮臺の都にまふべし。爰に苦惱の娑婆はたやすくはなれがたく、無爲の境界は等閑にしていたる事を得ず。適本願の強縁にあへる時、いそぎはげますしては、いづれの生をか期すべき。他力の稱名は不可思議の一行なり。超世の本願は凡夫出離の要道なり。身をわすれて信樂し、聲にまかせて唱念すべし。南無阿彌陀佛。

上人いささか御惱おはしましけるとき書きて門人にしめしたまふ御法語
夫生死本源の形は、男女和合の一念、流浪三界の相は愛染妄境の迷情なり、男女形やぶれ、妄境おのづから滅しなば、生死本無にして迷情ここに盡ぬべし。華を愛し月を詠するややもすれば輪廻の業、佛をおもひ經をおもふともすれば地獄の焰、ただ一念の本源は自

【一心三千】天台宗にて、一念の心に三千の諸法を具するること。

【最後の御遺誡】

正應二年八月二日聖戒として書せしむること六條縁起に見ゆ。

【五蘊】色、受、想、行、識。

【四大】地、水、火、風。

【病】身病。

【煩惱】心病。

【偈頌和歌】この章に上人の頌文及び和歌を類聚す。

【一遍】名號は法界に周遍するが故に一遍と稱す。法は法門。體は體性。證は證悟。

然に無念なり。無念の作用は眞に法界を縁す。一心三千に遍すれども、本より己來不動なり。然といへども自然の道理をうしなひて、意樂の懇志を抽んで、虚無の生死にまよひて幻化の菩提をもとむ。かくのごとき凡卑の族は、厭離穢土欣求淨土のころざしを深くして、息たえ命終らんを喜び、聖衆の來迎を期して彌陀の名號をとなへ、臨終の命斷のきざみ、無生法忍にかなふべきなり。南無阿彌陀佛。

弘安七年五月二十九日

一遍

最後の御遺誡 門人聖戒師の筆授なり

五蘊の中に衆生をやまする病なし。四大の中に衆生をなやます煩惱なし。但本性の一念にそむきて、五欲を家とし、三毒を食として、三惡道の苦患をうくる事自業自得果の道理なり。しかあればみづから一念發心せんよりほかには、三世諸佛の慈悲もすくふことあたはざるものなり。南無阿彌陀佛。

偈頌和歌

六十萬人頌

六字名號一遍法

十界依正一遍體

萬行離念一遍證

人中上上妙好華

【十一不二】十劫正覺の阿彌陀佛と一念往生の衆生と二ならず。即ち機法一體生佛不二。生即無生の證を云ふ。

【弘願】總じては彌陀の四十八願を指し、別しては第十八願を指す。【萬行致】萬行の至極を云ふ。【書寫山】兵庫縣飾磨郡にあり。性空上人開基の圓教寺あり。

【豫州化益】建治元年秋。【三輩九品】淨土往生者の勝劣に従ひ上輩中輩下輩の三つに別ち、各輩を更に三つに別ちて九品とす。

十一不二頌

十劫正覺衆生界

十一不二證無生

一稱萬行頌

弘願一稱萬行致

不蹈心地登靈臺

禮書寫山頌

書寫即是解脫山

性空即是涅槃聖

答公朝書頌

一聲名號中

十方衆生前

六字無生頌

六字之中本無生死

本無一物頌

如來萬德衆生妄念本無一物今得何事

一念往生彌陀國

國界平等坐大會

頌

果號三字衆德原

不假工夫開覺藏

頌

八葉妙法心蓮故

六字寶號無生故

頌

三尊垂化用

九品顯來迎

一聲之間即證無生

頌

無一物今得何事

頌

豫州御化益の頃、三輩九品の念佛の道場に管絃などして、人人の遊びたはぶれ侍るを見た

【信州化益】 弘安二年。

まひて、

つの國やなにはも法のことの葉はあしかりけりとおもひしるへし

信州御化益のころよみたまひける、

跡もなき雲にあらそふこころこそなかなか月のさはりとはなれ

下野國小野寺といふ所にて、俄に雨おびただしく降ければ、尼法師みな袈裟などをぬぐを

見たまひて、

ふれはぬれぬるれはかほく袖のうへを雨とていとふ人そはかなき

或とき衆の尼、瞋恚をおこしたりけるに、

雲となるけふりなくこそあまのはらつきはおのれとかすむものかは

奥州御化益の時、白川の關にかかりて、關の明神の寶殿の柱に書付たまひける、

ゆく人を彌陀のちかひにもらさしと名をこそとむれしら川のせき

同國江刺郡に到りて、祖父通信の墳墓に追薦したまふ時に、

はかなしやしはしかはねの朽ぬほと野はらの土はよそに見えけり

世の中をすつる我身も夢なれはたれをかすてぬ人と見るへき

身をすつるすつる心をすてつれはおもひなき世にすみ染の袖

武州石濱にて、時衆四五人、やみふしけるを見たまひて、

のこりゐてむかしを今とかたるへきこころのはてをしる人そなき

【奥州化益】 弘安三年。

【相州化益】弘安五年三月二日。

【鎌倉託麻の公朝】鎌倉託麻は公朝の所住の地なり。公朝は閑城の一流智道兼備の人。

【鰺坂入道】武藏國の住人。上人に遇ひ時衆に入るべき由白しけれども上人許容せざりければ如何にして生死をば離れ侍りしぞと問ふに、唯念佛申て死するより外は別の事なしと聞き、さては易きことにて侍るとて富士川にて十念唱て河に入ればやがて紫雲水にうつろひ、音楽浪にひびきしとなり。弘安五年の秋の比なり。

相州片瀬濱地藏堂にて御化益のころ紫雲たち華降りけるを人人疑をなして問奉りければ、

さけはさきちるはをのれと散はなのことはりこそ身は成にけれ

花はいろ月はあかりとなかむればころはものを思はさりけり

鎌倉託麻の公朝僧正の書狀に、「くもりなき雲にふけゆく月もみよころは西にかたふける

身を」と讀みてをくりたまひければ御かへし、

曇なき空はもとよりへたてねはころそ西にかへる月かけ

駿州井田といふ處にて御化益のころ鰺坂入道の入水往生を感傷したまひて、

ころを西にかけひのなかれゆく水の上なるあはれ世の中

或時野原を過たまひけるに、人の骸骨おほく見えければ、

おしめともつゝに野原に捨ててけりはかなかりける人のはてかな

皮にこそをとこをんなのいろもあれ骨にはかはるあとかたもなし

江州守山のほとり閻魔堂といふ所におはしけるととき延暦寺東塔櫻本の兵部堅者重豪といふ

人、上人の體を見むとて、まいりたりけるが、をどりて念佛申さるる事、けしからずと申

されければ、

はねははね踊らはをとれ春駒ののりの道をはしる人そしる

重豪のかへしに、「ころ駒のりしつめたるものならはさのみはかくや踊はぬへき」と讀み

て奉らければ御かへし、

ともはねよかくてもをとれ心こそ彌陀の御法と聞そうれしき
 或僧の「心こそ詮なれ、外相はいかでも有なん」といひければ、

こころよりこころをえんと意得て心にまよふこころ成けり

又或時、詠じたまひける、

すてやられてこころと世をは敷きけり野にも山にもすまれける身を
 捨ててこそ見るへかりけれ世の中をすつるも捨てぬならひ有とは
 おもひしれうき世の中にすみそめの色色しきにまよふこころを

こころをはいかなるものとしらねとも名をとなふれはほとけにそなる
 法の道かちよりゆくはくるしきにちかひの舟にのれやもろ人
 おしむなよまよふこころの大江山いく野の露と消やすき身を

こころからなかるる水をせきとめてをのれと淵に身をしつめけり
 みな人のことありかほに思ひなすこころはおくもなかりけるもの
 心をはこころの怨とこころえてこころのなきをこころとはせよ

とにかくに心はまようものなれば南無阿彌陀佛そ西へゆくみち

或人、法門を尋ね奉りければ、

念佛にもをのかこころをひかすれば身をせめたまの露としらすや

山門横川の眞縁上人よりの文に、「すみすまぬこころの水のいろいろにうつりうつらぬ雲の

みゆらん。よしさらはあたなる花はちりぬとも御法の種のすへや待へき」とよみてをくり
たまひければ御かへし、

すみすまぬころは水の泡なれは消たる道やむらさきの雲

彌陀の名にかすまぬ空の花ちりてころまとはぬ身とそなりぬる

京都御化益の頃、西園寺殿の御妹の准后へ進ぜらるる御返事のおくに、

佛こそ命と身とのあるしなれわか我ならぬころ振舞

因幡堂にうつらせたまふころ、土御門の入道前内大臣、念佛結縁の爲におはしませし後に

「こゑとほのかにきけと郭公なほさめやらぬうたたねの夢」とよみておくらせたまひけれ

ば御かへし、

ほととぎすなのるもきくもうたたねの夢うつつよりほかのひと聲

蓮光院の方丈より、うつつとて待べきこともなかりけりきのふの夢にみしは見しかは」と

よみて奉られければ御かへし、

うつつとて待えて見れば夢となるきのふにけふをおもひあはせて

興願僧都に示したまふ御返事のおくに、

須彌の峯たかしひきしの雲きえて月のあかりや空のつちくれ

市屋道場御化益の頃、詠じたまひける、

をのつから相あふ時もわかれてもあかりはいつもひとりなりけり

ひさかたの空にはその色もなし月こそつきのひかりなりけれ
かくしつつ野原の草の風の間にいくたひ露を結ひ來ぬらん

或時、世人の本心の闇き事を歎きたまひて、

ひとりたたほとけの御名やたとるらんをののかへる法の場人

市屋道場より柱にうつらせたまひけるに、京より人のもの中したりける御返し、

おもひとけは過にしかたも行末も一むすひなるゆめの世の中

夢の世とおもひなしたは假のよにとまる心のとまるへきやは

因州御化益のころ、或老翁のものぐさといふものを、四十八つくりて、「はきものの跡をし

るへとたつねついつかまいらん彌陀の淨土へ」といふ歌をそへて奉りければ、上人「た

つねつは、めづらしき言葉、ものぐさは亦有がたき志なり、返事せん」と宣ひて、

はきものの物くさにはみゆれともいそいとこそみちひきはせぬ

又ある人、笠を著たまへるを制しとがめければ、

開へきこころの花の身のためにつほみ笠きることをこそいへ

或人、柿の袴を袈裟の爲にと奉りければ、

袈裟の地におくれは頓て柿はかましふの弟子とそたのみけるかな

伯州御化益の頃、おほさかといふ處にて、雪の中にうづもれたまひて、

つまはつめとまらぬ年も降雪に消のころへきわか身ならねは

攝州より泉州へうつりたまひけるとて、

津の國のなにはの浦をいてしよりよしあしもなき里にこそすめ

うちなひく一もとすすきほのほのと見たかへてこそよしあしといへ

攝州尼崎御化益のころ、土御門入道前内大臣、「なかき夜の眠もすてに覺にけり六字の御名の今の一こそ」とよみておくらせひければ御返し、

なかき夜の夢も跡なし六の字を名のるはかりそいまの一

或とき、よみたまひける、

はれとおもふ人の心にひかれつつおのれとおふる草木たになし

おもふことなくて過にしむかしさへしのへはいまの歎とそなる

いにしへはころのままにしたかひぬ今はころよ我にしたかへ

或とき、佛の開眼供養したまふとて、

いまははや見えす見もせず色はいろいろなるいろそ色はいろいろなる

兵庫御化益の頃、光明福寺の方丈より、「いつまてか出入いきをたよりにて彌陀の御法の風をつたへん」とよみて奉られければ御返し、

いつまても出入人の息あらは彌陀の御法の風はたえせし

寶満寺にて、山良の法燈國師に參禪したまひけるに、國師、念起即覺の話を舉せられければ、上人かく讀みて呈したまひける、

【開眼供養】佛眼を開く義、即ち佛像に靈あらしむるをいふ。

【言語道斷心行處滅】言語に絶し、思慮に超えたること。

となふれは佛もわれもなかりけり南無阿彌陀佛の聲はかりして
國師此歌を聞て、未徹在とのたまひければ、上人またかくよみて呈したまひけるに國師手
巾藥籠を附屬して、印可の信を表したまふとなん、

となふれは佛もわれもなかりけり南無阿彌陀佛なむあみた佛

播州御化益のころ弘峯の八幡宮にて、言語道斷心行處滅のころを、

いはしたたこと葉の道をすくすくとひとのこのころの行こともなし

書寫山にまうでたまひて、

書うつす山は高根の雲きえてふてもおよはぬ月そ澄ける

書寫山を出たまひけるに、春の雪おもしろく峯に侍りければ、

よにふれはやかて消ゆく淡雪の身にしられたる春の空かな

備中御化益の頃、輕部の宿にて花下の教願、臨終ちかくなりて、「とにかくにまよふところ

のしるへせよいかにこなへて棄ぬちかひそ」とよみて奉りければ上人御返し、

とにかくにまよふ心をしるへにて南無阿彌陀佛と申すはかりそ

阿州御化益のころ、大島の里、河邊といふ處にて、寢食恆ならずおはしましけるに、

おもふこと皆つきはてぬうしとみし世をはさなから秋のはつ風

阿州より淡州の福良の泊にうつらせたまひて、

消やすきいのちは水のあはらしまや事のはなから月そさひしき

主なき彌陀の御名にて生れけるとなへすてたる跡の一聲
二宮の社の正面に打たまふ御札に、

名にかなふところは西にうつせみのもぬけはてたる聲ぞ涼しき
御憐ながらもここかしこ歩行してすすめ給ひけるに、道のほとり塚の傍に、御身を休め
させ給ふとて、

旅ころも木の根かやの根いつくにか身の捨られぬ處あるへき
兵庫觀音堂にて御往生ちかづかせたまふ時に詠じたまひける、

阿彌陀佛はまよひ悟の道たえてたた名にかなふいき佛なり

南無阿彌陀ほとけの御名のいつる息いらは蓮の身とそなるへき

一遍上人語錄卷上 終

【卷下】此下は門弟子の筆記して傳へたる上人の法語を録載す。

一遍上人語錄 卷下

門人傳説

【煩惱の本執に立かへり】煩惱即菩提と聞て罪をば造り、生死即涅槃と云へども命を惜むなり。これ即ち煩惱に立還る所なり。

【二心といふは名號なり】三心は能信の安心。念佛は所信の起行。三心はただ是念佛を信ずる心なれば、念佛を離て此心發ることなし。此心詞にあらはる時に南無阿彌陀佛と唱ふるなり。故に三心と念佛とは相即なり。離れざるもの

上人或時、しめして曰はく、聖道淨土の二門を能く能く分別すべきものなり。聖道門は煩惱即菩提、生死即涅槃と談ず。我も此法門を人にをしへつべけれども、當世の機根においてはかなふべからず。いかにも煩惱の本執に立かへりて人を損すべき故なり。淨土門は身心を放下して、三界六道の中に希望する所ひとつもなくして往生を願するなり。此界の中に一物も要事あるべからず。此身をここに置ながら、生死をはなるる事にはあらず。

又云、三心といふは名號なり。この故に至心信樂欲生我國を稱我名號と釋せり。故に稱名する外に全く三心はなきものなり。

又云、至誠心は自力我執の心を捨て彌陀に歸するを眞實心の體とす。其故は貪瞋邪偽奸詐百端を釋するは衆生の意地をきらひすつるなり。三毒は三業の中には意地具足の煩惱なり。深心とは、自身現是罪惡生死凡夫と釋して、煩惱具足の身を捨て本願の名號に歸するを深心の體とす。然れば至誠心深心の二心は衆生の身心のふたつをすて、他力の名號に歸する姿なり。回向心とは、自力我執の時の諸善と名號所具の諸善と一味和合するとき、能歸所歸一體と成て、南無阿彌陀佛とあらはるるなり、此うへは上の三心は即施即廢して

【自力我執云云】我等凡夫の自力我執の心は貪瞋邪偽にして眞實の心に非ず、故に我が不眞實の心を捨て彌陀の眞實に歸命するを眞實心の體とするなり。

【自力我執の時】未だ他力名號に歸せざる時なり。

【一味和合等】自他の萬善と彌陀の萬徳とは同一性なるが故に回向の義を感ず。

【即施即廢】未だ自力我執を捨ざる者の爲に即ちこれを施説し、既に他力の名號に歸する者の爲に即ちこれを廢捨すべし。

【長門顯性房】西山上人の弟子。菅三品位文時なり。式部大輔に任ず。天元四年九月八日卒す。

獨一の南無阿彌陀佛なり。然れば三心とは身心を棄て念佛申すより外に別の子細なし。其身心を棄てたる姿は南無阿彌陀佛是なり。

又常に長門顯性房を稱美して云、三心所廢の法門はよく立られたり。されば往生を遂られたり。

又云、至誠心を眞實といふこと、菅三品の云、「物を讀むに事の様によりて、訓に讀事あり。訓に讀ざる事あり」と。至といふは眞なり。誠といふは實なりと釋したまひたる、故に

至誠をば訓にかへりて讀べからず。唯名號の眞實なり。是則彌陀を眞實といふ意なり。わが分の心よりおこす眞實心に非ず。凡情をもて測量する法は眞實なし。所以はいかんと

なれば、能縁の心は虚妄なるゆへに不眞實なり。ただ所縁の名號ばかりを眞實とす。故に名號を不可思議功德ともとき、又は眞實とも説なり。理趣經の首題は大樂日金剛阿闍梨寶

眞實陀三昧耶成就經といふ。本より眞實といふは彌陀の名なり。されば至誠心を眞實心といふは、他力の眞實に歸する心なり。

又云、深心の釋に自身現是罪惡生死凡夫、曠劫已來常沒流轉、無有出離之縁といふこと、世の人おもへらく、此身の爲に種種の財寶をもとめはしり、妻子等を帶したるをこれ凡

夫のくせなり。かかる事をえすてねばこそ罪惡生死の凡夫の物の用にもたたぬ身ぞと釋せ

られたりと。此義しからず。惡きものの出離の用にも立たねばこそ此身をばすつべけれ。されば下の釋には佛の捨しめたまふをばすて、去しめたまふをばされと曰へり。わろしとは知

ながら、いよいよ著してころやすくはぐくみたてんとて、財寶妻子をもとめて、酒肉五辛をもてやしなふ事は、ゑせものと知りたる甲斐なし。わろきものをばすみやかにすつるにはしからず。

又云、自身現是罪惡生死凡夫、乃至無有出離之縁と信じて、他力に歸する時、種種の生死に流轉するとは我執の一念に由るなり。然るに今自力我執を放下して他力の名號に歸入し、能歸所歸機法一體すれば頓息するなり。

【自身現是云云】生死に流轉するとは我執の一念に由るなり。然るに今自力我執を放下して他力の名號に歸入し、能歸所歸機法一體すれば頓息するなり。

【我心は云云】我が願往生の心は六識（眼、耳、鼻、舌、身、意）分別の妄心なれば報土の因にあらず。

一體の法なり。又云、淨土を立るは欣慕の意を生じ、願往生の心をすすめんが爲なり。欣慕の意をすすむる事は、所詮稱名のためなり。しかれば深心の釋には使人欣慕といふなり。淨土のめでたき有様をきくに付けて、願往生の心は發るべきなり。此心がおこりぬれば、かならず名號は稱せらるるなり。されば願往生のころは名號に歸するまでの初發のころなり。我心は六識分別の妄心なる故に彼土の修因に非ず。名號の位則往生なり。故に他力往生といふ。打まかせて人ごとにわがよくねがひ、ころざしが切なれば、往生すべしとおもへり。又云、深心の釋に佛の捨てしめたまふものをば即捨てよといへる。佛といふは彌陀なり。捨てよといふは自力我執なり。佛の行ぜしめたまふものをば即行ぜよといへる。行とは名號なり。佛の去しめたまふ處をば即されといへる。處とは穢土なり。隨順佛願といへる。佛願とは彌陀佛の願なり。

【機法一體】衆生の機と阿彌陀佛の法と一體にして離れざることを以て他力の救済を表す【上六品の諸善】觀無量壽經の上三品には行福を説き中上品と中品には戒福を説き、中下品には世福を説く【行福】發心讀經して人をも勸化する大乘の行なり【戒福】小乗、大乘の戒律威儀を云ふ【世福】世俗に於ける忠孝仁義の道徳のこと【隨緣】縁に隨ひて事を起すこと【自受用】功德利益を自ら受用すること。受得したる法樂を自ら味ふこと【水が水をのみ】唯佛與佛の境界は聲聞菩薩の所知に非ざるに譬ふるなり

又云、念念不捨者といふは、南無阿彌陀佛の機法一體の功能なり。或人の義には機に付といひ、或は法に付ともいふ。いづれも偏見なり。機も法も名號の功能と知ぬれば、機に付れどもたがはず、法に付れどもたがはず。其ゆへは機法不二の名號なれば、南無阿彌陀佛の外に能歸もなく又所歸もなき故なり。

又云、上六品の諸善は他力所成の善體をととき、下三品は煩惱賊害のすがたを説なり。その實は行福の者は上三品ととき、戒福の者をば中三品ととき、世福の者をば下三品と説べきなり。そのゆへは一明三福以爲正因二明九品以爲正行と釋して、九品ともに正行の善あるべきなり。回向心の諸善は名號所具の諸善と、衆生自力の時の諸善と一味になる時をいふなり。

又云、隨緣雜善恐難生といへる隨緣といふは、心の外に境ををいて修行するなり。よその境にたづさはりて心をやしなふ。故に境滅すれば成就せず。是即自力我執の善なり。これを隨緣雜善といふ。

又云、我といふは煩惱なり。所行の法と我執の機と各別する故に、いかにも我執あらば修行成すべからず。一代の教法是なり。隨緣治病者各依方といふも、是自力の善なり。又云、今他力不思議の名號は自受用の智なり。自受用といふは、水が水をのみ火が火を

焼がごとく、松は松、竹は竹、其體をのれなりに生死なきをいふなり。然に衆生我執の一念にまよひしより已來既に常没の凡夫たり。爰に彌陀の本願他力の名號に歸しぬれば、生

【松は松竹は竹】
法法本來無生無滅
なる是れ即ち自受
用の智慧なり。

【能歸所歸一體】
機法一體生佛一如
の事なり。

【三心の智慧】
身心を放下して一向
に南無阿彌陀佛に
成たるを云ふなり

死なき本分にかへるなり。これを努力翻迷還本家といふなり。名號に歸する外は我とわが本分本家に歸ること有べからず。

又云、能歸といふは南無なり。十方衆生なり。是すなはち命濁中天の命なり。然に常住不滅の無量壽に歸しぬれば、我執の迷情をけづりて、能歸所歸一體にして、生死本無なるすがたを六字の南無阿彌陀佛と成就せり。かくのごとく領解するを三心の智慧といふなり。その智慧といふは、所詮自力我執の情量を捨うしなふ意なり。

又云、我體を捨て南無阿彌陀佛と獨一なるを一心不亂といふなり。されば念念稱名は念佛が念佛を申なり。しかるをも我よく意得我よく念佛中て往生せんとおもふは、自力我執がうしなへざるなり。おそらくはかくのごとき人は往生すべからず。念不念作意不作意。總じてわが分にいろはず。唯一念佛に成を一向專念といふなり。

又云、本より已來自己の本分は流轉するにあらず、唯妄執が流轉するなり。本分といふは諸佛已證の名號なり。妄執は所因もなく實體もなし。本不生なり。

又云、世の人おもへらく、自力他力を分別してわが體を有せて、はれ他力にすがりて往生すべしと。云。

此義しからず。自力他力は初門の事なり。自他の位を打捨て唯一念佛になるを他力といふなり。熊野權現の信不信をいはす。有罪無罪を論ぜず。南無阿彌陀佛が往生するぞと示現し給ひし時より、法師は領解して、自力の我執を打捨てたりと。これは常の仰なり。

【熊野權現】上人
三十七歳、建治元
年乙亥十二月十五
日曉更の御示現な
り。

【七慢】一慢、二過慢、三慢過慢、四我慢、五增上慢、六卑慢、七邪慢。【九慢】一我勝慢類、二我等慢類、三我劣慢類、四有勝我慢類、七有劣我慢類、八無等我慢類、九無劣我慢類。七慢九慢共に他人に對して心を高貴ならしむる精神作用。【大經】無量壽經のこと。【五味】乳味、酪味、生酥味、熟酥味、醍醐味。天台宗にて佛一代の教説たる五時教に相當し以てその内容を比較するに云ふ

又云、自力の善は七慢九慢をはなれざるなり。故に憍慢弊懈怠、難以信此法といひ、三業起行多憍慢とも釋するなり。無我無人の南無阿彌陀佛に歸しぬれば、擧べき人もなくくだるべき我もなし。此道理を大經には住空無相無願三昧といひ、或は通達諸法性、一切空無我、專求淨佛土、必定如是刹とも説給へり。

又云、極樂はこれ空無我の淨土なるが故に。善導和尚は畢竟逍遙離有無と曰へり。往生人を説には皆受自然虛無之身無極之體といへり。されば名號は青黃赤白の色にもあらず。長短方圓の形にもあらず。有にもあらず無にもあらず、五味をもはなれたる故に。口にとなふれどもいかなる法味ともおぼへず。すべていかなるものとも思ひ量べき法にあらず。これを無疑無慮といひ、十方の諸佛はこれを不可思議とは讚たまへり。唯聲にまかせてとなふれば、無窮の生死をはなる言語道斷の法なり。

又云、自力の時我執憍慢の心におこるなり。其ゆへはわがよく意得わがよく行じて生死を離るべしとおもふ故に、智慧もすすみ行もすすめば、我ほどの智者われ程の行者はあるまじとおもひて、身をあげ人をくだすなり。他力稱名に歸しぬれば、憍慢なし卑下なし、其故は身心を放下して、無我無人の法に歸しぬれば、自他彼此の人我なし。田夫野人尼入道愚癡無智までも平等に往生する法なれば、他力の行といふなり。般舟讚に、三業起行多憍慢といふは自力の行なり。單發無上菩提心、廻心念念生安樂といふは三心をすすむるなり。自力の行は憍慢おほければ、三心をおこせとすすむるなり。

【中路の白道云云】善導の觀經疏の二

河白道の譬喩なり衆生の貪愛を水に喩へ瞋憎を火に喩ふ。中路の白道の四五寸とは、衆生貪瞋煩惱中能生清淨願往生心なり。即ち清淨なる願往生の心に喩ふるなり。

【加祐】加は益なり。祐は助なり。【三心】至誠心、深心、廻向發願心【四修】廻向發願心、修修、無餘修、長時修、無間修。

【五念】五念門、天親の淨土論に出づ。阿彌陀佛を念じて淨土に往生する行因を五門に開きたるもの。禮拜門、讚歎門、作願門、觀察門、廻向門。

又云、中路の白道は南無阿彌陀佛なり。水火の二河は我等が心なり。二河にをかされぬは名號なり。

又云、阿彌陀經の一心不亂といふは名號の一なり。もし名號の外にところを求めなば、二心不亂といふべし、一心とはいふべからず。されば稱讚淨土經には慈悲加祐、令心不亂ととけり。機がおこす妄分の一心にはあらず。

又云、安心といふは南無なり。起行といふは阿彌陀の三字なり。作業といふは佛なり。機法一體の南無阿彌陀佛に成りぬれば、三心四修五念は皆もて名號なり。

又云、決定往生の信たらずとて人ごとくに歎くはいはれなき事なり。凡夫のころには決定なし。決定は名號なり。しかれば決定往生の信たらずとも、口にまかせて稱せば往生すべし。是故に往生は心によらず。名號によりて往生するなり。決定の信をたてて往生すべしといはば、猶心品にかへるなり。わがころを打すて一向に名號によりて往生すと意得れば、をのづから又決定の心はおこるなり。

又云、決定といふは名號なり。わが身わがころは不定なり。身は無常遷流の形なれば念念に生滅す。心は妄心なれば虚妄なり。たのむべからず。

又云、願の仰なり。名號は信するも信ぜざるも、となふれば他力不思議の力にて往生す。自力我執の心をもて兎角もてあつかふべからず。極樂は無我の土なるが故に、我執をもては往生せず。名號をもて往生すべきなり。

又云、願の仰なり。名號は信するも信ぜざるも、となふれば他力不思議の力にて往生す。自力我執の心をもて兎角もてあつかふべからず。極樂は無我の土なるが故に、我執をもては往生せず。名號をもて往生すべきなり。

又云、願の仰なり。名號は信するも信ぜざるも、となふれば他力不思議の力にて往生す。自力我執の心をもて兎角もてあつかふべからず。極樂は無我の土なるが故に、我執をもては往生せず。名號をもて往生すべきなり。

【萬法】 諸善を指すなり。

【無より生じ】 無我より生ずるなり

【意地の念を呼で】 念佛といへばとて

意業に佛を思ふと云ふには非ず。南無阿彌陀佛と唱ふるを、念佛と名くるなり。

【念聲是一】 選擇

集に十念と云ふは釋して十聲と云ふなりと。即ち念は唱ふるなり。

【定機】 定心の機

根、想を凝らして定善を修し得る人をいふ。

【散機】 心ちりう

ごきて定善を修する能はざる人。

又云、萬法は無より生じ、煩惱は我より生ず。

又云、名號に心をいれるとも、こころに名號をいるべからず。

又云、生死といふは妄念なり。妄執煩惱は實體なし。然るに此妄執煩惱の心を本として、善惡を分別する念想をもて、生死を離れんとする事ははれなし。念は即ち出離のさはりなり。故に念即生死と釋せり。生死を離るるといふは念をはなるるなり。こころはもとの心ながら、生死を離るるといふ事またくなきものなり。

又云、漢土に徑山といふ山寺あり。禪の寺なり。麓の卒都婆の銘に念起是病不續是藥。

云。山良の心地房は此頌文をもて法を得たりと。云。

又云、名號を念佛といふ事意地の念を呼で念佛といふにはあらず。ただ名號の名なり。

物の名に松ぞ竹ぞといふがごとし。をのれなりの名なり。

又云、念聲是一といふ事、念は聲の義なり。意念と口稱とを混じて一といふにはあらず。

本より念と聲と一體なり。念聲一體といふはすなはち名號なり。

又云、念佛三昧といふ事、三昧といふは見佛の義なり。常の義には、定機は現身見佛。

散機は臨終見佛する故に三昧と名くと。云。此義しからず。此見佛はみな觀佛三昧の分なり。今の念佛三昧といふは、無始本有常住不滅の佛體なれば、名號即これ眞實の見佛、眞實の三昧なり。故に念佛を玉三昧といふなり。

又云、稱名の外に見佛を求べからず。名號すなはち眞實の見佛なり。肉眼をもて見る

能はざる人。

能はざる人。

能はざる人。

能はざる人。

能はざる人。

【名號即これ云云】吉水大師曰はく、至極大乘の意は、體の外に名なく名の外に體なし、萬善の名體は名號の六字に即し、恆沙の功德は口稱の一行に備はるとあり【見佛】佛身をみることを。自己の佛性をさとること。【順魔】妻子珍寶等なり。【逆魔】病患災難等なり。【攝に親縁】彼此の三業互相に攝入するなり。【取に近縁】現に目前に在つて握手交接し給ふを云ふ【増上縁】色心萬法に通じ一法の結果に對して總て皆増上の用あるを云ふ。【尼法師云云】懺悔するは滅罪の爲なり。然るに行水をし身を苦しむるは因果の理を信ずるのみにて、全く

ところの佛は眞佛にあらず。もし我等當時の眼に佛を見れば魔なりとしるべし。但し夢にみるには實なる事も有べし。夢は六識を亡じて無分別の位にみる故なり。是ゆへに釋には夢定といへり。

又云、魔に付く順魔逆魔のふたつあり。行者の心に順じて魔となるあり。行者の違亂となりて魔となるあり。ふたつの中には順魔がなを大事の魔なり。妻子等是なり。

又云、攝取不捨の四字を三縁を釋するなり。攝に親縁の義あり。取に近縁の義あり。不捨に増上縁の義あるなり。

又云、如來の禁戒をやぶれる尼法師の行水をし、身をくるしむるは、またくこれ懺悔にあらず。ただ自業自得の因果のことはりをしるばかりなり。眞實の懺悔は名號他力の懺悔なり。故に念念稱名常懺悔と釋せり。自力我執の心をもて懺悔を立つべからず。

又云、他力稱名の行者は、此身はしばらく穢土に有といへとも、心はずでに往生を遂て淨土にあり。此旨を面面にふかく信ぜらるべしと。云。

又云、慈悲に三種あり。いはく小悲中悲大悲なり。大悲といふは法身の慈悲なり。今の別願成就の彌陀は法身の大悲を提げて衆生を度したまふ。故に眞實にしてむなしからざるなり。これを經には佛心者大慈悲是、以無縁慈攝諸衆生ととけり。

又云、往生といふ事。往は理なり。生は智なり。理智契當するを往生といふなり。又云、唯信罪福のものは佛の五智を疑ひてみづからが情をもて往生を願する故に。往生

滅罪の義あるべからず。故にこれ懺悔に非ずと云へるなり。

【心品の捨家棄欲】
在家の出家なり。

はしながら花合の障あり。六識の凡情をもてたとひ功德を修し觀念を凝すとも、能縁の心虚妄なれば、所縁の淨土も亦もて實體なし。極樂は無我真實の土なれば、自力我執の善をもてはまたく生ずべからず。唯弘願の一行をもて往生を得べし。しかれば凡夫の意樂をもては生ずべからず。畢命爲期の稱名の外に種種の意樂をもとむるは、眞實の佛法をしらざる故に往生すべからず。

又云、無心寂靜なるを佛といふ。意樂をおこすは佛といふべからず。意樂は妄執なりと。云。此風情は常の仰なり。

又云、念佛の機に三品あり。上根は妻子を帶し家に在ながら、著せずして往生す。中根は妻子をすつるといへども、住處を衣食とを帶して、著せずして往生す。下根は萬事を捨離して往生す。我等は下根のものなれば、一切を捨てば定で臨終に諸事に著して往生をし損すべきなりと思ふ故にかくのごとく行ずるなり。よくよく心に思量すべし。ここにある人問て曰、大經の三輩は上輩を捨家棄欲ととけり。今の御義には相違せり如何。答てのたまはく、『一切の佛法は心品を沙汰す。外相をいはず。心品の捨家棄欲して無著なる事を上輩と説り。』

又云、法照禪師の云、『念即無念聲即無聲』と。されば名號は即名號なし。龍樹菩薩は爲衆說法無名字といへり。無名字とは是名號なり。又名號は壽の號なり。故に阿彌陀の三字を無量壽といふなり。此壽は無量常住の壽にして不生不滅なり。すなはち一切衆生の壽命

【彌陀を法界云云】法界の衆生を佛の壽命と爲し給へる佛身なれば法界の身と云ふなり。

【三賢十聖】三賢は十信、十行、十廻向。十聖は歡喜地なり。

【自力他力を絶し】自他の差別を泯絶して絶對の他力に歸するなり。【機法を絶す】機法の差別を泯絶して機法一體に成るなり。

なり。故に彌陀を法界身といふなり。

又云、無量壽とは、一切衆生の壽不生不滅にして常住なるを無量壽といふなり。これ則

所讚の法なり。西方に無量壽佛ありといふは能讚の佛なり。諸佛同道の佛なるが故なり。

又云、皆人の南無阿彌陀佛をこころえて往生すべきやうにおもへり。甚謂れなき事な

り。六識凡情をもて思量すべき法にはあらず。但し領解すといふは領解すべき法にはあ

ずと意得るなり。故に善導は三賢十聖弗測所闕と釋したまへり。

又云、十方三世の諸佛は不可思議功德と讚歎し、又大經には諸佛光明所不能及と説た

まへり。光明は智相なり。しかれば諸佛の源智も及ざる所なり。いかにいはんや凡夫の

妄智妄識をもて思量すべけんや。唯仰で信じ稱名するより外に意樂の智慧を求べからず。

又云、南無とは十方衆生なり。阿彌陀とは法なり。佛とは能覺の人なり。六字をしばら

く機と法と覺との三に開して、終には三重が一體となるなり。しかれば名號の外に能歸の

衆生もなく、所歸の法もなく、能覺の人もなきなり。是則自力他力を絶し、機法を絶す

る所を南無阿彌陀佛といへり。火は薪を焼にたき盡れば火滅するがごとく、機情盡ぬれ

ば法も又息するなり。しかれば金剛寶戒章と云文には、南無阿彌陀佛の中には機もなく法

もなしといへり。いかにも機法をたてて迷悟をかば、病藥對治の法にして眞實至極の法

體にあらず。迷悟機法を絶し自力他力のうせたるを不可思議の名號ともいふなり。

又云、南無は始覺の機、阿彌陀佛は本覺の法なり。しかれば始本不二の南無阿彌陀佛な

り。

又云、一念も十念も本願にあらず。善導の釋ばかりにては猶意得られず。文殊の法照に授給ひしは、經に一念十念の文有といへども、一念十念の詞もなく、ただ念佛往生を仰べしと。云。念佛といふは南無阿彌陀佛なり。もとより名號即往生なり。名號の所には一念十念といふ數はなきなり。

又云、往生は初の一念なり。初の一念といふもなほ機に付ていふなり。南無阿彌陀佛はもとより往生なり。往生といふは無生なり。此法に遇ふ所をしばらく一念といふなり。三世截斷の名號に歸入しぬれば無始無終の往生なり。臨終平生と分別するも、妄分の機に就て談ずる法門なり。南無阿彌陀佛には臨終もなく平生もなし。三世常恆の法なり。出る息ある息をまたざる故に、當體の一念を臨終とさだむるなり。しかれば念念臨終なり。念念往生なり。故に回念念生安樂と釋せり。おほよそ佛法は當體の一念の外には談ぜざるなり。三世すなはち一念なり。

又云、有後心無淨心といふことあり。當體一念の外に所期なきを無後心といふ。所詮は待心の區なるを失ふべきなり。此風情日日夜夜の仰なりき。

又云、念佛三昧は無色無形不可得の法なり。功能なし。名號も能成の法なり。萬法は所成の法なり。故に法もすなはち三賢十地の萬行の智慧を熏成すと釋せり。彌陀の色相莊嚴のかざり皆もて萬善圓滿の形なり。極樂の依正二報は萬法の形なり。來迎の佛體も萬善圓

【當體の一念云云】天台にて介爾の一念に三千を具足すと談ずるも、華嚴にて心佛及衆生是三無差別と談ずるも、皆當體の一念の上を論ずるなり【待心】所期の心なり【彌陀の色相】如來の色相、光明のこと。

【依正二報】依報は極樂の山河大地衣服、飲食等のこと。正報は極樂の主たる佛身なり。【一座無移亦不動】一座とは色相莊嚴の佛なり。無移亦不動とは即ち彌陀眞實智慧無爲法身にして彼此往來なし。

【行者の待に云云】行者の風情を以て待によりて佛の來迎し給ふと思は儀事あり。

【一切の法】觀經所説の三福の業を指すなり。

【其故は名號云云】念佛廻向する時自力所修の萬善と名號所具の萬善と一味和して名號所具の萬善となりぬれば皆眞實の功德となるなり。

【名號が成ず云云】三福功德の當體は眞實の功德には非れども名號に成ぜられて眞實の功德

滿の佛なり。往生する機も亦萬善なり。萬善の外に十方衆生なし。一座無移亦不動とは、念佛三昧すなはち彌陀なり。彼此往來なし。無來無去不可思議不可得の法なり。いかにも來迎の姿は萬善の法なり。諸行往生と云も實なり、諸行の外に機なし。往生は機こそすれ、諸行を本願といふこそ、無下に法の仔細をしらずしていふ事にてあれ。

又云、行者の待によりて佛も來迎したまふとおもへり。たとひ待えたらんとも、三界の中の事なるべし。稱名の位が即まことの來迎なり。稱名即來迎と知ぬれば、決定來迎あるべきなれば、却て待るるなり。およそ名號の外はみな幻化の法なるべし。

又云、一切の法も眞實なるべし。其故は名號所具の萬法と知ぬれば、皆眞實の功德なり。これも功德の當體が眞實なるにもあらず。名號が成ずれば眞實になるなり。功德といふは出離の要道にあらず福業なり。故に觀經には萬法をつかねて三福の業と説り。正囚正行といふ時は名號と一味するなり。

又云、大經に住空無相無願三昧と説り。此即名號なり。我等は無相離念の觀法もならず。自性無念のさとりもならず。底下愚縛の凡夫なれども、身心を放下して唯本願をたのみて一向に稱名すれば、是即自性無念の觀法なり。無相離念の悟なり。これを觀經

には廓然大悟、得無生忍と説り。およそ名號に歸しぬれば、功德として不足なし。是を無上功德ととき、これを他力の行といふなり。

又云、罪といひ功德といふこと、凡夫淺智のものまたく分別すべからず。空也の釋に云、

となれるなり。
【正因正行】三福
九品の諸行も念佛
回向すれば、念佛
に成ぜられて名號
と一味と成りて往
生極樂の正因正行
といはるるなり。
【無相離念】妄念
を遠離して境界相
無きを云ふ。
【自性無念】自性
清淨にして本來無
念なるを云ふ。

「智者の逆罪は變じて成佛の直道となり、愚者の勤行はあやまれば三途の因業となる。」と云
しかれば愚者は功德とおもへども、智者の前には罪なり。愚者は罪とおもへど、智者の前
には功德なり。微微細細なり。我等愚癡の身のいかでか分別すべきや。なに況や善惡の二
道はともに出離の要道にあらず。ただ罪をつくれれば重苦をうけ、功德を作れば善所に生ず
る故に、止惡修善をしゆるばかりなり。しかれば善導は罪福の多少をとはずと釋したま
へり。所詮罪と功德との沙汰をせず、なまざかしき智慧を捨て、身命をおします。偏に稱
名するより外には餘の沙汰有べからず。
又云、善惡の二道は機品の品なり。顛倒虛假の法なり。名號は善惡の二機を攝する眞實の
法なり。
又云、有心も生死の道、無心は涅槃の城なり。生死をはなるといふも心をはなるとい
ふなり。しかれば淨土をば無心領納自然知ともいひ、未藉思量一念功とも釋し、或は無
有分別心ともいふなり。分別の念想おこりしより生死は有なり。されば心は第一の怨なり。
人を縛して閻羅の所に至らしむと。云。
又云、佛法を修行するに近對治遠對治といふことあり。近對治といふは、臨終正念にし
て、妄念をひるがへし一心不亂なるを云り。遠對治といふは、道心者はかねて惡縁ひとつ
もなくすつるなり。臨終にはじめて捨ることはかなはず、平生の作法が臨終に必現起す
るなり。故に善導は「忽爾に無常の苦來逼すれば、精神錯亂して始めて驚忙す。萬事に生

せば皆捨離して、専心に發願して西方に向へ。」と釋せり。

又云、苦をいとふといふは、苦樂共に厭捨するなり。苦樂の中には、苦はやすくすつれども、樂はえすてぬなり。樂をすつるを厭苦の體とす。その所以は樂の外に苦はなきなり。しかれば、善導は、是れ樂と言ふと雖も然も是れ大苦なり。必竟じて一念眞實の樂有るこ
と無し、と釋せり。或は、總じて勸む此人天の樂を厭ふことを、と釋せり。されば樂の外に苦はなき故に、樂をいとふを厭苦といふなり。

又云、三界は有爲無常の境なるが故に、一切不定なり。幻化なり。此界の中に常住ならんとおもひ、心やすからんと思はんは、たとへば漫漫たる波のうへに、船をゆるかつてをかむとおもへるがごとし。

又云、一念彌陀佛即滅無量罪現受無比樂後生清淨土といふ事。無比の樂を世の人の世間の樂なりとおもへるはしからず。これ無貪の樂なり。其故は決定往生の機と成ぬれば、三界六道の中にはうらやましき事もなく、貪すべき事もなく、生生世世流轉生死の間に皆受てすぎ來れり。然れば一切無著なるを無比樂といふなり。世間の樂はみな苦なれば、いかでか佛祖の心愚にして無比の樂とは曰ふべきや。

又云、樂に體なし、苦のやむを樂といふ。苦に體なし、樂のやむを苦といふなり。

又云、心の外に法を見るを名づけて外道といふこと、心の外に境を置いて念をおこすを迷といふなり。境を滅して獨一なる本分の心は妄念なし。心鏡各別にしてふたつとおもひし

より生死には流轉するなり。これに種種のたとへありと日日夜夜の仰なり。されば惡縁惡境を捨果すべきなり。

又云、心外に境を置いて罪をやめ善を修する面にては、たとひ薩劫をふるとも生死をば離るべからず。いづれの教にも能所の絶する位に入て生死を解脱するなり。今の名號は能所體の法なり。

又云、生ながら死して靜に來迎を待べしと。云。萬事にいろはず一切を捨離して孤獨獨一なるを死するとはいふなり。生ぜしもひとりなり。死するも獨なり。されば人と共に住するも獨なり。そひはつべき人なき故なり。又わがなくして念佛申が死するにてあるなり。わが計ひをもて往生を疑ふは、總じてあたらぬ事なり。

又云、念佛の下地をつくる事なかれ。總じて行ずる風情も往生せず。聲の風情も往生せず、身の振舞も往生せず。心のもちやうも往生せず。ただ南無阿彌陀佛が往生するなり。

又云、聞名欲往生といふこと。人のよ所に念佛するをきけば、わが心に南無阿彌陀佛とつかぶを聞名といふなり。しかれば名號が名號を聞なり。名號の外に聞べきやうのあるにあらず。

又云、我みづから念佛すれども南無阿彌陀佛ならぬ事あり。我體の念を本として念佛するは、これ妄念を念佛とおもへばなり。又口に名號をとなふれども、心に本念あれば、いかに本念こそ臨終にはあらはるれ、念佛は失するなり。然れば心に妄念をおこすべから

【名號が名號を云云】機法一體になりぬれば能聞の機も南無阿彌陀佛、所聞の法も南無阿彌陀佛なれば名號が名號を聞くなり

す。さればとて一向に餘念なかれといふにはあらず。

又云、從是西方過十萬億佛土といふ事。實に十萬億の里數を過るにはあらず。衆生の妄

執のへだてをさすなり。善導の釋に、竹膜を隔つるに、即ち之を千里に踰ゆとおもへり、と

いへり。ただ妄執に約して過十萬億と云。實には里數を過る事なし。故に經には阿彌陀佛

去此不遠と説り。衆生の心をさらすといふ意なり。凡大乘の佛法は心の外に別の法なし。

ただし聖道は萬法一心とならひ、淨土は萬法南無阿彌陀佛と成ずるなり。萬法も無始本有

の心徳なり。しかるに我執の妄法におほはれて其體あらはれがたし。今彼の一切衆生の心

徳を願力をもて南無阿彌陀佛と成ずる時衆生の心徳は開くるなり。されば即心の本分な

り。是を去此不遠ともいひ、莫謂西方遠唯須十念心ともいふなり。

又云、まよひも一念なり。さとりも一念なり。法性の都をまよひ出しも一心の妄心なれ

ば、まよひを翻すも又一念なり。然れば一念に往生せずば無量の念にも往生すべからず。

故に一聲稱念罪皆除ともいひ、一念稱得彌陀號至彼還同法性身とも釋するなり。ただ南

無阿彌陀佛がすなはち生死を離れたるものを、これをとなへながら往生せばやくとおも

ひ居たるは、飯をくひく、ひだるさやむる藥やあるとおもへるがごとしと。これ常の御

詞なり。

又云、およそ一念無上の名號にあひぬる上は、明日までも生て要事なく、すなはちとく

死なんこそ本意なれ。然るに娑婆世界に生て居て、念佛をばおほく申さん。死の事には死

【證利】 證驗利益のこと。

なしと思ふ故に、多念の念佛者も臨終をし損ずるなり。佛法には身命を捨ずして證利を得る事なし。佛法にはあたひなし。身命を捨るが是あたひなり。是を歸命と云なり。
又云、衣食住の三は三惡道なり。衣裳を求めざるは畜生道の業なり。食物をむさぼりもとむるは餓鬼道の業なり。住所をかまふるは地獄道の業なり。しかれば三惡道をはなるべきなり。

【三業】 身、口、意のこと。
【四儀】 行、住、坐、臥のこと。

又云、信といふはまかすとよむなり。他の意にまかする故に人の言と書り。我等は即法にまかすべきなり。しかれば衣食住の三をわれと求る事なかれ。天運にまかすべきなり。空也上人の云、「三業を天運に任せ、四儀を菩提に讓る。」と云。是則他力に歸したる色なり。古湛禪師の云、「煩しく破を轉ずること勿れ、只天然に任せよ。」といへり。
又云、本來無一物なれば、諸事において實有我物のおもひをなすべからず。一切を捨離すべしと云。これ常の仰なり。

又云、臨終念佛の事。皆人の死苦病苦に責られて、臨終に念佛せでやあらむすらむとおもへるは、是いはれなき事なり。念佛をわが申がほに、かねて臨終を疑ふなり。既に念佛申も佛の護念力なり。臨終正念なるも佛の加祐力なり。往生においては一切の功能皆もて佛力法力なり。ただ今の念佛の外に臨終の念佛なし。臨終即平生となり。前念は平生ととなり、後念は臨終と取なり。故に恆願一切臨終時と云なり。只今念佛申されぬ者が臨終にはえ申さぬなり。遠く臨終の沙汰をせずして能く恆に念佛申へきなり。

法華を出世の懐に諸佛世尊は唯一大事に因縁を以ての故に世に出現すと。諸法實相の理は諸法を指すなり。

又云 名號 には領せらるるとも、名號を領すべからず。およそ萬法は一心なりといへども、

みづからその體性をあらはさず。我目をもてわが目を見る事を得ず。又木に火の性有とい

へども其火その木をやく事をえざるがごとし。鏡をよすれば我目をもて我目を見る。これ

鏡のちからなり。鏡といふは衆生本有の大圓鏡智の鏡、諸佛已證の名號なり、しかれば名

號の鏡をもて本來の面目を見るべし。故に觀經には如執明鏡 自見面像と説けり。又別

の火をもて木をやけば 則 やけぬ。今の火と木中の火と別體の火にはあらず。然れば萬法

豊かならず因縁和合して成ずるなり。其身に佛性の火有といへども、われと煩惱の薪を燒

滅する事なし。名號の智火のちからをもて燒滅すべきなり。淨土門に機を離れて機を擯す

るといふ名目あり。是をこころえ合すべきなり。

又云、名號は諸佛已證の法なり。されば釋には諸佛の覺他が彌陀となるといへり。

又云、法華と名號と一體なり。法華は色法。名號は心法なり。色心不二なれば、法華す

なはち名號なり。故に觀經には若念佛者、是人中芬陀利華ととく。芬陀利華とは蓮花なり。

さて法華をば薩達摩芬陀利經といへりと。云。

又云、或人問ていはく、「諸行は往生すべきやいなや、亦法華と名號といづれか勝れて候。」

と。云。上人答て云、「諸行も往生せばせよ、せずはせず。又名號は法華にをとらばを

れまさらばまされ。なまざかしからで物いろひを停止して、一向に念佛申ものを善導は人

中の上上人と譽たまへり。法華を出世の本懐といふも經文なり。又釋迦の五濁惡世に出世

【三寶滅盡】 證讚に、萬年に三寶滅し此經住すること百年、爾の時一念を聞かば皆彼に生ずることを得と云ふ文に依れり。三寶とは佛寶、法寶、僧寶なり。

【なやきて】 燒く勿れの意。

成道するはこの難信の法を説むが爲なりといふも經文なり、機に隨て益あらば、いづれも皆勝法なり。本懷なり、益なければいづれも劣法なり、佛の本意にあらず。餘經餘宗があればこそ此尋は出來れ。三寶滅盡のときはいづれの教とか對論すべき、念佛の外には物もしらぬ、法滅百歳の機になりて一向に念佛申べし。これ無道心の尋なり。」

又或人淨土門の流流の異義を尋申て、いづれにか付候べきと。云。上人答云、「異義のまちまちなる事は我執の前の事なり。南無阿彌陀佛の名號には義なし。若義によりて往生する事ならば、尤此尋は有べし。往生はまたく義によらず名號によるなり。法師が勸る名號を信じたるは往生せじと心にはおもふとも、念佛だに申さば往生すべし。いかなるゑせ義を口にいふとも、心におもふとも、名號は義によらず心によらざる法なれば、稱すればかならず往生するぞと信じたるなり。たとへば火を物につけんに、心にはなやきそとおもひ、口になやきそといふとも、此詞にもよらず念力にもよらず。ただ火者をのれなりの徳として物をやくなり。水の物をぬらすもおなじ事なり。さのごとく名號もをのれなりと往生の功德をもちたれば、義にもよらず心にもよらず詞にもよらずとなふれば往生するを、他力不思議の行と信するなり。」

又云、熊野の本地は彌陀なり。和光同塵して念佛をすすめたまはんが爲に神と現じたまふなり。故に證誠殿と名づけたり。是念佛を證誠したまふ故なり。阿彌陀經に西方に無量壽佛ましますといふは、能證誠の彌陀なり。

【年來淨土云云】上人十四歳建長四年より弘長三年までの十二年間筑紫太宰府聖達上人に從つて淨教を稟學し給へり。

【法の功能】念佛の名義功德なり。

【先勸大衆云云】發願歸は南無なり三寶は阿彌陀の名義功德なり。

【附屬】流通附屬の意。

又云、我法門は熊野權現夢想の口傳なり。年來淨土の法門を十二年まで學せしに、すべて意樂をならひろしなはず。しかるを熊野參籠の時御示現にいはく、心品のさはくり有べからず。此心はよき時もあしき時も迷なる故に、出離の要とはならず。南無阿彌陀佛が往生するなりと。云。我此時より自力の意樂をば捨果たり。是よりして善導の御釋を見るに、一文一句も法の功能ならずと云事なし。玄義のはじめ先勸大衆發願歸三寶といへるは南無阿彌陀佛なり。これよりをはりに至まで、文文句句みな名號なり。

又云、一代聖教の所詮はただ名號なり。其故は天台には諸教所讚多在彌陀と云、善導は是故諸經中廣讚念佛功能と釋し、觀經には持是語者即是持無量壽佛名と阿難に附屬し、阿彌陀經には難信之法と舍利弗に附屬し、大經には一念無上功德と彌勒に附屬せり。三經ならびに一代の所詮ただ念佛にあり。聖教といふは此念佛を教たるなり。かくのごとくしりなば、萬事をすてて念佛申べき所に、或は學問にいとまをいれて念佛せず。或は聖教をば執して稱名せざると。いたづらに他の財をかぞふるがごとし。金千兩まいらするといふ券契をば持ながら、金をば取ざるがごとしと常の仰なりき。

又云、伊豫國に佛阿彌陀佛といふ尼ありき。習もせぬ法門を自然にいひしなり。常の持言にいはく、知てしらがれとて愚痴なれと。此淨土の法門にかなへり。

又云、彼佛今現在世成佛、當知本誓重願不虛といへる。重願といふは、かさねたる願とよむなり。おもきとは讀べからず。彼佛今現在世成佛當地本誓といふは四十八願なり。重願

【指方立相】 袈婆世界より西方を指して極樂の境相を立つ。

【五種正行】 淨土の正行を五種に分類したるもの、讀誦、觀察、禮拜、稱名、讚歎供養なり。

【福慧】 布施、持戒、忍辱、精進、靜慮、智慧にして、前の五を福、後の一を慧としたるなり。

【禪念】 六度の中の一の禪定(靜慮)智慧を指すなり。

不虛といふはかさねたる念佛往生の願なり。一一願言と釋するも此意なり。又云、夢と現とを夢に見たり。弘安十一年正月二十一日夜の御夢なり。種種に變化して遊行するぞと思ひたると夢にて有けり。覺て見れば少しもこの道場をばはたらかず。不動なるは本分なりと思ひたれば、これも又夢也けり。此事夢も現も共に夢なり。當世の人の悟ありと氣匂はこの分なり。まさしく生死の夢覺されば此悟は夢なるべし。實に生死の夢をさまさんずる事は、ただ南無阿彌陀佛なり。

又云、菩提心論にいはいはく、『筏に遇うて彼岸に達すれば、法已に捨つ應し。』極樂も指方立相の分は法已應捨の分なるべし。

又云、三業起行皆念佛といふ事。禮拜意念等の體をおさへて、すなはち念佛といふにはあらず、手に念珠をとれば口に稱名せざれども、心にかならず南無阿彌陀佛ととのふ。身に禮拜すれば心に必ず名號を思ひ出らる。經をよみ佛を觀想すれば名號かならずあらはるるなり。是を三業即念佛ともいふ。讀誦等を五種の正行といふもよく是を分別すべし。

又云、「或は福慧雙べて障を除くと教ゆ」といふは眞言なり。「或は禪念坐して思量せよと教ゆ」といふは宗門なり。靜遍の續選擇にかくのごとくあてたり。「念佛して西方に往くに過るは無し」といふは、諸教に念佛はすぐれたりといふなり。他力不思議の故なり。又云、當麻の曼陀羅の示現に云、日來の功は功にあらず。徳は徳にあらず。云。善惡の諸法これをもて意得べきなり。當體の南無阿彌陀佛の外に前後の沙汰有べからず。云。善惡の

【當麻曼陀羅】和州當麻寺にて中將法如の感得し給ひし極樂淨土曼陀羅なり。

【名號酬因】稱名往生の因願に酬ひたる報佛の功德に約するなり。

【十界差別】淨穢不二、生佛一如なり。

【大地の念佛】名號は即ち法界身に於て、十方衆生の所依となること、譬へば大地の山河草木等の所依となるが如し。

又云、聖衆莊嚴即現在彼衆、及十方法界同生者是といふ事。名號酬因の功德に約する時と十界の差別なく、娑婆の衆生までも極樂の正報につらなるなり。妄分に約する時は淨穢も各別なり。生佛も差別するなり。

又云、少分の水を土器に入れたらば則ちかはくべし。恆河に入れば一味和分してひる事あるべからず。左のごとく命濁中天の無常の命を不生不滅の無量壽に歸入しぬれば、生死ある事なし。人師の釋にいはいはく、「花を五淨によすれば風日にもしほまず。水を靈河に附すれば世早にも竭ることなし」と云。

又云、名號の外には總じてても我身に功能なし。皆誑惑と信するなり。念佛の外の餘言をば皆たはごととおもふべし。是常の仰なり。

又云、大地の念佛といふ事は、名號は法界酬因の功德なれば、法を離れて行べき方もなし。これを法界身の彌陀ともとき、是を十方諸佛國、盡是法王家とも釋するなり。

又ある人問云、「上人御臨終の後御跡をばいかやうに御定め候や。」上人答云、「法師のあとと跡とす。跡をとどむるとはいかなる事ぞわれしらす。世間の人のあととはこれ財寶所領なり。著相をもて跡とす、故にとがとなる。法師と財寶所領なし、著心をはなる。今法師が跡とは一切衆生の念佛する處これなり。南無阿彌陀佛。」

又上人空也上人は吾先達なりとて、彼御詞を心にそめて、口ずさびたまひき。空也の御詞に云、「心に所縁無ければ日の暮るに隨つて止み、身に所住無ければ夜の明るに隨つて去

【心に諸縁を遠離し】諸の妄縁妄境を離るるなり。
【十重の戒珠】十重禁戒のこと。殺、盜、姦、妄、酤酒、説過讚、毀慳、謗三寶戒。

【客人の有けるが】其座に在りし客人がの意。

る。忍辱の衣厚くして杖木瓦石に痛ず、慈悲の室深くして、罵詈誶を聞ず。口を信じて三昧市中是れ道場なり。聲に隨つて見佛息精即念珠たり。夜夜佛の來迎を待ち、朝朝最後近づくと思ふ。三業を天運に任せて、四儀を菩提に讓る。又云、名を求め衆を領して身心疲る。功を積み善を修して希望多し。孤獨は境界無きに如かず。稱名は萬事を抛つに如かず。間居隱士貧を樂と爲し、禪觀幽室靜を友となす。藤衣紙衾は是れ淨服にして求め易く更に盜賊の怖無し。上人是等の法語によりて、身命を山野に捨て、居住を風雲にまかせ、機縁に隨ひて徒衆を領したまふといへども、心に諸縁を遠離し、身に一塵をもたかへず。絹帛の類を膚にふれず。金銀の具を手に取り事なく、酒肉五辛をたちて、十重の戒珠をみがきたまへりと。云。

又上人筑前國にてある武士のやかたにいらせたまひければ、酒宴の最中にて侍りけるに、家主装束ことにひきつくるひ、手あらひ口すすぎておりむかひ、念佛受けて又いふ事もなかりければ、上人たち去たまふに、俗の云やうは、「此僧は日本一の誑惑の者や。なんぞ貴き氣色ぞ。」といひければ、客人の有けるが、「さてはなにとして、念佛をば受給ふぞ。」と申せば、念佛には誑惑なき故なりとぞいひける。上人の云く、「おほくの人に逢ひたりしかども、是ぞまことに念佛信じたるものとおほへて餘人は皆人を信じて法を信ずる事なきに、此俗は依法不依人のことはりをしりて涅槃の禁戒に相かなへり。珍しき事なり」とて、色色ほめたまひき。

【上人鎌倉に到る】
弘安五年三月朔日
なり。

又上人鎌倉にいたりたまふ時、故ありて武士かたく制止していれたてまつらず。殊さらに誹謗をなし侍りければ、上人云、「法師すべて要なし。ただ人に念佛をすすむるばかりなり。汝等いつまでかながらへてかくのごとく佛法を毀謗すべき、罪業にひかれて冥途におもむかん時は、念佛にこそたすけられ奉べきに」と。武士返答もせずして上人を二杖まで打奉るに、上人はいためる氣色もなく、「念佛勸進を我いのちとす。然るをかくのごとくいましめられれば、いづれの所へか行べき。ここにて臨終すべしと曰へり」と云。
又或人紫雲たち華降りけるを疑をなしてとひ奉りければ、上人答云、「華の事は華にとへ、紫雲の事は紫雲にとへ、一遍はしらず」と。

又尾州の甚目寺にて七箇日の行法を修したまひけるに、供養の力つきて寺僧等なげきあひければ、上人云、「志あらば幾日なりともとどまるべし。衆生の信心より感ずれば其志を受るばかりなり。されば佛法の味を愛樂して禪三昧を食とすといへり。もし身のために衣食を事とせば、またく衆生利益の門にあらず。しばらく在家にたちむかふと。これ隨類應同の義なり。努努歎たまふ事なかれ。我と七日を満すべし」と。

又上人は勢至菩薩の化身にておはしますよし唐橋法印靈夢の記を持參られければ、上人云、「念佛より詮にてあれ。勢至ならずば信すまじきか」といませしめたまふ。

又御往生の年の五月の頃、上人云、「機縁すでにうすくなり、人人教誡をもちひず。生涯涸いくばくならず。死期ちかきにあり」と云。

又御往生のまたごわうじやう前ぜん月げつ十日じふにちの朝あさ阿彌陀經あみだきやうを誦よみみて、御所持ごしよちの書籍等しよせきとうを手てづから燒捨やきすてたまひて、
「二代いちだいの聖教しやうかう皆盡みなつきて、南無阿彌陀佛なむあみだぶつになりはてぬ」と仰おほせられける。

又御往生またごわうじやうの前まへ、前後遺誡ぜんごゆいの法門ほふもんをしるさせたまひて、重かさねて示しめして云いはく、「わが往生わうじやうののち身みを海底かいていに投なぐるもの有あるべし。安心あんじん定じやうりなばなにとあらんとも相違さうわあるべからずといへども、我執盡がしよつきずしては然しかるべからざる事ことなり。受難うけがたき佛道ぶつだうの身みをむなく捨すてん事こと淺あはましき事ことなり」と云いふ。

又御往生またごわうじやうのまへ、人人最後ひとひとさいごの法門ほふもん承うけらんと申しければ、上人しやうにん云いはく、「三業さんごふの外ほかの念佛ねんぶつに同どうずといへども、ただ詞ことばばかりにて義理ぎりをも意得こころえず。一念發心いちねんはつしんもせぬ人ひとどもの爲ためとて、他阿彌陀佛あみだぶつ、南無阿彌陀佛なむあみだぶつはうれしきか」とのたまひければ、他阿彌陀佛たあみだぶつ落涙らくなみしたまふと云いふ。

又御往生またごわうじやうのまへ、正應二年八月九日しやうおんににんはつにちよう紫雲むらさきぐものたち侍はべるよしを啓けいし奉たてまつりければ、上人しやうにん云いはく、「さては今明こんみやうは臨終りんじうの期ごにあらざるべし。終焉しゆうえんの時ときはかやうの事ことはいささかもあるまじき事ことなり」と。上人常しやうにんつねの仰おほせにも、物ものもおこらぬ者ものは、天魔心てんまこころにて變化へんげに心こころをうつして、眞まことの佛法ぶつぽふをば信しんぜぬなり。何なにも詮せんなし。ただ南無阿彌陀佛なむあみだぶつなりとしめしたまひぬ。

又上人またしやうにん云いはく、「わが門弟子もんてしにおきては、葬禮さうれいの儀式ぎしきをととのふべからず。野のに捨すて獸けものにほどこすべし。但在家ただしやうにんの者結縁ものけちえんのところさしをいたさんをばいろふにおよばず」
又或人またあるひとかねて上人しやうにんの御臨終ごりんじうの事ことをうかがひたてまつりければ、上人しやうにん云いはく、「よき武士ぶしと道だう者じやとは死しする御事ごんじをあたりにしらせぬ事ことぞ。わがをはらんをば人ひとのしるまじきぞ」と曰のたまひ

しに、はたして御臨終その御詞にたがふ事なかりき。

一遍上人語録卷下 終

附録

上人わかかりしとき、御夢に見たまひけるとなん、

世をわたりそめて高根のそらの雲たゆるはもとのころなりけり

熊野權現より夢に授けたまひし神詠、

ましへ行道にないりそくるしきに本の誓のあとをたつねて

大隅正八幡宮より直授の神詠、

十こと葉に南無あみた佛となふれはなもあみた佛に生れこそすれ

淡路國しつきと云所に、北野の天神を勸請し奉る社有けるに、上人をいれ奉らざり。

されば忽社檀より顯したまひける神詠、

世にいつることもまれなる月影にかかりやすらんみねのうき雲

【當書八卷他阿彌陀佛眞教の撰。全篇の遺文は全て時宗の安心淵府、往生の大要を明すなり。

【法性無相】 諸法の體性の執著を離れたる境界、即ち眞如のこと。

【三界】 一切衆生の生死輪廻する世界を三種に分つ。欲界、色界、無色界

【六道】 地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上。

【阿鼻】 梵音アキイチ(Avici)無間と譯す。八熱地獄の最下なり、無間地獄と云ふ。

【五衰】 欲界等の有相の天衆が、壽命盡きて命終せんとする時、五の異相を生ず。衣服垢穢、頭上華萎、身體臭穢、腋下汗流、不樂本座。

【有漏】 無漏の對なり。漏は煩惱の異名にして、未だ

他阿上人法語

卷第一

道場制文

夫れ以れば、法性無相の本源は、生死の大海に流出す。唯男女愛執の一念は、流轉三界の妄業にして、六道の嶮阻に輪廻す。是れ自身著我の迷識なり。沈む者は即ち身を阿鼻の泥梨に入れ、湯火焚燒の患苦止む時無し。浮ぶ者も亦心を有頂の快樂に駐め、五衰退没の悲歎猶忍び難し。生を惜む者は必ず死に歸するの時、思はざる方に移され、惡趣に赴く。死を願はざる者は死無し。死無くして亦生を得ず。生を得ずんば生死無し。生死無き、之を無生と名く。樂を求むる者は必ず苦に歸するの時。此苦は輪廻不退の苦なり。苦を願はざる者は苦無し。苦無く又樂を求めず。樂を求めざれば、苦樂無し。苦樂無き、之を無爲樂と爲す。胎卵濕化の四生、品品に異類の質を感得し、各六趣に廻入す。悲しい哉。父母の愛結を受繼して、人形を成じ、猶本の業因を立還して、愛著に繫縛せらる。近者は妄に侵さるべく、遠者は面影避け難し。男は女質を遠離し、女は男意に従はざるに如かず。秋の鹿は笛に寄りて身を取られ、夏の蟲は火の爲に命を亡ふ。是れ皆男女愛執の過なり。朝日は山端に隠れて、時を留めざるの影は不覺にして遷る。幼稚の質は八旬の齡を傾け、空しき跡は年を數ふるも甲斐無し。無常轉變有漏の報は明日を期すべきの憑無し。釋尊は

煩惱を斷盡せざるを云ふ。須彌四洲の南閻浮提人生存の世界を云ふ。【無爲泥洹】寂滅無爲の法性を全うし、眞理に隨順して顯現せる佛世界をいふ。

假の姿を示して滅度を南浮に唱へ、無爲泥洹に歸したまふ。諸佛は菩提道を修入して、斷惑證理の教を説き、衆生をして惡趣に還らしめず。我等適發心して此一事を願はざる者は、出家修道の名を得。心とは名利と相應し、佛日景を宿さず。衣とは度世の姿を爲して、畜生の皮を被るものなり。今度往生を遂げざる者は寶の山に入りて手を空するが如し、早く回心發心して佛願に乗ずべし。三心とは金剛心、金口誓、身命を知識に讓るの南無の當體是なり。法とは阿彌陀の係誓したまふ所の佛是なり。制戒を破らず衆中を出でざるの願とは無始生死の業識を光中に納め、心を心に住せざるなり、輪廻此に斷絶す。即ち機法不離とは常に佛の護念したまふ所なり。然れば時衆に入る所の金は、即ち三心たるの間、例を他所に尋ねべからず。修行の初、弘安二年より、嘉元四年九月に至り、往生を遂ぐる僧尼二百七十五人なり。此内往生せざる者は七人なり。制戒を破り乍ら回心向大ならざるの故なり。今日より未來際を盡し、此下に始まり。處處道場の僧尼、制戒を破せず、命終に至るまで、稱名念佛懈らざれば、必ず往生を遂ぐべし。之を用ひざるの輩は一室同座するを止めて、衆中に追出すべし。仍りて魔界を避け、本願に相應し、決定往生の爲に示す所なり。

嘉元四年九月十五日

他阿彌陀佛

他阿彌陀佛同行用心大綱

【三寶】佛寶、法寶、僧寶。

草庵を厭捨して、露命を惜まず
出家心を守りて、在家に歸らず
神明を輕ぜずして、三寶に歸敬し
恆に地獄に墮するも、誓つて永く破せず
信人を伴と爲し、謗人をも背かず
道理は他に任せ、僻事領納せよ
命を輕ずること塵の如くに、臨終を延さず
稱名は生に憑り、心に深信有り
身に佛を禮敬して、口に常に念佛せよ
出家の機に付するは、念佛行者なり
本願唯南無阿彌陀佛

往生淨土和讚

吾等が此身のはかなさを
枯ゆく草にをく露の

思ひとくこそうかりけれ
化なるよりも憑みなし

【輪廻の業】 三界六道に車輪のめぐるが如く、迷の生死を重ぬる業因。

【むすびけり】 決疑録には、むすびけるなり、とあり。【なせる心ぞ】 決疑録には、心は、とあり。

【濁世】 五濁悪世五濁の相現れて、悪事繁き世の中を云ふ。劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁なり。

【三達】 阿羅漢果の聖者の有する三種の智明。宿住智證明、死生智證明、漏盡智證明なり。

命をものにたぐふれば

蟲の恨の聲までも

月日のつもるかすごとに

しらで過にし昔とは

かゝるはかなき身のうへを

朝ゆふものにつながれて

夜晝つもるつみはみな

はしり走りていとなみを

過去無数の生死の囚

未來無窮の迷ひの

生を濁世に受ながら

にごれる水に月影の

迷ふ心をしらすして

砂をあつめてあぶらを

佛は三達の長者にて

もとの佛性悟りえて

菩薩は十地已滿の

秋のすゑ野によはるなる

よその憂ひとおもはれず

命のとも消ゆくを

むなしき跡の名なりけり

思ふ心にともなひて

輪廻の業をぞむすびけり

あり果ぬ身をたすけんと

なせる心ぞはたしける

今現在の果となれり

いつかは盡る期なるべき

心のすまぬことはりは

やどるまじきがごとくなり

ほとけを得んと求めんは

しぼらんとするに異ならず

衆生本來生死なき

正覺を成じたまひにき

法體まどかに具足して

【法藏】彌陀の因位の名、國王より發心出家して沙門となり、世自在王佛の所に於て、四十八願を建てたる比丘。
【御名】南無阿彌陀佛の六字名號を云ふ。

【謗法】佛法を謗する。
【無信】名號のいはれを聞信せず。
【八難】佛を見ず正法を聞くを得ざるを難と云ふ。在地獄難、在畜生難、在餓鬼難、在長壽天難、在北鬱單越洲難、盲聾瘡癩難、世智辯聰難、生佛前佛後難。

悲智ならべてかけざれば
戒定智慧の三學と

その理にまよへる我等が

此度出離の縁もなき

ちかひて佛になりたまふ

諸佛の加被を蒙りて

しかるを念佛する人も

他力に歸せざる故にこそ

有心は平生なりければ

しかれば臨終平生は

南無となふる一聲は

阿彌陀佛と稱するに

兼て最期を知ざれば

悟れる智者はをのづから

善導和尚の解釋には

凡夫と示して本願に

謗法無信八難の

不退の位に居し給ふ

詞ばかりにさへづりて

未來の生處ぞ恐しき

衆生のために法藏の

御名をとなへば六方の

かならず淨土に生ずべし

自力の徳にほだされて

往生の期もなかりけれ

稱念のうちに臨終あり

ふたつなしとぞ知れける

歸命の一念なりければ

六字のうちに往生す

念々すなはち臨終と

念佛相續をこたらず

機をば出離の縁もなき

歸せしむるこそ巧みなれ

罪根ふかきともがらに

【三業】 身、口、意。
【報土】 報身佛の住する眞實報土をいふ。

【機法】 法を信ずる衆生と、衆生に信ぜらるる救済の力とをいふ。
【五逆】 無間地獄に墮する因なり。即ち殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血。
【闡提】 本來解脱の因を缺きて、到底成佛する能はざるもの、無性有情のこと。

我等が心をひとしめて

一心信樂弘願の

迷へる心の煩惱は

しらば和尚の内證を

菩提をえんと求めば

遠ざかりゆく心をば

三業所修の行ひとり

發願行を助けてぞ

凡夫發起の願ひとつ

行また願をたすけつつ

臨終平生ふたつなき

南無阿彌陀佛と歸せん人

他力不思議の名號は

十聲一聲となふれば

すでに終りに臨みなば

ととなへて命つきんとき

すはなち淨土に生れては

潤もなき身としれば

往生の機とぞなりにける

打ども去ぬ家の犬と

纒にもなど得ざるべき

山のかせきの招く手に

つなぎとゞめん便なし

報土に生じがたければ

定めて佛意にかなふべき

淨土に生れがたければ

願行所謂を剋すなり

機法相應の本願に

争か往生遂つらん

五逆闡提破戒まで

必往生うたがはず

たゞひとすぢに阿彌陀佛

臺のうへに乗すべし

佛の説法聽聞し

心の花のひらくれば

まさに諸法を悟りては

親より疎に及ぶまで

御法はやすくさとられぬ

娑婆の恩所に立むかひ

利益廣大無邊なり

消息法語 取要

江州小藏の律師、往生淨土の安心たづねまうされければ、書てしめしたまふ御返事

【四生】胎生、卵生、濕生、化生。

【穢土】汚濁不淨なる國土。この三界六道の苦界をいふ。

夫三界は衆苦の住處、身はすなはち苦のあるじなり。財寶は煩惱の所依心、又欲のみなもとなり。六道四生のとぼそを出ずしては、いかでか四苦八苦の家をいとはん。こゝろを花にとゞむれば、名残を木のもとに残し、またこん春を待て、輪廻こゝにたえず。おもひを月にかくれば、面影に夜の雲を厭ひ、とゞまらぬ秋をおしみて、妄愛いよく深し。衆生輪廻の迷ひは、いつをか始とし、いつをか終りとせん。生を生のはじめとせんとなれば、生の初にもまどひぬ。死を死の終りとせんとなれば、死の終にもくらし。恩愛離別の歎の煙、こゝろのうへにおほへば、愁歎のほのほ、肝をこがさずといふことなく、生死到來のなしみ風の風、やまひの床にさはげば、無常の刀こゝろをきらずといふことなし。たましく穢土を厭離せんとすれば、その體を執して、その影を別れんとするがごとし。いづくにてか是をはなるべき。山また山の奥までも、ますく淨土を欣求せんとすれば、我身をわすれて、わが身をもとめんとするに似たり。いづくにてか是をねがひえん。西なを西のさかひ

【六方恒沙】東西南北上下の無数の諸佛。

【波旬】梵音パービーヤン(Papiyan) 惡、殺者と譯す。魔王の名。常に惡意を懷き、惡法を成就し、僧を擾し、人の慧命を斷つといふ。

【七難】火難、水難、羅刹難、刀杖難、鬼難、枷鎖難、冤賊難。

【九横】九種横死。食ふ能はずして、食す、食を量らず、食を習はず、出でざるに食す、熟を止む、戒を持たず、惡知識に近づく、避くべきを避けずこの九因に依りて死す。

までも、身は水のうへの泡の波にたゞよふよりも憑なく、命は空中のまぼろし、目をまじろがせばむなしきがごとし。しかじ業障の身命を、彌陀に廻向して本願の名號をとなへんには。稱念佛の行者をば、六方恒沙の諸佛も、ひかりをならべて護念し。信心決定の人をば、天魔波旬もいかりをひるがへして讚歎す。はやく一心に念佛して、畢命を期とすべし。

南無阿彌陀佛。

三祖上人へつかはさる御文

萬事私のはからひ有べからず。身命を佛に歸命して、知識の命にて利益のため、一切衆生にむかふうへは、善惡について、衆生の用事を請取ばかりなり。そのうへはみづから衆生を利益するにあらず。衆生の信心分々にしたがつて、利益せらるゝ理りにてあれば、一切のことについて、わづらひ有べからず。私の心をたてゝ、意巧をもてはからひをいださつれば、心のわづらひ、なにごとによてかおこり來るべき。此うへは外の境界によて、しばらく情識のさはくりは、利益衆生にむかふ。慈悲のすがたなれば、つねにものを思へども、心のやまひにあらず。さればまことの念佛の行者は、横死横病七難九横をのぞきて、現受無比樂後生清淨土なれば、縁にふるゝ衆生も、みな冥に加し、事にふれて、をのづから此徳をかうぶらしむるあひだ、たゞちに佛徳をうけとりて、かならず往生をとぐ。か

くのごとくなれば、利益衆生と名ずけたるなり。すみやかにもとの實有の情識を捨て、有爲無常のことはりを受得せらるべし。かくのごとくあらんには、たれか教導にかゝはらざる僧尼あるべきや。
南無阿彌陀佛。

同上人へ示し給ふ御文

知識の命によて、邊際をも知ざるつかひへ追出されぬるうへは、私の身命にあらざれば、去來を衆生に任せて、往返たゞ人の請に應ずべし。このうへは、自身の得解は、底下無善の凡夫、出離得道の縁なき罪人とひとしくして、ほとけの本願に乗すべければ、心にへだつるもの何事にか有べし。一切衆生をもこの領解に教訓す。されば三業身心の力量をいはず。また憑がたなくして、をのづから本願に歸すべし。されば善導和尚も、如是行者必不誤衆生と釋したまへり。

南無阿彌陀佛。

同上人へつかはさる御文

先度兩通のふみに、委細まうしつかはしをはんぬ。さだめて衆中にも、面々にみしり有らん人の、人界に生をうくるに、その體相は、別々なるに似たれども、佛性はかはる事なし。

【知識】 正法を説きて、人をして佛道に入らしめ、解脱を得せしむる人をいふ。

【遊行】遊行寺住職を指す。【ふみのうら】決疑録には、表とあり。

【心相言語】決疑録には、心想とあり。

【決定往生】決定して報身報土に往生すること。【往生をとげん】もをのをの【決疑録】には、往生の本意をとげんとも各とあり。

然れども知識のくらゐになりては、衆生の呼ところの名なれば、自今已後は量阿彌陀佛を捨て、他阿彌陀佛と號せらるべし。この名は一代のみならず、代々みな遊行かたにうけつぐべきなり。これへのふみのうら書には、本の名をかゝるとも、他所へのふみには、他阿彌陀佛とかゝるべきなり。南無阿彌陀佛。

同上人へつかはさる御文

原太郎歸るについて、返狀著岸のあひだ、かさねてしめしつかはす。面々心にたがふところの詞、各々所存にあひかなふところの振舞心相言語ともに、佛法にあらすといふことなし。しかるを適知識の室に入、身命を佛陀に歸すといへども、無始の串習によて、違順の境界にあひ、惡愛是非をなす。此念すなはち地獄鬼畜の重苦をうけ、此心すみやかに天魔波旬の惑亂をなす。よく思惟有べし。なを思慮あるべし。たとひ人こそ變改ありとも、知識とたのまれし、歸命の言、金剛の信心のかねをうち、佛陀に歸し奉りし志を、未來際をつくしてうけとりしかば、かくのごとく心をいだして、面々のもとへまうしつかはすなり。このうへはなを輪廻の苦をうけて、ながくしづむとも、今度決定往生をとげんとも、をのくが心たるべきなり。南無阿彌陀佛。

【安心】安は安置の義、法を心の中にすゑ置くこと。法に依り確信安住して動かざること【三塗】火塗（地獄）、血塗（畜生）、刀塗（餓鬼）。

同上 人へつかはさる御文

適人界に生を受けて、わづかなる命の中に、行法にもたへず。安心おさまらずして、ながき輪廻をうけ、めづらしからぬ六道生死にしづみ、三塗の重苦をうけんこと、なげきてもなをあまりあり。自今已後は、この理りを肝にしめて、往生の本望をとぐべきのよし、衆中に披露せらるべし。
南無阿彌陀佛。

同上 人へつかはさる御返事

僧尼等、ことにとまはらず、嫉妬讒言によて、實と不實と繁多なり。是によて信と不信とあひなかなばなり。たとひ實事ありといへども、面々にかれらが生死はなれしめん爲の、教誡にてこそあれ。しめて謂れなしとまうすべきことなし。其故に、生死の苦をはなれんとも、輪廻の業をつくらんとも、その人の好みなれば、まつたくほとけの掟識あることなし。自業自得果なれば、自の心中よりなすところの業因出現して、をの／＼好のまゝに、業果をうけんこと、ちからなき次第なり。それを知識氣色して、まことにかれがひがごとと、ふかく意趣をのこせば、我生死をはなれえぬ、我執愚癡の迷心を増長して、人我彼比の執情、或は魔界におち、或は惡道におもむくなり。よく／＼思慮あるべし。先度孤獨に

【我にあり】 決疑録には、以下二十字落脱あり、依つて今冠註になす。他は善惡の境界とこそなりたれ業は我にあり。とあり。【惡人にても】 決疑録には、にも、決

【皆ことば】 決疑録には、但他の言は、とあり。

なりぬといふ、みは、みな虚妄になる孤獨になりなんのちは、人の爲にこそ制戒のとほりなれば、一旦はいましむることなりとも、むねのうちにいさゝかも、他のわるき謂れをたぐはふべきか。人の善惡をおもふ心は、我にありと、こゝろえぬる人は、誰が爲なれば、我ものに意趣をのこすべきや。唯わが愛執の心も、さめやらぬあひだ、意趣をのこすなり。我業のものねたみにてありと、こゝろえらるべし。一分もたがふべからず。もし其義なきいはれを、すこしもおもはれば、魔界にたぶらかされたる心なるべし。但いかなる惡人にも、心はかはらざるものとさとりてこそ、人をへだつる心もよはり、惡業非法を行じたき心も、かなはざればこそ、それより本願にも歸し、生死をはなるべき信心もまことになれ。善惡につけて、人のいはんことばに、まことしき心をおこすべからず。たとへまことなりとも、みな妄法無常幻化のすがたに向ひて、實有のこゝろをおこすべきか。いましめのことば、ありとも、心中の自業をはらはるべし。そひつきたる尼どもは、我を損ぜんずるかたきと、こゝろえらるべし。まして謗せんにもなふべからず。生死はなるべきいはれを、いまだ覺悟せざるあひだ、かくのごとくしめしつかはすなり。たふとがりもてなせばとて、をぐるべからず。また人の謗毀すればとて、意趣をのこすべからず。皆ことばを請取て、たがへざれば、萬事につけてわづらひ有べからず。心は、わづらふとも、もとより愚癡のわれなればとて、おどろかされば、わづらへども、いよく本願こそ、たふとく、知識の恩徳こそ、かうばしくなれば、又わづらひもなし。

南無阿彌陀佛。

同上人へつかはさる御返事

無始よりこのかた、衆生のもとに我執、つきざれば、その心が遁世の名聞となりて、退屈したりなど、人にもいはれじ、おもはれじと、はづる心の有なり。無極の道心者と、未發心のものとは、この心をとがむべからず。智者はその思ひを捨て、我執をたをし、愚者は思ひしらずして闇々たり。されば人目人聞には、おなじ程に有べけれども、智者は生死をはなれ、愚者は輪廻をうく。無道心のものは、いたづらなる身の、只今死して土灰となる。この身をたすけんと、おもふころの、曠劫よりこのかた流轉して、惡道におち來るをもしらずして、知識の命をたがへて、佛智にもかなはねば、をのれが心の所望のまゝなれども、まさしくこのしたにても往生をとげねば、かつはこの教導のことばにも、符合して、みな心をひるがへすべし。槌つよければ、木すみやかにやぶるゝがごとく、衆生の所望なれば、このちからとほるべし。木をやぶることは、槌の強弱による。知識のことば、所化にとほるも、衆生の所望によるべきなり。

南無阿彌陀佛。

同上人への御端書

【曠劫】曠は遠なり多くの劫を重ねたる遠く久しき時間。

中國は、さらにはじめたるかたにてさふらへば、あひかまへて、いそぎたまはずして、一切衆生に、ふだをくばりたまひさふらへかし。

四祖上人へつかはさる御文

號阿彌陀佛これへ來るべきにてさふらひけるに、とどまるよし、御房達かたりまうしさふらふとほりに、本意にあひかなひ候なり。としごろにてもさふらふか、なまとしよりてさふらへば、身にそふてこそ、よろしくすべきにて、さふらひしかども、諸事につきて道場の助縁にも、なるものとおもひ候て、とどめられ候ものならん。自餘の御房達も、もておなじかるべきにて候。われくも、人々の請によりてこそ、こゝろならず獨作をもしてさふらへば、身は是にさふらへども、心は遊行にて候なり。自力の心にひかれて、これへ來りさふらはど、まつたく信心にても、又志にてもなくて、たゞをのれが來りたき妄心にひかれたるにてさふらへば、害心はをこりさふらへども、一切うれしとは思はず候。遊行にて身命をつくして、化儀をもたすけて、助縁とならん人にてこそ、護念に預りて往生も遂べきにて候へば、このよし衆中に御披露有べく候。再會極樂の同生を期したてまつ奉るべく候。あなかしこ。

南無阿彌陀佛。

十月四日

他阿彌陀佛

有阿彌陀佛

【よて無道心】決
疑録には、よく、
とあり。

【無爲】爲は爲作
造作の義本來常住
にして、何物にも
造作せらるること
なき法をいふ。

【かたましく】決
疑録には、まびし
く、とあり。

金銅の心阿彌陀佛へつかはさる御返事 のちに改名して淨阿彌陀佛と號す

依阿彌陀佛、追出さるゝのよし、まうしてきたるあひだ、ことの子細を尋るところ、所詮
恭敬の心なくして、狼藉なるあひだ、追出すとおぼゆ。よて無道心に往生の志なければ
こそ、かくのごとく切諫すらめ。たとひ心阿彌陀佛ならず、他人に向ひても、頸手足をき
らるとも、身命をおします、意趣をむすばざればこそ、われらが弟子分の時衆にても有べ
けれ。いさゝかも、をのれが心をひさげて、他人をへだて、道理をもて、僻事をはぐから
ざらんをいいては、ながく弟子分にあらず、衆中みなこの道理をこゝろえ信すべし、是ま
つたく人の爲にあらず、みづからの生死をはなれ、今度決定往生をとぐべき安心なるべし。
たゞ一切他に任せて、みづからはからひ行ぜざれば、違縁に逢ても適すべからず、順縁に
あひても著すべからず、かくのごとく違順ともに無爲なれば、善惡不二邪正一如なり、信
謗は衆生の心にあり。傾動は我損となるなり。堂舎を施入し、佛物を廻向すとも、施主の
心にまかせて、自身の徳とおもふべからず。しかれば名利慢心も、こゝにてやぶれぬべき
歟。自身をなきものになして、たゞ人のはからひにしたがはゞ、いかでかかたましく、わ
づらはしきことやあるべき。

南無阿彌陀佛

【たくらべず】比
較せざる意。

【誓ひばかりなり】
決疑録には、信心
の誓ひばかりなり
とあり。

【泥梨】奈落に同
じ、梵音ナラカ
(Narak) 地獄の
こと。

【これら體に】か
かる有様にての
意。

宇都宮與阿彌陀佛へつかはさる御返事

出家は身を人にたくらべず、孤獨の心をおこすべきなり。それ發心とは、心に我をもたずして自を境界に任するの姿なり。然るに衆生の識情萬端にして一准ならず。いかでか自のはからひによて、一切衆生のことを、おさむべきや。たゞともなふところのものは、往生の誓ひばかりなり。されば佛道の頭を取て、邪道の頭を取べからず。所誓の制戒をやぶるものは彼が自業自得果なれば、その惡道泥梨の業には、如何ともなふべきや。ともなはずんば、浮沈ともにかれが得失なれば、なによてか自のわづらひとなすべき。又信謗の境界は、願主あひともに、一切衆生おもひくにとなふ善惡のことば、善のこゑはこゝろよく惡のこと葉はわづらひおほし。この理をえたるほとけは、是を自然任運の聲に聞なし。これにまよふ凡夫は、善惡の心をおこして、惡道の因をなす。覺者は、名利なきのゆへにおどろかず。愚者は、これをあきらめざるのゆへに、境界にほださる。もとの凡夫性のこゝろは、わづらひなやめども、みな他の境界にあたへて、いろはずして、しかもさはぐるは、外用いろひながら、わづらふ心をわれになさずして、往生の信心動ぜざるは、内證これら體に、内外の信心眞實ならんにをいては、なによてか、佛法をも退屈すべく寺務をろそかなるべきや。人我の情をもて、境界の善惡をなすは、自身の我執なりと、こゝろえぬれば、萬事他に任せて、念佛の最頂にのぼる。かくのごときの物語、つねのこと

ばなりといへども、時刻到來すれば、たゞこの理りをうる一念のあひだ、しめしつかはすところなり。
南無阿彌陀佛。

同人への御返事

【機】 機發の義、即ち縁に遇ひて發動すべき可能性。教法の爲に激發せらるる心機。
【内證】 内心のさとりをいふ。
【惡癡妄見】 決疑録には、愚癡妄見とあり。

機の善惡を見ざるは、生死はなれたる内證。この内證をもて、しかも外相を綺はざるなり。その内證執心たるあひだは、佛法の内證にあらず。衆を勸化するは、慈悲のすがたなり。内證は智恵、外儀は慈悲なれば、をのづから悲智雙行す。綺ふべからずと知て、しかもいろはざるは、我執となる。いらふべしと知て、しかもいらふは、惡癡妄見の我執なり。たゞ他に任する折ふしの振舞、こゝろねは、とき聞すれば、愛心もいかりもその機のはからひなるべし。これにもれて、出離生死の信心を失ひて、人目に立程の無道心のやからをば、制文に任せて、衆中を追出さるべし。をのれが往生の志をうしなふほどの者をば、衆にまじへても、何の益かあるべきや。
南無阿彌陀佛。

尼崎時阿彌陀佛へつかはさる御文

あひかまへて、尼衆としたしからず、うとからず、自身の愛著をもちひずして、違順の境

【執我】人執ともいふ。我なるもの實在せりと思ふ執着のこと。【まぼる】まもる意。

【ものすさまじく】ものさびしくの意。

界をそむくべからず。徳をは三寶にゆづりて、執我の非をまぼるべし。むねのうちに佛をいだきて、外境の魔にともなふべからず。前車のくつがへるは、後車のいましめなり。あしき輪立を見ては、牛のはなをなすべきなり、南無阿彌陀佛。

山阿彌陀佛へつかはさる御返事

佛道は、はじめは信心もあり、面白くたふとくて、たゞいまも佛になるこゝちすれば、年月をかさぬれば、諸事につけて、ものすさまじく、ものうくなりもてゆくなり。然るを往生の信心ある人は、自業の心が、往生をさまたげん爲に、佛の中をたがへんとて、かくのごとくあるぞと、心得ぬれば、心はむかされども、はじめ發心して行ぜしあとを、すこしもたがへず、深く入とも退屈のこゝろにひかれざるとき、佛の護念に預りて、決定往生の人たるべし。もとの發心をわすれて、今の無道心の妄念にともなひて、やがて行法もすたれ、信心もをこたらば、天魔にたぶらかされて、當來にはかならず獄卒阿坊羅刹の手にかゝるべし。無道心ならん人にはそふとも、無道心ならん心にはしたがふべからず。かくのごとくあらば、天魔の手をはなれて、佛の護念に預るべし。又時衆どもの事は、もとより家を出て、われ／＼がもとに居て、往生の一大事を遂んと、おもはん程の者は、心の用事をつくし、身の名聞をすて、知識の命ばかりを頼みたらんに、何のゆへにかありにく

【の方にあり】
決疑録には、心の
方にはあり、とあ
り。

【心のありにくき】
心の満ち足ること
まれなるの意。

【よろこびも】決
疑録には、喜も憂
も、とあり。

きとも、ありよきともいふ川事を持べき。出家の方には、ありにくく、かすかなるすまゐ
こそ、佛道のすがたにてはあれ。さればこそ、大事に思ひ出し親をすて、子を捨、用事を
かなへし世間の得分をもすてけめ。心のありにくき、いとふべき境界にはあれども、願主
のあらするは、ちからおよばぬこそ、われはこのまねども、衆生にむきたる慈悲にてはあ
れ。心にかなはざらんかた、もとより出家のこのむところなれば、厭ふべき事なし。所詮
兎も角もあれ。願主の所望に隨ひて、知識のはからひをもて、つかはさる身なれば、それ
にて命をつくすよりほかは、別のみち有べからず。たゞ臨終まで、信心をうしなはずして
念佛せば、往生うたがひあるべからず。出離一大事をば、いかでかみづからのちからをも
て。たやすくとぐべき。ひとすぢに佛知識に任せて、念佛すべし。

南無阿彌陀佛。

江州小野唯阿彌陀佛へつかはさる御返事

何事につけても、いきたる身にてこそよろこびもあれ。身命を阿彌陀佛に奉りて、往生
の一大事より外は、此世にも後世にも、望なき身になりてんうへは、なにごとをも、佛知識に
なげあづけまいらせて、今は稱名をこたらずして、臨終をまつより外は、如何なる要か有
べき。要のなからんうへは、よきものもわるき人も、たゞをなじことなり。然りといへども、
蓮臺にのぼらんまでは、もとの凡夫の性かはるまじければ、よき人には、かたらはれ、わ

【さてこそ、心には随ひそとしらせしか】さればこそ、心には随ふこと勿れと知らせたるなりの意。

ろきものには、瞋恚のおこるは、尤理りなり。されども、みづからの心のおもはしきかたに著するは、輪廻の業、わが心のそむくかたに、悪心をませば、地獄の業となるあひだ、さてこそ、心には随ひそとしらせしか。かくの如く心得ぬ程こそ、三惡道のたねをもたくはへしか、今はこのいはれを知得てんうへは、往生の志あらんほどの者は、善惡ともに他に任せて、我こゝろの妄念を捨て、無始の業障滅して、よろこばしからんほどに、いかでか妄念にはほださるべき。よき人にそひてや。もしつながらるゝ事もとて、心はをかれんづらめ。わろからんものに向ひては、こゝろの知識となるあひだ、はらのたゝんときは、内心によるこばしくこそあらんづれ。さればいかなる處に住し、いかなる境界にあふともいつも知識にそひたるいはれにてこそあれ。此文のこゝろを能々こゝろえて、此度かならず往生の本意をとげば、衆生にむきても利益の心たるべし。

南無阿彌陀佛。

宇都宮與阿彌陀佛へつかはさる御返事

機々の生死をはなれ、往生の本望をとげん爲にこそ、出家發心して、知識に隨て今日まで在つれ。違順惑亂あらじと談義ありとも、この識情をひさげて、衆中違亂なしといへども、唯世間に身をたすけん爲に、人目をはかり心を慎みたる、誑惑のやからにてこそあらんづれ。またく生死を厭ひたるすがたにはあらず、をのれが往生をも一大事とおもひ、われわ

【なひがしろ】な
い。がしろの誤。蔑
視するの意なり。

【引接】佛が攝取
の御手を以て衆生
を引導したふをい
ふ。
【臨終せらるべき】
決疑録には、臨終
せらるべし、とあ
り。

れをおもく信じてんには、いかでか是よりはからひはそむくべき。然るに往生の信心を失ひて、今生の用事をかなへん爲に、知識の命をかへりみず、出離をなひがしろにおもはんものは、如何なるほとけの智慧もをよびがたければ、たゞかれが樂欲に任せて、親近すべからざるなり。

南無阿彌陀佛。

尊弍房安藝國へ下向の後ふみを奉りけるにつかはさる御返事

一度歸命して、往生の法名號をほとけにさづけられ奉りて、その信心たがはざらんをいでは、ところは遠く唐土天竺までへだゝるとも、行者の信心を佛護念擁護して、かならず淨土に引接し給ふべければ、往生に在ては、何の疑か有べき。身はまた家を出て、佛に奉らんのは、知識の命に隨ひて、火の中水の底までも、おもむくより外は、決定往生の信心、何事かあるべければ、唯たのもしくおもひて、何國にても臨終せらるべきほとけの加被聖衆の來迎も、口稱名號のしたにさだまりたるなり。

南無阿彌陀佛。

宇都宮與阿彌陀佛へつかはさる御返事

わが教訓によりて、人のはじめて心あらたむべきいはれなしと知り得てのち、かれがひが

おとところをおしゆるは、みづからがこゝろよからん爲にはあらず。他の爲なるあひだ、用ひざれども、我心のわづらひあらず。もちひざるになをにくむは、人の爲にはあらずして、我ものおもひのわづらひを、やめんためにてありけりと思ひなをせば、初て心の覺りをうるあひだ、佛法の明眼をもしる智恵たるべし。しからんにをいては、わろしとおもふ人こそ、我ための知識たるべければ、内外につきて、よろこびをえさする善の境界となるべし。善惡につけて他の境界皆善友とならば、なにものか心をわづらはすべき。わづらひかへつてよろこびとならんうへは、みな出離解脱のたよりなり。毒藥變じて甘露の性となるといふ言葉、この事なるものかな。

南無阿彌陀佛。

尼崎時阿彌陀佛へつかはさる御返事

善導和尚も、不謂三惡火坑圍在人足下と釋したまひて、鏡なふしては自形みえず。日月の光にあはずしては、眼識に了知なく、知識の教訓をうけずしては、迷倒の淵底を解しがたし。一念愛境につながれぬれば、泥梨にしづんで永く浮びがたし。無二の快樂を捨て苦の境界にむかふの時無爲泥洹の樂をうくべし。このゆへにふかくよろこばしむる心中の境縁は白を迷はず魔軍と知て、情識をゆるさるべからず。さてこそ佛智とはしたしく、魔障とは遠ざかるべけれ。これらの法理を領納すれば、苦即樂となりて、今生も安穩に、當

【信心内なく】決疑録には、内外なく、とあり。

【僧尼は】決疑録には、は僧尼の、とあり。

來も解脫を得、はやく生涯の身命を衆生にあたへて、稱名の聲の中に往生をとぐべし。
南無阿彌陀佛。

下條菩一房へつかはさる御返事

ところこそ遠くへだつとも、信心内なく、まことをいたさんには、佛の冥に加して護念有べければ、人の爲ならばこそあらめ、併ながらわが身の悦たるべし。人目入聞ばかりに憚りて、をのれ不善にして、我身を六道生死に沈めつる心にかたらはされて、人をへだて人の短をいひ、無道心にて虚假不實ならん。それもをのれが地獄のこのましく、三惡道のこひしからんは、自業自得果のむかふところなれば、主だにも身を思はずして不善ならんをば如何に教訓すとも、何の詮かあるべき。又かくあたふること教訓の詞なれ。われは往生せんとも、地獄におちんとも、みづからがこゝろたるべし。この言葉を道心あらば悦かたじけなかりて本意を遂べし。無道心にもちひざらんには、この言葉とほらずして空しかるべし。
南無阿彌陀佛。

越中國吉江道場の慮阿彌陀佛寺の知事につきて子細まうしあげける時つかはさる御返事寺のさはくりをする僧尼は、時衆をはぐものなれば、時衆の行法も寺さはくるものも、絶たるにてこそあれ。我こゝろのわづらへばとて、うちあがりていろはぬものにならば、佛

の御心みこころにもかなふべき歟か。田畠たはたつくらすれば、蟲むしの死しするを罪つみとおもはば、自今じこん已後いごは五穀こくの類たぐひを食しすべからず。何れいづの人ひとか蟲むしをころさずして田畠たはたを耕作かうさくせん。われは罪つみを造つくらじ、人ひとに蟲むしをころさせんといふ企くふだてにあらずや。もし蟲むしをころすを罪つみと思おもはば、人ひとにはころさせずして我われころして地獄ぢごくにもおちめといふ慈悲じひの心こころあらんには、そのころされたる蟲むしも我われもほとけのたねとなるべし。われは罪つみをうけじ。人ひとは何なんともあれとおもふはらぐろき心こころ歟か。殺ころさすといふとも人ひとをころす咎とがになりて、必かならず惡道あくだうに墮おすべし。田畠たはたを作るはみな蟲むしをころさんために人ひとはつくるやらん。田たをつくらん爲ためにつちをつくれば、をのづから死しすといへども、心こころのつみなければ、それによりて地獄ぢごくにおつべきにあらず。欲心よくしん誑惑しやうわく不善ふぜんの心こころのかたこそ惡道あくだうにおつべけれ。いかなるたふとき人も、五穀ごこくを食しとするほどにては、蟲むしの死しなすして作り出す米穀まいこくなければ、飯食はんじきすべからずとは、いづれの佛ほとけのたまふぞや。それも發心はつしんせずして、本もとの著我ちやくがのころを改めざる愚者ぐしやこそ、生死しやうじをもはなれえず、輪廻りんわの苦くるしみをばうくべけれ、我妻子わがつまこをはぐみ、身命しんみやうをたすけ、眷屬けんぞくをかへりみんために、牛馬うしうまをもいたむるこそ、罪つみともなるべけれ。寺てらをもたすけん爲ために、田舎ゐなかの習ならひ牛馬うしうまに物ものをおほせなんとするは、牛馬うしうまも却かへりて佛ほとけのたねを結むすぶべしとこゝろえんには、さのみ我意がいきに任まかせて牛馬うしうまをいたむべき歟か。畜生ちくしやうの業ごふは何國なにくににてもつかはるゝなり。この理ことばを知しりたる人は、おなじくつかひながら、哀あはれみの心こころをもてこそつかふべけれ。商人あきんどなどの物ものを多くおはせて、利分りぶんをとらん爲ためにをひ殺ころすに似にたるべき歟か。罪つみと功德くどくといふは、人ひとの心こころにこそあれ、餘所よしよにて

はしりがたきことなり。かく心得て寺をもさはくらは、佛の御心にあひかなひて往生を遂べし。身をやすからん爲にさわくらは、その心の業こそ虚受信施の業をうけて、地獄にも落べけれ。はやく本の心を廻心して、まごゝろにさはくるべきなり。あひかまへて心の非法を誡むべし。佛のつきそひて往生をまほりたまふに、はづかしかるべし。

南無阿彌陀佛。

如一房へつかはさる御返事

無道心のもの、をのれが心にわづらひて、身命を惜みもてあつかふは、往生の爲にてはなくして、もとよりのれが業の依身をたすけんとおもふ不當のものなれば、非法現じなば、それより追出すべし。是へ來らば永く中をたがひて、今世後世名體をあらはすべからず。このやうを尼法師にふれらるべし。わろく無道心にして、わづらはしき事を聞するは、報恩の爲か。知識の心をいたましめて物を思はせんといふ企か。返すく存外の次第なり。たゞ往生一大事の爲ならば、萬事につけて何のわづらひか有べき。はやく己が身を捨て佛の護念に預りて往生を遂べし。

南無阿彌陀佛。

布瀬の相阿彌陀佛衆中の事につきてまうすむねのありけるにつかはさる御返事

【進ぜめ】決疑録
には、進退せめ、
とあり。

萬事を知識に任せ、又他に任ずるは、我心わがまゝなるを心得て、知識に任ずれば業滅し、をのれに任ずれば佛滅す。かねをうちてのちは萬事を佛に任せて往生を遂にとも、己が迷情に隨ひて、また輪廻の苦をうけ、三惡道にしづんで、又浮びがたき身とならんとも、かの人の心にてこそあらんずれ。みづからは是往生せんといへば、身命を請取ばかりにてこそあれ。われは人の往生せんもせざらんも、他にこそ任せたれ。わがいはんによりては、信心あらんものこそ、此業をもひるがへすべけれ。無信のものは己が心に叶ふ事をば悦かなはつれば、知識にもしたがはず、したがはざらんも、彼が地獄におつべき業の、このましからんをば、我身ならばこそ右も左も進ぜめ。われく歸命して心ひとつになりたらんものは、かゝる教訓のことばを聞ては、如何なる心をも打捨て廻心懺悔して佛に護念せられ奉るべければ、信不信ともに他に任るあひだ、ものに別の意執なし。信あらん者はこの理りを聞ては、心われくたがわざるあひだ、彼が往生の所得たるべければ、唯この理りをいひ聞すること、彼を濟度する慈悲にあたれ。萬事を他に任せて、我ことばのするを違するものに向て、意執をとほさるゝこそ、我を捨て佛を信じ奉りたる心にてはあれ。本より佛智の前には、人我なければ愛恚もなし。愛恚なければ業障のきづなをはなる。念佛の行者は、わが心の無信にして佛を信する心もろすく、心中は知識の教導をも川ひぬあひだ、かゝる業深きものにては、われと往生すべき道たえはてぬれば、萬事を佛に任せ奉りて、己が無道心の心を心とせずして、臨終いつと知らざれば、只今もやその期

【安心起行には】
決疑録には、安心
起行の二つは、と
あり。

たるべからんと、心はむかされども、用心するあひだ、念々相續の念佛臨終の期に相向ふ
ゆへに、死すところいつとしらされども、必その期をば目前に待うるなり。又いらふべ
からずと教導せられては、綺ひたけれども偏執しているはざるも我慢心の業なり。綺ふべ
しといへばとて、綺ふべきものになりては、人にまさりたる知識がほなる心ことに慢心た
るあひだ、身の爲にはあだなり。理りのゆがむところをば、教訓すとも用ひもちひざるは、
彼が心にあるべし。ことにより折に隨ひて、その時いでこんずる心振舞をば、兼ては何と
かをしゆべき。全分いろふまじかりけりと心うるは智慧の安心、さればとて綺はざるは思
ひまうけたる執心、みな是心の業なり。綺ふべからずと心得て綺ふは人の爲にてはなし、
いろふまじといふ執心をやぶらん爲なり。されば安心起行にはいろふまじきものにてしか
もいろふにあり。かくのごとく安心したらんには、人のもちひさらんにも我執心有まじ。
もちひんにつけても所得有べからず。人に任するぞといふことばはこの理りをあらはさん
ためなり。唯萬事を捨て、往生一大事の念佛をまうすこそ佛の護念にはあづかれ。是等體
の法門は臨終一念の信心を起さしめんずる方便の詞なれば、信心おこりたらん人は別の用
事あらばこそこのことばも大切ならめ。このことばにとどまりて往生の信心なくば、今生
の業は滅したりといふとも、出離はむなしかるべきものなり。たゞ夜も晝も臨終知がたけ
れば、念佛まうすより外は別のみちあるべからず候。

南無阿彌陀佛。

上田の珠阿彌陀佛へつかはさる御返事

【定散二善】定善とは、慮を息め心を凝して觀想すること。散善とは、散動の心を以て善根を修すること。【能歸の分なりといへども】決疑録には、いへり、とあり。

日輪觀とまうすは聖道にもちゆるところ、萬法は本心ひとつにこもるゆへなり。淨土の教相定散二善の中にはまづ日輪觀を修し。地水火風空の五大を四方中央の本方に散向して、第六意識虛空に凝住するを唯有識大湛然凝住となづく。是は念佛定善の機、五大皆空の法門なり。機法の機のかたなれば、念佛に能歸の分なりといへども、往生をば散善のうへに説く。九品の中には下三品なり。上六品は世戒行の三福の業とて、これは行體なり。まさしき往生は十惡破戒五逆の機にかうぶらしむ。下品下生は五逆なり。佛法世俗の善根なくして、無間地獄に墮在すべかりつる惡人のわづかに知識の十聲の稱名を死苦來逼の耳にふれ、口に唱へて息たえ命をはる時、日輪の來迎に預りて報土に往生す。又下品中生は聲聞戒の機、破戒の罪によて臨終に苦惱をうくるの時、知識阿彌陀佛の五分法身の功德戒定慧解脱々々智見等をとくきざみ、忽に罪滅して知識のあたふる念佛を聞て頓に命終するのあひだ、聲には出さざれども耳に而てをはれば即往生を遂ぐ。是を聞位の往生と名づく。淨土、頓教なりといへども、行者の聲にも出さざるに、知識の聲耳におさまりて往生を遂るのあひだ、頓の中の頓と名づく。下品上生は十惡業の罪人なり。これはたゞ一聲にて命終の時往生を遂ぐ。總じて下三品に念佛を説て、上中品に念佛をあらはさざるは、機は雜善の凡夫なれば出離に縁なしとあたへて、自力雜行雜善を捨さしめんためなり。行

【因位】未だ佛果を得ざる菩薩の地位。因行を修めて向上の道を辿る位

【心ならねば】決疑録には、なれ、とあり。

は他力の一行名號のちからをあらはさんがため、報佛の慈悲内證より出るところの願力なり。又は濟度のかたき五逆までも淨土に得生せしむれば、下品をたふとびて上中の機を修入せしめん爲なり。しかれば彌陀の願意十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不取正覺の誓ひを因位になし、報身の果を得給へり。かくのごときたるのあひだ、信不信を論ぜず、淨不淨をきはらず。稱名すべきと善導和尚の素意を伺ひて、人師この義を立たり。このことばまでも往生にはその益有べからず。日まへ夜に稱し寤寐にとなへて臨終を待るべし。

南無阿彌陀佛。

彌阿彌陀佛へつかはさる御返事

作阿彌陀佛是へ來るあひだ時衆分になりて、こゝろに身をはからひ、本處を憂がるは、佛に身命を奉るかねをやぶるなり。誓ふ時の詞は人の言ばにあらず。心亦自身の心ならねば、その誓状身の毛孔ごとに入て往生を遂ぬのみにあらず。此世後世佛性のたねを煎て大地獄におち、大苦惱を受て淨瀬もあるまじき闍提人とならんこと淺間敷次第なり。かねのまゝにて一期をつくさば佛の護念に預りて、最後終焉の夕には必淨土に得生して、ながく娑婆生死の界を出べき所得を忘れて魔にたぶらかされんこと、誰が爲にてか有べき。今生一生の苦だにも悲しきに、多生曠劫の罪たゞ一念の違ひめに有べし。信念かねのご

とくにて念佛ねんぶつまうさば往生わうじやう決定けつじやうなり。心の妄執まうしゆにひかれて誓ちかひをそむかばながく佛性ぶつじやうをうしなふべし。されば但ただこゝろをばみづからの敵かたきと心得こころえて、執心しゆしんを一念いちねんに捨すてて佛ほとけに向むかふ時とき、かねは破やぶれまじければ往生わうじやうの悦よろこびたるべしとあたふる時とき、しかしながらわが僻事ひやくごにてさふらひけりとして、廻心みしん懺悔ざんげして本もとのごとくかねを打うつあひだ、しからばその心こころのをもむきしかたの執心しゆしんをばとほさずして、うかれ出し本處ほんじよへ歸住きぢやうせんこそ、業障ごつじやうのみちをばたつべきゆへに、その心こころをえて歸かへるべきのよしまうすあひだかへしつかはす。この作阿彌陀佛さあみだぶつ一人いちにんの事ことにはあらず。面々めんめん時衆じしゆの安心あんじんの序ついでなればまうしつかはす。御ごへんもわれ／＼がもとへ黒駒くろこまの信心しんじん深くして所望しよぼうありしあひだつかはしたればこそ、知識ちしき長老ちやうらうとも仰おほせてもてなしたまへ。法師ほふし修行者しゆぎやうじやは世間せけんにおほかるものなれども、さのみ信心しんじん起おこす人はなし。御邊ごへんこれに在ありし時は時衆じしゆじん分ぶんにてこそありしかども、黒駒くろこま殿だんの信心しんじんよりむまれてこそ知識ちしきともあをがれ給たまふらめ。我わがからはよもひとつもあらじ。信心しんじんの人の志こころざしがなすところのたふとき人にてこそあれ。われはいつも内心ないしんには名聞みやうもんもあり利養りやうもありて、欲心よくしんも深く悵望なまうもつきず。みな輪廻りんね生死しやうじの種子しうじなりと道念だうねんある人はみづから心こころをしるあひだ、人ひとにかはりたる智慧ちゐも徳とくもなきゆへに、こなたよりも彼人かのひとの信心しんじんをたふとがり、われに徳とくをつげざれば心こころはかりめなしと知しるあひだ、人我じんがもやぶれ慢心まんしんも捨すてられて、師檀しだんともに同行善知識どうぎやうぜんちしきとなりて往生わうじやうをば遂すべべけれ。人のたふとかればとて、そのことばをよろこんでたふときものに身みをおもひなせば、この一念いちねんに天魔てんまのたぶらかすをしらずして、人ひとにかはりたるおもひをなし。迷まよ

【用ひん時は中の】
決疑録には、中を、
とあり。

ひの心を捨ずしてみづから心にせば、信心する人は信あれば往生を遂とも、信ぜらるる身は悪見に入て往生を空くすべしとこゝろえたるをこそ、道念とも信心とも智者ともまうすべけれ。これら體なる深義はおぼろげの人の知ことにてはなきあひだ、かやうに心得て一日教導するやうなれども、人の用ひざらんときはやがて彼に隨ひ用ひん時は中のたがふべきみちなければもうすにおよばず。我すゝめによて必人の往生すべしと心得たらば、此心に天魔添なり。人の信心によりてこそ往生すべけれとこゝろうれば、みづからが慢心もすてられて、人の信心にむきて念佛すゝむれば、二人の中に魔軍隔たりて必往生を遂べし。地體信心なからん人は、始めて信心を起すも有べし。本のまゝにて念佛せざらんは、彼人もとより念佛の志なきにてこそあらんすれ。信不信ともに人にあるべし。我はからひはおよびがたきものなり。かく心得て念佛をすゝむれば、かならず佛意にも相叶ふて化導も成すべし。人にわれを對するときは、人にまくれればまくるかたへ佛はそひ、勝かたをば魔縁はたぶらかすなり。

南無阿彌陀佛。

中條大弑房へつかはさる御返事

われも時衆も親を捨、子をすて身を捨、心を捨て、身命を阿彌陀佛にまいらせて後は、時衆にも持物にも主の思ひをなすこと有べからず。殊に時衆の主とはいかなるべき。一度

志ある人の所望によて、その人にあたへてんのちはともかくもあれ。その人のはからひにてこそ有べけれ。又とりかへすべき謂れなし。それをとりかへすほどにては、我身をも知識の命をそむひてとりかへすべきか。何事も身の往生の爲にてこそあれ。人の信心なくば、その人の自業自得果にてこそあらんづれば、それにいろひて時衆をあたへてのち、契約をたがへてとりかへせば、人の爲にはあたへずして、我心にまかするあひだ、我ころに任せば知識の命をもたがふべき業を身にもつことをわきまへずして、かやうにふるまはんは、在家の我物をいまだ捨ねばこそ、出家にてもかやうに人の契約をばたがへらるらめ、又人の契約をたがへんをば人に任せ、たがへられて我身よりは人の爲なれば是非をいはざるこそ佛の御心にも相叶ふべけれ。所詮かさねて二人の尼立式寶佛をば本の願主の方へ返しつかはさるべし。蓮華本尊をも添て渡さるべし。ひとたび契約しつることは我かたよりはたがへざるこそ世を捨て身を捨て此世に物の主にらざるいはれにてあれ。我もほとけのおん物になりたる理りなれば、何事も身の往生の爲にてこそあれ。物にいろはるべきいはれなし。又往生人の路にてわすらはしからずして、たがひに和與して何國にても居所を定めらるこそ、精靈の心にもあひかなひ、佛の護念にも預りたまはんづれ。かまびすしくしては面々身の爲に怨となる心をもてなしては誰が爲にてかさふらふべき。かやうに和與の義をこそ人に向ひてもあたへられさふらはめ。かたくにつきて偏頗を思はゞ佛智の照覽しりがたかるべきあひだ、かやうにまうしつかはすなり。いまだ心を捨て發心せざりけりと、我

身の業をおもひあらはして、本尊の御前にて廻心懺悔して往生を遂らるべくさふらふ。すこしも心に上下あらば、佛の御心にはたがひたまふべきあひだ、かやうにはまうし遣すなり。
南無阿彌陀佛。

事 陵阿彌陀佛のもとより吉岡護弑房往生の事どもまうしあげゝるにつきてつかはさる御返

護弑房が往生のこと、もとより時衆分の者は往生一大事のために身命を佛にまいらせて、今世後世の用事をつくし、このことより外に他事をおもはざるあひだ、思ひまうけたる往生にてさふらへども、兼て瑞相を現して人の信心を催しさふらひけるこそ、返すゝ有がたくおぼえ候。往生はわたくしならずさふらへども、佛の應をたれらるゝは機の信心にこたふることにてさふらへば、殊にたふとくおぼえさふらふ。道場の僧尼この往生にいよいよ信心をこたらずして、本意を遂べきよしをまうすと披露せらるべからく候。

【べからく候】決
疑録には、べく候
とあり。

桂澤大炊助入道時衆のあひだの事まうしあげけるにつかはさる御返事
面々をのれが無道心のこゝろを先立て、共に輪廻の業をたくはへば、佛智にも相應せず、われゝが信心にも同ぜずして、天魔波旬のすゝめにつきて、今生には誓ふところの白癩

黒癩こくらいとかやになり、後生ごしやうには面々の口より出て誓ちかひをなす阿彌陀佛あみだぶつにはなれ奉たてまつりて、多た
 生しやうくわう 曠くわう 劫くわつ 浮ふ び出いで ざる業ごふ を成就じやうじゆ するのみにあらず、ながく佛性ぶつしやう のたねを煎いり て二世にせ の願くわん をむな
 しくなす闍提人せんたいにん となりては、人ひと をかこつべき歟か。われをうらむべき歟か。後悔こうかい 先にたゞざる
 ものをや。すみやかにこれらの業ごふ に今の所造しよぞう を因いん として闍提人せんたいにん となるべき理ことば りを悲かな みて人
 のわづらひともならず、我往生わがわうじやう をも遂とて らるべし。かやうにこまぐといひつかはすは、我
 ためには何なん の所得しよとく かあらん。併し 尼法師にふし の一念歸命いんわんきみやう しつるところの信心しんじん を護念ごねん してこそ、
 愚痴ぐち なるものどもに向むか ひてかやうの詞ことば をもつくせ。その慈悲じひ をもかへりみずなをおもひし
 らざらんは、人の爲ため にはあらず身み のためなれば、まうすにおよばざれども、人ひと を進退しんたい せん
 とて心こころ にたがへば、我胸わがむね の思おも ひにはわづらふぞかし。その心こころ はたしてをびたゞしき地獄ぢごく に
 なるべきことは、目め にもみえぬちりのつもりて大山だいせん となるがごとし。今生こんじやう の命いのち いつまで有ある
 べしと思おも ひ定さだ めて、かやうに無道心むだうしん なる出家發心しゆつぱつしん して、これへ來きた るは明日あす までの命いのち をも期
 せざれば、在家ざいけ の快樂名聞利養無益けらくみやうもんりやうむやく なりとおもひ捨ててこそ、身み をも命いのち をもほとけにはゆ
 づり奉たてまつ るらめ。いまさらに忘わす れるゝ心こころ の業ごふ を我われ と思おも ふらむ。愚痴ぐち の我執がしゆ あげてかぞふべ
 からざるものなり。いそぎこれらの業ごふ を廻心みしん して初發心しよはつしん に立歸たちかへり て、往生わうじやう の本意ほんい を遂とて らるべ
 しといふことを、衆中しゆちゆう に披露ひろう せらるべし。

南無阿彌陀佛。

他阿上人法語卷第一 終

他阿上人法語 卷第二

尼崎時阿彌陀佛まうすむねありければ、書てしめし給ふ御教誡

【十二因縁】三界の迷の因果を十二に分ちて、衆生輪廻のさまを示したるもの。無明、行は過去の二因、識、名色、六處、觸、受は現在の五果、愛、取、有、は現在の三因、生、老死は未來の二果に分つをいふ。

夫出家發心するものは、生死を出過し無爲泥洹の法を明らめしめんがためなり。その生死何ものなるや。十二因縁の流轉これなり。十二因縁とは過現未來の三世にあり。過去の二因現在の五果を感じ、現在の三因未來の兩果をなす。是を名づけて十二因縁の流轉とす。過去の二因とは父母の赤滯、現在の五果とは自の五蘊、現在の三因とは貪瞋癡の三心、未來の兩果とは色心のふたつなり。母の胎内にをひて五位を経て出生し、幼稚のほどは善惡を辨へずして愛恚のふたつにおぼる。しかりといへども、乳母を愛し他人を嫌ふこゝろ起る時、はじめて愛恚を生じ、漸く竹馬にむちうつるとき、我物境界を食るなり。すでに成人の時、男は女を愛し、女は男を思ふ。この愛心過去の二因に立歸て無窮の生死をふる也。發心とはこの生死を厭ひて佛果を得せしめんためなり。生死迷惑の種子は姪貪の一念なれば、厭捨せずんばあるべからず。このゆへに家を捨てはこゝろを娑婆世界にとどめず、父母を棄ては過去の二因を遠離し、身を捨ては現在の五果を厭離せんが爲なり。迷心を明らむるは現在の三因未來の兩果となるがゆへに、この種子を捨るところなり。故に善導和尚は目を擧て女人を見たまはざること生を期し、睡眠したまはざること三十年といへ

【六時禮讚】善導の往生禮讚に出づ淨土往生を願ふ行者が日課として晝夜六時に禮拜讚歎の行業を修するをいふ。

【十二光】阿彌陀佛をその光明の徳るに就いて名けた十二の佛名。無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、欲王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難思光佛、超日月光佛、稱佛、これなり。

り。争か一期の間女人の姿をみたまはざるべけんや。目を舉るとは愛着の心を生じたまはざるなり。争か三十箇年睡眠したまはざらんや。凡夫の眼は境界に迷惑せられて佛眼をしらざるのあひだ、睡眠せしむるのよしを明らめ知給ひてのち三十箇年の御言葉なり。これ誠諦の金言なり。何ぞ信心をおこさざらんや。淨土の行業は日夜十二時六時禮讚を修し、淨土の變相を讚嘆せしむ。はじめの日は淨土に向ひて臨終を標す。生死の命は十二因縁の流轉なり。是を轉ぜしむる智慧を十二光と名づく。轉ずとは生死の命を無量壽に歸入するなり。然れば無量光は豎なり。無邊光は横なり。阿彌陀佛とは壽命長遠の名なり。この智慧を得るにさはりなければ無礙なり。是に對するところなければ無對なり。迷識を燒は焰王なり。迷識なければ清淨なり。清淨なれば歡喜なり。歡喜なるを智慧と名づく。この智慧斷絶なければ不斷なり。不斷なれば思量しがたきがゆへに難思なり。難思なれば稱するところなきがゆへに無稱なり。此智慧の日光日月の光りにこゆるがゆへに超日月光佛と名づけたり。生死根源の姪食を捨離せずんば、争か十二因縁流轉の業を轉じて無量壽十二光中に歸入せしめんや。在家出家共に假體の姿振舞によらず姪事と愛著とを厭捨せしむるにあり。しかあれば道場制文を書て面々處々の者にあたへしむるは唯この一事なり。争かその言肝に銘ぜざらんや。世間の風聞にをひて、智者は此詞を領納し、愚者は恥て是を藏す。智者は我執をすつるゆへに異論なし。愚者は名利おほきゆへに自過を陳す。此事を實とするものはいかでか、佛智の照覽をはぢざらんや。若虚妄のものは、性の業障を他

【此事を實とするものは】決疑録には、このこと實たらば、とあり。【明らめつればすむも】決疑録には、明らめつれば進むも退くも、とあり。

【退かざらん心振舞なれば】決疑録には、三心を退かならん爲の心振舞なれば、とあり。

よりしめさば、佛の護念と悦て、いよ／＼厭離せらるべし。總じて善惡愛恚は境界にはあるべからず、識情ひとつのとながなりと明らめてのち、善惡ともにその心を用ひずして、一切を他に任せば智者至極の悟りなり。心を迷ひと明らめつれば、すゝむも迷ひなり。他進めば向ひ、人の退けば向はず。人の心を用ひて、自の心を進みしりぞけずんば、いづくよりか非法の業を行すべきや。しかりといへども凡情の迷ひ本より一切の愛恚欲心慢心虚假名聞利養つきざるところを意得て、この妄心にしがはざるは佛智の悟りなり。此迷ひに伴なひつるほどこそ、善惡愛恚に煩ひつれ。わづらふところを厭はざれば煩ひなし。是を行ぜざるゆへに悦ぶところを、よろこばざれば悦びなし。悦びなければいづくよりかうれへも生ずべきや。喜びも憂へも心にこそ有べければ、心を用ひざらんうへは、ありもせよなくもあれ、わづかなる命のうちいつまでかこの悟りも大切なるべき。此詞もみなむなしくして、臨終一念の念佛より外は、またこの道場の威儀作法も本より式なし。一念發心せし命のうち幾程もなきあひだ阿彌陀佛に歸命し奉るは、一筋に今生の要事往生の大綱を得んために方便して退かざらん心振舞なれば、往生の信心は面々の心中に有べければ、制戒にもるゝものは往生空しかるべきあひだ、たがひに愛恚のこゝろあらずといへども、凡夫の習ひなれば、尼は法師に近づかず、法師は尼を遠ざけて、臨終まで行業をもちらにして往生の本意を遂べしと思ひとりたらん僧尼は、發心して往生極樂を眞實に欣慕する行者たるゆへに、この謂れを見知しては一身の悦びとなして、歡喜の心おこるべし。本より

【こそはなからめ
怪みて】決疑録に
は、もなくかへり
て怪み、とあり。
【なすべしもと】
決疑録には、なす
べしもとより、と
あり。
【うたがひなき】
決疑録には、往生
疑ひなき、とあり

往生の信心なからん族は、さらぬものも徒生を遂ればといひて、悦ぶまでこそはなからめ。怪みて疑心をばなすべし。もと無道心ならばはかりなき罪人なれば、三世諸佛の智慧も十方薩埵の行化もよびがたければ、ちからなき闍提人なり。所詮姪貪を斷ずる事は、六道生死の門戸をとづべきがため、往生極樂を欣慕することは、三界苦輪の火宅を出べきがためなり。もし臨終に一念稱名せば、決定往生うたがひなきものなり。しかればむかし法藏菩薩は、誓ひを十方衆生にむけて、すでに正覺を成じ給ひて、阿彌陀佛と號し奉る。我等凡夫奉事するところの西方淨刹因の阿彌陀佛是なり。十方衆生の中には螻蛄蚊虻までもらされず、しかればわれらもとより愚癡蒙昧なれば、何れの衆生とか向背なるべき。たゞあやしの男女尼入道にかはりめもなき身ぞと心得て、底下の凡夫にことおなじくすれば、必佛智に相叶ふべきものなり。もとの時阿彌陀佛といふ見をもただして、小法師ばら下法師等に替りめなき内心を得ば、慈悲の至極なるべし。我我に遠ざかるといふ事は、處をへだつればとてこの心出來は愚癡なり。佛は西方十萬億刹をへだつといへども、信心の前には去此不遠なり。信心なくしては、佛前に向ふといへども唯草木のごとし。處は遠しといふとも我々が前にて振舞ごとくに思ひなさは、没後までも知識に離れざる智慧なるべし。争か愛心にもほだされ、師匠にもはなれんや。凡夫の眼は一紙といへども外をみず。一念といへどもものをしらするあひだ外相に迷ふなり。佛智は内心を照覽し給ふゆへに、心中隠れなければ、心にほだされずんば、争か行不法ならんや。行不法ならんば、いつ

も生身の佛にそひ奉る信心なるべし。此心を捨ずして内行清淨ならば、をのづから利益衆生も眞實なるべきものなり。唯つねに佛智の慈悲を仰ひで念佛せらるべし。
南無阿彌陀佛

金銅の淨阿彌陀佛へつかはさる御返事

【厭離穢土】穢れたる娑婆世界を厭ひ離れんとすること。

往生の信心ある人は、こゝろのとゞまる處をば厭ふものにてこそさふらへ。人の心の内にはまことの往生の志はなくさふらふ。いかにも心のとゞまる處に住したきは、厭離穢土にてはなくして、欣求淨土にてこそさふらへ。穢土の心のひく境界をば遠ざかるこそ厭離穢土にては有べくさふらへ。また欣求淨土は心もおよばずいまだ見ざる境界にて候ほどに、すべて心はかゝらぬものにて候。かゝるあひだ、いかにもして念佛の信心もをこりたらん處の知識のあたりを慕ひて、心にはありにくゝとも在よくとも、往生の頼母しさに近付たき心より外には誠の信心はあらはれざるものなり。心には住にくけれど、知識のあたり近き處に忍ても在たきこそ、厭離穢土の志にてはさふらへ。そのゆへは在にくき處に住するは穢土にありよき處を求ざるゆへに心と厭離穢土にあたりさふらふ。また信ずるところの知識のあたりを何としてもちかづきたることこそ欣求淨土にてはさふらへ。そのゆへは出離の知識は今生の身の用には總じて得分なきにふかくしたはるゝは、往生の志なくては其の謂れなきゆへに欣求淨土の理りなり。此義をはなれて穢土のうちにいづくにても心のひくかた

【欣求淨土】極樂淨土に往生せんと願ひ求むること。

【妄執】 迷妄の執着。

に住たきは、無始の妄執愛念のこゝろ魔縁にたぶらかされて、往生をむなしくすべき業障なりと思ひしり給はば、こゝろの業にはひかれ給はずして、かならず佛の護念に預りて、本意の往生うたがひ有べがらずと意得給ふべし。もし存命さふらはば、見参に入まろすべく候。南無阿彌陀佛。

古厩僧阿彌陀佛不審申ける條々に付て示し給ふ御返事

尋て云、「諸事他に任せてふるまへば正面なりと仰をかうぶりさふらへども、願主どもの所存志はありながら、道場の作法をこころえざる輩にことの謂れを申せば彼が心中にたがひ候。申さざればまた我こころに違ひ候は如何いたし候べき歟。」示曰、「何事も他に任するといふは他の爲にはあらず。わが善悪の業をたくはへて人を是非するあひだ、その是非の妄執は自の業障となり、生死を離れずして三途に墮在し、永く輪廻をまぬがれざるゆへに、物を我心に任せし爲に人に任せよとはいふなり。是はみな我執心をはなれて出離生死へ向ふあひだ、みづからが悦びとこそなれ、人の爲にはあらず。また人に任する時人の所存たがはずして我をへだてざれば、その和興の心はたして信心なるあひだ、をのづから利益衆生となるあひだ、大聖は方便して自然の道に勧め給ふゆへに、是をほとけの智恵と名づく。また利益衆生ともなるべし。」尋て云、「時衆の非法を行じて落失るを彼に任せて綺ふべからず候歟。またちまちま地獄

【三途】 火塗（地獄）、血塗（畜生）、刀塗（餓鬼）。

【佛性】 本來自性
 清淨の無爲淨槃に
 して眞如法性のこ
 とをいふ。これ即
 ち一切衆生が本來
 具有する理性にし
 て、迷に有りても
 減ぜず、悟に有り
 ても増さざるもの
 なり。

に墮在せんも不便にさふらへばとり留むべきにて候歟。示曰、人の時衆に入は知識のはからひにていたるや。かれが佛に身命をまいらせて生死をはなれ、往生をもとげんが爲に所望して、彼こそ時衆には入たるなれ。知識の入たるにてはなし。をのがれが發心するといひて、妻をも出し、制戒をもやふらじとて誓ひをなし、かねをうちながらかねをやぶり、誓ひを變じて逆罪のものにならば、自業惡見の破戒にてこそあれ、本より我が勸めていれたらばこそ、わが得にも失にもならぬ、知識氣色して人をいやしくおもひなすあひだ、皆慢心をさきだて、思慮なきゆへに、彼が業をうけとりて魔道の業となるべし。何事も他に任せよといふは、わが心に慢心欲心名聞利養ふかきゆへに、わが業のこゝろに人をしたがへしたためなり。一切の用事を心につくさんための智者の心地なり、我はいろふべからずと意得て、しかもいろふは綺ふべからずとこころへたる執心を破らん爲なり。然ればいろふとき彼もちゆるは彼が信心なればかれが爲なり。用ひざるは佛にまいらせたる身命をとりかへして破戒のものとなるも、彼が不信無道心の業に隨ひて、永く佛性のたねを煎べきものにてこそあれば、我はからひにてはあらず。ともかくも己が執心に引入て是非するは人の過にはあらずして、をのがれが癡の妄執なり。

尋て云、夢に自他のうへをたふとくおそろしく見るは、まことに夢のごとくに有べき事にてさふらはんと、在家人どもの不審まうすは如何に候歟。示曰、夢に我身をたふとく見、おそろしくも見、亦人をもかくのごとくみるは、皆みるものの妄執なり。必人の事

【三障】煩惱障、業障は煩惱により、行業を起して正道を障ふ。報障は業因により悪果を招きて正道を障ふ。

【本願】總じては無量壽經所説の四十八願。別しては四十八願中の第十八願なり。

をおもふも、我（わが）ここにてこそあれ。わが事を思（おも）ふも我（わが）ここにてこそあれ。またく人の心（こころ）にあらざるゆへなり。凡（およ）そ人の心（こころ）の善（ぜん）悪（あく）業（ごふ）は、人（ひと）別に同（どう）分（ぶん）成（じょう）就（じゆ）せり。相（さう）に淨（じやう）びて善（ぜん）人（にん）惡（あく）人のみゆるは、成（じやう）就（じゆ）するところの善（ぜん）惡（あく）なり。善（ぜん）心（しん）のうかぶときは善（ぜん）人（にん）とみえ、惡（あく）性（じやう）は沈（しん）みて惡（あく）人（にん）と見えざる計（ばか）りなり。性（じやう）をあきらめずして淨（じやう）ぶところの相（さう）に善（ぜん）惡（あく）をなすは愚（ぐ）者（しや）なり。善（ぜん）惡（あく）は心（こころ）に有（あ）りて相（さう）になしと明（あき）らむるは智（ち）者（しや）なり。智（ち）者（しや）は成（じやう）就（じゆ）するところの善（ぜん）惡（あく）を知（し）ゆへに、善（ぜん）惡（あく）に動（どう）ぜず、愚（ぐ）者（しや）は迷（まよ）ひの心（こころ）を明（あき）らめずして、善（ぜん）惡（あく）の心（こころ）を相（さう）と心（しん）ちえて心地（しんち）をしらざるゆへに、迷（まよ）ひふかくして生（しやう）死（じ）輪（りん）廻（け）の門（もん）を出（い）でたし。智（ち）者（しや）といふは一（いち）念（ねん）發（はつ）心（しん）してをのれがこころを心（こころ）とせずして萬（ばん）事（じ）を他（た）に任（まか）す。愚（ぐ）者（しや）といふはをのれが執（しつ）情（じやう）に迷（まよ）はされて心地（しんち）をあきらめざるゆへに、三（さん）障（じやう）おほふて眞（しん）如（にょ）の月（つき）を埋（う）むなり。念（ねん）佛（ぶつ）者（しや）はたゞ我（わが）心（しん）の欲（よく）ふかく名（みやう）利（り）甚（した）しく、つやく／＼出（い）離（り）にはむきがたく、輪（りん）廻（け）にはひかれ易（やす）くして、罪（ざい）業（ごふ）ふかき迷（まよ）ひの凡（ばん）夫（ぶ）にてあるぞとわが心（こころ）を知（し）えつれば、ひとすぢに佛（ぶつ）を頼（たの）み奉（たご）りて、名（みやう）號（ごう）の一行（いっぎやう）に歸（き）命（めい）して、發（はつ）心（しん）の初（はじ）め終（しゆう）焉（えん）のゆふべまで念（ねん）佛（ぶつ）をこたらざれば、佛（ぶつ）の護（ご）念（ねん）に預（あづか）りて、かならず本（ほん）意（い）の往（わう）生（じやう）を遂（とぐ）べし。末（まつ）世（せ）の根（こん）機（き）これまではあきらめがたく、みづから胸（むね）の業（ごふ）障（じやう）三（さん）塗（た）に落（お）つべきいはれをしらざれども、我（わが）身（み）に生（しやう）死（じ）をはなるゝ道（みち）の知（ち）がたければ、但（ただ）知（ち）識（し）を頼（たの）みて如（い）何（か）なる人（ひと）も念（ねん）佛（ぶつ）して往（わう）生（じやう）する事（こと）は行（ぎやう）者（しや）の德（とく）にてはあらず。唯（ただ）本（ほん）願（げん）強（きやう）緣（げん）のちから名（みやう）號（ごう）の不（ふ）思（し）議（ぎ）なるべし。只（ただ）今（いま）にも死（し）して野（や）外（がい）の土（ど）となるべき身（み）をおもひ知（し）らざる愚（ぐ）癡（ち）の衆（しゆ）生（じやう）こそ、幾（い）程（ほど）もあるまじき身（み）をもてなして、念（ねん）佛（ぶつ）を信（しん）ぜざるは、いまだ往（わう）生（じやう）の時（じ）刻（こく）到（たう）來（らい）せざる迷（まよ）ひ深（ふか）きともがらなり。

みづから發心せんより外は、人の勸めによるべからざるあひだ、いかなる機をも信不信とも、他に任ずるはこのゆへなり。人の計ひによるべからず。をのれくが知識氣色の情識を捨て、内心はわるきものに同じく念佛まうさるべし。彼をへだつるは我心のへだてなり。彼が振舞をこそせざれども、心はずこしもたがふべからず。わづかに念佛したる計りこそ、我高名氣にはおぼゆれ。皆ともに妄想顛倒の心なるべし。
南無阿彌陀佛。

衆一房へつかはさる御返事

いづくにても但往生一大事の爲にてこそあれ。そひつきるたるとも中遠くへだたるとも、往生の信心あれば忘れず。常に心もかよふほどに、知識にもはなれざるなり。我ために何事の用かあらん。臨終まで此度往生の爲にこそはからひたれば、この詞をたのみ、心うかれずして念佛まうさるべし。またそこに命のあらんほどこそ遠くも近くもおぼえんずれ。往生の後にはひとつ淨土にゆきあふべければ何か歎きなるべき。命のうちにはたゞ一夜の夢のごとくなれば、こころもとなかるべからず。心はあやつりもののごとくよくあやつればいかながらも歎きなし。能あやつるといふは、苦をも歎かず樂にもほこらず、苦樂共に幾程かあるべきと。淨土不退の樂を思へば、心は身につきたるものなれば、また今も樂みなるべし。

【不退】佛道修行の過程に於て既に得たる功德を決して退失すること無きをいふ。

南無阿彌陀佛。

關の與阿彌陀佛、或時今身に未來際をつくせば、十二因縁を眼前に去といふ事を、夢見たるよしまうしあげけるときつかはさる御返事

今身盡未來際とは今の一念なり。いまの一念に未來盡ては、いかやうなる心にかわづらふべき。未來際がありてこそ今の業には煩ふべけれ。業の主になりて善惡の心に煩ひ居たる

は、いまだつくさざるなり。十二因縁は眼前にさる境界なれば、おもひをとどむべき謂れ

なしとあたへたる詞なり。かくのごときの法位にはそむひて、凡夫は欲もあり要期もあり。

まよひも深き身なれば、一筋に佛知識を頼み奉りて念佛するより外は、心にも行體にも

出離の縁なき身なれば、寤ても寤ても念佛して往生を最後に任すべかりけりと心得させん

が爲の詞なり。自今以後は善惡につけて身をもてなさずして、念佛して往生をとげらるべ

し。往生より外は何事の用ありてか、とこしなへにわが心に綺はるべき。心を佗歎きて念

佛を信ぜられざるは身をもてなしたる謂れなり。我に往生の縁一事もなしと心得られて後

は佛をたのます。申念佛に信心おこらずしては、往生いづれのところにかあるべき。業ふ

かしと心えぬれば、いよく念佛にすすまれんこそ、業深き心が往生の法機たるべけれ。

念佛にだにもすすまれば、往生の縁ありと心得たらん心こそ、念佛の知識なれば、いよいよ

よまうされば本意は遂らるべし。命をながく思ひなしてこそ一切の事にはなづめ。出息入

【最後】決疑録には、最期、とあり。

【綺はれば】決疑録には、綺はざればとあり。

息を待たずとしりえては、身に綺ふことあるべからず。唯念佛せらるべし。なを身に綺はれば、いよいよ念佛せらるべし。はなつ共捕とどめえぬ旅の本尊持蓮華二遣之。あなかしく。
南無阿彌陀佛。

或とき衆に示してのたまはく

この時衆は念佛ひとつに歸命してのち、往生ばかりを一大事とおもひたる信心なれば、冥を貴びて人目をば但他に任すべし。心の非法をいましめたらんには、行すまじければ、また人目をつつしむいはれなきなり。

河村文阿彌陀佛別時念佛しける夜のまぎれに、前裁の温州橋を人に盗まれてさふらふあひだ、物を愛するに付てこそかかる事も出来り候へ。大方かくのごとき物人の所望に付ては本意なき子細もありぬべくさふらふ。よて山水みな掘除て、植木は少々御用に入事もやとのこし置候よし、まうしあげける時の御返事

元來往生の大事こそ、是僧尼の本意にてはさふらへ。娑婆世界に心を留むる境界を愛するは、厭離穢土の志なき謂れなれば、また欣求淨土もいづれのと看にかあらはるべき。さやらの序に思ひ切てそこくになされたらんは、よくこそおぼえさふらへ。この盗人は

【切て】決疑録には、しりて、とあり

【申されける】決
疑録には、候ほど
に、とあり。

ほとけの變化とおぼえさふらふ。されば盗人とは思はずして、ほとけの護念のゆへにかく
はおもふなりけれど、心得られさふらはば、決定往生の信心にて有べくさふらふ。され
ばこそわれくも庭に山水植木などを莊嚴させず候。さりがたき人の縁にとまうされば、
それは持給ひても要有まじければ、つかはすべきよしを申されける。残る木どもさふらは
ば、つかはされさふらへ。鎌倉に所望の人々あまたさふらへば、つかはすべく候。大いな
るなりもの木は、庭にも有こそよく候へ。それをばはたらかさるべからず候。
南無阿彌陀佛。

同じ御端書に云

あたりの人時衆共の食を失ひうゆればとて、一人宛秋までさはくるべきよし所望候なる
こと、それよりあつらふること、いはれもさふらはね。寒へ死し飢死にもしてこそ、とく
往生すべき本意にて有べく候へども、身を一切衆生に任せて利益にむきたる化儀なれば、
世間飢饉のあひだ、信ずる人どもの一人宛も秋までさばくられさふらはんは、人の信心を
用ひずして義をいはるべき子細にもさふらはねば、世間たちなをり候までは、其謂れも
さふらへば、なにかくるしくさふらふべき。いつもさやうにさふらはんこそ、食物を旨と
したるにてはさふらへ。

【知識計り】決疑
録には、と計り、
とあり。

下野宇都宮上の三河の現一房根本の願主信心なき體なれば、それへ參るべきよしまうし
あげけるとき、つかはす御返事

物もらふて世を渡らんためならば、實に心にあはざらまし。往生の知識計りならんには、
何事につけても何の要かあるべき。としよりおはします那須の尼御前も信心おはしませば、
但餘所の善惡を打捨て、それをも見はて給はんこそ、ほとけのおんころにも相叶ひて我
身の往生も決定すべきなれ。我に用の有てこそ何事に付ても心のみじかけれ。往生の爲ば
かりにて身の用なくなりぬれば、朝夕臨終をまちて念佛申されんには、何事につけてか心
みじかかるべき。われくを離れて私の身を持たればこそ、かやうに心短くもの歎き
はあるらめ。かへすがへす愚癡なり。慎むべし。
南無阿彌陀佛。

小田解阿彌陀佛へつかはさる御返事

萬事を他に任すといふは、われくが迷ひの執心をもちひざるため、または用事をつくさ
ん爲に、身命を知識に歸命するかねの時、制裁を破らじこのしたを出じといふ誓ひは、何
事をも他に任すべからんには、此かねをうつべきなり。他にまかするといひて、人のかた
らひによりて出もし、制裁をもやぶらば、かねは何のためぞや。人にしたがふは身の用の
なくなりたる安心誓ひをなすかたは我ころにも人のすすめにもつかじたためなり。ほとけ

にあひ奉りてちかふところの契約なれば、この身を粉灰になさるとも、制戒をやぶらざれば、護念に預りて往生は遂べきあひだ、かたく是をまぼるべし。命の有程こそ身の用事をわれは叶へずして他に任ずるといふ理りはあれ。往生のしたにも眞實ならば、今此ふみの謂れを肝に銘じて、こゝろのことばになびかば、身の悦びたるべし。

南無阿彌陀佛。

衆式房へつかはさる御返事

これもとし寄て今日とも明日ともしらぬ身になりてさふらふ。この世にてはかこつべきものもなくなりたれば、今は心ひとつを佛にうちまいらせて、しづかに念佛して、往生の本意をとげらるべくさふらふ。

南無阿彌陀佛。

梅田の師阿彌陀佛へつかはさる御返事

ほとけに歸命し念佛して往生を欣求する行者これおほしといへども、みな在家出家のうちにおさむ。在家は本より胸に三悪四趣の種子をたくはへて、行業に憑むところなきのあひだ、一筋に本願に歸して念佛する時、信心退せずして本意の往生を遂げ、出家は無始生死の業障を厭ひ、父母親類を捨て、年來の居所を出で所住なふして去來す。然りといへども

貪瞋癡の三毒欲心慢心名利虚假等の輪廻妄執あきらめがたきあひだ、いきながら死して身命を佛に奉り、今生の用事を我意に任せし爲に、制戒をたもちて臨終までは身をこゝろに任せずして念佛すれば、ほとけの護念に預りて不退の淨土に得生す。その制戒といふは生死の根源をいとはんために、尼は法師にちかづかず、法師は尼女を捨離して、總じて用事をつくし、萬事を知識に任するなり。かくのごときなるあひだ、所々道場のひろければ、僧尼のあはひみだりがはしかりぬべきあひだ、兼日道場制文を書あたふるは、併大慈大悲の哀憐をたれて、もはら愛執の煩惱をさらしめん爲なり。僧尼を一所にをかず、兩方にわかつことはたふとき氣色にてもなし。面々の往生を遂しめんが爲に、兼てはからひ置く所を用ひずして、法師は尼に近づき尼は法師を厭はざるは、これたゞ誑惑無道の心、輪廻繫縛の妄執におほはれて、忽に往生の大益をうしなふともがらなれば、すでに佛制を背き、ほとけにはなれ奉るうへは、同床をもせば、あながちに同罪たるべきあひだ、ともに不信の犯罪たるによて、往生は空しかるべきなり。願主清淨の往生の志をもて寄進するところの衣食の二事、衣裳は畜生の皮と變じ、食物は地獄の焰となりて、身を梵燒せばこの苦何れの時か消滅すべきや。往生を遂ぬのみならず、惡業惡趣の淵にしづみて、もとの在家の罪よりも、百千萬倍大苦惱をうくべきあひだ、示しつかはすところなり。自今已後はいさゝかも尼と法師の居所をへだて、交りを遮すべし。師阿彌陀佛は左様の奉行にこそつけくだすところに目をたれてみて綺はざるは、内心同するゆへか、または上手氣色歟。

【相叶はぬ】決疑録には、はね、とあり。

【懺悔】五悔の一懺は梵語懺摩(Ani)の略、悔過と譯す。更に悔の字を加へたるは梵漢を并擧したるなり過去の罪惡をさとて悔い改むること。

【らんには】決疑録には、らんには人に、とあり。

人々にわろくおもはれし爲身命を惜みたる業障歟。また制文を偏執する歟。かたがた心得がたし。わが身をよきものになし置て人を教訓するこそ、佛智にも相叶はぬ我心の業障をあきらめたらば人もたがふまじけれとて、教訓するは人を教訓するにではなくて、我身の懺悔をする謂れなれば、かならず佛のおんあはれみをかうぶりて慢心なければ、人の我執もよはるべきあひだ、徒衆の爲自身の爲ふたつなければ佛道たるべし。このあはひを意得て、心に異論なくして、しかも教導せらるべし。異論なからんには善惡なければ、いひはからふ教訓にて自他ともに損害なかるべし。日來の我執を翻して、ほとけの護念を蒙らば、往生の大益を成すべし。この趣きをもて衆中に披露せらるべきなり。

南無阿彌陀佛。

橋本の現一房當麻の億式東式房が許へ私に太布をつかはす事ありけるととき、教阿彌陀佛のもとへしめしつかはさる御ふみ

氣賀殿より送られし時の御文は、對馬源内左衛門殿の許より溝野左衛門次郎殿是へは取次候あひだ、御返事も、とのごとくに詔へ參らせてさふらふ。いまだ紛れて参りつかずさふらふやらん。懺成人どもにてさふらへば、定めてまいりさふらはめとおぼえ候。またその序に薄き紙に東式億式が許へ太布みつのうちひとつ半づゝ參らすといふふみの見えしあひだ、是の時衆も人の私につかはすものを取べき謂れなければ、またその時衆も私

に物ものをもちて別べつしたる知人ちじんの方かたへ志こころざしを運はこぶべき謂いれもなし。かやうならんにをいては、
 のち／＼は制戒せいけいにそむきて在家人ざいけにんのごとくなるべきあひだ、自今じこん已後いごの爲ために此謂このいれを書かき
 つかはすなり。太布ふとのは是非ぜいはいに付つて非法ひほふの物ものなればとて、口くちの前まへにてやかせてさふらふ。衣え
 食じきともに願主がんしゆのはからひにて、私わたくしの計略けいりやくをやめん爲ためにこそ、われとはうからはずして、所しよ
 望まうの人ひとにつけて時衆じしゆをばわかちつかはせ、身みを私わたくしにはからんには、身命しんみやうを知識ちしきに參まゐらす
 るといふ、かねをうちながら、かくふるまひて、かねを破やぶるあひだ、いまだ欲よくをつくさぬ
 愚癡ぐぢにして、佛智ぶつちに相應さうおうすまじきあひだ、一大事いちだいじの往生わうじやうを空くわしくすべきゆへに、皆みなの人共ひとども
 の爲ためにまうしつかはし候さふらふなり。つやつやそのふみのうち人の誂あつちへと見みえず。二人ふたりの許もとへ
 のふみに書かたりしとみえしあひだ、このものどもの爲ためには焼やけて見みせ、その時衆じしゆの爲ために
 は此理このことりをまうしつかはすなり。往生わうじやうの志こころざしあらんものはこのふみを見て定さだめて悦よろこべし。
 無道心むだうしんのものはいたさぬよし人のなすごとく陳ちんじまうすべきなり。出離しゆつりの志こころざしの有無うむはこ
 れら體ていの序ついでにこそあらはるべきなれ。心こころの所欲しよよくを私わたくしに叶かなへるは、知識ちしきをはなれをのれが身み
 を持もつたるものあひだ、身みの爲ために人ひとどもかたらひ、身みの爲ために私わたくしの衣食えんじきをこととせば、願主がんしゆの
 さはくるところの衣食えんじきの二事にじ、みな畜生ちくじやうの衣食えんじきとなるべきあひだ、こと／＼しきには似にた
 れども、一陳いちちんやぶれで殘黨ざんたうかたからずといふ謂いれに相あひるべきあひだ、心得こころえの爲ためかやうに
 はまうしつかはし候さふらふ。聊いささかの事ことなれども廻心えしんしてこそ、ある事ことなき事ことにも業ごふは滅めつしさふら
 へ。身みの正直しやうちき不正直ふしやうちきをあらはさん爲ため斗たりならばこそ、廻心えしんせずともとまうす事ことは有あるべけれ。

廻心一念見彌陀とまうす時は、往生の志のものはいそぎて廻心すべきなり。廻心せざればみづから咎なきものといひ、正直の名をあらはさん爲なるあひだ、我執のものたるゆへに、自力のものにて他力の加被は蒙りがたかるべし。
南無阿彌陀佛

億阿彌陀佛并に命式房への御返事

往生一大事の爲にこそ、身命を知識に奉るかねをうちて時衆にも入ぬれば、知識に歸命の下に決定往生を遂らるべし。身の爲を思ひとむらはん料ならばこそ、命のうちの身の有様を進み退きもおもはれめ。されども凡夫の迷心の心には、知識をしたふ志は往生の信心のうちなれば、所詮にはたつまじけれど、その心を他にうつさぬ方便になすべし。實にはその心こそ護念に預るべきなればくるしからず。人の命は老少不定にして頼む理りもなくさふらふ。頼まざれどもおもひの外に八十までに老衰へて今は残りの命なければ、さだめなしとも謂れや有べき。又定めなければ若きが頼にもなるまじければ、必のぼりあふべき理りも有まじく候。されども不思議に互に残る命あらば、期せずともをのづから見参るとがなからん。女房へも別にまうしたくさふらへども、同じ事にて候へば、相構へて念佛の信心すたれさせ給はずして、たまたま値がたき人界の姿と生れ出で、不思議の本願の縁にひかれて、決定往生を遂給はん悦を胸のうちに持せ給はば、ものぐさき念佛もま

【心こそ】決疑録には、心こそ佛のとあり。

うされ、佛の本願も頼母しくして、護念に預らせ給はゞ、此うき舊里をば臨終一念に見捨て、淨土不退の處に往生を遂げ、たのしみをうけさせ給はんこと、中々まうすもおろかにおぼえ候。是程の悦をば心の中に納めて念佛せさせ給ふべく候と、このふみを見せまいらせ給ふべく候なり。

南無阿彌陀佛。

大耳作阿彌陀佛へつかはさる御返事

時衆所望の處へ御房達をつかはすは、ひとつは願主の信心をたすけて往生を遂させんが爲、または尼法師身命を知識を譲りて誓ひをなし、かねを打て我心に任せずして、業を滅し護念に預りて、往生を遂ん爲なれば、いづくにても知識の命に隨ひて、かねの通り破らざれば、決定往生を遂べきゆへに先つかわす。また是にあるほどは知識を頼む許りにて、身の業のほども思ひしらぬあひだ、佛恩をもあをがれず。さし離れてある時こそ、内外につけて身の有様も心得らるれば、本願の信もたうとく、知識の恩も感ぜらるれば、是にあるときよりも信心の人の許へつかされては、此世後世の身の行末も嬉しく、さやうにて住すれば、あたりの縁ある人も請じて、行法をも聴聞しては發心し、往生の志も出來るべければ、利益衆生も大切たるべきあひだ、この謂れを計らひてこそ、さのみ是に人のしげければ、次第に他所へ渡すばかりの事にてはあれ。かやうに佛の方便不思議をばおもひしらす

【同行】 同行道の
修行者。 同一信念
の人。

して、唯身一人の煩ひを遁れん爲の故に、こころせばき事ともを書つかはすは、誠の發心なきゆへか。又いつまでの命を思ひてか、煩ひを遁れんとは思はるべきぞ。愛心とは在家にては欲心慢心名聞利養の身をもてなさん爲に物をほしがり、身をたはひ命をおしみて誰惑不善なる謀をのみめぐらして、終に空しく死して三塗八難の苦に沈むあひだ、はやく六道生死の苦をまぬがるべし。適人界の生を受たるときおしみたまふともかなふまじき身命を、佛に歸命して知識の命より外私の身を心に任せずして、念佛まうし死にして不退の淨土に往生を遂て、輪廻の古郷をはなれんより外は身に用事なくなりぬれば、人に謗せられうちはりののしらるとも、捨てほとけに參らせぬる身なれば、われと我をいろふべき謂れなければ、打殺されんに下に念佛まうして往生すべき所得をもつあひだ、かやうにあたられても、昔は敵とこそおもひしに、今は敵却て知識となるあひだ、胸の悪業はひられて蓮臺となる悦をいだかんうへは、たれをか敵とおもうべき。敵なからんうへは、知識より外に身の得意も有べからず。そへられたる同行同侶こそともに知識の計らひものなれば、むかしは思はしかりしものにこそ、ひたかりしが、今はおもはしくもあれ思はしくもなかれ、知識より給はりたる同行なれば、ともに心をへだてずして行法をも怠らず勤め、また願主のあたふるところの日別の世事さはくりをも心に入れて、往生までの道の糧なれば、ものぐさかるべきにあらず。在家にては必ず三塗に立歸るべかりしその家内の營は、悪道にをつる道の糧となるをだにも一大事と營むぞかし。此謂れを心得ずして皆ものぐさが

【庫裡】寺院の
いどころ。寺尉。

るなり。人ためならばこそ、面々の身の爲にてはありけり。このふみの心をよくよく心え
ば、日來の心を引替て、ものぐさくとも悦のおもひをなさば、佛の御意にも相叶ふべき
なれば、このやうを全阿彌陀佛には是にて意得させぬ。慮阿彌陀佛即阿彌陀佛もこのやう
をこころえば、日來には似ず廻心のこころも出來り、庫裡のさはくりもふたごころなくせ
らるべし。在家にてこそ、のさはくるものも欲あるあひだ、虚妄誑惑の心ありて、それを
あきらめん爲、結解算用といふ事をもすれ。この御房達は聊も私曲偏頗もあれ、虚妄の
心をもおこさば、ほとけにまいらせつる身命を取返して、己が用事の爲にほとけの知見を
はぢずして、虚假ならばうちつるかねをやぶりたる過あるあひだ、往生の志なきものに
身をなしては、誰が爲にてか有べきと心えをなせば、人を疑ふべからず。我心にも偏頗
を持つべからざるあひだ、共にほとけの御心に相叶ふべきなり。人は如何に虚假不實なりと
も、それをうたがはざれば、わが心正直なり。又欲を離れたる謂れなるあひだ、生死を
はなれたる器なり。人を疑ふは己が偏頗の心を旨とするあひだ、欲深く發心せぬ謂れたゞ
ちにあらはるべし。されば疑はしくともうたがはざれば正直の心と伴ひ、疑ひの心もてな
さば正直の心にわかるべし。もとよりわれは家を出し時は、身命を佛に奉りて、飢
死寒へ死なんと思ひ切て、身を身ともせず心を心ともおもはずして、萬事を他に任せて走
り出たれども、かぎりある命なればいまだながらへてあるぞかし。纒なる命のうちの此世の
ありさまに、兎も角も願主に任せ他に任せて臨終を待ば何の煩ひかあるべきものを。さは

【流轉の業】 迷界に生死をつづくる業因。

【無慚の心】 大不善地法の一。自ら罪を造りながら自身をながめて毫も恥づる心無き精神作用をいふ。

くり細工をする業の身をいたづらに置いては、何の所得か有べきなれば、身を遣ひ心をわびしめ、今生の業を滅せん爲と心得れば、朝夕の振舞もみな業の滅すべき佛道修行となれば、往生の爲にはこの振舞までもたよりとなるべし。發心せずして身の爲の振舞ならば、みな輪廻の業となるべし。されば唯發心信心計りこそ往生の下地なるべし。信心なくばみな流轉の業となるべきゆへに、このやうを心靜かにひらき見て、はじめて信をおこし、本意の往生を遂らるべきなり。
南無阿彌陀佛。

上人より道俗に對して示したまふ御詞

適く人界に生をうけて、また三塗の古郷にたちかへらんは、悲みの中のかなしみなり。又信心深くして此度輪廻の苦をいとひて、往生の本意をとげんには、よろこびの中の喜びなり。かの悲みを歎きこの喜びをおもはん人は、誰が爲にかさのみ放逸無慚の心をもてなすべきや。
又云、本より一切衆生をば、第六天の魔王といふなるかと領して、三界六道を出さじと方便するあひだともしては往生の方について、違縁どもが出來するなり。兼てころえすんば敵にもおそはるるがごとく思ひまうけつれば、さはがずして不覺をばすさまじきやうに我心にこころをおきて、違縁をもちひずして本の安心に立歸れば、佛智に相應すべし。纒

【往生の一事を】
決疑録には、一大
事を、とあり。

【他力】自己以外
の力、即ち阿彌陀
佛を信じて極樂に
往生すること。

なる一期の中、妄想顛倒したる業にひかれて、日來の信心もとゞこほれば、その一念にて
魔縁にうけとられて、不信の心の伴ふあひだ、往生の本意を空くする行者の間々みゆるは
この謂れなり。往生一大事をば輪廻の業には如何替べき。頭かたぶけてはじめの一念發心
に立歸りて念佛まうす人をば、無量諸魔常讚嘆とて、もろくの魔縁も却て讚嘆し、護念
の佛菩薩達もことごとく悦び給はんずれば、この得失はたゞ一念のちがひめなりとかねて
こゝろえべきものなり。

又云、人は見上手こそあれ、見え上手はなき事なり。縦ひ同行時衆どもはあしく心にあは
ずとも、よくて我心にかなへんためにてはなし。往生計りをこそ守るべければと心得て、
少々の僻事をもおもひゆるさずば、我も往生の一事を心にもつあひだ、この心中を佛の護
念あるべきなれば、かならず本意をとぐべきものなり。

又云、出家のともがらは、身をもてなす心にしたがはずして、佛智に相應すべきものなり。
又云、まことに往生一大事と思ひたらんに、今生の身何程もなき命の中に、いかでか己が
輪廻の妄念にはともなふべき。しからばなんぞ心にものおもはるゝ身の心ぐるしとは佗歎
くべきや。我身を業ふかきものと心得ぬれば、その心にしたがはずしてその業滅す。かく
心えたるとも、なを我心は妄念も深ければ、いよく生死をはなるまじかりけりと領解す
るこの心こそ、我執もたをれはてゝ、ますく本願の他力もかたじけなく、名號の不思議
もたふとくとなるべきに、この尼法師らは誠の發心なきあひだ、耳もきこえず心も消へて、

【無所得】 心に何等の一物をも存せざること。無執著なること。

【僧祇劫】 阿僧祇に同じ、梵音アサンクフヤ(Aśamukhi)無數、無央數と譯す。

【みなもて】 決疑録には、一大事を、とあり。

【歸命】 歸は趣向の義。身命をさし出して佛の救に歸投すること。

あひがたき知識の室に入ながら、更に聞どもきかざるがごとく、淺間敷次第なり。

又云、故聖の時九州修行のあひだ、豊後國の杵原大明神の神主念佛者にてありしが、或時

社壇に通夜したりける夢中に、寶殿より殊勝の宮殿を給はりける。是を開きみるに、その

扉幾重ともなく重なりたるを次第にひらき見るに、結句は何もなく虚空になりたると見侍

りけり。これ如何なる謂れなるらんとまうす事のありき。もとより佛法はさまざまに修行

して貴き法位ありとさとれども、つゝには無所得なるを、菩提心おこらず。欲心つきざる

輩は、求め得る所有べきやうに向ふがゆへに、僧祇劫を経て生死をはなれがたし。或

は鐵饅頭をかめ滋味思量をたべよなどをしへたれども、口にその詞を囁りたる計りにて、

自身の修行とはなさず。みなもて外に法の大小をあらそひて、如來の本意に違背せり。こ

れらをこそ佛をおもひ經をおもふともすれば地獄の炎ともかゝれたれ、此詞を人のおそる

るは愚癡のいたりなり。

又云、智惠なく一念發心せずしての行體は、何十年を経たりとも、さらに佛道に相應すべ

からず。そのゆへは生式は故聖のとき東域修行より西國四國までも飢寒ともに凌ぎ來れど

も、まことの發心いまだなきあひだ、當時は正體もなふしてかねをうち誓ひをなす言語を

だにも前後を失ひたり。過去の修行その功なき謂れもまた顯然なり。

又云、出家發心して知識に歸命すといひながら、われくがそはあたりに居して、尼に馴

【悦びまうすに】
決疑録には、まう
し、とあり。
【あひぐして】決
疑録には、たえし
て云く、とあり。

婦人にあてがひたるなり。この心にては、いかでか佛意にも相應すべく、また往生をも遂
べけんや。其無道心のいたすところなり。

又云、増賀僧都發心ののち、空也上人に行遇て問て云、「いかがしてこのたび生死をはなれ
侍るべき。」と。上人答曰、「貴邊こそ當世の智者といはる人にておはすれば、左様の事

をば尋まうすべけれ。我は愚癡の者にしてしかるごとき事は覺悟せず。」とて行過給ふを追つ
け、上人の袖をひかへて、「然るにてもたゞ一旬授け給へ。」と涙を流してまうし給ひけれ

ば、上人「捨てこそ。」と計りいひ捨てやがて通り給ひぬ。この「捨てこそ」の詞いかが心えん。
此人は本より捨聖にて本師慈惠の僧正になりて、悦びまうすに院の御所へ參ぜられけるに、

阿女牛に乗りこもきれ著て、干鮭といふ物を太刀にはきて、僧正の車の前にあひぐして、
「世間こそ苦しけれ。乞兒の身こそ楽しみなれ」といはれける時、僧正車よりおりて、「是も

利生の爲にてさふらふ。」といはれける。かゝるたふとき人に向ひてなを、「捨てこそ」との
たまひけれ。もと捨たりと思へる心振舞のその執心を捨てこそとのたまひけるなるべし。

おほかたまことの智者は身をすて欲をはなれて、一切に著をなさず。名利を捨てのち外相
はかくのごく振舞といへども、心内の業體はむかしにもかはらず、心行相應することなき

あひだ、衆生の業をあきらめ、愚癡闇鈍の輩に少分もたがはざりけりと心中退屈して、
斷惑離欲の振舞はいさゝかも懈怠ならずして、内心一切に同ずるを般若の智慧と名づくる
あひだ、おぼろげにしては人の心得べきことにはあらず。たとひ聖教釋義につきてこの理

を領解すといふとも、その修行を證せんこと有がたかるべし。

又云、一切衆生の心はみな上を望むあひだ、本願の強縁を頼む方便なくしては、我に出離

の縁はなかりけりと落居することはおほかたかなふべからず。彼悲願を所依として自身の

罪障を思ひしり、信心すたれずして本意を遂るは、大慈大悲の願行の不思議なり。智者

聖人といはれし人々、上古には道心堅固なるによりて、ありの儘に我こゝろの生死はなる

まじき謂れを信知して、おほく本願に歸して往生を遂ぐ。今の世は人々道心なきあひだ、

自の業因をもあきらめず。自然の法位を経論にあらはすを、その理には相叶はずして文

を誦し義を談じて面々にそら悟りをひらき、みな／＼今生の執心著我の心にひかれて、な

を六道にたちかへらんこと力なき次第なり。またをのづから自身の惑業を思ひしる機あれ

ども自性の少智ばかりにて、生死を出離するまでおもひよらず。暫く斷惑の位にて善惡を

こえざるあひだ、すべて血をして血を洗ふがごとし。是程の一大事に善惡の凡夫をはたら

かさずして、直に報土無漏の地に送り入らるゝ佛恩の忝さ、本願の不思議、凡夫の言語

およぶところにあらず、凡情測度しがたきもの乎。

又云、覺者は著相をはなれ取捨を離れて一切無所得のあひだ、狗子無佛性といはんも狗子

有佛性といはんもたゞ同然なり。狗子はたゞ狗子善惡取捨をなさざるあひだ、その詞はか

りにて法爾の道理に相叶ふなり。迷者はかくのごとき一句をあたへられては、その言下に

をひて、思惟をくはへ取捨をなすあひだ、いよく迷ふなり。それも道心有ものかくのご

【まで】 決疑錄に
は、までは、とあ
り。

【無漏の地】 無漏
清淨の境界をいふ
煩惱に汚されざる
世界。

【法爾】 古も今も
常にしかあること

【六字名號】南無
河彌陀佛を指す。
【仙神】決疑録に
は、佛神、とあり

【人人】決疑録に
は、人人へ、とあ
り。
【うつさる】決疑
録には、さざる、
とあり。

とく修行するほどに自然と修道の功をつみて此理を證得すべし。全分菩提心おこらずし
ては、沙汰の限りにあらざるものなり。

又云、或人そとば千本に六字名號を書て所々の靈驗所に納め、又は山河江海等に入置て仙
神の法樂にそなへ、群類を結縁にすくふべきよしまうすのあひだ、この人は念佛の信心い

まだ堅固ならざるのゆへ、常に病患にのみ沈んで、うへには法樂結縁のためと號して、し

たには身の祈りの爲かくのごとときの善業を好む尤理りなり。故聖存生の時、丹波國山内

入道といへるもの年來往生の志あるあひだ、信州善光寺へ詣けるに、夢に告て曰、わが

前へ何によて来る。我まへ、志あらば、一遍房のもとへ行向ふべしとしめされける。よ

てその時上人豫州利益化導の時分に相當て、彼入道下著し夢想のやうまうして暫く逗留の

あひだ、兩三日を経て彼入道所勞つきぬ。わづかに四五日ののちはや臨終にとりむかふ。

聖念佛すゝめ給ひしが、われくにもさらば御邊念佛勸めたまへ。人々見參すべしとて立

たまひて時刻をうつさるゝに、顔色かはりて目をあしく見あげ、指をしてものを書やうに

するあひだ、いかに今臨終とみゆ。念佛まうせとてあらゝかに勧めけるに、唯一偏となへ

てすなはち往生す。これは如何なる事ぞ。もし子息などに譲り狀などせぬことやあると所

從等に尋しかば、ゆづり狀は兼てみな書認められき。但し一期のあひだこの人毎日名號を

そとば六本宛所作に書れさふらふと答べき。是までも業になりてあしさまになるなり。然

るあひだよき念佛の行者は往生の道には何事も打捨て名號ばかりをとなふればほとけの加

【須臾】梵語の刹那(Kṣana)の譯。極めて短かき時間をいふ。

【濟度】衆生を苦海より濟ひ出して常樂の彼岸へ渡すこと。
 【離れざる】決疑録には、たる、とあり。
 【所化】教化せらるる人。

護に預るあひだ、限りある命もその期まではおもふことなく年月を送り、臨終に向へば極樂の付近と悦ぶほどにまうして、をはれば須臾のあひだに報土に得生して、永く生死の殃業をはなるゝなり。況やまた諸善をことゝして安心不如ならば、自力の難行となりて往生不可なれば、罪つくるものは己が三塗の業のおそろしさに、ひとすぢに本願に歸して、やすく往生を遂ぐ。かくのごとく功德善根を好むものは、いかにも所詮なき事に心をかくるあひだ、直入の機にあらぬことゝもの有なり。今の行儀は善には似たれども、往生の方にはつみ造るにおりたるなり。

又云、一切衆生の念佛の信心をこりて本意をとげんこと、またく知識教化の高名にあらず。彼が信心なからんをば、濟度におよぶところなければ、たゞ衆生の信心によつてなり。我見を捨ざる輩はみなをのれが教訓によれりと思ふあひだ、自力の迷情にほだされて、人の信心の有無を辨へしらざるなり。但し是は知識の我見を離れざる謂れなり。所化の心はまたちがふべし。われは信心ありかくてこそ往生をも遂べけれ。人の教化のちからによるべからずといはゞ、是亦自力なるべし。所化のこゝろはわれには往生の志もなく、信心をこりがたければ、佛知識を頼み奉りて往生を遂べしと心得なば、この心すなはち他力に歸するの信心なり。かくのごとく知識と所化の間に不可思議の謂れ有なり。又云、人の石をこのみ樹を愛する事、人に愛心をおこさんよりは捨がたし。人はこゝろのあるゆへに、彼が心にあはざる時は自然におもひろとむことも有べし。非情は我方より思

【都部】 決疑録に
 は、安、とあり。
 【法師】 決疑録に
 は、子、とあり。
 【廻心すべし】 決
 疑録には、懺悔、
 とあり。今云ふ懺
 悔の事を廻心と仰
 せられしは斯書及
 道場制文の一體な
 り。謂はく、廻心
 すれば必ず懺悔す
 べし。この故に大
 凡懺悔の事を廻心
 との給へり。然れ
 ば今改るに及ばず
 といへども、幼學
 の爲亦懺悔に作る
 一本もこれあり。
 よて今一所を改め
 て互兼の意旨を知
 らしむと。

ひをつけたるゆへに、をのれと捨離せんより外はかならずつながらるべきなり。

又云、何事にも今生の身のうへにて、目をよろこばしむる境界に心をとどめ、耳にきこゆる聲に著をなせば厭離穢土の心闕たるなるべし。しからば欣求淨土の志いづくよりか

出来たるべき。この世の事に思ひをとどめされば、をのづから厭欣の心あり。愚癡に無道

心なる法師どものものを愛し物を好むは、皆發心もせず厭離穢土のこゝろなきが故なり。

又云、越中都部の三式房の道場の尼稱阿彌陀佛、年來在家法師に愛執の心有ける覆藏して

廻心せざりけるが、重病を受けて既に終焉の時にいたりていふやうはかゝる事のあるを日來

はかくし忍びてしまし出さず。長老に廻心すべしとて水あみんとまうせしが、そのほど

の臨終近付て見えけるゆへ、但その心を懺悔せよと教ゆるに、さらばとていふべき氣色に

て、念佛一二遍まうして、のち手くれよといひてすなはち息たえ畢。此こと淺間敷次第な

るよし一分の願主彌阿彌陀佛訴へまうすあひだ、それをこそいへ。ものをかくしつゝめば

みなかくのごとく有べし。親類等をも離れえぬこゝろ、すなはちかゝる愛結となる。たゞ

同事なるべし。

又云、をのれが心に隨ひて我執ふかきやからは、念佛もまうしたくもなくものくさからん

には、まうさずして命終すべし。

又云、身命を彌陀に歸して往生の大事より外はその用なきのあひだ、藝能をすて智恵を捨

徳を捨ぬるゆへ、何事も人にをしゆる事なし。仍てわれは弟子一人もゝたず。面々信心あ

【しる時は】 決疑録には、心えんには、とあり。

【聖道門】 淨土門の對。佛教中の自力門にして諸善萬行を修し、此土に於て聖果を悟る道をいふ。

【難行道】 易行道の對。久しく諸の困難なる行を修して不退轉地に入ることを得る自力の法門をいふ。

【淨土門】 聖道門の對。佛教中の他

りて名號を唱へば、自他ともに往生を遂げれば、たゞ皆同行なり。このゆへに十八句の文にも他阿彌陀佛が同行用心大綱と書なり。かく心えぬれば無我の悟りなるあひだ、衆生は是を善知識と名づく。かく同行ぞといへばとて、知識の言葉を一徧にこころえて、知識も我も同行にてこそあれ必しも恭敬すべき謂れなしと領解せば、その人はまた信心かけぬべし。かくのごとく知識の心と所化の心と替りて、しかもひとつになるべし。善知識者は大因縁といふも、因といふは衆生なり。縁といふは知識なり。二にしてしかも不二の道を得るゆへに大因縁と説たまへり。尋常に人の同行善知識と心えたるは、ともに念佛をも勧め、勞の時は看病などするを同行善知識といへるは、たゞしばらくの假の姿なり。誠に心地をしる時はさきのごとく知得れば、親近するところの同行等侶すなはち人我甚しき情識も、われとひとしき悟りをえさするあひだ、これにて同行善知識とは名づくるなり。又云、たゞ人界に生をうけたる時の思出には、一大事の往生をとげずしては、さらにいづれの生をか期すべき。聖道門の修行は胸中に欲心ひとつも残らば、なを本分の佛性あらはしがたし。かるがゆへに難行道といふ淨土門は唯身心を願海になげ入、他力に乗じて生死の愛河をわたるあひだ、これを易行道となづくるなり。

又云、覺悟の人の前には一切ほとけとみゆべし。一佛成道觀見法界草木國土悉皆成佛といへり。又は森羅萬像即佛身不見菩提外有法と説り。一切の境相は無常の姿にしてみな轉變するあひだ、ほとけは眞如の性を得給へるゆへに、無我の悟りをえて人我を離れ給へり。

力門にして、阿彌陀佛の願力に乗じて西方淨土に往生せしむる教なり。【易行道】難行道の對。稱名念佛して疾く不退轉地に入るは、行じ易き法なるが故に易行道といふ。【眞如】諸法の實體實性、即ち絶對平等の理體をいふ。【名づくその】決疑録には、名づくそれを、とあり。

【五蘊】色、受、想、行、識なり。【五大】地、水、火、風、空をいふ。

又一切衆生の三界流轉は自業自得の生滅なれば、生死の大海涯際なし。このときは一切みな衆生界なり。しかあれば佛界衆生界の不増不減の法門はこゝにあらはるゝものなり。此悟りをえざればたゞ論議計りにて、つゝにその義を成ぜざるなり。さてしかも縁の衆生發心修道して、佛家に入をほとけの化益とは名づく。そのほとけの方より衆生の迷ひを濟度すべしなどゝこゝろえたるは迷者の心なり。

又云、人間には八苦あり。その中に身によつ生老病死なり。心によつ愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五陰盛苦なり。このうち生苦はおぼえず生をうけつれば、やがて老苦にむかふ。おひおとろへぬれば一切に捨離せられてこの身の力量をうしなふ。病苦とは四百四病是なり。死苦はまた最第一の苦なり。愛別離苦といふは、妻にわかれて悲しく、夫にをくれて歎き、財寶にわかれ所知をうしなひ、わかかさかんなりしこの身にもわかれ、かくのごとく一切にわかるゝ苦なり。怨憎會苦といふは外より我身を損害する怨敵なり。一切の死の縁みなこのうちに攝すべし。求不得苦とは一切にをきて求むるにえざる苦なり。五蘊盛苦とは五蘊の身をおしみ。諸事に煩ひ身體五臟六腑くづれ損じ、五大いつもやすからざるなり。此八苦を衆生は厭ひて、この苦にあはじと歎くあひだ、いよゝゝ苦しむ。佛はこの苦をば人界に生を受る程のものは遁ることあるべからずと心得て、此苦をいとひ樂を求る心にしたがはずして、この理を明らかに衆生界に同じ。一切の欲を離れ給へり。ほとけをばものを思はずおはしますと心えたるは愚者の悟りなり。しかれば佛は一切の業

を受とりて、苦を厭はず樂を求めたまはざるあひだ、業に別れ苦に離れて不退の安樂を得給へるなり。

【法體】 諸法の體性。萬有の實體。

又云、佛道といふは但欲をはなるより外は別の子細なし。此欲心本分の佛性をうづむ。たとへば春の野の草の雪に埋れたるも、雪きゆればもえいづるがごとし。我欲心ほとけをかくすあひだ、これをみな捨離すれば、そのしたより佛性漸くに顯現し、法體念々に増進す。生死を離るゝ道ばかりこそ大切なれ。輪廻の業をばいさゝかもゆるしては何の詮か有べき。たゞ欲に向へば如何なる人も眼かすむものなり。

又云、いかに頸をきられ手足をもがるゝと思ふとも、その業の心にしたがはざれば、やがて佛にうけとられまいらするなり。その一念にともなへば、たちどころに魔にとらはるゝなり。唯一切衆生の浮沈この一念より外はまたふたつなきものなり。

又云、生死をはなるゝには歎きはなきなり。出離の道といふは、一切の心をすて業にともなはざるあひだ、歎く事は有べからず。第六天の魔王といふは一切衆生を我儘にして三界をいださじと朝夕ねがひたばかりなり。一念も己が情識にしたがはゞ、はや魔王にとらはれたるなり。その心に隨はずして、知識の命に叶ひ、我心をすつれば、ほとけとひとつになりて、魔にはわかるゝなり。然るに佛道に入ぬれば、無量諸魔常讚嘆とて、もろくの魔も却て讚嘆するなり。

又云、出家の功德莫大なりといふは、唯家をいで頭をそりたる計りにはあらず。まことの

【色界】三界の一
欲界の上にある天
界にして、欲界の
穢惡の色を離ると
雖も、尙清淨の色
質あるが故に色界
と名づく。この色
の衆生は諸欲を離
れて男女の別なく
衣自然に至り、光
明を食とし又言語
とす。

【無色界】三界の
一。色界の色身に
繫縛せられて自由
を得ざるを厭ひて
進み入る世界にし
てこの界に於て總
て形色なく、ただ

出家とは父母親類に中を違ひ、をのれが本の心を捨てて、ほとけに歸命し、知識の命を仰
ひで心の所望をかなへず、いさゝかも輪廻の方へ向はざるとき、その身も生死を離れ、ま
た立歸りて父母親類をも濟度すべし。是を流轉三界中恩愛不能斷棄恩入無爲眞實報恩者と
いへり。又いまだ身をすてず在家にあるほどは、その親のあたへたる身を持ながら孝行の
志なければ、不孝のつみを受けて永く輪廻すべきあひだ、先善所の生を受さしめん爲に、
諸佛世々に出て止惡修善孝養父母を勧め給へり。是をやがて出離の道のごとくにおもひて、
善を修すれば生死をはなれたるやうに思へるはみな愚癡の至りなり。善力の所感何のうら
やましきところかあらん。色界無色界の快樂もつきぬれば、たちまちに無間に墮在す、今も
世間に大名などいはれ福力自在なるものは、皆前生の戒力福力なり。是則一切の業を
成就して、とこしなへに三塗の苦因を行す。『金剛經』に曰、前世罪業應墮惡道以今世人輕
賤故前世罪業即爲消滅と説れたり。福力漸々につきて其壽未盡便頓脫死とて、定業いまだ
なれども命つゞまりて地獄に入なり。されば因業つたなくして果報すくなく、人に賤しめら
れ、世にしたがひ、主につかはれて、暫くもやすからず、をのづから福業をうへざる人は、今
生に貧道なれば、それより厭離穢土欣求淨土の心も出きたり、一念の信心發起するあひだ、
善力强盛なるは無善無福なるにはゝるかにをとりたるなり。然れば戒を三生の怨などい
へるはかくのごとき事なり。生死をはなると道には善惡不二邪正一如なり。善だにも用事な
くならんには、また何のゆへにか惡業にはともなふべきや。出離生死の志あらんほどのも

識のみ有りて住す故に無色界といふ【無間】無間地獄のこと。【生ずとは】決疑録には自生ずとあり。

【それによく】決疑録には、よて、とあり。

のは、このことばを争か歡喜せざらんや。このよろこびの生ずるを大善生ずとはいふなり。又云、身につけ心につけて己に行徳ありとおもはゞ、魔にたぶらかしすまされたるべし。たゞ人に順じたる體にて内行清淨なるものは、魔をたぶらかしたる謂れなれば、魔の目にも見えぬあひだ、たぶらかすこともかなはぬなり。大方在家をいとはす身をすてぬほどは、中々業をも思ひ知ずして、やすく往生を遂るも有なり。一念發心してのちはまことに本業があらはるゝあひだ、それによく道心おこらぬほどは、生死はなれがたきところまでをしらずして、道心ありがほなるゆへに、忘念起ればその心にひかれ、著我をはなれずして、なを輪廻に立歸るなり。よくよく思量すべし。又云、その機のまことに發心せず廻心せぬほどは、是よりみること聞ことにつけて謂れなし。廻心せよと折檻する事ゆめ／＼なし。機のさきに法なく、病の前にくすりなしといへり。いまだ病なからん人には何のやまひありとしりてかくすりをあたふべきや。機の發心せぬほどは、やまひなきがごとし。いかなる教道も何の用にかたつべき。人の向はぬさきにあたへば我身にいまだ生死を離れず。愛我を捨ぬあひだ、誰をか又たすくべき。されば一切を人に任せてふるまふは我執心をもたてし爲なり。しかれば佛とひとつになりて、業にはゝなれたるなり。この振舞をもよき事と思へば、なを法執を出ざるゆへに、自心の生死はなれがたきところを領可しぬれば、こゝより一切衆生に同ずるとき、をのづから諸佛の悟りに同ずるなり。佛法は微細なるを。一念發心もせぬものどもの何事も苦しからずと

て、當世惡無礙なるは尤また理りなるべし。いかに殊勝の法位に住したりとおもふとも、
ゆめくその心を用ゆべからず。

又云、禪宗に進者理に迷ひ退者宗に乖くといひ、不進不退者有氣の死人といへるこの詞を
談じたるばかりを證得したりと心得て、誠に心地にさしあてざるあひだ、いよく迷を重
るなり。進といふはわれよく佛法を行じてその徳あり。さとりべき法ありとむかふゆへに、
いよくその理にまよふなり。退といふは出離のみちすたれて、もとの凡情をたくましく
すれば、ますく宗をそむく。すますととはをのれが徳をつのらす。一切の業をあきらめ
て、その心の我執名利慢心虚假愛欲等を日に隨ひ時を逐て捨てても行ずるあひだ、是を進ま
ずと名づけたるなり。しかればやがて此執心にひかれざるところは、しりぞかざる謂れな
れば、これこそ不進不退の理りなれば、すなはち有氣の死人ともいふべきなり。是を心地
修行と名づく。此外にいかなる法位にても別に證することあらば、眞の佛法にては有べか
らざるものなり。

又云、世間に謀叛殺害夜討強盜山賊海賊の犯科人あり。此等は好みてわが頸きれといふも
のなり。又人を戀したひ悲み、妄念をもてなし善惡是非をこととするともがらは、わざと
輪廻愛結のきづなを繼たがるものなり。たとひこれらを厭ひて道心あるものも、いまだわ
が心をも身をもすてず、愛著深重なる妄執をも思ひ知されば、その心愚癡にして、我慢偏執
をひさげてやゝもすれば己が心のおもむくときは、また本業に立歸る事のみあるなり。さ

れども愚癡ながらもいとふのは、おもふさまに貪著するには似べからず。よくく我この道の道心なく、愛執ふかきところを兼て知えていとはん智者は、なにのゆへにか己が業には繫縛せらるべきや。

又云、身の行徳心の智慧をもて往生を遂べしと心えなば、今の極樂には契當すべからず。

抑彌陀は衆生の爲に誓願を發し給へば、衆生は本願に歸して淨土に往生すべし。されば

極樂は他力所成の報利因果の界にあらざるあひだ、衆生の行業をばつのらすして、萬徳の

所歸たる名號の一行を十萬衆生にあたへ給へるゆへに、今の信心ばかり淨土のたねとなり

て往生すべし。その信心といふは、己が心に信心ありがほならば、いまだ本願には落居せ

ざるなり。我に信心道心なければ佛を頼み奉るより外はみちたえたりとて、他力を頼み

てひとすぢに念佛すべかりけりといふを信心とは名づく。しかれば機は生死をはなれぬも

のになりはてぬるうへは、いかでか我に信心ありがほには有べき。たゞ機を捨てまうせば、

かならず護念に預りて往生すべきものなり。

又云、時衆僧尼等臨終々焉の夕にいたるまで、一期不退の安心とは、厭離穢土の行者は樂

を捨て苦に向ふなり。最後にうくべき苦のゆへに、欣求淨土の信心は苦樂ともに捨て淨利

の樂を期すべし。

南無阿彌陀佛

他阿上人法語卷第二 終

【最後】決疑録には、最期、とあり。

他阿上人法語 卷第三

【最後】 決疑録には、最期とあり。【別願】 彌陀四十八願中の第十八願を指す。

【滅度】 梵語、涅槃(Nirvana)の譯

大患永く滅して四流を超越する義にして涅槃に入りぬれば、永く生死の大苦を滅し煩惱の潮流を超越するが故に滅度といふ。

【慈尊】 大慈悲の世尊。如來のこと

【入定】 禪定に入ること。轉じて死すること。

【一心三觀】 任意に起る一念の心に對して三觀を行ひ三諦の眞理を觀破すること。

【顯密兩宗】 他受用應化身の隨機の説を顯教といふに對し自受用法性身が自内證の境を説くを密教といふ。

後深草女院御所へ進する御返事

夫念佛往生は、最後終焉の一念にきはまりさふらふ。そのゆへは、一切衆生のむねのうち、貪瞋癡の三毒ありて、黃白黒の三雲と變じ、佛性をうづみて、たちまち業の輕重にしたがひ、三惡四趣にこの果をひかんとす。然れば生の終りに南無阿彌陀佛と稱すれば、かならず八十億劫生死の罪障を除滅し、不退の淨利に得生して、ながく六道生死のとほそをとづ。これすなはち彌陀別願の強緣名號不思議のちからなり。このゆへに臨終の一念は百年の業にすぐれたりといへり。されば天台大師は難解難入即詣西方值佛開悟といひて滅度をとなへ給ひ、高野大師は五十六億七千萬歳慈尊の出世を期して入定し給ひぬ。天台は一心三觀の觀解にたへたりといへども、根本生死の念想、野馬の如く猿猴におなじくして法位に相應せず。弘法は本來即身成佛の理觀事相に達すといへども、娑婆生死の闇宅無常轉變の世界に生をうけて、ながくたもつべき壽量なきがゆへに入定せり。顯密兩宗の祖師碩德、共に佛法は深厚にしてその際限をしらざるところをあきらめ、生死の大海は廣大にして、その無邊なるいはれをさとりえて、或は西刹の值遇を期し、或は龍華の曉をまちたまへること仰ぐべし信すべし。しかるに阿彌陀ほとけは報身無礙の智德、この理りをさとり給

【設我得佛…とレ
じ】この文無量壽
經願文第十八願な
り。
【六種震動】動、
起、涌、震、吼、
擊。

【最後】決疑録に
は、最期、とあり。

ひて、末代濁世の凡夫生死を出過すべきたよりなきゆへに、十方衆生のために因位の萬行果地の佛徳を名號のうちに攝在して、菩薩のくらゐにたちかへり、願をおこしてのたまはく、「設我得佛十方衆生、至心信樂して我國に生まれんとほつして乃至十念せんに、もし生ぜずんば正覺をとらじ」と。この時一切衆生名號を稱すれば、かならず淨土に生ずべき理り剋果するゆへに、大地六種に震動して、天より妙花ふり、虚空に聲ありて、決定必定無上正覺と唱ふ。こゝにをいてまた報身の果をえ給へり。是を酬因の阿彌陀と號す。衆生を因として正覺を成するがゆへに、すでに淨土の教主となりたまへり。本より阿彌陀ほとけは壽命長遠にして、壽無量なればところも不退なり。衆生は生死の命を感得してまた輪廻の古郷へ立歸るべきのあいだ。此他力本願不思議の名號に歸入し。娑婆生死の界を厭ひて、彼淨刹を欣慕したまふべし。淨土を欣求せずんば穢土の執心はなれがたく、穢土を厭離せずしては争か淨刹に御心をとゞめ給はんや。しかりといへども佛像を觀ぜんとすれば、妄念増多にしてとゞまらざること、流水に小舟をくださんよりもすみやかなり。散亂の心をこらさんとすれば、飛鳥の虚空に跡なきがごとし。然れば往生はたゞ信心の一念に決定す。その信心とまうすは、身は葬の露の日影をまたざるがごとく、命は雲間の電のてらしてほどなきがごとし。心はまた煩惱の牢獄にのみとぢられて、併自身に出離の縁なきことをありのまゝに知識の言下に信知し給ひぬれば、偏に阿彌陀ほとけを頼み、名號の一行を稱し給ふべし。最後臨終のゆふべ何れの日何れの時なるべしとまうすこと、

かねてこれを知がたければ、日夜の相續をすゝむることほりこのゆへなるべし。いかならん時剋にも名號を唱へたまひて月日はこび給はゞ、いまはの時を御目の前に傳え給ふべきあひだ、往生は稱するより外の安心あるべからずさふらふ。
南無阿彌陀佛。

龜岡殿へつかはさる御返事

【最後】 決疑録には、最期、とあり。

【五逆罪】 恩田に違逆し福田に違逆する五種の暴悪なる罪。殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧。出佛身血。

一日念佛往生の安心法門の所詮ばかりまうしさふらふとおぼえ候。命のうちの悟りの法にこそ、身の徳をも失をもとり捨ることにてはさふらへ。往生の安心は最後の一念に念佛をとなへ、六道生死輪廻の苦をはなれて、淨土無生の樂をうけ、生死の命をば娑婆に捨て、きはもなくながき佛の命とひとつになりさふらふ事は、いかなる五逆罪の惡人までも、名號のちから本願の不思議にてこの益をえべくさふらふ。されば身の得失はみな六道生死の善惡の生を受べき因果にてさふらへども、生死の古郷を離れて不退の淨土に生れ、永く生死をはなれ候。よろこびは、たゞ此本願の大慈大悲名號不思議の力にて候。あひだ、衆生の心のうちの一切妄執妄念虚假慢心名聞利養等、かやうの生死の種となる心のみ胸のうちにも晝もたもちて、我と生死を離るべき理りひとつもなかりけると思ひしり侍りぬれば、身にも心にも行にも願にも、名號をはなれて外には徳の有間敷ことを知えぬる念佛の行者は、いかなる心のうへにも念佛をとなへて、この心にいろはずさふらへば、名號にてこゝ

【三心】至誠心、
深心、廻向發願心。

ろの罪は滅すべく候。本より凡夫の心はみな輪廻のたねにてさふらふほどに、こゝろよりして心をさはくりさふらへば、たゞ血をもて血を洗ふがごとく、少しも薄くなるまじく候。名號の水をもて心の血をあらへば血すなはちおつべきなり。さればたゞとなふるより外別の道あるまじく候。かやうに自力をもて生死はなるまじき理りだにも至極しさふらひぬれば、名號をたのむより外は力つき候。うへは、たゞほとけを信じて念佛し候を、三心發得の行者とも決定信心の人とも名づけ候。されば心やすくさふらふによりて易行ともまうし、また行者のちからのいらぬをもて他力ともなづけ候。但し臨終にこの益を蒙るべくさふらふところに、無常の界にて人の命さだまらず。行末の命の最期、何れの年何れの月日の何時といふこと兼て知りがたきゆへに、夜も晝も常に南無阿彌陀佛と唱へて月日を送りさふらへば、かぎりのときはいつにても只今にても有べく候。あひだ、日夜の相續とまらうすもないまの臨終にかなふべく候ゆへに、たゞまうすより外は別の子細なしとはしめし候なり。この理り實にそのいはれありといふおんこゝろおこりさふらはど、そのしたは即三心にて有べくさふらふ。たのもしくおほしめされて御念佛有べくさふらふなり。

南無阿彌陀佛。

備中國須山六郎より進ずる狀にいはく、「御下に在りさふらふ程は惡業も遠ざかりさふらひしに、下國のゝちは罪障ふかくなり侍り、あらぬものになりてさふらふあひだ、御助

【おぼえ候ものか
な】決疑録には、
もとの心を、とあ
り。

けあるべきよし」まうしあげけるに、つかはさる御返事

これにては何となく馴むつび給ひさふらへば、身業のほどもしられずさふらひけるに、國
にてはふるまひも心根も業深く、あらぬものになりたるよし訴へたまふ。是にてこそあら
ぬ人にておはしましさふらひけれ。それにては只今出きたる心にてはなし。もとの悪業と
懈怠とに立歸らせ給ひてさふらへば、御身の業のほどを思ひ知り給ひて、いよく念佛に
信心深くならせ給ひてさふらはど、それこそ他力の行者にてはおはしましさふらふべけれ。
業もなき身になりて往生とげんとおもひ給はど、ほとけの他力不思議の行をば信ぜずして、
身の徳をことゝしたまふあひだ、道心には似たれども自力悪見にて往生は不定におぼえ候
ものかな。今まうすごとくにひきかへて、身はかく悪業にとぢられて、地獄におつべかり
けるを、この本願を聞えずしては、適人界に生を受けたる甲斐なくして、また泥梨にしづ
むべきに、ちかひの強縁にあひて、この不信懈怠の身往生の本意をとげんこと、よろこび
てもなをあまりありけりと心得たまはんには、また如何なる心かさのみ悪業をば好べき。
あてがはざるにをのづから善心常にあらはれて、さのみ不當にやおはしますべき。悪をも
てなせば悪道におち、悪心をやむれば悪趣の苦を離ると知給ひては、また悪にはともなひ
たまふべきか。善心はさのみものうくおはしますべきか。一念ひがめは悪業をえ、一念た
ゞしければそのつみを減するいはれを心えたまはど、心中はれていよく本願はたふとく
なりたまふべきものなり。

南無阿彌陀佛。

小田壽佛御房への御返事

女房達の勞のとき念佛を勧めさふらはんことは、若きにも老たるにもよるべからず、いかにも在家の看病の人はなどかなくさふらふべき。引起しかきおこし、さはくりさふらへ

ば、勞の時さはくらるゝほどに、もし命延ては心をおかざりつる思、のちには愛心となり

て、輪廻の業を結ぶことのあるあひだ、兼ての用意にまうすばかりにてこそさふらへ

此いはれを御心得さふらはゞ、げにもといふ御心はつかせたまふべくさふらふものゝ、た

ねは包みこめてさふらふ時はもえ出ず。かならず地にまかされどもおちゝりぬれば、潤ひ

にあたりてまさしくもとの草木となるがごとく、ひじりは包みこめたるたねのごとし。本

より父母の赤白二諦人となるあひだ、縁にあふときはかくのごとくなり。又紫雲の事往

生の時立さふらふは、その人の發心ひらけて蓮臺に託し候ときの色にてさふらふ。たゞ

別時行法などにたちさふらふは、往生の志ある人々信心堅固にして、世間のこと身のう

への欲を忘れて、面々に貴き心の心中にあるいろ、紫雲のかたちとたちさふらふ。その心

中に欲のなき時、何事もおもはず愚癡となりてさふらふは白きいろ。信心は白色なるゆ

へに白雲を體としてむらさきにうつろひさふらふなり。紫の色と見え候時はゝやこゝろ

出きたることにて候あひだ、心おこれば地水火風の火大紫の色と轉じ候を、紫雲とは

【おかざりつる思】
決疑録には、恩、
とあり。

【なりてさふらふ
は白きいろ信心は
白色】決疑録には
は黒きいろ信心は
白きいろ、とあり。
【地水火風の火大
紫の色と】決疑録
には、地水火風の
火大の赤色と三
色、とあり。

なづけ候なり。さればたうとき事にて候。信心なき人は是をみてもたふとからず、をのれが心に信心なきゆへなり。是等の瑞相は娑婆の念佛行者の信心の色ばかりなれば、念佛の外は往生に頼むべき行業なしと御こゝろえさぶらはぶ、いよ／＼御信心はさだまらせ給ふべく候。

南無阿彌陀佛。

高宮の切阿彌陀佛「先度下向のとき武州相州の飢饉を見をき候につき、御道場のさま御心苦しかるべきよし」などまうしあげゝる時の御返事

本よりわが身命をもたざるのあひだ、一切衆生の信心あるかたより供養物をもて、すでに八十にをよぶまでながらふるも、私の命にあらず。武州相模に飢饉ありといへども、毘沙門天王は佛法護持の權帝なれば、よもみはなち給ひさふらはじ。かぎりある命のきはまでは思ひなく候なり。またかつへ死すといふとも、往生の時刻になれば、わざと多聞天のかくて往生をせさすべきにてこそあるらめとおもひ候らはんずれば、それも案のうちに有べし。されば今日まではうへずしてむかしにたがはねば、のちを期せざるゆへに、心は只日來のごとし。

南無阿彌陀佛。

慈阿彌陀佛へつかはさる御返事

經論とは無際深廣の佛説、蒙昧管見の淺智いかでかそのこゝろをうかゞはんや。もし迷惑の識情をもて義理をくはへば、佛智等同の思ひをなすの咎ふかく、佛性を埋みてながく佛種を生ずべからず。人師の解釋とは智者は佛説を闡ひ、萬機のうへに對し、信心の請に應じて衆生六趣輪廻の業障は、出離の因行あることなしとしめして、他力本願に歸入せしめ、往生の大益をあたへんが爲なり。またくその義勢をもてあそばんがためにはあらず。をよそ佛道を勤修するの根機に人執法執の二煩惱あり。實の菩提心おこらざるものはこの煩惱捨離しがたし。然るに今淨土門に入て他力に歸し、佛願に乗ずるものは、二執を斷ぜずしてをのづからのぞき、二空を證せずしてをのづからあきらかなり。いはゆる人執の煩惱を斷ずとは、たくはふところの所領財色妻子眷屬等を厭捨して、三毒五欲の道を塞ぐゆへなり。法執の煩惱を斷ずとは、自心證得の智慧經論聖教を棄捨するのゆへなり。これすなはち誠諦の金言を捨よといふにはあらず。無疑無慮乘彼願力の先達任せ奉るものなり。まことに知ぬ淺智愚鈍の識情を以佛教を度量すれば、そのつみ五逆にまさるがゆへに、自の見解をすてんためなり。然れば心身所具の煩惱を覺知し、愚癡蒙昧のおもひをなすのとすき、法執破れて佛智に相應するのあひだ、これを菩提心と名づく。當世諸方の道俗を見聞するに、いさゝかも欲心慢心名利虚假等の惑業をさけずして佛法を談ずるのあひだ、念佛者といへども他力本願の感なきことは、本誓所被の應をかうぶらざるなり。何況や聖道

【二空】 人法二空

【五欲】 財欲、色欲、飲食欲、名欲、睡眠欲。

門の意は、菩提心を發さざるものはむねの佛性顯現しがたし。つらく／＼ことのこゝろを案ずるに、往生の信心眞實なるにをいては、有爲無常の界は旦暮の臨終その時節かねて辨へがたければ、相續の稱名一行三昧を廢せずして本意をとげらるべきことなるに、交衆なき閑居に止住していまだ發心せざるのゆへに、つれ／＼をなぐさめんために、およびもつかぬ經論をみおぼえて、かくのごとく書送らるゝの條無道心の至り、あげてかぞふべからず。これ併身を捨たる氣色にて、名利の心を咎とは思ひしらずして愛著するゆへに、はぢをわきまへずわが筆にてもなき釋義をかきうつさるゝの條、われ／＼にをしへん爲歟。自身の智慧をあらはさん爲歟。これらの義理を聞て人を教へんため歟。いつまでの命をもちてか知識の教導にも向ふべきぞ。今は菩提心おこされたりとも、他力本願にはいよくとをさかれり。所詮往生をさしをきて淨土の章疏をもてあそばさ、鋤かけたる板に斧をあてんがごとし。何れの時か造作の用を爲すべきや。はやく鋤の稱名をおこたらずして、袖とりの斧をすてられれば、終に往生淨土の功を遂らるべきものか。所詮をとりて廣説をとむ。所望の名號二十幅の内、一枚半の名號三鋪ならびに油煙一挺これをつかはしさふらふ。

南無阿彌陀佛。

或人の許より我身の有さま昔よりもをとろへ侍りて上人の許へ参りえぬことを歎き、又

生式房の往生のことなどまうしあげゝる時の御返事

生式はとし寄りさふらへばこそとく死してさふらへ。老少不定とはまうしながら、まよひのまへには若きはなをたのみあるかたも候ぞかし。年老て死しさふらはんは案のうちにてさふらへば、何をか歎きおしまれ候べきぞ。おしむとていきかへるべき謂れもさふらはず。かくこゝろえてこそわれもとし寄てとく死なば、たのしき浄土に参りて、娑婆のくらしめはみな夢となりて、極樂のたのしみへのみほこらんことの嬉しさに、身の衰ふるかたも大事なく、世間のむかしにも似ず、便なきこともいつまでか有べき。いかにたのしみほこりたりとても、地獄におちて、浮ぶ期もなからん苦を思ひしれば、僅なる命のうちの娑婆の苦は、浄土の樂をすゝむる便となるなり。苦のおほきかたはその憂さをやがて穢土をいとふ境界となすべし。往生の爲にはこゝろにかなひたらば、妄念もとどまらずかなはぬにこそ、浄土はいそがるべくさふらへ。浄土をばいそがずしてこゝのわづらひをなげかば、歎きて叫びたりとても、いよゝゝ浄土には遠さかるべし。ましてかなはざらんことをうれへて浄土を忘れんことは、本より往生の志なかりけりと、わが心の業ふかきことを思ひしりて、これほどに往生の志もなきものを、念佛まうさば來迎引接をたれて極樂へみちびき給はんといふ願のたふとさ、ほとけの慈悲の深さを思ひ知給はゞ、身もゆたかならんには、何んよてか知識よりもかやうの日出たき往生の法門をもうけたまはるべき。貪になりけるこそ往生の便なりけれとおもひとりて念佛まうし給はゞ、今世よりたのしき

【まらす】決疑録には、まれとあり。

大福長者となりけるものと、日來の心をひるがへして念佛まうしたまはゞ、此世後世の悦び何事か是に過さふらふべき。念佛はたゞいかなる妄念のうへにも、悪心の時も悦び思ふ折ふしも、往生淨土の望一念稱名より別のしわざ有べからずさふらふ。兼て死する時をしらざるあひだ、夜も晝もきうすより外は別の子細あるまじく候。日來の歎きの心をたのしみのおもひにとりかへて、往生を勧め奉らんがため、かやうにはまうしさふらふなり。

南無阿彌陀佛。

勝田戒佛房へつかはさる御返事

甲斐にて二三日わづらひさふらひしかども、やがて別のことなくなりて候。おなじ月日のおなじ山端を出入がごとくみえさふらへども、はては人ごとに老となり候なり。また人は老たるにも若きにもよらず定めなき謂れは、目前にみえさふらへども、おもひ知人はありがたくおぼえ候。かく無常の理りを思ひしらせ給ひて、いよく念佛の信心をこたらずして、淨土へ參らせたまはゞ、山本殿と一處にはなれぬ友とならせたまひさふらはんのみこそ、御悦にては候。べくさふらへ。ことはなめらかに手うつくしく習ひての御用はあるべしともおぼえず候。髪をもさげさせ給ひてさふらはゞこそ、なさけの便ともなるべく候へ。尾にならせ給ひてさふらへば、ほとけに近づきまいらす便こそあらまほしくさふ

らへ。佛は人の心にかなひ日にたつのやさしびれたるかたをばみな厭捨して、心に欲をは
 なれ、身によきものをきず、口に味ひをこのますして、生死のきづなを切てこそ、輪廻の
 苦をもいとほせ給ひてさふらひしかば、かなはぬまでも發心し、姿をかゝるほどにてこ
 そ、其跡かうばしくさふらはめ。世中の人つらの方は、冥途の苦となりさふらへばこそ、
 心ある人はみな厭ひさふらふなり。むかしは尋常なる事を好み給ひて、下司しきかたをば
 さけらはしくさふらひしかども、昔の心を翻しさふらへば、御心も御ふるまひにも、今
 はむかしをさるさまになし候はゞ、それこそ尋常なる御心根ふるまひにてはおはしまし
 さらはんすれば、此世も後世もおんころやすくして、往生をとげさせたまはんすること
 にて候。この理りを心えさせ給ひて、もとの心をひるがへし、御念佛怠らせたまはず、佛
 のあはれみをかうぶりて、必往生を遂させ給ふべくさふらふ。また教あみだぶつのこと
 づて委く見候。又山本殿にをくれまいらせ給ひて、おさなき尼ごぜたちをとりあつめまい
 らせて、嘸御心の隙もなく、御身の暇もなくさふらはめとおもひやり参らせてさふらへど
 も、心易く隙ありても何の悦びかさふらふべき。月日積りさふらへば、皆死のみちへこそ
 まかりさふらへ。心ぐるしき中にもたゞの在家にて候とも、今は道場のさはくりにてさ
 さらへば、念佛の聲もさすが耳に聞えて、つねに念佛まうけさせ給ひさふらはんずれ。今
 こそわづらひなる體にさふらへども、のちの御爲には御悦となるべく候。唯むづかしと
 おもはせ給ふばかりにては、御所得も有間敷さふらふに、かやうにだにも御心えさふらは

い、今世後世の御悦ごんごせごせいごんごらこびとなるべくさふらへば、わづらひは亦御身の爲またごんみに大切なる謂れを御心こころえさふらはゞ、命いのちいくほどもおぼえずさふらへども、つねにかやうに御をとづれあるべく候さふらふ。

南無阿彌陀佛。

人見音阿彌陀佛へつかはさる御返事

先酒のみ得意を求めて大合子を好まれさふらふは、上戸にして思慮なきのあひだ、たまには持物をも酒しろにかへつくして、結句無明の酒にゑひて、迷ひものとなるべき因縁のころにひかれて、かくのごとく思慮なきは愚癡の至りなり。われ／＼は人にわろくいはるゝをもて身の所得とす。そのゆへはもとより我身をばまよひの凡夫と悟るあひだ、人のわろしとあたふる時は、われも身をよしとは覺えぬあひだ、人のことばに同じてさやうにいふ人を知識とするゆへに、大切の方人たるうへは、いかにあしくはおもふべき。またよくまうさん人を謂れなくよくいふぞとは咎むべき理りもなきゆへに、信謗ともに善悪をなさず。但し信ずる人は心に信あるゆへに、彼人の往生の志ばかりをこそ心えとしさふらへば背くべき子細なし。謗する人をそむかば、われをよくいへとおもふにあたるあひだ、身をもてなしたるころ慢心となるゆへに、わろくおもふともわろからざれば、善悪なくして佛意に相叶ふべし。われ／＼を謗するものをせめばちをあたふるは、われ／＼はおも

【わろからざれば】
決疑録には、にく
ま、とあり。

【幾度も身の】決
疑録には、信心、と
あり。

はぬことをふるまはれさふらふゆへに方人にてはなくして、誘ずるともがらとおなじうし
て誘ぜらるゝにてこそ有べくさふらへば、鬪諍の基にして佛意にも相叶ふべからず。われ
われを信ぜざるものは誘ぜずといへども、人の誘するをばねたき心を起さず、信ずる人は
志あるあひだ、ねたき心のおこる信心の姿なれども、咎むる時は佛の御心にあはざるゆ
へに、此信心のこゝろを空くなすべきあひだ、信心空しくしては往生の心失べし。心は幾
度も身のあらん程は、ねたくおほゆれども、その心にしたがはずして悪縁をさるこそ、往
生の信心にては有べくさふらへ。かやうに御心えさふらはゞ、佛智にも相叶ふべく候。ま
たわれに信心なしとこゝろえて、廻心懺悔して念佛せよとまうすは、今いふごとく誘する
人をせめたく、怨をなさんずる心をおさめかねて、心に随ふ方人の心は信心の色なれども、
咎むる所は信心をうしなふあひだ、咎めたき心を捨て、悪縁をさるところを廻心懺悔とは
まうすなり。改悔すれば罪滅すべし。悪き心をとほせば信心を失ふ。身の損たるべきあひ
だ、廻心懺悔して念佛まうすべしとはまうしさふらふなり。總じて往生ほどの一大事をば、
凡夫の悪き心をもてはいかゞなるべきぞ。なればわろしと知てほとけを頼み、念佛まうす
ときは他力なるゆへに往生を遂べし。身の行徳すべて我かたに聊も往生を遂るちからを持
たる謂れをおもはゞ、自力たるあひだ往生不可なるべし。佛の護念なきゆへに、かくのご
とき謂れは自力にて往生せずとはまうすなり。また魔道とは外に有べからず。外にありと
心えるを外道と名づく。魔道といふはみづからが慢心なり。この慢心天狗となりて愛宕山

【くる人】決疑録
には、くる事、と
あり。

【聖天を】決疑録
には、聖天と、と
あり。

此良の嶽なんどにすむ。これ人に勝る心を持て我よりうへのものなしといふ高慢なる心なり。在所は高き山のうへに住し、六道の中には畜生道に攝す。たかく身を持あひだ、天狗とはてんのいぬとかけり。又制裁やぶれざれば、信心かはらずして誓をたがへざるゆへに護念に預るべし。破るれば信心なきゆへにほとけに誓ふところをそむくあひだ、みづからうちたるかねをわれとやぶらば、往生の願もこの破戒につれて信心亂るべきなり。やぶらざれば信心臨終までとほりて、必念佛まうして往生をとぐべきのあひだ、かやうにしめしまうすなり。又人はありのまゝなるこそよく候へ。かやうの是非は皆魔にたぶらかされてみづから本性の信心を失ふあひだ、人偏執するとおもへども、その心はわが胸のうちにあるあひだ、わが慢心かならずわが業となるべし。本より人は人われは我なれば對すべきいはれなし。そのゆへはわれ病とき、この苦を人うけとりて、やみたすくる人あるべからず、また人のやむ時われ請取てやみ、人の苦痛をやむることなし。人の得失は人にあり。我得失は自心にあるあひだ、わが善惡の心を捨て、人にいろはざれば、かならずみづからの胸の中佛座となるべきゆへに、かくのごとく心得るを智者とも信心者ともなづく。又かくのごとき瑞相不思議はその人のまことの信心に感ずべきあひだ、たのもしく思ひ給ふべくさふらふ。いかに名號を文匣に入具し、聖天を祝ひ奉るといふとも、その人に信心なくばかくのごとき不思議は出来るべからず。自今已後はいよ／＼信心堅固にして、往生の本意を遂たまふべくさふらふ。又嵯峨の釋迦、善光寺の如來、此二尊はともに在世よりの

【沙羅雙樹】釋尊
 拘尸那城の外、跋
 提河の邊にある娑
 羅林に入りて入滅
 し給ひし時その四
 方に各雙本の娑羅
 樹の特に高く立ち
 たるがありしをい
 ふ。

古佛にて日本に出現したまふ。釋迦如來は穢土の教主にて、衆生に應じて利益を施し給ふ。あひだ應身と名づく。穢土は生死の界にて、人の命久しからざるゆへに、釋迦佛は沙羅雙樹のもとにして滅度をとなへ給ふ。されば衆生は類同せしゆへに、人ごとに拜まれさせ給ふはかくのごとき謂れなり。また阿彌陀如來は淨土の教主にして無量壽と名づく。ながき御命のほとけなれば、淨土に居して穢土には出給はぬゆへに、往生してのち淨土へ參りて拜み奉るべきあひだ、善光寺の如來の人におがまれさせ給はぬはこの謂れなり。されば阿彌陀ほとけを拜み奉らんとおもはん衆生は、必往生をとげて壽命長き身となりて、輪廻生死の穢土をはなるべきのあひだ、淨土の法門はこのゆへに厭離穢土欣求淨土とはすゝめられたるなり。又一切衆生といふは無始已來六道に輪廻して無窮の生死をうけたり。六道といふは、地獄餓鬼畜生修羅人天是なり、此等の衆生は本覺の都とも迷ひの凡夫ともしることなく、業の輕重に隨ひて六道に輪廻する理りは、人界に生をうけて本覺の都を迷ひいでけるは、父母の赤白二涕の愛結をうけとりて流轉しけりと知り、はじめて菩提心をおこして、身を捨心をすて、孤獨になりてのち、一切衆生は外にはなかりけり、みづからが一心を他の衆生とみへだてけるといふ悟りをえて、六道の衆生とへだてなくなるをほとけと名づくるあひだ、これを本覺とも名づけたり。故に一度に本覺の都を迷ひ出しとも、別々に迷ひ出しともいふ。あてがひはすべて有間敷さふらふ。念佛者はかくのごときの法門を知てその所詮有べかず。たゞなにもしらぬものになりて、ほとけを頼み臨終をまち、

往生してのちこそみなしられさふらはんずれ。今生にてはその詮なくおぼえ候。たゞまさしき臨終かねて知がたければ、常に念佛して月日を送り給はゞ、臨終はいつにてもかならず目のまへに来るべく候。
南無阿彌陀佛。

或人往生の安心尋ね奉りければ、つかはされたる御返事

【最後】 決疑録には、最期とあり。
【忘れて】 決疑録には、いみて、とあり。

念佛往生は念佛即往生の行なれば、まうすより外は別の安心なしといへども、信心なき人
は最後の時念佛をさしをきて、必死べき命をもたすからん爲に、醫師よ陰陽師よ祈り祭
りとて、命の惜き心にばかされて、死すべきかたを忘れて、不定の命をば必延んと心え
て、最後には念佛をまうさざるあひだ、往生を遂ずしてむなく死し、業の輕重に隨ひて
六道生死の苦に沈んで、多生曠劫浮ぶ期あるべからず。是はこれ念佛に信心なきゆへなり。

信心のおこれる行者は、たま／＼人界に生を受けて心ある身となり、假初なる命をもちなが
ら、このたび空しく死して三惡道の苦遁れがたかるべし。一生はこれ風の前のともしび、
萬事はみな春の夜の夢のごとくなれば、假令七八十年の命を保つといふとも、過ぬる跡は
空しくして、死する一念は念々につゞまりて、人ごとに替りめあるべからず。されば老少
不定なる理りは、先達人の中にありて耳の餘所に聞え目の前にみゆる類ひ、人のをしへな
くとも理りを見聞して必おもひ知たまふべし。律師の御房子孫達にわかれて、残る御身

【耳の餘所】 決疑録には、そこ、とあり。

【最後】決疑録に
は、最期、とあり。

とても頼みあるべきにてもなれば、何に心のとゞまりてか一大事の往生を空しくなしたまふべきや。これら體の世間無常の理りをもしらざるあひだ、月日をいたづらにうつしもてゆかれ、昔の遠くなるに隨ひて、すゑの命は短し。かならず臨終いつなるべしと辨へざれば、只今にてもやあるべからん。さればまさしくその期を知ざるゆへに、日夜念佛を唱へて明し暮せば、臨終はかならず目前に待うけたまふべし。みな人の往生を遂ざるは、最後に念佛をまうさざるゆへなり。信心の行者は命の終りを我と知まじければ身にいたはりを受るとき、相續して念佛を怠らざるは、この謂れにて有べくさふらふ。人のかたちは受がたき生にてさふらふ程に、此度かならず信心をおこして、往生を遂させ給ふべく候。如何なるたふとき善業戒行も、凡夫の心のうへの萬行は人天輪廻の福業とこそなれ、生死をはなるる行體にてはあるまじく候。悪業を造れば三惡道に墮してくるしみをうく。されば善惡ともに往生の助とならざれば、このゆへに阿彌陀佛願をおこさせたまひて、名號を衆生に授け、生ながらほとけになるみちなければ、臨終に來迎し、行者を不退の淨土へ迎へ取て、永く生死を離れしめ給ふ。然るあひだ、念佛はほとけの本願なれば、自力の罪を滅して極樂へ參る故に、娑婆の生死を念佛申てこそ離れはつべきあひだ、むかしより道念ある人は、善人も悪人も念佛にてこそ、往生をもとげ生死をも離れたるなり。天台眞言等の聖道の行者も本宗を捨て念佛往生を遂ぐ。その例これ多し。これらの理りを心えさせ給ひて必往生の本意を遂させたまふべくさふらふ。また先達人もみな往生を遂させ給ひたれ

【最後】 決疑録には、最期とあり。

【設我得佛等】 無量壽經の第十八願の文即ち、設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺。

【してこそ】 決疑録には、こそと、とあり。

ば、ひとつ淨土に生れて永く離れぬ友とならせ給ふべく候。娑婆世界にてはいかなる人もそひとつる理りなく候へば、淨土往生の悦びいかなる佛道にも勝れてやすくさふらへば、もつとも凡夫の悦ぶ處にさふらふ。今は是もとしの究りになりて、明日をまたざる命なれば、またまうしうけ給るべくともおほえずさふらへば、これが最後にてあるべくさふらふ。南無阿彌陀佛。

安東左衛門入道昌顯へつかはさる御返事

新左衛門殿御わづらひ別の子細なく本復せしめ給ひ候條、殊にもて本意としさふらふ。但阿彌陀佛かたりまうし候には、臨終の人設我得佛十方衆生の文を唱へて命終しさふらひけるよしのこと、知識も病者もいまだ念佛の信心おこらざるあひだ、念佛三昧をえずして、魔界の妨げに隨ひ、ほとけを信ぜざるによりて、佛智の加被護念に預らざるなり。かるがゆへに念佛中人これ多しといへども、實に往生を遂るの輩まれに聞ゆ。是しかしながら、信心いまだ落居せざるのゆへなり。凡出離生死往生極樂の位は、世間の因果をばなれ、無極の道心堅固にして菩提心をおこし、六道生死を厭捨して一切の欲心慢心名聞利養貪瞋等の煩惱をかされずしてこそ知べくさふらへ。在家の識情をもて進めば法にそむき、退けば畜類に同ずるあひだ、菩提心なきうへは一切みな佛法にあらずと佛智より悟りたまふ。かくのごときあひだ、濁世の凡夫出離の方法を失ふべきの故に、阿彌陀佛十方衆

生じやうに向むかひ願ねがをおこしてのたまはく、十方じつぱうの衆生しゆじやう南無阿彌陀佛なんむあみだぶつと唱となえて息いきたえ命終いのちをらんに、もし往生わうじやうを遂とすといはば正覺しやうかくをとらじと誓ちかひ給たまひ、この願ねが剋果くくわせし時とき大地六種だいちろくしゆに震動しんどうし、天てんより妙華めうけふり虚空こくうに聲こゑありて、決定けつぢやう必ひつちやう成無上正覺じやうじやうと告つげらるるの時とき、十方衆生じつぱうしゆじやう稱名しやうめいの一行三昧いちぎやうさんまいをもて往生わうじやうを遂とべきの謂いはれ決定けつぢやうせしによて、阿彌陀あみだほとけおなじく正覺しやうかくを成じ給たまへば、阿彌陀あみだほとけの正覺しやうかくは衆生しゆじやうの往生わうじやうによて成じじ、衆生しゆじやうの往生わうじやうはほとけの願ねがによてとぐ。されば南無阿彌陀佛なんむあみだぶつと唱となへて臨終りんじうせん念佛ねんぶつの行者ぎやうじやは、往生わうじやうの不審有ふしんあるべからず候さふらふ。設我せつが得佛とくぶつ十方衆生じつぱうしゆじやう、至心信樂しんしんげうよくしやうがこく、乃至十念たふねん若不く不生者しゆじやう、不取正覺しゆじやうの文もんは、南無なんむあみだぶつの決定けつぢやう往生わうじやうしたる謂いはれを説とせられたる詞ことばなり。喩たとへば文もんは人の所知しよちの券契けんけいのごとく、名號みやうごうは所知しよちのごとし。紙かみに書かきたる文書もんじよありといふとも、所知しよちせざればその得分とくぶんなきに似にたり。所知しよちあれば文書もんじよなくとも得分とくぶんあり。得分とくぶんをとらんうへは文書もんじよ要えうなしといへども、人の諍ちやうはんとき文書もんじよをもてとの所知しよちを知らんがごとく、まさしく文書もんじよの要えうたることなし。往生わうじやうの良藥りやうやくは南無なんむあみだぶつなり。その良藥りやうやくをおしへたるは設我せつが得佛とくぶつ等の文もんなり。いかでか紙かみに書かきたる文字もんじをば衣食えいじきの二事にじにはもちゆべきや。然しかれば文もんは出離しゆつりの資糧しりやうとするにあたはざる歎か。一切衆生さいしゆじやうは父母ふぼの生死しやうじを受う繼つぎたり。この生死しやうじの因六道輪廻いんろくだうりんわの種子しゆじたるあひだ、われと生死しやうじをはなるるみち有あるべからず。所修しよしゆの善惡ぜんあくの業行ごふぎやうは因果いんぐわもとの身に立歸たちかへりてみな輪廻りんわのきづたとこそなれ。衆生しゆじやうのちからをもて生死しやうじを出過しゆつくわすることあるべからざるゆへに、自身じしんの行體ぎやうたい心の智惠ちゑこれを念佛ねんぶつに雜まじるを雜行ざふぎやうと名なづく。衆生しゆじやうのちからをもて往生わうじやうほどの一大事いちだいじをば爭いかに

か成就せんと、知識の教についてその心をえつる念佛の行者は、わが身には信心もなし行徳ありとも、それは出離の道にはおよばず。ただほとけを頼み奉りて念佛せば、名號不思議の佛力をもて淨土に生ずべしと落居してまうすより外は別の道なければ、いかなる不審もおこれ、妄念妄執も競ひ來れ、唯くるしみの心のうへに南無阿彌陀佛と唱へて月を送るを、法定往生信心念佛の行者とはまうすべくさふらふ。是をこそ他力とも名づけてさふらへ。なを御不審相殘る事さふらはば、委細のをもむきは面上にまうしうけ給はるべくさふらへども、人の命は出る息入息をまたぬ理り眼前に候あひだ、出離の一大事をば御心得の爲あらくまうしせしめ候。又新左衛門殿但阿彌陀佛に自力他力の謂れを御尋ねさふらひけるよし。この御ふみのこのいはれ大略見えてさふらへども、自力とまうすは行者のかたの心振舞さとりまでもみな自力とこころえ、かく心得るまでも自力たるあひだ、ただほとけを信じて念佛まうせば、その自力の業障はことごとく名號の利劍にきられて、臨終には無爲の淨土に得生して、永く生死をはなるべきのあひだ、名號の力をもて自力の業を滅せらるべけんには、ただ自力ながらとなへて臨終せば、八十億劫生死の自力の罪他力の名號に滅して、決定往生を遂るゆへに、この謂れをえつる念佛の行者は、自力他力の沙汰におよばず。自力他力といふはかくのごとく分別して念佛に信心をおこさしめん爲の方便なり。又金阿彌陀佛のもとへ送られさふらふ檀紙二束布四端の事、この時衆とまうすは、親子を捨て住處を離れ、身をなきものになして、身命をほとけに歸入して、決定往

【欲心善心】決疑
録には、著心と
あり。

生を遂べき信心計りにて、一切の用事をつくしてさふらふものどもを時衆とは名づけ候。然れども凡夫の習ひもとの欲心善心うせず。こゝろの用事もつきぬいはれにて候あひだ、われ／＼が計ひとして、衣食の二事も道具等をもあたへてさふらふは、他の希望をやめん爲にて候あひだ、冬は帷ひとつ紙衣ひとつ衣ひとつ冬の装束に用ひ、夏は衣と帷ばかりにて、また別の用事なきゆへにこそ、心の希望もさふらはね、規式を定めずしては、私に人の供養物をうけば、知識の心と別別になり、面面おのれ／＼がこころの欲もつきずして、もとの捨たる處をも空しくなし、誑惑の心起て人をへつらふべく候あひだ、この發心の筋を護念して、出家修道の修心を成就せしめん爲に、この式日の謂れはさふらふなり。物を取とらずといふ事計りにて、此謂れに落居せずんば、とるも利養とらぬも名聞になりて、全く佛道にあらず候。かやうの謂れを御心えの爲に一旦まうしさふらふ。この物の爲にはあらず候。かくのごとくさふらへばとて、是を返し奉りさふらはんは御本意を失ふに似てさふらへば、逆もこれよりこそあたふることにてさふらふほどに、御ころさしのごとく、二人に配分しあたへ候事。

南無阿彌陀佛。

安東左衛門尉 貞忠へ遺さる御返事

夫菩薩の大悲闍提の願と申は、凡夫の思ひより意得べき分にはあらずさふらふ。無極の大

【六度四攝】六度とは布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧これなり。四攝とは、衆生を攝する四種の法。布施、愛語、利行、同事なり。

【八苦】生苦、老苦、病苦、死苦、愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五陰盛苦のこと。

【最後】決疑録には、最期とあり。

【しては】決疑録には、してとあり。

道心を發して、そのうへに六度四攝の萬行を行じ、生死を明らめ佛果をえてのち、已得菩提捨不證とて、すでに證得せしところの菩提を捨て、輪廻の衆生に類同じ、六道生死の種子たる妄心にをかされずして、衆生と共に地獄に墮すれども熱からず。餓鬼道に入とも飢苦なく、畜生道に趣けども實業の畜生にあらず。生死を離れはてのち衆生濟度の爲に闍提の願をおこすをこそ、菩薩の慈悲と名づけたれ。此内證は佛智の果海より流出する處の智慧なり。凡夫の迷ひより衆生の爲と思ひたるは、業障ふかくして愛念の妄執にをかされ心の置どころなく、魔軍にたぶらかされて又惡趣におもむくべき因果をだにも辨へず。惡見に入たる妄智なり。八苦の中の愛別離苦にをかされて、安堵せざる心中より慮りなくして、かくのごとくなりけると心をひるがへされ給ひて、無常の命旦暮期しがたし。いつまでの餘命をたのみてか、智慧をもおこし行業をもつむべきや。只今もや最後なるべけん、妄執にひかれまた三塗に立歸りて、六道輪廻の重苦に沈まんこと、悲しかるべしと意得なをし給ひて、稱名怠らず信心ふたごころなき念佛の行者とならせ給ひさふらはば、ほとけの護念に預り、最後終焉のゆふべには、不退の淨土に得生して悟りをひらき給はば、還來穢國して、親きより疎きにいたるまで、濟度利生案のうちには有べく候。自行いまだたすしては、他を度する事あたはずとこそ見えてさふらへ。水練の達者になりてこそ、水に溺れたるものを救ふべく候へ。無水練にしては人をたすけん爲に河に落入ば、とり出されん相手と共に必水にしづむべきがごとし。凡夫の身としては、今生の身を助け命をつ

がする衣食財寶等をこそあたへられ候とも、この財寶に著しわが往生を遂ずしては、他を濟度することゆめく有べからずとなり。ただ常に念佛まうさせ給ひて、まづ往生を上げさせたまふべく候なり。この安心こそ佛意にも相叶ふべくさふらふ。阿彌衣はつねにさるものにてはさふらはぬほどに、著ならしたるは持す候。極月の別時に著て候をこて、人もぞみさふらへば、別時に著候てあたへ奉るべくさふらふ。又二枚つきの行の本尊名號かきてこれをしんじさふらふ。

慈阿彌陀佛へつかはさる御返事

人の念佛の信心計りこそ、かならず往生をば遂べきなれ。さやうに出家發心もし時衆にも入て、念佛まうさばやおもひたせ給ふこそ、信心とはおぼえずさふらへ。まさしく家を出て時衆にいらせ給はずとも、念佛まうさせたまはんのみこそ、出家の本意にても時衆の本意にても有べきなれば、往生だにも定り給はば、時衆には入給はずとも、われくがかく教へまいらするをたのませたまはん時は、まことの往生の御志にてさふらへば、かならずほとけの護念に預らせ給ふべく候。かくをしへ參らせ候とも、心ゆかせ給はずして、なを時衆を望ませ給ふ心の残らば、我思ひ立たりし執心を遂ぬほいなさにて、魔のたぶらかしに墮させ給ひたる心なるゆへに、ほとけの御心にはよも相叶ひさふらはじとおほ

え候さふらふ。わかきをも老おたるをも嫌きらはず、頼たりなき命いのちの程ほどをばしらせ給たまはずしてこそ、往生わうじやうの
 志こころをば失うひて、かやうにまうすおもむきを御おんころえなくさふらはんは、時衆じしゆに入いるも往わう
 生じやうの爲ためにてこそさふらへ。知識ちしきの命めいをそむかせ給たまはば、時衆じしゆに入いても時衆じしゆの分ぶんにては有ある
 じく候さふらふ。時衆じしゆにいらせ給たまはずとも、かくまうす處ところの詞ことばを信しんじて念佛ねんぶつまうさせ給たまはば、われ
 われが教をへに隨したがはせ給たまふ信心しんじんにて、時衆じしゆよりもなをふかき信心しんじんにならせ給たまひさふらはんず
 るときに、永とこく制戒せいがいをやぶらぬ時衆じしゆの分ぶんにて本意ほんいをば遂ひたまふべく候さふらふ。この謂いれをよくよ
 く御心おんこころえ候さふらふて、明日あすまでも頼たりなき命いのちを持もつながら、いつまでか時衆じしゆにても此世このよにながら
 ふべきと御心おんこころ得えあらば、われがが教をへにも隨したがはせたまひ、ほとけの御おんころにもあひか
 なひ給たまひて、御往おんわう生じやう疑あやまひ有ある間敷まじさふらふなり。佛道ぶつだうと申まをすは何事なにごとにても知識ちしきの教をへをたが
 へず、我執心わがしんの思おもひを捨すてとほざけざれば、魔縁まごんのたぶらかしを遁のがれさせ給たまひて、佛教ぶつけうに
 隨したがはせ給たまふ謂いれにて候さふらふあひだ、かやうにまうし候さふらふ。まだ佛法ぶつぽうを知しれ給たまひ候さふらふはねば、心こころの
 思おもひは何かたへもとほして悦よろこばしき心こころおこり候さふらへば、そのしたに魔まに隨したがふ謂いれさふらふ心こころ
 にはあひかなはずとも、その心こころを捨すて知識ちしきのをしへに隨したがふ時とき、魔まの手てをば遁のがれて、ほとけ
 のをしへに隨したがふ信心しんじんの人ひととなり給たまふべきあひだ、決けつ定てい往生わうじやうの念佛ねんぶつの行者ぎやうやともまうすは此
 心こころにて有あるべく候さふらふ。今はただ思おもひ立た給たまひたりしところをうち捨すて、この理ことわりを信しんじて、念佛ねんぶつま
 うさせ給たまふべし。兎も角とも往生わうじやうの爲ためにてこそあれ、往生わうじやうを遂ひざらんにはいきばとけといは
 れても何なんの益やくか有あるべきなれば、かやうに教をへ申まをすなり。念佛ねんぶつより外ほかは何事なにごとも往生わうじやうの詮せんにはた

たずさふらふなり。時衆じしゆに入いりて候さふらふもの共どもも、時衆じしゆに入いりたるを往生わうじやうの方人かたうとにもいたしさふらば、往生わうじやうはすまじく候さふらふ。在家ざいけの人ひとも時衆じしゆも往生わうじやうほどの一大事いちだいじをば、いかでか念佛ねんぶつならずしてはとげさふらふべき。されば但念佛ただねんぶつ計けいりを信しんじて申まをさせ給たまふべくさふらふじ。

南無なむあみだぶつ。

或時あるときいさゝかもものぐさく見みえける時衆じしゆの侍はべりければ、次つぎのごとく示しめし給たまひけるに、その僧そうおほひに廻ま心しんして、行法ぎやうぽうことくくならひ侍はべりけるとぞ

かやうに禮讚らいざんなどならひて名僧めいそうとなすべきにてもあらず、所作行法しよさぎやうぽうをあしくすれば、聞きて謗ぼうする人ひとも罪つみを得え、をのれが身みもその科とがあり、行法文字ぎやうぽうもんじたがはざれば、自他じたその益やくあるあひだ、かく教化けうけするにてこそあるなり。

【禮讚】善導大師の往生禮讚偈を指す。

或人あるひとのいはく、「すでに病床びやうしやうにふし畢をたりて、苦痛くつういささか減げんぜしときは、念佛ねんぶつの退轉たいてんせらるゝをばいかゞし侍はべるべきや」と尋ね奉たてまつりければ、御示おんしめしにいはく

もとより人ひとの死期しごは兼かねて知しりがたきのゆへに、恆願ごうぐわん一切臨終時いつさいりんじゆうじとすゝめ給たまへり。またまさしき命終みやうじゆうの時ときをばその主あるじはしらざるゆへに、臨終りんじゆうをまたずして口くちの稱名しょうみやうをおこたらざれば、護念ごねんに預あづかりて必かならず往生わうじやうを遂とぐべし。又苦痛またくつうさる時はこゝろのさになりてもものぐさくまうされぬをば、この念佛ねんぶつを怠おこたらばたちまちに三塗さんづにおつべき理ことわりのおそろしさに、やがてをさへ

てまうせばまうさるるなり。適時衆ども、そひゐたらば、よく／＼終焉のきざみを見て
勸むべし。若又俄にその人立去事ありとも、口に名號を唱へ居たれば、ほとけの加祐ある
ゆへに、われはおぼえずとも、稱名の聲の中にて往生すべきのあひだ、たのもしくおも
ひ給ふべし。

或時僧の他人を毀謗するよしを聞給ひければ、示して云

過失なき人も他を謗じ、自をあげなば、わが生死を離るまじき謂れなりと心えたるものお
ぼろげにてはなき事なり。但しかくのごとく他をまた是非するも、すなはち他の業とおな
じきあひだ、我と人とかはらざりけりと證得する時、人我の情はやぶるるなり。然るに是
までもなる生死をはなれぬゆへに退屈して、智者は本願に歸するなり。本願に歸してのち
は、他力より往生をとぐるあひだ、機の善惡を沙汰せざるゆへに、またいふべきこともな
し。

或時々衆他所の道場を退屈し出きたりて、この御したにてたすけられ奉りたきよし
ま
ろしければ、示して云

初一念の發心をわすれて、無道心のころにともなひて、かくのごとく破戒するは誰が爲
ぞや。生死をはなるべき道を教化しつるに、その詞を背ひてなをたすけらるべしといふは

【事を行ぜん】決疑録には、行せじとあり。

【無間】無間地獄を指す。

【歸るを】決疑録には、歸ると、とあり。

こゝろえられず。今生の業成就し、忽然として冥途に到りなんのちは、天に呼び地をたいてこの事を行ぜん。此事を犯さじたすけたまへといふとも、あに叶ふ事あらんや。争か自業自得の道理を背ひて、横にたすかるみちあるべけんや。世間に謀叛殺害をおかして、所當の罪過にをこなはるるも、己が妄心欲心を先として、その業を行じてんには、いかに悔み悲むとも、檢斷よりたすけられんこと更にあるべからざるがごとし。されば世間に心有人は、身をつゝしみこゝろおもふさまならずして、忠を思ひ孝をいたすあひだ、今世後世輪廻のさかひにても、さのみ大苦をばうけず、況や佛法修行といふは、一切むねの欲をばらひて佛性をあらはすべき理なるを、本の惑障を厭はずして、信心もすだれて破戒ならんは、たちどころにほとけの冥罰をかうぶりて、永く無間に墮在すべし。但し佛道へ向ふこゝろとて、無二なる心の別に有べしと心えたるはみな悪見なり。衆生の心品には是をこそ佛法よといふことまで、みなくもと迷心がおもはするなり。只今ののをのれが妄念にも、欲を捨慢心をたをし我執を捨る計りこそ、出離に志ある心とは名づけたれ。無二無三に佛法へむかふ心の有べきやうに思ひなすは、悪見愚癡のいたすところなり。唯わが心をゆるがさず思ひを叶へざれば、次第に護念に預るべし。一念發心せざるほどは、佛のをさへてたすけ給ふことゆめく有べからず。信心なからんものをたすけんには、魔すなはち佛なるべし。争かかゝる謂れ有べきや。佛法にこそ佛をあなづりて廻心懺悔して、もとの心にたち歸るをいふことのある。それすら冥途にて改悔する道なし。世間に王法の牢

獄あり。その罪を犯したるのちは刑罰をかうぶる。ただこれ無慙放逸の心に伴ひて、自
をしづめ人を恥る心のなき衆生輪廻のすがたかくのごとし。ひとたび發心已後誓て中止せ
されともいへり。なんぞ生死を離れんとおもはんほどのもの、ことを信ぜざるべけんや
と。云云。

或人尋て云、「子供などにをくれて歎きのありし時は、念佛もしみくくとたふとくおぼえ
てまうされしが、とし月へだてれば、さすが歎の薄くなるまゝに、念佛も心にそます。
唱へながらも疎略になりさふらふよしを、いかがし侍らん」とまうしければ、示して云
本より念佛は清淨の法にて、衆生の心は相應せず。相應せねばこそ、まよひふかき衆生
のまうせば、必業障を滅して往生をばとげ侍れ。喩へば大事の訴訟をもちたる時は、奉行
人官人評定衆までもおそろしく、又得意になる事を聞ては類ひなく悦びを懐く。その沙
汰もたざらん時は、かくのごときの公人にむきても何事の恐れも追従も有べからず。此念
佛をまうさずしては、たちまちに地獄に落べきおそろしさに、わが心の善悪ものぐさふな
るをば、いろはずしてまうせば、決定ほとけの來迎に預りて、不退の淨土に往生を遂べし
と心えてまうし給はば、その理りのうれしさに、などかまことの信心もおこり給はざるべ
き。是をこそ念佛の信心とはまうすべきなれ。臨終に思ひはかりなく、心のたがはん時ま
うして往生を遂べき念佛を、今の心にあてがひはからば、まさしき臨終に苦痛顛倒せん時

は、念佛もたがふべきなり。因果の道理なれば、念佛まうさずしてをはらば、かならず悪趣にたち歸るべきうへは、我身に歎きありともなくとも、いかでかこの念佛をおこたり給ふべき。唯朝暮に口をひらきて稱し給はば佛の護念に預りて、決定して本意を遂たまふべきものなり。

【群疑論】唐懷感の撰。淨土の法門に就て疑問を立て之を解釋せるもの百十六章あり。

或人尋ねて云、「群疑論に五逆の罪人は十聲を滿ぜず。八返九返にて命終せば往生不可なり。その造罪滅盡すべからざるゆへにと、又惠心往生要集にも此釋を引てすなはち依用せらるるは、本願の二稱に萬行圓備して、よく生死の罪を除滅せば、また何の餘徳ありてか十聲不満足は不可往生と釋せられけるや」と問奉りければ、示し給ひて云、「是はこの人師達も、實に念佛三昧の不思議をえざるのゆへなり。一聲に罪滅せずんば、何ぞ一聲稱念佛皆除と釋せらるるや。唯命ののぶるあひだ、十聲までは唱へたるなり。一聲二聲にても終らば、名號のうちに滅罪不思議のいはれあるあひだ、かならず往生すべきなり。善導の釋義にはかくのごときこと見ざるところなり。信ずべからずもちゆべからず。又下品上生は一聲にて往生をとげ、下品中生は破戒の業の還生するあひだ、須臾に命終し聞位往生を遂たるなりと。云云。

他阿上人法語卷第三 終

他阿上人法語 卷第四

宇都宮常陸前司泰宗、往生淨土の用心尋まうされけるにつかはさる御返事

それ六道生死の患苦は遁れんとほつすれどもいよくしたしく、出離解脱の要法は修せん

とほつすれどもますくうとし。忽劇をいとひ閑居にすむものは徒然にたへず。榮樂をお

もひ世間にまじはるものは輪廻をまぬかれがたし。つらくこの事をかんがふるに、生死

無常の轉變をあきらめず。實有著我の迷識に縛せられて苦海に浮沈す。朝露の風を待さる

のすがた、夕雲の夜空にかくるゝがごとし。老少ともに憑みなく、親疎おなじく滅亡す。

この理りまことに眼前なり。たゞ知と知ざるとにあり。これを知ざるを愚者となづけ、こ

れを知る智者といふ。智者は境界の相に著せず、こゝろの樂欲を捨て無爲泥洹を欣慕し、

愚者は放逸の業につながれ、身の造罪をおもくして永く垢塵に隠没す。然りといへども世

すでに濁亂となり、時はやく末代にうつりて、知ざるものはおほく知ものはまれなり。た

ま／＼經論聖教に向ひて心中を校合するに、あたかも教意に相應せず。このたび生を人

界にうけて沈淪苦器を悲むのところ、阿彌陀佛の因位法藏菩薩と名づけしとき、末世衆生の

生死苦海をはなるべからざることとしたりたまひ、五劫に思惟して誓ひて曰、設我得佛十

方衆生、至心信樂欲生我國、乃至十念若不生者、不取正覺」と。此願すでに剋成して阿彌陀佛

【五劫に思惟して】阿彌陀佛の因位、法藏比丘たりし時、五劫の間思惟して、二百一十億の諸佛の淨土の美を選び、善を攝め、四十八願を建立し給ひしことをいふ。

【三業】
三業。

身口意の

と號し奉る。然ればすなはち我等凡夫往生極樂の決定はほとけの正覺に究れり。はやくた
 だ南無阿彌陀佛と唱へて臨終の一念に娑婆生死の依身をすて、かならず安養淨刹にまうで
 給ふべし。この信心治定のとき、住所不定不安意の一切の境界を厭離穢土となし、恭敬の
 志をおこして西方阿彌陀佛に向ふの時、をのづから欣求淨土の謂れあり。穢土の依正は
 幻化にして、三業の行體はともに小善根福德の因縁となりて、唯一日七日の執持名號ばか
 り必往生を遂べきのよし、阿彌陀經にときたまふ所なり。自の臨終いづれの日何れの
 時と期しがたきあひだ、つねに口業の稱名大切たるべし。これによりて善導和尚は、恆
 願一切臨終時と釋せらるゝものなり。詮ずるところ種種の文義は名號の一法をあらはさん
 とほつする方便の言なり。しかれば往生はたゞ
 南無阿彌陀佛。

信濃國上原左衛門入道の許より條條の不審まうしあげゝるに示したまふ御返事
 念佛往生とまうすは、仰聞られてさふらふ條條不審はれたりともなを不審有とも、是にて
 は往生を定めがたし。これは安心のうへの起行の體なるべし。安心とまうすは、機の三業
 にをひては出離の道たえはてたる謂れ至極しつるあひだ、唯不思議の本願名號に往生を
 任せてとなふるより外は出離たのみがたくなりぬれば、ほとけの護念に預りて往生うたが
 ひ有べからずさふらふ。このうへの行體は行者のもと修せしところなれども、それにて出

離をつぐのはざれば往生にうたがひなし。然れば行狀の不審あらく、注しまうし候。
一、臨終の本尊は、行者のこゝろにてかはりさふらふべしといへども、佛體は念佛
まうすべき心をおこさん爲の方便、又は行者の信心の色のはるるところなり。名號は
まさしくとなふるところの出離の法なれば、おなじく眞法なればとて一向專修の人はこれ
をもちゆるなり。

一、善根法門の事。佛法とまうすは三世がやぶれて一切のことを後念につかざるあひだ、
ほとけに任せ奉りて機に徳を持せざるこそ、無作の行體にてはさふらふなり。

一、臨終の時とは、いつをやさしさふらふべき。まさしき命終の時刻知がたければこそ、
善導和尚も恆願一切臨終時とは釋せられたれ。こゝろに臨終をしらざれば、となふる處の
名號を臨終の法と信じつるうへは、いつもたゞまうすところ臨終たるべし。しかればいつ
死するとも臨終たがふべからず。いつも一念なれども、命の長短によりて念佛の多少も不
同なり。にはかに終れば一念、のぶれば二念、なをのぶれば三念、十念百遍千遍萬遍ただ
いのちの長短によるべし。

一、臨終に起臥の事。世間の我執輪廻のこゝろふるまひこそ勝劣もあれ。その勝劣の心の
やぶれて我執のたをるゝを佛法とはまうすなり。起たりとも臥たりとも、念佛してをはら
ば決定往生なり。又ふしたりともおきたりとも、稱名の聲なくば往生の機にあるべか
らず候。

一、善夢惡夢の事。決定往生の人は善夢を見ては心のよろこばしさにいよく念佛し、悪夢を見ては機の悪業のほどを思ひ知て、ますく他力本願名號のたふとさに念佛まうして、そのしたにこそよろこびの心も生ずべきなり。往生不決定の人は善夢をみては悦び、悪夢を見てはわび歎きて、本願にとをさかるあひだ、是は善惡ともに往生の良縁にあらず。

一、惡見名聞自力虛假。これを具足せざる衆生は一人も有べからず。たゞ自身かくのごとき業を思ひしりて、ひとすぢにほとけを頼みて念佛まうさば必往生すべし。この心になづみ、念佛に信をとらずしてなげきむたらば、いよく業つもりて往生の期は有べからず。又此業あとも念佛だにまうせば、往生するぞといふ口ばかりにて、信心たらざらんものは、惡見念佛者として、當世はやりたるものなり。今はたゞ行住坐臥寤寐に稱名して、往生の本意を遂たまふべし。

南無阿彌陀佛。

六粟新左衛門尉へつかはさる御返事

念佛は十惡五逆までの罪滅して、無漏の報土に託生する清淨不可思議の法たるあひだ、諸佛の知恵およびがたし。況や凡夫の妄想顛倒したる心にては、わすれ易く信じがたければこそ貴き法にてはあれ。とこしなへに忘れがたく信じ易くして、衆生の妄執にも相應せ

【信心たら】決疑録には、信心たたとあり。

ば、六道生死につなぎとめられんづる輪廻欲の境界にてこそさふらふ。あに阿彌陀佛の不可思議力善惡の凡夫引導したまはん清淨の法にてさふらふべきや。されば心にはわすれやすく信ぜられねば、口に南無阿彌陀佛とよなへて臨終すれば、名號の不思議をもて忽に往生をとげ、處は不退の淨土、壽は無量の壽命、金剛不壞の姿にて、未來際をつくし生死をうけぬ身となるを、念佛往生のほとけとはまうすなり。かく心得つれば、忘れやすくものぐさきときも、となへるたるたふとさにまめにもなりさふらふべし。わすれやすしとてもし默せば、貪瞋癡三毒の煩惱三惡道の因を造りて、地獄餓鬼畜生の果とならん時は、たれかは是をたすくべき。是等の理りを心得る時、いかにものうけれどもうし居たれば、佛の護念に預りて往生を遂給ふべし。

南無阿彌陀佛。

宇都宮圓阿彌陀佛へつかはさる御返事

三心發得の安心とまうすは、もとの凡夫の心根全分往生にむかはずして、渡世にのみほださるゝと心えてこそ、本願の不思議もたふとく往生の信心もなければ、ただ口に任せてとなるべしと信心のおこるこそ、決定往生の行者にてはあれ。かゝりけるあひだ、命のうち悟りをば用ひずして、臨終の一念まで名號を唱へて息たえ命をはらば、無始の妄執八十億劫生死の罪一念稱名不思議に滅して往生をとぐるのあひだ、他力とも名づけたれ。

心に淨土もたふとく往生もふたごゝろなくならんを期せんには、總じて往生する人一人も有べからず。末世に有間敷こゝろなればなり。たま〜是體の心ありとも、その心を頼まば本願を信ぜざるによつて往生不可なり。いかにいはんや、有まじき心を求めわび歎き居たらんには本願を頼まず。心は本のものにて、みちなき安心なるべし。たゞその道場に常に伴ひて、行法の助縁をなして、佛をたのみ名號をとなへて、臨終を待たまはゞ、往生うたがひあるべからずさふらふ。

南無阿彌陀佛。

或人につかはさる御返事

おほよそ往生のみちは一切の僻事罪業を身のうへに預りて、出離の道なきものになりてこそ、本願も頼母敷念佛もたふとく、つみも滅してほとけの護念にも預るべけれ。わが心にも身の振舞にもいさゝかも僻事なく咎なきおもひをなさば、何のゆへにかほとけの慈悲もたれらるべき。念佛ひとつに歸したるすがたも、いづくよりかあらはるべきや。

南無阿彌陀佛。

中將左近藏人へつかはさる御返事

有漏の依身は輪廻の果報たるあひだ頼みがたき身命なれば、寤寐の稱名より外は何事も

【有漏の依身】漏は煩惱の異名なれば、煩惱の依處と

なれる肉體即ち迷
ひの凡身こと。

みな流轉生死の妄業なれば、行住坐臥造次顛沛にとなへ居たれば、往生はほとけの御はか
らひにて有べし。身もよはり心もとをくなれば、行のものぐさくものうくなるはことはり
なり。そのうへに稱名するは往生の志ふかき信心のあらはるゝ處なり。さてこそ必
ほとけの護念に預りて、このたび決定往生の悦をばいたぐべきにてさふらへ。もの
ぐさき心にしたがはゞ魔界とゝもなひ、又惡業のまめなる心に伴へば魔神に隨ふなり。念
佛はものぐさき心にしたがはず。惡業はまめなる心を用ひされ。しかれば業は滅し法はあ
らはるべきなり。この心をえて速に稱名し給ふべし。
南無阿彌陀佛。

或人のもとより三心を知ざるものゝ名號をとなふる聲は、白拍子はやり歌のごとし。ま
たく往生の業にあらすといふ人これあり。この義をしめしたまふべきのよしまうしあげ
ければ、つかはさる御返事

夫三心發得の念佛者かならず往生を遂べしといふことまことなるかな。次に三心を知らざ
るものゝ南無阿彌陀佛と唱ふる聲は、白拍子はやり歌のごとくして、またく往生の業にあ
らずといふこと不審なり。まづ三心をばおこすと經釋にも見えたるをも心得ざるなり。
三心とは信心なり。しるとは凡夫迷識の計度分別の妄念なり。機の妄情は無有出離之縁と
信じて、本願名號に歸するこそ、三心とは名づけたれ。名號は如何なるものゝとなふれ

【機の迷暗】決疑
録には、明暗、と
あり。

ども往生の法なり。となふる機によりて、はやり歌白拍子とならんにはいかでか五逆破戒
十惡の輩一念十念に往生をとくと經釋にみゆべきや。かくのごときものにけがされぬ
名號とは信ぜずして、はやり歌白拍子と心得たらんこそ、六道生死輪廻の業因に徳を持
せて名號を信ぜざるあひだこのたび順次往生は叶ふべからず。往生の直道は唯名號にあり。
機の迷暗ともに本願に歸すれば往生を遂げ、心の明昧ともに名號を稱せざれば往生不可な
りと一行三昧に落居するこそ、三心發得の行者とはみえたれ。我信心は決定往生と計し
て、心外に往生不可なる人を見れば、本願を背ひてみづから慢心假名の著我を執するあひだ、
この心はかならず。天魔にたぶらかされたるなり。をのくの安心も是等の義を用ひたま
はば、此度の往生いぶかしくおぼえ候。ただ自身は罪惡生死の凡夫と信じて稱名間斷な
くば、往生にうたがひあるべからずさふらふなり。
南無阿彌陀佛。

能登國一宮の伯耆法眼、宰相法眼、三心の具不具幼稚の小兒非人等往生の得否たづねま
ろしければ示したまふ御返事

幼稚の小兒非人乞巧人等の往生の得否の疑分別の子細有べからず。三心發得の行者は信
心堅固なり。そのゆへは機の三業にをいては無有出離之縁とさとりえて、本願の名號ばか
りをとなふるより外は、三業ともに頼むところなしと領解するあひだ、いかなる小兒乞巧

【著心とどまらずして】決疑録には著心にとどまらずして、とあり。

人も、唱へて息たえ命をはらば、決定往生と信知してこそ、無疑無慮乗彼願力定得往生と、深心に釋せらるゝ御釋にも相當しさふらへ。たゞ稱名の一行に信をとるは深心、機の功能をつのらざるところは眞實の心をしるあひだ至誠心なり。餘の行體を極樂に廻向してたゞ往生の法を稱名にもたするは廻向心なり。いかなる悪人愚人までも、名號を唱へて命をはれば、決定往生せんと信をおこしたる人をこそ、願心ありともうすべきなり。唯そらに名號をさしをひて、願心をこりてこそと許り執心おこされば、願心までもなくして、意越高慢のことばなり。信心あらん人は、幾度も自の心中はみな貪瞋煩惱に繫縛せられ、此度生死を出離する道ふつとおもひたえたりつるに、今この本願名號を聞えたところのとうとくうれしさに、我はからひをば打捨て、稱名の一行より外は頼むところなくならんこそ、決定往生の人にてはさふらふべし。何のゆへにか餘所の幼稚非人等にいろはるべき。いまだ病にもをかされず、臨終の時分にもいたらざるあひだ、心もつよく力量もあればとて、終焉の時身も苦痛をうけ、思ひはかりなく東西をも辨へず、日來なれ名染たる妻子眷屬等をも見しらぬ程のおりふしになりては、餘所に幼稚のものをやをかれ、非人乞丐人とやさけらるべきか。たゞ愚癡惡見のいたすところなり。さればいつまでの命をこゝろに任せて、かやうの人我執心の心をばもてなされ候べき。大方佛法とまうすは、たがひの執心やぶれ慢心とろけ、著心とどまらずしてこそ、佛意にも相應すべきに、凡夫のならひはみな輪廻の業にのみほだされて生死を離れがたきのあひだ、法藏比丘五劫

思惟しておこさるゝ願のしたにて、名號の一法を授けられしかば、ほとけの正覺はしかしながら我等凡夫の爲なりき。この本願にはもれたる衆生のなければ、螻蛄蚊虻までもへだつべき衆生は一人もなかりけりと覺知し給はゞ、争か往生すまじき衆生をばとりいださるべきや。へだつるものなくなりなば、十方衆生の願意にもたがひ給ふべからず。このたび往生の一大事より外は何の要事ありてか、さしも兄弟の中にへだてあるべき。世間の所領財寶の爲に心違ひせんをだにも、道念あればわづかなる命の中の業を持って、不退の友なるべき本願のしたにては、他人とだにも向背すべからず。いはんや親昵のあひだをや。此等の大方佛法世俗の理りを知得たまはゞ、在家出家の執心もやぶれて、必往生せられ候べし。

南無阿彌陀佛。

おなじ御端書にいはいはく

但し幼稚の小兒非人等無願心のともがら、たまノ念佛せしむといへども、まうすところの念佛往生の爲ならざるのあひだ、まさしく終る時は佛の護念なきゆへに、臨終まではまろしとゞけずして、もとの業にひかれて念佛せずして終るあひだ、又六道に立歸るなり。まさしく唱へて終らんものゝ、争か往生を遂ざるべきや。かく心えればこそ、我身も念佛に信をとりたる法機にて候へ。不具三心のもものは臨終までとゞけざる障ばかりなり。

【ほとけ護念】決
疑縁には、ほとけ
の護念、とあり。

【十劫正覺】阿彌
陀佛もと法藏菩薩
たりしとき衆生を
哀み救はんとて四
十八願を起し、そ
の願成就して今よ
り十劫の昔に佛と
なり給ひしをいふ

原田四郎左衛門入道の許より道心もなくして念佛の信心もうすきむね訴へまうしけるに
つかはさる御返事

念佛往生の信心ともうすは、他力不思議の本願のしたに名號を唱へて、臨終の一念に觀音の蓮に託生して、無爲の淨土に化現する法たるあひだ、一向に機の功をつのらす。萬事を佛に任せ奉るのゆへに、信心なく道念なしとかねておもひ知給ふこそ、決定往生の法機たるべくさふらへ。然ればはじめて道念をおこし信心を求めば、心もわづらひ身もつかれて、世間の忽劇にまことなき道心をうちそへて、一方ならぬものおもひになやみ、年月を運ぶほども、臨終終焉のきざみにこの業はたして、大苦を受るのとき、ほとけ護念なきあひだ、一心狂亂すれば定で念佛せずして往生の本意空しかるべし。さればこれほどの道心に捨はてられ、信心にわかれける衆生の爲に、五劫思惟十劫正覺ひとへにわれら凡夫引導の廣大願海に歸入して、稱名ひとつの不思議をもて生死をはなれ、無漏の淨土に化生せん事、曠劫にも知ざりつる願意を聞えたるうれしさに、臨終をいつと辨へざれば、行住坐臥語默作作にとなへるたれば、命斷の一念に往生を遂べしと信知して、たゞ稱名するより外は別の子細あるべからず。さてこの不思議をおもひしる時心の嬉しければ、そのしたはすなはち信心なるべし。

南無阿彌陀佛。

【即身成佛】この身がそのまま成佛するといふこと。

三田孫太郎尋ねていはく、「文のごときは至心信樂欲生我國と云。云。しかりといへども散亂執心は增多にて、會て至心信樂せられず。一。次に釋の中に若少一心即不得生と云。此釋に違するものはたとひ稱名すといへども、順次の往生遂がたき歟。二。平生に稱名相續すといへども、臨終の十念退轉せば、來迎は不定たるべき歟。三。一とまうしあげけるにつきて示したまふ御返事

おほかた生死をはなれ往生を遂る事たやすかるべきにあらずといへども、佛願名號の不思議によりて、凡夫の我執名聞慢心虚假貪欲瞋恚愚癡等の識情、みな臨終の一念に名號の利劍をもてこの業をきるのあひだ、即身成佛と名づけず淨土往生と號す也。文に至心信樂欲生我國といふ事は、ほとけ十方衆生に向ひてちかひたまふところの願の詞なり。出離の志ふかき行者はみづからの心を此文に引當てみる時、全體不相應のあひだ、知識に逢てこのいはれを尋ぬる處に、もとより衆生迷ひの命のうちには晴がたければ、一期終焉の時、南無阿彌陀佛と唱る聲のうちに、佛菩薩の來迎に預りて、不退の淨土に往生すべしと聞得るの時、この本願名號のたふとくうれしくなるべきゆへに至心信樂せらるべし。その一念のうちはこの心つねになけれども、はや光中に攝取せらるゝのあひだ、是を決定往生の行者と名づく。釋に「若少一心即不得生」とは、總じて三心の名なり。機が三を持べきにあらず。至誠心のしたに「貪瞋邪偽詐百端、惡性難侵事、同ニ蛇蝎。雖起ニ三業名ニ爲ニ雜毒

之善一亦名ニ虚假之行、不_レ名_ニ眞實業_〇とは、凡夫の心生死をはなるべからざる業障を、善導和尙觀經の文意をえて、利他眞實と釋したまふなり。行者これを聞得る處至誠心なり。「自身現是罪惡生死凡夫曠劫已來常沒常流轉無_レ有_ニ出離之緣_〇」と深心第一の釋にみゆるあひだ、機に出離の道なしと知得るのとき、「彼阿彌陀佛四十八願、攝_ニ取衆生_ニ無_レ疑無_ニ慮乘_ニ彼願力一定得_ニ往生_〇」といふ第二の釋は、はや本願の名號に落居して往生を決定するは深心なり。このしたに過去今生自他凡聖世出世の善根みな本願に廻向して、私の行徳を出離につのらずして、一切衆生とへだてなくなるを廻向心と名づく。これらは知る知ざるも往生の志あらん人は、在家も出家も智者も愚者も善人も惡人も稱名ばかり間斷なれば、必往生は唯南無阿彌陀佛に定るあひだ、いかなる尼入道網人鉤人までも、となへて終らばかならず往生を遂べきなり。このたび生死を離れんと思はゞ、愚癡の凡夫にはらぬものと身を心得給はゞ、ほとけの護念に預りて、やすくと淨土にまうで給ふべきなり。平生に信心おこらば必臨終に唱ふべし。平生不定ならば臨終にもとなふべからず。この理り先言に明鏡なり。

南無阿彌陀佛。

慈阿彌陀佛のいはく、三心をも具足し心行を調へて念佛まうすべきかのよしたづね奉りければ示し給ふ御返事

【九帖の章疏】觀經四帖疏一部四卷、法事讚一部二卷、觀念法門一部一卷、往生禮讚一部一卷、般舟讚一部一卷。

それ往生の三心とまうすは、善導和尚九帖の章疏にくれぐれと釋しをかるゝあひだ、われ／＼が淺智をもてはいかにことばをつくすといへども、争か先達の筆にをよばんや。しかりといへどもしばらく愚意をもて御疏の趣をうかゞふに、末代濁世の凡夫輪廻業ふかくして、三業の行體をはかりみるに、雜毒虚假にして、信心は一念生ずるに似たれども、水にゑがくがごとくしてその跡をみせず。修する行體は雜毒の善たるに由て出離にたらず。かくのごときたるのあひだ無有出離之縁とも釋せらる。その信心も眞實に行もおもふがごとくならずと歎るゝは、信心深きに似たれども、みな往生不可なりと釋せられたるはこの事なるかな。是等は併機に信心なく行の不足なるを歎きて、本願名號の不思議阿彌陀佛の御慈悲深重なるをもたまざる無信のいたり也。そのゆへは信の生ぜざらんにつけて佛の大慈大悲の深重なるをあふぎ、行のものぐさからんにつけ稱名もつとも肝心なりと心得てとなへ居たらば、無始の罪障たちどころに滅して往生を遂べきなり。何の不足ありてか心行ともにそろへて往生せんといふ所望は有べきや。是はたゞ往生の爲にはあらずして、在家の殃業がいまだとゞまりて、あらぬみちよりみづからの出離を空しくせんずる魔界のこゝろにつながれたる安心なるべし。たま／＼信もなく行も修せられずとこゝろへたるこそ往生すべき機を得たるなれ。ゆへいかんとなれば、かゝるあひだ心行共にかなはねば、但口稱ひとつに往生のこもるうれしさに、心のいさめる時も沈める時も惡念生ずるときも善心來る時も、頼みなき命のしりがたければ、行住坐臥時處諸縁をきはす稱念す

れば、光のうちに攝取せらるゝ三心發得の行者たるによりて、臨終に必往生を遂べきものなり。往生をねがはしく思ひ給はゞ、安心これに過べからず。わがこゝろをもちひんとおもはんは、出離の爲にはあらずして、今生のものごのみなりと心えざるは、わが迷ひの心を明らめざる闍提人たるべし。ともかくもあれ六道生死の因果輪廻の心を動しても何の詮か有べき。今よりはたゞ心はいぶかしくとも、念佛まうして終りたまふべし。實にこの心を信心とも三心とも名づけたるなり。

南無阿彌陀佛。

信濃國上原左衛門入道連阿彌陀佛條の不審を書て奉りければ示し給ふ御返事十二章
先年見參の時、ほとけの本願のちから名號不思議の行體をもて善惡の凡夫必往生をとぐべしといふ理り、まうし談ぜしところおぼえさふらふ。往生は臨終の一念に名號をとなへて、永く娑婆の舊業をつくし、不退の淨土に生ずべし。臨終とまうすは身もよはく心もいふがひなくなる時剋なれば、身のさかんなる時だにも病におかされて惘然となるおりふしこそ、名號の利劍を抜て生死の重障を切、すなはちほとけの來迎に預りて速に生死の殃業を消滅しさふらへ。まして年齢すでに山の端にかたぶき、心月すなはちかくれなんとする時分を待をこそ、念佛行者の悦びとはすべし。法談とまうす事も、往生一大事の爲にこそあれ佛法をしり心えたらんとす、出離はそれによるべからず。たゞ信心ひとつこそほと

けとはなれ奉らぬいはれにてあれば、平生に法をしり悟りたるにもよらず。斷命の時は一切みな知ところをも忘れ、おぼゆる心もなくなるゝ兼て知をこそ、往生の信心ある人とはまうし候。されば空也上人常の御言葉にも、生ながら死してしづかにほとけの來迎を待とこそくちづさみたまひけれ。是をこそほとけに歸命し奉りて、生死の命をたまたざる念佛の行者とはまうすべくさふらへ。臨終の心のたがふところをばしらずして、いつも今のごとくあるべしと心得、法門聞得る氣色をし、往生もしえたり顔なる人は、病にかされんとき、所存違ひてほとけの護念なければ、念佛するにあたはず。善惡の本業あらはれて、また六趣に輪廻すべし。往生とまうすは唯名號ひとつを唱へて、終ればほとけの護念に預りて來迎の疑ひ有べからず候。一切の不審とまうすも迷ひの心のいふかひなき情識におもひ貯へたるあとかたもなき妄執なるべし。唯その不審のうへにも常に念佛まうしたまふべし。臨終の時分を兼て知りがたければ、念々の稱名を臨終と定めて月日を運び給はば、そのみちにてかならず臨終にはあひたまふべきものなり。

連阿問て云、『三四代の墓所を改て骨を一處に集め置て、佛事などしさふらはんことは如何さふらふべきや。』答曰、『本より墓所とまうすは、在家の習ひ親父祖父代々の跡に残りて、孝養報恩をいたさざれば孝行の志なきのあひだ、佛神の加護なくしてその家すたれ、子孫繁昌せず。この墓所につきて佛事善根をいたさん爲なればよからん。便宜の處に集めをかれんもくるしかるべからず。是等體の事はみな人のこゝろくれば、事の宜

【左の手は佛、右の手は衆生】決疑録には、右の手は佛、左の手は衆生、とあり。

について別したる式有べからず。

問 云、「臨終の時は合掌せずとも、念佛だにまうしさふらはど、往生は決定たるべきか。いかに合掌して所詮たるべくさふらふや。」答 曰、「臨終合掌の事、往生は念佛の聲にて終らば合掌の有無によるべからず。但し往生するほどの人は心に信するあひだ、かならず合掌あるべし。合掌とまうすは、佛と衆生とひとつになるすがたなり。左の手は佛、右の手は衆生にて、定慧和合すれば、機のかたの瑞相は合掌なり。往生せさする法は名號なるべし。名號なくしては、たとひ合掌すとも往生にあらず。武士などの戦場に向ひて切殺されさふらはんに、手には弓箭をとれども、口には名號をとなへて終らば往生たるべきなればただ稱名ばかりこそ專要なり。」

問 云、「病中のあひだ随分念佛まうしさふらふ人、所勞急になりて病苦しきりにせめ、とかく身をうごかして一時ばかり念佛とゞまりて終り候は、さきの念佛にて往生しさふらふべきか。又はまうして死しさふらはねば、順次の往生不定に候べきや。」答 曰、「他力の念佛に決定往生と信心おこらざる人は、平生にも病中にも念佛すとは聞ゆれども不具三心のものたるあひだ、ほとけの護念なきゆへに、臨終にはかならず念佛とゞまりて、本業にて六道に立歸るべし。善導和尚不具三心とも千中無一とも釋せられしは此事なり。

臨終の往生平生より定まる人をば、具三心とも十即十生とも釋せらるゝは、かならずほとけの護念加被あるのゆへなり。臨終の一念は百年の業に勝れたりといふは、平生なる程は

【善知識】 正法を説きて、人をして佛道に入らしめ、解脱を得せしむる人をいふ。

【念佛のおこり】 決疑録には、念佛の信起りとあり

善悪の業について生所不定なり。まさしく命終の時かならず六道に生を受べき剋、名號の利劍輪廻の絆を截て、すなはち報土に送るべきゆへに臨終に念佛の聲なくして往生なりと定ること、ゆめくあるべからざるものなり。』

問 云、『臨終の時本尊ならびに善知識のありあふてさふらはんはまうすにおよばず。念佛だにまうさればさしてたしなみさふらはずともよく候べき歟。いかにも本尊を用意し知識にも契約しさふらふべき事なるや。』答 曰、『臨終の本尊善知識の事は平生かくのごとく、淨土のみち名號の不思議をおしへ奉るをこそ善知識とはまうし候へ。又往生の志あるほどにては本尊なしともとはまうすべきか。たゞ本尊ばかりに執心をおこして、名號に落居せざる行者の前には、本尊なくとも名號こそ往生の法よとあたふるは、念佛の信をおこさしめんが爲なり。念佛のおこりぬれば、ほとけもたふとくなりて、人のをしへざれども本尊は必用意すべし。しかりといへども不慮の横死にあひ頓死出來りて、本尊用意せざるところにてもをはらば、本尊は心にあれば唯念佛まうすばかりなり。本尊の御前にもをはる時は、目も見へず心もなくさふらふ。されども南無阿彌陀佛とまうして息たえ命をはらば來迎の佛たち行者の前に立向ひたまふべきなり。』

問 云、『日所作の數徧の外に人の勸めによて或は百徧千徧まうしさふらはんずるは、かの所作の次に別して唱へ候べき歟。又は此日所作の中にこもりて候べきや。』答 曰、『日所作の外に人のすゝむる念佛の數の事は、日所作の中にこめたらんもくるしかるべからざ

【觀念】 事理を心に想ひ浮べて見きはめること。

れども、淨土の法門は事相なれば、正直に人の勸めを請とりたるかすをまうしわくるこそよく候へ。そのゆへは念佛の中には人家なけれども、人の念佛とてまうさん時も、死せば我往生なればわが念佛たるべし。わが念佛とてまうさんとき臨終せんも我往生なれば、ここには人我はわけられず。但し臨終をいつとしらざれば、とてもかくても念佛の時刻多きこそ大切なるべきに、わが念佛にこめんといふは念佛のものぐさきゆへなり。念佛は本より不可思議の法にて迷ひの心をきるあひだものぐさくなるなり。かく心得たる人は、ものぐさければいよく口をひらきてまうすあひだ、往生ちかゝるべし。臨終にはかならず苦痛をうけて、萬事ものぐさきおりふしなるゆへに、まめにて死し候はばこそ、まめなる念佛が所詮にてはあらめ、ものぐさき念佛こそ業の敵をしへたげさふらふ。』

問 云、「口にとなへ心に欣慕するうへは、數珠もたすとも念佛だにまうされさふらはど、ことたり候べきや。しかりといへども、數珠は詮要たるべきものか。」答曰、「身口意三業につきて、稱名は口業、觀念は意業、數珠をとり禮拜をいたすは身業なり。三業相應して業成ずとはまうすなり。但し念佛は稱名のひとつに往生はこもるあひだ、持すとも往生は遂べし。數珠をとり禮拜し觀念いたすは助業なり。稱名の一行は正定業なり。然るに又念佛を相續せん爲に數珠をくり、毎日數を定めて臨終まで信心を退せざるは、決定往生の志のすがたなり。觀念もてこれにおなじく、しかれば數珠もたすとも持ても事あらしくまうすべきにてはなし。みな行者の心よりおこりて持べく觀念もすべし。』

問 云、『道心おこりてまうしさふらはん念佛と、無道心にて本願ばかり頼み奉りてまうしさふらはん念佛と差別有べく候や。』答曰、『道心無道心とはいかなるところをわけられさふらふやらん。我は無道心なりと心えたるこそ道心にてはあれ、われに道心ありとおもはんものは、天魔にたぶらかされたる無道心のものなり。道心ありとこゝろえんものは、よきことにして本願を信ずまじければ、何によりてか往生をとぐべき。われは無道心なりと知得てんものは、自力の我執つきてほとけをたのみ念佛せんとき、護念に預りて往生を遂べし。此いはれをしらぬ人は、道心の有無について往生の得否をば定めさふらふなり。たゞ道心もあれなけれ、本願に歸して念佛に落居すれば、かならず三心發得の行者たるべきなり。』

問 云、『念佛だにまうされば、威儀作法はいかにもあれ苦しかるまじくさふらふやらん。若はときに隨ひて椅子などにのぼりたき心のさふらふは、如何しつらふべきや。』答曰、『ともかくも我身をはからふは愚癡の心なり。唯ほとけをたのみて念佛すべしと心得られさふらふべし。兼て椅子にのぼりたがるは、人にあなゆゝしといはれたる名聞の心がおもはすると心えたまふべし。椅子にものぼれ平座にもあれ、念佛こそ大切なるべし。』

問 云、『阿彌陀佛に歸命したりとまうす人、いまさら觀音を安置し奉りさふらふ事は、如何にさふらふべきや。』答曰、『阿彌陀佛に歸すると申人、觀音をも安置せよ勢至をもよてなせ、こころ／＼のことなれば、三尊一體三體一位のいはれにてぞあるらん行を、念佛に

【三尊】彌陀、觀音、勢至。

だにも定めば往生は遂べし。人のこゝろくれば他の事に綺ひて何の所詮か有べき。人の事にいろふは我慢の心にて、みづからが臨終を妨ぐべしと知給はゞ、わればかり念佛まうしておはしますべく候とおもひ、かくいふもわが往生の爲にとこそあれ、その人はその人の往生なれば、人の計ひに任せたまふべし。往生の奉行人は無益のことなり。』

問云、『手水うがひしてまうしさふらふと、不淨にてまうしさふらはんとは差別有べく候や。』答曰、『念佛まうして死しなば、手水うがひしたりともせずとも往生なり。口をすゝぎてほとけに向ふは口の清くなる事にてはなけれども、その人の信心志の色なるべし。本より有相無相の機きの差別なれば、念佛を信ぜばともに往生なり。手水うがひするせぬにとどまらば、ともに往生すべからず候。』

問云、『別時に目をとちて念佛し候に、もろくの悪念おこり、一切のわろきことのみ案じられさふらふは、魔の所行にてさふらふや。』答曰、『本より凡夫の性は魔の所屬なるあひだ、悪念おこらざる時も魔障なり。おこる時もあるじのしると知ざるとの差別ばかりなり。目をとちて念佛するときは、魔軍念佛にたゝかれて、ちりみだるゝ心をば罪の滅するとしりたまふべし。なか／＼物もおもはでしられぬときこそ、罪が凝結しておそろしき業體にてはあれ、妄念のおこるとしられんは、念佛のたふとさのゆへなり。奥の不審どもは一一枝葉たるのあひだ、たゞ稱名の一行をもて臨終をまちたまふべし。此不審のありともなしともみな迷ひの心なりと知給はゞ、念佛三昧を成じたまふべし。この土の得果な

らばこそわづらひもさふらはめ、他土の往生なれば臨終をまち、寤寐の念佛をこたりたまふべからず。しかれば今生の面謁めんごつむなしといへども、併しかし浄土の再會を期しさいくわいごさふらふものなり。

南無阿彌陀佛。

或人への御返事

ものたへぬ心は魔にたぶらかされたるべし。一事に不調なれば一切にをいて身の怨となるべし。知識の計らひに隨ひて正直なる人こそ、ほとけのおんいとおしみもあるべく候。又生死を厭ふとたふとくならんとするとはかはりたることなり。生死をいとふといふはたふときとところをいとふなり。たふとくならんといふは名聞利義をこのむ心なるべし。南無阿彌陀佛。

心地修行しける人のもとより尋ね奉りけるむねありければ示し給ふ御返事

夫佛法はその人の心中にさふらふあひだ、書をく文字に出たることばをもてともかくもはからひさふらへば、その人の心にてはなくして、まうす人の是非にてこそ有べし。彼心中にはあたるべからず。是をはからはざれば我には是非なし。これをはからへば計ふ人のころの迷ひなり。假令臨終よくとも悪趣にこそはおつまじけれ。むねに欲のちりひとつも

【達磨】支那禪宗の初祖。南印度の人。梁の普通元年支那に來りて武帝に謁す。機契はず去りて嵩山の少林寺に止り、而壁して坐す。人呼んで壁觀婆羅門と爲す。魏の明帝正光二年慧可往き、從ひて禪宗を稟く。大通二年十月五日寂。後、唐の代宗皇帝圓覺大師と謚す。

へだよりなば佛光はくもるべし。まして前後際斷じて生死はなるゝとだにも談ぜざる達磨西來不立文字の向上の一路には争かおよぶべきや。これらの法位を知ざるわれらなれば、阿彌陀佛の本願不思議の名號をとなへて、臨終一念にほとけの來迎に預りて不退の淨土に往生し、永く生死の古郷をはなるゝより外は別のみちを知ざるあひだ、われと悟る佛法はくらくしてしらぬものなり。御不審さふらはゞ、見參のときまうすべく候。

陸奥入道殿へつかはさる御返事

鎌倉歸住當時はその儀なく候。ところはたがひに何れの處をへだてさふらふといへども、御志だにはじめの信にたがはせ給はずんば、御往生はたのもしくおぼしめさるべくさふらふ。佛智はたゞ信心のうへに應をたれて、往生は稱名の聲に決定すべく候。生死無常のさかひは終焉計りがたく候のあひだ、日夜をはこびて時々の御念佛もつとも大切に候。言葉おほくなりさふらへば、こゝろ落居せざるのあひだ、要をとりて文字を略し

南無阿彌陀佛へつかはさる御返事

【六識】 六境を知識する六種の心識、眼、耳、鼻、舌、身、意の六識なり

【雜行】 五種の正行を除きたる其餘の諸善を廻向して極樂に往生せんとすること。
【處不退】 極樂淨土は壽命無量にして勝友多く、邪縁不淨あることなくして、常に佛菩薩の教を受くることを得るが故に、往生者はみな處不退に住するなり。

それ凡夫の意地は三毒五欲の種子にして、地獄餓鬼畜生の果を成すべきのあひだ、争か淨土快樂の助縁とはなるべきや。又この六識のうへの萬行萬善戒行等は、修羅人天輪廻の果を成するあひだ、何をもてかこれ淨刹得生の因たらんや、六道生死善惡の修因たるのゆへに、淨土の教門にのぞむるときは、心を自力と名づけ行を雜行とをそふ心ひとつを捨るのみにあらず、心行ともに何ぞ功を淨刹にかけんや。しかるあひだ深心第一の釋にも自身現是罪惡生死凡夫、曠劫以來常沒常流轉、無有出離之縁といへり。是はこれ全分善惡の行業ともに生死の因果に落在して、淨土に入がたきのあひだ、或は自力と名づけ或は雜行と號し、雜善ときらひ又は雜毒といふ。この因果の行業を棄捨して全體無有出離之縁の機分を證得すれば、たゞ願力をあふぎ、稱名の一行に往生を定めて唱ふるものは、すなはち臨終一念に華臺に坐して無漏の報土に得生す。もとより命無量の土なれば、處不退にして但快樂をのみうけんことは、名號の一行をもて生死輪廻の界を越てこの徳を得べきのゆへに、善導和尚の釋義殊にもて心肝に染候か。しかればたゞ臨終までみづからとなふる外往生には機の徳有べからず。善惡ともに輪廻因果の妄業なれば、この謂れに御信心落居さふらはゞ、必ほとけの護念にも預らせ給ふべく候。いまだ御安心落居せずとみえさふらふあひだ、前段に至極三心の法門をつくし候。またこの心を得たまはゞ、よも淨阿彌陀佛はいりさふらはじ。老若不定の界なれば、御身よりもさきに淨阿彌陀佛早世しさふらはゞ往生空しかるべし。淨阿つきそひまいらせても、淨阿が信心は淨阿が往生ぞと御信

心決定さふらはゞ、その決定の心こそ御往生とはなるべくさふらふ。三心はひとたび決定
 の心さだまりてのちふたゞびひるがへさざるを願行具足所爲皆剋すともまうし候御ふ
 みにやゝもすれば稱名もゝのうく、いよく貪欲愛念の業識増進せしむとみえさふらふ。
 是こそことに他力信仰の人の往生の便りなれと、信心おこすべき心根にてはさふらへ。我
 とこの心をよく心得れば、彌陀の本願發し給ひける御慈悲の深さもたふとく、衆生の
 志のなき心中もさへぎつて、報佛の御智慧にさとられ奉るあひだ、自心に信心を頼む
 べきちからつきて、たゞひとへに如何なる愛念妄執著心のうへにもほとけの本願を感歎し
 て稱名する人は、この悪心著心既に清淨なる信心よりなを稱名の便となりて、かな
 らず往生をすべきのゆへ、こゝに日來のころのをもむきをひるがへして、いかなる妄執
 のうへにもとなへ給ふべし。妄執著心おこればなを稱名すまるとあひだ、きははれた
 る念想却て念佛の行者となるゆへに、いかに往生せしとおもふともこの悦身にあまるゆ
 へに、臨終の來迎疑有まじく候。念佛のものぐさくまうされざるこそ念佛のあぢはひな
 れ。まめにてまうされんは、たゞ人のうへの多言いたづら詞に准ぜらるべし。心は業障深
 くして欲の境界にすゝみ著し、念佛はこの業を滅して淨土に生すべき清淨の行體なるゆ
 へに、心行不相應のあひだ、心を捨て稱名すれば、稱名に機のつみ滅して往生するあ
 ひだ、他力とも名づけたり。この委細の法門に御信心おこらずしては、いかなる淨阿彌陀
 佛にあはせ給ひて候とも、争か淨土の法門をばかやうには談じまうし候べきや。たゞ

信心しんじんひとつばかりこそ佛種ぶつしゆたるに由て、三心さんじんとも名なづけてさふらへ。しからずして機情きじやうのかたに往生わうじやうのたのみ永ながくこれあるべからざるゆへに、かやうにはまうし候さふらふまたはやうあみだ。又淨阿彌陀佛じやうあみだぶつは京都きやうとに信敬しんきやういたすともがらしげくさふらふ。他の障しやうとならせ給たまひさふらはゞ、自身じしんの信心しんも決定けつじやうすまじく候さふらふ。あひだ、眞實しんじつの他力たうりきふしぎ不思議い易往わうの行儀ぎやうぎをこゝろをくだきて注ちゆうし進しんじ候さふらふいま。今は定さだめて御信心ごしんじんさふらはば、往生わうじやうの御安心ごあんしんも落居らくこさふらはんとおぼえさふらふあひだ、他力たうりきほんぐわん本願おんねんの趣おもれきをのべ候さふらひ。をはんぬ。

南無阿彌陀佛なむあみだぶつ。

他阿上人法語卷第四 終

他阿上人法語 卷第五

花山院右衛門督殿へ進ずる御返事

上洛の事眞實の御信心にて叡聞にをよびさふらふのうへは、いそぎ參洛をくはだて、御道場を拜し利益衆生に向ふべくさふらふのところに、關東の荒武士どもにとりこめられ、身暇をゆるされずさふらふのあひだ、御意に應ぜざるの條、かへすゝ本意をそむき候。しかるに過去無數劫より今日今時にいたるまで、六道生死に沈淪して、四苦八苦をのがれずといへども、本願の強縁にあひ、臨終の一念に名號の利劍をもて妄愛の業障を截斷し、淨土得生の善事をいだくに機功をからざることは、ひとへに他力不思議の加持力によるなり。見參にまかりいりさふらふといへども、これらの法門をこそ談じまうすべくさふらへば、兼てまうしせしめさふらふごとく、いかなる御忽劇の中にも、稱念もつともすぐれ候ものなり。たのみなきの老命なを娑婆に影をのこしさふらはど、今一度の面目大切にぞんじさふらふといへども、このたびはちからなきの次第にさふらふなり。

南無阿彌陀佛。

三ヶ谷侍從殿へ進ずる御返事

【娑婆】梵音サハ(Shala)忍土、忍界などと譯す。内に寒暑風雨等の苦を堪へ忍ばざるべからざる國土の義にして、この世界のことをいふ。

【聖道淨土門】決
疑録には、聖道淨
土二門、とあり。

凡生死をはなれ往生を遂るの道行、これを聖道淨土門とす。聖道は家を捨て欲をはなれて
心に所望なき是を發心と名づく、かくのごとく心清淨なるは佛道の初門なり。淨土往生
は本願不思議の名號に信心落居して往生を決定す。これを三心と名づく。この三心は師匠
にあひて習ひこゝろむといへども、義理にとゞまりて信心發起せざるほどは決定信をえざ
るのあひだ、知識にあひて自身の疑心をたづぬるとき、本願不思議の名號八十億劫生
死の重罪を滅し、臨終の一念に報土へ託生して、六道生死のふるさとをはなるべし。みづ
からの三業の行體はみな煩惱に賊害せられて出離の縁なしとこれをあたへらるゝとき、げ
に日夜相續するところの妄執妄念慢心虚假名聞利養人我あつくおほふて佛性をうづむのあ
ひだ、いかなる行願をおこすといへども、他力の加被護念なくしては淨土に生ずべきち
からなしと。こゝろ退屈するときひとすぢに阿彌陀佛をたのみ奉り、稱名の一行に落
居して、いかなる心のうへにも南無阿彌陀佛と唱へて日夜を送りたまはば、臨終何れのゆ
ふべなりといふとも、目の前に待得べきのゆへに、つねに口をひらきて稱名する行者は
決定往生の人なり。この安心を淨土の規模としさふらふ。たゞいかならん忽劇のときも、
臨終のさだめがたければ、稱名を往生と信知して月日をはこび給はゞ、その時剋のうち
にはとされたけよはひかたぶきて、命終すといへども、または若年幼少にして早世すとも、
一度の臨終には必あひ給ふべくさふらへば、このうへは別の安心あるべからず。たゞ唱
ふるより外はみな輪廻生死の舊業なり。また望み仰せられさふらふ二枚つきの本尊名號所

持ちの念珠ねんじゆこれを進すす候こう。
南無阿彌陀佛なむあみだぶつ。

或貴所あるきしよへ進しんずる御返事ごへんじ

いそぐことさふらふとて、とくゞだりさふらべきよしすゝめまうすものどもさふあひだ、
京きやうをもはやく立たちさふらふて、人々ひとぐの見参けんざんにもまかりいらすさふらふおんいたはりのおりふ
し、おぼろげの御志おんこころざしならずしては見参けんざんにも入候いりさふらふべきかと、御信心ごしんごんのほどもありがたく
おぼえさふらふ。おさなき御ことにてほとけの一切衆生いっさいしゆじやうどうり平等利益おんごうけあるの念佛ねんぶつをおんうけある
べきよしふかく仰おほせのさふらふこそ、この世よひとつならぬ御往生ごわうじやうの宿縁知識しゆくえんちしきの縁えんにもよほさ
れさせ給たまひて候さふらふかと思議ふしぎにおぼえさふらふて、むかはずしてはあたへずさふらふ念佛ねんぶつ
のふだにてさふらへども、その例れいなしとてまいらせずさふらはゞ、これほどの御事ごんことに利益りやく
かけぬとおぼえさふらふあひだ、ふだをひとつまいらせさふらふ。東ひがしへむけまいらせこの
念佛ねんぶつをもたせおはしましませ、一遍いっぺんとなへさせ給たまふべくさふらふ。時剋じこくはたがひさ
ふらふとも、これよりもそなたへ向むかひとなへてあたへまいらせて候さふらふ。往生わうじやうには信心しんごんばかり
ほとけのたねとなりさふらふ。そのたねを報土ほうどにはこびさふらふは行者ぎやうじやの稱名しやうみやうばかりに
て候さふらふ。その外ほかはいかなる深き法門ほふもんたふとき行體ぎやうたいもおよばずと心こころえて、しかも行ぎやうじ候こうもろ
くくの行ぎやうをば極樂ごくらくに廻向まがうして、身みの行徳ぎやうとくをこゝろにもたずさふらへば、六字ろくじの中なかにあらゆ

【宿縁】 前世に結
びし因縁

【六字】 六字名號
にして、南無阿彌陀佛なり。

【波羅蜜】梵音パ
ーラミター (Para
mita) 到彼岸と譯
す。菩薩の修する
行。布施持戒等の
六波羅蜜又は十波
羅蜜のこと。

【いつまでも】決
疑録には、いつに
ても、とあり。

る萬善萬行諸波羅蜜とひとつになりて、いかなる行も自力とはならずさふらふ。もとより
行體なくしてたゞ念佛ばかりとなへさふらはんも、名號の中にはのこる行なくさふらふゆ
へにくるしからずさふらふ。信心ありげなる人の往生をとげざることのさふらふは、臨終を
しらざるゆへにてさふらふ。臨終はいつのときいつの月いつの日のなんどきにあるべしと
いふことの兼て知がたきゆへに、念佛相續とまうすことはさふらふ。未來をしりがたくさ
ふらふあひだ、いつも只今まうすところの念佛を臨終にして日夜をすぐしさふらへば、月
日のうつりかはり候に隨ひて、さきの命は少くなりゆきさふらふて、老少不定にさふら
ふあひだ、いつまでも終焉のゆふべは今にてさふらはんずれば、となへて息たえさふらへ
ば、そのしたにほとけの來迎に預りて、報土に往生すべくさふらふ。凡夫の心は愚癡にし
て臨終いつといふことをしらすさふらふほどに、未來にとをく／＼とあてがひさふらふあひ
だ、今日も未來あり明日も未來あり、まさしく終り候ときにも、さきのごとくのちに死
すべき思ひをなし候ほどに、念佛せずして心なくなれば、往生は遂ずして六道生死に立
歸りさふらふなり。決定往生の行者は心に臨終をあてがはずして、稱名の聲を臨終と
たのみていつもとなへさふらへば、ほとけの護念に預りて往生は決定たるべくさふらふな
り。さのみことはおほくさふらへば、手びろにて御心もひとすぢならずさふらふあひだ、
所詮ばかりをとりてまうしさふらふなり。また御志のほどありがたくおほえ候。
南無阿彌陀佛。

聖道修行し給ひける或貴所より往生淨土のいはれをたづねたまひければ、書示し給ふ御返事八箇條

一、夫一代聖教の義理萬差なりといへども、生死出過の所詮は一理に落居すべし。しかるに機を九品にわかつことは、阿彌陀佛の本願に設我得佛十方衆生、至心信樂欲生我國、乃至十念若不生者、不取正覺とちかひ給へり。衆生種々の生をうくといへども、佛性を具足せざる衆生はなし。六趣四生のうち衆類おほしといへども、出離生死の機法は人界に生を受くるとき、聖道は菩提心を發して佛果を得。淨土は三心を發して極樂に往生をとぐ。しかるあひだ、一切の衆生を本願にもらさざらん爲に、機を九品にわかつて引導を一行におさむ。下品の三生は遇惡の凡夫、中品の三生は遇小の凡夫、上品の三生は遇大の凡夫なり。大小乘の聖者に凡夫の名をかうぶらしむるいはれは、本願に十方の衆生を引導するのゆへなり。九品の往生はまさしく下品にあらはる。下品下生は五逆の罪人佛法世俗の善根なきゆへに、死苦來逼して失念するあひだ、知識口稱する聲について十聲となへて終る時來迎に預るなり。下品中生は破戒の罪によつて念佛せられざるのあひだ、知識阿彌陀佛の五分法身の功德戒定慧解脫々々知見等をとく時、破戒の罪滅してすゝむる念佛を耳に聞て、行者こゑに出さざる前に命斷す。知識の念佛の聲行者の耳にとゞめて、すなはち往生を遂るのあひだ、是を頓が中の頓となづく。下品上生は十惡の機にて罪劣なるあひだ、はた

にかならず死を待得べきあひだ、臨終はいつも只今の一念に定めて念佛すれば、相續の念佛かならず大切なるべし。

一、過去の宿縁とまうす事は、今生に念佛を信じてまうす機のことなり。念佛まうすといへども平生ばかりにて、臨終にまうさざれば往生不可なり。そのゆへは衆生の心中に貪瞋癡の三毒とて地獄餓鬼畜生の種子あるあひだ、かならず三惡道に墮在すべし。命根のためるとき三塗に立歸るべきゆへに、念佛せずして死せばかならず輪廻すべし。命終のとき南無阿彌陀佛と稱すれば、八十億劫生死の罪滅して、すみやかに無爲の淨土に得生すべきあひだ、臨終の念佛もつとも大切なり。また兼ての用心も臨終の爲にてあるべし。かねて往生決定の行者は、臨終に名號を稱すべきの理り今より決定すといへども、機を罪惡生死の凡夫と信ずるあひだ、もし失念もあらば念佛をすゝむべしと契約をなす。これは念佛をすゝむるばかりは人を嫌ふべからず、兼てかくのごときの義理についてげにもといふ行者の信心おこるとき、往生のいはれをしめす人にあひたるを、知識にあふとは名づくるなり。知識の縁なくしては、信心の落居さだまるべからざるゆへに、行者の心中にたのむところの知識は有べし。いまだ念佛をも信ぜぬ人、我に死するとき、餘所より念佛をすゝむるその勢について、稱してをはればかならず往生をとぐ。是は三心の具不具も知ざれども、六字のうち三心を具足するあひだ、名號をとなふれば一切の罪滅して必往生をとぐ。此往生人はことに本願名號の不思議にて有べきものなり。

【第六天】他化自在天のこと。

一、念佛の行者臨終不念佛にて終らば、順次の往生にあるべからず、然而三生をばすぎずとこそ古人もまうしつたへてさふらへども、これはいまだ念佛に信心落居せざる義にてこそさふらへ。決定往生の行者は順次に本意を遂べきのあひだ、未來の縁を期すべからざれば、その義には争か同すべき。又暫雖成魔終得果といふ意は、魔といふは外には有べからず、みづからの心中を第六の意識と名づく。是すなはち第六天の魔王なり。心外にありと心得たる程は外道たるあひだ、暫雖成魔とはこれすなはち妄執を魔とこそえぬれば、邪を捨て正に歸するときを終得果と名づく。淨土の行者はほとけに身命を歸し奉りて念佛するあひだ、この念佛に一切の魔軍も滅して往生をとぐるのゆへに、鬼魔もたよりをなさずと見えたり。

【智者の】決疑錄には、行者のとあり。

一、厭離穢土欣求淨土とは、機を無有出離と心得るは厭離穢土なり。行を他力の一行と信するは欣求淨土なり、これは智者のこゝろなるべし。念佛の行者は在家出家智者愚者善人悪人をきらはず、たゞ信心ばかりほとけの護念に預るべきのあひだ、著心慢心善念惡念みな輪廻の業とこそえて、その念のうへに念佛すれば、稱名のこゑに罪滅して往生を遂べきのあひだ、出離の縁なしと心得ぬれば、著心の有無を論ずるにおよばず。

一、念佛の行者の執心をきらはんには、往生する人一人も有べからず、もし執心をきらはるべけんには、衆生の爲に争か本願をばおこさるべきや。在家は妻子財寶一切の家具にをいて執心なきいはれは何事につけてか心得らるべき。是はみな三塗の業なりといへども、

【無記】三性の一善にも悪にもあらざる性質、即ち非善非悪の中間性のこと。善悪の二性は、調和、不調和の性を分ち、また可愛不可愛の果を記別することを得れども、非善非悪の性に對してはその何れとも記別すべからざるが故に無記といふなり。

【中有】四有の一人、死したる後、未だ次の生を受けざる間をいふ。この間の人類の身量の小兒の五六歳位の形量にして、微細の淨色を以て成り、肉眼にはみえず。而してその時間についでは或は極少時又は七日、七七日、無定限なりといひ、その説一定せず。

このつみは稱念のうちに滅して往生すればこそ他力とも名づけたるなり。また日所作の數遍は三業の中には身業の所作にて、これは念佛相續の方便なり。意業は信心におさめ、口業は稱名なり。往生は三業の中には口業に落居すべきあひだ、かならず臨終には稱名すべしとみえたり。

一、念佛のち善悪の心なく餘言なくば、息はかゝりたりといふとも往生なるべし。そのゆへはこころは輪廻の業なりといへども、名號をととなふるとき罪滅して往生をとぐ。罪とは心のことなり。息はいまだのこりたりといへども、こころなきいのちなるゆへに、命は風なれば風大ばかり残りたるにてこそあれ。つゐにきゆるあひだ往生にはくるしからず。又名號をとなへてこゝろなくなるといへども、天井をまぼるは命根のたゆる時なるあひだ、たえてのちは又目をひらくなり。是も無記の所作なれば、前の念佛にてこゝろなくなるがゆへに往生すべきなり。

一、善無記惡無記の事一生の業障はをはりに現起するあひだ、惡心よりこゝろなくなるを惡無記と名づけ、善心より心のきゆるを善無記となづく。しばらく中有にむかふといへども、一期の善悪の行業によりて來世の生をひくべきあひだ、來生も今生よりしらるゝいはれなり。又善惡無記三性とは平生の心にあり。善心の時は善なり。惡心の時は惡なり。無記の時はこゝろなし。人ごとにつねにあることなれども知ざるなり。これは地獄餓鬼畜生の種子なり。惡心は地獄の種子、善心は餓鬼の因、無記心は畜生の業。これをはなるゝ人

は有べからず。この三性は佛法をさへたる業なれども、臨終稱名のころにそのつみ滅して往生を遂るのあひだ、是を超世の本願名號の不思議とはなづけけたるなり。これらの疑心は、れさせ給ひてさふらふとも、念佛なくしては往生不可なるべし。この理りにつけて念佛の御信心いよ／＼深厚にならせたまはゞ、御所得たるべきゆへに、御不審の段みな注しまうしさふらふ。御往生はさきの御信心の通りにても不足有まじくさふらへども、御問について答へまうし候。

南無阿彌陀佛。

人見の音阿彌陀佛へつかはさる御返事

勸進のふだに決定往生六十萬人とみえさふらふは、六は六字の名號、十は十界の依正、萬は萬善萬行、人は人中の分陀利華なり。是は三心發得の念、佛行者の名なり。これすなはち名號所具の機法のいはれをあらはす。かならずしも數にてはあらずさふらふ。又六十萬人は一切衆生の名なり。一切衆生と書ては一生の勸進に相應しがたきあひだ、六十萬人すゝめはてゝはまた始めてすゝむるなり。かぎりなくしては手びろくなるべきゆへに、いつも六十萬人とかくなり。六十萬人の數は故聖の時よりわれ／＼又當時の遊行の時までおほくかさなるあひだ際限なき名なり。又觀音授記經の文は文面ばかりにては謂れをば心得がたくさふらはんとおぼえさふらふ。この文のころは極樂には稱して無量壽とし、娑婆には示現して觀世音と

【十界】迷悟の階級を十種に區別したるもの。地獄界、餓鬼界、畜生界、阿修羅界、人間界、天上界、聲聞界、緣覺界、菩薩界、佛界のこと。

【分陀利華】梵音フンダリーカ（Pundarikā）白蓮華と譯す。又人中好華と希有華、人中上上華、蔡華ともいふ蓮華の一種。

【脇士】佛の左右に侍る菩薩等をいふ。彌陀の脇士は觀音勢至なり。

いへり。極樂にては無量壽と名づけ、娑婆にては觀世音と名づくるなれば、娑婆にても大悲闍提の菩薩なるゆへに、衆生界を度しつくさざらんより外はほとけにならじといふ願なれば、衆生界はもとよりいつまでもつくべからざるあひだ、ほとけにならぬかたを觀音と名づく。生死の衆生にへだてなきあひだ、衆生の生滅に同ずるかたを觀音はうけとらせたまふなり。阿彌陀は淨土不退の御壽なるゆへに、淨土の教主として一切衆生を極樂に誘ひし、淨土にて生死をはなさしめたまふ。その脇士を觀音と名づくるあひだ、觀音は生死の衆生に類同するゆへに、阿彌陀穢土を入滅して觀音へ附屬し給ふところを、阿彌陀の御壽入滅すとみえたるなり。阿彌陀は生死のいのちに類し給はずして、淨土におはしまして觀音へ附屬したまふ娑婆のかたを、阿彌陀佛の入滅とは名づけたるなり。極樂にては無量壽なれども、娑婆の御壽は娑婆になければ、入滅と名づけしその文のころを得ざる人は、智惠なくして文字ばかりに僻見をおこすあひだ、法のところをしらずして、極樂の御壽に入滅ありと心えさふらふなり。文は睫のごとしとこそみえてさふらへ。睫は目にちかけれども見えざるがごとし。いかでか智惠なくして教文ばかりをもて佛法を知得べくさふらはんや。しかれば面々にまろすところの理り、或は師匠につたへ、或は文字をもてはかるあひだ、法位には合すべからず。又在西示現小但是暫隨機の文、衆生は見聞覺知なくしては何れのところよりか信心を生ぜんや。このゆへにほとけの分量をとくなり。分量あるときは六十萬億那由他恆河沙由旬の身量も小身なるゆへに、東土の衆生このほとけの名號を聞

て、信心おこれば佛智に相應して淨土の往生を遂べきゆへに小を現すとはいふなり。然るあひだ淨土は事相の法門とは名づく。事相なくしては迷門の衆生いかでか濟度のたよりあるべけんや。小を現するはほとけに大小なけれど衆生のためなり。すでに淨土に詣ては悟りをひらくべし。今は穢土に衆生ありて淨土に向ふときの法門なり。

南無阿彌陀佛。

熊井道阿彌陀佛へつかはさる御返事

念佛一行に落居せしめ給ふのよし、もつとも目出度おぼえ候。心地修行又散善の行業、これらの佛法修行は、行徳たけ心地達しぬるすがたをもともす、みなこれ自力なり。他力と宗をたつるうへは、解智了達のこゝろをなげうつて、念佛一行におちつくばかりにて候。いかなるほとけも妄執は毫釐も衆生にかはらざるさとりをひらきたまふあひだ、一期の慧命つくるとき、二空の煙となり、無餘の涅槃に入給ひぬれ。然るにわれらが貪瞋癡の三毒は三惡道の種子たるゆへに、ほとけの本願に乗ぜんより外は、三塗の苦のがれがたしといふさとりを得つれば、凡夫増上慢の種子佛法退屈せしつみ一念に滅して、ひとすぢに本願を信する時、八十億劫生死の罪名號の一稱にほろびて、不退の淨利に得生するをほとけの本懐とす。然ればたゞ念佛まうすより外は、智慧も悟も萬行も念佛のしたには入べからず、機功をつのらざるゆへに是を他力となづく。この願意は諸佛の深智までもおよば

ず、いかにいはんや三乘淺智のうかゞふところにあらざるあひだ、たゞ報佛の果號を信じ臨終まで相續すれば、はなれがたかりつる生死大海の風波を本願の船に乗じてこえ、西刹にいたりて不退の樂を得、無窮の生死をはなるゝを淨土往生と名づく。もし衰老の餘命なを延引あらん事もさふらはゞ、心事後信を期し候。

南無阿彌陀佛。

近江七郎殿へつかはさる御返事

【八戒齋】不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒、不坐高廣大床戒、不著花鬘瓔珞戒、不習歌舞戲樂戒。

【解第一義】根本の意義最も勝れたる道理。

機に上中下あり。是を三輩と名づく。三輩をのく三品にわくれば九品なり。下品下生は五逆。下品中生は破戒。下品上生は十惡。中品下生は世善。中品中生は聲聞一日一夜受持具足戒。中品上生は受持五戒八戒齋修行諸戒等。上品下生は但發無上道心。上品中生は解第一義。上品上生は讀誦大乘。これらはみなこれ機の善惡の相なり。但し上六品は行善。下三品は唯惡の機。この惡機のうへにとくところの名號なり。ゆへいかんとなれば、淨土の往生は自力得道にあらず、他力不思議の行體をもて往生を他土にとぐるのあひだ、廻心なくしては信心不如法なるがゆへに、自身の罪障を懺悔するも、一切善惡の妄心出離に縁なきところを廻心して、不思議の名號を稱して報土に得生す可きあひだ、往生は下三品にあらはれたり。上六品の行體は自力にてもと所修たるゆへに、廻心して往生するとき、讀誦の妙行は下々に通じ、五逆の廻心は上上に通ずと釋せらるるはこの義をもての

ゆへなり。三輩九品とは十方衆生の機の總體をしばらくあらはさるるところなり。くはしくかんがふれば無量なりといへども、みな九品の機に攝在すべきものなり。この九品の機は娑婆の得果にあらざるゆへに、しばらく淨土にときおさむる計りなり。理實には報土に九品の差別あるべからず。念佛の信心決定せん機に在ては、これらの法門は所詮なく候。未熟の機を淨土に誘引せしめんための方便のことばなり。わが三業の所解にたちふるものは、かななかけたる板に鐺をあてんがごとし。然れども御不審を發せしめんため、あらあら注し進じさふらふ。

南無阿彌陀佛。

或人へつかはさる御返事

往生の志ある人は身のいたはりわづらふをこそよろこびさふらへ、この有爲の娑婆世界は、ゆめまぼろしの界にて、久しく有まじき理りのおもひしられて、おしき命もいつまでとおぼえ、いたはしき身もかくゝるしみにこそしづめば、命のあらんほどはかゝるべしと心に苦をうけとりてなげきわづらはざれば、苦の中にてこそ苦をはなるゝ心もをのづからさふらへ。人の目のまへにさへぎるほどの境界、無常にうつされずして安穩なるもの何ものにかさふらふべき。堂塔佛體すら火にやけ水におぼれくちうするかたち眼前にてうたがひやはさふらふべき。ましてあからさまなる五大五蘊のしばらく人の姿と見えさふらふ。

いつまでかまつたくして有べくさふらはんや。極樂不退の淨土にまいらんより外はのがる處あるべからずと苦を心にうけとり、臨終を待て御念佛さふらはん、何事かさはりにてさふらふべき。苦をのがれんとするにこそ、のがるゝ道のなきにわづらひさふらへ。わづらひにてゐたれば往生ばかりこそそのぞむところにてさふらへば、今生よりやうく淨土のたねの心となるべく候なり。

南無阿彌陀佛。

龜岡殿へつかはさる御返事

此娑婆世界はもとより無常の界にて、なきものも出来りあるものも空しくなり、みなさだまらぬさかひにて、心をいづくにとどむべしといふはからひもたがひて、おもひさだむべきところなくさふらふ。人の命も老少不定にして老たるも若もあれ、さきだつべしといふたのみもなくなり候をこそ、智者とも道心者とも佛法者ともまうし、はじめの悟りにてはさふらへ。これら體にあきらめさふらひぬる人は、よろこびもなくうれひもなし。うれひのとき憂をなげかず、よろこびのとき喜をよろこばざるゆへに、喜も憂もいとひねがはざれば、ともによるこびとなるべくさふらふ。このほどもおんなじみの人々むなしくならせ給ひ候よしうけ給りさふらふ。御名残さこそさふらはめども、これら體の法の理り御こゝろにそみ候はん、もとの御こゝろはかはらずさふらふとも、無常のいはれも至極し、

もとよりかゝるべきならひにてあるべければこそ、穢土の身はあからさまのものにて、われも人もとゞまるべき身命をもたざりけりと御こゝろえさふらはゞ、今のさとりにもとの歎きはうづもれて歎きしゆへにこそ、このよろこびも心えざれとおんこゝろのつかせさふらはゞ、有爲無常の處にいつまでか身をもをくべきといふ理り御肝に銘じて、わが三業の行をもては生死をはなるべきいはれもなかりけりと實に御心得さふらはんとときこそ、阿彌陀佛の願行力の不思議をもて往生をとげんより外は、御身のつたなき心いかでかわれと無爲の淨土には參るべきと御信心おこさせたまひてこそ、ほとけの本願もありがたく、名號の功德もこゑのうちにあらはれて、往生の業成就しさふらはゞ、そのしたに八十億劫生死の罪たちまちに滅して、この世の中にわづらひもなくして、臨終の來迎も決定さふらふべければ、今世後世二世の御悦び何事かこれに過さふらふべき。いまはたゞひとすぢにほとけをたのみまいらせて御念佛あるべく候外、人の兎してこそ往生すべけれ角してこそ生死はゝなるれとまうすことは、世の中におほくさふらへども、いまだ發心もせず道心もおこらず、念佛の信心も落居せざるともがらのものしり顔をして、まうし談じさふらふ事は聞とりごとにて候あひだ、その身にも詮なく人の爲にも益あるべしともおぼえず候。道心も發り念佛の信心も實に落居しさふらひぬる行者は、我こゝろの愚癡なるところをかへりみて、ほとけを頼み知識を信じて往生を遂べかりけりとしりさふらひぬるほどに、人にもいろはず、我こゝろにもいろはずして、念佛ばかりをひまもなくまうしさふらふあひ

だ、人のたづねさふらふにも、心のうちに信心あれば、是よりまうすにもよるべからずと、此返答ばかりにて、すゝみて人の知識とならず、ものをもをしへずさふらふ。一期の身のうへの行はみな輪廻の業にて候ほどに、臨終一念の念佛に滅して往生を遂べく候。人のをはりは兼ていつなるべしともしらず候。あひだ、今日も明日も次第に相續してまうしさふらふ念佛こそ、いつにてもかならず臨終にはゆきあふべくさふらへ。とゞまらぬ月日の中に日夜をはこびさふらへば、命はすくなくなり候。すゑに向ひさふらへばあととはむなしくなり、末は今の一念ばかりにて有べく候。かやうにたづね仰せられ候。御信心のほど有がたくおぼえ候。あひだ、御こゝろやすきやうにしるしてまいらせ候。さのみはつくしがたくさふらへば、こゝにとゞめさふらふ。

南無阿彌陀佛。

修理亮入道の許より條條の不審を書て尋ね奉るにつかはさる御返事

みづからの信心落居のゝちは、人々面々の不審はかの人々のこゝろの不審にてさふらへ。その不審におどろきて自の不審出来らば、信心落居したる安心にはあらず。人は人われは我にて、人のいたはる時われわびしからず。我わづらひの時人苦をうけず。人のわづらふとき身にわづらひなしといふも、わが心の苦しむはわが愛執妻子等の輪廻のきづなるゆへなり。それも出家發心せざる在家の習ひなれば、こゝろこそ歎けども身はやまず。出離

生死往生極樂の信心は臨終の一念にきはまり、娑婆の得意恩所等は絆とはなれども、たすけらるゝみちなし。況や他人にをいてをや。このときはたゞみづからが信心ひとつをほとけにまぼられ奉り、念佛して來迎に預るべき安心ならんにをいては、人のことばによりてみづからの安心みだるべからず。心は本より愚癡の妄執なれば、不審出來るといへどもわがこゝろのかやうに物にさへらるゝをもちひけるに由て、天魔にもたぶらかされけりとこゝろえたらんには、いかでか人の不審をば我安心とはしたまふべきや。生死の種子は我心なれば、命のあるほどのさとりをば期せずして、心のなくなるときの臨終をば念佛の行者は所期とすべくさふらへ。聖道門には即身成佛と談ずるあひだ、臨終のさはくりをばせず、出家求道して身を捨て慾をはなれ、名聞利養愚癡愛結の煩惱を斷ぜずしては出離しがたきによて、淨土よりは是を難行と名づく。濁世の機根にをいてはこの法器ありがたくおぼえさふらふ。また條條の御不審次にあきらめまうししんじさふらふ。

一、三心發得の行者は、三業の起行は憍慢多くして、出離の業にあらすと捨て、たゞ本願の名號ばかりを稱するあひだ、假令六時禮讚の聲句そろへてたしかに行ずといふとも、争か往生の行に頼むべきや。聲句よくて往生すべからんにをいては、名僧の一人にても往生を遂ざるは有べからず。名僧も念佛の信心あらば往生を遂べし。念佛一行にいまだ落居せざればこそ、かやうの不審も出來りさふらはめ。この行法にては往生すべからずとこゝろえながら、念佛に落居して勸る行法はよくもあれあしくもあれ、往生のさはりとかなるべ

【勸る行法】決疑
録には、勸る行法
とあり。

からずさふらふ。

一、こゝろは本より名聞利養のものなれば、いきながらこのこゝろにはなれがたけれど、その心をたのまばこそこの不審も出来らめ。行法ばかりこそ助業ともなるべければ、我こゝろとせずしてその心のうへにつとむるは信心の行法なり。心をさほくりて行ずるは自力の行なり。

一、行法は我往生の爲にてこそさふらはめ。時剋に往生せさせんには、まことに不審もあたりてさふらふ。時剋の往生すといふこといまだ覺悟せずさふらふ。往生の行に時剋を定るは懈怠あらじ爲なり。往生は勤行にも懈怠にもよるべからず。信心の行體は出離の縁となり、不信のまへにはみな空しかるべし。

一、往生の瑞相ことにめでたくして、紫雲たち花ふりてみゆるは善人の往生なり。惡相現するは惡人なり。ともに臨終念佛にてをはらば、往生はたがふべからず。是は娑婆の機の善惡のすがたなるあひだ、經釋にも善惡の凡夫往生すべしといへるはこのことなり。ともに念佛せずんば、六道の門をば出ずして、善人はよきところへむまれ、惡人はあしきかたへゆくべし。

一、孝養の事は、一切精靈と回向するも父母の爲といふも孝養にはなるべく候。出離にはたらず、但し十方衆生と回向する時は、父母の功德おほく、父母の爲ばかりに回向すれば功德すくなし。そのゆへは十方衆生と回向するときは、みづからの父母のかたへ十方衆生

【無我】我は常一主宰の義なり。人は五蘊假和合の假身にして常一の我體あることなく、又法は因縁生にして又常一の主體なし。此の如く人我なく法我なく自我もなく畢竟して我あることなき究竟の眞理を無我と云ふ。

の修する善根みな父母の功德とひとつになり。父母ばかりに回向するときは他人の功德きたらざるあひだすくなし。願以此功德平等施一切と回向するうちには、父母も入けるあひだ、みな無我の法となるなり。しかれどもこのうへに又父母に回向するもくるしからず候。一、肉食の時の念佛の事。念佛は往生の行にして、往生は臨終の一念にきはまる。その臨終をいつとしりてかかやうの不審はあるべくさふらふや。もし肉食が臨終のおはりとなるべくんば、往生の志ふかゝらん人は、いかでか肉食をせられさふらふべきや。もし臨終いつとしりたまひてさふらはんにはまうすにおよばず。但し臨終をしりたる人よもさふらはじとおぼえさふらへば、このことばゝこゝろえさせ奉らん爲にしめし奉り候。肉食せずしてよかるべしと心得たまはゞ、ほしき魚鳥をたまゝくはざらんを、ほとけへ恩にしかけ給ふにこそさふらへ。肉食はせずとも往生につのるべからず。いはんや肉食をむねとすべきや。往生にはいづれもおよばず。往生はたゞ南無阿彌陀佛ばかりなり。また所望の念珠これをまいらせさふらふ。

南無阿彌陀佛。

或人へつかはさる御返事

もとの信心をたがへて、あらぬかたに向ふは、魔縁のたぶらかしにて候なり。そのゆへは人のひがごとゝおもふ心はわがひがごととの心なり。人の道理とおもふはわが道理のこゝ

ろなり。人はよくもあれあしくもあれ、わが心に道理だにもあらば所得なり。わがこゝろ
 に道理あるといふは、我は道理ぞと心得たるにはあらず。我はひがごとにてありけりと心
 えたるこそわが道理なれ。人の道理とつけとるゆへに、人のひがごととおもふ時、わが心
 のうちに人をひがごとと思ふ心はあるゆへに我心にひがごとのこゝろをもつ。そのわが心
 のひがごとが業のたねとなりて、我地獄におつべければ、わが爲にはひがごとのこゝろな
 り。人は道理にてもあれひがごとにもあれ、わが身の爲にはもちひるこゝろよき心なれば、
 心によき心をもつあひだ、佛神のあはれみをかうぶるべきなり。人はよくもあれあしく
 もあれ。わが意執我執のこゝろ人をもちひざれば、人もわれをもちひぬあひだ、人にもち
 ひられざれば、人に善悪をなして、人の心をもちひざるゆへに、實の信心なくして往生の
 本意をも遂ざるは、今生より兼てこゝろに信なきがゆへなり。もと信じたる人を心にあは
 ねばと思ひて、あらぬ人を信じてもとの人をのけば、今信ずる人又心にあはねばとて前の
 ごとくこゝろかはらば眞實の信なくして出離をむなくすべし。我こゝろにはあはずとも、
 この世の用事の爲にはあらず。往生一大事の爲なればとて、こゝろにあはずとも、本の信
 心をたがへざれば、その信心にほとけもたがへたまはずして、今生のよろこびたるべくさ
 ふらふ。今ふみはじめむる道の始はよくてうれしくゆくと、すゑのとほらぬおそろしきか
 たへむかふては、今よろこぶ心はのちの歎きになるべし。始はわるき道なりとも、末のひ
 ろくとほりてわがおもふ處へゆきつかば、さきにわろくおもひつる心のわづらひは、のち

にはよろこびとなるべきがごとし。往生も心のひくに任せ信心なくして、その人ばかりを信じたりとも、さやうに後にかはらんには末にわづらひ有べし。今は心にあはずとも、もと信じつけたる人なれば、我こゝろのわろきにてこそあるらめ。もとの信心をいかでかたがふべき。往生の爲にてこそあれ。心をたすけんやうの知識にはあらずと心得て、我心を捨て、ひらに信じて念佛し給はゞ、かならずほとけの加被をかうぶりて、本意をとげたまふべくさふらふ。

南無阿彌陀佛。

毛利丹州殿へつかはさる御返事

近年速速仰つかはされ候のあひだ、此度は決定請に應ずべく候のところ、このとのぼらのこゝろをいかなる方便にてもゆるがしやはらぐべしともおぼえさふらはず。それとはともかくもさふらへ、かやうに有べしとはしらせたまはで、たゞわれくばかりに打任せ給ひて、かくのごとく御志ふかく眞實の御信心をもて懇切に仰つかはされさふらふあひだ、是非なく立越べしといへども、よも出しさふらはじとおぼえさふらふほどに、それもかなはずさふらふ。老衰無力の身明日をも期すべからずさふらへば、道にていかになりさふらふとも、かへりみるべきにてもさふらはず。しかりといへどもゆるしさふらはざらんには出すまじく候。かなはぬものゆへに中をもたがひさふらはゞそこばくの人の往生を

むなしくなすべく候あひだ。御事ゆへに人の往生をむなしくなしさふらはんこと、かつ
 御方に向ひていたはしくおもひ奉り候。もしまたとゞまりさふらはゞ御本意をうしなひ、
 進退こゝにきはまり候。所詮われくが心中とその御信心とかはることなくさふらはゞ、
 御往生うたがひなくおぼえ候へばとゞまりさふらふなり。もしとゞまらん爲の方便に、い
 さゝかもことを左右によせ、おもはずなき事をいつはりて御返事をまうしさふらはゞ、今
 身より未來際にいたるまで二尊の慈悲にもれ、一切衆生の利益をむなしくして、永く泥梨
 にしづむ身となるべく候。かつは界阿彌陀佛知てさふらふやうに、むかしよりいさゝかの
 事にもかやうに誓言誓狀いたしたる事はいまだをぼえずさふらへども、あまり御信心ふか
 く仰られ候のあひだ、もしわれくむけて御一念もあやしみをなさせ給ひ、恨の御心
 もおこさせたまはゞ、このたび決定往生の御信心やぶれて、魔縁にもやさまたげられさ
 せたまひさふらはんづらんと、あさましくおぼえさふらふあひだ、このついでに決定往生
 の信心を成就せしめ奉らん爲にかく誓狀をまうしさふらふ。われくをいつはりなきも
 のとおもはれまいらせんためばかりにはまうさずさふらふなり。おほかた堂舎塔婆は生死
 迷淪のうへに善力を得せしめんため、または願往生人の行法の依所にてこそさふらへ、
 出離生死往生極樂の行體にはあらず候。しかれば經に、一念發起菩提心勝於造立百千塔寶
 塔破壞成微塵菩提心熟成佛果といへり。このころは、發心して眞實の心中無二なると
 ころ熟すれば成佛すと云云。無常轉變の界に造立するほどのすがたは、みは破壊顛倒し

【十念】念稱は是れ一にして十念念佛稱ふること。

てあともなしと心得て、かりそめなる行業ぞとしりながら、是をいとなむは咎にあらす。しばらく命のあるほど臨終までの居所にてこそさふらへば、さのみ執し給ふべからずさふらふ。もしくだりて候とも、十念をとなへて供養をのべさふらふ。是よりそなたに向ひて十念をとなりさふらはんずれば、人こそ見知せずとも、御心中をば佛智よりへだてなくみそなはしたまひさふらはんずれば、無上の供養にて有べく候。またくだりてさふらはば向顔を遂さふらはんのみこそたがひの本意にてはさふらへども、見參に入候ともこれほど甚深の御信心のかたに信心をばあたへまいらすべしともおぼえさふらはずさふらふ。このころをよく御心得候て、ますく決定往生の御信心おこりさふらはど、今世後世の御悦び何事かこれにしかんや。また凡夫の心は生死輪廻の界にまよひ出たる苦器にて候ほどに、執心もふかく我執もおほく、慢心虚假名聞利養にほだされたる迷情なり、とみづからが心をしるを悟りとも名づけ候。されば心の勇猛に往生にむかひ、そのちからをもて往生を得べしと心得るかたをば自力と名づけ、所修の行體をたのみて往生をねがふをば雜行となづけ、悪心悪行くるしからずとて、信心はなくして念佛まうし氣色なるものをば雜毒と名づけさふらふ。當世これのみおほく候。あひだ、念佛まうす人しげしといへども、まことに本意を遂るものはまれなるか。これは眼前にして自身のうちへにこの失みなかけざれば、往生の道たえたる凡夫なりけりと。わが身のうへの失をはぢて出離にところなきものになりぬれば、ふたごころなく阿彌陀佛の願意をあふぎ、名號の一行三昧に歸入

して念佛ねんぶつする人は、三心さんじん發得はつとくの行者ぎやう決けつ定ぢやう往生わうじやうの人ひとたるべくさふらふ。前段ぜんだんにのぶるところはこゝに落居らくこせしめ奉たてまつらん爲ためにしめしまうするところなり。人の命いのちは老少らうせう不定ふぢやうにしてその期ごをしりがたし。然しかれば只今ただいまにても有あるべからん臨終りんじゆうを知しりがたければ、いつも稱名しょうみやうをおこたらずして明きかし暮くらしたまはゞ、本意ほんいの往生わうじやうはうたがひ有あるべからず候ごふらふ。御信ごしん心じんまことにしてこのこと葉はこのころを御心肝ごしんかんにそみさふらはゞ、面調めんてうなくして本意ほんいを失しつするのうらみ悦よろこびとなりさふらふて御往ごわう生決じやうけつ定ぢやうたるべく候ごふらふ。もし老命らうみやうなを残りさふらはゞ、心事しんじ後信ごしんを期ごすべくさふらふ。

南無阿彌陀佛。

他阿上人法語卷第五

終

他阿上人法語 卷第六

甲斐國中河といふ處にて或人へ示したまふ御詞

夫往生極樂の直道は弘願稱名の一行なり。しかるを水のうへの泡、草の葉の露よりもあ

だにはかなき身の爲にきえやすきかりそめなる命をながくおもひして、妻子財寶の愛念妄

執にふかく貪著し、ながく餓鬼畜生の姿となりて苦をうく。このころのたむけのためにたくはふ

るところの所領財邑によりてわづらひ出來れば、ころに背くときは是非なく怨敵のいき

どをりを結び、放逸邪見の業行をつくりて多生曠劫八熱のほのほにむせび、紅蓮大紅蓮の

氷にとぢられてながくうかびがたし。まれに供佛施僧のいとなみをなし堂舍塔婆をたて、

も、名聞利養の心をおこして修羅鬪諍の業となす。又五戒十戒をたちて身口ばかりはま

ぼるといへども、意地みだれぬれば、人天有漏の果報となりて、大乘無作の戒體にあらず。

然るあひだ、衆生の心行よりまれにも三界六道を出る便なし。ただ出家發心して、山

野村里に身命を捨て修行すといへども、風雨寒熱にたへず、衣食の爲にわづらふあひだ、

もとの業因に立歸りて三寶佛陀をそむき、破戒無慚の咎をうく。或は遁世と名づけて閑居

に庵をむすび、心しづかに念佛すといへども、もし命ながらふれば徒然にたへず。たへた

る人も心の長閑なるをよろこぶほどに、終焉命斷のきざみ苦痛を受る時ころ顛倒すれば

【無作の戒體】戒の體性にして受戒者の心中に發得する無作のこと。この戒體の力によりて戒を相續せしむるなり。

【四威儀】行、住坐、臥の四事。常に心を調へ規矩に合して戒を失はざること。

所存たがひて念佛するにあたはず、空しく死して往生の本意を失ふ。悲きかなまれに念佛の知識にあふといへども、或は戒行をまたくしてこそといひ、或は悪業くるしからずと教へ、或は無念にして唱へよと示し、或は極樂に心をかけずばかなふべからずとす。むしかるあひだ、三業四威儀善惡のこゝろ振舞にとゞまりて、阿彌陀佛の本願にもそむき、善導和尚の疏釋にもたがひて、近來念佛すといへども、まことに往生の本望を遂る人まれなり。所詮往生決定の念佛の行者は、在家出家をいはず、智者愚者にもよらず、善人悪人をもえらばず、心の亂不亂をも論ぜず、老少不定の命なれば且暮知がたし。三界火宅難居。止一乘ニ佛願。力一往ニ西方と心得て、死の縁まち／＼なれば何ぞ只今の臨終をのべんや。凡夫の心はつたなければ、まことに今死すべしとはおぼえずとも、出る息入をまたされば、行住坐臥處諸縁のあひだに、必死する理りの至極するうへは、在家は在家ながら出家は出家ながら、智者は智者ながら、愚者は愚者ながら、善人は善人ながら、悪人は悪人ながら、心のみだれん時も、のどかならん時も、のどかならざらん時も、極樂の念ぜられん時も、念ぜられざらん時も、病中にも平生にも、善心のうへにも悪心のうへにも、唯稱名の聲を往生と信じて、南無阿彌陀佛と唱へて露命のつきぬれば、名號の中よりほとけの來迎も極樂淨土もあらはるべきなり。

南無阿彌陀佛。

甲斐國一條の何某のいはく、「もと二百徧の念殊にて侍りし時は、時刻はみじかく數はおほし。この百八にては時刻はひさしく數はすくなく侍り、もとの數徧のごとく侍べき歟。數はすくなくとも時分の久しきにつき侍るべき歟」と尋ねければ、示し給ふ御ことは數徧は數徧の爲にあらず相續のため、相續は相續のためにあらず臨終一念の爲。臨終一念は臨終一念のためにあらず往生のため、臨終一念の往生は南無阿彌陀佛。

山田藏人入道へつかはさる御返事

生死の大海は無窮にして無際なり。佛法の正理は一如にして無二なり。しかるに菩提心に通達せずんばこの理をあきらめがたく、堅直の道心をおこさずしては生死を出がたし。かるがゆへに、値遇を今世にむすんで、得果を當來に期すべきものか。夫念佛の一門は即身の覺悟を捨て最後の臨終をまち善惡の妄心をいろはずして名號の一行を稱念す。しかればすなはち不退の淨刹に得生して、生死の故郷にかへらず。はやく無常の身命をかへりみて日夜の勤修をおこたらざるべし。南無阿彌陀佛。

【一如】一は絶待唯一、如は平等無差別の義。絶對平等の眞如法性をいふ。

【最後】決疑録には、最期とあり

或人へつかはさる御返事

阿彌陀如來因位の萬行を果號の六字におさめて衆生にあたへたまひ、一切衆生一人もよれ

ざる願行剋果して正覺を成じ給ふうへは、機きの功能くつうをもちひずしてほとけの誓願せがんを信仰しんかうすべし。但たゞしかくのごときいはれをこゝろえたる徳とくまでも、自力じりきのかた妄念まうねんたるあひだ、往生わうじやうの助緣すけえんとはならず。しかれば、唯南無阿彌陀佛たんにちあみだぶつと唱となへて臨終りんじゆうをまつより外ほかは別の義ぎめるべからず。この身みは父母ぼふの愛心あいしんがしばらく人とみゆれどもとなかりしかたへ去さりうすべし。命いのちは身みにつきたるものなれば又三塗またさんづに立歸たつかへり、長時ちやうじに苦くをうけて隔生かくしやう即忘まうするあひだ、今生こんじやうに始はじめてみる人ひととなりなんのちはいかゞすべき。このいはれを心こころえたらん人は、誰たれが爲ためなればさのみ惡あくを好このみ善ぜんをもこのまんや。智者ちしやの振舞ふるまひをもせず、一筋ひとすぢに念佛ねんぶつするより外ほかはちからつきぬるをこそ、他力たりにきの行者ぎやうじやとは名なづけて候まふらふ。

南無阿彌陀佛。

或人あるひとの許もとより恩愛おんあいは身みを損こんずる敵てき、財寶さいほうはこゝろをなやます毒どくと知しりながらいとはずんば佛法ぶつぽふにあひたるその甲斐かひなくおぼゆるよしまうしあげゝるにつかはざる御返事ごへんじ。妻子財寶さいしさいほうは身心しんじんをなやますかたきとしりぬれば、心こころに厭いとひ捨すてらるゝうへは、著ちやくすればいよ／＼心得こころえられてうとまるゝあひだ、今生こんじやうより思おもひ捨すてたるいはれにてこそあれ。しかれば今生こんじやうにてはかなひがたしとは心得こころえられぬことなり。今生こんじやうより外ほかに後生ごしやうなし。今の念佛ねんぶつより外ほかに臨終りんじゆうあるべからず。この領解りやうげたちぬる行者ぎやうじやは、今生こんじやう後生ごしやう臨終りんじゆう平生へいじやうふたつなくして心安穩こころあんをんになるなり。このうへに厭離穢土えんりさいどのこゝろも欣求淨土こんぐじやうどの心こころも、善心ぜんしんも惡心あくしんもひまなく起おこれど

も、南無阿彌陀佛と唱へていづれをもうちひざれば、臨終の一念に往生うたがひなきものなり。

南無阿彌陀佛。

下野國小山にて鹽津入道の念佛の安心たづねまうしけるにつかはさる御返事

一切衆生曠劫よりこのかた六趣に輪廻していまだやむときなし。ひとたび放逸のころにともなひて悪業を造りしより三塗に墮して大苦惱をうけ、ひとたびは作善の思ひにしたがつて善業を修し、善所に生じて勝妙の樂をうく。三塗といふは地獄餓鬼畜生これなり。善所といふは人中天上これなり。昇沈ともに六道生死の中なれば、われら凡夫のちからをもつて生死をはなるべき便なし。かるがゆへに阿彌陀佛の因位法藏菩薩たりし時、末代濁世の衆生まことに迷ひ深き心を五劫に思惟し、發願してのたまはく、「設我得佛十方衆生、至心信樂欲生我國、乃至十念若不生者、不取正覺」と。この願剋果して十方の衆生南無阿彌陀佛と唱へて往生を遂べきの願成就するとき、地六種に震動し、天より妙華ふり、空中に聲ありて決定必成無上正覺とつけられしよりこのかた、阿彌陀佛と號す。しかれば一切衆生の往生は、ほとけ正覺の時、南無阿彌陀佛と決定するところなり。たゞ南無阿彌陀佛と唱へて臨終せば、念佛の行者はみな往生を遂べし。同く念佛しながら往生する人はまれにして、遂ざるものはおほし。當世往生の得否は眼前のあひだ、志ある人は疑ひをいだく尤

【持戒の人】決疑
録には、人も、と
あり。

理りなり。然るあひだ善導和尙衆生の爲に九帖の章疏をまうけて往生の行業をすゝめた
まふ。たとひ念佛すといふとも、雜行雜善雜毒惡見のともがらは往生不可なり。雜行といふ
は念佛すといふとも戒行をたもちて行を修すべしといひて、ちからを自の行徳につけて、
本願のちからを信ぜざるあひだ雜行と名づく。雜善といふは念佛すといふとも諸善をくは
へずば往生不定なりと疑心を生ずるあひだ、わづかに小善福德の因となりて、出離の一大
事を遂べからず。これによつて雜善と名づく。雜毒といふは、業障ふかき心を念佛にまじ
ふるゆへに雜毒と名づく。惡見といふは、念佛には十惡五逆、みなむまるれば、惡業をつ
くるといへどもさはりなしといひて、ことを本願によそせて念佛を信ぜず。罪業をむねと
するあひだ、自業自得果のゆへに、決定して三惡道におつべし。但しもと持戒の人この行
徳をもては生死をはなるべき謂れなし。さとりをひらかずんばわづかに身口ばかりを制捨
すといへども、意地にをいてはまたく衆生にたがふことなし。出離大切なるうへは、名號
を稱して往生を遂げ、還來穢國して人天を度すべしと心えん行者は、他力に歸する智者た
るゆへ、持戒の人往生を遂べし。またもと善業を修すといへども、本願に歸せずんば、往
生を遂べからずと信じて念佛せしめば、善人往生すべきなり。又もと雜毒のものたりとい
ふとも、知識にあひてころの迷ひをあきらむる時、苦海に沈淪すべきいはれを聞得て、
心の力量つきて本願に歸するものは雜毒の執心やぶれて往生を遂べきなり。又もと惡見の
者たりとも、惡業は惡道に墮すべき因としり、地獄の苦をおそれて出離にちからなければ、

本願ほんぐわんに歸きしてひとすぢに稱しょう名みするとき、願力ぐわんりきの不思議ふしぎをもて惡見あくけんのものも往生わうじやうを遂とべきなり。みなこれ自力じりき三業さんごふの徳とくを捨すて、他力たうりき本願ほんぐわんに歸きせん行者ぎやうじやは、ことごとく淨土じやうどにむまるべきのあひだ、十じふ即じふ十じふ生じふ百ひやく即ひやく百ひやく生ひやくと釋しやくせらる。本願ほんぐわんを信しんぜずして機きの功こうをたのむことは、千中せんちゆう無む一いつと捨すてらるゝところなり。よくよくこの文もんのこゝろをときたまはゞ、この娑婆しやば世界かいは老少らうしやう不定ふぢやうのさかひ、且暮たんどぼの命期みやうきしがたし。唯南無阿彌陀佛なむあみだぶつと唱となへて、臨終りんじゆうの一念いっねんに往生わうじやうを遂とげ、輪廻りんねの故郷こきやうをはなれ給たまふべきなり。

近江國清瀧阿觀房あふみのくにきよたきあくわんぼうへつかはさる御文おんぶん

春はるより秋あきにいたりはるかなる長途夜ちやうとよを日ひにつぎ、すでに八月はちがわつのはじめに坂東ばんとうをこえ、鎌倉かまくらに入いりさふらはゞ、見參けんざんを遂とげべきのよしおもひ候さふらふところに、江州ごうしゆうへ御おんのぼりとうけたまはるあひだ、日來ひごらの旨趣ししゆむなしくなり畢をはんぬ。清瀧きよたきは心こころしづかにて佛道修行ぶつだうしゆぎやうのたよりありておぼえさふらふ。利り益やくにむかふの時ときこそ、萬事ばんじをさしをけば處ところをえらばず。生死しやうじを一大事いっだいじと思おもはん行者ぎやうじやは、みづからが胸むねのちりをはらひがたきところまで心こころをいたすべし。身みに心こころあるときは外そとの境界きやうがいを縁えんじて邪見じやけんのこゝろ善惡ぜんあくの境さかひに迷まよひ、曠劫多生くわうこつたしやうの因いんをむすび、心こころに身みをもつときは、執我著心しよくがぢやくしん胸中きゆうちゆうにうごきて、未來無窮惡道みらいむきゆうあくだうのとほそを出すいだし。身みに心こころなき時は身みひとつ清淨しやうじやうにして事業じぎふなし。こゝろに身みなき時は心こころ虛空界こころこくうがいとひとしければ所知しよちなし。か

くのごとく心身わかたざれば色心不二なり。しかるに末法の機は生を濁世にうけて、この法位に住して生死の本源をあきらむるにたよりなし。されば予がごとき泣涙の根機にをいては、身はいのちをたもたず、命は身に即する事ひさしからず、いかなる身命を得てか佛道修行せん。老少不定の界に生をうけつれば、片時の命のたのむべきにあらず、すみやかに業障の身命を彌陀に歸命して、ひとすちに念佛して往生の素懐をとげ、還來穢國して衆生を濟度せん。命なをながらへさふらはど、またくまうしうけたまはるべくさふらふ。しからずんば淨土の對面を期すべきものなり。 穴賢

南無阿彌陀佛

本間源阿彌陀佛へつかはさる御返事

鎌倉を出し時は、秋をはるくおもひやりしかども、月日を送る盗人のおそろしさは、いつの間にかくれぬらん、はや秋のすゑになりをはんぬ。春までの月日に捨られずして命なをながらへなば、かならず見参に入べく候。わづかなる日數のうちにさへ世間の不思議物語もおほく出來りぬ。まして過去遠遠未來永永を思ひとげば、心もことばもおよばざるのあひだ、いふこともなくなりぬれば、をのづから心はやすくなり侍るなり、されば心こそ智惠なれ。是を捨れば心こそ佛なれ。身のつきんときはこの心も空しければ、その佛も滅すべし。かかるあひだ、有爲の報佛は夢中の權果ともべられたり。さればとてもとの欲

情そのころの欣慕するところの境界希望の思ひもつきず。我執名聞偏執我慢は日にそへてはなはだしくなりゆけば、身命もほとけに任せて往生を遂げ、阿彌陀佛の淨土にて永く生死をうけぬ身となり、無量壽を得てさとりをひらき給ふべし。その穢土の命のながからばこそ、ころもとなくもあらめ。今生の面談むなくば、再會淨土を期し候。

南無阿彌陀佛。

或人の許へつかはさる御返事

このあからさまなる身のありさまは、とてもかくてもきゆる命のたもちも遂ぬを、わが物がほにいたはりさはくりて、物思ひに業をかさぬるあひだ、いよくやまひもやまず、おもひもとどまらずして、念佛もくのうくもてゆかば、一大事の往生を空しくしては、當成の苦をいかゞしたまふべき。もとより衆生の心は自鼻の生れつきたるがごとく、ことあたらしく思ふやうになをるべきことにてもなければ、わろしとわびなげくべきにあらず。やまひもかならず迷ひの身にあたりたる公事なれば、はじめておどろくべきか。唯いのちのおしさ身のいたはしさに、往生をば一大事とせずして、心をも身をもいろふほどに、欲になげきをかさぬるなり。往生をだにも大事とおもひたまはゞ、露のごとくきゆる命雲のごとくあとなき妄念にわづらひたまふべき歟。さればこそ今は心はともかくもあれ、地獄に墮つべき理りをだにもまことに知り給はゞ、誓ひばかりをたのみて念佛せんには往生う

たがふべからず。ながらへぬ身にいろひて出離をむなくしてはなにの詮か有べき。たゞ往生をば佛知識に打任せて念佛せられさふらふべし。

南無阿彌陀佛。

金銅の淨阿彌陀佛へつかはさる御返事

まことの發心道心の前にはわづらはしきことは何事か有べき。世をいとふとまうすはわが身を厭ひ、發心といふはわがこゝろをいとひて、念々したるがはず、厭苦欣淨と申は、此世の樂を厭ひて苦の心をして淨土をねがふあひだ、この世の苦をいとはされば、わづらひとは何事をかいふべき。身のうへの樂をねがはされば、ありにくき處とはいづくをかまうすべき。穢土の樂をねがへば、ねがふ心すなはち苦たるあひだ、いよ／＼苦にしづむ。愚癡の至りなり。穢土の苦をいとふこゝろやがて苦なるゆへに、ます／＼苦にむかふは迷人の心なり。しかれば苦をいとはされば苦なし。樂をねがはされば樂なり。さてこそ念佛の行者は苦樂ともに捨て、淨土の樂をねがふあひだ、穢土の苦樂にわかれて淨土の樂ひとつに信心定りぬれば、臨終一念になして念佛まうしたまはんより外は、何事かわづらひたまふべき。つねに是へ近づきたくおもひたまふも、これら體の微妙不思議の安心にもとづき給ふ佛恩のかたじけなさにこそ、かよひたまふ所詮にても有べけれ。ただ心のゆかぬかたを歎きおもひのかなふ事をよろこびて、妄念にほだされたまはゞ、往生をば遂すして、念佛も

【名づけたれ理り】
決疑録には、名つ
けたり此理り、と
あり。

退轉し、臨終にはあらぬ心になりて、一大事の出離を空しくしたまはゞ、誰が爲にてか有べき。この娑婆世界に生を受たる凡夫の身は、われも人もみな業のすがたなれば、又六趣に立歸りて三塗の苦忍びがたき罪人となりては、何にかしたまふべき。ところによき處あしき處またくなし。人によき人悪き人争か有べき。自身ひがめば處もゐにくし、人にもそひにくし、わが心正直なれば、居にくきところそひにくき人さらに有べからず。この理りをあきらむる智慧をこそ道心ともいひ、發心とも名づけたれ。理りを得るといへども、もとの心は少しもたがはず、用事もつきず、まよひも深けれ。ひとへに彌陀をたのみ、名號をとなへて、往生を喜び給はゞ、もとより心はふたつなければ、何をか苦とはまうすべきや。

南無阿彌陀佛。

越後國古厩本郷へつかはさる御返事

尼法師のあひだ、みだりがはしきやうに仰られしかばこそ、各別の道場に居せんにはしかじとはまうせしが、ふたつの道場を期せしめぬよし仰せられければ、一所にて三境をきびしくおきて、向顔はなすとも手うつしに物をもとりかはさずしてしかるべしとおほゆ。そのゆへは、心にいとはずしてもとより愛の境界を厭離せざらんものは、番とのゐをすえたりともたよるひまこそおほければ、さのみ餘所よりして、人の心をさけんこと治しがたく候。

この時衆どもは、今度往生一大事の爲に、妻子財寶を厭離し、名利我執の心をも捨て、慢心虚假の情識にもほだされずして、決定往生すべき信心をもてこそ、ちかひをなしぬ、かねを打て、ながく身命をほとけに奉り、他力本願の名號に歸命すといへども、をのづから凡夫の妄心きそひおこる時、このころは道をさまたぐる魔神と知りぬれば、境界を縁するは無始生死の重業とこゝろえられれば、いよゝゝ愛著の相厭離の境となり、そのしたに本願もなをたふとくおぼえ、稱名もますゝすゝまるれば、生死をいとひたらん行者の心の善惡を捨たらんは、争か外相に得失をばなすべきや。道場のへだてとまうすは、厭ひたる時衆の方人にてこそあらんずれば、流れに棹さすがごとくなり。もとより道心ながらんにをいては、いかなる鐵のへだてをなして居を遠所にかまふといふとも、こゝろの中はへたゝるまじく候なり。

南無阿彌陀佛。

民部卿阿闍梨の許より念佛往生用心の一句しめしたまふべきのよしまうされければすなはちつかはさる御返事

最初值遇の強縁によて、發心修道の信心をまし、本願不思議の名號をとなへて、臨終終焉の往生を遂べし。されば阿彌陀佛の本誓は善惡賢愚をえらばず、稱するものは必往生を遂るのあひだ、最後臨終にいたるまで、これをとなふるより外は別の子細有べからずさふ

【最後】決疑録には、最期、とあり

らふ。

南無阿彌陀佛。

下條蓮阿彌陀佛へつかはさる御返事

我病惱のとき人の心身またくわづらはす、人の徳また自の福とならず。人我善悪は迷ひふかき衆生のさとりなり。智者は自業自得果のことはりをさとりて、わが心のこのむところを捨て、ことを境界に任せ、我執我慢の情識をたてずして、悪事僻事を行ぜざれば、今身より後生まで悪趣におもむかずして、當來かならず菩提の果をまねくべきものなり。

南無阿彌陀佛。

越後國石田といふ處の或人あまりに疑心ふかきよしをまうしければしめしたまふ御返事
 極樂の眞佛をばこの迷ひの眼にては見たてまつらざるのあひだ、形像を圖繪してこれを信すれば、その信心こそ極樂のほとけとはなれ。信ぜずしてさやうに疑心をなせばほとけをかるしむるゆへに、天魔にたぶらかされていきながらも地獄におつべき業をうけ、この身ながら苦を受る罪人なり。まして死後の苦をば争かたへ忍ぶべき。これは唯心の不信なるがいたすところなり。すみやかにそのころをひるがへして、あみだほとけをたのみ、名號を唱へて、臨終まで相續しをらば往生すべし。今はたゞその疑心ありともなくともまう

【すれば來迎】決
疑録には、すれば
佛の來迎、とあり

し死にすれば來迎に預りて淨土にまいると聞つるうへは、念佛こそ往生せさする法なれ。
うたがひにとゞまりて念佛を信ぜざればこそ獄卒の手にもかゝれ。いかならん心おこると
も、たゞ南無阿彌陀佛とまうさば、つみは滅すべきなり。
南無阿彌陀佛。

林部見阿彌陀佛へつかはさる御返事

本よりまことに發心せざるものは、しばらく信心のあるやうなれども、町物のうへはうつ
くしげにみえて、地を誑惑にこしらへたるがごとく、まことの心もなく發心もせざるあひ
だ、うへに人まねの金を打、詞ばかりをまなぶといへども、往生の信心なきあひだ、日數
つもればぬり物のほぐるごとく、無道心になりて惡道に墮せんは人の爲ならず。その身の
地獄のほのふにむせび、ながく浮びがたき業を成就したる破戒の惡人となりぬれば、今生
も一期もの思ひのみにして、業つもり地獄におつべし。その時はいかに餘所よりたすけん
とおもふともかなふべからず。それにつきても面々の心中を思ひしりて、いよ／＼本願を
信じて、このたび往生を遂たまふべきなり。

南無阿彌陀佛。

常念房の許より上人の没後には廟龕をたて御遺骨をおさめ奉りて不斷念佛を勤行いた

すべきのむねまうしあげればつかはさる御返事

佛法の大海には衆河の教門流入すといへども増減あるべからず。しかるあひだ、過去無數劫より今日今時にいたりて、この理り化佛菩薩の利生方便にあらずといふことなし。但しかくのごとく古徳の遺跡に廟塔を建立し堂舎を修造する事、在世はみな無相にして造化なしといへども、遺弟等そのあとを忍びて、かくのごときの儀今にたえざるものなり。信心は法機にかうぶらしむるものなれば、法は無相なりといへども利生方便は機の徳たるべし。また所望の念珠袈裟阿彌衣あたへ奉り候。南無阿彌陀佛。

下條蓮阿彌陀佛へつかはさる御返事

故聖の時よりこのしたの僧尼の別して人にかはりて、發心も智慧もすぐれたる事はなし。おなじ凡夫の身たるあひだ、たまに制戒の中の酒肉五辛姪欲乘馬等こゝろに任せずして、身心やつしたるばかりこそ出家したる徳分なれ。それすらなを無道心の心中はすきまあるうつはの水のもれいでんとするがごとし。しかるあひだ制戒ちかひにかへられてこそ、晝夜の行法もおこたらざるに、一陣やぶれて殘黨全からずとまうすがごとく、一事の制戒やぶるれば、のこりはたもたざるがごとく、一人の身中に一指一眼にてもかけなば、その身かたはものたるべし。しかるにその一處にかぎらず、國々の道場に出離の志あるもの

【五辛】五つの辛味ある蔬菜。韭、葱、蒜、薑。

【新發意のぼさつ】
新に發心したる菩薩。
【ぼさつは】 決疑
録には、ぼさつの
とあり。

は微妙にして、無道心のやからは増多なり。是を聞よんで破戒の輩おほく出來らば、根本の過たるべし。若しからは出離生死往生極樂の縁にはあらずして、破法輪罪の過をまねきたまふべし。一身の過他にをよばざり、未來に邪見の輩おほくなりて佛意に叶ふべからず。御身は在家なり。本病つねにこもく發す。みづから息災にして見くだし給はざこそ、實に不至信の心にてあらめ。心神違例のときは、わざと歩行して臨終を見はて奉らん爲、何國へも同道せんこそほとけの慈悲を知り奉りたる知識にてこそさふらはんずれ、證據を外に尋ぬべからず。觀音勢至は阿彌陀佛の御使に蓮臺をさゝげて病者の室にたちむかひ、新發意のぼさつはこしかきとなりたまひて、信心の衆生を極樂へ迎へとりたまふなり。しかるに乗馬するほどにては、争かこの大慈大悲の恩徳を報謝し奉るべきや。恭敬のこゝろよりこのこと仰せられてさふらへば、眞實の志は感じ奉りさふらへども、それは願主の信心のいろにてあれば、そのこゝろのうちのをわろしとはあらず。僧尼の中の佛道加護の爲にかくのごとくはまうすなり。決定往生の信心のほどは、御ふみにみえてあれば、たのもしくおぼえ候いよく念佛をこたらずして、本意を遂らるべきなり。南無阿彌陀佛。

松田淨阿彌陀佛へつかはさる御返事

をよそ世間出世間とてふたつの道あり。世間といふは一切衆生曠劫已來六道生死に輪廻

【おもひ知識】決
疑録には、おもひ
知て知識、とあり。

して、善惡の執心深く著心著相の識情にとぢられて、有爲無常の境に生を受ながら、露のごとく消やすく、電のごとく名残なき有待の身に、常住不變の僻見をおこして神に祈り、佛にまうして肝膽をくだくといへども、かぎりあるかりそめの姿なれば、無常の風に露命をうばはれて、今生の機縁つくる時分には、思はぬかたにうつさるゝのあひだ、こゝろさはぎ身くるしみて惡趣に輪廻し、永劫寒熱の苦をうけて浮びがたし。出世間とはかくのごときの六道生死の因果をおもひ、知識にあひて一念發心し、おしみたはひつる身命を捨て、菩提心を發し佛果を成ず。淨土往生は念佛知識のをしへに隨ひて、流轉生死の因果をしめさるといへども、世間もすてがたく、妻子財寶にわかるゝこともゝのうきあひだ、即身成佛かなひがたきによて、身は家にありといへども、こゝろひとつに信心おこりぬれば、身命を阿彌陀佛に廻向して、命をはるまで念佛相續して、臨終の一念に來迎に預り、不退の淨土に往生して、ながく生死をはなるゝことは、衆生行業のちからにあらず。佛智の御ちから名號の不思議によてなり。これは未來の苦因をかなしみて、たまゝうけがたき人身をえたる時往生を遂ずして、なを六趣に輪廻せん事をいとふ志ある人は、幾程もなき今生の身命の爲に佛神をたのますして、ひとすぢに念佛すれば、いのりの爲にたのみつる佛神も、生死はなるべきかたをよろこびて、晝夜六時に阿彌陀佛の光中にして、行者を臨終までまぼりたまふなり。かくのごときたるあひだ、舊業につながれて、いまだ發心せざる人は、知識の教誡耳にとゞまらずして、執心はれやらざれば廻心のこゝろなくし

て世間の業にこゝろをそめ、身命をおしむわざになを執心をとめてまた輪廻す。他力不思議の行體を聞えて踊躍歡喜して、此度往生を遂るは、たゞ佛の御ちからによるなり。世間出世の二道いづかたにも心のひかつかたによるべければ、知識はこの心の理りを行者にとき聞するばかりなり。これを示し奉るところ教意明鏡なれば、往生の志眞實ならば、稱名の一行をこたらずして、臨終の一念に往生をとげたまふべし。
南無阿彌陀佛。

佐竹安藝守貞俊殿へつかはさる御返事

夫融通念佛とまうすは、本願に歸するところの行者、三心發得の法機たるに由て、一切の衆生面々に凡夫たるのあひだ、あひたがひに識情には自他の思ひをなして、心はへだゝるといへども、願力の徳名號の不思議に由て往生を遂るくらゐの領解は、各別の機情たるあひだ、本願ひとつに歸すれば、法のかたより融通して、自他の行體一如なるところは、融通念佛なるゆへに、行者も三心發得すれば融通念佛なり。かくのごとく融通念佛の義を知り得るといへども、念佛に信心おこらざらんには往生不可なれば融通念佛にあらず。別して融通念佛とわくれれば他をへだつるあひだ、本願せまくなりて融通念佛にあらず。別に融通念佛とわけれられ候はずとも、ふかく本願を信じて往生決定ならん人は融通念佛にて候べし。みな人の精進潔齋することく行水をし、その日をしてんじて念佛しさふらはん。普通

【精進】六度の一心を精らにして道に進むといふ義。

【なれ機の善根功徳】決疑録には、にて機の善根功徳なり、とあり。

別時の儀式はみなかくのごとく候ぞかし。二口計りを往生の念佛にして、その外の念佛の往生を遂ぬことにてあらば、念佛申ては何の益か候べき。本願の念佛は往生の爲なれば、如何ならんおりふしもいづれの時刻にも、おなじくとなへるたらばみな往生の念佛たり。必日をしてんじて死する習ひにて候はゞその謂れも候べし。かねてしらする死期なりといふこと葉は古徳連のさとりなり。現在またしかなれば、この言まことなるかな。日をしてんずるかたは別行のすがたなれ。機の善根功徳本願にさふらふ。念佛はたゞ南無阿彌陀佛。

事 加州興保直阿彌陀佛聞位往生の事竝に念佛同異の儀を尋ね奉りけるにつかはさる御返

本願の名號を衆生稱念すれば、すなはち多劫の罪を消除し、臨終にほとけの來迎に預りて、無爲の淨土に往生することは、機の三業はみな輪廻の業因たるのあひだ、名號を不思議の法ともいひ、難信の法ともどかれたり。凡夫の念想およばざるのあひだ、聲にすなはち生死のつみを滅して、五逆の罪人までも稱名の不思議によて、攝取不捨の益に預るなり。然れば善導和尚第十八願の至心信樂の言をかへて、若われ成佛せんに十方の衆生、わが名號を稱せんこと、しも十聲にいたるまで、もし生ぜずんば正覺をとらじと釋せられたり。又下品中生の聞位といふは、聲の徳は耳にあるあひだ、名をきくものは口にとなへざ

【來迎に】決疑録には、佛の來迎とあり。

【大聲にほとけを稱するとも】決疑録には、大心にほとけを念ずるとあり。

【小聲にほとけを稱するとも】決疑録には、小心にほとけを念ずるとあり。

れども、往生を遂るゆへに頓中の頓教と名づく。行者の口にはなけれども、知識の聲すなはち名號をなすのあひだ、行者の耳に入ぬれば來迎に預ることは、稱名不思議の徳とこそ見えたれ。次に念聲一同の法門は、經曰、大念見大佛小念見小佛、文。大念といふは大聲にほとけを念じ、小念といふは小聲にほとけを念ずるなり。上の句の大念小念の義衆生淺智たるのあひだ、心念とこゝろえべきによて、釋には大聲小聲と釋せられたり。大聲にほとけを稱するとも、小聲にほとけを稱するともとこそ釋せらるべきに、聲に念の名をつくるは、念聲一同の深義をあらはさん爲とみえたり。普通の學匠は聲とは稱するなり。心と念とは一同なりとのぶ。善導和尚は念佛三昧の功德超絶せるところを得たまへるあひだ、南無阿彌陀佛の聲に念佛の名をつけて、この聲を稱名と名づく。しかるあひだ名號を念佛とも稱名ともなづくれば、一法にふたつの名のつくあひだ、念聲是一と釋せられ、又たゞ一心專念彌陀名號、行住坐臥不問時節、久近念々不捨者是名正定之業願彼佛願故とも釋せられたり。かくのごとく人別に疑心を生じ、衆生生死の重苦を受る念々の徳をなして、稱名一行に落居せざるのあひだ、法をば不可思議ともとき、機をば無有出離之縁ともべられたり。息の風西に向ひて本願の船をふくとき、願力の海路なれば行者彼岸につくこともつともやすし。生死無常の命旦暮期しがたければ、たゞつね々ほとけをたのみ稱名して臨終をまら給はゞ、かならずほとけの來迎に預りて、終焉のゆふべには、往生疑ひ有べからず候。

南無阿彌陀佛。

稱阿彌陀佛へつかはさる御返事

念佛の行者を人中の分陀利華と、かるゝは、信心決定の人のことなり、信心決定とまうすは本願名號に落居する一念なり。されば此信心の人ひとへに本願をあふぎ、機の徳をもたざるのあひだ、稱名の一行より外に心のをもむきなければ、信心の人とも稱名の行者とふたつをかざれば、信心の人とも稱名の人もいかでかわけ候べき。もし稱名と信心とをわけば、安心起行二途になりて、千中無一の行者たるべし。唯稱名ばかりに信をとる行者は、その信心は三心、その行體は決定往生の法なれば、これをこそ人中の分陀利華とも、上々人とも希有人とも、妙好人とも、最勝人ともいはれてさふらはめ。これにはたゞその行人の心中眞實なれば、餘所の談にはよるべからず。さてこそ稱名の一行より外に出離生死往生極樂のみちなしと申は、この信心の人なり。

南無阿彌陀佛。

越後國の或人不審まうして云「御影と上人と又稱名と名號と差別ありや、否やまた往生は機がもつ歟行がもつか」などたづねければ、つかはさる御返事

淨土の佛は穢土にては凡夫のまなこにみえ給はざれば、繪にかき木をきざみて本尊となす。

信心しんじんの行者ぎやうじやの前まへには、只今ただいま淨土じやうどのほとけを見みざれば、形像ぎやうざうすなはち本體ほんたいに同どうず。しかればわれわれくにあひたまひたらんときは、すなはち知識ちしきたるべし。現生げんじやうにも没後もつごにも所ところをへだて、は、影かげすなはち信心しんじんのまへの知識ちしきたるべし、またくふたつ有あるべからず候さふらふ。又稱名しやうみやうと名號みやうがうと差異さいいの事こと、機きの稱名しやうみやうはすなはち往生わうじやうの直道ちきだう、かくところの文字もじの名號みやうがうは行者ぎやうじやの本尊ほんぞんたるなり。一いちにして二に、二にしてもとは一いつなり。又往生またわうじやうは機きが持たもつか行ぎやうが持たもつ敷つかの事ことは、往生わうじやうとは機きがほとけになるをいひ、行ぎやうを機きがもつを自力じりきと名なづけ、機きが行ぎやうにもたるを他力たりにきとなづく。機きが行ぎやうをもつといふは、行ぎやうを機きの徳とくにしていまだ稱名しやうみやうに信しんをとらず。行ぎやうに機きがもたるといふは、凡夫ぼんぶの三業さんごふはともに出離しゆつりの縁えんなければ、但ただいかならんくらゐにも稱名しやうみやうの一行いちぎやうにて臨終りんじうすべしと信心しんじんおこりたるをこそ、三心さんじんとも他力たりにきとも、行ぎやうにもたれたる機きともなづけたれ。たとひこれら體ていの法門ほふもんをくはしく心得こころえたりといふとも、往生わうじやうの志こころざしなくしてえたり顔かほなる心こころならば、臨終りんじうの稱名しやうみやう不定ふぢやうなり。たとひこれらの義理ぎりをしらざらん人ひとなりとも、信心しんじん眞實しんじつにしてとなへむたらん人ひとは、ほとけの護念ごねんに預あづかりて、往生わうじやう疑ぎひ有あるべからず候さふらふ。この理こゝろを知しりたまはゞ、しらぬ人ひとにおなじくして念佛ねんぶつまうして、このたびりかりつる生死しやうじの古郷こきやうをはなれて、不退ふたふの淨土じやうどに往生わうじやうをとげ給たまふべし。

南無阿彌陀佛。

或人あるひと三心さんじんの要えうをたづね奉たてまつりければ示しめしたまふ御詞おんことば

機きの功こうをつのらざるところは、眞實しんじつの心こころをしるあひだ至誠しじやうしん心しんなり。機きの三業さんごふにをいては、出離しりつりの縁えんなしとさとりえて、本願ほんぐわん名號なごうの一行いちぎやうに信しんをとるは深心じんしんなり。餘よの行體ぎやうたいを極樂ごくらくに回向きやうして、往生わうじやうの法ほふは唯稱ただしやう名なにもたするは回向發願きやうはつぐわん心しんなり。

南無阿彌陀佛なむあみだぶつ。

平野專阿彌陀佛ひらのせんあみだぶつの許もとより知識ちしきをとふとむ志眞實こころざししんじつならざるよしをなげきまうしければつ

かはさる御返事ごへんじ

【一念に來迎】決疑錄けつぎりくには、一念いっねんに佛ぶつの來迎らいごう、とあり。

後生ごじやうの爲ために知識ちしきをたのむ人ひとのこゝろに輕重深淺けいぢゆうしんせんあり。もと出離しりつり生死じやうじ往生わうじ極樂ごくらくの志眞實ししんじつにふかき人ひとは、いくほどもなき命いのちのうち妻子財寶さいはい愛念あいねん著執ちやくしつにつながれて、三塗さんづに立歸たちかへりて多た生しやう曠劫くわうきやく大苦惱だいくなんをうけて浮うかびがたかりつる身みの不思議ふしぎの本願強緣ほんぐわんきやうえんにあひ奉たごまつり、この知識ちしきの教化けうけによて決定けつぢやう往生わうじの名號なごうを聞得ききえて、今いまにも必死ひつし到來たうらいせば、臨終りんじゆうの一念いっねんに來迎らいごうに預あづかり、無爲無漏むゐむろの淨土じやうどに往生わうじして、もろゝの苦惱くなんをはなるゝのみにあらず。不退ふたいの快樂けらくをえんことこれ知識ちしきの恩徳おんとくなり。報ほうじてもなをあまりありとこゝろえてん人ひとは、妻子さいしの愛著あいぢやくもふかくほとけには信心しんじんの淺あまくあらんにつけても、無始むし生死じやうじの業ごふのはなれがたき謂いはれも心得こころえられ、ほとけは清淨じやうじやう覺悟かくごの靈智れいちたるあひだ、衆生しゆじやうのこゝろをよびがたくして、かくのごとく間近まぢかきこゝろのおこされぬは理ことばりにてありけりと、こゝろの著ちやくせざるかたのたふとくて、むきたくもなき往生わうじのかたへをさへて向むかひ、ものぐさき行體ぎやうたいをばしめて修しゆし、輪廻りんわの業ごふの

方は心にそむあひだ、我かたきなりと心得て行ずれども、あながちに心をつくさざれば、
をのづから罪もかろくなりもてゆくなり。これ眞實に出離を一大事と思ひたる人のこゝろ
ねは、自然にかくのごとし。又穢土のいとほしく淨土のねがはしき志はなしといへども、
今のこゝろねふるまひみな三塗におつべき因果のおそろしさに、念佛まうさば往生するぞ
と聞て、日々の數返相續等は世間の人に順じて行じゐたれども、厭離穢土欣求淨土の信心
とほらざるあひだ、ともすれば惡業にはしたしくなり。行業にをこたらるゝは、たゞその
人のもとの發心によるべし。かくのごとく信心の淺深によりて知識をたふとむこゝろに輕
重あるべし。これよりなをたいやうなる人も次第々々におほくかはりたるは、みな本信の
輕重がなすところなり。別して法にかはりめは有べからず、たゞ機のすがたなり。かやう
に機に淺深厚薄有といへども、但本願の名號ひとつに信心おこりて唱へゐたれば、ほとけ
の護念に預りて、終焉のゆふべには必往生を遂べきものなり。かくのごとく心得るを三
心とも安心とも信心ともなづけたるなり。又在家は日々夜々殺生惡業相續して三塗の業因
を行す。然りといへどもこの名號を聞えたるうれしさに、專稱名號至西方とかや。彌陀
の本願には諸餘の雜行塵沙の善業だにも往生にはいらす。いはんや惡道の修因所詮なしと
心得て、少々も止られさふらはんは、諸惡莫作諸善奉行のほとけたちの御心にもあひかな
ひ候へば、惡業の果も定めてほろぶべく候なり。知不知の人、きのふもほろびけふも滅
す、わが身いつまでの命を心に任せてか、たゞ人のうへに見なして、むなしく日夜を過べき

や。善導ぜんだう和尚わしやうの恆願ごうぐわん一切いつせき臨終りんじゆう時ときと釋しゃくしをきたまへる御おんことばはまことなるかな。口くちをひらきて名號みやうごうを稱しょうし、一切いつせきのこゝろのうへに稱名しょうみやうもつとも所詮しよせんなり。

南無阿彌陀佛なむあみだぶつ。

稱阿彌陀佛しょうあみだぶつへつかはさる御返事ごへんじ

名號みやうごうは清淨しやうじやう無染むせんにして、輪廻りんね生死しやうじの業ごふを離はなれたるによりて、平生へいぜいの時ときすらなをものぐさし、いはんや病中びやうちゆうにをいてをや。ひごろ愛著あいぢやくの境界きやうがいだにも厭離えんりせらる。稱名しょうみやうのものぐさきことはもつとも理ことなり。しかあればこそ心こころはものうしといふとも、口くちをひらひてとなへむたれば、終焉しゆうえんには必かならずほとけの護念ごねんに預あづかりて、不退ふたいの淨土じやうどに往生わうじやうを遂とぎれば、心こころのものぐさきまめなるが得失とくしつとなるにはあらず。往生わうじやうは唯本願ただほんぐわん名號みやうごうの不思議ふしぎなり。かくだにも心得こころえぬればこのしたにもぐさけれども、たふとき心こころおこりて日來ひごらのものぐさきこゝろには似にず、たふときいはれの心肝しんかんにそめば、殊ことにうれしくてとなふる程ほどに、決定けつぢやう往生わうじやう遂とぎらるべきなり。もとより往生わうじやうは臨終りんじゆうの一念いちねんにさだまるあひだ、念佛ねんぶつの行者ぎやうじやはいたはりのとき勇士ゆうしの戰場せんぢやうに向むかふがごとく、最後さいごの信心しんじんにものぐさきうちにもいさまるべきなり。たがひのいのち知しりがたきによて、再會さいくわいかならず淨土じやうどを期ごし候さふらふ。

南無阿彌陀佛なむあみだぶつ。

【最後の信心に】
決疑録には、最期の稱名は、とあり

武田小五郎入道教阿へつかはさる御返事

世間の恹望をすて、我執名聞の家を出で、佛道の要路に尋ね入、此度往生の本意を遂たまは
ん事、眞實のよろこび何事か是に過べき。曠劫にもいまだ思ひたち給はねばこそ、今日ま
で生死流轉の凡夫にて苦をうけ給ひけめ。但所領財寶にわかれ、身をなきものになすとも、
まことの發心なきときは、命ながらふればわづかに兩三年のほどこそ思ひたちつる餘執を
もて妄執にからかへども、年月へだれば煩惱執我の盜賊にをかされて、例の本願ほこり
のこゝろに隨ひて、往生の一大事をば本願に任すともいひながら、信心はいよゝすたれ、
著相にますゝひかれて、往生をむなくするのみにあらず、はなれがたかりつる愛執も
捨ながら、また輪廻の愛結につながれ、此度本意を遂ざらんをいては、世間出世の恥辱
いづれの世にかこれをすゝぐべき。あひかまへて初發心を失ひすてず、まごゝろに本願に
歸して、往生の本意を遂給ふべし。たゞ在家も出家も、人の敵は外にはつやゝや有べか
らず。みづから僻見の執心にあり。一切の事を他のをしへに任せてわがはからふ心にした
がはされば、ほとけの護念に預りて往生うたがひ有べからず。往生はたゞ稱名の一事に
あり。所望の十念あたへ奉り候。南無阿彌陀佛乃至南無阿彌陀佛。たがひの命もしなが
らへ候はゞ見參に入べし。しからずんばこの十念を最後までをこたらずして、往生の本意
をとげ給はば、再會かならず極樂淨土を期すべきものなり。

南無阿彌陀佛。

【最後】決疑録に
は、最期、とあり

下條悲阿彌陀佛へつかはさる御返事

平生だにもとし月かさなれば、念佛もゝのぐさく行法もゝのうくなりゆくことなり。是は生死をはなるべきたふとき法なるゆへに、みづからの業が生死をはならかさじとて、かゝる事ぞとしりぬれば、この理りはたふとさにもものぐさきうへにも、南無阿彌陀佛とゝなふればこそ、臨終に苦惱を受こゝろのおもんばかりなき時もまうされんずれ。ものぐさければとて、まうさざらんには、もとより往生の志なき人にてこそあらんずれ。人の爲ならぬ往生なれば、争かものぐさきこゝろにはさまたげらるべき。まめなる心を求めば、ものぐさきこゝろにさまたげられたるなり。ものぐさけれどもまうすはものぐさき心を進退してほとけに志ある人なり。これら體の理りを心得れば、ものぐさきが知識となりて、ものぐさきこゝろのうへにいとゞまうさば、往生うたがひ有べからず。

南無阿彌陀佛。

尼ヶ崎諸阿彌陀佛へつかはさる御返事

無常轉變の界に生をうけながら、無際輪廻のうちに無限の苦惱を受たる穢土の妄執をはなれて、ながく不退の淨土に託生のことをよろこばで、夢幻のいのちのうちいつまでを期としてか無道心なるべきや。かくのごとく示しつかはすはわれくの用事の爲にあらず、面

面衆生めんしゆじやうのためなり、はやく本執ほんしゆをひるがへして、決定けつちやう往生わうじやうを遂とぐべきのよしを衆中しゆちゆうに披露ひろうせらるべし。
南無阿彌陀佛なむあみだぶつ。

他阿上人法語卷第六たあしやうにんほふごまきうだいろく
終

他阿上人法語

卷第七

近江國安食九郎左衛門入道實阿尋ね奉りける四十八ヶ條の不審、ならびに上人示し給

ふ御返事

問云、「若少一心即不得生とこゝろえば、散亂不信のわれらは三心不具の條勿論にてさふ

らへば、いかに念佛をまうし候とも往生すべからず候や。」答曰、「釋に若少一心即不

得生と。云云。この「一心かけば」といふは、三心の一心かけたるにてはあらず。もし一

心かけぬといはば、文字をかくなり。是は總じて衆生のところ少心にして佛法を知べから

ざるあひだ、出離に縁なき業障を示して本願に歸せしめ、名號をあたへん爲の大聖の智慧

衆生を誘引し給ふ慈悲の御ことばなり。」

問、「眞實に本願をたのむこゝろも候はず。また淨土をねがふ心も穢土をいとふ心もげにげ

にしからず。また此度本願にあひぬれば決定してなどか往生は遂ざらんやとおもふ心も至

誠心ならざらんものは、念佛まうすとも往生は不定にて候べき歟。」答、「もとより衆生は

欲心繁多にして、貪瞋癡三毒の煩惱に逼迫せられ、輪廻生死の業因つきずして、三惡道の

業苦を體とするあひだ、惡趣の方へひかるゝ事は山水のごとくにすみやかなれば、出離生

死往生極樂のみちはかけて有べからず。かるがゆへに厭離穢土欣求淨土のこゝろ、往生を

遂べき歡喜の信心まことならざるはもつとも理りなり。すでに眞實おこりて此度の往生うたがひなしといふ心をたのまば自力なり。これは魔にたぶらかされて自心の本性ははなはだしき迷識なることをもしらす。たゞ業障におほはれて佛種をあらはさざる妄執にして、さらにまことの信心にはあらず。自心の三業をもてば一大事の生死をはなるべき因縁なしと覺知しつる智者は、ひとすぢにたのみなきところの自の三業を彌陀に歸して念佛するあひだ、かならず攝取不捨の益に預り、臨終には決定して本意の往生を遂べし。かくのごとき行者をこそ信心眞實の人とは名づけたり。みづからの三業をもて往生さだむるをば自力と名づけて往生すべからざるものなり。』

問、「信心のおこるとまうし候は、念佛まうせば決定して往生するぞと信ずることゝるにて候や。又心もしみくゝとおぼえ、身の毛もいよだち涙もおつるほどに思はんずるのを信心おこるとは申候や。またこの分なく候はんずるものは、念佛まうすとも往生は不定なるべく候歟。」答、「念佛すればかならず往生するぞとおもひ、まゝには心もしみくゝとおぼえ、身の毛もいよだち涙もこぼるゝほどならん行者の往生を遂るも有べし。又とげざるもあるべし。遂る行者とは本願に歸入して名號に落居するものなり。とげざるは人の言葉ばかりを聞いて志ある體に見ゆれども、みづからが機分に得失をつけて本願をたのまざるあひだ、信心はなきものなり。」

問、「念佛をだにまうさば發願廻向ともに具足すと見えて候へば、ほとけの知見に任せてあ

【あひだ信心はなきものなり】決疑録には、あひだ往生とげず信心なきゆへなり」とあり

ながちに廻向せずともと申ものも候。又至心廻向願生彼國と侍れば、極樂ならびにこゝろざすところの父母親類等に廻向すべしとまうすものも候は、いかにこゝろえ候べきや。『答』廻向とは往生の爲の廻向は自力の行業たるみづからの三業を、極樂に廻向して稱名するなり。在家の修するところの善根功德等を父母親類等に廻向するは孝養報恩の爲なり。この功德にて亡者の苦まねき樂をあたふるあひだ、をのれが孝行の志功德の餘薫、かへつて子孫の福業となるゆへに修すべしとはをしへたり。たちまち往生の直道となるにはあらず候。『問』いかなるを自力とは申し、如何なるをか他力とは名づけさふらふや。『答』自力とはみづからの心行をもて往生をさだむ。一切衆生は迷ひふかくして出離に縁なきあひだ、この迷ひを自力とは名づく。他力とは本願の大慈大悲報佛の功德を一切衆生にあたへて、淨土に引接せしめたまふ。この願に乗じて念佛するを他力とは名づけたり。『問』阿彌陀經の一心不亂とさふらふは、念佛をまうさん時餘念なくなり候べきや。一聲のうちに物をおもはで候はんことは、もしさもあるべきこともさふらはん。争か一日七日までは一心不亂にて候べきなれば、凡夫の往生すべき事はさふらはず。いかに心得候べき哉。『答』もとより凡夫のこころは識情とてまことの心にあらず。情識をまことのこゝろと心得るのあひだ、餘念なくして念佛まうさんするを一心不亂と心得るゆへにこの疑ひあり。いかなる人も一日七日こゝろもなくして念佛まうす行者いかでか有べきや。若しからば念佛まうして往生を遂る輩一人もあるべからず。往生の人なくしてはほとけの本願

【亂心なくしては、決疑録には、して、とあり。

【行なりしかるに一切衆生は、決疑録には、行なり然るにあみだ佛は一切衆生の、とあり。

何の爲ぞや。すでに本願に落居する行者は、散亂蠢動にして妄執妄念きそひおこる時も念佛の一心を得るあみだ、妄念のうへにも念佛すれば一日七日みだれざるなり。念佛の信心堅固なるを執持名號ともなづけけたるにて念想の事にはあらず。もとより亂心なくしてはみだれざれとは、何によてか經にも説たまふべき。實には一日とは一心なり。七日とは一期の慧命なり。日數の一日七日はしばらく教相なり。人のいのちは老少不定にして、兼てその期をわきまへがたし。かならず七日をかぎりて命をたもつべしといふ謂れの日數ならばなにをか證據とせん。しかれば一期不定の中に臨終までを一日七日と名づくる歎。』
問、衆生の輪廻するをば諸佛みなかなしみたまふことにて候に、阿彌陀佛はなんぞ御こころせまく念佛の行者ばかりをむかへさせ給ひて、餘の行者をば攝取したまはず候や。』
答、諸佛は菩提心をおこして六度萬行を圓滿し、眞如實相の智徳をえたまふあみだ、諸行は無常なり生滅の法なりとあきらめて、もろくの著相をはなれ給ふゆへに、妄執の雲はれてのちこの行者を修して生死をはなるべしと欲なきうへの清淨の行なり。しかるに一切衆生は業障ふかくして、諸佛には擯棄せられ奉りて、出離の道なき十方の衆生に向ひて報佛の果徳を捨て、因位にたち歸りて四十八願をおこし、不退の淨土を建立して衆生を引接せんとちかひをおこし給ふ大慈悲の報佛をこゝろせましといひては、如何なるほとけかこゝろひろくおはしますべきや。ほとけはみな佛果を成じてましますゆへにほとけとはなづく。何れのほとけにもあやしみの心をおこさば佛種を失ひたる闍提人なり。三世の諸

【はせあはせて】
決疑録には、よせ
あはせて、とあり。

【四重】 四重罪。
殺生、偷盜、邪淫、
妄語。

佛も念阿彌陀佛三昧ぶつ ねんあみだぶつさんまいにて覺かくを成じやうじたまふところは見みえたれ。阿彌陀佛あみだぶつとは壽命無量じゆみやうむりやうなるをなづく。衆生しゆじやうの命いのちは生死しやうじのいのちにて短みぢかし。みじかき命いのちをながき命いのちに歸きするを名號みやうごうとなづく。臨終りんじゆうの一念いちねんに稱名しやうみやうすれば六道生死ろくだうしやうじに輪廻りんねすべき命いのちのつゐにはせあはせて、念佛ねんぶつの聲こゑの中なかより來迎らいかう引接いんげつたれ給たまひて、不退ふたいの淨土じやうどへ迎むかへとり給たまふあひだ、生死しやうじの命いのちはたちまちに滅めつして無量むりやうの壽命じゆみやうを感得かんとくせん事こと、いかなる行ぎやうか是これにしかんや。凡夫妄執ぼんぶぼうしやくのうへの諸行しよぎやうはまさしく惡道あくだうには墮だせずとも、輪廻りんねの中なかのたゞ福德ふくとくの因緣いんえんとなるばかりなり。

いかでか諸佛しよぶつのごとく佛果ぶつぐわを得うべけんや。

問とと念々稱名常懺悔ねんねんしやうみやうじやうぜんげと候さふらふは、念々ねんねんの中なかにをのづから無始むしの罪障ざいしやうの懺悔ぜんげせられて候さふらふや。

又またはこゝろの懺悔ぜんげにて候さふらふ歟か。答こたふすでに念々稱名常懺悔ねんねんしやうみやうじやうぜんげといへり。こゝろの念々ねんねんはみな妄執まうしやくなり。念佛ねんぶつをとなふれば妄執まうしやくのつみ滅めつするあひだ、念々稱名常懺悔ねんねんしやうみやうじやうぜんげとはいへり。

問とと信心決定しんじんけつちやうしてほとけの護念ごねんに預あづからんもの、もし不慮ふりよに四重五逆等しちゆうごぎやくとうの重罪ぢゆうざいをおかすといへども、往生わうじやうにはさはりありまじく候さふらふや。答こたふ信心決定しんじんけつちやうとは本願ほんがんに歸きして稱名しやうみやうに落居らくこするなり。四重五逆しちゆうごぎやくはたちまち惡道あくだうに墮だすべき業因ごふいんなり。十善業道じふぜんごふだうは善所ぜんじよに生しやうすべき行ぎやうなり。なんぞ輪廻りんね生死しやうじ善所ぜんじよ惡所あくじよの因行いんぎやうをもて争いかでか往生わうじやうの行業ぎやうごふに比量ひりやうせんや。もとより惡人あくにんも念佛ねんぶつに信心しんじんおこりぬれば往生わうじやうを遂とげ、をのれなりの善人ぜんにんも念佛ねんぶつに歸きすれば往生わうじやうを得う。ともに不至心ふししんのものは往生わうじやうを遂とべからざるうへは、何なにによりてか不密ふみつをなさんや。

問とと長時不退ちやうじふたいの念佛者ねんぶつしやこゝろの外ほかに罪業ざいごふを造つくりてのち、いまだ念佛ねんぶつせざる已前いぜんにいのちを

【梵行】五行の一
梵は清淨の義。清
淨なる行ひのこと

はり候はゞ、已前の念佛をもて往生すべく候や。又はのちの犯罪によて往生すべからず候歟。答、長時不退の念佛者に信心決定せざるもあるべし。行體精進ならざる行者に信心決定したるもあるべし。信心決定せる行者の梵行なるも有べし。不決定なる行者の行緩なるも有べし。然れば三心發得の行者は梵行なるとも行緩なりとも往生を遂べし。不決定のともがらは無行なりとも梵行なるとも往生は不可なり。すでに具此三心必得生也と釋す。三心とは信心なり。信心不如なれば其行不立といへり。なんぞ行の多少をもて往生の得否を定むべけんや。されば世間に勤行精進にてたふとき人も往生せざるをばあやしみをなし、無行惡人とみゆる輩の往生を遂れば不思議のおもひをなすなり。これらの謂れはこの釋をもてみなはらすべし。又念佛は往生の業、犯罪は地獄の因なるゆへに、臨終の一念に念佛してをはらば往生を遂べし。若念佛せずんば犯罪の業因によて惡道の果報を受べきものなり。」

問、ひとたび信心決定のものは、一念十念をもて往生をとぐべきのうへは、そのうち稱名せずといふとも往生すべしとまうすものも候。又正念の時、稱名の功つもりぬれば、臨終には稱名せずといふとも往生すべしと申ものも候。さるべき事にて候や。答、ひとたび信心決定する行者は、この信心ほとけの護念に預り候あひだ、臨終にはかならず念佛して來迎に預るべし。平生不決定の者は攝取の益にもれしむるがゆへに輪廻すべし。今の信心より外に臨終なし。臨終平生ふたつなきがゆへに、又日頃念佛の功つもりぬれば

【業障と】決疑録
には、業障を、と
あり。

臨終には念佛まうさずとも往生すべしと談ずる輩は、をのれが三業三塗の因たるところをもさとらず。過現未來の三世みな不可得なるところをも妄執のうちひきいれて、おもふさまに心得るあひだ、信心なくしてたちまち惡趣へひかれて一大事の往生をむなくすべきものなり。信すべからず。たのむべからず。これらは善導の門葉にあらず。和尚は念佛三昧を證得して五祖にひいで給へり。なんぞ終焉に念佛せずして惡趣卑業のちからをもて三界をこえ無爲の淨土に歸入する行儀とせんや。これ謗法の闡提人なり。」

問、「福有満足の人として往生の爲ともしさふらはねども、持餘りたるまゝに或は善事を修し、或は不斷念佛をまうさせ、又よのつねの人も或は名聞に住し、或は利養をおもひ、又貧賤無縁のともがらは或は渡世の爲にし、或は代官をもて念佛まうしさふらはんずるは、その身の爲には往生の業にあらず候や。又名聞にも善事をば修せよ念佛をもまうすべしと候は如何。」答、「富貴のもの貧家のともがらも、或は名聞の爲をおもひ、或は利養の徳を期して、福業をも修し念佛をも行するやから世間にこれ多し。誰に向ひてか此事を談ぜん。よてもつかざる衆生の一切行業をばかり談ぜば、みづからが信心はなくして、偏に魔にたぶらかさるべし。誰がためにか計ひ教べきや。ゆめく、いろふべからず。たゞみづからが妄執一切に繫縛せられて、出離の縁なき業障とかへりみて、すみやかに本願をたのみて念佛せらるべし。をろかなれ。」

問、「近頃往生をねがひて念佛を申輩貴賤上下みなもてその思ひにて候か。しかるに臨

終しゆうのとき或あるひは狂亂きやうらんし、或あるひは惡相あくさうを現げんじ、一念いちねんにもおよばず候さふらふものその數多かずおほく候さふらはゞ、いかなる子細しさいにてか候さふらふや。答こたふ念ねん佛ぶつする貴賤きせん上下じやうげ本願ほんぐんに歸きするものは往生わうじやうを遂とどべし。をのれが德とくをことゝして他力たうりきに乗のりぜざるものは往生わうじやう不可ふかなり。』

問と日來ひごろは惡あくとして造つくらすといふ事ことなき罪人ざいにんにて、一向いつかう念ねん佛ぶつの名字みやうじをも聞きざるものゝ臨終りんじゆうの時とき念ねん佛ぶつをこたらずして、すこしの苦痛くつうもなくいきたへ眼めをとぢ候さふらふは如何いかん。答こたふ日ひごろは無惡むあく不造ふぞうの罪人ざいにんにして念ねん佛ぶつの名字みやうじをもしらするやから、臨終りんじゆうに念ねん佛ぶつして往生わうじやうを遂とどる事は、日來ひごろは信心しんじんなけれども、臨終りんじゆうにはじめて發心ほつしんし信心しんじんおこるあひだ念ねん佛ぶつして往生わうじやうを遂とどるなり。日頃ひごろより念ねん佛ぶつをするものも信心しんじん不如にふなれば、終焉しゆうえんのきざみ往生わうじやうは遂とどせずして、また輪廻りんねすべし。みなこれ本願ほんぐんの不思議ふしぎなり惟あやしむべからず。苦痛くつうの有無うむは病患びやうげんの強弱かうじやくによるべし。往生わうじやうにはまじゆべからず。』

問となむあみだぶとまうして一念いちねん歸命きみやうのうへは、あながちに數遍すうへんせんは無益むやくなりとまうすものゝ候さふらふは如何いかん候さふらふやらん。答こたふ南無阿彌陀佛なむあみだぶつとまうして、一念いちねん歸命きみやうのゝちいよく梵ぼん行ぎやうなるものあるべし。これは念ねん佛ぶつより外ほかにたのむべき行ぎやうなきゆへなり。一念いちねん歸命きみやうのゝち數遍すうへんせずともと談だんする人ひとにふたつのいはれ有あるべし。信心しんじんの人ひとは稱しょう名みやうの聲こゑに佛ほとけをとるあひだ、數遍すうへんは助業すけごふなれば、せずともといひてしかも數遍すうへんするものあるべし。是これは信心しんじんの人ひとなり。又一念またいちねん歸命きみやうしてのちは、數遍すうへんせずともといひて念ねん佛ぶつには信しんをとらずして、こゝろのものうき業ごふにひかれて數遍すうへんをもせず。無道心むだうしんの業ごふにほだされて信心しんじんなきものは、いづれの行ぎやうをも

てか往生の業とせんや。』

問、彌陀をたのみて往生をねがふものは、經をよみ堂舎を造るなどをもすべからずと申候は、さることにて候歟。答、彌陀に歸し往生をねがふ人の經をよみ堂舎をもつくる

べからずといふは、往生は念佛の一行にきはまれば、念佛より外には往生の業なしと知り、堂舎塔婆は功德の一分なれば、人天の福業とこそなれ、往生にはよりてもつかぬと信知し

て、さにまうすものも有べし。又人の談を聞てをのれが信はなくして、聞とり才覺をもていふものもあるべし。機のさきに法なく、病のさきにくすりなければ、誰にむかひてかこの事を決定せんや。』

問、不捨の誓願にあひ奉りて名號をとなふるうへは、臨終の正念をいのるは本願をたのまさるものぞ。又日々に五萬六萬遍をくりたるは他力をうたがふものぞとまうすもの候

は、いかゞあるべき事に候や。答、不捨の誓約に預りて臨終の正念を祈るは、本願をたのまぬものぞといふものにふたりあり。眞實の信心發起する行者は往生すべし。信心なく

してたゞ義をもて談ぜんものは往生すべからず。人によりてことなるなり。このことばにはよるべからず候。又日々に五萬六萬をくりぬたるは、他力をうたがふなりといふは、行ふ

ものうきもの、或は私の料簡をもてほとけを信ぜざる輩どもの義理なり。かやうにいひて眞實の信心おこらずんば往生をとぐべからず。』

問、後生の爲にはひとすぢに念佛たるべしと信心決定して候ものゝ、若は今生の祈りの

【勤めざる】 決疑
録には、勤めざる
とあり。

爲、又は子息親類の祈禱の料に、或は薬師觀音の名號をとなへ、或は法華大般若仁王經等を轉讀したまへる事の候か。七難消滅の法には念佛に過べからざるよし傳教大師も仰られて候得ば、たゞ一向念佛にて有べくさうらふや。答、一向專念の行者はこれらの功德をことゝすべからず候。たゞ稱名の一行に一切の善根は攝在せりと證得して、自餘の諸行を勤めざるたぐひも有べし。又念佛の信心はをこりたれども、いまだ子息親類もおしく身もたはしくおもひならはして、かやうに在家のいとなみを捨ざる輩にも往生を遂る行者有べし。傳教大師念佛は七難消滅の法なりとのたまふといふとも、聞つたへざらんものはしかるべからず。たとひ知りたりとも、此詞のごとくに信ずる人もあるべし。信ぜざるともがらもあるべし。是も信不信は心中にあるあひだ、人の詞ばかりを聞てはさだめがたし。

問、念佛の行者不慮に横死にあひ候とき、あら悲しやと計り思ひて、一念もまうさず候はゞ往生すべからず候歟。又はひごろの念佛にて往生すべく候や。答、念佛の行者不慮に横死にあひてあらかなしやともいひいはず。念佛せずしては往生すべからず。横死ならず病床にしてをばらんとも、念佛なくしては往生を遂べからず。死縁まら／＼なれども、日來信心の行者はいかなる横死にあひて死すとも、臨終に念佛をまうして往生を遂べし。不信のものは臨終に苦痛なくして、善所の生は感得すべくとも、極樂往生はたなべからず候。

問、或は軍陣にのぞみ、或は怨敵などにたゝかはん時は、いかにも敵をほろぼさんとおもふ心強盛にのみ候べし。然るに心には何と思ふとも、口に名號をとなへ候はゞ往生すべく候歟。又かの悪心によりて往生すべからず候や。答、或は軍陣にのぞみて怨敵とたゝかはんときは、かならず敵をほろぼさんとおもふこゝろ強盛なるべし。これはみなたちまう惡道に墮すべき業因なり。しかりといへども信心念佛の行者は、口に名號をとなへて命終すれば、稱名の聲にこのつみを滅して必往生を遂べし。命をうしなはんほどなるたゝかひのうちに、念佛せんほどのものは比類なき行者なるゆへに、さだむで攝取の益に預るべし。

問、念佛の行者をば諸佛菩薩百重千重に圍繞し守護せさせ給ふと申すことにて候に、いかたれば横死横災にあひて、ついに一念にもおよばず候や。答、念佛の行者は證誠の諸佛菩薩圍繞して、來迎引接たれ給はん事勿論なり。かぎりあるいのちは死縁まち／＼なれども、つゐには必來迎し給ひて、娑婆四苦八苦の家を出し、いそぎ不退の淨土へ引導し給ひて安樂をえせしめ給ふべきゆへに、臨終をのべては何の益か有べき。愚者のこゝろにぞ無常をさとらずして、實有の情をもて佛智をはかるあひだ、往生の理にかなふべからず。又横死横難にあひて、臨終に一念にもおよばざるものは、もとより念佛に落居せざるゆへなり。

問、攝取の益をかうぶることは平生の時よりして候か。又臨終閉口の期にて候歟。答、攝

取の益に預る事は念佛の行者の信心決定する時よりさだまるあひだ、その遠近そらにはさだめがたし。」

問「臨終の時の念佛につきて、ほとけは來迎まし〜候事歟。又は日來の念佛の功によて、臨終には來迎せさせたまひさふらふや。」答「念佛の行者平生より護念に預りて、來迎

は閉目の時たるべし。」

問「長時不退の念佛者もし臨終あしくて往生せず候を見て、おもひ候はんずるやうは、

あの人々だにもかくのごとし。ましてわれ〜がやうなる不信懈怠の身にはかなふまじき

にてこそなど〜おもひをたえ候べきか。またはあの人々とて内心は如何ありつらん

れば、我等は決定して念佛まうさば往生は遂んずるものとと思ふべきにて候や。但しか

くおもふも自力にて候べき歟。」答「いみじき念佛の行者と餘所口にはみえながら、信心

堅固ならざる輩もあるべければ、臨終の念佛なきもあるべし。しからばまうさぬところ

には不審なきをや。かの人々だにも念佛に信心なければえまうさず。まして我身を頼み行

をたのみてはかなふべからず。唯稱名の一行ををこたらずしてまうし死にすべしと心得

ぬれば、我ためには彼人々は知識とこそなりたれ。彼人々なりとも内心はいかゞありつら

ん。われは念佛まうせば往生はせんずるものと心得ば、かれにわれを對して慢心をこ

すあひだ、彼がごとくに我も臨終には念佛まうすべからず。わが心のうちもかれにかはり

めなく往生の信心なければ、唯ほとけを頼みたてまつりて念佛申てをはるべしと信知して

【行をたのみて】
決疑錄には、心を
たのみて、とあり

となふるこそ、決定往生の念佛者なれ。」

問、「家内にてはいたづらにおきふしてのみさふらひしが、客人も來り他所へもゆくときは、竿釘にかけてさふらひしじゆずをとりて、念佛申氣色をなし、又人の聞候ときは念佛を

たかくまうしてたふときよしをのみし候は、虚假不實のものにて本願にはもれべく候や。」答、「もとより濁世の凡夫、まよひの心は虚假不實なるあひだ、念佛にもかぎらず、一

切のふるまひみなかくのごとし。この心をありのまゝにしりえつる人は、無有出離之縁の理りを肝に銘じて、身の徳をもとめずして他力に歸し、念佛の不思議をもて往生をとぐる

あひだ、この慢心虚假こそかへつて念佛の知識となりたれば、すべからずとるべからず。たゞありのまゝにて念佛せらるべし。」

問、「本願を信じて念佛まうせば、十惡五逆のものなるを生ずるうへは、あながちに破戒をも虚假をもかへりみるべからずと申ものゝ候は、さる事にて候べきや。」答、「本願を信

じて念佛まうせば、十惡五逆なを往生するときゝて、破戒虚假をもかへりみるべからずといふ義は、往生の爲にてはなくして、惡業にすゝめられて惡道にたつべき惡見なり。近代惡

無礙の法門とて、無道心のもの興行して此義をたつ。本よりことを本願によせて、出離生死の志なく、地獄に入るべき因行をわきまへざるゆへに往生は不可なり。十惡五逆も謗

法闡提も、回心皆往とこそみえたれば、身の咎を思ひしりて本願に歸しぬれば、已前のつみ八十億劫の生死重罪を滅すとゝき給ひたれば、回心して往生すといふことまことなるか

な。こゝろをひるがへさずして、悪業の因をもてたちまちに出離すといはゞ、いかなる謂れをもてか淨土とは號すべきぞや。廻心のこゝろなくしては、もとの三塗の業因なるべきがゆへに、往生のみち有べからざるものなり。」

問、往生の爲には念佛たるべしと信をとりてさふらふものゝ、いまだ念佛の法門を聞ざる已前に信じならはしたる法華藥師經等をなを捨やらずして、かれをよみてしかも極樂に廻向すと申候は、なほ本願を信ぜざる雜行となりて往生を遂べからず候歟。答、往生の爲には念佛たるべしと。信心起りてのち本修せしところの法華藥師經等をすてずして、極樂に回向する行者につきてなを子細有べし。念佛に信はとりたれども、或は人の祈りの爲、或は堂社の別當供僧などにて、社田布施物等をむさぼりて渡世を送らん爲に捨ざるはく、るしかるまじく候。往生は稱名の一行にきはまるところを信知しながら、餘行を往生の業にまじふるを雜行とは名づけ候。人間に生を受たるほどのものは、渡世をいといとなまずしては、一日も身をたすくべからず候。あひだ、いけらんほどのいとなみぞと心得ば、餘行相違あるべからず候。世間の人の世を渡る身のうへになぞらへけるがゆへなり。然れば念佛一行ばかりの信心たるあひだ往生を遂べし。出離の行に諸行つらば雜行となるべきものなり。」

問、日所作に數珠をくりゐて候に、口にはすゞろなる雜言のみをまうして、じゆすひとまはりに一ぺんもまうさずして、しかも何萬遍の數をのけ候事はいかゞ有べく候や。」

【緒をめぐらして】
決疑録には、念珠
をまはして、とあ
り。

答、「手には數珠をくり、口には一切の雜言をかたりて數をとらん人、是は雜言のかずをとるべしと發願してんものは、念佛にてはあらざるべし。念佛のかずをとるべしと信知してずゝをくらん行者は念佛なるべし。然るに人に三業あり。身口意これなり。稱名は口業、信心は意業、禮拜行道數遍等は身業のつみを滅せん爲なれば、數珠を百八つらぬきまはして數珠のかずをとるなり。口の念佛のかずを數珠にとるところえば、三業各別なるところをば覺知せずして、世間の財寶の員數をかぞへ、のちにその數をかぞへなどする世間のわざには似ず、三業を各別して相應すべし。口業は往生の行、意業身業は方便なれば助業なり。然れば雜談の時も緒をめぐらしてかずをとることしかるべからず。たゞ稱名には數もなくしてつねにとなふべし。』

問、「念佛に數返をこそまうすべけれ、相續の爲なればと勸る人も候。又一念彌陀佛即滅無量罪と説給へるうへは、ひとたび信心たてゝまうさば、さしてつなぐともとまうす人も候。はいかゞあるべく候や。またこの一念とはいかなる一念にてか候や。答、「一念阿彌陀佛即滅無量罪とは人によて心得べし。自力ならんものはみづからが一念と知り、他力に歸して稱名にもとづきなん行者は、念佛一稱を一念と信知するあひだ、自身は罪惡生死の凡夫出離に縁なしといふ信心おこるとき、すなはち心行ともに淨土に回向するがゆへに、こゝろの一念とは心得ず。名號の一稱を一念と信知して稱名に落居するあひだ、往生を遂るものなり。』

【かずをくる】決
疑録には、さく
とあり。

問、^{ふし}「たま／＼念佛をまうす時は、いかにも、のうくおぼえてことさらに稱ふられ候は、
なを惡趣の業つきずして、かさねて三塗にかへるべきゆへにても候や。答、念佛をまう
すときはものうくて睡眠も殊さらきそひ來ればこそ、念佛はたふとき行にて愚癡愚見の罪
障を滅して往生を遂べきいはれなれ。ゆへいかなとなれば、凡夫のころは欲を本として、
一切の欲物に向ひては他事なくねぶりをさまし、ころもおぼえずして無二無三なり。か
くのごとく業ふかき心に念佛まめにいさみまうされんには、この念佛も迷ひのころに
相應するあひだ、ころのつみをば滅せずして、欲の境界に同じつべし。念佛まうせばも
のうく、倦ければこそ、妄執をはなれて衆生の往生を遂さすべき法にてはあれ。しかれば
ころには信じがたければ、口となへて往生を遂べし。ねぶるとも、のうくともかくの
ごとくころ得るあひだ、たゞ口をひらいてとなふるは信心の行者なり。臨終には斷末魔
の苦をうけんするその時を、最期とまうすべき念佛なるをいさましからすまうされねば
とて、唱へずんばいつの爲の念佛なるぞや。終焉かねてその期を知りがたし。いづれの時
をまらてかまうさざるべきや。」

問、^{とふ}「日所作に數をさだめずとも、念佛をまうされんほどまうすべく候歟。又は數をさだ
むべき事にて候や。答、日所作に數をさだむるは、かずの爲にはあらず。念佛を相續せ
ん爲なり。かずをとらざればきはめて念佛はまうしたくもなきあひだ、わすれて相續する
事なし。數をとればさしあひのときはいかほどかけぬいかほどまうしつとかずをくるあひ

【八宗】朝の頃の我が平安
 宗派華嚴宗、律宗、
 法相宗、三論宗、
 成實宗、俱舍宗、
 以上南都の六宗、
 天台宗、眞言宗以
 上北都の二宗これ
 なり。

だ、自然に相續のいはれあるゆへに、とりて用事なきかずをとるは懈怠なきが爲なり。數をとらずともといふは念佛のものうきところをしらずして、をのが心のものぐさきまゝかずをとらざるゆへに、やがて懈怠して念佛中絶するあひだ、三心かけたる行者なるべし。問、毎日六七萬遍乃至十萬遍などさら〜とじゆずをくりて申候はんと、一萬二萬なりとも數ひとつづゝたしかにまうし候はんとは、いづれかよく候べきや。答、念佛のまうしやうによりて往生の得否あるべからず。往生は三心の具不具によるべし。信心の人はさら〜とくりたりとも、ひとつづゝまうすとも、往生にはさはり有べからず候。不至心の輩は兎もまうし角もまうせ往生は不可なるべし。往生決定する人はわが心に信なきいはれを知あひだ、たゞ數珠に任せてさら〜とくり、ひとつづゝかぞふれば、妄執が執持するあひだ、をのづからこれを信ぜざるなり。問、八宗通達の智者聖人のまうさせたまふ念佛と、在家俗塵尼女等の念々に思ひとおもふことは、みな三塗八難の業、いねてもさめても案ずる事は、しかしながら六趣四生のきづなのみにて候ものどものまうす念佛とは勝劣さふらひて、往生のくらゐにかはり有べく事にて候や。答、八宗通達の智者聖人は智者なれば罪障なし。世間貪著の凡夫は愚癡にしてかならず三塗に立歸るべきあひだ、機のかたにては比量するにあたはず。まうすところの念佛は本願の不思議なれば、すこしき差別も有べからず。そのゆへは、極樂は因果の土にあらず。四十八願莊嚴起の淨土なるあひだ、たゞ他力によりて善惡の凡夫往生を

遂るものなり。」

問、「身をも潔齋し心もすみわたりたる時の念佛は、すぐれてほとけの護念にも預り、又妄念のをこりたる時たゞ口に任せてまうす念佛は、をとりて本願にはもれ候べきや。」答、「身をも潔齋しこゝろもすみわたりたる時まうさん念佛も、又妄心悪心のをこりたるとき口に任せてまうさん念佛も、信心決定の行者は必往生遂べし。不至信のともがらはいかなる心にてまうすとも、往生はたのみがたし。」

問、「亡者の追善に念佛をまうしてとぶらひ候は、いかほどの功德なるべく候や。」答、「幽霊の追善にまうす念佛は、亡者の悪道の苦をのぞき業をあたふべき行業なり。なにほどいふ分量そらにはさだめがたし。」

問、「佛經などはその主にも又ぬすみても賣候はんを買て候は、うるもかふも、ともに罪業にて候や。」答、「佛像經卷をぬすみてもうれ、その主にもうれ、ともにつみなるべし。人類を賣買をなすも罪業なり。いかにいはんや佛經をや。うるものがあればこそか

ひ、かふものがあればこそ賣るなれば、ともに同罪たるべし。」
問、「魚鳥を食してやがて行水をし經をよみ、又佛神のおんまへに詣るなどはきはめたるひがごとにてつみふかし。一宿をもへ二時三時などにも過すべしとまうすは、さるべき事

にてさふらふ歟。」答、「いをとりを食して行水のみにして一宿をもへずやがて經をよみ佛神へもまうでん事そらにはさだめがたし。もとよりむまれつきに無相なるもあり。また有相

【かるまじ】決疑録には、からず、とあり。
 【さもと】決疑録には、おそるる、とあり。

なるものもあり。無相なるものはくるしかるべからず。有相なるともがらはいかにもおそるべし。又くるしかるまじといふことを聞て、さもとこゝろをさへてふるまはゞ、佛神をば信ぜずして、愚癡の凡夫のこゝろをもちゆるあひだ、佛性はまたうごき出ずして、悪見不信のこゝろにひかれて、かならず惡道に墮すべし。』

問、「臨終に念佛のこえとゞまりてのち、たとへば香の一二寸ばかりなどもゆるほどのうら、息はかよひ候へども、念佛はきこえ候はんものも、別の惡相なく候はゞ、往生にて候べきや。」答、「臨終の念佛のとゞまりたるところに、心はなくなりてのち息はかゝりて、一日半日を過すとも、また生死にはかへらず往生なるべし。ゆへいかんとなれば、こゝろは生死のたね、いきは命のすがたなり。念佛してこゝろなくなれば、生死のたねたるこゝろ名號に滅して報土にむまるゝあひだ、輪廻こゝろにたえぬ。息はひさしかるべからずしてとゞまればいのち滅するあひだ、娑婆の機縁つきて、淨土の無生をえるなり。』

問、「終焉の時人にすゝめられてとき、念佛はまうせども、その本心はなきやうにして、しかも惡相などのさふらひつるは、往生の人にてはあらず候や。」答、「念佛は人に勧められても、又はわれともまうせ、まうすしたにこゝろなくならば、往生にはうたがひなし。相はあしくみゆとも、心だになくくんばくるしからず。見さまは善相なりとも、念佛のこゝろあらば往生にはさだめがたし。臨終の念佛のとき心なくならば往生すべし。こゝろはありながらまうさずしてをばらば、往生はせざるなり。』

問、「念佛すれどもこゝろ猛利ならずんば、往生は不定ならんなど、おもふものはいかゞ。」
 答、「念佛するも心猛利ならずんば、往生いかゞあらんとうたがひしものも、臨終に念佛ま
 うしていのちをばらば往生すべし。心の猛利ならんものなりとも、念佛なくしてをばらば
 生死をはなれざるなり。」

問、「狩獵釣漁のともがら、その餘渡世のやからも、おのがこゝろの事のみに心をふ
 かくかけて、かつて出離の思ひもさふらはずして、吾身は罪障おもければ、念佛まうすと
 もよも往生はせじとおもひ、或又念佛すとも三心もしらず、自力他力もわきまへず、たゞ

世間の營をのみこゝろにふかくおもへば往生すべからずなど、疑ふものどもの、よりよ
 り人まねには口に任せて念佛をまうし候。これらは往生のうつはにあらす候や。」答、「狩
 獵釣漁の輩もそのよ渡世のやからも信心あれば往生をとげ、信心なければ往生せず、信

心は面々の心中にあるゆへに、餘所の人はしるべからず。」

問、「百萬遍の念佛を四十八度或は百度まうしぬれば、決定往生の業なりと申候は、さ
 ることにて候や。」答、「百萬遍の念佛を四十八度百度まうすを決定往生の業と談ずるは、

念佛すなはち往生たるあひだ、おほく數の満するゆへに、決定往生とは信ずれども、最
 期終焉に念佛なくしては、輪廻の囚つくべからず。臨終の一念は百年の業にもすぐれたり

とみえたり。」

問、「この界にして造畫するところの佛像先達となり給ひて、淨土へをくらせたまふと申は、

さある事にて候や。答、此界にて造立圖繪するところのほとけは、淨土の佛體を造りあらはすあひだ、信心のまへにはこの佛像すなはち淨土の佛體、淨土の佛體すなはちこの佛像なりと覺知するあひだ、この人のころには差別あるべからず。機法をわくるときこそ淨土は不退の土體、穢土は無常の界なれば、かはりたるなれ。本尊をばおもひわくべからず候。

【七分】決疑録には、十分とあり

問、念佛だにまうし候は、數珠をもたずともと申すものも候。また必持べき事なりとまうす人も候はいかゞ候や。答、念佛まうすときずゝを持べしといふも、持べからずとおもふも、みなその理をわきまへがたし。數珠は數珠、念佛は念佛にてあれば、數珠に得失なし、得失なければもたんもたざらん同事なり。

問、存生の時逆修とて善事を修すれば、七分全得の功德ありとまうし候は、さることに候や。答、存生の時の逆修は七分全得勿論なり。しかれども當來輪廻のうちの福業を得るばかりなり。往生淨土の業にはあらず候。

問、一切の善事等に七日をもちひ候事はいかなる子細にて候や。答、一切善事に七日をもちゆることは、その事かならず七日に満じて成就すべきゆへなり。

問、一心專念彌陀名號とさふらふは、いかなるをか一心とは申候や。答、一心專念彌陀名號とは、一心とは三心、彌陀名號とは往生の行業なり。三心發得の念佛の行者は、かならず名號を稱して臨終するあひだ、一心專念する信心の人なり。

【三心四修五念】
 至誠心、深心、廻
 向發願心。修行す
 ることに四類を分
 つ、無餘修、長時
 修、無間修、尊重
 修。阿彌陀佛を念
 じて淨土に往生す
 る行因を五門に開
 きたるもの、禮拜
 門、讚歎門、禮拜
 門、觀察門、作願
 門、廻向

問、念佛をまうすに三心四修五念とくれぐれ釋せられたれども、所詮は心の善惡をもかへりみず、つみの輕重をもわきまへず、ただ念佛をまうせば決定して往生をとぐと信じて、こころにふかく本願を頼みて、口に南無阿彌陀佛とまうせば、その名號の中に三心等もみなこもるあひだ、ほとけの願力に乗じてかならず往生することなりとまうすは、さることにて候や。答、念佛の三心に豎の三心横の三心といふことあり。豎の三心のときは、四修五念くれぐれと法門を談じて信心をおこすべし。横の三心のときは名號の中に攝在するのあひだ、南無といふはすなはち願なり。阿彌陀佛とはすなはちその行なりと釋せられたり。かるがゆへに名號を稱すれば、名號の中の三心機にかうぶらしめて往生をうるあひだ、豎の三心も横の三心に落居して、必、往生を遂べきゆへに、ただまうせばむまるゝぞとは談ずるものなり。」

この四十八段の不審ことぐく皆人のこゝろうる體にあきらめまうしさふらひしが、所詮は人にいらひたまふべからず。人は人われはわれ、人往生をとぐといふとも、自身の往生未決定ならば、何の所得か有べき。人往生せずとも、われだに往生を遂なば、還來穢國して有縁無縁の一切衆生を濟度すべきなれば、自行未立にては他を度することあたはずとこそみえて候へば、ただ萬事をなげ捨て一心に念佛し、不退の報土に得生して、永く六道生死輪廻の苦をはなれたまふべく候。たびぐ面調のなじみをもて、一夜の眠りをのぞきかんながへ進じ候。今は衰老の餘命且暮期しがたきあひだ、今生の見參頼みがたきゆへに、再

會あひしかしながら淨土じやうどの對面たいめんたるべく候さふらふ。穴賢あなかしこ。

南無阿彌陀佛なむあみだぶつ。

實阿彌陀佛じつあみだぶつ。

御返事ごへんじ

他阿彌陀佛たあみだぶつ

他阿上人法語卷第七たらしやうにんほふご ますのほいしち 終

他阿上人法語 卷第八

一遍上人に隨逐して建治三年陸奥へ修行し給ふ時、白川の關を過るとして西行が歌に『白川の關屋を月のもる影はひとのこゝろをとむるなりけり』と讀侍りし事を思ひいでられて

白川の關路にも猶とまらず心のおくのはてしなれば
そのとし松嶋見佛上人の舊跡に詣て、よみ給ひける

紫の雲のむかへをまつしまや佛みるてふ名さへなつかし

一遍上人遷化の後、化導うけつぎ給ひけるに、越前國惣社にて、正應四年臘月の別時勤行し給ひて、結願の時よみ給ひける

うれしとて春をはいはへくる年にしぬか命の末そ近つく

長閑なるみづには色もなきものを風の姿や波とみゆらん
或人の返事によみ給ひける

なも阿彌陀ほとけの身とは極樂のはちすの花の開きてぞなる

又よみ給ひける

山端にこゝろの月をさきたてて花のすかたそ西にかたふく
をはりまつ心はこえにいてにけり口に佛の名こそ聞ゆれ

永仁五年のころ、上野國を修行し給ひけるに、或僧の『我こそいきぼとけなれ』と申ければ

夢のうちゆめこそなけれ驚かぬころはいかて夢としるへき

佛そとなのはあやし佛にはほとけとおもふ心あるかは

いきなから佛のみちはなきものを南無阿彌陀佛の聲に生れよ

其頃二河白道のころとて讀給ひける

火と水と浪とほのほをわけてよふ誓の舟そなもあみた佛

又玄義のころを

やまのはにほのめく月をまつ程そ木のしたやみはさもあらはあれ

上人のおはする處へ、諸人詣でて花ふり紫雲たちけるを見しといひければ、或僧の『大空

に花ちりまよひ糸遊ふとみるはみたりの心なるへし』、『一筋にのりはやめたる心駒そらに

亂るゝいとやつなかん』、『花もみす糸も亂れぬ心をばをのれなりとやいふべかるらん』と讀

て送りける返し

おほそらはもとより花も糸もなし胸のはちすや亂れ散るらん

心駒のりはやめたる一筋やいとゝなりてもつなきとむべき

はなもみつ糸も亂れぬ心にはわきてをのれと何をかはしる

同六年武藏におはしける時、ある人『三業の外念佛とて心をはなれよと教化し給ふ、

心得がたく侍る、松嶋の見佛上人の歌にも『ころよりほかには法の舟もなししらねは沈

み知れはうかひぬ」とこそ見えたれ」と申侍りければ、讀給ひける

心よりほかにそ法のふねはあるしらぬも沈みしるも浮ばず

或時よみ給ひける

幾瀬にかなかれて消る山河のあはれはかなき花の波かな

甲斐國中川といふ處にて讀給ひける

行末もいまもむかしもむなしともいひ盡すべき言の葉そなき

歎きなき心を身にはもとむとて身のくるしめは歎きとそなる

身をおもふこゝろのなかをたかはすはみには心そあそと成べき

身のためによしく物をおもふ哉人めをつつみ忍ふこゝろは

うかひかたき心をしれはもらさしと誓ふ佛の御名そ嬉しき

甲斐より相州へ越給ふとて、三坂といふ山にて富士の嶽を見やりて

雲よりも高く見えたる富士の根の月に隔たる影やなからん

うへもなきおもひや消しふしのねの煙はいまはめにもかゝらす

述懐の歌とて

遁れぬとおもふ深山のおくまでもけには憂世の外ならほこそ

嘉元三年白幡の道場にて、別時の勤行のとき、よみ給ひける

たゞしはしよろこふ事のあるほとそおほき歎きも忘られにける

老が身の山としたかくのほりきてくたりむきなる坂そすくなき
老樂の身はなゝそちの坂こみつこゝろなとめそ胸の關守

人のために身をもいとほしいかてかは人の心にかなはさるへき

身のために身をも厭はゝ世のためになとかは世をも遁れさるへき

をしふるにしらぬかたは法の道ほとけの智慧に及ひかたくて

をしへぬにしらるゝときは六の道にたちかへるへき心ふるまひ

たのしみは歎き思ひとなりにけりなけきの時はあらまほしくて

いつくをか旅とおもはんあめかしたに身をかくすへき宿しなれば

厭ふとて姿やつしてなとかかく心にあかぬ身をおもふらん

つゐにゆくまことの道にふみかへてありはてぬ身を佛とそとく

月のいるゆふへの雲に隠れゆくこゝろはれてや花にのるらむ

うき里をわかるゝなみにのりの舟ゆくをむかひの岸に侍らん

遊行の聖さきのたび當麻へ御入の時の心を『宵近くさめてみのこす面影を又むすひつくあ

かつきの夢』と讀けるよし人の中ければ

面影はむすひもとめす跡さきもさめぬる夜の夢のはかなさ

又或時

いきて世にあるとおもふもことはりや身のをはるへき時しゝらねは

明暮あけくれといそく心こころそ夜晝よるひるのいのちをせむるつかひなりけり

西にしにむくこゝろひとつや世中よのなかにたのむ佛ほとけのたねとなるへき

いとなみの隙すきゆく駒こまにのりしらははやる心こころにひかれぬる哉かな

夜よもすがら法華經ほけきやうどくじゆ誦じゆしけるを聽聞ちやうもんし給たまひて

ふくる夜よのあかつきかけて法のりの花はなやまきの聲こゑそにほひ有ありける

去延慶三年さるえんきやうさんねん、爲兼卿たのかねきやうくわんとうげ關東下向かうとうげのとき、見參けんさんありて念佛往生ねんぶつちやうじやうのいはれ尋ね申まをされて信心落しんじんはら

居ゐの後のち、三條新中納言さんじやうしんちゆうなごん其頃宰相そのころさいしやうのちやうじやう中將ちゆうじやうにておはせしが上人しやうにんの御歌おんうたを所望しよまうあり、爲兼卿たのかねきやうの許もと

へつかはさるゝ時合點ときがてんの歌うた三十三首さんじゆふしゆのうち

いつまでか世よになからへてかはりゆく花はなの姿すがたを別わかれと思おもはん

見るみほとは夢ゆめとはしらすさめて後夢のちゆめとおもふも現うつならめや

家いへを出いでてのちにうき世よを思おもひとけは捨すてたるかほは厭いとはさりけり

一遍上いつべんじやう人十三回にじふさんくわい忌いの別行べつぎやう正安三年八月せいあんさんねんはちがつ攝津國兵せつじんこくへい庫島くらじまの遺跡ゆゐせきにて勤行ごんぎやうありけるとき在ざい

世せのむかし思おもひ出いでてよみ給たまひける

めぐりあふおなし日數ひかずは秋あきなから又またみぬ月つきの雲くも隠かくれかな

わすれめや秋あきをかきりの浮雲うきぐもにそらかくれせし月つきの面影おもかげ

又また迷まよい懐つくわいの歌うたとて

世中よのなかにはかなきものは我心身わがこころみのゆくゑをはいつかしるへき

いつまでの命とおもへははかなくも世に住うしと見て歎く
身をおもふひとの心の闇路こそくらきより猶くらきにはいれ
哀けにのかれても世はうかりけり命なからそ捨へかりける

此歌玉葉集に讀人不知とて入

身を、かん山路のおくはありもせよ命をやとす隠家そなき
捨て身を又とりかへすいつはりの心をいかてころとはせん
小車のわつかに人とめくりきてころをやれはみつの古道

よろこひもうれへもおなし涙にて心はかりそ思ひかへける
いつまでも世に墨染のうらみすは身の行衛をやしらてはつへき
歎きなきなけれはなきによろこひをもとむれはこそ歎きとはなる
よろこひをよろこはされは歎きをも歎きとせぬはよろこひそかし
よろこひのしたに歎きはあるものを歎きの後をよろこひとしれ
たのしみもうれへもともになからへぬ身のためにこそ歎きよろこへ

無

常

草の葉の露にこのみをくらふれは風のまゝなる命なりけり
さきたつを哀とふは頼みなき身にも命のおしさ成けり
さきたつといふもはかなきいつまでかむなしき跡に身を殘すへき

釋教

法の師のおしへをきけは佛にはとなふる御名の聲そなるへき
花につくす心の西にかたふかはちらぬはちすのみとそ成へき
命より後をたのめは入月のなこりを山の西にこそやれ
身のあたとなりし心も阿彌陀佛となふる聲に西へ行なり
よしあしの言の葉ことにをく露の命のきゆる御名のひと聲
後の世を憂身にかへてをこなはし法のまことの末やとをらん
月はよもみよとはいして待人のころの雲や照曇る覽
いろかたちめにみぬ繪をはつくすとも廣き心に筆や及ばん
臨終はたし一念そ十念はいのちを延る數としるへし

三心發得の心を

西へゆく月をは風もゆるかさす浮たる雲そ空にたしよふ

彌陀弘誓凡夫引接といふ事を

雲くらき空なる西のはれまより闇のまことを照す月かな

入於深山思惟佛道

苔深きみむろにいれはをのつからころの月やひとりすむらん

畢竟空のころを

いづくにもはてなき空を出てゆく月日のみつる色はとまらず
煩惱即菩提の心とて

わきてみる影にそ月は照くもる雲は雲にそさはらさりけり
應無所住而生其心といふ事を

またてみる姿はかりや有明の月にわかれぬ餘波なるへき
延慶三年のころ讀たまひけるに曉月房合點のうち雜

明日またぬ命としらはなにゆへにゆくすゑ遠く物おもふらん

おしからぬいのち待まはともかくも身の行ゑをは人にまかせむ
いとふへき身をはうとまで何ゆへに世をのかるへき家を出らん

釋教

すますへき山には雲の深ければいててぞみつるふることの月

同年九月の頃、熊野より下向に遠江國鉢塚宿にて勝田證阿彌陀佛入道蓮昭。まうでて
十五番の歌合申行ひ侍けるに

求めねはくらき心の雲いてて空に澄ける胸のうちの月

正和二年曉月房合點のうち述懐

いとほしき世をはのかれぬいつか扱けにあるましき身の終りなる

無常

人のほてはたゝひとゝきの煙かなつもるおもひや消残るらん
釋教

をこなひは心ひとつを法の師はまことの道とゞきつたへけり
心こそほとけのたねとなるなれはちすは池の濁りにそたつ

若以色見我以音聲求我是人行邪道不能見如來といふ事を

耳の塵こゝろの雲をいとはてはいつかまことの月はいつへき

櫛つみ鬘伽のみつくむわさならてこの徒然のなくさめはなし

めぐりけんむつの門には戸さしゝて臺にのりの道そ近づく

或人無常の讚の詞をよませ給びて給はらんと有し時無常須臾の間なりといふことを

朝夕にわくるのみこそはかなけれかしらの火をは我そはらはん

又人天有爲のたのしみはといふ心を

稻妻のひかりのうちの樂みは消てはかなき身とや成へき

又ひとの命とゞまらず

山河にかけるたるひのしからみはとまりもはてぬ水の白浪

又三界とところ廣けれど

いつまでもみつのさかひのうらなれはよつの姿や久しかるへき

又親疎おなじくさりゆけど

またにんげんこつ、
又人間忽忽たることは
しるしらぬ人のはてみる夕煙身のおもひをはおとろきもせて

夜晝のうつるに消る命をは世のいとなみに忘られにけり

曉月房合點の歌のおくに『和歌の浦やひかりあるたまをなにして心のそこにかきをくら
まし』とありし返し

和歌の浦や濁りにまじる藻屑までみえぬ心の玉やよすらん

どうわんはあつしふにちげうげつはうまか
同年八月十五日曉月房詣られけるに、折しも今夜は明月なればとて歌すゝめられし時、釋
教のこゝろを

山のはにこゝろの月はいてにけり西をおもひの雲や消らん

どうねんあきすま
同年秋の末つかた、或人の法事讚般舟讚の文を讀せ給へとすゝめければ、諸佛大悲心無二
の心を

ふたつなき御法の道はわれも人もひとつにいらはともわかれん

しやくかによらいごやうしやうぶく
釋迦如來成正覺

咲ぬれは櫻かりして散まては花のさかりの雨風もなし

みだみやうぶうさうぞくねん
彌陀名號相續念

唱ふれはこゑのをはりに佛たち臺をよせてむかへたまへり

りやくこふいらいみもんけん
歷劫以來未聞見

いまこそきく彌陀の御國はあまねくて千尋百重の筋ありとは
一一網羅結珍寶

法の網は玉のひかりもかゝやきていろそうへ木の枝に妙なる
極樂世界廣清淨

いろくのかさりあまねきつちのうへに池もこかねの眞砂をそしく
或説人天二乘法

山端をいてゝも月の雲かくれみる人からに晴くもりけり
瓔珞經中説漸教

まつきかは卯月のそらの時鳥はつねの後を遅しとやせん
一日七日專稱佛

唱ふれはむつのはの聲つきて彌陀の御國に生れさらめや
萬劫修功實難續

法をまつこゝろひとつにわつらひて猶こそまよへむつの道には
貪嗔即是輪廻業

待おしむ花はほとけのたねならす西にそ結ふ秋のこのみは
門々不同八萬四

彌陀の名はときつるきなり障りおほき憂身とならば唱へさらめや

おなじこゝろ爲相卿にみせ給ふ歌のうち、釋教しゃくけう

法の道はわれもさとらす佛とはこゝろもしらぬ心なるらんこころ

其年の末に壽阿彌陀佛貞俊朝臣 詣で續歌まうし行れし時の歌の中雜うちざつ

いにしへはいまとおほへてみる夢のおとろけは又昔なりけりまたむかし

同四年爲相卿合點のうち若以色我見の心をこころ

聲にきかすめにみぬいろの佛ならば心なくしてしるよしもなしこころ

おなじ年春のころ彌陀經の從是西方過十萬億佛土といふこゝろをこころ

秋風に雲かはるらん入相のかねていまはの時をしるかなとき

又其土の衆生一人もといふ和讃の心をこころ

その國のひとはくるしみなき身にてたのしみのみそ心にはあるこころ

七重寶樹と木をなづけき

いつかみむ七重のうへ木玉かさるしたにこかねのいさこある池いけ

四邊の階道ことくくかいでう

水のいろのあたりによつの道ありてうちになつたの寶をそみるたから

池の中に蓮花ありれんげ

小車に似たるはちすの池なればよつのひかりそ色にともなふいろ

清淨衆徳無量のしやうじやうしゆとくわりやう

はかりなき清きひかりも妙なればたのしみおほき處とそきく
又彼佛の國土には

言の葉にいとたけのしらへ聞馴てそこに妙なる花を降ける
其土の衆生人天は

ことかたにちかつきむきて朝ことに佛にひとそ花をたむくる
即食時になりぬれば

たのしみはもとの心に立歸りものくふわさも有とこそきけ
又彼佛の國土には

極樂のとりこそあまた數々に妙なるいろの翹ならふれ
五根五力七菩提分四念四攝八正道

見るも聞もよつをおさむるやつの道に鳥そ佛の法をさへつる
此鳥皆是阿彌陀佛の

この鳥はみなこれ彌陀のこゝろにて聲きく人は佛にそむく
微風寶樹をうごかせば

風の音にたからのうへ木花ふけはよろつの聲をあつめてぞきく
此聲きくもの自然に

この聲を聞取る人はをのつから心のみつの佛をそしる

彌陀佛の光明は

いつきくも彌陀のひかりは隔たらしされはなつけてあみた佛といふ

又彼佛の壽命は

命こそきはなくなかき佛にて人もおなしくひさしかりけれ

成佛已來をかぞふれば

佛にはなりてとかすみ濟たりぬ聞聲にこそころおさまれ

大菩薩衆おほくして

はかりなくおほき悟はゆるかねはあとさきともに數もかはらす

極樂世界の衆生は

たのしみをきはむる國のさとりあれはいつも佛の跡はかはらす

衆生これを聞きつゝ

ゆかむ方を西ときゝてそよき人はひとつ心にあつまりにける

ただし無爲の界なれば

よきことをもちてゆかさる境にて彌陀の御名をそ七日たもてる

其人命終する時に

その人のいまはの時に佛みれはこゝろやすくてむかへられけり

本師釋尊まのあたり

まのあたりこの法をみて説たまふゆかん方をは願ふへきなり
六方恆沙の諸佛も

まことあるしたを出して佛たちの説をく法を仰くへきなり
此説彼名を聞ものは

彌陀の御名を聞うる人そ佛たち守りたまへは心おさまる
すでに生れいまむまる

先に生れいまも後にも行なればひとくとも心すゝめよ
如來出世せしことは

むきかたき此法とかんためにこそ世には佛も出たまひけれ
正和五年六月のころ爲相卿詣でられけるついでに點あひ給ひしうち述懐

山端にかたふく月は老樂の命をみすかみかた
かへりみる八十のあとの空しくて老の姿となせる年哉

遁れいる身にはおほへす寂しきは人めはかりの山陰の庵
わかきたに頼みはなきに老か身の哀ありとも思ひはてめや

淋しさはよその人をそなくさむる世のいとはしきあらましの時
しのはるゝ昔はとをく隔たりていとひし老の身とそ成ぬる

おなし世の人にあたをはなさねとも知れぬとかや身に報ふらん

見るまゝに日影は西にかたふきて我たまのを消や侍らむ
 跡なしとしたはぬかたを思ひやは今そむかしのはしめ成ける
 厭ふまでもをろかなりけり頼みなき命のはてを今としらねは
 のかれても猶世にとまる住居かなころを捨ぬこゝろたかへに
 津の國のなにはの事もかれそせんよしあしともに草の名なれば
 塚のほかに名をは残さて埋れん姿かこけのうへにをくつゆ

釋教

苔深み岩のみむろの草かれて河瀬のみつの浪そたよよふ

此歌は釋尊涅槃のとき、跋提河の水むせび迦葉の籠りし雞足の洞に草枯し事を讀ける

憂身をは世をあき風にまかすれば心のそらの雲そはれゆく

さはりなき身をはいとほはてまたきかぬをしへのさきの法にあはめや

十界五具のこゝろを

よしあしのとをの姿はひとつにてたかひにそへははなれさりけり

一念不生前後際斷を

草の葉にむすふもちるも白露のすかたはかりそしはしみてける

五戒の中不邪淫戒を

いはぬ色に心そはぬは女郎花うしやならへるつまの思ひは

壽量品、一心欲見佛不自惜身命

授記品のこゝろを
おしみつる命をすて、身にかへる佛見るてふ法ぞ嬉しき

おなし河のまされば山をくつせとも濁りおちてそ月はすみける
法師品、如來滅度之後、若有人、聞妙法華經乃至一偈一句、一念隨喜者、我亦與授阿耨多
羅三藐菩提記といふことを

おなじ品のこゝろを
今みるもかはらぬ法そたのもしきむかしかきをく水莖の跡

つたへすはいかてかしらん法の道もとのところのたかひけりとは
同年曉月房合點のうち雜

先たちし人の跡にそひとりゐる我なき跡をたれかとふへき
文保元年おなじく合點のうち述懐

幾程のいのちならずと思ふにも年のむくひの老そはかなき
あけて来て年のつもれは身のはたと命をなすは月日なりけり
よしあしは心にあるをいつよりか人のかたにはおもひつけ、む
ともしてはつれ、いとふはかなさよ淋しかれとて捨し心に
飛鳥のあすかけふかと待れても空にきえ行我心かな

とめかたき物としりても命こそおしまては猶あられさりける
遁れてはいと命をおしまるゝ世にさはりなき心やすさに

わかれにしその日はけふに廻りきてなと無人の歸らさるらん

此歌は恆例八月の別時勤行のうち故聖の事をおもひ出て讀給ひけるとぞ
無常

なき人の跡のおもひは夕煙よそめにたつも命なりけり

釋教

言葉にも文字にもつきぬ法の道ころのほかになき姿哉

後の世を彌陀の御國と頼めては惜むいのちのはてそ嬉しき

西とさくみたのみくにへ心をは入日にそへて思ひやる哉

むらさきの雲路の樂のこえきけは憂世をいてむ時はしり南

極樂をとをしといふはゆく道をたゝ一聲にとかむためなり

文保二年爲相卿合點のうち春

又春とたのめぬ老のわかれ哉今年はかりの花の餘波に

かく讀給ひしに翌元應元年正月二十七日にぞ入寂し給ひける

雜

世にとまる心はかりそ廻るへきむつの道には浮み沈みて

釋教

もとめても法にはあはし世中をいとふこゝろにまことなければ
のりしらてむつのみちにやまよふへきみつの車のこゝろなりせは
迷ふとも人のむかしは佛なれはもとの都に歸らさらめや
おほそらはむなしき法の道なれや出入つきの影はかはらす
をはりをはかねてはしらすいつもたゞまうす念佛に任せてそまつ
ふたつなき心のみつの濁らてそ三世のほとけの影は澄へき
合點の外によりく讀給ひけるうち釋教

皆人をすてぬ誓ひのわたし舟のりしらぬみも留るへきかは
梶をさへわれとはとらぬ浪路かなにしふく風に舟をまかせて
南無といへは花の臺にのりのしのあみたそ我を佛にはなす
身をおもふ心をすつる心こそほとけのみちをすくにゆくらめ
ところをは西にかけひのみつおちてとくくところ音信はきけ
殺生戒

よつおもきはしめの罪をつくりてそなかく佛の種はたちける
偷盜戒

ぬししらぬ花をはおりて佛にはいかゝたむけん後の世のため

邪姪戒

ひとりなき妻にやつまをかさぬへき恨みや罪のたねとこそなれ

妄語戒

いつはり人は人のためかは身にしれはわかこころをそひとりはつへき

飲酒戒

身にうしと迷ふころのなさをはひとのためにはいかゝあたへん

草河の眞觀長老の歌に『いへはたかふいはねはしらぬ法の道ひときてとははいかゝこたへむ』とありければ

問人のあれはこたふる法の道かねてはいかゝ空に定めん

おなじ人の、遊行の聖、當麻へいらせ給ひて出給ふ時、『後の世にめぐりあふへき月なれば

うきわかれちもなくさまれけり』とありし返し

後の世はいきたる人の頼みなり淨土はひとつ心にそある

正安三年冬のころ、伊勢國修行の時ほそ谷の如阿彌陀佛一周忌の追孝のためとて彼跡より

招請し侍けるに、おはして讀給ける

ひとめぐり過て時雨のあとへは雲隠れにし月の面影

徳治二年の秋の頃、ひとの招請によりて、上總國へ越給ひける時、長南の道場にて大納言

律師仙顯といふ人詣て熊野權現に事をよせたてまつりて讀給ふ歌三首

をとたかくおちくる浪は岩田河なかれてはやくつみや消覽

神風はおとなし河にをさまりて君かなかれの末そひさしき

峯とをくおちたる瀧は那智の山御法のころは空にひききて

延慶の頃、勝田證阿彌陀佛、越前左近太夫蓮昭、わがところへ招請申侍りて、極月の別

時勤行にあひて出給ひける時、わすれすよ唱へしみなその聲も聞こえて残りて、

「唱ふへき御名とはかりはかつまして猶もとの身にひく心かな」まもり思ふ心をそへてあ

みた佛の聲に捨たる我身ともなせ」と申遣し侍りし返し

面影のみ々に残らは聲たてゝともに唱へし御名を忘るな

もとの身にいつも心のひけはこそたゝまうせとは御名を教ゆれ

捨てられぬ身のはかなさに阿彌陀佛と唱ふれば社守られもせめ

同時横地九郎左衛門入道行西、我亭へ入奉りて後「雲霞かさなる山は隔つともわれを心

に常にわするな」難波舟われとはのりもならはねはたゝよしあしは風に任せん」このほと

はかたしけなくもくちなれつ私ならぬ南無阿彌陀佛」かく讀て奉りける返し、

雲霞かさなる山はあしからやこゝろとゝむる關守はなし

よしあしのしけき入江の難波舟のりならひても風にまかせよ

阿彌陀佛とかたしけなくもくちなれはわたくしならぬ身とそ知へき

或時勝田證阿彌陀佛、十題十首の歌を讀侍りけるに、題毎に九首まではよみて、終の一首

をば上人しやうにんえ所望しよぼう申まをしける時とき、讀よみてつかはされし十首じゅうしゆのうち

花はな

うつろはぬ寶たからのはなはめをとむる此世このよのはなをいとひてやみむ

旅たび

いつくをも旅たびとおもへはと、まらぬ心こころにのりのまことをそしる

釋しゃく教けう

西にしへゆくみちしる人ひとは阿彌陀佛あみだぶつとなふる聲こゑに身をそ任まかする

武藏むさしの片山かたやまといふ處ところにおはしける時とき、常陸國ひたつくにより善光寺ぜんくわうじへ詣まうでける人ひとの『今はた、明あけぬ暮くれ

ぬとたらちねの親おやの後世のちのよとふらひそする『里さと近ぢかかた山陰やまかげとおもへともいとふ心こころや深くす

むらん』と申まをしをくりける返かへし

垂乳根たらちねのおやにも子こにもそひとけぬ身みの行衛ゆくゑこそ知しらまほしけれ

たのみなき命いのちのうちはいつまでかかた山陰やまかげのすまゐをもせん

或人あるひとあやまる事ことあるとて、遠島えんたうへうつされて年としをへける後のち、身みのとがなきやう、こゝろの

をきどころなきかなしみなど申まをしをくりけるつゐでに『月影つきかげのかたふくかたに此頃このごろのこゝろ

いくたひ行歸いきかへるらん』おもひきやまたみぬ島しまに流れきて浪なみのよるくぬる、袂たもとを『かゝ

る身みのうきにつけても世中よのなかをかねてもなとか厭いとはさりけん』人ひとしれすいそく心こころのうきふね

をさそはぬ風かぜもうらめしのよや』世中よのなかのうきをはいかゝ恨うらわへき彌陀みだの御國みくにに生うまれたにせ

は』とありしかるし

世中の憂うれひをはいかゝいとふへきこゝろの西にしにかよふたよりを

おもひやる心こころのみちは近ちかき哉かな日ひをへて通かよふおきの遠とほ島しま

憂身うれみそこゝろひとつに厭いとひては誰たがためにかは世よをはうらみん

われのみそわれをなは歎なげく世中よのなかのひとひとは人ひとをおもふへきかは

よのなかの憂うれにつけてそいそかるゝわれとはゆかぬ彌陀みだの御國みくにへ

あるとき時衆じしゆの教をしへにとて

人ひとのためのむくひならぬに法のりの道みちうきを忍しのひて勤つとめ行まなへ

或人あるひと所領しよりやうにつきて愁うれふる事こと侍はべるとき、讀よみてつかはされける

あるもなくなきもある世よのことことはりを知しりて迷まよふは心こころなりけり

金阿彌陀佛こんあみだぶつ讀よみて奉たてまつりける『心こころには身みを任まかせしと思おもへともいとふ事ことには隨したがひぬへし』かへし

心こころこそ身みをしたかへて世中よのなかをいとふかたにはゆるささりけれ

慈阿彌陀佛じあみだぶつ勝田孫四かつたそんし郎實長らうじつちやう『池水いけみづのこゝろはしらぬ蓮葉はらすはの濁にごりにこまぬ御名みなを嬉うれしき』をしへし

を頼たのむ心こころも猶なほくらしかゝけてみせよ法のりの燈とも』と讀よみて奉たてまつりしかへし

蓮葉はらすはのふかき濁にごりにこめられぬ心こころもちても南無阿彌陀佛なむあみだぶつ

こゝろくらきこのめのまへは挑しかけてもみるよしやなき法のりの燈とも』
或人あるひと、阿彌衣あみのころもを所望しよまつまうすとて『袖そでの浦うらにかゝけるたまかあみ衣君ころもきみゆかさすは涙なみだかはか

し』とありし返し

めにかけて心こころひくらんあみころもさのみ袖師そでしのうらみはてめや

彼人かのひとのちに『隔へだてなき心こころの月つきのくもらすはをしへの道みちに影かげは離はなれし』と申送りける返し

山端やまのはを出いでける月つきは、や西にしにかたふく人のこゝろにこそふ

熊野詣くまのまうでの時とき、遠江橋本邊とほとほみよしもとへんにて、必かならず對面あたひめんあるべきよし、兼あわて申まをける人の、俄にはかにさはる事ことあり

てむなしかりけることを歎なげきて、後のちに『あひみむと契ちぎりし中なかのかねことのかはるもよしや

さためなき世よに』と申送りけるかへし

おとろかし御法みのりのほかは世中よのなかのかはるを夢ゆめのまこと、はせよ

或人あるひと世間けんのわざにのみさえられて、道場だうぢやうへ詣まうでぬことをなげき申まをすとて『頼たのむそよ障さはりある

身みとおもふにも西にしにくもらぬ月つきのしるへを』とありし返し

西にしへゆくこゝろの月つきのくもらてそまうす念佛ねぶつの聲こゑは嬉うれしき

或人あるひとのかへし

とにかくにおもふ心を身みの怨あだとしりえはいそけ南無阿彌陀佛なむあみだぶつ

若宮僧正道瑜對面わかみやそうじやうどうゆたいめんありて法談ほふだんの後のち、かのあたりの人の許もとより『迷まよひこし心こころも身みをも捨すてぬと

てまことの道みちにあるはなにそも』と申送りし返し

まよひこし心こころも身みをも捨すてつればわれならぬ我われそ御名みかをとなふる

下野しもつけの宇都宮うつのみやへ人招請ひとせうじやうしけるに依よりてくだり給たまひし時とき『もるましき法のりときくこそ嬉うれしけれち

かひのふねの網あみにひかれて』と讀よみしかへし

ひく網あみのめにかゝらすはきかましや誓ちかひのふねに法のりのひとこゑ

或人あるひとのもとより『咲さきちらぬ御名みなのこのみになりゆけはいとはしき風かぜもすゝしかりけり』と申送まをしおくりけるかへし

咲さきちりて秋あきのこのみを西にしにまつ花はなには風かぜもいとはれぬ哉かな

曉月あけづつ房ぼう煩わづらふ事ことのありて、立居たちあひもたやすからざるよしなど歎なげき申まをさるゝとて『老わてかく折をりたる蘆あしのうき世よ哉かなたちなをるへき身みとも頼たのます』つれなくはよしたゝまたし時とき鳥とたのむ十と聲こゑと一聲ひとこゑのほか一ひととありし返かへし

吹落ふきおとす難波なみののあしの風折かぜをりも世よにたくひある例たとひとやせん

ほとゝきすきかてそはてむ我われはたゝをはりをまたむ十と聲こゑ一聲ひとこゑ

或人あるひと後のちまでたがへじと誓ちかひをなす事ことありて聊いささかもとの心こころにひかるゝこと侍はたらりけるに『頼たのむそよ誓ちかひふことの葉はもらしてまたゝ法のりの師しの教をはかりを身みのとかを思おもひしるにも今更いまさらにかゝる御法みほりにあふそ嬉うれしき』と讀よみて奉たてまつりし返かへし

法のりの師しのをしへはかりを頼たのますはもらさてもうし誓ちかひふ言ことの葉は

身みのつみをおもひしらすはこゝろてふ咎とがをも捨すてて法のりにあはめや

寂阿彌じやくあみ陀佛だぶつ、工藤くどう三良さんらう左衛門さゑもん尉ゑいまうでゝ見參けんさんにいりて後のち、信心しんじん落居らくくのよしを申まをつかはすと

て『つほむ程ほどもはちすの名なをはもちたれと開ひらけて後のちや花はなといふへき』返かへし

濁りよりいて、はちすの清き名に花はひらけて御法をそきく

下野の小山におはしける時、鹽澤入道といふもの、身の罪業深きことを歎きて、他力本願

のいはれ念佛往生のことはりなと尋ね申ける返答のおくに書てあたへられし

沈みてそ引あけらるゝ罪人は誓ひのあみのめにかゝりつゝ

或人のかへしに

なからへる身も假初のたゝしはし心としれば南無阿彌陀佛

通阿彌陀佛印道惠 極月別時に七度あひ侍りぬることを隨喜し申すとて『頼むかけにあふ

そ嬉しき七年のなゝ夜なれこし法のともしひ』とありし返し

七年のなゝ夜のかげはおもひなり一夜たにみぬ法のともしひ

或人『命まつむかへの雲にたちそひてかならすみえよ月の面影』と讀て送りし返し

命まつむかへの雲にたちそはゝみつの佛の光をやみん

或人のもとより『尋ぬへき跡もなきさによる浪のふねにはいかゝ棹のさすへき』と申送り

ける返し

たつぬへき道もなきさをうつ浪にひかれてよるか海士の捨舟

時衆の中に我身の無道心なる事を廻心懺悔まうしける時讀給ひける

はかなしや人をはいかゝをしゆへき身のうへをたけゝには知らぬに

身をしれはひとのあしさはなかりけりおなし迷ひの心とおもへは

文保二年亡者の追孝のためとて、爲相卿四十八願の題を人々にすゝめ申されしうち、第十
八願をよみ給ひける

たゝ念佛まうすはかりにおさまりぬ彌陀の誓ひはあまたあれとも

おなじ亡者の夢にみえて「移りゆく日數のふれは春雨の」と詠じける下句をあまねく人に
つけさしめ給ひし時、所望ありしかば

雲のはれまはおほる夜の月

稱阿彌陀佛雅樂助別時に著したまへる法衣を給はりければ、「さいはいに人の姿に生れつゝ
御法のころもけふきつる也」一年もくれ命もつくることはりの寢身のはては一聲の御名」と
讀てたてまつりし返し

あみきぬを悲喜の涙に袖ぬれて佛の御目にかゝるへきかな

一聲の御名のうちにはまいるへき時やきぬらん年そあけぬる

又此人の許より「十度までとなふる法を限りにて心そこゑのうちに絶ぬる」と申送りしか
へし

ひとこゑに命はたえて心こそ十度のうちによみかへりけり

又或時の返しに

年つめはわかき姿も老とみえて命は身にそ添てきえゆく

ろき世をはあきはてなから山端にいてる月の影はかはらて

又

阿彌陀佛と唱ふる外の言の葉も露もたまたす世を秋の風

又おなじ人え返し

咲匂ふとをやま櫻あたなれはちるそまことのいろをあらはす

あふことはこれを限りとおもふこそいつも命のをはりとはしれ

今はとて命のせまる年月のはつる日数は御名はかりなり

徳治三年夏のころ、爲家卿出題の千首題をよみ給ひしに、爲相卿合點ありし雑の部のう

ち

寄風無常

吹風にとまらぬ塵の命もて身をかるしとはいつかしるへき

寄露無常

露はなほ風まつほともあるものを頼みなき身の置ところ哉

如是性

夏あつくふゆの寒きは時なれやもとの心はいつもかはらて

如是體

さけはちり匂へはきえてなき花を本木はかせもさはらさりけり

如是因

種たねなくて草木くさきのはなやみのるへき雲くもなき空そらの雨あめはくたらず

如によ是ぜ果くわ

秋あきおつるおふの浦梨うらなたねとへはみのうちにこそさねはあるらめ

如によ是ぜ報ほう

うしとても此世このよをいかへ恨うらむへきむかしのわさや身みにむくふらん

如によ是ぜ本ほん末まつ究きゆう竟やう等とう

行末ゆくすゑも過すぎにしかたもすくれははたへ今いまもけにとまらさるらむ

修羅しゆら界かい

月日つきひをは手てにへきれとも身みのうへに空そらよりおつる矢やをは遁のがれす

人にん界かい

ことほりを知しれるこゝろのむくひにてまことの人の姿すがたとそなる

聲聞しやうもん界かい

あきらかによつ御法みのりを聞きなからこゝろの花はなはいまた開ひらけす

縁覺えんかく界かい

花はなはちりおつる木の葉はのあはれさに秋あきのこのみはいまた結むすはす

佛ぶつ界かい

九重ここのへのひかりをこえて澄月すいつきはもとの闇路やみちに又またかくれけり

右千首、奥書云、

『千首賢詠、數遍吟翫、錦繡之文在眼、金玉之聲入耳、感緒之至、疏筆回覃、而就嚴命之難避、愁付二愚慮之用捨、可恥可惶、願依我朝葦原三十一字綺語之緣、必和佛國蓮臺三十二相金利之因而已。』

『しるへせよいさ書をくる言の葉の露をはちすのたまになすまで』後日に返し被送之

言の葉につたへて結ふ蓮葉は露そしるへの玉となるへき

元應元年正月十日の夜より病床につき給ひけるが十二日に讀給ひし歌のうち

秋

月は、や世を秋風に影ふけぬ山のはちかき我をともなへ

これ誠に終焉の玉詠にてぞ侍りける。

他阿上人法語卷第八 大尾

昭和四年十一月一日印刷
昭和四年十一月十日發行

昭和四年十一月十日印刷
昭和四年十一月十日發行

不許複製

編纂者

新編 國譯大藏經編輯部
代表者 三井品史

發行者

東京市下谷區上野櫻木町五十番地
代表者 坂戸彌一郎

印刷者

東京市神田區表神保町十番地
代表者 井波康三郎

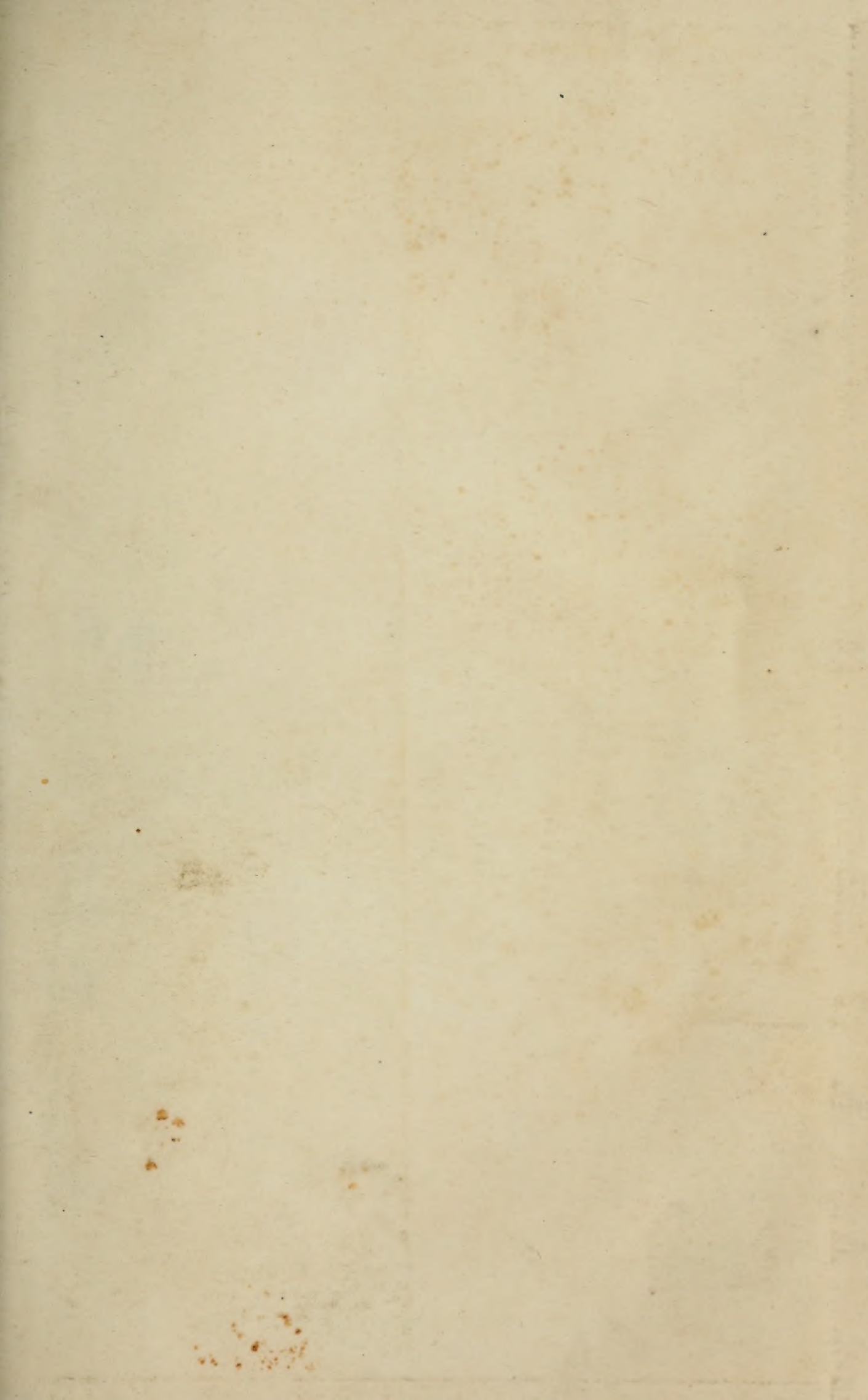
發行所

東京市下谷區
上野櫻木町五〇

株式會社

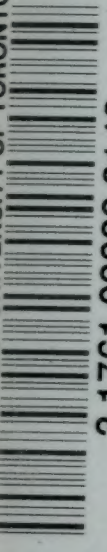
東方書院

電話 下谷四二五九
振替東京六八六一





EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 3142